

跡 遺 寺 祥 吉 下 上 書
跡 遺 城 之 原 上 上 書
跡 遺 田 町 老 木 植 上

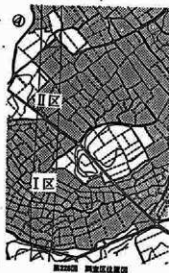
一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

1988

建 設 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
(財)群馬県埋藏文化財調査事業団

書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木沓町田遺跡 正誤表

誤	正
例言 8行八寸B遺跡・区	→八寸B遺跡・Ⅳ区
255P.6行 有馬条理遺跡	→有馬条里遺跡
287P.第288図	→右図の通り
288P.5行 地下式土坑	→地下式土塹



第288図 両地区位置図

書上下吉祥寺遺跡
書上上原之城遺跡
上植木老町田遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

建設省
群馬県教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団



書上上之原城遺跡遠景



書上上原之城遺跡出土八枝鏡



陶磁器 (JK16)



陶磁器 (JK16)



青磁片 (JK16)



青磁片 (JK18)



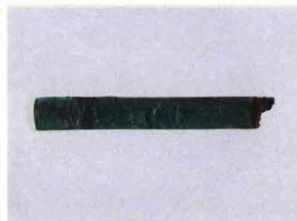
凹面硯 (JK16)



凹面硯破片 (JK16)



播鉢 (JK18)



鋼柄鉄小刀 (JK16)

序

国道17号の混雑を緩和するために、深谷市北方で利根川を渡り新田郡尾島町から赤城山麓を北西に走り前橋北部で17号と合する通称上武道路が計画され、昭和48年以来県教育委員会、ついで群馬県埋蔵文化財調査事業団により埋蔵文化財の発掘調査が行なわれて来ました。整理事業は群馬県埋蔵文化財調査事業団で実施し既に成果の一部は報告しております。

ここに報告します上植木壱町田、書上上原之城・下吉祥寺遺跡は伊勢崎市北部の溜池が集中する地域で小丘陵上に営まれた古墳時代以降を中心とする集落遺跡群であります。西方180mには古墳時代の豪族の居館跡と考えられている原之城遺跡があり、周辺には群集墳も多数見られ赤城南麓の政治文化の中心地の一つであったと思われます。

発掘調査、整理事業実施にあたりまして御配慮を頂きました建設省高崎工務事務所、群馬県教育委員会、地元関係者並びに直接調査に当たられました関係各位に感謝申し上げます。

道路幅の中での調査で全体把握には至りませんが本報告書が東国原始古代社会究明の資料として、広く活用されることを念じて序といたします。

昭和63年3月

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴い事前調査された、事業名称「J K16 八寸B遺跡」及び「J K18 鯉沼東Ⅱ遺跡」の発掘調査報告書である。報告書名に掲げた遺跡名「書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木寺町田遺跡」は、当該地区の大字名・小字名を併記したものである。上武道路改築工事に伴い、周辺地域でも埋蔵文化財発掘調査が実施され、遺跡の調査が行われてきている。これらの遺跡と有機的関連を持たせ、同一遺跡の理解をより深化させるため、以下の通り改名した。

J K16 八寸B遺跡・Ⅱ区→書上下吉祥寺遺跡 (伊勢崎市豊城町3630番地他)

J K16 八寸B遺跡・区→書上上原之城遺跡 (伊勢崎市豊城町3503番地他)

J K18 鯉沼東Ⅱ遺跡→上植木寺町田遺跡 (伊勢崎市三和町2602番地他)

2. 事業主体 建設省関東地方建設局

3. 調査主体 群馬県教育委員会文化財保護課 (昭和48年度)

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 (昭和57～59年度)

4. 調査期間 昭和49年1月10日～昭和49年3月2日(事業名称「県園芸試験場第二遺跡」)

昭和57年6月7日～昭和59年3月31日(事業名称「J K16 八寸B遺跡」)

昭和59年1月5日～昭和59年3月3日(事業名称「J K18 鯉沼東Ⅱ遺跡」)

昭和59年4月31日～昭和59年5月31日(「J K18 鯉沼東Ⅱ遺跡」)

5. 調査組織 昭和48年度 群馬県教育委員会文化財保護課

調査担当者 木暮仁一(文化財第二係長)

井上唯雄・平野進一・清水和夫・下城 正(文化財保護主事)

昭和57～59年度 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

調査担当者 石塚久則・大木神一郎・坂井 隆・原 雅信・飯塚 誠

大西雅広・中山純一(調査研究員)

6. 整理主体 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

7. 整理期間 昭和61年8月1日～昭和62年7月31日

8. 整理組織 事務担当職員 常務理事 白石保三郎 事務局長 井上唯雄

管理部長 大澤秋良(昭和61年度)・田口紀雄 調査研究部長 上原啓巳

庶務課長 定方隆史 調査研究第2課長 板場一寿

庶務課主事 国定 均・笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏

整理担当職員 調査研究員 飯塚 誠 嘱託員 浅井良子

補助員 安藤三枝子・今井智江美・大友幸江・笠井初子・小林泰子

高崎敏子・関口貴子・高橋秀子・丸山明子

9. 写真撮影は、遺構は調査担当者が行い、遺物は佐藤元彦(技師)による。

10. 本書の編集は飯塚 誠が行い、執筆は以下に掲げる他は飯塚が行った。
 第Ⅱ章第2節(1)原 雅信、第Ⅲ章第3節(1)坂井 隆・(2)綿貫邦男(調査研究第1課)・
 (3)井上唯雄・(4)坂井 隆・(5)大木紳一郎、第4章第2節(3)大西雅広・
 (6)F 新倉明彦(調査研究第1課)、第3節(1)坂井 隆・(2)石守 晃(普及資料課)・
 (3)宮崎重雄(前橋第二高等学校教諭)
- 付編1. 桜場一寿 付編2. 坂井 隆
11. 石材の鑑定は飯島静男(群馬地質研究会)にお願いした。
12. 実測図のトレースは株式会社・測研に、遺跡の航空写真は青高館航空写真に委託して行った。
13. 本書の作成にあたっては、関係各方面の協力を得た。また、発掘調査に際しては伊勢崎市・佐波郡東村教育委員会並びに地元関係者の多大なるご支援を戴いた。ここに記して感謝の意を表す次第である。
14. 調査資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 遺構番号については、発掘調査時に付したものを使用したが、検討の結果当初の名称が適当でないものについては欠番とし、他の遺構に振り替えた。
- 遺構・遺物実測図の縮尺率は、原則的に以下の通りとしたが、スケールを入れて示した。
 竪穴住居跡・井戸・土坑 1/60 掘立柱建物跡 1/80
 土器 杯・碗類 1/3 壺・甕類 1/4
 石器 大型品 1/3 小型品 1/1
 なお、遺物写真図版の縮尺は統一していない。遺物番号の後の・は下段スケール。
- 遺構図中の北方位記号は磁北を示す。
- 図中のスクリーントーンは、それぞれの図・文を参照されたい。
- 遺構の面積は、プランメーターで3回計測したものの平均値を示した。
- 遺物重量の計測には、電磁式はかりを使用した。
- 遺構図・遺物図・遺物観察表のNoは一致する。
- 遺物観察表中の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修(財)日本色彩研究所監修「標準土色帖」を使用した。
- 金属遺物の実測図は、ソフトX線写真撮影の成果を使用して図化した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第Ⅰ章 発掘調査と遺跡の概要	
第1節 調査に至る経過と調査の経過	1
第2節 遺跡の位置と環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	4
第Ⅱ章 書上下吉祥寺遺跡	
第1節 調査の概要	9
(1) 調査の方法	9
(2) 調査成果の概要	10
第2節 検出された遺構と遺物	12
(1) 縄文時代の遺構と遺物	12
(2) 竪穴住居跡	45
(3) 掘立柱建物跡	63
(4) 溝 跡	67
(5) 土 坑	71
(6) その他の出土遺物	73
第Ⅲ章 書上上原之城遺跡	
第1節 調査の概要	79
第2節 検出された遺構と遺物	81
(1) 竪穴住居跡	81
(2) 掘立柱建物跡	175
(3) 井 戸 跡	212
(4) 溝 跡	215
(5) 土 坑	219
(6) その他の出土遺物	223
A. グリッド出土遺物	223
B. 墨書土器	230
C. 金属・石・土製品	237
第3節 ま と め	243
(1) 中世以降の遺物と遺構群について	243
(2) 陶硯について	251
(3) 文字資料について	261
(4) 八稜鏡の出土とその意味	265
(5) 土器の分類と集落の変遷について	272
第Ⅳ章 上植木老町田遺跡	
第1節 調査の概要	287
第2節 検出された遺構と遺物	290
(1) 竪穴住居跡	290
(2) 掘立柱建物跡	320
(3) 土墳墓・火葬跡・地下式土壙	323
(4) 井 戸 跡	334
(5) 溝 跡	339
(6) その他の出土遺物	343
A. 縄文土器・石器	343
B. 瓦	345
C. 金属製品	347
D. 木製品	349
E. 石製品	354
F. 板 碑	357
第3節 ま と め	361
(1) 中近世の陶磁器・土器と遺構群	361
(2) 上植木老町田遺跡出土の人歯について	370
(3) 上植木老町田遺跡の馬歯	377
付 編	
1. 書上上原之城遺跡の古墳	385
2. 旧佐位郡北東部の地名分布の様相	400

挿図目次

第 1 図 遺跡周辺地形図	3	第 58 図 石製品実測図 (2)	75	第115 図 第30・31号住居跡実測図	143
第 2 図 遺跡位置図	5	第 59 図 石製品実測図 (3)	76	第116 図 第30号住居跡出土遺物実測図	144
第 3 図 調査区位置図	9	第 60 図 善上原之城遺跡概念図	79	第117 図 第31号住居跡出土遺物実測図	145
第 4 図 善上原古寺遺跡概念図	11	第 61 図 第 1 号住居跡実測図	81	第118 図 第32号住居跡実測図	148
第 5 図 縄文土器拓影・実測図 (1)	13	第 62 図 第 1 号住居跡出土遺物実測図	82	第119 図 第32号住居跡出土遺物実測図	148
第 6 図 縄文土器拓影・実測図 (2)	14	第 63 図 第 2 号住居跡実測図	84	第120 図 第33号住居跡実測図	149
第 7 図 縄文土器拓影・実測図 (3)	15	第 64 図 第 2 号住居跡出土遺物実測図 (1)	85	第121 図 第33号住居跡出土遺物実測図	149
第 8 図 縄文土器拓影・実測図 (4)	18	第 65 図 第 2 号住居跡出土遺物実測図 (2)	86	第122 図 第34号住居跡実測図	151
第 9 図 縄文土器拓影・実測図 (5)	20	第 66 図 第 3 号住居跡実測図	89	第123 図 第34号住居跡出土遺物実測図 (1)	152
第10 図 縄文土器拓影・実測図 (6)	21	第 67 図 第 3 号住居跡出土遺物実測図	89	第124 図 第34号住居跡出土遺物実測図 (2)	153
第11 図 縄文土器拓影・実測図 (7)	22	第 68 図 第 4 号住居跡実測図	91	第125 図 第35号住居跡実測図	155
第12 図 縄文土器拓影・実測図 (8)	23	第 69 図 第 4 号住居跡出土遺物実測図	91	第126 図 第35号住居跡出土遺物実測図	155
第13 図 縄文土器拓影・実測図 (9)	26	第 70 図 第 5 号住居跡実測図	92	第127 図 第36号住居跡実測図	157
第14 図 第10号住居跡実測図	28	第 71 図 第 5 号住居跡出土遺物実測図	92	第128 図 第36号住居跡出土遺物実測図	157
第15 図 第11・12号住居跡実測図	29	第 72 図 第 6・7号住居跡実測図	93	第129 図 第37号住居跡実測図	158
第16 図 第 8 号土坑実測図	30	第 73 図 第 6・7号住居跡出土遺物実測図	94	第130 図 第37号住居跡出土遺物実測図	158
第17 図 第10号住居跡出土遺物実測図 (石器)	31	第 74 図 第 8 号住居跡実測図	96	第131 図 第38号住居跡実測図	160
第18 図 石器実測図 (1)	32	第 75 図 第 8 号住居跡出土遺物実測図	97	第132 図 第38号住居跡出土遺物実測図	160
第19 図 石器実測図 (2)	33	第 76 図 第 9 号住居跡実測図	100	第133 図 第39号住居跡実測図	162
第20 図 石器実測図 (3)	34	第 77 図 第 9 号住居跡出土遺物実測図	100	第134 図 第39号住居跡出土遺物実測図	162
第21 図 石器実測図 (4)	37	第 78 図 第10号住居跡実測図	101	第135 図 第40号住居跡実測図	163
第22 図 石器実測図 (5)	38	第 79 図 第10号住居跡出土遺物住居跡	101	第136 図 第40号住居跡出土遺物実測図	163
第23 図 石器実測図 (6)	39	第 80 図 第11号住居跡実測図	102	第137 図 第41号住居跡実測図	164
第24 図 石器実測図 (7)	40	第 81 図 第11号住居跡出土遺物実測図	103	第138 図 第41号住居跡出土遺物実測図	165
第25 図 石器実測図 (8)	41	第 82 図 第12号住居跡実測図	106	第139 図 第42号住居跡実測図	166
第26 図 石器実測図 (9)	42	第 83 図 第12号住居跡出土遺物実測図	106	第140 図 第42号住居跡出土遺物実測図	166
第27 図 石器実測図 (10)	43	第 84 図 第13号住居跡実測図	108	第141 図 第43号住居跡実測図	168
第28 図 石器実測図 (11)	43	第 85 図 第13号住居跡出土遺物実測図	108	第142 図 第43号住居跡出土遺物実測図	168
第29 図 第 1 号住居跡実測図	45	第 86 図 第14・15号住居跡実測図	109	第143 図 第44号住居跡実測図	170
第30 図 第 1 号住居跡出土遺物実測図	45	第 87 図 第14・15号住居跡出土遺物実測図	110	第144 図 第44号住居跡出土遺物実測図	170
第31 図 第 2 号住居跡実測図	47	第 88 図 第16号住居跡実測図	113	第145 図 第46号住居跡実測図	171
第32 図 第 2 号住居跡出土遺物実測図	48	第 89 図 第16号住居跡出土遺物実測図	113	第146 図 第46号住居跡出土遺物実測図	171
第33 図 第 3 号住居跡実測図	49	第 90 図 第17号住居跡実測図	115	第147 図 第47号住居跡実測図	172
第34 図 第 3 号住居跡出土遺物	50	第 91 図 第17号住居跡出土遺物実測図	115	第148 図 第47号住居跡出土遺物実測図	173
第35 図 第 4 号住居跡実測図	52	第 92 図 第18号住居跡実測図	117	第149 図 第48号住居跡実測図	173
第36 図 第 4 号住居跡出土遺物実測図	53	第 93 図 第18号住居跡出土遺物実測図	117	第150 図 第49号住居跡実測図	174
第37 図 第 5 号住居跡実測図	54	第 94 図 第19号住居跡実測図	119	第151 図 第 1・2号掘立柱建物跡実測図	175
第38 図 第 5 号住居跡出土遺物	54	第 95 図 第19号住居跡出土遺物実測図 (1)	119	第152 図 第 3 号掘立柱建物跡実測図	176
第39 図 第 6 号住居跡出土遺物実測図	55	第 96 図 第19号住居跡出土遺物住居跡 (2)	120	第153 図 第 4・5号掘立柱建物跡実測図	177
第40 図 第 7 号住居跡実測図	56	第 97 図 第20号住居跡実測図	124	第 6・7号掘立柱建物跡実測図	178
第41 図 第 8 号住居跡実測図	57	第 98 図 第20号住居跡出土遺物実測図	124	第155 図 第 8号掘立柱建物跡実測図	179
第42 図 第 8 号住居跡出土遺物実測図	57	第 99 図 第21号住居跡実測図	125	第156 図 第 9号掘立柱建物跡実測図	180
第43 図 第 9 号住居跡実測図	59	第100 図 第21号住居跡出土遺物実測図	126	第157 図 第10号掘立柱建物跡実測図	180
第44 図 第 9 号住居跡出土遺物実測図	59	第101 図 第22号住居跡実測図	128	第158 図 第11号掘立柱建物跡実測図	181
第45 図 第13号住居跡実測図	61	第102 図 第22号住居跡出土遺物実測図	129	第159 図 第12号掘立柱建物跡実測図	182
第46 図 第13号住居跡出土遺物実測図	61	第103 図 第23号住居跡実測図	131	第160 図 第13号掘立柱建物跡実測図	183
第47 図 第 1号掘立柱建物跡実測図	63	第104 図 第24号住居跡実測図	132	第161 図 第14号掘立柱建物跡実測図	184
第48 図 第 2号掘立柱建物跡実測図	64	第105 図 第24号住居跡出土遺物実測図	132	第162 図 第15号掘立柱建物跡実測図	185
第49 図 第 3号掘立柱建物跡実測図	64	第106 図 第25号住居跡実測図	134	第163 図 第16号掘立柱建物跡実測図	186
第50 図 第 4号掘立柱建物跡実測図	65	第107 図 第25号住居跡出土遺物実測図	134	第164 図 第17号掘立柱建物跡実測図	187
第51 図 第 5号掘立柱建物跡実測図	65	第108 図 第26号住居跡実測図	136	第165 図 第18号掘立柱建物跡実測図	188
第52 図 第 6号掘立柱建物跡実測図	66	第109 図 第26号住居跡出土遺物実測図 (1)	136	第166 図 第19・38号掘立柱建物跡実測図	189
第53 図 遺跡位置図	67	第110 図 第26号住居跡出土遺物実測図 (2)	137	第167 図 第20号掘立柱建物跡実測図	190
第54 図 遺跡断面図	68	第111 図 第28号住居跡実測図	140	第168 図 第21号掘立柱建物跡実測図	190
第55 図 土坑実測図	72	第112 図 第28号住居跡出土遺物実測図	140	第169 図 第22号掘立柱建物跡実測図	191
第56 図 グリッド出土遺物実測図	73	第113 図 第29号住居跡実測図	141	第170 図 第23号掘立柱建物跡実測図	192
第57 図 石製品実測図 (1)	74	第114 図 第29号住居跡出土遺物実測図	141	第171 図 第24号掘立柱建物跡実測図	193

第172図	第25号据立柱建物跡実測図	---- 194	第215図	群馬県内出土の陶磁及び磁用磁254	第258図	土壌墓実測図(1)	----- 323	
第173図	第29号据立柱建物跡実測図	---- 195	第216図	越前平実測図	----- 264	第259図	土壌墓実測図(2)	----- 324
第174図	第29号据立柱建物跡実測図	---- 196	第217図	八幡屋出土位置図	----- 285	第260図	土壌墓実測図(3)	----- 325
第175図	第29号据立柱建物跡実測図	---- 197	第218図	香土上層之城遺跡出土八幡鏡	--- 266	第261図	土壌墓実測図(4)	----- 326
第176図	第29号据立柱建物跡実測図	---- 197	第219図	下地寺跡所蔵八幡鏡	----- 267	第262図	土壌墓実測図(5)	----- 327
第177図	第30号据立柱建物跡実測図	---- 198	第220図	思別の出土鏡面数	----- 268	第263図	1号大塚跡実測図	----- 328
第178図	第31号据立柱建物跡実測図	---- 199	第221図	関東甲信越地方出土鏡分布図	--- 270	第264図	出土鏡背影(1)	----- 329
第179図	第32号据立柱建物跡実測図	---- 200	第222図	土器実測図(1)	----- 274	第265図	出土鏡背影(2)	----- 330
第180図	第33号据立柱建物跡実測図	---- 201	第223図	土器実測図(2)	----- 275	第266図	地下式土塚実測図	----- 332
第181図	第34号据立柱建物跡実測図	---- 202	第224図	据立柱建物跡の種類	----- 277	第267図	地下式土塚出土遺物実測図	--- 333
第182図	第35号据立柱建物跡実測図	---- 202	第225図	時期別遺構分布図(1)	----- 279	第268図	井戸跡実測図(1)	----- 334
第183図	第36号据立柱建物跡実測図	---- 203	第226図	時期別遺構分布図(2)	----- 280	第269図	井戸跡実測図(2)	----- 336
第184図	第37号据立柱建物跡実測図	---- 204	第227図	時期別遺構分布図(3)	----- 281	第270図	井戸跡実測図(3)	----- 337
第185図	第39号据立柱建物跡実測図	---- 205	第228図	調査区位置図	----- 287	第271図	溝跡実測図	----- 341
第186図	第40号据立柱建物跡実測図	---- 206	第229図	I区標準土層模式図	----- 287	第272図	縄文土器実測図	----- 343
第187図	第41号据立柱建物跡実測図	---- 207	第230図	E区トレンチ位置図	----- 288	第273図	石器実測図	----- 344
第188図	据立柱建物跡出土遺物実測図(1)	208	第231図	II区遺構概観図	----- 289	第274図	瓦瓦拵・実測図(1)	----- 346
第189図	据立柱建物跡出土遺物実測図(2)	209	第232図	第1号住居跡実測図	----- 290	第275図	瓦拵・実測図(2)	----- 347
第190図	井戸跡実測図(1)	----- 212	第233図	第1号住居跡出土遺物実測図	--- 291	第276図	金属・土製品実測図	----- 349
第191図	井戸跡実測図(2)	----- 213	第234図	第2号住居跡実測図	----- 295	第277図	石製品実測図	----- 350
第192図	溝跡位置図	----- 215	第235図	第2号住居跡出土遺物実測図	--- 296	第278図	井戸跡出土土製品実測図(1)	--- 351
第193図	溝跡断面実測図	----- 216	第236図	第3・11号住居跡実測図	----- 297	第279図	井戸跡出土土製品実測図(2)	--- 352
第194図	土坑実測図(1)	----- 220	第237図	第3号住居跡出土遺物実測図(1)	298	第280図	井戸跡出土土製品実測図(3)	--- 353
第195図	土坑実測図(2)	----- 221	第238図	第3号住居跡出土遺物実測図(2)	299	第281図	井戸跡出土土製品実測図(4)	--- 354
第196図	第11号土坑出土遺物実測図	---- 221	第239図	第11号住居跡出土遺物実測図	--- 300	第282図	石白実測図(1)	----- 357
第197図	グロッド出土遺物実測図(1)	--- 223	第240図	第4号住居跡実測図	----- 301	第283図	石白実測図(2)	----- 358
第198図	グロッド出土遺物実測図(2)	--- 225	第241図	第4号住居跡出土遺物実測図	--- 302	第284図	板柁拓影実測図(1)	----- 359
第199図	グロッド下出土遺物実測図(3)	--- 228	第242図	第5号住居跡実測図	----- 304	第285図	板柁拓影実測図(2)	----- 361
第200図	墨書土器実測図(1)	----- 230	第243図	第5号住居跡出土遺物実測図	--- 304	第286図	中・近世陶磁器実測図	----- 364
第201図	墨書土器実測図(2)	----- 231	第244図	第6号住居跡実測図	----- 305	第287図	中・近世土器実測図(1)	--- 367
第202図	墨書土器実測図(3)	----- 232	第245図	第6号住居跡出土遺物実測図(1)	306	第288図	中・近世土器実測図(2)	--- 368
第203図	金属製品実測図(1)	----- 238	第246図	第6号住居跡出土遺物実測図(2)	307	第289図	1号墳全体図	----- 388
第204図	金属製品実測図(2)	----- 239	第247図	第7号住居跡実測図	----- 310	第290図	1号墳中室断面図	----- 389
第205図	石製品実測図(1)	----- 240	第248図	第7号住居跡出土遺物実測図	--- 311	第291図	1号墳遺物出土状態	----- 390
第206図	石製品実測図(2)	----- 241	第249図	第8号住居跡実測図	----- 313	第292図	1号墳石室掘り方実測図	--- 391
第207図	土練実測図	----- 242	第250図	第8号住居跡出土遺物実測図	--- 313	第293図	1号墳関係遺物実測図	--- 392
第208図	中・近世陶磁器実測図(1)	--- 244	第251図	第9号住居跡実測図	----- 315	第294図	2号墳全体図	----- 394
第209図	中・近世陶磁器実測図(2)	--- 245	第252図	第10号住居跡実測図	----- 315	第295図	2号墳石室掘削図	----- 395
第210図	中・近世土器類実測図(1)	--- 246	第253図	第10号住居跡出土遺物実測図	--- 315	第296図	2号墳掘り方実測図	----- 396
第211図	中・近世土器類実測図(2)	--- 248	第254図	第12号住居跡実測図	----- 317	第297図	2号墳関係遺物実測図	--- 397
第212図	銅実測図	----- 251	第255図	第12号住居跡出土遺物実測図	--- 318	第298図	金属製遺物実測図	----- 398
第213図	群馬県出土瓦面図	----- 253	第256図	第1号据立柱建物跡実測図	--- 321	第299図	伊勢崎市植木地区・佐波郡東村 小字名分布図	----- 419
第214図	群馬県出土瓦字模・方形図	--- 254	第257図	第2号据立柱建物跡実測図	322			

図版目次

図版 1	遺跡地近景(南側上空より)	図版 6	縄文土器	図版 12	第6号住居跡全景(西側より)
図版 2	遺跡地遠景(南側上空より)	図版 7	縄文土器	第6号住居跡遺物出土状況	
図版 3	遺跡地遠景(南西上空より)	図版 8	石器(1)	第7号住居跡全景(西側より)	
図版 4	遺跡地近景(南側より)	図版 9	石器(2)	第7号住居跡掘り方全景(西側より)	
図版 5	遺跡地近景(北側より)	図版 10	石器(3)	第8号住居跡遺物出土状況(東側より)	
図版 6	遺跡地近景(北側より)	図版 11	石器(4)	第8号住居跡遺物出土状況(東側より)	
図版 7	遺跡地近景(北側より)	図版 12	第1号住居跡全景	第9号住居跡遺物出土状況(東側より)	
図版 8	遺跡地近景(北側より)	図版 13	第2号住居跡セクション(南側より)	第10号住居跡全景	
図版 9	遺跡地近景(北側より)	図版 14	第2号住居跡セクション(西側より)	第10号住居跡セクション	
図版 10	遺跡地近景(北側より)	図版 15	第2号住居跡掘削図	第11・12号住居跡セクション	
図版 11	遺跡地近景(北側より)	図版 16	第3号住居跡掘削図	第11・12号住居跡セクション	
図版 12	遺跡地近景(北側より)	図版 17	第3号住居跡掘削図	8号土坑セクション	
図版 13	遺跡地近景(北側より)	図版 18	第4号住居跡掘削図	8号土坑全景	
図版 14	遺跡地近景(北側より)	図版 19	第4号住居跡掘削図		
図版 15	遺跡地近景(北側より)	図版 20	第4号住居跡掘削図		
図版 16	遺跡地近景(北側より)	図版 21	第4号住居跡掘削図		
図版 17	遺跡地近景(北側より)	図版 22	第4号住居跡掘削図		

図版 18	書上土層之地道跡航空写真	第32号住居跡全景(西側より)	第5号井戸全景
図版 19	竪立柱建物跡航空写真	第33号住居跡全景(北側より)	第6号井戸全景
図版 20	第1号住居跡全景(西側より)	第34号住居跡遺物出土状況(西側より)	第7号井戸全景
	第2号住居跡全景(西側より)	第34号住居跡全景(西側より)	第2号井戸全景
	第2号住居跡遺物出土状況	図版 28	第2号井戸セクション
	第2号住居跡遺物出土状況	第34号住居跡遺物出土状況	第1号井戸全景
	第3号住居跡全景(南側より)	第35号住居跡全景(西側より)	図版 48
	第3号住居跡遺物出土状況	第36号住居跡全景(西側より)	第13・15号溝
	第4号住居跡全景(西側より)	第36号住居跡遺物出土状況	第1号溝
	第4号住居跡遺物出土状況	第37号住居跡全景(西側より)	第2号溝
図版 21	第5号住居跡全景(西側より)	第37号住居跡遺物出土状況	第3号溝
	第5号住居跡遺物出土状況	第38号住居跡全景(西側より)	第4号溝
	第6号住居跡全景(西側より)	第39号住居跡全景(西側より)	第5号溝
	第6号住居跡遺物出土状況	図版 29	第7号溝
	第7号住居跡全景(西側より)	第40号住居跡(西側より)	図版 49
	第7号住居跡遺物出土状況	第41号住居跡遺物出土状況(西側より)	第7・8号溝
	第8号住居跡全景(西側より)	第41号住居跡遺物出土状況	第9号溝
	第8号住居跡遺物出土状況	第42号住居跡遺物・貯蔵穴	第12号溝(西側)
図版 22	第9号住居跡全景(西側より)	第42号住居跡遺物・貯蔵穴	第12号溝(東側)
	第9号住居跡遺物出土状況	第43号住居跡遺物出土状況(西側より)	第14号溝
	第10号住居跡セクション(西側より)	第43号住居跡遺物出土状況	第16号溝
	第10号住居跡全景(南側より)	図版 30	第11号土坑
	第11号住居跡遺物出土状況(西側より)	第44号住居跡遺物出土状況(西側より)	グッド遺物出土状況
	第11号住居跡遺物出土状況	第44号住居跡遺物出土状況	風銅木痕
	第12号住居跡全景(西側より)	第46号住居跡遺物出土状況(西側より)	風銅木痕
	第12号住居跡遺物出土状況	第47号住居跡セクション(南側より)	風銅木痕全景
	第13号住居跡遺物出土状況	第47号住居跡遺物出土状況	風銅木痕セクション
	第14・15号住居跡全景(西側より)	第47号住居跡遺物出土状況	風銅木痕
	第15号住居跡遺物出土状況	図版 31	風銅木痕セクション
	第16号住居跡セクション(東側より)	第48号住居跡全景(西側より)	図版 51
	第16号住居跡遺物出土状況(西側より)	第49号住居跡全景(西側より)	第1・2号住居跡出土遺物
図版 23	第17号住居跡遺物出土状況(西側より)	第1号竪立柱建物跡全景(南側より)	図版 52
	第17号住居跡遺物出土状況	第2号竪立柱建物跡全景(南側より)	第2号住居跡出土遺物
	第18号住居跡遺物出土状況	図版 32	図版 53
	第19号住居跡遺物出土状況	第3号竪立柱建物跡全景(東側より)	第2号住居跡出土遺物
	第20号住居跡遺物出土状況	第5号竪立柱建物跡全景(西側より)	図版 54
	第21号住居跡遺物出土状況	図版 33	第4～7号住居跡出土遺物
	第22号住居跡遺物出土状況	第4・6号竪立柱建物跡全景(東側より)	図版 55
	第23号住居跡遺物出土状況	第5・7号竪立柱建物跡全景(西側より)	第8号住居跡出土遺物
図版 24	第24号住居跡遺物出土状況(西側より)	図版 34	第9～11号住居跡出土遺物
	第24号住居跡遺物出土状況	第8号竪立柱建物跡全景(南側より)	図版 57
	第25号住居跡遺物出土状況	第10号竪立柱建物跡全景(西側より)	第11～13号住居跡出土遺物
	第26号住居跡遺物出土状況	図版 35	第14・15号住居跡出土遺物
	第27号住居跡遺物出土状況	第8号竪立柱建物跡全景(西側より)	図版 59
	第28号住居跡遺物出土状況	第11号竪立柱建物跡全景(東側より)	第16～19号住居跡出土遺物
	第29号住居跡遺物出土状況	図版 36	図版 60
	第30号住居跡遺物出土状況	第14号竪立柱建物跡全景(南側より)	第19・20号住居跡出土遺物
	第31号住居跡遺物出土状況	第15号竪立柱建物跡全景(南側より)	図版 61
	第32号住居跡遺物出土状況	図版 37	第20～22号住居跡出土遺物
	第33号住居跡遺物出土状況	第16号竪立柱建物跡全景(西側より)	図版 62
	第34号住居跡遺物出土状況	第18号竪立柱建物跡全景(南側より)	第22～25号住居跡出土遺物
	第35号住居跡遺物出土状況	第20号竪立柱建物跡全景(南側より)	図版 63
	第36号住居跡遺物出土状況	第24号竪立柱建物跡全景(南側より)	第26号住居跡出土遺物
	第37号住居跡遺物出土状況	図版 38	図版 64
	第38号住居跡遺物出土状況	第25号竪立柱建物跡全景(南側より)	第28～30号住居跡出土遺物
	第39号住居跡遺物出土状況	第26号竪立柱建物跡全景(南側より)	図版 65
	第40号住居跡遺物出土状況	図版 40	第31・32号住居跡出土遺物
	第41号住居跡遺物出土状況	第27号竪立柱建物跡全景(西側より)	図版 66
	第42号住居跡遺物出土状況	第28号竪立柱建物跡全景(北側より)	第33・34号住居跡出土遺物
	第43号住居跡遺物出土状況	図版 41	図版 67
	第44号住居跡遺物出土状況	第29号竪立柱建物跡全景(南側より)	第35～37号住居跡出土遺物
	第45号住居跡遺物出土状況	第30号竪立柱建物跡全景(南側より)	図版 68
	第46号住居跡遺物出土状況	第31号竪立柱建物跡全景(西側より)	第38～41号住居跡出土遺物
	第47号住居跡遺物出土状況	第32号竪立柱建物跡全景(南側より)	図版 69
	第48号住居跡遺物出土状況	図版 42	第41～44号住居跡出土遺物
	第49号住居跡遺物出土状況	第33号竪立柱建物跡全景(南側より)	図版 70
	第50号住居跡遺物出土状況	第34号竪立柱建物跡全景(南側より)	第34・41・46号住居跡出土遺物
	第51号住居跡遺物出土状況	第35号竪立柱建物跡全景(西側より)	図版 71
	第52号住居跡遺物出土状況	第36号竪立柱建物跡全景(南側より)	遺構外出土遺物(1)
	第53号住居跡遺物出土状況	図版 43	図版 72
	第54号住居跡遺物出土状況	第37号竪立柱建物跡全景(南側より)	遺構外出土遺物(2)
	第55号住居跡遺物出土状況	第18・19号竪立柱建物跡(北側より)	図版 73
	第56号住居跡遺物出土状況	第40号竪立柱建物跡全景(西側より)	遺構外出土遺物(3)
	第57号住居跡遺物出土状況	第41号竪立柱建物跡全景(南側より)	図版 74
	第58号住居跡遺物出土状況	第3号井戸全景	風雷土器(1)
	第59号住居跡遺物出土状況	第4号井戸全景	図版 75
	第60号住居跡遺物出土状況	図版 47	風雷土器(2)
	第61号住居跡遺物出土状況		図版 76
	第62号住居跡遺物出土状況		風雷土器(3)
	第63号住居跡遺物出土状況		図版 77
	第64号住居跡遺物出土状況		風雷土器(4)
	第65号住居跡遺物出土状況		図版 78
	第66号住居跡遺物出土状況		風雷土器(5)
	第67号住居跡遺物出土状況		図版 79
	第68号住居跡遺物出土状況		風雷土器(6)
	第69号住居跡遺物出土状況		図版 80
	第70号住居跡遺物出土状況		砥石・泪石・金属製品
	第71号住居跡遺物出土状況		図版 81
	第72号住居跡遺物出土状況		陶磁器(1)
	第73号住居跡遺物出土状況		図版 82
	第74号住居跡遺物出土状況		陶磁器(2)
	第75号住居跡遺物出土状況		図版 83
	第76号住居跡遺物出土状況		上木小石町遺跡B区全景(南側より)
	第77号住居跡遺物出土状況		第1号住居跡全景(西側より)
	第78号住居跡遺物出土状況		第1号住居跡遺物出土状況

図版 84	第2号住居跡全景(南側より)	図版 92	第13号土壇墓遺物出土状況	図版114	木製品(2)
	第2号住居跡礎(南側より)		第14号土壇墓全景(南側より)	図版115	木製品(3)
	第3号住居跡全景(西側より)		第14号土壇墓遺物出土状況	図版116	石 臼
	第3号住居跡遺物出土状況		地下式土壇全景(南側より)	図版117	板 瓦
	第4号住居跡全景(西側より)		地下式土壇全景(西側より)	図版118	陶磁器(1)
図版 85	第4号住居跡遺物出土状況	図版 93	地下式土壇セクション	図版119	陶磁器(2)
	第5号住居跡全景(北側より)		遺物出土状況(紡錘車)	図版120	陶磁器(3)
	第5号住居跡礎・貯蔵穴		遺物出土状況(緑釉輪)	図版121	陶磁器(4)
	第6号住居跡遺物出土状況(西側より)		第1号井戸全景(東側より)	図版122	陶磁器(5)
	第6号住居跡礎・貯蔵穴		第1号井戸底部	図版123	土壇墓出土人骨
	第7号住居跡全景(西側より)		第3号井戸全景(北側より)	図版124	1号溝出土馬歯
	第7号住居跡遺物出土状況		第4号井戸全景(北側より)	図版125	J K17遺景(南東より)
	第8号住居跡全景(北側より)		第5号井戸全景(西側より)		J K17調査状況
	第9号住居跡全景(北側より)		第5号井戸底部		J K17遺景(北西より)
	第10号住居跡全景(北側より)		第6号井戸全景(南側より)	図版126	第1号墳検出状況
第12号住居跡セクション(南側より)	第7号井戸全景(北側より)	遺跡地より南側を望む			
第12号住居跡全景(南側より)	第8号井戸全景(東側より)	第1号墳全景(南側より)			
第12号住居跡遺物出土状況	第9号井戸全景(北側より)	周 堀(西側拡張部)			
図版 86	第1号掘立柱建物跡全景(西側より)	第10号井戸全景(南側より)	周堀セクション		
	第2号掘立柱建物跡全景(西側より)	第11号井戸全景(西側より)	南東部遺物出土状況		
図版 87	第3号掘立柱建物跡全景(東側より)	第12号井戸全景(南側より)	玄室全景(東側より)		
	調査区遺景(西側より)	第12号井戸底部	図版127		第1号墳供進閉塞
図版 88	土壇墓群全景(北側より)	第13号井戸全景(南側より)	溝 道		
	第1号土壇墓全景(北側より)	第1号風車木榿セクション	石室全景(南側より)		
	第1号土壇墓遺物出土状況	第1号溝(北側より)	玄 室		
図版 89	第2号土壇墓全景(西側より)	図版 95	馬術出土状況	石室右壁	
	第2号土壇墓遺物出土状況		第1号溝セクション	石室左壁	
	第3号土壇墓全景(南側より)	図版 96	第3号溝・枕列(西側より)	石室掘り方(北側より)	
	第3号土壇墓遺物出土状況		枕	石室掘り方(東側より)	
	第4号土壇墓全景(南側より)	図版 97	第2号溝(南側より)	図版128	第2号墳全景(南側より)
	第4号土壇墓遺物出土状況		第7号南側全景(西側より)	石室全景	
	第5号土壇墓全景(東側より)	図版 98	第1号住居跡出土遺物	周堀(東側拡張部)	
	第5号土壇墓遺物出土状況	図版 99	第2・11号住居跡出土遺物	羨道閉塞(南側より)	
	第6号土壇墓遺物出土状況	図版100	第3号住居跡出土遺物	羨道閉塞(西側より)	
	第6号土壇墓全景(北側より)	図版101	第4号住居跡出土遺物	図版129	第2号墳石室全景(南側より)
第7号土壇墓遺物出土状況	図版102	第5・6号住居跡出土遺物	溝 道		
第8号土壇墓全景(南側より)	図版103	第6号住居跡出土遺物	石室右壁		
第8・9号土壇墓	図版104	第7号住居跡出土遺物	石室左壁		
第9号土壇墓全景(南側より)	図版105	第8・12号住居跡出土遺物	掘り方全景(南側より)		
第9号土壇墓遺物出土状況	図版106	第12号住居跡出土遺物	グリッド遺物出土状況(1)		
第10号土壇墓全景(南側より)	図版107	土壇墓出土銭貨(1)	グリッド遺物出土状況(2)		
図版 91	第10号土壇墓遺物出土状況	図版108	土壇墓出土銭貨(2)・金属製品	第1号溝セクション	
	第1号火葬跡灰化物出土状況	図版109	縄文土器・石器	第1号溝(東側より)	
	第12号土壇墓全景(南側より)	図版110	瓦	第1・2号溝(北側より)	
	第12号土壇墓遺物出土状況	図版111	砥石・紡錘車	出土遺物(1)	
	第13号土壇墓全景(南側より)	図版112	呪符木簡	図版132	出土遺物(2)
		図版113	木製品(1)		

表 目 次

第 1 表	開通遺跡一覧表	6	第 36 表	第 9 号住居跡出土遺物観察表	99	第 71 表	掘立柱建物跡出土遺物観察表	209
第 2 表	縄文土器観察表(1)	15	第 37 表	第 10号住居跡出土遺物観察表	102	第 72 表	グリッド出土遺物観察表(1)	224
第 3 表	縄文土器観察表(2)	16	第 38 表	第 11号住居跡出土遺物観察表	104	第 73 表	グリッド出土遺物観察表(2)	226
第 4 表	縄文土器観察表(3)	17	第 39 表	第 12号住居跡出土遺物観察表	107	第 74 表	グリッド出土遺物観察表(3)	229
第 5 表	縄文土器観察表(4)	19	第 40 表	第 13号住居跡出土遺物観察表	108	第 75 表	墨書土器観察表	232
第 6 表	縄文土器観察表(5)	20	第 41 表	第 14・15号住居跡出土遺物観察表	111	第 76 表	編物石器観察表	240
第 7 表	縄文土器観察表(6)	24	第 42 表	第 16号住居跡出土遺物観察表	112	第 77 表	中近世陶磁器観察表	244
第 8 表	縄文土器観察表(7)	24	第 43 表	第 17号住居跡出土遺物観察表	116	第 78 表	中近世土器類観察表	247
第 9 表	縄文土器観察表(8)	25	第 44 表	第 18号住居跡出土遺物観察表	118	第 79 表	墨書土器の比率	261
第 10 表	縄文土器観察表(9)	27	第 45 表	第 19号住居跡出土遺物観察表	121	第 80 表	墨書土器出土遺構	262
第 11 表	石器観察表(1)	35	第 46 表	第 20号住居跡出土遺物観察表	123	第 81 表	墨書文字対照表	262
第 12 表	石器観察表(2)	35	第 47 表	第 21号住居跡出土遺物観察表	127	第 82 表	時期別墨書土器対照表	262
第 13 表	石器観察表(3)	36	第 48 表	第 22号住居跡出土遺物観察表	128	第 83 表	第 1号住居跡出土遺物観察表	292
第 14 表	石器観察表(4)	36	第 49 表	第 24号住居跡出土遺物観察表	133	第 84 表	第 2号住居跡出土遺物観察表	295
第 15 表	石器観察表(5)	38	第 50 表	第 25号住居跡出土遺物観察表	135	第 85 表	第 3号住居跡出土遺物観察表	299
第 16 表	石器観察表(6)	44	第 51 表	第 26号住居跡出土遺物観察表	138	第 86 表	第 11号住居跡出土遺物観察表	300
第 17 表	石器観察表(7)	44	第 52 表	第 28号住居跡出土遺物観察表	139	第 87 表	第 4号住居跡出土遺物観察表	302
第 18 表	第 1号住居跡出土遺物観察表	46	第 53 表	第 29号住居跡出土遺物観察表	142	第 88 表	第 5号住居跡出土遺物観察表	305
第 19 表	第 2号住居跡出土遺物観察表	46	第 54 表	第 30号住居跡出土遺物観察表	144	第 89 表	第 6号住居跡出土遺物観察表	307
第 20 表	第 3号住居跡出土遺物観察表	48	第 55 表	第 31号住居跡出土遺物観察表	146	第 90 表	第 7号住居跡出土遺物観察表	310
第 21 表	第 4号住居跡出土遺物観察表	51	第 56 表	第 32号住居跡出土遺物観察表	149	第 91 表	第 8号住居跡出土遺物観察表	314
第 22 表	第 6号住居跡出土遺物観察表	55	第 57 表	第 33号住居跡出土遺物観察表	150	第 92 表	第 10号住居跡出土遺物観察表	316
第 23 表	第 8号住居跡出土遺物観察表	58	第 58 表	第 34号住居跡出土遺物観察表	151	第 93 表	第 12号住居跡出土遺物観察表	316
第 24 表	第 9号住居跡出土遺物観察表	60	第 59 表	第 35号住居跡出土遺物観察表	154	第 94 表	土壌裏出し鉄貨一覧表	331
第 25 表	第 13号住居跡出土遺物観察表	62	第 60 表	第 36号住居跡出土遺物観察表	156	第 95 表	石器観察表	343
第 26 表	グリッド出土遺物観察表	73	第 61 表	第 37号住居跡出土遺物観察表	159	第 96 表	中近世遺物観察表(1)	361
第 27 表	編物石器観察表	75	第 62 表	第 38号住居跡出土遺物観察表	161	第 97 表	中近世遺物観察表(2)	364
第 28 表	第 1号住居跡出土遺物観察表	82	第 63 表	第 39号住居跡出土遺物観察表	161	第 98 表	人面計測儀一覧表	370
第 29 表	第 2号住居跡出土遺物観察表	86	第 64 表	第 40号住居跡出土遺物観察表	163	第 99 表	馬面計測儀比較表	381
第 30 表	第 3号住居跡出土遺物観察表	89	第 65 表	第 41号住居跡出土遺物観察表	165	第 100 表	上野全白濁列長計測儀比較表	381
第 31 表	第 4号住居跡出土遺物観察表	90	第 66 表	第 42号住居跡出土遺物観察表	167	第 101 表	1号墳関係出土遺物観察表	390
第 32 表	第 5号住居跡出土遺物観察表	92	第 67 表	第 43号住居跡出土遺物観察表	169	第 102 表	2号墳関係出土遺物観察表	395
第 33 表	第 6号住居跡出土遺物観察表	95	第 68 表	第 44号住居跡出土遺物観察表	170	第 103 表	金属製造物観察表	397
第 34 表	第 7号住居跡出土遺物観察表	95	第 69 表	第 46号住居跡出土遺物観察表	172	第 104 表	古墳対照表	399
第 35 表	第 8号住居跡出土遺物観察表	97	第 70 表	第 47号住居跡出土遺物観察表	173	第 105 表	小字名一覧表	

第I章 発掘調査と遺跡の概要

第1節 調査に至る経過と調査の経過

建設省は、昭和46年に、高崎・前橋両市街地の交通渋滞緩和と、埼玉県・群馬県を直結させる重要幹線道路として、「上武道路」(国道17号バイパス)を建設する計画を発表した。埼玉県熊谷市で国道17号と分岐し、利根川を横断して、新田郡尾島町・新田町、佐波郡境町・東村・赤堀町、伊勢崎市、前橋市、勢多郡富士見村を経て、前橋市田口町で再び国道17号に接続する、総延長35.1kmの道路であり、県央及び東毛地区の開発に寄与するものとして、その開通に大きな期待が寄せられた。しかし、建設が計画されている地域は、関東平野の北西部と、赤城山南面の山麓台地縁辺及び赤城山の南西山麓であり、群馬県内でも埋蔵文化財の最も濃厚な分布地域であるため、埋蔵文化財の取り扱いについて、建設省と群馬県教育委員会との協議が重ねられ、昭和46年11月に、正式路線の発表が為された。

昭和47年度には、開通が急がれている尾島町から国道50号間の遺跡について協議が行われ、昭和48年4月1日に、「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書^{書1)}」が締結された。

昭和48年度から、工事着工前に埋蔵文化財の発掘調査を実施することになり、「県園芸試験場第二遺跡」を嚆矢として調査が開始された。以後、今日までに次の遺跡の発掘調査^{書2)}が行われてきた。

- 昭和48年度 県園芸試験場第二遺跡(伊勢崎市三和町)
 - 下江田前遺跡(新田郡尾島町世良田)
- 昭和49年度 歌舞伎A遺跡(新田郡尾島町世良田)
- 昭和50年度 歌舞伎A遺跡・補充調査 報告済み。『歌舞伎遺跡』1982年
 - 歌舞伎B遺跡(新田郡尾島町世良田) 報告済み。『歌舞伎遺跡』1982年
 - 西今井遺跡(佐波郡境町大字西今井、新田郡新田町大字下田中)
- 昭和51年度 三ッ木遺跡(佐波郡境町大字三ッ木) 報告済み。『三ッ木遺跡』1985年
 - 西今井遺跡 報告済み。『西今井遺跡』1985年
 - 小角田前遺跡(新田郡尾島町世良田字小角田前)
- 昭和52年度 小角田前遺跡 報告済み。『小角田前遺跡』1986年
 - 下瀧名遺跡(佐波郡境町下瀧名)
- 昭和53年度 下瀧名遺跡・継続調査
 - 上瀧名遺跡(佐波郡境町上瀧名)
- 昭和54年度 上瀧名Ⅱ遺跡(佐波郡境町上瀧名)
- 昭和55年度 今宮遺跡(伊勢崎市波志江町)
- 昭和56年度 三室A遺跡(佐波郡東村東小保方字三室)
 - 小保方遺跡(佐波郡東村東小保方)
- 昭和57年度 三室B遺跡(佐波郡東村東小保方字三室)
 - 八寸A遺跡(佐波郡東村東小保方)
 - 八寸B遺跡・試掘調査(伊勢崎市豊城町)
 - 書上遺跡・試掘調査(伊勢崎市三和町)

第1章 発掘調査と遺跡の概要

昭和58年度には、国鉄両毛線の原之城跨道橋の建設事に伴う「J K 16 八寸B遺跡」の本調査と、県道香林・西国定・伊勢崎線の三和跨道橋建設工事のために「J K 17 書上遺跡」の一部本調査及び、鯉沼の一部及びその南東部の湿地部分の填圧工事に伴う「J K 18 鯉沼東Ⅱ遺跡」の調査、更には柏川橋梁の建設工事によって発見された「J K 23 光仙房遺跡」の一部本調査と遺跡範囲確定のための試掘調査を行った。

昭和59年度には、調査体制を三班に拡充して、「J K 17 書上遺跡」の西半部(書上本山遺跡)・鯉沼東Ⅱ遺跡・光仙房遺跡の調査と、柏川以西の甲中通遺跡(五目牛清水田・中田遺跡)・五目牛南組遺跡・堀下八幡遺跡の調査及び、柏川～市道二之宮1号線間の試掘調査を実施した。

昭和60年度には、阿久津宮内遺跡・安養寺森西遺跡(新田郡尾島町)・五目牛清水田遺跡・五目牛南組遺跡(佐波郡赤堀町五目牛)・波志江中峰岸遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡・波志江今宮遺跡(伊勢崎市波志江町)・飯土井二本松遺跡・飯土井中央遺跡・飯土井上組遺跡(前橋市飯土井町)・二之宮宮東B遺跡(前橋市二之宮町)、計12遺跡の調査と、前橋地区・尾島地区の試掘調査を行った。

「J K 16 八寸B遺跡」の調査は、昭和57年度にトレンチによる試掘調査を行い、昭和58年度に本調査を行った。調査範囲は、sta. No. 685～710であったが、既存の生活用道路によって4分割されていたので、便宜的に南側から順にⅠ区～Ⅳ区として調査を進めることとした。まず、遺跡地の土層確認と遺跡の概要を把握するために、幅1mのトレンチによる試掘調査を実施した。その結果、Ⅰ区及びⅢ区については、遺物は出土したが、埋没谷であり、遺構が検出される可能性が少なく認められたので、舌状微高地部分に当たるⅡ区及びⅣ区について全面発掘をして調査を進めることとした。都合2年度に亘る発掘調査によって検出・調査された遺構は下記の通りである。

竪穴住居跡	60軒
掘立柱建物跡	47棟
土 坑	19基
溝 跡	26条
井 戸 跡	6基

なお、調査の結果、遺跡の名称は当該地区の字名に従って、Ⅱ区として調査を進めた部分を「書上下吉祥寺遺跡」、Ⅳ区として調査した部分を「書上上原之城遺跡」と呼称するのが、遺跡の性格及び立地環境等から判断して、より妥当性があると考えられるため、以下これに改めて区分して記すことにする。

「J K 18 鯉沼東Ⅱ遺跡」の調査は、昭和58年度に試掘調査と一部本調査を行い、昭和59年度には補完調査を行い、以下の遺構を検出・調査した。

竪穴住居跡	12軒
掘立柱建物跡	3棟
土墳墓・火葬跡	14基
井 戸 跡	13基
溝 跡	条

※1 『歌舞伎遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982年に掲載。

※2 各遺跡の概要については、『上武国地域埋蔵文化財発掘調査機関』Ⅰ～Ⅴ群馬県教育委員会 1974年～1978年及び、『年報』1～5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982年～1986年を参照されたい。なお、報告済みの遺跡については、報告書の記載を以て正式なものとする。

第2節 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

本遺跡地は、群馬県のはば中央部からやや東寄りの伊勢崎市北東部に位置し、「鶴舞う形の群馬県」と表現された時には、ちょうど首の付け根部分に当たる。遺跡の北側約24kmには赤城火山が裾野を長く引いてそびえ、約8km南には利根川の清流が東南流している。東側には、広大な関東平野の沃野が開け、遙か西側には関東山地の峰々が見渡せる。

伊勢崎市は、県庁所在地である前橋市とはJ R両毛線で結ばれており、更に、東武・伊勢崎線を介して東京都・埼玉県とも結ばれている。公共の交通機関が必ずしも充分に発達していない群馬県にあっては、前橋・高崎の両市に次いで、恵まれた位置にある。人口は約10万人で、かつては「伊勢崎銘仙」を織り出す町として全国的に有名であった。現在では、市街地の周囲に広がる桑畑や水田地帯にも、工業団地の造成によって大企業の工場が進出しており、第二次・第三次産業に従事する人々の割合が増加してきている。農家も、生鮮野菜や花木栽培を積極的に取り入れた経営を行っており、都市近郊型農村へと変貌しつつある。



第1図 遺跡周辺地形図

第1章 発掘調査と遺跡の概要

遺跡地の基盤層は、大間々扇状地桐原面であり、佐波郡東村西国定の六道の天ヶ池湧水池を谷頭として樹枝状に広がる小間折谷の右岸台地上に立地する。

渡良瀬川の流れによって形成された大間々扇状地は、山田郡大間々町を扇尖として、伊勢崎市から太田市に及ぶ標高55～60mラインを扇端とする、南北方向16km・東西方向12kmの範囲に亘って広がっている。約5万年前に形成された早川以西の大間々扇状地の古期面が「桐原面」であり、赤城火山系の安山岩やチャート・粘板岩等の礫層の上に関東ローム層がのっており、発掘調査によって検出される遺構の大部分がこのローム層まで掘り込まれている。

2. 歴史的環境

遺跡地周辺には、昭和23年の調査で前期旧石器の石器群を出土した「権現山遺跡」を始めとして、旧石器時代から中・近世の遺跡が広く分布している。

古墳に代表されるように、貴重な資料が多くあり、不幸にして平夷されてしまった古墳の資料も、各博物館の逸品として所蔵されているものが多くある。

旧石器時代の遺物は、上武道路の建設に伴う事前の発掘調査によって、両毛線西側の書上本山遺跡や赤堀町の堀下八幡遺跡等で発見されつつある。

縄文時代の遺跡は、天ヶ堤遺跡(2)や大道遺跡(3)で前期の住居跡が調査されており、六道遺跡(1)や溜井上遺跡(8)では中期の遺構・遺物が検出されている。その他にも、前期～後期にかけての遺跡分布が認められる。しかし、縄文時代晩期及び、弥生時代の遺跡調査例はまだ数少なく、不明な部分が多く残されている。

古墳時代の遺跡としては、1981年から調査されている豪族の館跡・原之城遺跡(20)及び全長81mの帆立貝式古墳・丸塚山古墳(23)・権現山遺跡(17)・恵下遺跡(19)等が有り、柏川の対岸には地蔵山古墳群(24)・蟹沼東古墳群(25)が広がっている。この時代の住居跡は、遺跡地周辺に広く分布しており、特に、古墳時代後期の集落が多く、生産力の拡大と共に集落が発展していったことを示していると思われる。

奈良・平安時代には、佐位郡の一部に属し、推定・東山駅路の南側に位置しており、上植木庵寺(26)・「佐位駅」・「十三宝塚遺跡」等の重要な施設が置かれている。遺跡地の付近では生産遺跡(水田跡)の調査が為されていないが、前述の湧水と、高度の灌漑工事技術によって得られた水とによって豊かな水田地帯が広がっていたものと思われる。

平安時代末から鎌倉・室町時代には、遺跡地周辺は「淵名荘」の一部に属していたと考えられる。「三室遺跡」や赤堀町・五日牛地区以西の調査で検出されている、浅間山給源のB軽石によって覆われた水田跡や国指定史跡の「女堀」等の遺跡が目玉を引く。また、「新田荘」を中心に広大な地域に勢力を拡大した新田氏と共に、那波・茂呂氏は、遺跡地周辺に勢力を持っていた。市内には、民衆の信仰を示す遺物や板碑等を出土する遺構・屋敷跡等が有るが、未解明な部分が多い。

江戸時代には、徳川幕藩体制の確立と共に、伊勢崎藩に組み込まれ、稲垣・酒井氏による分割支配を受けた。遺跡地周辺は、藩主・稲垣長茂の尽力による、上植木・下植木の新田開発と農民の入植によって拓かれた。元和二年(1616)～天和元年(1681)までは、一時的に前橋藩支配となったが、文芸・学問の興隆は、江戸時代を通じて他の藩を圧倒する程であった。

明治維新を迎え、第一次群馬県→熊谷県→第二次群馬県と、変遷はあったものの、近代的な発展の歩みを邁進することとなった。なお、明治29年には郡制の施行によって佐位・那波郡が合併して「佐波郡」が誕生した。



第2図 遺跡位置図

第I章 発掘調査と遺跡の概要

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	内 容	14	八幡付遺跡	包蔵地、縄文(中)
1	六道遺跡	集落跡、縄文(中)	15	西ノ畑遺跡	包蔵地、古墳(前及後)
2	天ヶ堤遺跡	集落跡、縄文(前)、古墳(前～後)	16	御手洗遺跡	墓址(?), 古墳(前)
3	大道遺跡	包蔵地、縄文(前)		鬼ヶ島遺跡	集落跡、古墳(前)
4	高山遺跡	古墳地、7C中葉	17	榎現山遺跡	
5	蟹沼東遺跡	集落跡、縄文(中)、古墳(前～後)平安	18	下吉祥寺遺跡	
6	舞台遺跡	集落跡、古墳(前及後)	19	恵下遺跡	古墳前期、古墳3基、平安(住居84軒)溝10条、井戸12箇
7	下書上遺跡	包蔵地、古墳(後)	20	原之城遺跡	
8	溜井上遺跡	集落跡、縄文(中)	21	新屋敷遺跡	
9	上慶本遺跡	集落跡、古墳(前及後)	22	上西根遺跡	住居26軒、方形周溝墓5基、石槨1基、溝15条、井戸3
10	中西原遺跡	集落跡、縄文(中)、古墳(後)平安	23	丸塚山古墳	
11	天野沼遺跡	集落跡、古墳(後)	24	地藏山古墳群	
12	恵下遺跡	集落跡、古墳(前～後)、平安	25	蟹沼東古墳群	古墳11基、住居7軒、方形周溝墓2基
13	大道上遺跡	包蔵地、縄文(前)、古墳	26	上植木庵寺	

書上下吉祥寺遺跡

第Ⅱ章 書上下吉祥寺遺跡

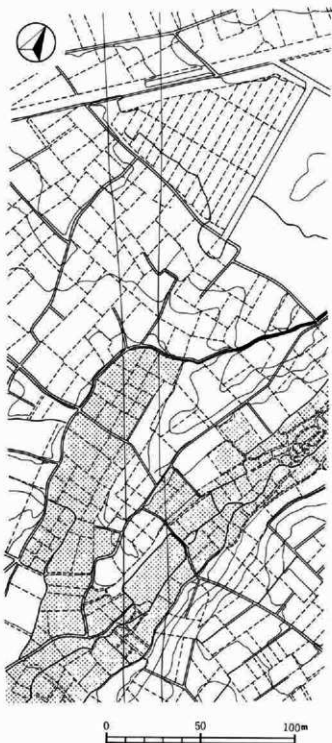
第1節 調査の概要

(1) 調査の方法

試掘調査の結果、遺構検出が可能な面はローム層上面であるとの所見が得られたので、Ⅰ区及びⅢ区を仮の土置場として、Ⅱ区(書上下吉祥寺遺跡)及びⅣ区(書上上原之城遺跡)については東側に幅3mの排土用の作業道を残し、重機による表土掘削を行った。次に、調査対象地全域に亘って、計画道路のセンター杭をEラインとし、東西方向7m・南北方向10m間隔のメッシュを設定し、東西方向については東から順にアルファベットを付け、南北方向についてはsta. Noの杭の名称に従って0.5きざみの数字を用いてグリッドの名称を決定した。各グリッドの命名は、東西・南北のラインの交点を併記して行い、交点の北西方向に広がる部分を表すようにした。

遺構確認面においてプランが検出された遺構については、各種別毎に発見順に番号を付け、原則として土層観察用のベルトを残して掘り下げ、実測図及び写真記録をとった後にベルトを除去し、遺構及び出土遺物の平面図・垂直位置の記録を作成し写真撮影を行った。なお、住居跡については、床面精査を行った後に、原則として床面を剥ぎ、掘り方の調査を行った。(本報告では、顕著な特徴が認められた場合を除き、その平面・断面記録の掲載を割愛した。)

出土した遺物については、グリッド出土のものは各グリッド毎に発見順にナンバーを付け、出土位置の平面・垂直位置を測って取り上げた。また、遺構内出土のものについては原則的に、出土位置の平面・垂直位置を測り、出土状況の写真撮影を行ってから取り上げる



第3図 調査区位置図

第Ⅱ章 書上下吉祥寺遺跡

こととしたが、掘り下げ作業中に原位置を動いてしまったものについては「覆土中出土」として取り上げた。

実測図の作成

1. 遺構平面・遺物出土状態図は上述のグリッドポイントを基準として平板測量で作製した。
2. グリッド平面図は平板測量で作製し、グリッド内の出土遺物については簡易遺方測量で記入した。
3. 遺構図は、平面・土層断面・立面各図の実測は原則として1/20縮尺で行い、細部については1/10縮尺でも作製した。
4. 以上の平面図には、標高79.0cmのB.M.を基準として50～100cm間隔で標高採点を記入した。(遺跡全体図は、これらの成果から編集作成したものである。)

写真記録

1. 土層断面の記録は、35mm版モノクロ及びカラーリバーサルフィルムによる撮影を行った。
2. 遺構写真は原則として、35mm版に加えて6×9版モノクロフィルムによる撮影を行った。
3. 調査の進行状況及び遺物出土状況の補足写真は35mm版撮影を行った。

遺物の注記

1. 遺跡名は省略し、「JK-16」とし、調査区→遺構(グリッド)→個別番号の順に記入した。
2. 覆土中出土・表採遺物は番号を省略した。

(2) 調査成果の概要

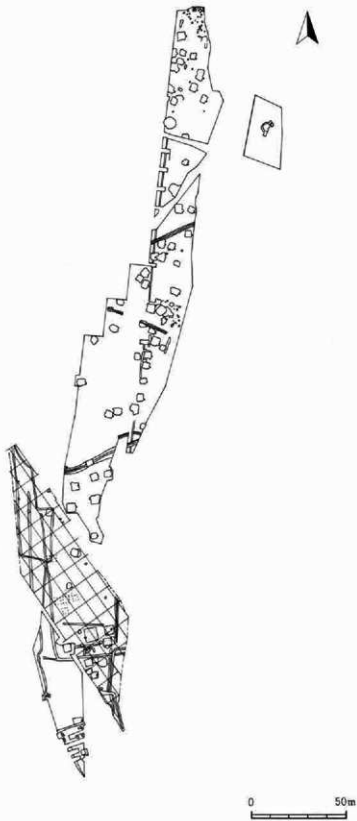
書上下吉祥寺遺跡における今回の発掘調査で検出された遺構は、縄文時代前期の円形竪穴住居跡3軒・土坑1基、古墳時代後期の竪穴住居跡9軒、平安時代の竪穴住居跡1軒、中世墓壇1基、掘立柱建物跡6棟、溝跡13条、土坑7基である。伊勢崎市教育委員会の調査成果と合わせてみると、本遺跡は、弥生時代に属すると考えられる遺構は検出されていないが、縄文時代中・近世に及ぶ複合遺跡であることが判明した。

縄文時代については、前述の遺構の他に、山形押型文土器・尖底土器底部片、有茎石鏃等の遺物が出土しており、早期～中期までの人々の生活の跡が確認された。

古墳時代には、舌状台地の南端部を居住域として、恐らくは本遺跡地の両側の埋没谷を生産の場として、2つのグループが生活していたことが判明した。

奈良・平安時代になると、生産域の拡大・再編のためか、台地の中央部へと生活の場を移して行った様子が看取された。このような状況の下で、遺構確認の段階で「1号土坑」と命名されていた「13号住居跡」は、一軒だけが集落の中心部からかけ離れた状態で検出されており、所謂「離れ園分」と称されるものに当たると思われ、注意を要する遺構であるが、その性格は十分に明らかにし得なかった。

中・近世には、本遺跡地は耕地と屋敷地に利用されていたと考えられる。中世墓壇は単独で検出されており、東側に存在する可能性は否定できないが、遺構群としての性格は明らかにし得なかった。掘立柱建物跡及び溝跡は、溝に囲まれた屋敷地と道の存在を推定させ、近世の居住空間の一端を窺わせてくれた。



第4図 書上下吉祥寺遺跡概念図

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 縄文時代の遺構と遺物

1. 出土土器の分類

「J」K-16 八寸B遺跡」の調査により出土した縄文土器は量的にはあまり多くないが、早期・前期・中期の各時期に亘る土器が検出されている。特に前期後葉から中期初頭にかけての土器類が特徴的で、量的にも主体を占める。なお、遺構についてはⅡ区（書上下吉祥寺遺跡）において、この時期の竪穴住居3軒及び土坑1基が調査されている。

検出した縄文土器の概要は次の通りである。

第Ⅰ群土器 早期	第Ⅳ群土器 前期後半
第Ⅱ群土器 前期前半	第Ⅴ群土器 中期初頭
第Ⅲ群土器 前期後半	第Ⅵ群土器 中期後半

第Ⅰ群土器（第5図）

第1類（1～3） 熱糸文系土器である。1は井草式土器、2・3は桶原式土器であろう。

第2類（4～15） 押型文土器で、4は楕円押型文、その他は山形押型文である。いずれも小破片であるが、帯状施文が特徴的に認められる。

第3類（16） 沈線文系土器である。田戸下層式土器に類似する。

第4類（17） 胎土に繊維を含む条痕文系土器である。早期末葉茅山下層式土器に比定されよう。

第Ⅱ群土器（第5図18）

尖底部が一点出土している。前期初頭花積下層式土器であろう。

第Ⅲ群土器（第6図）

第1類 諸磯C式土器に比定される。

a種（第7図1～7） 集合条線上にボタン状貼付文を施す。集合条線はやや粗雑で、貼付文も粗大である。貼付文上には刺突等は加えられない。

b種（第7図1～12） 矢羽根状の集合条線はa種より細微で、結節浮線文および刺突を加えたボタン状貼付文が付される。

c種（第8図1～9） 棒状貼付文、貝殻状貼付文を持つ。集合条線は羽状構成を持ち施文はb種に近い。

d種（第8図10～13） 粗雑な平行線文を持つもの。施文原体はやや軟かなものが用いられているようである。

e種（第8図14） 無文の浅鉢形土器である。

第2類 十三菩提式土器に比定される。

a種（第9図1～4） 結節浮線文により横位、山形状の文様構成を持つ。第9図1・2、第9図は4は縄文が施される。

b種（第9図5～7） 平行線文もしくは単一線文により文様施文するもの。5・6は内側竹管による平行線文、7は外側竹管の単一線文とみられる。

第Ⅳ群土器

第1類（第10図1・2） 波状貝殻文を持つもの。浮島Ⅱ島土器に該当する。

第2類（第10図3～8） 貝殻文間に外側竹管による刺突文を施すもの。興津式土器に含まれよう。

第V群土器

第1類 五領ケ台Ⅰ式土器に相当するものを一括する。

a種 (第10図9～13)

b種 (第11図1～14) 半截竹管により文様構成し、その内外に格子状文を加えるもの。格子状文は平行線文と単一線文の組み合わせにより施文する。

c種 (第11図15～23) 刻み目もしくは条線文を持つもの。

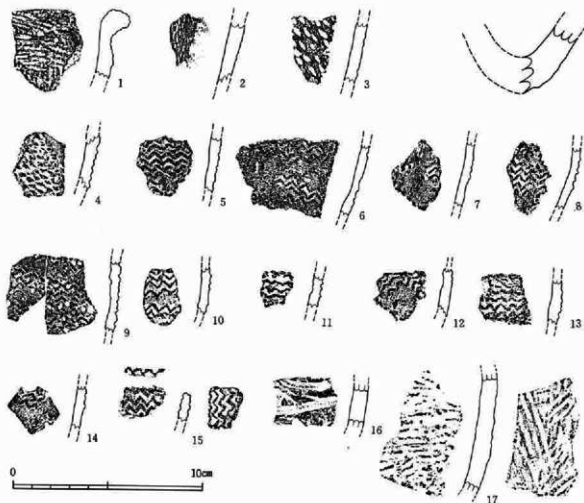
d種 (第12図1～10) 縄文施文の土器片を一括する。原体は細く、多条も認められる。結束第1種が特徴的に用いられ、結節回転を伴う。

第2類 (第12図11～13) 三角状の刻み目を交互に施し、鋸歯状文を施すもの。五領ケ台Ⅱ式土器に比定される。

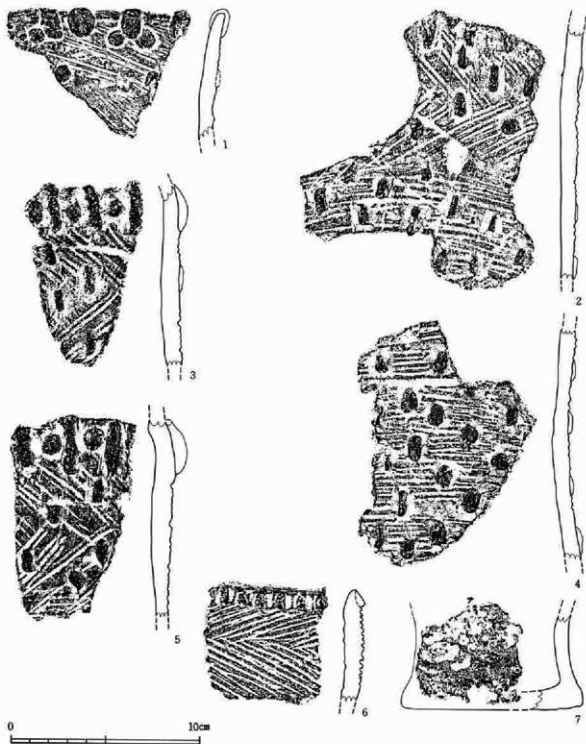
第VI群土器 (第13図)

中期後半加曾利E4式土器に比定される一群である。

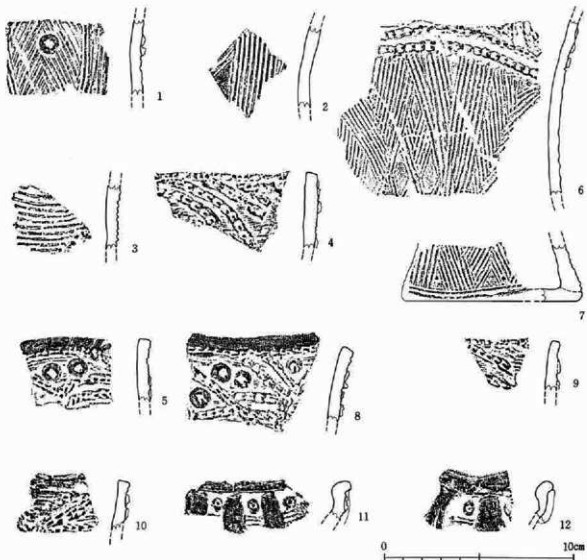
(原)



第5図 縄文土器拓影・実測図 (1)



第6図 縄文土器拓影・実測図 (2)



第7図 縄文土器拓影・実測図 (3)

第2表 縄文土器観察表 (1)

No	器種	法量・部位	出土位置	粘土・色調	器形・文様の特徴	分類
第5区 1	深鉢	口縁部	Ⅱ区 グリッド	雲母混入 淡褐色	口唇部は肥厚し、外反する。口唇部にR L、口縁部にL(?)、胴部は不明であるが、各々縄文が施文される。	I群1類
2	深鉢	胴部	Ⅱ区 グリッド		単軸結条体Ia類が施文される。	I群1類
3	深鉢	胴部	Ⅱ区 グリッド		単軸結条体Ia類が施文される。器糸文はまばらである。	I群1類
4	深鉢	胴部	Ⅱ区 グリッド	砂粒混入 暗褐色	楕円押型文。	I群2類
5	深鉢	胴部	Ⅱ区1)住 埋没土	砂粒混入	山形押型文。	I群2類

第Ⅱ章 書上下古祥寺遺跡

No	器種	法量・部位	出土位置	胎土・色調	器形・文様の特徴	分類
6	深鉢	胴部	Ⅱ区 グリッド	砂粒混入 淡褐色	山形押型文。横位の帯状施文。	I群2類
7	深鉢	胴部	Ⅱ区4住	砂粒混入 淡褐色	山形押型文。	I群2類
8			Ⅱ区4住 埋没土	砂粒混入 淡褐色	山形押型文。	I群2類
9	深鉢	胴部	Ⅱ区7住 埋没土	砂粒混入 淡褐色	山形押型文。横位の帯状施文。	I群2類
10	深鉢	胴部	Ⅱ区3住	砂粒混入 燻褐色	山形押型文。	I群2類
11	深鉢	胴部	Ⅱ区 グリッド	砂粒混入 燻褐色	山形押型文。	I群2類
12	深鉢	胴部	Ⅱ区4住 埋没土	砂粒混入 燻褐色	山形押型文。	I群2類
13	深鉢	胴部	Ⅱ区 グリッド	砂粒混入 燻褐色	山形押型文。	I群2類
14	深鉢	胴部	Ⅱ区7住 埋没土	砂粒混入 燻褐色	山形押型文。	I群2類
15	深鉢	口縁部	Ⅱ区 グリッド		山形押型文。口唇上および器内面に縦位に施文される。	I群2類
16	深鉢	胴部	Ⅱ区 グリッド			I群3類
17	深鉢	胴部	Ⅱ区4住 No.279	繊維混入 燻褐色	器内外面とも条痕が施される。胎土中に含まれる繊維は少量である。	I群4類

第3表 縄文土器観察表(2)

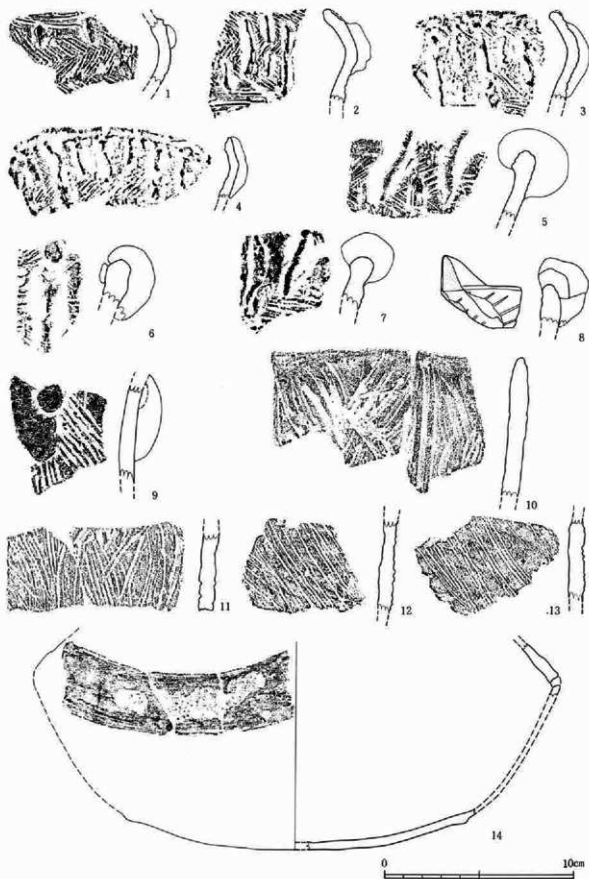
No	器種	法量・部位	出土位置	胎土・色調	器形・文様の特徴	分類
第6国 1	深鉢	口縁部	Ⅱ区10住 No.22	砂粒混入 燻褐色	水平口縁。半載竹管による条合条線がやや粗く施され、その上に偏平なボタン状貼付文が配される。口唇部にも胎土様による貼付文が見られる。	Ⅱ群1類 a種
2	深鉢	胴部	Ⅱ区10住 No.122	砂粒混入 燻褐色	半載竹管による横走、矢羽根状条合条線が施され、その上にボタン状貼付文が配される。3・5と同一個体。	Ⅱ群1類 a種

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種	法量・部位	出土位置	粘土・色調	器形・文様の特徴	分類
3	深鉢	胴部	Ⅱ区10住 埋没土	砂粒混入 暗褐色	口縁に近い胴上半部。半載竹管による矢羽根状集合条線文上に粘土粒の貼付文が配される。	Ⅱ群1類 a種
4	深鉢	胴部	Ⅱ区10住 No.112	砂粒混入 暗褐色	半載竹管による横走集合条線文上に粘土粒の貼付文が配される。	Ⅱ群1類 a種
5	深鉢	胴部	Ⅱ区10住 No.112	砂粒混入 暗褐色	半載竹管による矢羽根状集合条線文上に粘土粒のボタン状貼付文及び棒状貼付文が配される。	Ⅱ群1類 a種
6	深鉢	口縁部	Ⅱ区10住 No.110	砂粒混入 暗褐色	僅かに内湾ぎみに立ち上がる水平口縁。半載竹管による矢羽根状集合条線文が施される。口縁部は外側竹管の押圧により貼付文の小隆起が運る。	Ⅱ群1類 a種
7	深鉢	底部	Ⅱ区10住 No.118	砂粒混入 暗褐色	底部は強く張り出し、底面は平坦である。器内側には炭化物の付着が認められる。文様は器面の剥離が著しく不明瞭であるが、集合条線文が施される。	

第4表 縄文土器観察表(3)

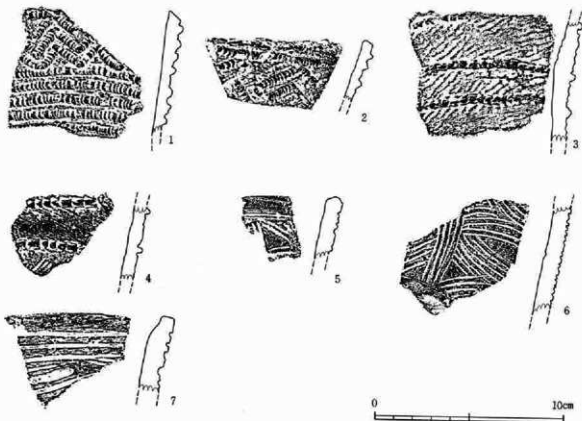
No	器種	法量・部位	出土位置	粘土・色調	器形・文様の特徴	分類
第7区 1	深鉢	胴部	Ⅱ区12住 No.5	砂粒混入 灰黒色	半載竹管による縦位、矢羽根状集合条線によるボタン状貼付文が配される。貼付文には刺突が加えられる。	Ⅱ群1類 b種
2	深鉢	胴部	Ⅱ区12住 埋没土	砂粒混入 灰褐色	半載竹管による集合条線が施される。条線は深く明瞭。	Ⅱ群1類 b種
3	深鉢	胴部	Ⅱ区12住 埋没土	砂粒混入 暗褐色	半載竹管による弧状の集合条線が施される。器内面に炭化物の付着が認められる。	Ⅱ群1類 b種
4	深鉢	口縁部	Ⅱ区 グリッド	砂粒混入 灰褐色	半載竹管による横位の集合条線上に棒状貼付文が加えられる。貼付文上には粘土粒より細の状の字状刺突文が加えられる。	Ⅱ群1類 b種
5	深鉢	胴部	Ⅱ区 グリッド	砂粒混入 灰褐色	種やかな波状口縁を呈する。集合条線上に棒状貼付文及びボタン状貼付文が施される。貼付文上にはコの字状刺突文が加えられる。	Ⅱ群1類 b種
6	深鉢	胴部	Ⅱ区10住	砂粒混入 黒褐色	半載竹管による縦走、矢羽根状の集合条線が施される。平行線文は深く明瞭。粘土粒貼付による浮線文上には内側竹管の刺突が加えられる。	Ⅱ群1類 b種
7	深鉢	底部	Ⅱ区10住 No.7	砂粒混入 暗褐色	平行線文による縦走、矢羽根状の集合条線が施される。底部は強く張り出す。平行線文は幅2mmで、深く明瞭。6と同一個体。	Ⅱ群1類 b種
8	深鉢	口縁部	Ⅱ区10住	砂粒混入 黒褐色	液状口縁。口唇上は平坦面を持つ。横走平行線文による集合条線文上にはボタン状貼付文、浮線文が付される。貼付文、浮線文上には竹管によるコの字状刺突文が加えられる。4と同一個体。	Ⅱ群1類 b種
9	深鉢	口縁部	Ⅱ区10住 埋没土	砂粒混入 黒褐色	口唇上は平坦面を持つ。横位の集合条線文上に浮線文が付され、浮線文には竹管によるコの字状刺突文が加えられる。4・8と同一個体。	Ⅱ群1類 b種
10	深鉢	口縁部	Ⅱ区10住 埋没土	砂粒混入 黒褐色	口唇上に平坦面を持つ。集合条線文上には浮線文が付され、浮線文にはコの字状刺突文が加えられる。9と同一個体。	Ⅱ群1類 b種
11	深鉢	口縁部	Ⅱ区10住 埋没土	砂粒混入 暗褐色	口唇部は強く外反する。平行線文は深く明瞭で、横位の集合条線を構成する。口唇下にボタン状貼付文を付し、ボタン状貼付文には円形刺突文が加えられる。	Ⅱ群1類 b種
12	深鉢	口縁部	Ⅱ区 グリッド	砂粒混入 褐色	集合条線にボタン状、貝殻状貼付文が加えられる。ボタン状貼付文には円形刺突が施される。	Ⅱ群1類 b種



第8図 縄文土器拓影・実測図 (4)

第5表 縄文土器観察表(4)

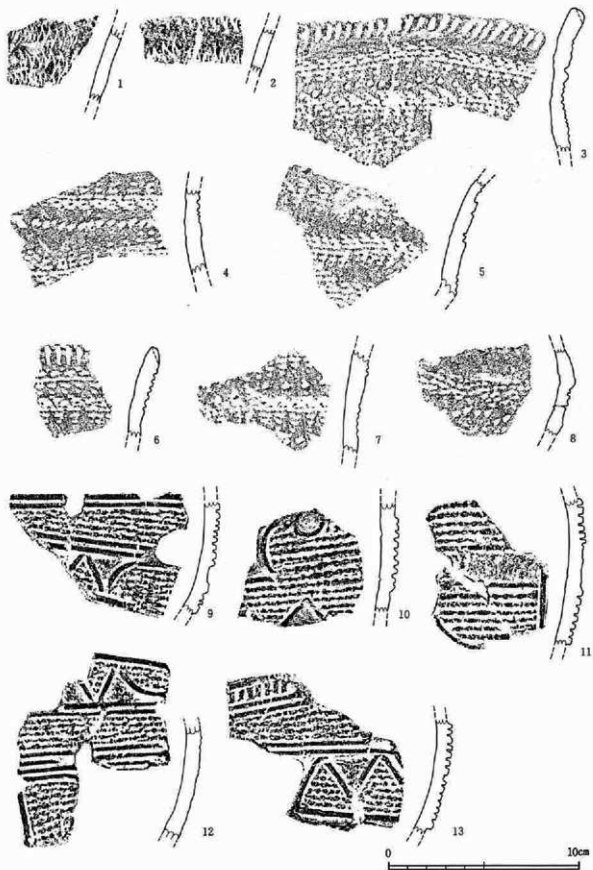
No	器種	流量・部位	出土位置	胎土・色調	器形・文様の特徴	分類
第8区 1	深鉢	口縁部	Ⅱ区10住	砂粒混入 黄褐色	内湾する口縁部。半截竹管による横位、矢羽根状集合条線上に楕円形の貼付文が加えられる。内面整形は良好。	Ⅲ群1類 c種
			Ⅱ区12住	砂粒混入 埋没土 黄褐色	内湾する口縁部。口唇部外側に接合痕が認められ、貼付文が割離した可能性がある。半截竹管による矢羽根状集合条線上に楕円形、棒状の貼付文が加えられる。	Ⅲ群1類 c種
3	深鉢	口縁部	Ⅱ区12住 埋没土	砂粒混入 黄褐色	内湾する口縁部。半截竹管による矢羽根状集合条線上に楕円形、棒状の貼付文が加えられる。	Ⅲ群1類 c種
4	深鉢	口縁部	Ⅱ区12住	砂粒混入 埋没土 黄褐色	内湾する口縁部。口唇部に眼目を施す。半截竹管による矢羽根状集合条線上に楕円形、棒状貼付文を加える。	Ⅲ群1類 c種
5	深鉢	口縁部	Ⅱ区10住 No.108	砂粒混入 淡褐色	水平口縁。口唇部は肥厚し、平行線文による矢羽根状の集合条線が施される。集合条線は、口唇内側にも加えられる。口唇上には貝殻状貼付文が付され、棒状貼付文も見られる。	Ⅲ群1類 c種
6	深鉢	口縁部	Ⅱ区	砂粒混入 グリッド 黄褐色	半截竹管による縦位の集合条線が配される。口縁内側にも斜行集合条線が施される。口縁部に貝殻状貼付文、口縁内側にボタン状貼付文が加えられる。	Ⅲ群1類 c種
7	深鉢	口縁部	Ⅱ区	砂粒混入 グリッド 灰褐色	集合条線上に貝殻文、棒状貼付文が加えられる。	Ⅲ群1類 c種
8	深鉢	口縁部	Ⅱ区	砂粒混入 グリッド 灰褐色	貝殻状貼付文を持つ。	Ⅲ群1類 c種
9	深鉢	胴部	Ⅱ区	砂粒混入 グリッド 黄褐色	集合条線上に貝殻文、ボタン状貼付文を加える。	Ⅲ群1類 c種
10	深鉢	口縁部	Ⅱ区10住	砂粒混入 褐色	口唇部はやや丸みを持ち、器厚は9mmと厚手である。文様は幅3mmの平行線文により縦走、斜行線文が構成される。胎文は粗雑で、縄文は認められない。	Ⅲ群1類 d種
11	深鉢	胴部	Ⅱ区10住	砂粒混入 黒褐色	破片下部は接合面。平行線文は粗雑で、斜行・弧状の文様構成が見られる。	Ⅲ群1類 d種
12	深鉢	胴部	Ⅱ区10住	砂粒混入 黄褐色	平行線文による斜行する集合条線が施される。平行線文はやや粗く不整である。	Ⅲ群1類 d種
13	深鉢	胴部	Ⅱ区10住	砂粒混入 黄褐色	斜行する集合条線が施される。平行線文は胎文がやや粗く、不整である。12と同一個体。	Ⅲ群1類 d種
14	浅鉢	頸部 底部	Ⅱ区10住 No.157	雲母・ 石英粒混入	頸部がくの字状に屈曲する浅鉢。器内外面とも整形は良好で無文。屈曲部に径3mmの小孔が1個見られる。	Ⅲ群1類 e種



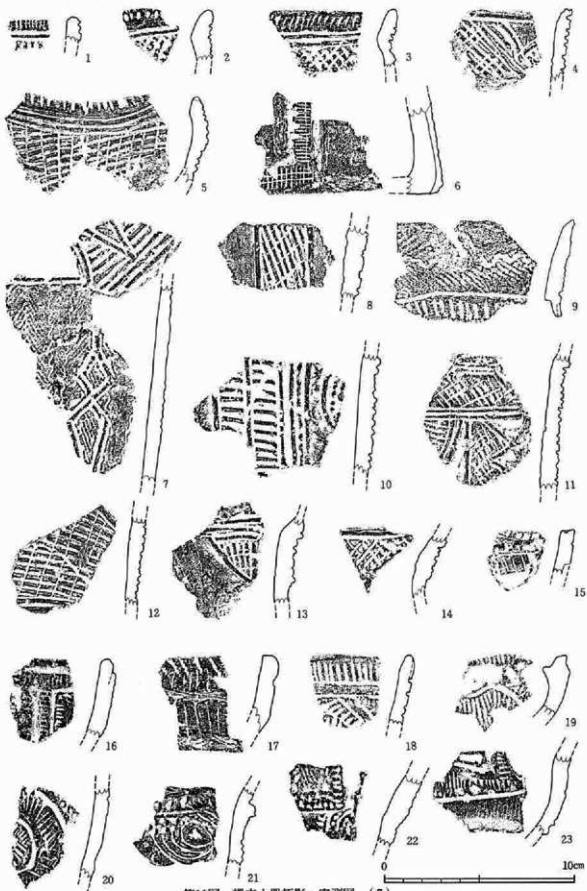
第9図 縄文土器拓影・実測図 (5)

第6表 縄文土器観察表 (5)

No	器種	法量・部位	出土位置	胎土・色調	器形・文様の特徴	分類
第9図 1	深鉢	胴部	Ⅱ区	砂粒混入 グリッド 暗褐色	横位、山形状に結節浮線文を施す。浮線文の間隔は密である。	Ⅲ群2類 a種
2	深鉢	胴部	Ⅱ区	砂粒混入 燈褐色	横位、山形状結節浮線文を施す。地文のLR横位が認められる。	Ⅲ群2類 a種
3	深鉢	胴部	Ⅱ区10住 No.67	砂粒混入 燈褐色	器内面に横位の整形痕が残る。縄文はやや不明瞭ながらLR横位が施される。結節浮線文は太く、竹管により刺突が加えられる。	Ⅲ群2類 a種
4	深鉢	胴部	Ⅱ区7住 埋没土	砂粒混入 燈褐色	結節浮線文は太く、浮線文間は無文帯となる。縄文はLR横位。原形は細くよく熟られている。	Ⅲ群2類 a種
5	深鉢	口縁部	Ⅱ区	砂粒混入 グリッド 燈褐色	手載竹管による平行線文により文様構成される。	Ⅲ群2類 b種
6	深鉢	胴部	Ⅱ区	砂粒混入 グリッド 燈褐色	平行線文により弧状、腹巻線文が施される。縄文は認められない。	Ⅲ群2類 b種
7	深鉢	口縁部	Ⅱ区	雲母・砂レ グリッド 燈褐色	やや幅広の単一沈線文により横走、斜行線文が施される。	Ⅲ群2類 b種

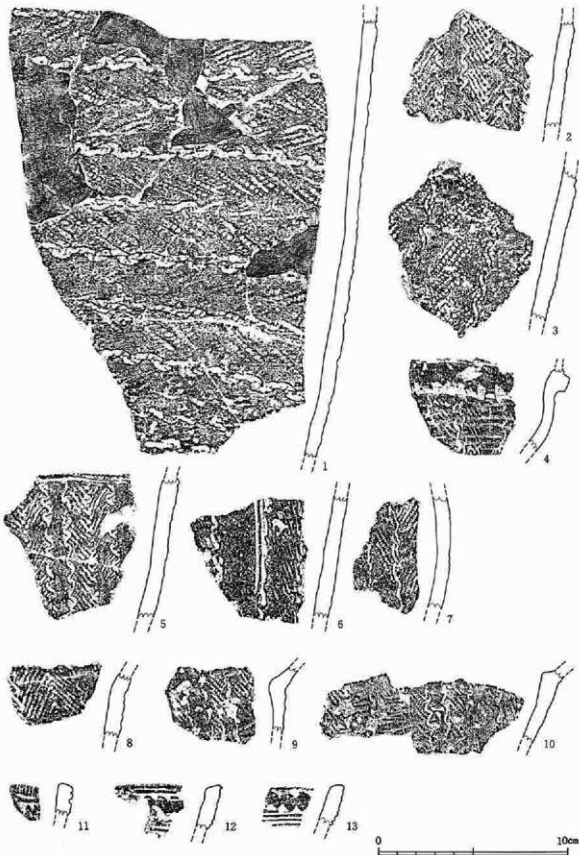


第10図 縄文土器拓影・実測図 (6)



第11圖 縄文土器拓影・実測図 (7)

第2節 検出された遺構と遺物



第12図 縄文土器拓影・実測図 (8)

第7表 縄文土器観察表(6)

No	器種	法量・部位	出土位置	胎土・色調	器形・文様の特徴	分類
第10回 1	深鉢	胴部	Ⅱ区 グリッド	砂粒混入 黒褐色	波状貝殻文を施す。貝殻文は折幅が小さく、細かい。器内面に炭化物の付着が見られる。	Ⅳ群1類
					波状貝殻文を施す。器内面に炭化物の付着が見られる。	
2	深鉢	胴部	Ⅱ区 グリッド	砂粒混入 黒褐色	波状貝殻文を施す。器内面に炭化物の付着が見られる。	Ⅳ群1類
3	深鉢	口縁部		砂粒混入 暗褐色	水平口縁。口唇部外側に刻み目を持つ。波状貝殻文帯間に外側竹管刺突文を施す。	Ⅳ群2類
4	深鉢	胴部		砂粒混入 暗褐色	波状貝殻文帯間に外側竹管の刺突文を施す。3と同一個体。	Ⅳ群2類
5	深鉢	胴部		砂粒混入 暗褐色	波状貝殻文を施す。	Ⅳ群2類
6	深鉢	口縁部		砂粒混入 暗褐色	口唇部外側に刻み目を持つ。以下、貝殻文が施される。	Ⅳ群2類
7	深鉢	胴部		砂粒混入 暗褐色	波状貝殻文帯間に外側竹管の刺突文を施す。3・4と同一個体。	Ⅳ群2類
8	深鉢	胴部		砂粒混入 暗褐色	貝殻文と外側竹管の刺突文が施される。3・4と同一個体。	Ⅳ群2類
9	深鉢	胴部	Ⅱ区 グリッド	砂粒混入 暗褐色	半截竹管による平行線文により横位、縦位、三角状等文様構成する。平行線文は深く明瞭。地文は	V群1類 a種
10	深鉢	胴部			9と類似する文様構成を持つ。平行線文、地文からみて別個体。	V群1類 a種
11	深鉢	胴部			9・12・13と同一個体。	V群1類 a種

第8表 縄文土器観察表(7)

No	器種	法量・部位	出土位置	胎土・色調	器形・文様の特徴	分類
第11回 1	深鉢	口縁部			口唇部に柔線文を施す。	V群1類 b種
					口唇部に刺突文が走り、口縁部には格子状文が配される。	
2	深鉢	口縁部			口唇部に刺突文が走り、口縁部には格子状文が配される。	V群1類 b種
3	深鉢	口縁部		砂粒混入 暗褐色	口唇部に細かい沈線が走り、口縁部は単一沈線による格子状文が施される。	V群1類 b種
4	深鉢	胴部		砂粒混入 暗褐色	平行線文による三角形の文様構成を持つ。格子状文はやや複雑。	V群1類 b種
5	深鉢	口縁部		砂粒混入 暗褐色	緩やかな波状口縁を呈する。口唇上には刻み目を施す。細く深い単一沈線文により格子状文が施される。	V群1類 b種
6	深鉢	底部	Ⅱ区4位	砂粒混入 暗褐色	山形の刻み目を持つ太い帯文上には、細沈線による格子状文が施される。器外面はよく整形され平滑である。	V群1類 c種
7	深鉢	胴部		砂粒混入 暗褐色	平行線文により文様構成される。地文にR L、L Rを結束第1種とした縦位施文及び結節の縦位回転が施されている。	V群1類 c種
8	深鉢	胴部		砂粒混入 暗褐色	平行線文による区画内に格子状文が施される。格子状文は平行線文及び細い単一沈線文の組み合わせによる。	V群1類 c種

第2節 検出された遺構と遺物

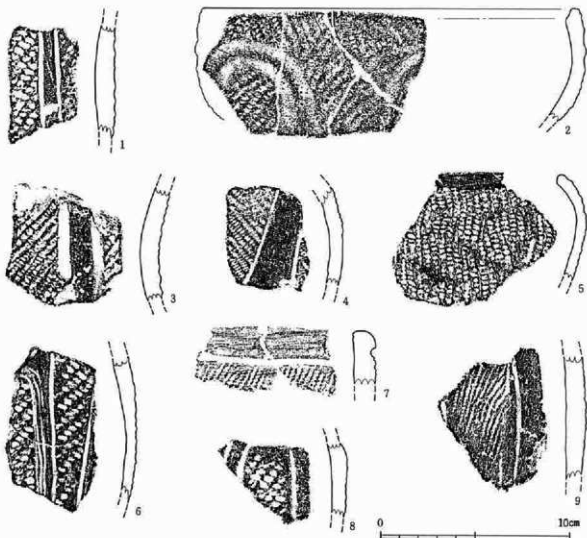
No	器種	法量・部位	出土位置	粘土・色調	器形・文様の特徴	分類
9	深鉢	口縁部		砂粒混入 暗褐色	口縁部にL R、R L縦位による羽状縄文、結節回転文が施され、 横走縄文以下には縦位の条線文が施される。	V群1類 b種
10	深鉢	胴部		砂粒混入 黄褐色	平行縦文により縦位、横位の文様構成を持つ。	V群1類 b種
11	深鉢	胴部		砂粒混入 黄褐色	平行縦文により縦位、横位及び三角形の文様構成を持つ。三角 形状内は削り取られ、平行縦文による区画内は格子状文が施され る。	V群1類 b種
12	深鉢	胴部		砂粒混入 黄褐色	平行縦文と単一縦文の組み合わせにより格子状文が施される。平 行縦文を施した後、深い単一縦文が加えられる。	V群1類 b種
13	深鉢	胴部		砂粒混入 黄褐色	平行縦文による文様構成を持ち、区画内に平行縦文と単一縦文の 組み合わせによる格子状文が施される。	V群1類 b種
14	深鉢	胴部		砂粒混入 黄褐色	単一縦文により、格子状文が施される。	V群1類 b種
15	深鉢	口縁部		砂粒混入 暗褐色	口唇部に刺突文が巡る。口縁部は隆帯状に肥厚し、刺突文及び条 線文が施される。	V群1類 c種
16	深鉢	口縁部		砂粒混入 淡褐色	隆帯上には細かい削み目が施される。	V群1類 c種
17	深鉢	口縁部		砂粒混入 暗褐色	口唇上部にはLの圧痕が施される。口縁部に太い沈線文が一条並 り、細く鋭い縦位の沈線文がやや不規則に施されている。	V群1類 c種
18	深鉢	口縁部		砂粒混入 淡褐色	深く明瞭な沈線文により文様構成する。口縁部及び沈線文間に条 線文を施す。	V群1類 c種
19	浅鉢	口縁部		砂粒混入 黄褐色	浅鉢形土器の口縁と考えられる。口唇部に凹面を持ち条線を施す。	V群1類 c種
20	深鉢	胴部		砂粒混入 暗褐色	単一縦文による弧状文が施され、文様に沿ってやや浅い条線文が 加えられる。	V群1類 c種
21	深鉢	頸部		砂粒混入 暗褐色	隆帯両端に三角形の刺突文を施す。同心円文はへら状工具によ る細い単一沈線により表出される。	V群1類 c種
22	深鉢	胴部		砂粒混入 淡褐色	隆帯上及び平行縦文間には外側竹管による刺突文を施す。	V群1類 c種
23	深鉢	胴部				V群1類 c種

第9表 縄文土器観察表(8)

No	器種	法量・部位	出土位置	粘土・色調	器形・文様の特徴	分類
第12回 1	深鉢	胴部		石英粒混入 淡褐色	L R及びR Lを縦位並文し、不規則ながら羽状構成が見られる。 Lの結節回転文が横位に加えられる。	V群1類 d種
2	深鉢	胴部	Ⅱ区10住	石英粒混入 淡褐色	L R 1 ³ 、R L r ³ を結束第1種とし縦位施文する。縄文帯は縦構成と なり、縦位の結節回転文により区画される。	V群1類 d種

第II章 書上下古祥寺遺跡

No	器種	法量・部位	出土位置	胎土・色調	器形・文様の特徴	分類
3	深鉢	胴部		石英粒混入 暗褐色	Rし縦位施文。施文は明確である。結節回転文はしを用い、縦位施文とする。	V群1類 d種
4	深鉢	胴部				V群1類 d種
5	深鉢	胴部	Ⅱ区2住	石英粒混入	平行線文が一部認められる。L R1 ³ R L r ³ を結束第1種とし縦位施文し、結節回転文を施す。2と同一個体。	V群1類 d種
6	深鉢	胴部		砂粒混入 暗褐色	半ヤ竹管による縦位の平行線文が施される。不明瞭ながら結束第1種による羽状横文、結節回転文が縦位に施文される。	V群1類 d種
7	深鉢	胴部	Ⅱ区10住 埋没土	石英粒混入 暗褐色	Rし、L Rの縦位施文。結節の回転文はしを用いられる。	V群1類 d種
8	深鉢	胴部	Ⅱ区	砂粒混入 グリップ 淡褐色	L R1 ³ 、R L r ³ を結束第1種とし縦位施文する。結節の縦位回転も認められる。	V群1類 d種
9	深鉢	胴部			Rし及び縦位の結節回転文が施される。	V群1類 d種



第13図 縄文土器拓影・実測図 (9)

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種	法量・部位	出土位置	胎土・色調	器形・文様の特徴	分類
10	深鉢	胴部			R L及び縦位の結節回転文が施される。	V群1類 d様
11	深鉢	口縁部			口唇部に縦位の条線文を施し、交互刺突を持つ。	V群2類
12	深鉢	胴部		砂粒混入 灰褐色	交互刺突文を施す。	V群2類
13	深鉢	頸部		砂粒混入 暗褐色	交互刺突文を施す。	V群2類

第10表 縄文土器観察表(9)

No	器種	法量・部位	出土位置	胎土・色調	器形・文様の特徴	分類
第13図 1	深鉢	胴部	Ⅳ区 グリッド	砂粒混入 灰褐色	R L R縦位の縄文が施される。	Ⅳ群
2	深鉢	口縁部	Ⅳ区 グリッド	砂粒混入 灰褐色	水平口縁で内湾ぎみに立ち上がる。口縁上部にR1横位、以下R L縦位の縄文が施され、弧状の区画文が加えられる。	Ⅳ群
3	深鉢	胴部	Ⅳ区 グリッド	砂粒混入 灰褐色	R L r ³ 縦位の縄文が施される。	Ⅳ群
4	深鉢	胴部	Ⅱ区8溝 埋没土	砂粒混入 灰褐色	L R1 ³ の縄文が施される。	Ⅳ群
5	深鉢	口縁部	Ⅳ区 グリッド	砂粒混入 灰褐色	口縁部は内湾し、器内面はよく研磨される。縄文はR Lが用いられ、施文方位は斜位で、条は縦走する。	Ⅳ群
6	深鉢	胴部	Ⅳ区 グリッド	砂粒混入 灰褐色	縄文はR L横位で施文は粗い。懸垂文も施文はやや粗い。	Ⅳ群
7	深鉢	口縁部	Ⅳ区 グリッド	砂粒混入 灰褐色	口縁部に沈線文が一条通り、以下R L ² 縦位が施される。	Ⅳ群
8	深鉢	胴部	Ⅳ区 グリッド	砂粒混入 灰褐色	R L横位が施される。	Ⅳ群
9	深鉢	胴部	Ⅱ区2住	砂粒混入 灰褐色	R L縦位が施される。縄文本体は細致でよく磨られているが施文は粗雑である。	Ⅳ群

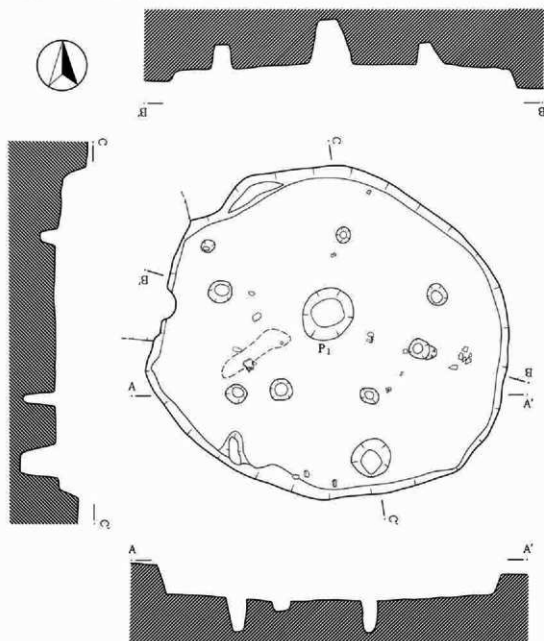
第II章 書上下吉祥寺遺跡

第10号住居跡（第14図、図版4） 位置 690.0Fポイント西側

本住居跡は、北西部の一部が7号住居跡によって壊されていたが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、長径5.7m・短径5.2mの、東西方向が若干長い長円形を呈する。

壁は10°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高15～39cmのローム層の壁面を確認した。

床面は、全体的に軟弱であり、中央部が約6cm程低くなっており、中心からやや南西寄りの位置に、40×120cm程の範囲で焼け込みが認められたが、明確な炉跡は検出されなかった。また、床面には10個のビットが穿たれていたが、柱穴としては不規則な配置であった。P₁は、径80cm・深さ70cmで、截頭円錐状に掘り込まれており、覆土は炭化物を含んだ暗褐色粘質土であったが、性格は不明である。他のビットは径25～60cm・深さ30～50cm程の大きさである。

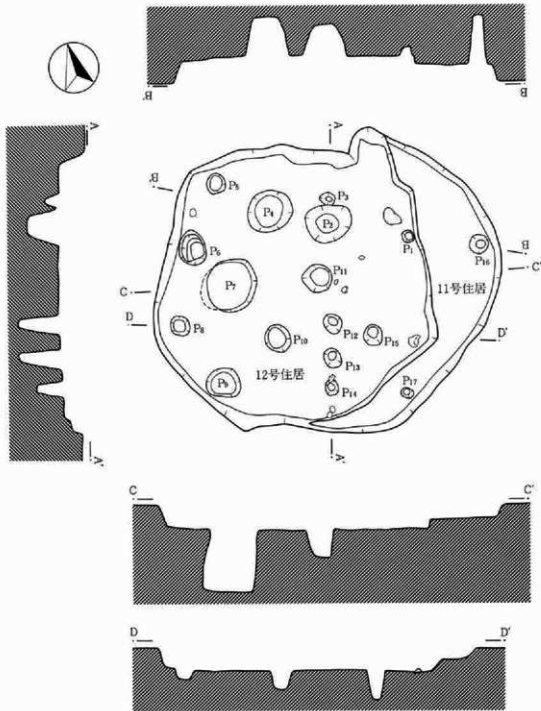


第14図 第10号住居跡実測図

第11号住居跡（第15図、図版5） 位置 692.5Cグリッド

本住居跡は、12号住居跡によって殆ど壊されてしまっており、遺存状態が極めて悪かった。平面形は、北東方向に長軸を持つ隅丸方形を呈すると思われる。

規模は、北東方向4.65m・北西方向2.90mを確認した。



第15図 第11・12号住居跡実測図

第II章 書上下古祥寺遺跡

壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、現存高15～26cmのローム層の壁面を確認した。

床面は、ほぼ平坦で、全域に亘って強く踏み固められていた。また、壁際に2個のピットが検出された。P₁₆は径30cm・深さ76cmで、P₁₇は径26cm・深さ15cmを測るが、柱穴としてはやや不自然な配置となっている。覆土は、少量の炭化物を含んだ灰褐色土であり、堅く締まっていた。遺物は、石鏝と土器の小破片が出土している。

第12号住居跡 (第15図、図版5) 位置 692.5Cグリッド

本住居跡は、11号住居跡を壊して作られており、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、南東部及び北西部がやや角張っており、六角形に近い不整形円形を呈する。

規模は、径4.4～4.3m程度の大きさと考えられる。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高33～43cmのローム層の壁面を確認した。なお、東側部分の壁面は、覆土が11号住居跡と極めて似ていたために、平面で区別することができず、一部掘り壊してしまった。

床面は、ほぼ平坦で、全面に亘って強く踏み固められていた。また、床面の全域に散らばって合計15個のピットが穿たれていたが、いずれも性格は不明である。P₂・P₄・P₆・P₇・P₉・P₁₀は他よりもやや大振りで、径45～80cm・深さ30～100cm程の大きさである。なお、炉跡を示すような痕跡は確認できなかった。遺物は、石皿と土器片が出土した。

第8号土坑 (第16図、図版5) 位置 692.0Cグリッド

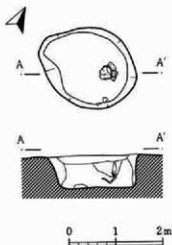
本土坑は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、東西方向に長軸を持ち、西側がややすぼまった鶏卵形を呈する。

規模は、長径108cm・短径85cm・深さ34cmを測る。壁面は、南側の位置部を除いて、ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は、ほぼ平坦であったが、全体的に軟弱であった。

覆土は、ロームをブロック状に含む暗褐色土が詰まっていた。

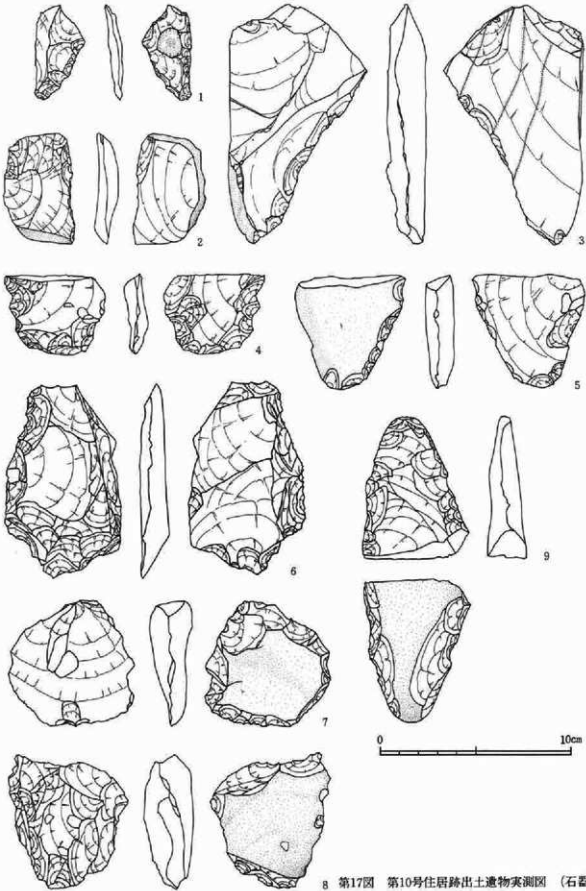
遺物は、深鉢の底部から胴部にかけての破片と、数側の石が出土した。

(飯塚)



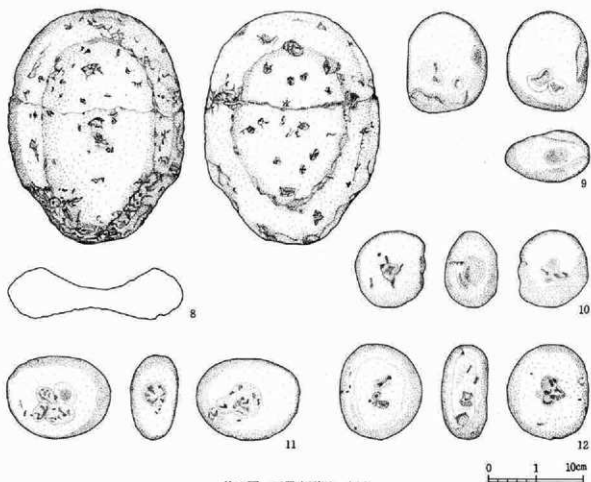
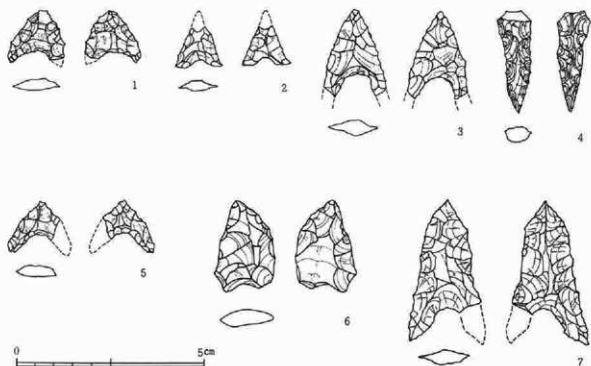
第16図 第8号土坑実測図

第2節 検出された遺構と遺物



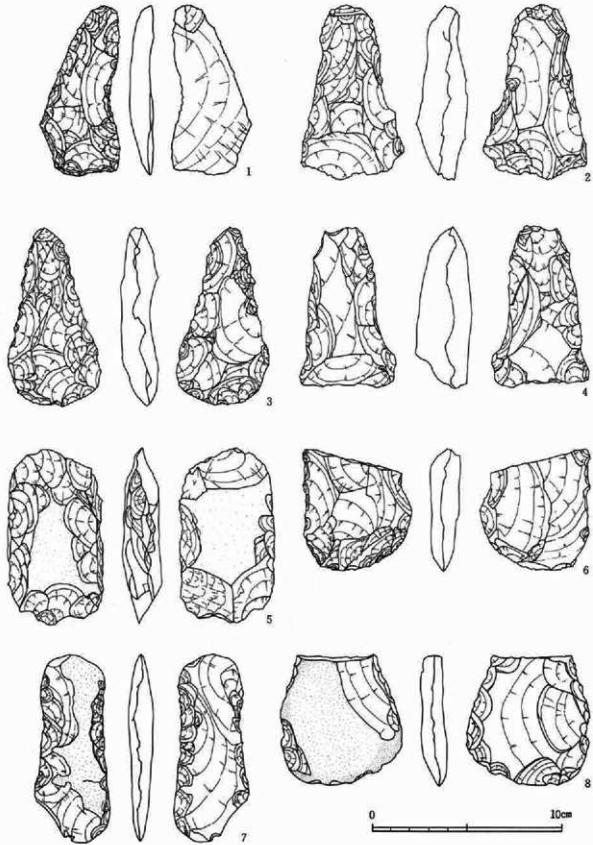
8 第17図 第10号住居跡出土遺物実測図 (石器)

第二章 書上下吉祥寺遺跡

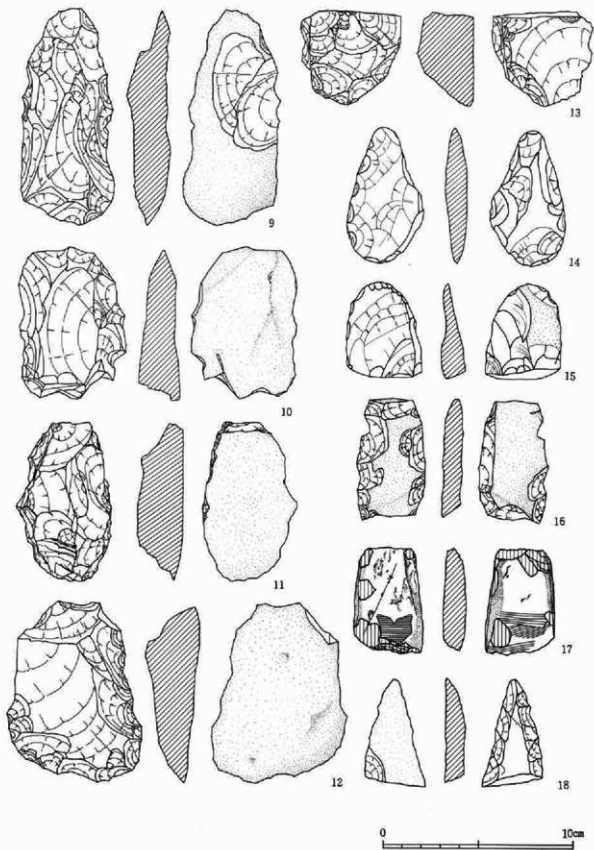


第18图 石器实测图 (1)

第2節 検出された遺構と遺物



第19図 石器実測図 (2)



第20図 石器実測図 (3)

第11表 石器観察表(1)

No	器種	出土位置	石質	長さ①(cm)	②幅(cm)	③厚さ(cm)	④重さ(g)	⑤特徴
1	剥片石器	Ⅱ区10住	黒色頁岩	①4.6	②2.7	③0.7	④5.8g	⑤剥片の両側縁部に細部調整を行っている。
2	剥片石器	Ⅱ区10住	黒色頁岩	①5.7	②3.5	③1.2	④22.2g	⑤剥片の一边に表面を主に刃部を付けている。
3	剥片石器	Ⅱ区10住	黒色頁岩	①11.5	②6.6	③2.0	④148.9g	⑤剥片の一边に表面を主に刃部を付けている。
4	打製石斧	Ⅱ区10住	黒色頁岩	①4.2	②5.1	③1.2	④22.7g	⑤中間部から基部にかけて欠損する。
5	剥片石器	Ⅱ区10住	黒色頁岩	①5.8	②5.4	③1.5	④59.2g	⑤剥片の一边に細部調整を行っている。全体の形状不明
6	剥片石器	Ⅱ区10住	黒色頁岩	①8.7	②3.0	③1.6	④96.3g	⑤側縁の一部に細部調整を行っている。
7	剥片石器	Ⅱ区11住	黒色頁岩	①6.5	②4.9	③2.4	④92.9g	⑤裏面から細部調整を行っている。スクレイパーか。
8	剥片石器	Ⅱ区12住	黒色頁岩	①6.4	②5.6	③2.8	④112.0g	⑤先端部に細部調整を行っている。石斧の刃部付近の破片か。
9	打製石斧	Ⅱ区12住	黒色頁岩	①7.5	②4.9	③2.2	④80.1g	⑤刃部は欠損している。裏面には自然面が残る。

第12表 石器観察表(2)

No	器種	出土位置	石質	長さ①(cm)	②幅(cm)	③厚さ(cm)	④重さ(g)	⑤特徴
1	石鏃	Ⅱ区10住	黒曜石	①1.4	②1.4	③0.8	④0.4g	⑤基部に浅い抉入のある無茎鏃。
2	石鏃	Ⅱ区10住	チャート	①1.1	②1.3	③0.7	④0.3g	⑤基部に浅い抉入のある無茎鏃。先端部欠損。
3	石鏃	Ⅱ区10住	チャート	①2.4	②1.7	③0.9	④1.1g	⑤基部に深い抉入のある無茎鏃。側面欠損。
4	石鏃	Ⅱ区10住	黒色頁岩	①2.7	②0.9	③0.8	④0.9g	⑤基部を欠くが、丁寧な作りである。
5	石鏃	Ⅱ区12住	黒曜石	①1.4	②1.4	③0.7	④0.3g	⑤基部に深い抉入のある無茎鏃。片側の側面欠損。
6	石鏃	Ⅱ区12住	頁岩	①2.4	②1.6	③0.9	④1.7g	⑤基部に僅かに抉入のある無茎鏃。粗雑な作りである。
7	石鏃	Ⅱ区12住	黒色頁岩	①3.7	②1.8	③1.0	④2.0g	⑤基部に深い抉入のある無茎鏃。片側の側面欠損。
8	石鏃	Ⅱ区10住	輝石安山岩	①24.5	②18.5	③5.4	④9050.0g	⑤両面共に使用されている。両側縁部が高くなる。
9	凹石	Ⅱ区12住	輝石安山岩	①10.4	②8.4	③5.4	④644.6g	⑤扁平で楕円形を呈する。表裏面と側面に凹がある。
10	凹石	Ⅱ区12住	輝石安山岩	①8.0	②7.4	③5.0	④412.5g	⑤扁平ではほぼ円形を呈する。表裏面と側面に凹がある。
11	凹石	Ⅱ区12住	輝石安山岩	①11.0	②8.7	③5.8	④608.4g	⑤扁平で楕円形を呈する。表裏面と側面に凹がある。
12	凹石	Ⅱ区12住	輝石安山岩	①10.0	②8.7	③5.0	④564.1g	⑤扁平ではほぼ円形を呈する。表裏面と側面に凹がある。

第13表 石器観察表(3)

No	器 種	出土位置	石 質	長さ①(cm)	②幅(cm)	③厚さ(cm)	④重さ(g)	⑤特徴
1	打製石斧	Ⅱ区4住	黒色頁岩	①8.7	②3.3	③1.4	④37.6g	⑤片側から側縁部に細部調整を行っている。
2	打製石斧	Ⅱ区4住	黒色頁岩	①8.8	②3.8	③2.5	④99.8g	⑤発形を呈する。刃部が一部欠損。
3	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①9.3	②3.8	③2.4	④77.1g	⑤発形を呈する。表裏面とも横方向から割離を行っている。
4	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①8.3	②3.7	③2.9	④117.0g	⑤発形を呈する。刃部は使用時に欠損か。
5	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①9.3	②5.0	③2.2	④115.9g	⑤短冊形を呈する。基部刃部ともに欠損。
6	打製石斧	Ⅱ区G	灰色安山岩	①5.7	②5.7	③1.7	④60.8g	⑤短冊形を呈すると考えられる。基部欠損。
7	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①9.8	②3.4	③1.5	④53.7g	⑤短冊形を呈する。表裏面とも横方向から割離を行っている。
8	打製石斧	Ⅱ区G	灰色安山岩	①6.7	②6.4	③1.5	④65.9g	⑤基部を欠損するが、発形を呈すると考えられる。
9	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①11.4	②5.0	③2.2	④136.6g	⑤発形を呈する。自然面を多く残す。
10	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①8.0	②5.6	③2.2	④140.0g	⑤短冊形を呈すると考えられ。刃部欠損。
11	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①8.3	②5.1	③2.6	④127.3g	⑤発形を呈する。表面のみ横方向から割離を行っている。
12	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①9.3	②7.2	③2.9	④197.2g	⑤発形を呈する。表面のみ横方向から割離を行っている。
13	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①5.0	②5.4	③3.0	④96.6g	⑤基部を欠くために形状不明。
14	打製石斧	Ⅱ区G	紫質安山岩	①7.1	②4.0	③1.3	④40.8g	⑤発形を呈する。表裏面ともに横方向から割離を行っている。
15	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①5.0	②4.0	③1.4	④28.5g	⑤基部を欠くが、発形を呈すると考えられる。
16	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①6.3	②3.7	③1.1	④34.0g	⑤刃部を欠くが、短冊形を呈すると考えられる。
17	磨製石斧	Ⅱ区G	紫輝緑岩	①5.6	②3.6	③1.3	④44.0g	⑤刃部を欠くが、丁寧な作りである。一部に横方向の磨痕有り。
18	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①5.7	②3.2	③1.2	④18.9g	⑤発形を呈する打製石斧の基部と考えられる。

第14表 石器観察表(4)

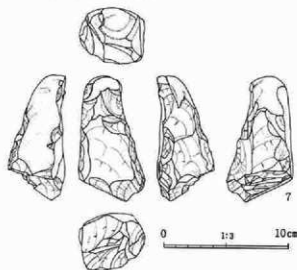
No	出土位置	石 質	①長さ(cm)	②幅(cm)	③厚さ(cm)	④重さ(g)	⑤特徴
1	Ⅱ区4住	黒色頁岩	①9.3	②4.8	③4.9	④261.7g	⑤ほぼ定形。
2	Ⅱ区6住	黒色頁岩	①6.2	②4.2	③2.7	④73.7g	⑤ほぼ定形。
3	Ⅱ区690.5E	黒色頁岩	①5.5	②3.2	③2.9	④60.4g	⑤ほぼ定形。
4	Ⅱ区692.0D	黒色頁岩	①5.1	②7.2	③6.0	④297.0g	⑤自然面を3面残す。上半部欠損か?
5	Ⅱ区690.5F	黒色頁岩	①7.3	②4.3	③3.4	④137.2g	⑤上半部欠損か?
6	Ⅱ区690.0E	黒色頁岩	①4.2	②5.4	③5.1	④265.8g	⑤上半部欠損か?
7	Ⅱ区690.0F	黒色頁岩	①9.9	②5.3	③4.4	④253.5g	⑤下半部欠損か?

第2節 検出された遺構と遺物



第21図 石器実測図 (4)

第II章 書上下吉祥寺遺跡

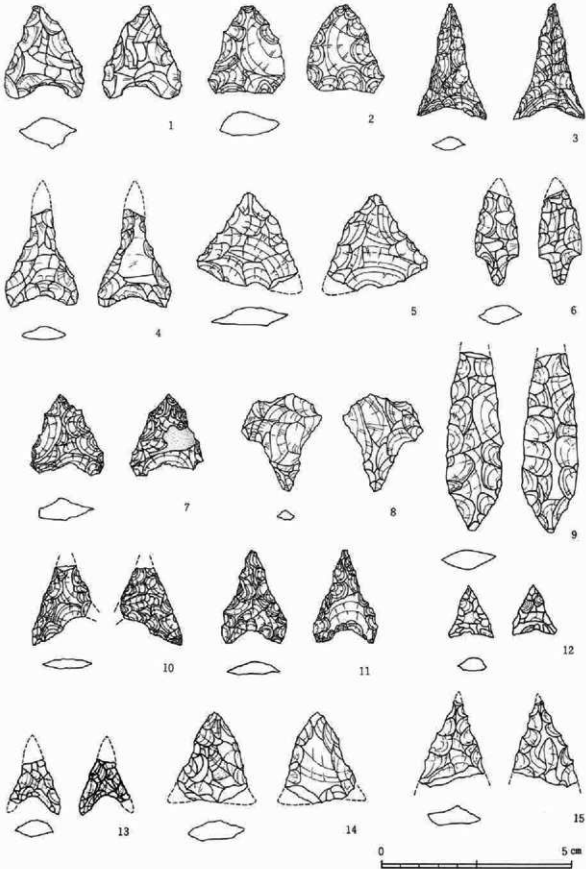


第22図 石器実測図 (5)

第15表 石器観察表 (5)

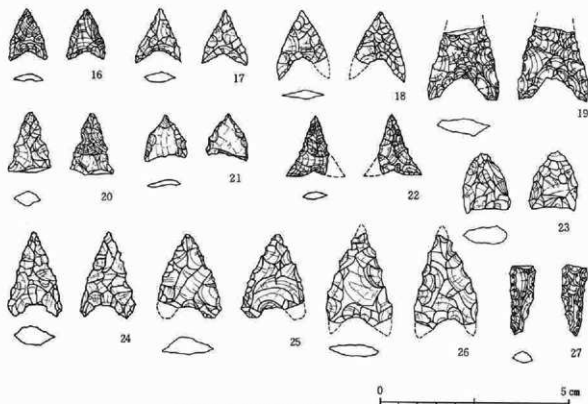
No	器種	出土位置	石質	長さ①(cm)	②幅(cm)	③厚さ(cm)	④重さ(g)	⑤特徴
1	石 鏃	Ⅱ区G	黒色頁岩	①2.4	②2.0	③1.7	④2.7g	⑤基部に浅い抉入のある無基鏃。
2	石 鏃	Ⅱ区G	黒色頁岩	①2.3	②2.0	③1.3	④3.1g	⑤基部は直線的であり、無基鏃。
3	石 鏃	Ⅱ区G	珪質頁岩	①3.1	②1.9	③0.8	④1.0g	⑤基部に深い抉入のある無基鏃。
4	石 鏃	Ⅱ区11溝	頁 岩	①2.6	②1.9	③0.9	④1.8g	⑤基部に深い抉入のある無基鏃。先端部欠損。
5	石 鏃	Ⅱ区G	黒色安山岩	①2.5	②2.7	③1.2	④2.2g	⑤不整形だが、基部に浅い抉入のある無基鏃。
6	石 鏃	Ⅱ区G	黒色頁岩	①2.5	②1.2	③1.1	④1.4g	⑤先端部が欠損するが、丁寧な作りの有基石鏃。
7	石 鏃	Ⅱ区6住	黒色安山岩	①2.1	②2.0	③1.3	④1.8g	⑤基部に浅い抉入のある無基鏃。
8	石 鏃	Ⅱ区G	チャート	①2.6	②2.1	③1.4	④3.8g	⑤脚の短い鏃。
9	先端器	Ⅱ区G	黒色頁岩	①4.7	②1.5	③1.3	④3.3g	⑤先端部を欠損するが、横方向から押し判離を行っている。
10	石 鏃	Ⅱ区3住	黒色安山岩	①2.4	②1.3	③0.8	④0.9g	⑤先端部及び片側の脚を欠くが、基部に深い抉入のある無基鏃。
11	石 鏃	Ⅱ区4住	黒色頁岩	①2.5	②1.8	③0.8	④1.1g	⑤基部に深い抉入のある無基鏃。
12	石 鏃	Ⅱ区G	チャート	①1.4	②1.2	③0.9	④0.5g	⑤基部は直線的であり、無基鏃。
13	石 鏃	Ⅱ区G	チャート	①1.5	②1.3	③1.0	④0.5g	⑤先端部及び基部を欠くが、基部に深い抉入のある無基鏃。
14	石 鏃	Ⅱ区G	チャート	①2.4	②1.9	③1.2	④2.0g	⑤基部の両端を欠くが、直線的な基部を持つ無基鏃。
15	石 鏃	Ⅱ区4住	黒色頁岩	①2.2	②1.5	③1.2	④1.3g	⑤基部を欠くために全体の形状不明。
16	石 鏃	Ⅱ区G	黒曜石	①1.3	②1.1	③0.6	④0.2g	⑤基部に浅い抉入のある無基鏃。

第2節 検出された遺構と遺物



第23図 石器実測図 (6)

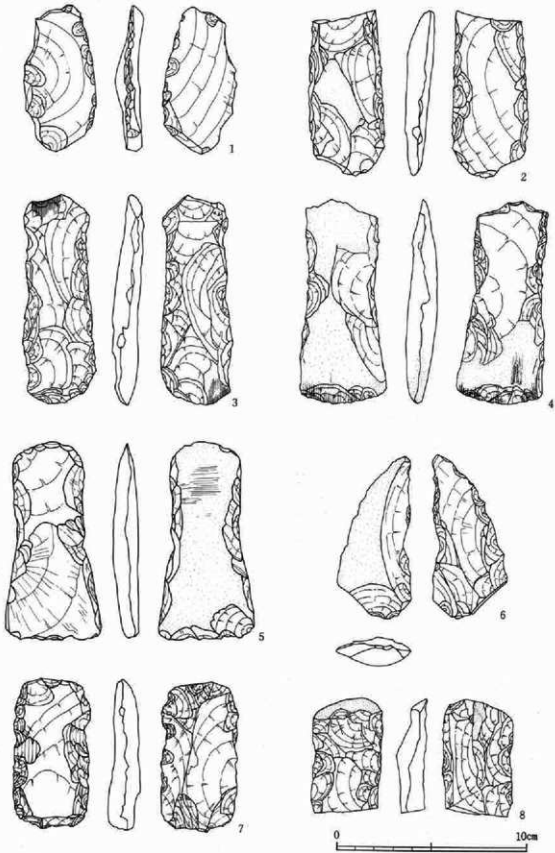
第II章 書上下吉祥寺遺跡



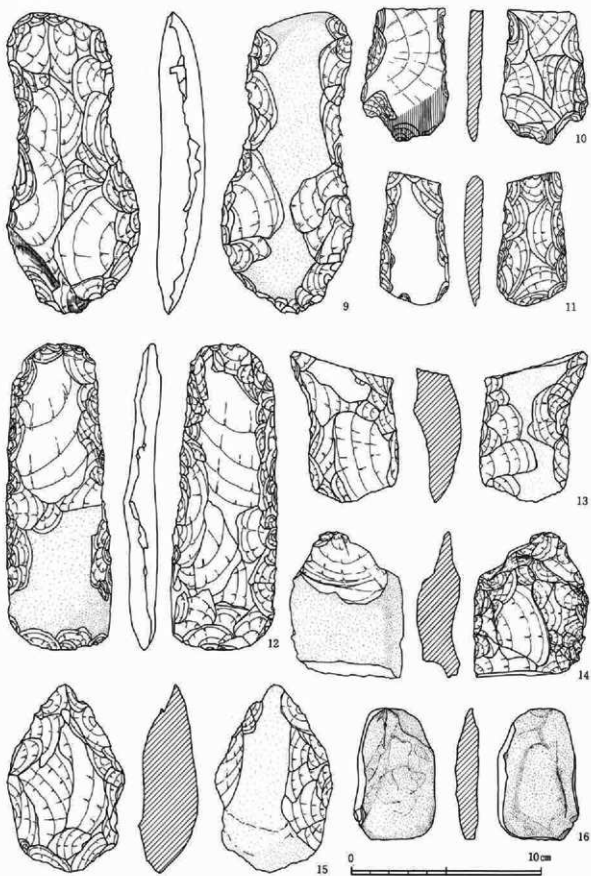
第24図 石器実測図 (7)

No	器種	出土位置	石質	長さ①(cm) ②幅(cm) ③厚さ(cm) ④重さ(g) ⑤特徴
17	石鏃	Ⅱ区G	黒曜石	①1.1 ②1.2 ③0.8 ④0.2g ⑤基部に深い抉入のある無茎鏃。
18	石鏃	Ⅱ区G	黒曜石	①1.8 ②1.3 ③0.7 ④0.3g ⑤基部に深い抉入のある無茎鏃。片側の脚欠損。
19	石鏃	Ⅱ区G	チャート	①1.8 ②1.9 ③1.0 ④1.2g ⑤基部に深い抉入のある無茎鏃。先端部欠損。
20	石鏃	Ⅱ区G	黒曜石	①1.6 ②1.2 ③1.0 ④0.6g ⑤基部を欠くために全体の形状不明。
21	石鏃	Ⅱ区G	黒曜石	①1.3 ②1.1 ③0.4 ④0.3g ⑤基部は直線的であり、無茎鏃。
22	石鏃	Ⅱ区G	チャート	①1.6 ②1.1 ③0.7 ④0.2g ⑤基部に浅い抉入のある無茎鏃。片側の脚欠損。
23	石鏃	Ⅱ区表探	黒曜石	①1.5 ②1.2 ③1.0 ④1.0g ⑤基部は直線的であり無茎鏃。
24	石鏃	Ⅱ区G	チャート	①2.3 ②1.4 ③1.2 ④0.8g ⑤基部に浅い抉入のある無茎鏃。
25	石鏃	Ⅱ区12溝	チャート	①2.2 ②1.7 ③1.4 ④1.2g ⑤基部に浅い抉入のある無茎鏃。片側の脚欠損。
26	石鏃	Ⅱ区G	チャート	①1.5 ②1.7 ③0.9 ④1.4g ⑤基部に深い抉入のある無茎鏃。脚及び先端部欠損。
27	石鏃	Ⅱ区表探	黒色頁岩	①1.9 ②0.7 ③0.8 ④0.4g ⑤基部を欠くが、比較的長脚の石鏃と考えられる。

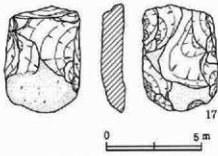
第2節 検出された遺構と遺物



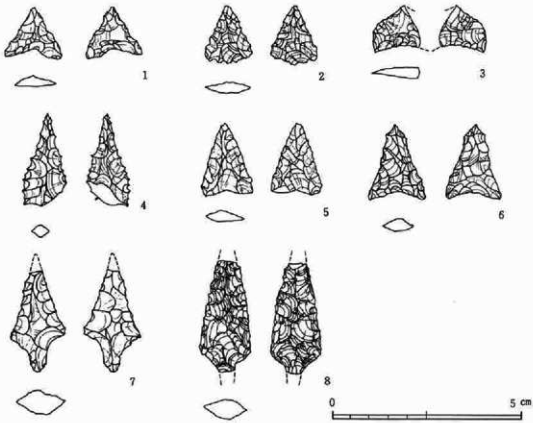
第25図 石器実測図 (8)



第26図 石器実測図 (9)



第27図 石器実測図 (10)



第28図 石器実測図 (11)

第16表 石器観察表(6)

No	器種	出土位置	石質	長さ①(cm)	②幅(cm)	③厚さ(cm)	④重さ(g)	⑤特徴
1	剥片石器	Ⅱ区G	黒色頁岩	①7.5	②0.8	③1.4	④38.9g	⑤剥片の一边に表裏面から細部調整を行っている。
2	打製石斧	Ⅱ区G	灰色安山岩	①8.2	②0.9	③1.4	④56.4g	⑤短冊形を呈する。基部及び刃部の一部を欠損。
3	打製石斧	Ⅱ区G	灰色安山岩	①11.0	②0.2	③1.3	④76.8g	⑤短冊形を呈する。基部及び刃部の一部に縦方向の擦痕有り。
4	打製石斧	Ⅱ区G	灰色安山岩	①10.6	②3.6	③1.6	④86.9g	⑤短冊形を呈する。刃部に縦方向の擦痕有り。
5	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①10.4	②3.6	③1.4	④96.8g	⑤短冊形を呈する。基部に横方向の擦痕有り。
6	剥片石器	Ⅱ区G	黒色頁岩	①7.2	②0.6	③1.7	④39.1g	⑤剥片の両側縁部に細部調整を行っている。
7	打製石斧	Ⅱ区表採	黒色頁岩	①7.8	②0.9	③1.8	④60.3g	⑤短冊形を呈する。両側縁及び刃部の一部欠損。
8	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①6.0	②0.5	③1.5	④44.3g	⑤刃ぶき欠くが、短冊形を呈する考えられる。
9	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①16.0	②7.0	③2.4	④312.8g	⑤分銅形を呈する。刃部の一部に縦方向の擦痕有り。
10	打製石斧	Ⅱ区G	輝安山岩	①7.0	②4.7	③0.7	④85.3g	⑤基部に欠くが、短冊形を呈すると考えられる。刃部に縦方向の擦痕有り。
11	打製石斧	Ⅱ区G	点紋頁岩	①7.0	②3.7	③1.0	④38.7g	⑤基部に欠くが、短冊形を呈するとかんがえられる。
12	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①16.2	②5.5	③1.8	④197.9g	⑤短冊形を呈する。
13	打製石斧	Ⅱ区G	黒色頁岩	①7.9	②6.8	③2.5	④115.2g	⑤両端部を欠くが、分銅形を呈すると考えられる。
14	剥片石器	Ⅱ区G	黒色頁岩	①7.8	②6.0	③2.4	④129.1g	⑤剥片の両側縁に細部調整を行っている。
15	剥片石器	Ⅱ区G	黒色頁岩	①8.9	②6.3	③3.3	④188.5g	⑤剥片の両側縁に細部調整を行っている。
16	石斧	Ⅱ区17住	珪質頁岩	①7.0	②4.3	③1.3	④56.6g	⑤風化が著しいため詳細は不明であるが、石斧と考えられる。
17	打製石斧	Ⅱ区表採	黒色頁岩	①5.7	②4.0	③2.2		

第17表 石器観察表(7)

No	器種	出土位置	石質	長さ①(cm)	②幅(cm)	③厚さ(cm)	④重さ(g)	⑤特徴
1	石鏃	Ⅱ区G	黒曜石	①1.4	②1.5	③0.6	④0.2g	⑤基部に浅い抉入のある無茎鏃。
2	石鏃	Ⅱ区G	黒曜石	①1.5	②1.3	③0.5	④0.3g	⑤基部を欠くために全体の形状不明。
3	石鏃	Ⅱ区24住	黒曜石	①1.3	②1.3	③0.6	④0.3g	⑤片側を欠くが、基部に浅い抉入のある無茎鏃と考えられる。
4	石鏃	Ⅱ区G	チャート	①2.5	②1.1	③1.0	④0.9g	⑤基部を欠くために全体の形状不明。
5	石鏃	Ⅱ区G	黒曜石	①1.9	②1.4	③0.7	④0.6g	⑤基部に浅い抉入のある無茎鏃。
6	石鏃	Ⅱ区G	黒曜石	①2.0	②1.5	③0.8	④0.5g	⑤基部に浅い抉入のある無茎鏃。
7	石鏃	Ⅱ区G	珪質頁岩	①2.7	②1.5	③1.3	④1.0g	⑤有茎鏃。先端部を欠く。
8	石鏃	Ⅱ区G	チャート	①2.9	②1.4	③1.2	④1.8g	⑤有茎鏃。基部及び先端部を欠く。

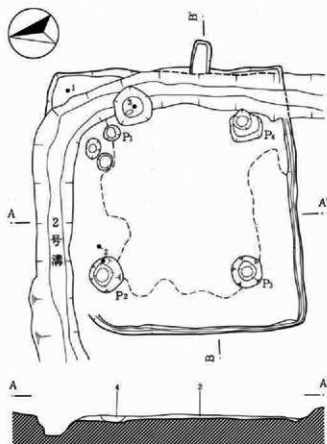
(2) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第29・30図、図版11・14) 位置 694.0Cポイント西側

本住居跡は、2号溝によって北辺及び東辺を削り取られてしまっており、遺存状態が芳しくなかった。平面形は、東辺がやや歪んだ隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、東西方向4.20m・南北方向3.75mを測り、西辺の走向はN6°Eである。

壁は、掘り込みが浅いために、ローム層の壁面を2~5cm確認したのみである。

床面はほぼ平坦で、中央部は強く踏み固められており、南辺及び西辺には幅約15cm・深さ2~5cmの周溝が巡っていた。P₁~P₄は径25~50cm・深さ39~43cmで、支柱穴になると考えられる。柱間は東が2.10m・



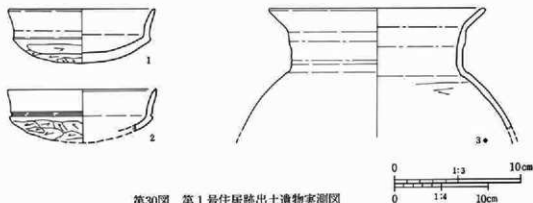
第29図 第1号住居跡実測図



他は2.40mで、平面プランとはほぼ一致した配置となっている。貯蔵穴は北東部に有り、径約60cm・深さ49cmで、截頭円錐状に掘り込まれていた。

竈については、東壁の中央からやや南寄りの位置に構築されていたと考えられるが、詳細は不明である。遺物は少なかったが、本住居の年代については6世紀前半の時期が考えられる。

1. 黒褐色土。ロームブロックを多く含む。
2. 暗褐色土。ロームブロックを含む。
3. 黒褐色土。軽石を含む。
4. 黒褐色土。
5. 暗褐色砂質土。ロームを含む。
6. 暗褐色砂質土。
- a. 暗褐色土。焼土を含む。
- b. 焼土とロームの混土層。
- c. 焼土。



第30図 第1号住居跡出土遺物実測図

第II章 書上下吉祥寺遺跡

第18表 第1号住居跡出土遺物観察表(1)

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	3/4残存。 口 11.5cm 高 4.3cm	北東部。	①砂粒及び褐鉄鉱粒を含む。 ②赤色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り後、肩部丸削り。肩-口縁部横ナデ。底部に黒斑有り。 内面 丁寧なナデ。	
2	杯 (土師器)	1/4残存。 口 11.8cm	北西部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。体部艶ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
3	壺 (土師器)	口縁-体部 小破片。 口 23.0cm	貯蔵穴内。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部艶ナデ。頸部艶ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 頸部艶ナデ。口縁部横ナデ。火はぜによる割傷有り。内外共に煤付着。	

第2号住居跡(第31・32図、図版11・14) 位置 690.0Eグリッド

本住居跡は、5号住居及び5号土坑と重複関係にあるが、先後関係については本住居が最も先行することが確認されている。平面形は、南北方向が若干長いが、均整のとれた隅丸方形である。

規模は、東西方向2.94m・南北方向3.14mを測り、西辺の走向はN10°Wである。床面積は約15.7m²である。壁は5°前後の傾斜をもって掘り込まれており、現存高16~57cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、南東隅を除いて、幅約15cm・深さ4~8cmの周溝が巡っていた。P₁~P₄は径25~30cm・深さ38~45cmで、支柱柱になると考えられる。柱間は1.35~1.60mで、P₂がやや外れるがほぼ平面プランと一致した配置となつている。貯蔵穴は南東隅にあり、径60cm・深さ42cmで截頭円錐状に掘り込まれていた。

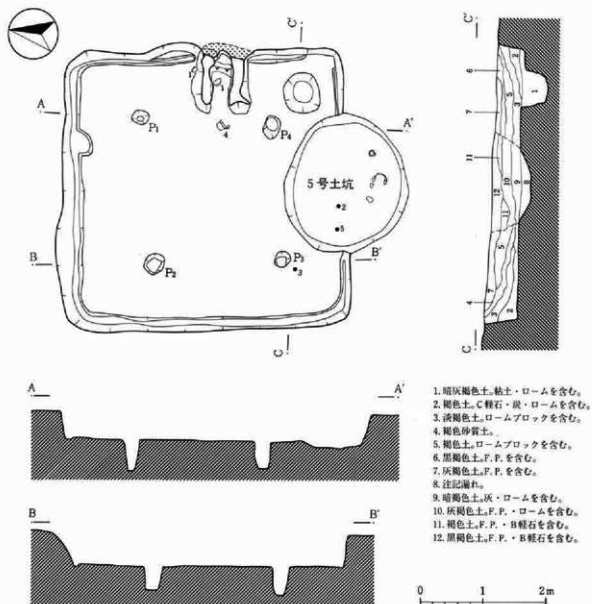
竈は、東辺の中央から25cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋内に有り、焚口幅35cm・奥行80cmを測る。

遺物は少なかったが、本住居の年代については6世紀の前半の時期が考えられる。

第19表 第2号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	3/4残存。 口 13.6cm 高 5.2cm	竈部分2地点 床面上。	①砂粒及び褐鉄鉱粒を含む。 ②赤色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部粗い掘削り後、肩部丁寧な掘削り。 肩-口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。火はぜによる割傷が著しい。	
2	杯 (土師器)	1/3残存。 口 12.3cm	5号土坑内の 床面上。	①ほぼ均質。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 肩部丁寧な掘削り。口縁部横ナデ。口唇部艶ナデか。 内面 右回しの横ナデ。	
3	高台付椀 (須恵器)	3/4残存。 口 14.2cm 高 5.0cm 底 6.2cm	南西隅 床面上。	①砂粒及び細礫を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口縁口成形。底部回転未切り後、高台貼付け。体部に煤付着。 内面 回転によるナデ。	混入品。

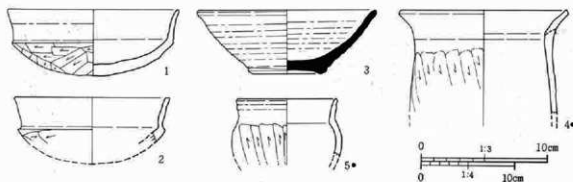
第2節 検出された遺構と遺物



第31図 第2号住居跡実測図

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
4	罌 (土師器)	口縁部 1/3残存。 口 17.5cm	甕手前 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にふい・橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部斜め方向彫削り。口縁部横ナデ。 内面 甕ナデ後、ナデ。	
5	小型罌 (土師器)	1/4残存。 口 10.7cm	5号土坑内。 床面上26cm。	①砂粒を含む。 ②にふい・橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下→上方向の粗い彫削り後、ナデ。口 縁部横ナデ。口縁部に窪付着。 内面 体部甕ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第II章 書上下吉祥寺遺跡



第32図 第2号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡 (第33・34図、図版11・14・15) 位置 690.5Eポイント

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されたが、南東緩傾斜地にあるため南辺の残りが良くなかった。平面形は、西辺がやや張り出した隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.40m・南北方向3.36mを測り、東辺の走向はN9°Eである。床面積は20.9㎡である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高10~40cmのローム層の壁面を確認した。

床面には多少の凹凸が有るが、東辺を除いて、幅約10cm・深さ6~15cmの周溝が巡っていた。P₁~P₄は径25~30cm・深さ47~58cmで支柱穴になると考えられる。柱間は北が1.80m・他は1.70mで、平面プランの対角線上にきれいに配置されている。貯蔵穴は南西隅に有り、径95cm・深さ52cmで載頭円錐状に掘り込まれていた。P₅は径90cm・深さ55cmで、本住居よりも新しいことは確認されているが性格は不明である。

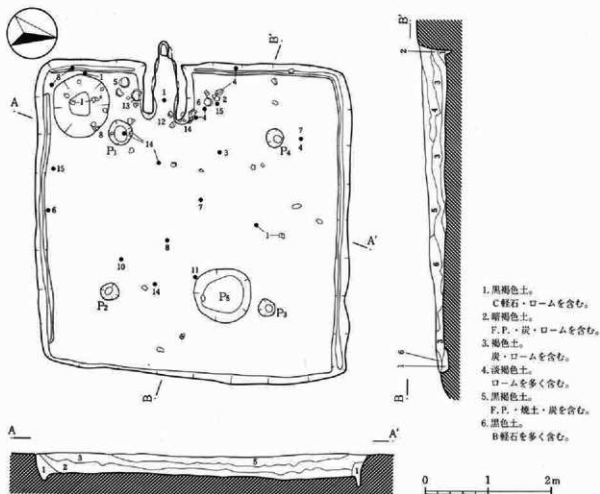
竈は、西辺の中央から50cm程南寄り位置に、粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋内に有り、焚口幅42cm・奥行105cmを測る。

遺物はほぼ全域に散らばって出土した。本住居の年代については6世紀前半の時期が考えられる。

第20表 第3号住居跡出土遺物観察表

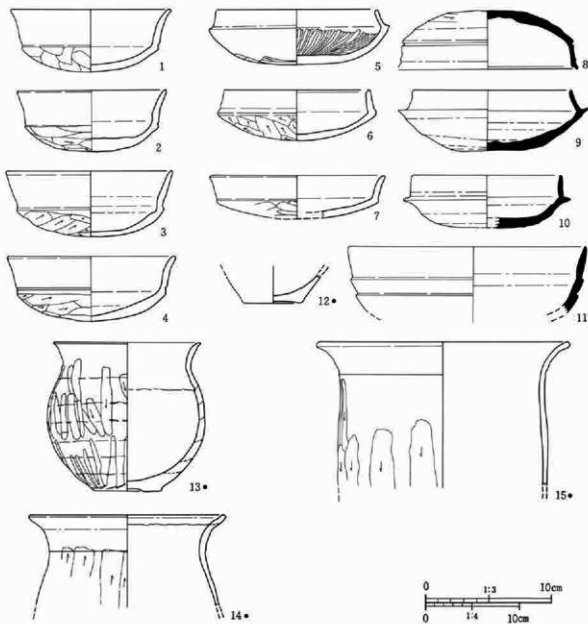
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	ほぼ完形。 口 12.7cm 高 4.9cm	竈及び貯蔵穴 周辺を中心と して6地点に 分散。	①ほぼ均質。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸倒り。口縁部横ナデ。底面に黒斑有 り。 内面 底部覆ナデ後、体~口縁部横ナデ。底面に 火はぜによる割離痕有り。	
2	杯 (土師器)	2/3残存。 竈の南側 口 11.8cm 床面上6cm, 高 4.8cm		①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・やや軟質。	外面 底部丸倒り。口縁部横ナデ。 内面 底部覆ナデ後、体~口縁部横ナデ。	
3	杯 (土師器)	3/4残存。 南東部 口 13.2cm 床面直上。 高 5.2cm		①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸倒り。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ。底面に火はぜによる割離痕有り。	
4	杯 (土師器)	2/3残存。 南東部を中心 として5地点 口 13.3cm 高 5.1cm に分散。		①砂粒を含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部強い丸倒り後、肩部丁寧な丸倒り。口 縁部横ナデ。 内面 底面覆ナデ。体~口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	

第2節 検出された遺構と遺物



第33図 第3号住居跡実測図

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
5	杯 (土師器)	口縁1/2残存 口 12.3cm 高 4.3cm	竈北側 床面直上。	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部直削り後、丁寧に焼磨き。口縁部横ナデ。 内面 ナデ後、放射状焼磨き。	
6	杯 (土師器)	2/5残存。 口 11.5cm 高 4.0cm	竈の南側 床面上5cm。	①ほぼ均質。 ②にぶい褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部直削り。肩～口縁部横ナデ。 内面 横ナデ。内外共に煤付き。	
7	杯 (土師器)	1/3残存。 口 13.9cm	中央部 床面上4cm。	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部直削り。体～口縁部横ナデ後、横ナデ。 内面 磨ナデ後、ナデ。	
8	蓋 (須恵器)	1/2残存。 口 14.2cm 高 4.6cm	貯蔵穴周辺を 中心として4 地点に分散。	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。天井部回転削り。 内面 回転によるナデ。口唇部磨ナデ。	
9	杯 (須恵器)	2/3残存。 口 12.6cm 高 4.9cm	竈周辺。	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転削り。 内面 回転によるナデ。	



第34図 第3号住居跡出土遺物実測図

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
10	杯 (須恵器)	1/6残存。 口 11.8cm	北西部 床面上7cm。	①砂粒を含む。 ②青灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転削り。 内面 回転によるナデ。	
11	高杯？ (須恵器)	口縁部 小破片。 口 18.9cm	P ₃ 付近 床面上8cm。	①砂粒を含む。 ②青灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	
12	壺 (土師器)	底部のみ。 底 6.3cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②明黄褐色。 ③還元炎・良好。	外面 底部削ナデ。体部削り。火はげによる割 離が著しい。 内面 底部削ナデ後、ナデ。体部削ナデ。	二次焼成に よりやや軟 質化。

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
13	甕 (土師器)	1/2残存。 口 15.6cm 高 15.7cm 底 7.0cm	甕の北側に寄りかかるような状態。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部周縁削ナデ。体部ナデ後横い削ナデ。 口縁部横ナデ。粘土接合痕が明瞭に残る。 内面 火はぜによる割離が著しい。体部ナデ。口縁部横ナデ。	
14	甕 (土師器)	体→口縁部 1/3残存。 口 20.8cm	甕の周辺を中心として5地点。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 体部上→下方向の削ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部丁寧ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に薬行着。	二次焼成によりやや軟質化。
15	甕 (土師器)	体→口縁部 1/3残存。 口 27.0cm	甕の南側及び北壁際。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 体部下→上方向の削ナデ後、粗い磨き。 口縁部横ナデ。 内面 火はぜによる割離が著しい。口縁部横ナデ。 内外共に薬行着。	二次焼成によりやや軟質化。

第4号住居跡 (第35・36図、図版11・14・15) 位置 690.5Fポイント北側

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、遺存状態も良好であった。平面形は、均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向7.00m・南北方向7.00mを測り、西辺の走向はN35°Wである。床面積は43.6㎡である。

壁は5°前後の傾斜をもつて掘り込まれており、現存高41～55cmのローム層の壁面を確認した。

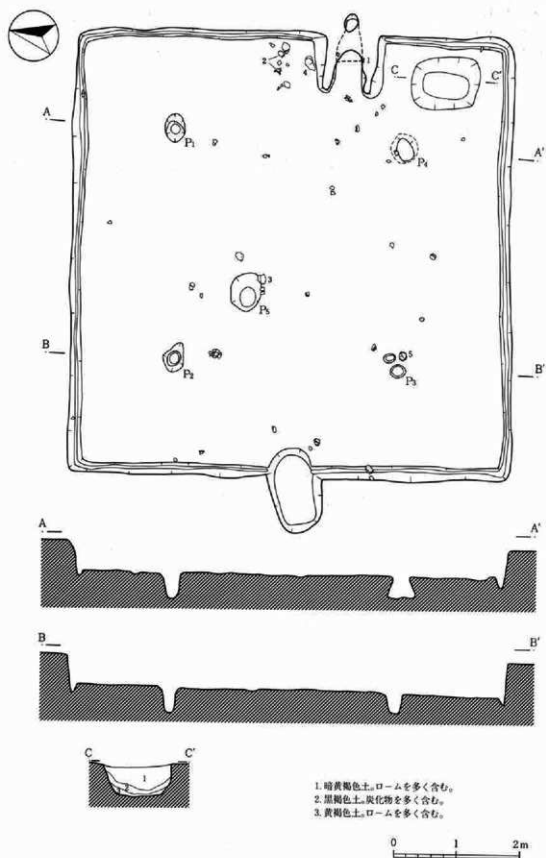
床面はほぼ平坦で、西辺の中央部を除いて、幅約20cm・深さ8～15cmの周溝が巡っていた。P₁～P₄は径25～35cm・深さ29～38cmで、支柱穴になると考えられる。柱間は3.50～3.65mで、平面プランの対角線上にきれいに配置されている。貯蔵穴は南東隅に有り、85×110cmの隅丸方形で、深さは55cmである。P₅は径50cm・深さ17cmを測るが、性格は不明である。西側中央部の掘り込みは、床面よりも10cm程高くなっており、入口の施設と考えられる。

竈は、東辺の中央からやや南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋内に有り、焚口幅50cm・奥行95cmを測る。

遺物はほぼ全域に散らばって出土した。本住居の年代については6世紀前半の時期が考えられる。

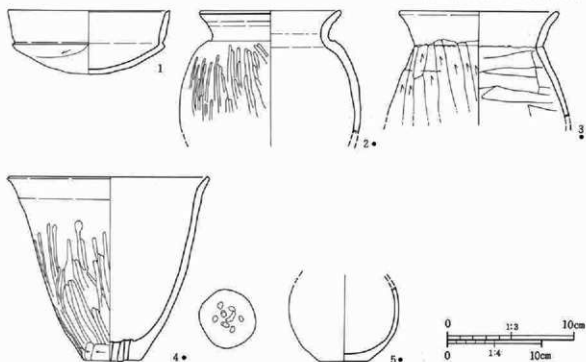
第21表 第4号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/3残存。 口 12.8cm 高 5.0cm	竈中。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部削ナデ。口縁部横ナデ。口唇部削ナデ。 内面 丁寧ナデ。 内外共に火はぜによる割離が著しい。	
2	甕 (土師器)	口縁→体部 1/4残存。 口 14.8cm	東壁際 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 体部削ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部粗い削ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
3	甕 (土師器)	口縁→体部 1/8残存。 口 16.5cm	中央部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 体部削ナデ。 内面 削ナデ後、ナデ。	
4	甕 (土師器)	1/3残存。 口 21.4cm 高 19.3cm 底 6.0cm	東壁際 床面上5.0cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底→体部削ナデ。底部8孔穿孔。体部粗い磨き。口縁部横ナデ。 内面 削ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	



第35図 第4号住居跡実測図

第2節 検出された遺構と遺物



第36図 第4号住居跡出土遺物実測図

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
5	小型甕 (土師器)	下半部のみ 底 5.0cm	南西部 床面直上。	①粘土②色調③焼成 ①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部彫削り。 内外共に火はぜによる割離が著しい。	

第5号住居跡（第37図） 位置 690.0Eグリッド西側

本住居は、2号住居及び6号溝と重複関係にあるが、先後関係については2号住居→本住居→6号溝の順になることが確認されている。平面形は、遺存状態が芳しくなかったために判然としないが、隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、南北方向4.50mで、東西方向については1.05mを確認した。

壁は10°前後の傾斜をもって掘り込まれており、ローム層の壁面を5～16cm確認した。

床面には多少の凹凸が認められ、P₁・P₂は主柱穴になると考えられるが、やや南に偏した配置となっている。

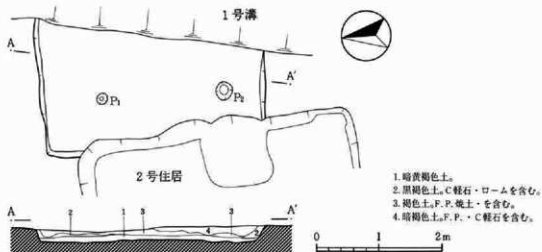
遺物は覆土中より土師器杯の細片が出土したのみである。

第6号住居跡（第38・39図、図版12・16） 位置 690.0Gグリッド

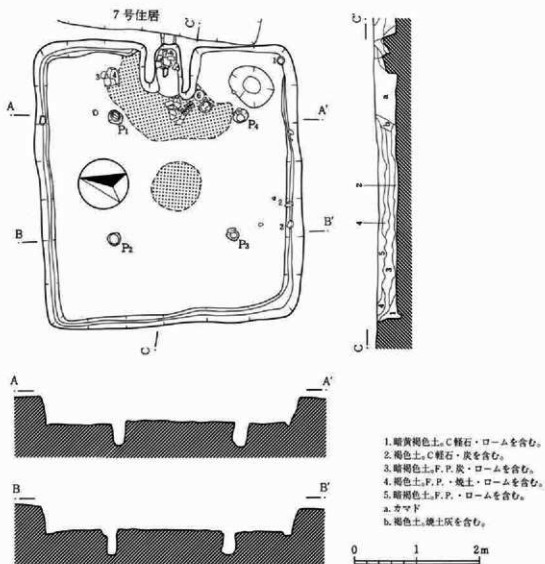
本住居跡は、7号住居跡によって竈の先端部を壊されていたが、遺存状態は良好であった。平面形は東辺がやや歪んだ東西方向に長い隅丸方形を呈する。規模は、東西方向4.60m・南北方向4.25mを測り、西辺の走向はN14°Wである。床面積は約6.9m²である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、ローム層の壁面を32～45cm確認した。床面はほぼ平坦で竈の手前及び中央部が焼けていた。南東部を除いて、幅約10cm・深さ4～9cmの周溝が巡っていた。P₁～P₄は径20～

第II章 書上下吉祥寺遺跡



第37図 第5号住居跡実測図

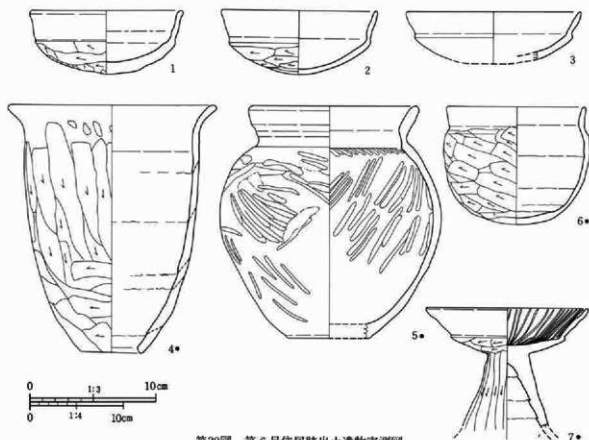


第38図 第6号住居跡実測図

26cm・深さ34～39cmで、主柱穴になると考えられる。柱間は1.90～2.00mで、平面プランよりやや南に寄った配置となっている。貯蔵穴は南東隅にあり、径70cm・深さ43cmで、やや歪んだ鉄頭円錐状に掘り込まれていた。

竈は、東辺のはほぼ中央部に、灰白色粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋内に有り、焚口幅40cm・奥行80cmを測る。

遺物は竈の手前から多く出土しており、本住居の年代については6世紀中頃の時期が考えられる。



第39図 第6号住居跡出土遺物実測図

第22表 第6号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	底・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	ほぼ完形。 口 12.1cm 高 5.0cm	南東隅にやや 斜めの正位状 期。 床面上4cm。	①はほぼ均質。 ②赤色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部幾何形。口縁部横ナデ。底面に薄い黒 斑有り。 内面 底面寛ナデ後、体～口縁部横ナデ。火はぜ による割離痕有り。	
2	杯 (土師器)	ほぼ完形。 口 12.4cm 高 5.0cm	南壁際2地点 床面上5cm。	①砂粒及び褐鉄鉱粒 を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部幾何形。口縁部横ナデ。底面に薄い黒 斑有り。 内面 底面寛ナデ後、体～口縁部横ナデ。火はぜ による割離痕有り。	
3	杯 (土師器)	1/3残存。 口 13.8cm	北東部。	①はほぼ均質。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部幾何形。口縁部横ナデ。 内面 底面は火はぜによる割離が著しい。体～口 縁部横ナデ。内外共に煤付着。	

第II章 書上下吉祥寺遺跡

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
4	瓶 (土師器)	ほぼ完形。 口 22.2cm 高 26.1cm 孔 6.4cm	北京部に横転した状態。 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下半部削り後、粗い漉ナデ。体部上半部方向の跳削り。口縁部横ナデ。 内面 丁寧な漉ナデ。口縁部横ナデ。火はぜによる割離痕有り。	
5	壺 (土師器)	ほぼ完形。 口 18.2cm 高 24.5cm 底 8.8cm	籠手前の床面上に「器台」の様な状態。	①砂粒を含む。 ②橙～にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部粗い跳削き。肩部跳削り。口縁部横ナデ。 内面 体部跳削き。口縁部横ナデ。 内外共に体部下半部は火はぜによる割離が著しい。	二次焼成によりやや軟質化。
6	壺 (土師器)	完形。 口 14.7cm 高 12.4cm	籠手前の床面上に被せられた状態。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部火はぜによる割離が著しい。体部跳削り。口縁部横ナデ。底部に煤付着。 内面 体部ナデ。口縁部横ナデ。火はぜによる割離痕有り。	
7	高杯 (土師器)	基部欠損。 口 17.2cm	5号土壇内の床面上。	①ほぼ均質。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 脚部上→下方向の粗い漉ナデ。杯底部粗い跳削り後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 脚部横方向の粗い漉ナデ。粘土接合面が明顯に残る。杯部ナデ後、放射状跳削き。	

第7号住居跡 (第40図、図版12) 位置 690.0Gポイント北側

本住居跡は、6号及び10号住居を壊して作られていた。平面形は、北辺がやや歪んだ隅丸方形を呈する。

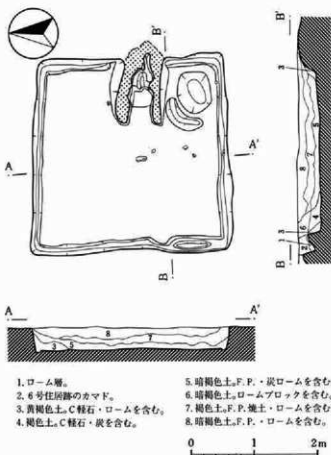
規模は、東西方向3.15m・南北方向3.00～3.25mを測り、西辺の走向はN4°Wである。床面積は約6.9㎡である。

壁は5°前後の傾斜をもって掘り込まれており、ローム層の壁面を30～40cm確認した。

床面はほぼ平坦で、壁下には幅約10cm・深さ2～5cmの周溝が巡っていた。貯蔵穴は南東隅に有り、径約60cm・深さ39cmでやや歪んだ截頭円錐状に掘り込まれていた。また、西側には長さ70cm・高さ4cmの粘土の高まりが認められた。

竈は、東辺の中央から20cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋内に有り、焚口幅38cm・奥行70cmを測る。

遺物は覆土中より土師器・須恵器の細片が出土したのみである。本住居の年代については、出土遺物が少ないために判然としないが、壁の走向から推して3号住居とさほど変わらない時期と考えられる。



第40図 第7号住居跡実測図

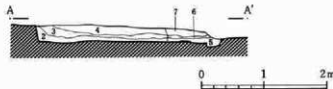
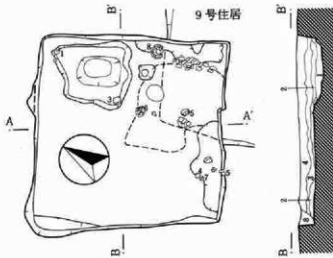
第2節 検出された遺構と遺物

第8号住居跡 (第41・42図、図版12・16・17) 位置 689.5Gグリッド北東部

本住居は、9号住居跡によって南東隅を壊されてしまっていた。さらに農業用水路工事の影響で西側が少し削られていた。平面形は西辺がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.90~3.20m・南北方向3.10mを測り、東辺の走向はN30°Wである。床面積は8.5㎡である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、ルーム層の壁面を16~21cm確認した。

床面はほぼ平坦で、南東部が強く踏み固められていた。P₁は130cm×110cm・深さ51cmで二段に掘り込まれており、本住居よりも新しいことは確認できたが性格は不明である。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

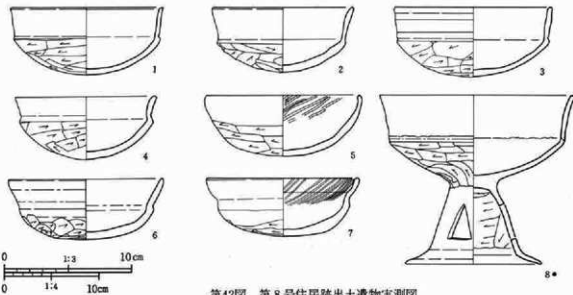


第41図 第8号住居跡実測図

竈は、土師器高杯(8)が東壁際に伏せられていたことから推して、南東部分に構築されていたと考えられるが、明確にし得なかった。

遺物は少なかったが、比較的完形に近いものが残っていた。本住居の年代については6世紀初め頃の時期が考えられる。

1. 黒褐色土・焼土・炭・ロームを含む。
2. 黄褐色土、C軽石・ロームを含む。
3. 褐色土。
4. 暗褐色土、F.P.・ロームを含む。
5. 黒褐色土・焼土・ロームを含む。
6. 暗褐色土、ロームを含む。
7. 褐色土、F.P.を含む。
8. 草木による擾乱。



第42図 第8号住居跡出土遺物実測図

第Ⅱ章 書上下吉祥寺遺跡

第23表 第8号住居跡出土遺物観察表

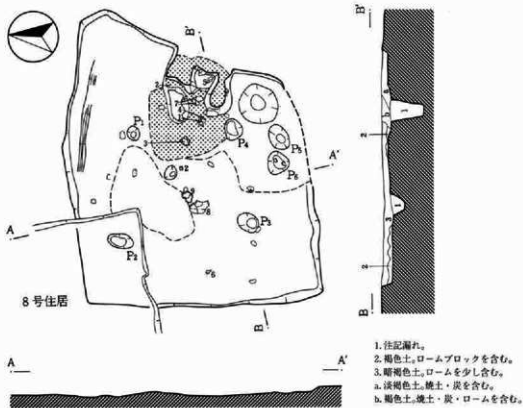
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	ほぼ完形。 口 12.1cm 高 5.3cm	P ₁ の北東隅に 正位の状態。	①砂粒を含む。 ②赤色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部寛削り。口縁部横ナデ。底面に黒斑有り。 内面 底部火はぜによる割離が著しい。口縁部横ナデ。口唇部横ナデか。	
2	杯 (土師器)	完形。 口 11.2cm 高 5.1cm	北壁際床面直 上に正位の状 態。	①砂粒を多く含む。 ②橙、明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部寛削り。口縁部横ナデ。底面に小さな黒斑有り。 内面 底部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
3	杯 (土師器)	ほぼ完形。 口 12.4cm 高 5.5cm	P ₁ の南西隅に 正位の状態。	①砂粒及び陶鉄鉱粒 を含む。 ②暗赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部寛削り。口縁部横ナデ。底面に黒斑有り。 内面 底部火はぜによる割離が著しい。口縁部横ナデ。	
4	杯 (土師器)	1/2残存。 口 11.2cm 高 5.0cm	南西部 床面上10cm。	①ほぼ均質。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部寛削り。口縁部横ナデ。 内面 底部横ナデ後、ナデ。体→口縁部横ナデ。	
5	杯 (土師器)	3/4残存。 口 12.2cm 高 4.8cm	中央部 床面上14cm。	①ほぼ均質。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部粗い寛削り。周縁部削り後、ナデ。 口縁部横ナデ。底面に黒斑有り。 内面 ナデ後、口縁部寛帯き。	
6	杯 (土師器)	ほぼ完形。 口 12.3cm 高 4.7cm	中央部床面直 上に正位の状 態。	①砂粒及び陶鉄鉱粒 を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部寛削り。口縁部横ナデ。底面に黒斑有り。 内面 底→口縁部横ナデ。	
7	杯 (土師器)	3/4残存。 口 12.1cm 高 4.5cm	南西部。	①砂粒及び陶鉄鉱粒 を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部寛削り。口縁部横ナデ。 内面 底→口縁部横ナデ後、口縁部寛帯き。 内外共に火はぜによる割離あり。	6よりも丁寧な作り。
8	高杯 (土師器)	3/4残存。 口 20.6cm 高 17.8cm 底 14.3cm	東壁際床面上 に敷せられた 状態。	①砂粒を含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 頸部横ナデ。胴部ナデ。杯底部寛削り。口縁部横ナデ。口唇部及び接部横ナデ。接合部強い横ナデ。 内面 頸部横ナデ。胴部横方向の削り。杯底部ナデ。口縁部横ナデ。火はぜによる割離痕有り。	脚の三方に三角透し孔有り。

第9号住居跡(第43・44図、図版12・17) 位置 689.5Gグリッド

本住居跡は、前述の通り8号住居を壊して作られていたが、調査手順の関係から、北西部の一部を残し得なかった。平面形は、東辺が著しく歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向3.60~4.20m・南北方向3.40~3.90mを測り、西辺の走向はN6°Eである。床面積は約13.3㎡である。

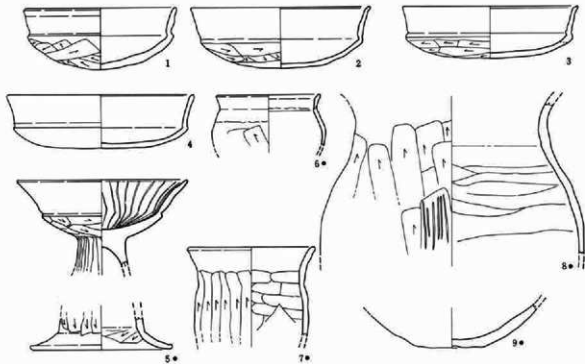
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、ローム層の壁面を2~14cm確認した。

床面には多少の凹凸が認められ、中央部及び南東隅が強く踏み固められている。P₁~P₄は径25~30cm・深さ12~39cmで、不規則な配置であるが支柱穴になると考えられる。貯蔵穴は南東隅に有り、径65cm・深さ



第43図 第9号住居跡実測図

0 1 2m



第44図 第9号住居跡出土遺物実測図

0 1:3 10cm
 0 1:4 10cm

第二章 書上下吉祥寺遺跡

18cmで、穀頭円錐状に掘り込まれていた。北辺の一部には、幅10cm・深さ5cmの周溝が認められた。

竈は、東辺のはほぼ中央部に、粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋内に有り、焚口幅40cm・奥行70cmを測る。

遺物はほぼ全域に散らばって出土した。本住居の年代については6世紀後半の時期が考えられる。

第24表 第9号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	3/4残存。 口 11.9cm 高 4.9cm	竈手前の床面直上に正位の状態。4と重なって出土。	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施削り。口縁部横ナデ。 内面 底部施ナデ後、ナデ。体→口縁部横ナデ。 内外共に火はぜによる割離痕有り。 口唇部の作りがやや雑。	二次焼成によりやや軟質化。
2	杯 (土師器)	3/4残存。 口 14.3cm 高 4.8cm	竈付近に散在。	①ほぼ均質。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施削り。口縁部横ナデ。底面に黒痕有り。 内面 底部施ナデ後、ナデ。体→口縁部横ナデ。 口唇部施ナデ。内外共に火はぜによる割離痕有り。	
3	杯 (土師器)	3/4残存。 口 13.8cm 高 4.1cm	竈手前の床面直上に正位の状態。	①ほぼ均質。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施削り。口縁部横ナデ。底面に黒痕有り。 内面 底部火はぜによる割離が著しい。口縁部横ナデ。口唇部施ナデ。	二段口縁状を呈する。
4	杯 (土師器)	1/2残存。 口 14.7cm 高 4.2cm	竈手前の床面直上に正位の状態。1と重なって出土。	①ほぼ均質。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施削り。口縁部横ナデ。 内面 底部火はぜによる割離が著しい。口縁部横ナデ。口唇部施ナデ。内外共に僅付着。	
5	高杯 (土師器)	3/4残存。 口 18.1cm	竈内。	①ほぼ均質。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 頸部横ナデ。脚部施削り。杯底部施削り。 口縁部横ナデ。接合部施ナデ。 内面 頸部横ナデ。脚部施削り。杯部ナデ後、粗い放射状施磨き。	
6	小型甕 (土師器)	口縁部 1/4残存。 口 11.0cm	西側床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部施削り後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部ナデ。口縁部横ナデ。火はぜによる割離が著しい。内外共に僅付着。	二次焼成によりやや軟質化。
7	甕 (土師器)	体→口縁部 1/4残存。 口 13.5cm	竈内。	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下→上方向の粗い施削り。口縁部粗い施ナデ後、横ナデ。 内面 体部粗い施ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 火はぜによる割離が著しい。内外共に僅付着。	
8	甕 ? (土師器)	体部1/3残存	中央部床面直上。	①砂粒及び細礫を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下→上方向の粗い施削り。頸部横ナデ。 内面 体部横方向のナデ。頸部施ナデ後、横ナデ。 内外共に僅付着。	二次焼成によりやや軟質化。
9	甕 ? (土師器)	底部残存。 底 5.6cm	中央部床面直上。	①砂粒及び細礫を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施ナデ。体部に僅付着。 内面 ナデ。 二次焼成によりやや軟質化。	8の底部と考えられる。

第13号住居跡 (第45・46図、図版13・23) 位置 692.0Eグリッド

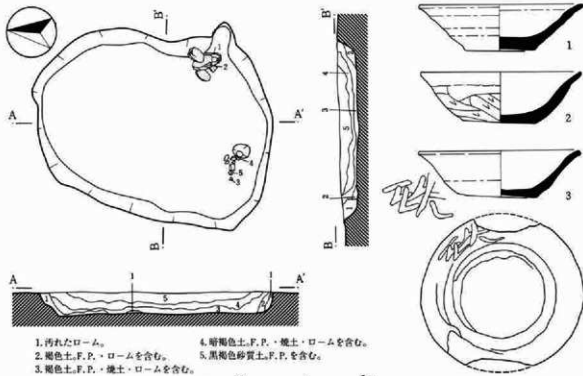
本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。なお、遺構確認の段階では、平面形が崩れていたために「1号土坑」と命名されていた。その平面形は、東辺に竈を持ち、南北方向が長い不整長円形を呈する。

規模は、東西方向2.70~2.90m・南北方向4.10mを測り、比較的直線的な西辺の走向はN12°Eである。床面積は約11.5㎡である。

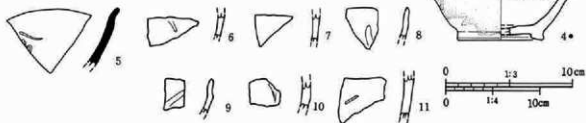
壁は10°前後の傾斜を以て掘り込まれており、ローム層の壁面を23~37cm確認したが、あまりしっかりとした壁面ではなかった。

床面には多少の凹凸が有り、中央部が若干低くなっていた。床面自体もあまり踏み固められておらず、軟弱であった。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は東辺の中央から40cm程南寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋外に有り、焚口幅45cm・奥行55cmを測る。使用されていた石で、原位置をとどめるものが全く無かったことから推



第45図 第13号住居跡実測図



第46図 第13号住居跡出土遺物実測図

第Ⅱ章 書上下吉祥寺遺跡

して、住居の廃棄に伴って意図的に破壊したものと考えられる。

遺物は、竈の手前及び南辺部に集中して出土しており、墨書土器の出土が多い。本住居の年代については、9世紀後半の時期が考えられる。

第25表 第13号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	3/4残存。 口 13.6cm 高 3.5cm 底 5.7cm	竈中。	①砂粒を含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	
2	杯 (須恵器)	2/3残存。 口 12.7cm 高 4.0cm 底 5.0cm	竈中。	①砂粒を含む。 ②浅黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 底部一体部彫削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	
3	杯 (須恵器)	3/4残存。 口 12.8cm 高 3.6cm 底 5.6cm	南西部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「延」。
4	飯 (灰胎陶器)	1/4残存。 底 9.3cm	南西部 床面直上。	①均質な胎土。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転彫削り後、高台貼付け。潰け掛けによる緑黄色釉。 内面 回転によるナデ。	
5	杯 (須恵器)	小破片。	南西部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②浅黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。 内外共に煤付着。	体部外面に墨書有り。 釈文「金」か。
6	杯? (須恵器)	小破片。	竈土中。	①砂粒を含む。 ②浅黄色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文不明。
7	杯? (須恵器)	小破片。	竈土中。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。
8	杯? (須恵器)	小破片。	竈土中。	①砂粒を含む。 ②浅黄色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部彫削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文不明。
9	杯? (須恵器)	小破片。	竈土中。	①砂粒を含む。 ②浅黄色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部彫削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文不明。
10	杯 (須恵器)	小破片。	竈土中。	①砂粒を含む。 ②浅黄色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部彫削り。 内面 回転によるナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文不明。
11	碗? (須恵器)	小破片。	竈土中。	①砂粒を含む。 ②浅黄色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部彫削り。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。

(3) 掘立柱建物跡

本遺跡からは、6棟の掘立柱建物跡が検出された。明確な出土遺物が無かったために、所属時期を特定できないが、形態・規模等より推して、中近世の建物跡と考えられる。各遺構の概要は以下の通りである。

第1号掘立柱建物跡(第47図・図版31) 位置 693.0Eポイント西側

本建物跡は、2・3号溝と重複しているが、先後関係については明確にし得なかった。平面形は、2間×3間で、東西方向に棟を持つ総柱の建物跡である。

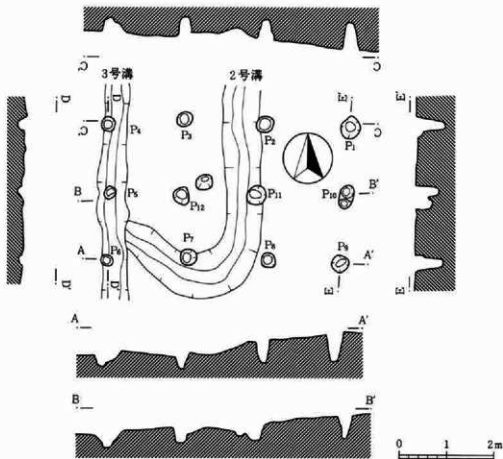
規模は、棟方向5.00~5.20m・梁方向2.90mを測り、棟の走向は $N3^{\circ}E$ である。

柱穴は、径30~40cm・深さ14~30cmの円形の掘り方で、概ね円筒状に掘られていた。柱痕は確認されなかったが、底部の状況から推して、径10cm前後の柱が立てられていたと思われる。

柱間寸法は、5尺・6尺で設計されたものと思われる。

第2号掘立柱建物跡(第48図・図版31) 位置 692.0Fポイント南側

本建物跡は、4号掘立柱建物跡と接するように検出されたが、柱穴の切り合い関係が無かったために、先後関係は不明である。平面形は、2間×2間で、北辺がやや重むが、南北方向に棟を持つ総柱の建物跡である。



第47図 第1号掘立柱建物跡実測図

第II章 書上下吉祥寺遺跡

規模は、棟方向3.10～3.50m・梁方向3.00～3.20mを測り、棟の走向はN2°Wである。

柱穴は、径30～40cm・深さ40cm前後の不整円形の掘り方で、概ね円筒状に掘られていた。柱痕は確認されなかったが、底部の状況から推して、径15cm前後の柱が立てられていたと思われる。

柱間寸法は、5尺等間隔で設計されたものと思われる。

第3号掘立柱建物跡

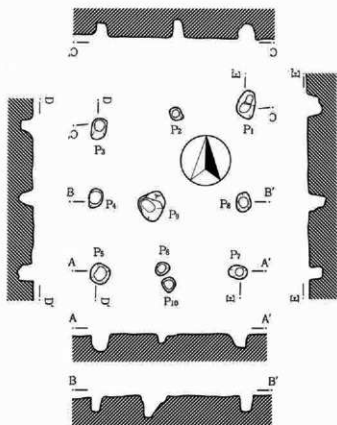
(第49図・図版32)

位置691.5Eグリッド

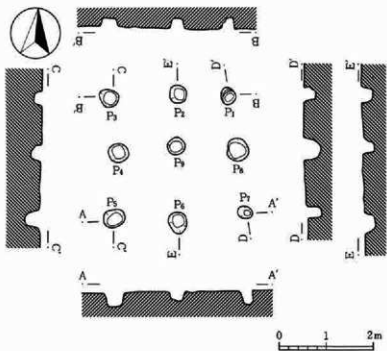
本建物跡は、5棟まとまって検出された内の一番東側に位置する。平面形は、2間×2間で、東辺がやや歪むが、東西方向に棟を持つ総柱の建物跡である。規模は、棟方向2.60～2.90m・梁方向2.50～2.60mを測り、棟の走向はN14°Wである。

柱穴は、径30～45cm・深さ20～35cmの円形の掘り方で、概ね円筒状に掘られていた。柱痕は確認されなかったが、底部の状況から推して、径10cm前後の柱が立てられていたと思われる。

柱間寸法は、桁方向が5尺・梁方向が4尺で設計されたものと思われる。



第48図 第2号掘立柱建物跡実測図



第49図 第3号掘立柱建物跡実測図

第4号掘立柱建物跡（第50図・図版33）

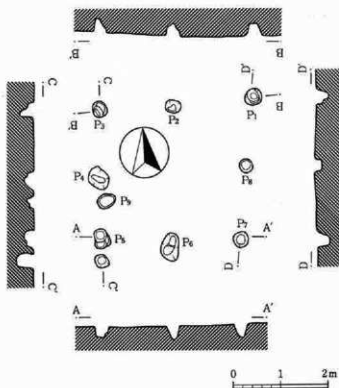
位置 692.0Fポイント東側

本建物跡は、5棟まとめて検出された内の一番北側に位置する。平面形は、2間×2間で、北辺がやや歪むが、南北方向に棟を持つ建物跡である。

規模は、棟方向3.00～3.30m・梁方向2.60～3.00mを測り、棟の走向はN82°Wである。

柱穴は、径25～40cm・深さ28cm前後の円形の掘り方で、概ね円筒状に掘られていたが、一部の柱穴は二段に掘られていた。柱痕は確認されなかったが、底部の状況から推して、径10cm前後の柱が立てられていたと思われる。

柱間寸法は、桁方向が5尺・梁方向が4尺で設計されたものと思われる。



第50図 第4号掘立柱建物跡実測図

第5号掘立柱建物跡（第51図・図版32）

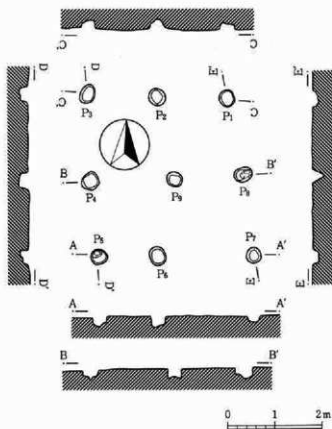
位置 692.0Gポイント東側

本建物跡は、5棟まとめて検出された内の一番西側に位置する。平面形は、2間×2間で、東西方向に歪んだ不整形の総柱建物跡である。棟方向は、南北が若干長いので、南北棟になるかも知れない。

規模は、東西方向3.00～3.30m・南北方向3.40mを測り、平行関係にある南北辺の走向はN88°Eである。柱穴は、径30～

柱穴は、径30～40cm・深さ15～28cmの不整形の掘り方で、概ね円筒状に掘られていた。柱痕は確認されなかったが、底部の状況から推して、径10cm前後の柱が立てられていたと思われる。

柱間寸法は、ばらつきが著しい。



第51図 第5号掘立柱建物跡実測図

第II章 書上下吉祥寺遺跡

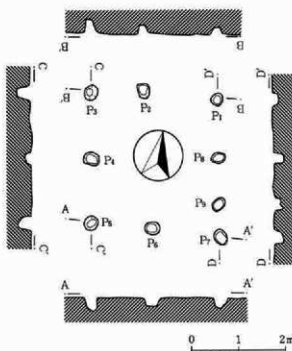
第6号掘立柱建物跡 (第52図・図版33) 位置 691.5Fグリッド

本建物跡は、5棟まとめて検出された内の一番南側に位置する。平面形は、2間×3間で、東辺が3間となっている。あるいは、出入口の施設がここに有ったのかも知れない。

規模は、各辺共に2.80m前後であるが、東側がやや長めになっている。西辺の走向はN8°Wである。

柱穴は、径30cm前後の不整形形の掘り方で、概ね円筒状に掘られていた。柱痕は確認されなかったが、底部の状況から推して、径10cm前後の柱が立てられていたと思われる。

柱間寸法は、ばらつきが著しい。



第52図 第6号掘立柱建物跡実測図

(4) 溝跡 (第53・54図、図版13)

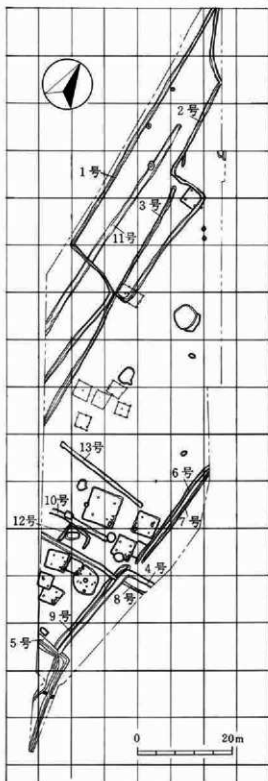
本遺跡の調査において、13条の溝跡が検出されたが、その概要は以下の通りである。必ずしも十分な資料が得られなかったために、重複遺構との先後関係及び所属時期や性格が明確になったものばかりではないが、本遺跡地の近世の様相の一端を窺うことができた。なお、伊勢崎市教育委員会の調査結果と合わせてみると、これらの溝の内、3号溝と8号溝とは連続する同一の溝であり、近世に属するものであることが判明した。(第4図参照) また、近世遺物の分析により、2号溝及び11号溝、6号溝及び7号溝は、道路の側溝的な役割を果たしていたものと考えられるに至った。更に、1号溝及び13号溝は、屋敷地の区画の為に設けられたものであることも明らかとなった。

1号溝

調査区の北西部、692.0Gグリッドから695.5Bグリッドにかけて、総延長94.5mを検出した。上部部の幅40～120cm、深さは16～79cmで、693.5G及び693.0Fポイント付近では直角に折れ曲がるが、南北の両端の走向は、ほぼ磁北と一致している。南北両端の底面レベル差は、北が約57cm高くなっており、底部に若干の砂粒が認められたが、通水していたか否かは明確にし得なかった。近世の屋敷地の区画のための溝である可能性が高いと考えられる。

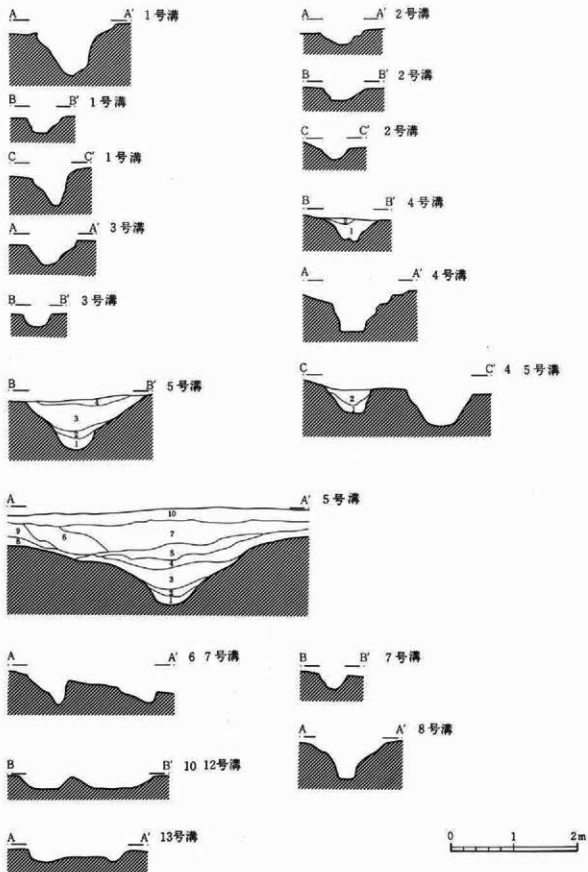
2号溝

調査区の北東部、692.5Eグリッドから695.5Bグリッドにかけて、総延長75.4mを検出した。上部部の幅50～115cm、深さは4～32cmで、694.0Cグリッドで2回、更に693.0Eポイント付近では直角に折れ曲がり、3号溝のところで途切れてしまうが、3号溝との先後関係は不明である。南北方向の走向は、 $N 3^{\circ}W$ である。南北両端の底面レベル差は、北が約13cm高くなっているが、通水の有無は不明。北端部は、あるいは別の溝であった可能性も考えられるが、埋没土層の観察からは明確にし得なかった。近世の屋敷地の区画のための溝である可能性が高いと考えられる。



第53図 溝跡位置図

第二章 香上下吉祥寺道跡



第54图 溝跡断面图

3号溝

691.5Gグリッドから694.0Dグリッドにかけて、総延長57.6mを検出した。上端部の幅45cm～130cm・深さ12～31cmで、走向はN4°Wである。南北両端の底面レベル差は、北が約48cm高くなっているが、通水の有無は不明。

4号溝

調査区の南東部、688.5Hグリッドから690.0Eグリッドにかけて、総延長40.0mを検出した。上端部の幅30～150cm・深さ2～68cmで、690.0Eポイント付近ではほぼ直角に折れ曲がるが、南北方向の走向はN10°Eである。南北両端の底面レベル差は、北が21cm高くなっているが、通水の有無は不明。一部に、やや崩れた箱葉研掘りの様相が認められる。

5号溝

調査区の南端部、688.0Hグリッドから689.0Hグリッドにかけて、総延長27.6mを検出した。上端部の幅55～270cm・深さ29～103cmで、689.0Gポイント付近で折れ曲がるが、南北方向の走向はN12°Wである。南北両端の底面レベル差は、北が約20cm程高くなっているが、通水の有無は不明。

6号溝

調査区の南東部、690.0Dグリッドから691.0Bグリッドにかけて、総延長25.6mを検出した。上端部の幅50～85cm・深さ16～40cmで、走向はN5°Eである。南北両端の底面レベル差は、北が約24cm程高くなっているが、通水の有無は不明。7号溝と共に、道路の側溝的なものと考えられる。

7号溝

6号溝の東側に、50cm前後の間隔を隔てて並走している状況で検出された。総延長23.5mを確認したが、上端部の幅35～85cm・深さ2～29cmで、走向はN5°Eである。南北両端の底面レベル差は、北が約20cm程高くなっているが、通水の有無は不明。6号溝底面とのレベル差は、20cm前後であり、本溝の方が微高地の縁辺部にある分だけ深くなっている。

8号溝

調査区の南側で、約25mを検出した。3号溝と同一の溝であることが判明している。上端部の幅45～130cm・深さ6～62cmで、走向は概ね東西方向である。東西両端部の底面レベル差は、東が約52cm程深くなっている。一部に、やや崩れた箱葉研掘りの様相が認められる。1号溝と共に、近世の屋敷地の区画のために設けられたと思われる。

9号溝

調査区の南東部で、4号溝の東側縁部に沿うように並走している状況で検出された。5号溝及び8号溝と重複関係にあるが、先後関係については明らかにし得なかった。総延長23.3mを確認したが、上端部の幅45～95cm・深さ43cm前後で、走向はN7°Eである。南北両端の底面レベル差は、北が約40cm程高くなっているが、通水の有無不明。

第Ⅱ章 書上下吉祥寺遺跡

10号溝

本溝は、12号溝及び2・3号土坑と重複しており、いづれにも後出する。690.0Eグリッドから690.5Gグリッドにかけて、総延長13.5mを検出した。上部部の幅95～145cm・深さ3～13cmで、走向はN88°Eである。東西両端の底面レベル差は殆ど認められない。性格不明。

11号溝

調査区の北西部、692.5Gグリッドから694.5Cグリッドにかけて、総延長51.3mを検出した。上部部の幅95～150cm・深さ30cm前後で、走向はN2°Eである。南北両端の底面レベル差は、北が約50cm程高くなっているが、通水の有無不明。

12号溝

10号溝の南側、690.0Fグリッドから690.5Gグリッドにかけて、総延長11.6mを検出した。上部部の幅45～80cm・深さ20cm前後で、南側が開く「コの字」状に掘られている。底面のレベル差は、10cm前後の凹凸が有る他は、殆ど認められない。性格不明。

13号溝

調査区の中央やや南寄りの、690.5Dグリッドから691.0Gグリッドにかけて、総延長21.6mを検出した。上部部の幅95～120cm・深さ18cm前後で、走向は、N85°Wである。東西両端の底面レベル差は、10cm前後の凹凸が有る他は、殆ど認められない。

※1 「原之城遺跡・下吉祥寺遺跡」 伊勢崎市教育委員会 1982年

(5) 土坑 (第55図)

本遺跡の調査において、8基の土坑が検出されたが、その概要は以下の通りである。いづれの土坑も、十分な資料が得られなかったために、性格を明らかにすることは出来なかった。なお、「1号土坑」については、調査の進捗に伴って、平安時代の竪穴住居跡であることが判明したので、除外した。

2号土坑 位置 690.0Eグリッド北西部

南西の一部で10号溝と重複関係にあるが、本土坑が先行する。平面形は、比較的整った円形で、径約180cm・深さ55cmを測る。遺物は、土師器・須恵器の細片が出土したが、時期を特定できるような資料は得られなかった。

3号土坑 位置 690.5Gポイント北側

本土坑の南半部は10号溝によって削り取られてしまっており、遺存状態は芳しくなかった。平面形は北東部がやや歪んだ、東西方向に長い隅丸長方形を呈する。規模は、120cm×190cm・深さ65cmを測り、長辺の走向はN78°Eである。

4号土坑 位置 690.5Gポイント南側

本土坑は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は不整長円形で、底部は北から南に向かって緩やかに傾斜している。規模は、長径300cm・短径170cmで、最も深い部分で深さ35cmを測る。

5号土坑 位置 690.0Eグリッド中央部

本土坑は2号住居跡と重複しており、本土坑のほうが後出することが確認されているが、調査手順の関係から北側の上半部については残し得なかった。平面形は比較的均整のとれた円形で、径220cm・深さ62cmを測る。遺物は、古墳時代の土師器杯が出土したが、2号住居跡と同一時期のものであった。

6号土坑 位置 689.0Gグリッド北西部

本土坑は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、北西隅がやや歪んだ、東西方向に長い隅丸長方形を呈する。規模は、105cm×170cm・深さ20cmを測り、長辺の走向はN101°Eである。

7号土坑 位置 690.5Fグリッド北西部

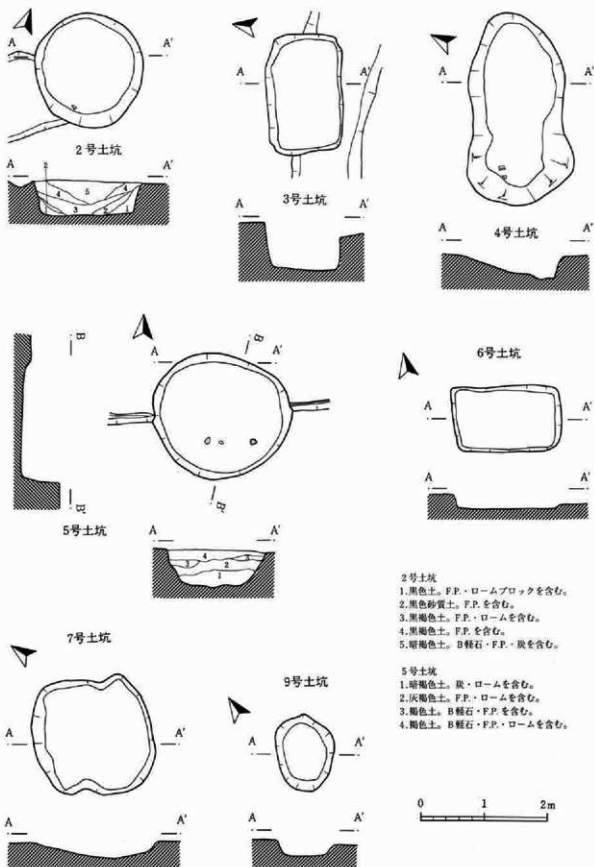
本土坑は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は不整隅丸方形で、底部は北から南に向かって緩やかに傾斜している。規模は、180cm×200cmで、最も深い部分で深さ30cmを測る。

8号土坑 位置 692.0Cグリッド

地層及び出土遺物から推して、縄文時代の遺構であることが確認されたので、別項で扱った。

9号土坑 位置 691.0Cグリッド中央部

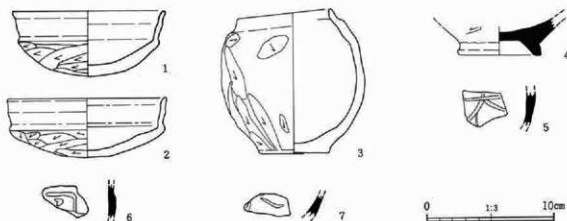
本土坑は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は不整長円形で、長径120cm・短径90cm・深さ23cmを測る。



第55図 土坑実測図

(6) その他の出土遺物

本遺跡の調査によって出土した遺物の内、グリッド出土遺物と砥石及び所謂「編物石」を一括して扱う。純粋にグリッドから出土した遺物と遺構に伴う遺物とがあるが、個々の遺物を比較するためにまとめて、図を作成した。



第56図 グリッド出土遺物実測図

第26表 グリッド出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/2残存。 口 12.1cm 高 5.1cm	11号溝。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。口縁部横ナデ。	
2	杯 (土師器)	1/3残存。 口 12.7cm 高 4.7cm	689.5G No.11	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。口縁部横ナデ。底部に黒塗有り。 内面 底部ナデ。口縁部横ナデ。	
3	小型壺 (土師器)	ほぼ完形。 口 7.5cm 高 11.1cm 底 5.7cm	689.5G No.11	①砂粒を多く含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底一体部施削り。口縁部横ナデ。体部に黒塗有り。 内面 粗い地ナデ後、ナデ。	
4	高台付椀 (須恵器)	底部のみ。 底 6.4cm	690.5D No.91	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炭・硬質。	外面 右回転口クロ成形。体部施削り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
5	杯 (須恵器)	小破片。	692.0E No.19	①砂粒を含む。 ②浅黄色。 ③酸化炭・硬質。	外面 右回転口クロ成形。 内面 回転によるナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文「大」か。
6	杯? (須恵器)	小破片。	690.5B No.91	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炭・硬質。	外面 体部施削り。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。
7	杯? (須恵器)	小破片。	692.0D No.58	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炭・硬質。	外面 体部施削り。 内面 回転によるナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文不明。

砥石 (第57図)

合計5点が出土した。いずれも、甘楽郡南牧村大字砥沢産と考えられる流紋岩製である。当地産出の砥石は、江戸時代には幕府御用砥として知られており、数々の特権と保護の下に採掘が行われた。砥山発見の由来は明らかでないが、1623(元和9)年から本格的に採掘が行われた。本遺跡出土資料の所属時期は明らかでないが、各々の概要は以下の通りである。

1は、端部を欠いており、表面の一部が剥がれている。広い二面を使用したと思われる、滑沢な状況が認められる。5号溝の覆土中出土。現存長6.4cm・幅3.5cm・厚さ1.7cm・重さ55.0gである。

2は、端面の一方に径1.0cm・深さ1.1cmの穴が穿たれており、端部が欠けているが、中央に近付くにつれて研ぎ減りが認められる。広い二面を使用したと思われる、滑沢な状況が認められる。692.5Gグリッド出土。現存長4.8cm・幅3.5cm・厚さ1.8cm・重さ52.0gである。

3は、ほぼ角柱状を呈する。一方の端部が欠け、表面の一部が剥がれている。四面を使用したと思われる、滑沢な状況が認められる。694.5Gグリッド出土。現存長3.3cm・幅2.8cm・厚さ2.0cm・重さ38.0gである。

4は、端部を欠くが比較的幅広で長い砥石と考えられる。中央部に広い近付くにつれて、研ぎ減りが認められ、長期に亘る使用を思わせる。二面を使用したと思われる、滑沢な状況が認められる。692.0Gグリッド出土。現存長6.7cm・幅5.5cm・厚さ3.4cm・重さ107.9gである。



第57図 石製品実測図 (1)

編物石 (第58・59図)

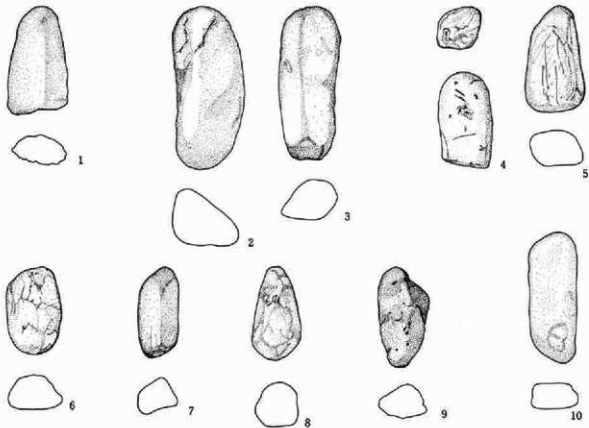
本遺跡からは、1号住居跡から1個、3号住居跡から2個、8号住居跡から18個、9号住居跡から6個、グリッドから1個、合計28個の所謂「編物石」が出土した。複数で出土した資料の内、3号住居跡出土の資料は、床面から約30cm程浮いた状態で出土している。(ちなみに、3号住居跡の現存壁高は、約40cmである。) 8号住居跡出土の資料は、住居の南東部の床面直上に、南北方向に並んだ状態で出土した。(第41図、図版12参照) この場所は、焼土の広がりや土師器高杯が支脚の役割を果たすかのように伏せられていた状況から、住居の竈の右脇部分に当たると考えられる部分である。9号住居跡出土の資料は、床面全域に亘って散らばって出土したものである。

8号住居跡出土の資料は、長さでは7.6cm~13.9cm・重さでは64.6g~537.8gの範囲に散らばっている。石質では溶結凝灰岩が6点、点紋頁岩・輝石安山岩(粗粒のもの)が各4点である。本資料の場合は、柿沼幹夫氏が指摘したような明確な組み合わせにはならないが、一応「編物石」としておく。

※ 柿沼幹夫 「下田遺跡43号住居跡出土の河原石について」
 【下田・諏訪】 埼玉県教育委員会 1979年 所収。

第27表 編物石観察表

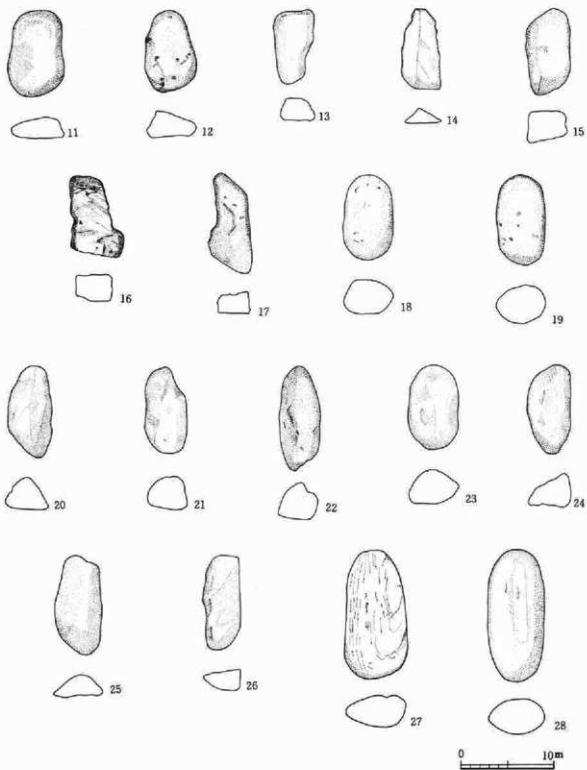
No	出土位置	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	No	出土位置	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)
1	1号住	ひん岩	10.8	5.9	367.3	15	8号住	溶結凝灰岩	8.5	4.6	218.1
2	3号住	溶結凝灰岩	16.7	7.1	1007.1	16	8号住	チャート	8.0	4.0	219.4
3	3号住	黒色頁岩	15.9	6.0	682.2	17	8号住	砂 岩	9.9	3.5	151.1
4	9号住	輝石安山岩	10.0	5.7	378.6	18	8号住	輝石安山岩	8.9	5.2	221.9
5	9号住	頁 岩	11.5	5.7	410.8	19	8号住	輝石安山岩	9.5	5.2	301.5
6	9号住	輝石安山岩	9.2	5.7	282.3	20	8号住	溶結凝灰岩	9.1	4.7	198.7
7	9号住	珪質頁岩	9.2	4.2	250.9	21	8号住	輝石安山岩	9.1	4.3	220.5
8	9号住	溶結凝灰岩	10.0	4.7	310.7	22	8号住	点紋頁岩	10.6	4.4	232.5
9	9号住	砂 岩	14.5	5.0	206.6	23	8号住	溶結凝灰岩	8.9	5.3	228.6
10	グリッド	ひん岩	13.1	4.9	373.1	24	8号住	溶結凝灰岩	9.2	4.6	208.1
11	8号住	点紋頁岩	9.0	5.6	205.2	25	8号住	点紋頁岩	10.3	5.1	176.8
12	8号住	溶結凝灰岩	8.5	5.2	195.7	26	8号住	頁 岩	9.8	4.0	162.1
13	8号住	溶結凝灰岩	7.6	3.6	135.2	27	8号住	ホルンフェルス	13.6	6.7	465.1
14	8号住	点紋頁岩	8.5	3.8	64.6	28	8号住	輝石安山岩	13.9	6.0	537.8



第58図 石製品実測図 (2)



第二章 書上下吉祥寺遺跡



第59図 石製品実測図 (3)

書上上原之城遺跡

第三章 書上上原之城遺跡

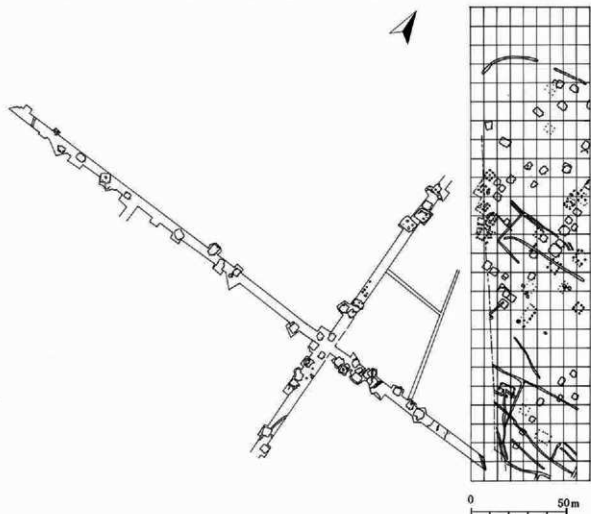
第1節 調査の概要

本遺跡の調査は、基本的に、Ⅱ区(書上下吉祥寺遺跡)と同時並行で調査を進めたために、同様な調査方法によって行った。(具体的には、第二章 第1節を参照されたい。)

書上上原之城遺跡における調査で検出された遺構は、昭和48年度に「県園芸試験場第二遺跡」^{第1}として発掘調査がなされていた部分も含めて、奈良・平安時代の竪穴住居跡47軒、掘立柱建物跡41棟、井戸跡7基、溝跡21条、土坑11基である。他に風倒木痕6箇所を確認・調査したが倒壊時期等を判断できるような資料は得られなかった。

縄文時代の遺構は検出されなかったが、前期～中期の土器及び石器が調査区内に散在して出土した。(出土遺物は、書上下吉祥寺遺跡の項で一括して取り扱った。)

弥生時代及び古墳時代についても明確な遺構は検出されなかった。東村教育委員会による昭和44年度の発掘調査結果^{第2}と合わせて考えると、縄文時代及び古墳時代の居住域は、もう少し北東寄りの東緩傾斜地にあったと思われる。また、J R東日本鉄道・両毛線を挟んだ北西部分は、通称「書上ヶ原」と呼ばれており、昭和



第60図 書上上原之城遺跡概念図

第三章 書上上原之城遺跡

10年代の開墾の際に多くの古墳を平夷しているとのことで、台地の西辺部分に当るこのあたりが墓域として利用されていたものと考えられる。(なお、昭和58年度調査として「J K 17 書上遺跡」の発掘調査を行い、2基の古墳を調査しており、立地上から推して本遺跡とかかわりが有ると考えられるので、付帯として、後に併掲しておく。)

奈良・平安時代においては、掘立柱建物跡の在り方及び多数の墨書土器の出土等から推して、今回の調査地が集落の中核部分を為していたと思われる。倉庫とみられる総柱建物跡の存在及び同種の墨書土器を持つ堅穴住居跡の配置が古代集落の一端を窺わせてくれる。なお、調査区域外ではあるが sta. No 707付近の掘立柱建物跡群西側の畑には多量の灰軸陶器の破片が散在していた。また、伊勢崎市教育委員会による昭和56年度の調査は、土地改良事業に伴うものであり、道・水路部分に限定された調査ではあるが、「原之城遺跡」F・G区の調査成果も証左となると考えられる。更に、本遺跡の北方約1kmの地点で、「下書上遺跡」^{※4}として調査した部分においては、明確な遺構が^{※5}検出されなかったとのことであり、集落の広がりがここまで及んでいないことは確実である。加えて、本遺跡地の南西約400m地点で調査された「天野沼遺跡」では、古墳時代末期の堅穴住居跡が確認されているが、集落の中心とは考えられない状況にあると思われる。

中・近世の本遺跡地の様子を見ると、中世には、溝で囲まれた屋敷地が有り、掘立柱建物が建っていたと考えられる。時期を明確にし得なかったが、調査された井戸の中には当時の人々の生活用水を供給していたものが有ったのではないかとと思われる。14号溝は近世遺構であることが明らかにされたが、全体として出土遺物が少ないために、本遺跡地の近世の様相は判然としなかった。

旧石器時代を対象とした調査も、遺跡地の土層観察と合わせて行ったが、残念ながら遺物の出土は見られなかった。

※1 【上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報 I】 群馬県教育委員会 1974年

※2 群馬県佐波郡「東村誌」東村誌編纂委員会 1979年 第二編 歴史

※3 「原之城遺跡・下吉祥寺遺跡」伊勢崎市教育委員会 1982年

大正川水東部土地改良事業に伴う発掘調査の概要報告ではあるが、本遺跡で調査されたものと同じ時期と考えられる遺構の分布密度や、G区の東側はかなりの低地になっており出水があったこと等は、本遺跡地が北から南に延びる舌状段高地の東緩斜面に占地しており、ほぼ集落の中心部分に当たっていることを示している。

※4 【高山遺跡・天ヶ堤遺跡・天野沼遺跡・下書上遺跡】伊勢崎市教育委員会 1978年

※5 ※4と同一文献。

第2節 検出された遺構と遺物

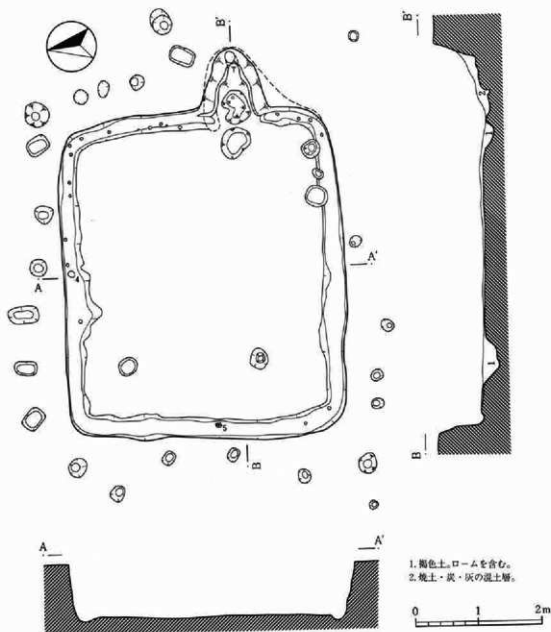
(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第61・62図、図版20・51) 位置 709.5Eポイント北側

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出された。平面形は、南辺がやや張り出した、東西方向に長い隅丸方形を呈する。周囲には径22~40cm・深さ約15cmのピットが巡っていた。或は垂木痕かも知れないが、詳細は不明である。規模は、東西方向5.04m・南北方向4.38mを測り、西辺の走向は $N7^{\circ}E$ である。床面積は17.0 m^2 である。

壁は5°前後の傾斜をもって掘り込まれており、ローム層の壁面を36~44cm確認した。

床面には多少の凹凸があり、ロームを含む褐色土を客土した貼り床であった。四周には幅約25cm・深さ5



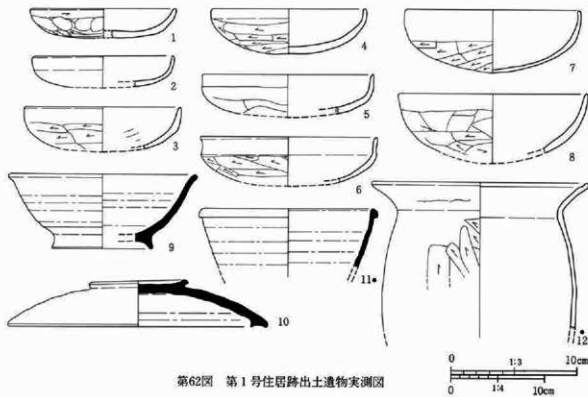
第61図 第1号住居跡実測図

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

～7 cmの周溝が巡っていた。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から65cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋外に有り、焚口幅66cm・奥行104cmを測る。

遺物は全域に散らばって出土した。本住居の年代については8世紀中頃の時期が考えられる。



第62図 第1号住居跡出土遺物実測図

第28表 第1号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/4残存。 口 11.6cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②にふい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部荒削り。体部丸ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
2	杯 (土師器)	1/5残存。 口 11.3cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部荒削り。体部丸ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
3	杯 (土師器)	1/5残存。 口 12.5cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部荒削り。体部丸ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体～口縁部横ナデ。	
4	杯 (土師器)	1/2残存。 口 12.4cm 高 3.5cm	北壁際。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底一体部荒削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
5	杯 (土師器)	1/5残存。 口 13.5cm	南壁際。	①砂粒を含む。 ②にふい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部荒削り。体部丸ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。火はぜによる割離痕有り。	
6	杯 (土師器)	3/4残存。 口 14.1cm	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②にふい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底一体部荒削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
7	杯 (土師器)	1/4残存。 □ 13.9cm 高 5.0cm	北西部。	①砂粒を含む。 ②棕色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部施ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体→口縁部横ナデ。	
8	杯 (土師器)	1/4残存。 □ 15.1cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②棕色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部施ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体→口縁部横ナデ。	
9	高台付筒 (須恵器)	1/5残存。 □ 14.7cm 高 5.9cm 底 8.0cm	北壁際。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部切り離し技法不明。 貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
10	蓋 (須恵器)	1/4残存。 □ 20.7cm 高 3.6cm 横 7.9cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②オリーブ灰色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。積み貼付け。全面ナデ。 内面 回転によるナデ。	
11	瓶? (須恵器)	1/4残存。 □ 19.1cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	
12	甕 (土師器)	1/4残存。 □ 23.1cm	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②棕色。 ③酸化炭・良好。	外面 体部施削り。口縁部横ナデ。炭付着。 内面 体部施ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第2号住居跡 (第63-65図、図版20・51-53) 位置 710.0Cグリッド南側

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出された。平面形は、北辺がやや歪み、東西方向が長い隅丸方形を呈する。周囲には径15-25cm・深さ約15cmのピットが巡っていた。或は垂木痕かも知れないが、詳細は不明である。

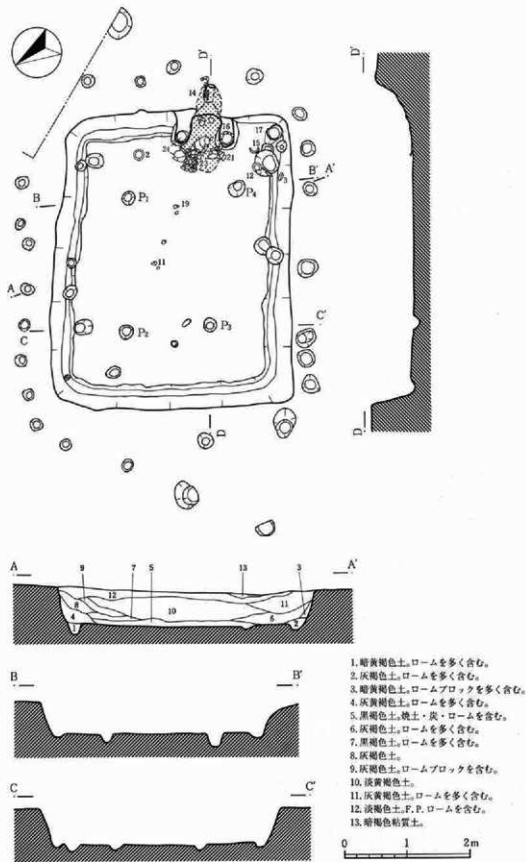
規模は、東西方向4.52m・南北方向3.54mを測り、西辺の走向はN29°Eである。床面積は11.4㎡である。壁は10°前後の傾斜を以て掘り込まれており、ローム層の壁面を45-55cm確認した。

床面には多少の凹凸があり、南東隅を除いて、幅約15cm・深さ15cmの周溝が巡っていた。また、 $P_1 \sim P_4$ は径20-30cm・深さ15-25cmで、柱間は $P_1 \sim P_2$ が2.10m・ $P_2 \sim P_3$ が1.35m・ $P_3 \sim P_4$ が2.25m・ $P_4 \sim P_1$ が1.75mを測る。 $P_2 \cdot P_3$ が平面プランの対角線上から若干外れるが、主柱穴になると考えられる。貯蔵穴は南東隅に有り、径42cm・深さ30cmで截頭円錐状に掘り込まれていた。

竈は、東辺の中央から45cm程南寄りの位置に、粘土と土師器甕を使用して構築されていた。両方の袖の芯材に甕を倒立させ、さらに2個の甕を横に組み合わせて架構して焚口としていた。袖が約40cm張り出し、燃焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅50cm・奥行60cmを測る。

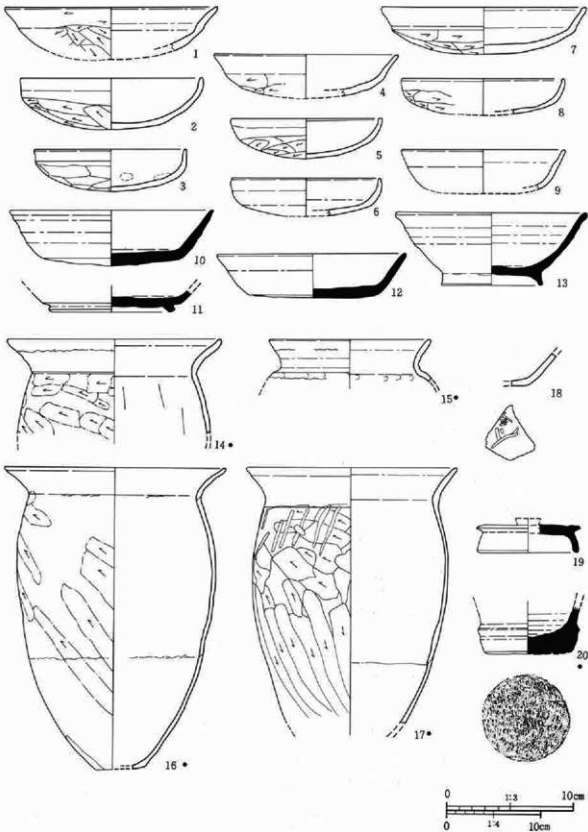
遺物は全城に散らばって出土した。本住居の年代については8世紀前半の時期が考えられる。

なお、特記すべき遺物として、須恵器播鉢(20)がある。上半部は欠損してしまっているが、底部外面には刀子状の工具で滑り止めのために施したと考えられる刺突痕がある。内面はさほど擦り減っていない。

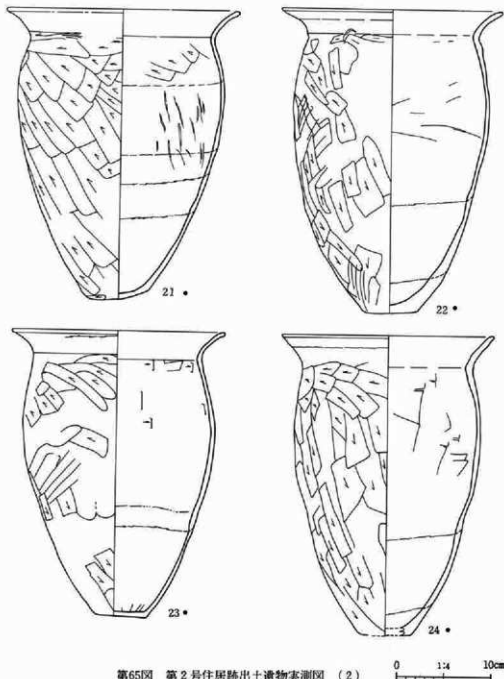


第63図 第2号住居跡実測図

第2節 検出された遺構と遺物



第64図 第2号住居跡出土遺物実測図 (1)



第65図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

第29表 第2号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/6残存。 口 16.8cm	竈裡土中。	①粘土を多く含む。 ②にふい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部寛削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体部寛ナデ後ナデ。口縁部横ナデ。	
2	杯 (土師器)	ほぼ完形。 口 14.5cm 高 4.0cm	北東部。	①粘土を多く含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部寛削り。体部横い麗ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底～体部ナデ。口縁部横ナデ。	

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	底・整形の特徴	備考
3	杯 (土師器)	ほぼ完成。 口 12.1cm 高 3.3cm	南壁際。	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底一体部瓦ナデ後ナデ。口縁部横ナデ。	
4	杯 (土師器)	1/3残存。 口 14.7cm	竈覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。口縁部横ナデ。 内面 底一体部ナデ。口縁部横ナデ。	
5	杯 (土師器)	1/4残存。 口 12.1cm 高 3.2cm	竈覆土中。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。口縁部に帯付着。 内面 底一体部瓦ナデ後ナデ。口縁部横ナデ。	
6	杯 (土師器)	1/8残存。 口 11.9cm	竈覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底一体部ナデ。口縁部横ナデ。	
7	杯 (土師器)	1/3残存。 口 16.2cm 高 3.7cm	竈覆土中。	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。口縁部横ナデ。 内面 底一体部瓦ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 火はぜによる割離痕有り。	
8	杯 (土師器)	1/6残存。 口 13.0cm	竈覆土中。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底一体部ナデ。口縁部横ナデ。	
9	杯 (土師器)	1/5残存。 口 13.0cm	覆土上層。	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部粗い瓦ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
10	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 16.1cm 高 4.4cm 底 11.0cm	竈覆土中。	①砂粒及び細礫を含む。 ②淡黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転丸削り。口縁部横ナデ。 内面 底一体部回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
11	高台付筒 (須恵器)	1/5残存。 底 10.0cm	中央部	①砂粒及び細礫を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転丸削り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
12	杯 (須恵器)	3/4残存。 口 14.8cm 高 3.5cm 底 10.6cm	南壁際	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転丸削り。口縁部横ナデ。 内面 底一体部回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
13	高台付筒 (須恵器)	1/5残存。 口 15.2cm 高 5.7cm 底 8.0cm	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転丸削り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
14	罍 (土師器)	1/3残存。 口 16.8cm	竈道部	①砂粒を多く含む。 ②明褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部斜め方向丸削り。肩部瓦ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 瓦ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
15	罍 (土師器)	口縁部のみ。 口 17.1cm	南東部	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部横方向丸削り。頸一口縁部瓦ナデ後、ナデ。火はぜによる割離痕有り。 内面 瓦ナデ。口縁部横ナデ。	

第29表 第2号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・分量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
16	罌 (土師器)	4/5残存。 口 23.6cm 高 31.8cm 底 5.2cm	竈軸	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底一体部削削り。胴一口縁部削削り後、横ナデ。体部下半に煤付着。 内面 体部削削り後、ナデ。口縁部横ナデ。火はぜによる割離痕有り。	
17	罌 (土師器)	3/4残存。 口 22.5cm	竈軸	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部斜め方向削削り。肩部横方向削削り。胴一口縁部削削り後、横ナデ。 内面 体部削削り後、ナデ。口縁部横ナデ。内外共に煤付着。	
18	杯 (土師器)	小破片。	竈覆土中。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 底部削削り。体部粗い横ナデ。 内面 ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「金」か。
19	蓋 (須恵器)	1/4残存。 口 8.0cm		①砂粒を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転クロコ成形成。天井部回転削削り。 内面 回転によるナデ。	
20	蓋鉢 (須恵器)	底部のみ。 底 9.3cm		①砂粒及び繊維を多く含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転クロコ成形成。底部削削り後、匙状工具による割突。 内面 回転によるナデ。	
21	長罌 (土師器)	1/2残存。 口 25.0cm 高 30.7cm 底 6.6cm		①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部斜め方向削削り。肩部横方向削削り。胴一口縁部削削り後、横ナデ。 内面 底一体部削削り後、ナデ。口縁部横ナデ。	
22	長罌 (土師器)	2/3残存。 口 23.7cm 高 32.0cm 底 5.7cm		①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部削削り。体部斜め方向削削り。胴一口縁部削削り後、横ナデ。 内面 削削り後、ナデ。口縁部横ナデ。体部上半に煤付着。火はぜによる割離痕有り。	
23	長罌 (土師器)	1/2残存。 口 22.7cm 高 30.1cm 底 5.4cm		①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部削削り。体部斜め方向削削り。胴一口縁部削削り後、横ナデ。 内面 体一部削削り後、ナデ。口縁部横ナデ。	
24	長罌 (土師器)	1/2残存。 口 22.6cm 高 31.9cm 底 5.3cm		①砂粒を含む。 ②褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 底部削削り。体部斜め方向削削り。肩部横方向削削り。胴一口縁部削削り後、横ナデ。 内面 体部削削り後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第3号住居跡(第66・67図、図版20) 位置 710.0Aポイント付近

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、北東部がやや歪んだ、南北方向に長い隅丸方形を呈する。

規模は、東西方向3.47m・南北方向4.10mを測り、主軸方位はN3°Eである。床面積は、12.0㎡である。

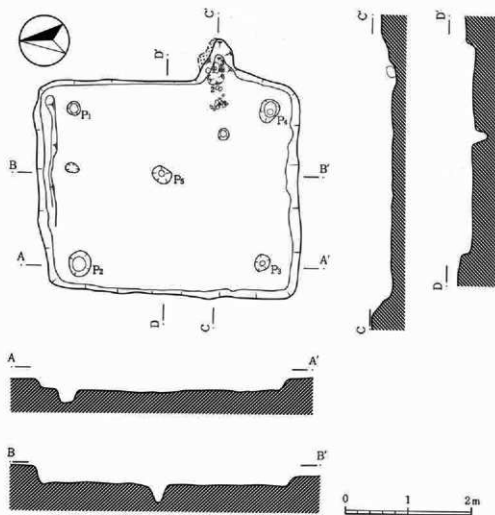
壁は、10°前後の傾斜を以てローム層まで掘り込まれており、現存高15～25cmを測る。

床面は、中央部が若干窪んでいるが、概ね平坦で、全面に亘って強く踏み固められていた。四隅及び中央部の穴は、径35cm・深さ30cmで、主柱穴になると考えられる。なお、周溝及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から90cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されており、火床面の中央部には、土製の支脚が残っていた。燃焼部は屋外に有り、焚口幅45cm・奥行50cmを測る。

遺物は竈付近に集中して出土した。

第2節 検出された遺構と遺物



第66図 第3号住居跡実測図



第67図 第3号住居跡出土遺物実測図

第30表 第3号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/4残存。 口 11.9cm 高 3.3cm	竈内。	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部造ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体~口縁部横ナデ。	
2	高台付椀 (須恵器)	1/4残存。 口 13.4cm	竈内。	①砂粒を含む。 ②灰オリーブ色。 ③酸化炭・硬質。	外面 右回転口クロ成形。体部施削り。口縁部横ナデ。 内面 丁寧な施削り。黒色処理。	所謂口クロ土師器。

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
3	長 罎 (土師器)	1/2残存。 底 3.4cm	壺内。	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施削り。体部施削り。煤付着。 内面 蓋ナダ後、ナダ。火はぜによる割離痕有り。	

第4号住居跡(第68・69図、図版20・54) 位置 710.5Cポイント南側

本住居跡は、南西隅の一部に耕作による擾乱が認められたが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、比較的均整のとれた、南北方向に長い隅丸方形を呈する。

規模は、東西方向3.60m・南北方向2.74mを測り、主軸方位はN3°Eである。床面積は、8.15㎡である。

壁は、10°前後の傾斜を以てローム層まで掘り込まれており、現存高25～35cmを測る。

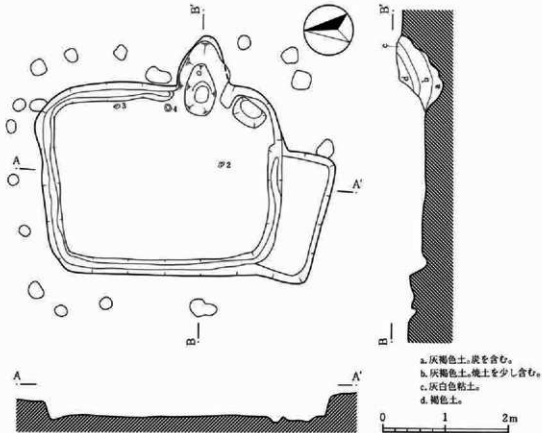
床面は、ほぼ平坦で、全面に亘って強く踏み固められていた。なお、床面からは周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。壁外の小ピットは、垂木受けの穴になると考えられる。

竈は、東辺の中央から65cm程南寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されており、火床面の中央部には支石が残っていた。燃焼部は屋外に有り、焚口幅50cm・奥行80cmを測る。

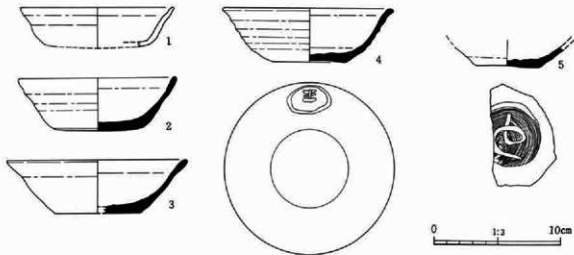
第31表 第4号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/4残存。 口 12.2cm	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施削り。体部蓋ナダ。口縁部横ナダ。 内面 体～口縁部横ナダ。	
2	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 12.6cm 高 4.2cm 底 7.0cm	南側。	①砂粒を含む。 ②オリーブ灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転糸切り後、全面粗い施削り。口縁部横ナダ。 内面 回転によるナダ。口縁部横ナダ。	
3	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 14.3cm 高 4.2cm 底 6.9cm	東壁間。	①砂粒及び細礫を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部横ナダ。 内面 回転によるナダ。口縁部横ナダ。火はぜによる割離痕有り。	二次焼成によりやや軟質化。
4	杯 (須恵器)	ほぼ定形。 口 13.7cm 高 4.2cm 底 5.7cm	東壁間。	①砂粒を多く含む。 ②浅黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部横ナダ。煤付着。 内面 回転によるナダ。口縁部横ナダ。	体部外面に墨書有り。 釈文「国」か。
5	杯 (須恵器)	1/2残存。 底 5.7cm	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナダ。	底部外面に墨書有り。 釈文「止」か。

第2節 検出された遺構と遺物



第68図 第4号住居跡実測図



第69図 第4号住居跡出土遺物実測図

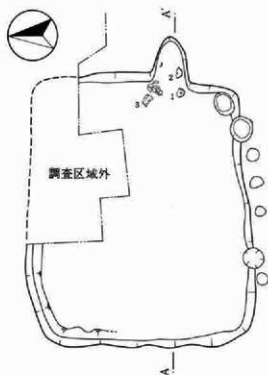
第5号住居跡（第70・71図、図版21・54） 位置 710.0Bグリッド北東部
 本住居跡は、北東部に擾乱が有り、未完掘である。平面形は、東西方向に長く南西部がやや歪んだ隅丸
 形を呈する。

規模は、東西方向4.14m・南北方向3.60mを測り、主軸方位はN2°Eである。

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

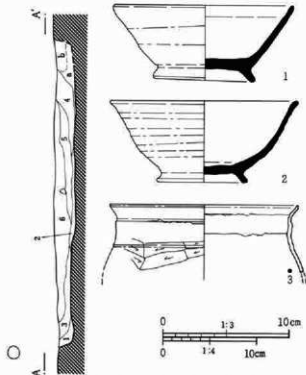
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、ローム層の壁面を20~30cm確認した。また、床面には凹凸が目立った。竈は、東辺の中央から50cm程南寄りの位置に粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋外に有り、焚口幅50cm・奥行75cmを測る。

遺物は竈部分に集中して出土した。



1. 褐色粘質土。ロームブロックを多く含む。
2. 暗褐色砂質土。ロームブロックを含む。
3. 暗黄褐色土。
4. 褐色粘質土。

第70図 第5号住居跡実測図

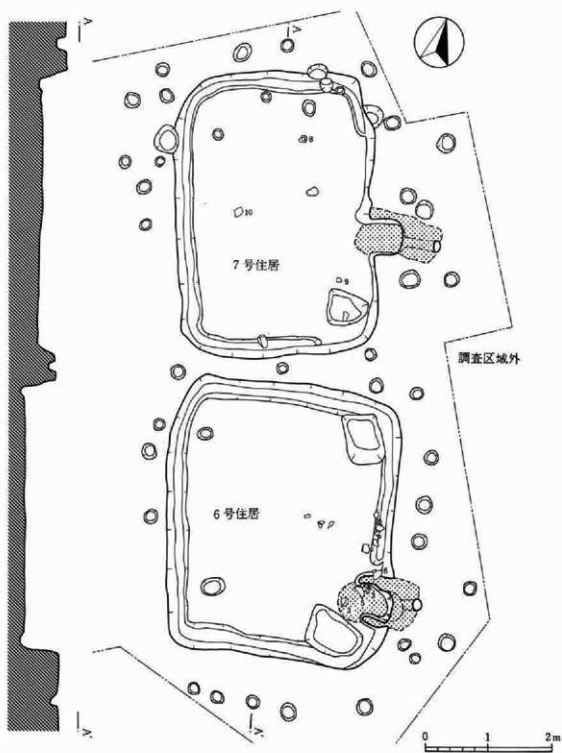


第71図 第5号住居跡出土遺物実測図

5. 暗黄褐色土。
6. 黒褐色粘質土。
- a. 粘土。
- b. 灰褐色粘質土。ロームを含む。

第32表 第5号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	高台付鍋 (須恵器)	3/4残存。 口 14.4cm 高 5.9cm 底 8.1cm	竈内。	①砂粒及び細礫を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2	高台付鍋 (須恵器)	1/2残存。 口 14.9cm 高 6.4cm 底 7.2cm	竈内。	①砂粒及び細礫を多く含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3	釜 (土師器)	1/4残存。 口 20.0cm	竈手前。 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③還元炎・良好。	外面 体部丸削り。肩部横ナデ。口縁部横ナデ後、横ナデ。保付着。 内面 体部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	



第72図 第6・7号住居跡実測図

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

第6号住居跡 (第72・73図、図版21)

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出されており、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に龍を持ち南北方向が長い横長型で、均整のとれた隈丸方形を呈する。規模は、東西方向3.60m・南北方向4.30mを測り、床面積は15.3㎡である。主軸方位はN11°Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高40～62cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、貼り床を行っており、全面に亘って強く踏み締められていた。南東部を除いて、幅約20cm・深さ7cm前後の周溝が巡っており、南東隈には50×90cm・深さ37cmの貯蔵穴が穿たれていた。また北東隈には60×80cm・深さ21cmの隈丸方形のピットが認められたが、性格は不明である。なお、床面上では柱穴は検出されなかったが、壁の四周には径約25cm・深さ15cm前後の円形ピットが巡っていた。

龍は、東辺の南東部に粘土を使用して構築されていた。軸が30cm程張り出し、燃焼部の中心はちょうど壁際にある。焚口幅45cm・奥行70cmを測り、30cm程の煙道が延びていた。

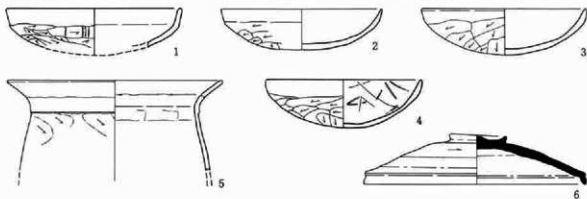
遺物は、龍周辺に多く集中して出土した。

第7号住居跡

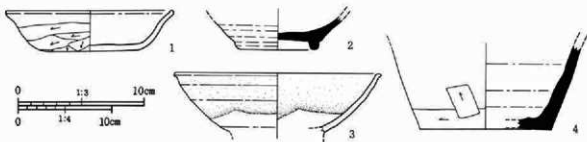
本住居は、重複遺構が無く、単独で検出されており、比較的良好な遺存状態であったが、すぐ南側には6号住居跡が隣接していた。平面形は、東辺に龍を持ち南北方向が長い隈丸方形を呈する。規模は、東西方向3.10m・南北方向4.50mを測り、床面積は13.7㎡である。主軸方位はN19°Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高31～47cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、全面に亘って強く踏み締められていた。東辺の南側と南東隈を除いて、幅約20cm・深さ5cm前後の周溝が巡っていた。また、南東隈には径60cm・深さ13cmの不整形の貯蔵穴が穿たれていたが、底面には凹凸が目立った。なお、床面上では柱穴は検出されなかったが、壁の四周には径約25cm・深さ15～



第6号住居跡出土遺物



第73図 第6・7号住居跡出土遺物実測図

30cmの円形ピットが巡っていた。

龍は、東辺の中央から30cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。笑口はちょうど壁際に有り、馬蹄形の燃焼部は壁外に張り出す。笑口幅50cm・奥行70cmを測り、60cm程の煙道が延びているのを確認した。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。

第33表 第6号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/4残存。 口 14.0cm	龍周辺。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底一体部削り。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ。 内外共に黒付着。	
2	杯 (土師器)	1/5残存。 口 12.3cm 高 3.2cm	龍周辺。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底一体部削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。 内外共に黒付着。	
3	杯 (土師器)	1/2残存。 口 13.2cm 高 3.6cm	龍内。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底一体部削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	
4	杯 (土師器)	1/2残存。 口 12.4cm 高 3.8cm	龍周辺。	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底一体部削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
5	罍 (土師器)	1/3残存。 口 22.7cm	龍内。	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部削り。頸部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部削り後、ナデ。口縁部横ナデ。	
6	甕 (須恵器)	1/4完全形。 口 17.7cm 高 3.9cm 横 4.5cm	龍周辺。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。体部上半部削り後、 挿み貼付け。 内面 回転によるナデ。黒付着。	

第34表 第7号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/2残存。 口 13.3cm 高 3.2cm	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部削り。体部粗い丸ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	
2	高台付輪 (須恵器)	底部3/4残存 底 6.6cm	北東部。 (8)	①砂粒及び細礫を含む。 ②暗青灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転削り後、高 台貼付け。 内面 回転によるナデ。 内外共に黒付着。	
3	高台付輪 (灰輪)	1/8残存。 口 16.5cm	南東部。 (9)	①精選された粘土。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。下部部に高台貼付け後 のナデ痕有り。 内面 回転によるナデ。 内外共に黒付着による緑褐色釉。	
4	罍 (須恵器)	1/3残存。 底 14.0cm	西側。 (10)	①砂粒及び細礫を多 く含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部削り。体部粗い 丸ナデ。 内面 底部ナデ。体部回転によるナデ。	

第8号住居跡(第74・75図、図版21・55) 位置 708.0Eグリッド北西部

本住居跡は、6個のピットにより攪乱を受けていたが、遺存状態は比較的良好であった。平面形は、北東隅が40cm程突出し、西辺がやや歪んだ不整隅九方形を呈する。

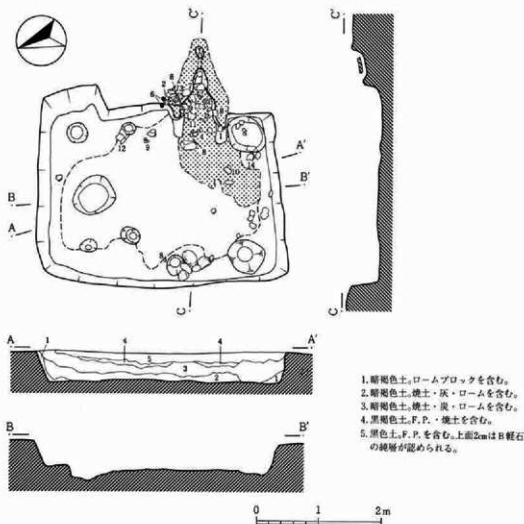
規模は、東辺3.7m・南辺2.6m・西辺3.9m・北辺2.8mを測り、主軸方位はN20°Eである。床面に穿たれたピット部分を含めた床面積は8.74㎡である。

壁は、5°前後の傾斜を以てローム層まで掘り込まれており、現存高48~55cmを測る。

床面は、壁際の幅20cm程の範囲を除いて強く踏み固められており、中央部がややこもりとしていた。床面のピットについては、P₁は径50~55cm・深さ9cm、P₂は径30cm・深さ7cm、P₃は径25cm・深さ26cm、P₄は径20~25cm・深さ13cm、P₅は径35cm・深さ14cm、P₆は径20cm・深さ7cmを測るが、性格は不明である。

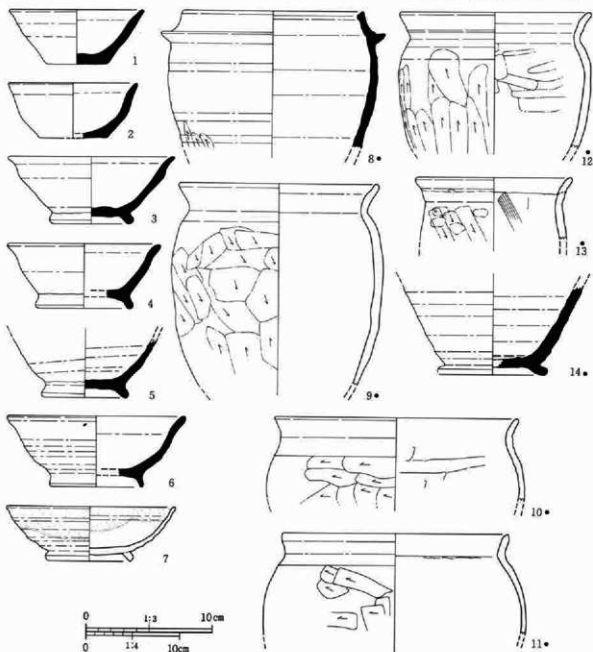
竈は、東壁の南東隅から1m程北寄りの位置に、灰白色粘土を使用して構築されており、燃焼部はほぼ壁際に有る。住居壁から40cm袖が張り出しており、焚口幅50cm・奥行90cmを測る。火床面の下は14cm程掘り溜め、土を入れ替えて床としていた。

遺物は竈部分に集中して出土した。



第74図 第8号住居跡実測図

第2節 検出された遺構と遺物



第75図 第8号住居跡出土遺物実測図

第35表 第8号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・分量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	1/4残存。 口 10.5cm 高 4.3cm 底 4.9cm	甕右袖部分。	①砂粒を含む。 ②浅黄棕色。 ③酸化炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転余切り後、周 辺部裏削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
2	杯 (須恵器)	1/4残存。 口 10.1cm 高 4.4cm 底 5.4cm	甕左袖部分。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周 辺部削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3	高台付椀 (須恵器)	1/3残存。 口 13.1cm 高 5.3cm 底 6.6cm	甕内。	①砂粒及び細礫を含む。 ②浅黄褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。体部下半部削り。底部 回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
4	高台付椀 (須恵器)	1/3残存。 口 11.8cm 高 5.1cm 底 7.8cm	甕の手前に倒 立状態。 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。体部下半部削り。底部 貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
5	高台付椀 (須恵器)	底部一体部 1/2残存。 底 6.9cm	甕内。	①砂粒を多く含む。 ②浅黄褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。体部下半部削り。底部 回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
6	高台付椀 (須恵器)	1/3残存。 口 14.0cm 高 5.6cm 底 7.5cm	甕左のテラス 部分。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。体部下半部削り。底部 貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。 内外共に底部に煤付着。	
7	椀 (灰釉)	実形。 口 13.4cm 高 4.3cm 底 7.0cm	崩れた甕にず り落ちた状態	①精選された粘土に 細礫を少し含む。 ②灰白色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部切り離し技法不明。 貼付け高台。 内面 回転によるナデ。 浸け掛けによる淡緑褐色釉。	
8	羽釜 (須恵器)	1/2割残存。 口 19.1cm	甕の袖部分に 被せられた状 態。	①細礫を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転削り。体部下半部方向削り。胴 貼付け後、口縁部横ナデ。 内面 右回転削り。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	
9	甕 (土師器)	体一口縁部 1/3残存。 口 cm	甕内及び甕手 前に散在。	①砂粒を含む。 ②浅黄褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 体部削り。肩部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ・指ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	肩部に輪飾 孔が6個有 り。
10	甕 (土師器)	口縁部小破 片。 口 26.0cm	甕手前。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 体部削り。肩部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ・指ナデ。口縁部横ナデ。	
11	甕 (土師器)	口縁部小破 片。 口 24.2cm	甕内。	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 体部削り。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ。	二次焼成に よりやや軟 質化。
12	甕 (土師器)	体一口縁部 1/4残存。 口 20.3cm	北東部。	①砂粒を含む。 ②淡褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 体部削り。肩部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	
13	甕 (土師器)	口縁部小破 片。 口 16.4cm	甕左袖に被せ られた状態。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 体部削り。口縁部横ナデ。指頭圧痕有り。 内面 体部横ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	
14	瓶 (須恵器)	1/4残存。 底 11.6cm	貯蔵六郎。	①砂粒を少し含む。 ②灰色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部切り離し技法不明。 貼付け高台。煤付着。高台の底面準成。 内面 底面ナデ。体部回転によるナデ。	

第9号住居跡(第76・77図、図版21・56) 位置 708.5Gグリッド北東隅

本住居跡は、6個のピットによって攪乱を受けており、南壁の一部が壊されていたものの、遺存状態は比較的良好であった。平面形は、東西方向が長く、東辺の竈以南が20cm程張り出し、南辺がやや歪んだ隅丸方形を呈する。

規模は、東辺3.9m・南辺5.2m・西辺3.65m・北辺5.6mを測り、主軸方位はN6°Wである。床面積は約19.0㎡であったと推定される。

壁は、10°前後の傾斜を以てローム層まで掘り込まれており、現存高21～30cmを測る。

床面には、多少の凹凸が認められ、竈の手前から住居の中央にかけては強く踏み固められていた。床面下については、20cm程掘り込み、土を入れ換えて整地している様子が確認された。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、P₁は115cm×80cm・深さ34cm、P₂は径約90cm・深さ7cmを測るが、性格不明。

竈は、東壁の中央からやや南寄りの位置に、角礫と粘土を使用して構築されており、燃焼部は住居内に有る。住居壁から50～80cm袖が張り出してあり、焚口幅60cm・奥行100cmを測る。火床面の中央はやや窪んでいたが、特別な施設は認められなかった。

遺物は中央部から若干出土したのみである。

第36表 第9号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・流量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	甕 (灰軸)	2/3残存。 口 13.9cm 高 3.1cm 底 7.1cm	南壁際床面直上に被せられた状態。	①精選された胎土。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。ナデのため底部切り摩し技法不明。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。洗け掛けによる淡緑褐色釉。	
2	高台付甕 (須忠器)	底部のみ残存。 底 7.0cm	中央部 床面上12.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。底部に集付着。 内面 回転によるナデ。	

第10号住居跡(第78・79図、図版22・56) 位置 708.0Hグリッドの北東部

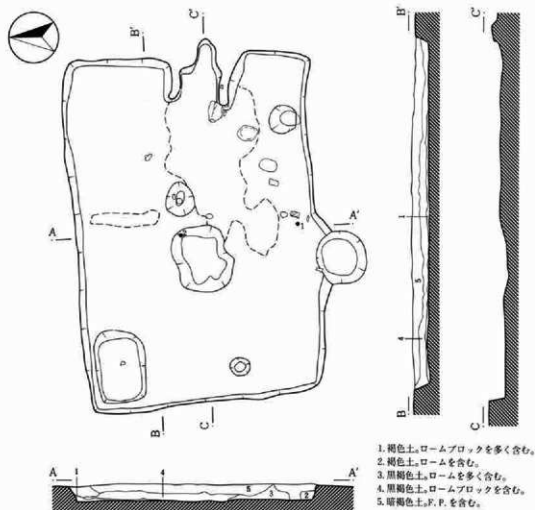
本住居跡は、遺物の分布状況及び堅い面の存在によって辛うじて確認された住居であり、遺存状態が極めて悪かった。平面形は、堅い面の広がりから推して、南北方向が長い方形プランを呈すると思われる。

規模は、南北方向4.2m・東西方向3.3mの範囲に亘って強く踏み固められた面が検出されているので、他の遺構と比べて、4.5m×3.5m前後になると考えられる。

床面はほぼ平坦で、14㎡に亘って確認された。床面下について見ると、8cm程掘り窪め、暗褐色土を詰めて整地している様子が確認された。

竈は、焼土及び炭化物の分布状況によって、東辺のほぼ中央に構築されていたと考えられる。構造物及び規模については、手懸かりを全く欠くために詳細は不明である。なお、火床面下にも特別な施設は認められなかった。周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、竈周辺に集中して出土した。

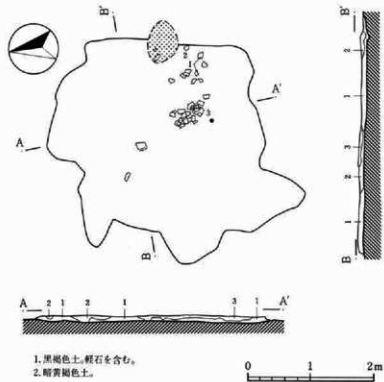


第76図 第9号住居跡実測図

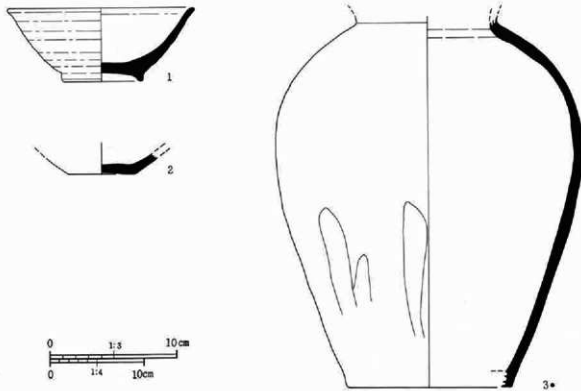


第77図 第9号住居跡出土遺物実測図

第2節 検出された遺構と遺物



第78図 第10号住居跡実測図



第79図 第10号住居跡出土遺物実測図

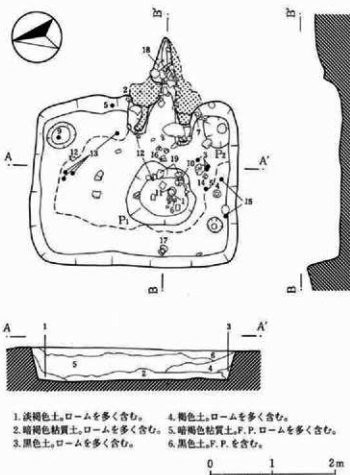
第37表 第10号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	高台付碗 (須恵器)	2/3残存。 口 14.8cm 高 5.8cm 底 6.5cm	竈手前 床面直上。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右面転口口成形。貼付け高台。ナデのため底部切り離し技法不明。 内面 回転によるナデ。 内外共に煤行着。	二次焼成によりやや軟質化。
2	杯 (須恵器)	底部のみ残存。 底 5.5cm	竈の南側 床面上9.0cm。	①砂粒及び細礫を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右面転口口成形。底部回転糸切り後、周縁部裏削り。 内面 回転によるナデ。	
3	壺 (須恵器)	3/4残存。	中央部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②青灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 体部下平粗い蓮ナデ。体部上半部叩き後、ナデ。 内面 叩き後、荒ナデ。一部指ナデ痕有り。	

第11号住居跡 (第80・81図、図版22・56・57) 位置 708.0Hポイントの南側

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出されており、遺存状態が極めて良好であった。平面形は、東西方向が長く、東辺がやや張り出した隅丸方形を呈する。

規模は、東辺3.0m・南辺2.5m・西辺3.2m・北辺2.4mを測り、主軸方位はN10°Eである。床面に穿た



れたピット部分を含めた床面積は6.57㎡で、比較的小型の住居である。

壁は、5°前後の傾斜を以てローム層まで掘り込まれており、現存高26-49cmを測る。

床面はほぼ平坦で、壁際の幅20-30cmの範囲を除いて強く踏み固められていた。床面には3個のピットがあり、P₁は径45cm・深さ30cm、P₂は径50cm・深さ27cm、P₃は径25cm・深さ8cmを測る。北東隅のP₁は、遺物の出土状況及び形状から推して、貯蔵穴と考えられるが、他の2つについては調査上の不手際により覆土の記録が残されていないために性格は不明である。床面下について見ると、底面に白色粘土を貼り、内部に焼土粒を含む土が詰まった径110×100cm・深さ24cmの不整形の土坑があり、多くの遺物が出土した。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

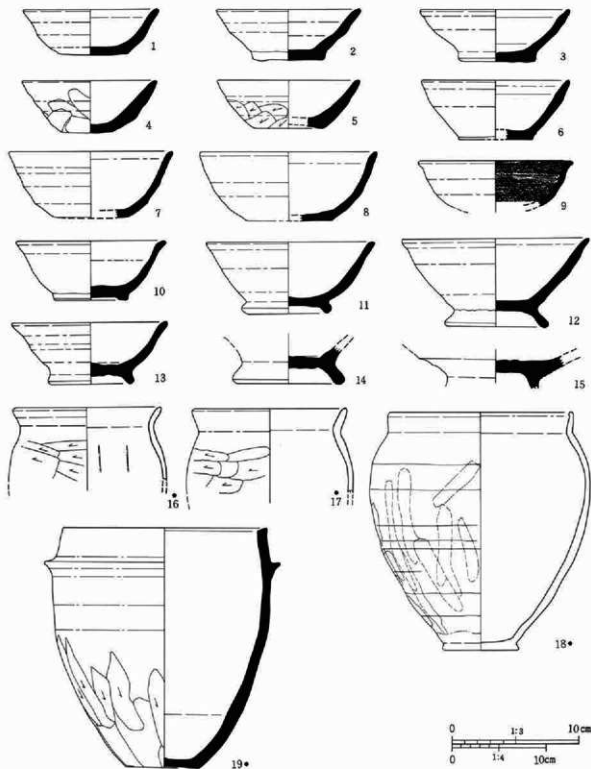
第80図 第11号住居跡実測図

竈は、東壁の中央から50cm程南に偏

第2節 検出された遺構と遺物

した位置に地山層を方形に掘り込み、灰白色粘土を使用して構築されており、燃焼部はほぼ壁際に有る。東壁から30～40cm袖が張り出しており、焚口幅50cm・奥行80cmを測り、その先に70cmに亘って煙道が確認された。燃焼部は、地山層を方形に掘り込み成形していたが、火床面下には特別な施設は認められなかった。

遺物は、全域に散らばって出土した。



第81図 第11号住居跡出土遺物実測図

第38表 第11号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	完形。 口 10.8cm 高 3.7cm 底 5.4cm	床下土坑内 床面下10cm。	①砂粒を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	
2	杯 (須恵器)	1/2残存。 口 11.5cm 高 4.0cm 底 5.6cm	竪左袖。	①砂粒を多く含む。 ②浅黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部調整。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3	杯 (須恵器)	完形。 口 11.7cm 高 4.1cm 底 6.0cm	南東部 床面上6cm。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部砂成。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	二次焼成によりやや軟質化。
4	杯 (須恵器)	完形。 口 10.6cm 高 4.1cm 底 4.0cm	南壁際 床面上3cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい藍色。 ③酸化炎・硬質。	外面 底部砂成。体部下半抛削り。体部上半～口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
5	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 11.2cm 高 3.8cm 底 5.3cm	南壁際 床面上3.5cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい藍色。 ③酸化炎・硬質。	外面 底部砂成。体部下半抛削り。体部上半～口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
6	杯 (須恵器)	1/4残存。 口 11.7cm 高 4.7cm 底 5.9cm	床下土坑内 床面下10.5cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
7	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 13.0cm 高 5.3cm 底 6.0cm	竪右袖。	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底～体部下半抛削り。 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	所謂ロクロ土師器。
8	杯 (須恵器)	1/6残存。 口 14.2cm 高 5.5cm 底 6.8cm	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部抛削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。煤付着。	所謂ロクロ土師器。
9	杯 (須恵器)	1/4残存。 口 12.3cm	北東隅 ピット内。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。黒色処理。	内瓦土器。
10	高台付椀 (須恵器)	1/3残存。 口 11.9cm 高 4.7cm 底 5.7cm	床下土坑内 床面下7cm。	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
11	高台付椀 (須恵器)	完形。 口 13.0cm 高 5.7cm 底 7.2cm	床下土坑内 床面下22cm。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土色②焼成	成・整形の特徴	備考
12	高台付碗 (須恵器)	ほぼ定形。 口 14.7cm 高 6.9cm 底 8.2cm	竈左端及び味 下土域内。	①砂粒を多く含む。 ②淡黄色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。ナデのため底部切り離し技法不明。貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。火はぜによる割離痕有り。	二次焼成によりやや軟質化。
13	高台付碗 (須恵器)	3/4残存。 口 12.4cm 高 4.8cm 底 6.8cm	北東部 床面上42cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。ナデのため底部切り離し技法不明。貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	二次焼成によりやや軟質化。
14	高台付碗 (須恵器)	1/4残存。 底 9.0cm	南壁際 床面上42.5cm。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。ナデのため底部切り離し技法不明。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
15	皿 (須恵器)	1/4残存。	南壁際 床面上10cm。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。ナデのため底部切り離し技法不明。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。火はぜによる割離痕有り。	二次焼成によりやや軟質化。
16	甕 (土師器)	1/6残存。 口 15.5cm	中央部 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ①赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部蔑削り。口縁部横ナデ。 内面 体部蔑ナデ。口縁部横ナデ。	
17	甕 (土師器)	1/6残存。 口 16.6cm	西壁際 床面直上。	①砂粒及び細理を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部蔑削り。口縁部横ナデ。 内面 体部蔑ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
18	甕 (土師器)	ほぼ定形。 口 19.6cm 高 25.1cm 底 7.8cm	竈内。	①砂粒を多く含む。 ①赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部調整。体部粗い蔑削り後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 蔑ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
19	羽釜 (須恵器)	4/5残存。 口 21.8cm 高 25.3cm 底 7.6cm	竈内及び床下 土域内。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③還元炎・硬質。	外面 底部蔑削り。体部下半蔑削り。体部上半蔑ナデ。鈿貼付け。口唇部蔑ナデ。 内面 底一体部下半蔑ナデ後、ナデ。体部上半蔑ナデ後、丁寧なナデ。	

第12号住居跡（第82・83回、図版23・57）位置 708.0G ポイント

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、南北方向が長く、東辺の北東隅が70cm程張り出した隅丸不整形を呈する。

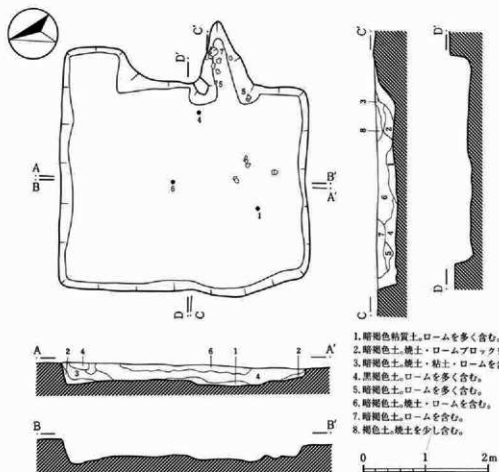
規模は、東辺3.90m・南辺3.00m・西辺3.99m・北辺3.84mを測り、主軸方位はN16°Eである。床面積は11.6㎡である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、ローム層の壁面を18～38cm確認した。

床面には凹凸が有り、中央部がややこもりとしており、竈の手前は踏み固められていたが、他はあまりしっかりとしていなかった。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

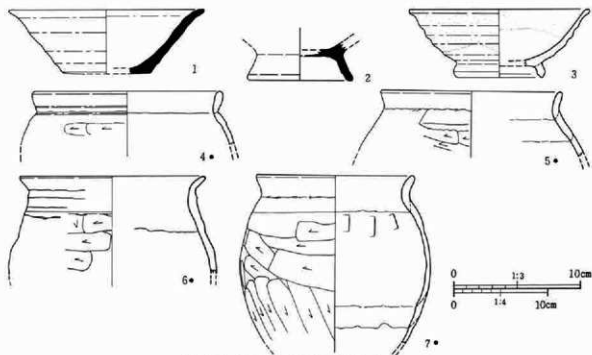
竈は、東辺の中央から60cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が約25cm張りだし、燃焼部は屋外に有り、焚口幅40cm・奥行95cmを測る。

遺物は全域に散らばって出土したが、細片が多かった。本住居の年代については10世紀前半の時期が考えられる。



1. 暗褐色粘質土、ロームを多く含む。
2. 暗褐色土、焼土・ロームブロックを含む。
3. 暗褐色土、焼土・粘土・ロームを含む。
4. 黒褐色土、ロームを多く含む。
5. 暗褐色土、ロームを多く含む。
6. 暗褐色土、焼土・ロームを含む。
7. 暗褐色土、ロームを含む。
8. 褐色土、焼土を少し含む。

第82図 第12号住居跡実測図



第83図 第12号住居跡出土遺物実測図

第39表 第12号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	1/5残存。 口 15.5cm 高 5.1cm 底 7.0cm	南西部 床面上3cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
2	高台付碗 (須恵器)	1/2残存。 底 8.2cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。底面に煤付き。 内面 回転によるナデ。	
3	高台付碗 (灰輪)	1/4残存。 口 14.4cm 高 5.4cm 底 7.3cm	南東隅。	①精選された胎土。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。体部下半回転並削り。 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
4	甕 (土師器)	1/3残存。 口 19.8cm	電手前 床面上26.5cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部並削り。肩部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部横ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付き。	
5	甕 (土師器)	1/6残存。 口 19.0cm	室内。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部並削り。肩部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部横ナデ。口縁部横ナデ。	
6	甕 (土師器)	口縁一体部 1/3残存。 口 19.9cm	中央部 床面上24cm。	①砂粒を多く含む。 ②灰黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部並削り。肩部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
7	甕 (土師器)	1/5残存。 口 16.8cm	室内。	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下半縦方向並削り。体部上半一層部横方向並削り。肩部粗い横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第13号住居跡 (第84・85図、図版23・57) 位置 708.0Dグリッド南西隅

本住居跡は、西壁のほぼ中央部に現代のゴミ穴が床面まで掘り込まれていたが、他の部分の遺存状態は良好であった。平面形は、南北方向が長く、東辺の北東隅が50cm程張り出した隅丸不整形を呈する。

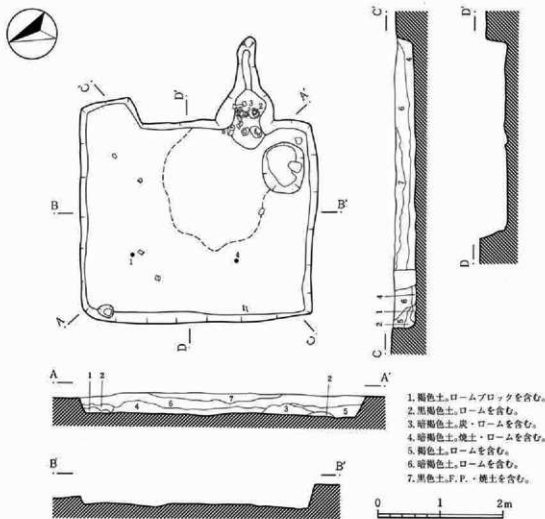
規模は、東辺3.7m・南辺3.0m・西辺3.7m・北辺3.5mを測り、主軸方位はN20°Eである。貯蔵穴部分も含めた床面積は10.2㎡である。

壁は、10°前後の傾斜を以てローム層まで掘り込まれており、現存高25～39cmを測る。

床面には多少の凹凸が認められ、竈の手前から住居の中央にかけては強く踏み固められていた。また、遺物は出土しなかったが、位置及び覆土の状況から推して貯蔵穴と考えられる径80cm×65cm・深さ17cmの不整形円形の穴が南東隅に検出された。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面下については、10cm程掘り窺い、土を入れ換えて整地している様子が確認された。

竈は、東壁の南東隅から1m程北寄りの位置に、角礫と粘土を使用して構築されており、燃焼部は壁外に有り、火床面の中央には棒状の川原石を立てて支脚としていた。また、住居壁とはほぼ同ライン上に2つの角礫を立てて袖口としており、焚口幅45cm・奥行60cmを測り、その先に85cmに亘って煙道が確認された。燃焼部は、地山層を不整形に掘り込み成形していたが、火床面下には特別な施設は認められなかった。

遺物は、殆ど室内から出土した。



第84図 第13号住居跡実測図



第85図 第13号住居跡出土遺物実測図

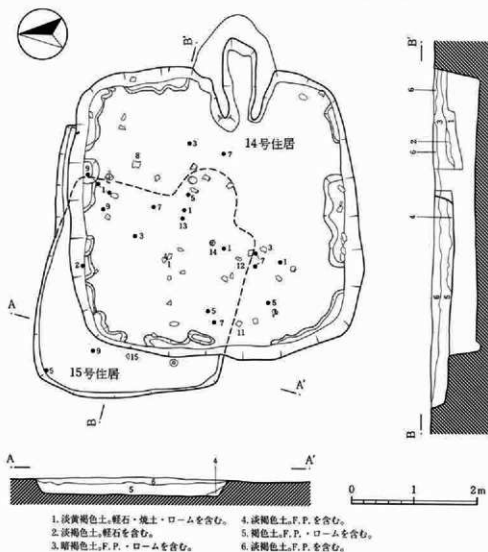
第40表 第13号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	1/5残存。 口 11.7cm 高 4.0cm 底 5.6cm	北西部 床面上4.5cm。	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転糸切り後、周縁部削削り。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①土質②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
2	高台付碗 (須恵器)	3/4残存。 口 14.0cm 高 5.7cm 底 7.2cm	竈内に被せられた状態。	①砂粒を多く含む。 ②淡黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。貼付け高台。ナデのため底部切り離し技法不明。 内面 丁寧な裏ナデ。黒色処理の痕が残る。 二次焼成により炭素が燻れ、やや軟質化。	所謂ロクロ土師器。
3	高台付碗 (須恵器)	底部3/4残存 底 7.0cm	竈内。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。 内外共に張付着。	二次焼成によりやや軟質化。
4	高台付碗 (須恵器)	底部のみ。 底 5.7cm	南西部 床面上13.0cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 丁寧な裏磨き。黒色処理。	所謂ロクロ土師器。

第14号住居跡 (第86・87図、図版23・58) 位置 708.0Cポイント北側

本住居跡は、北西部の一部が15号住居跡によって壊されていたが、遺存状況は比較的良好であった。平面



第86図 第14・15号住居跡実測図

形は、南西隅がやや歪み、南北方向が若干長い隅丸方形を呈する。

規模は、東西方向4.2~4.5m・南北方向4.2~4.7mを測り、西辺の走向はN1°Eである。床面積は約15.8m²である。壁は、5°前後の傾斜を以て掘り込まれており、ローム層の壁面を70~75cm確認した。

床面は、全面に亘って強く踏み固められており、中央部がややこもりとしていた。壁際には、幅20cm・深さ10cm前後の周溝が断続的に巡っていた。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

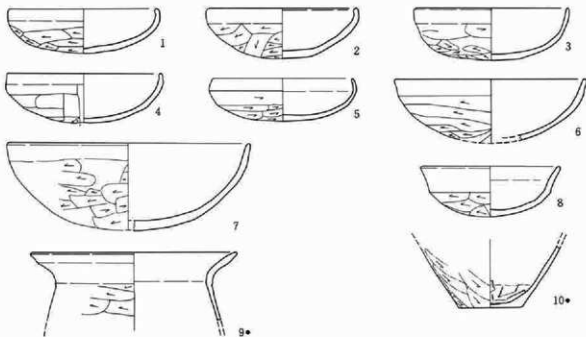
竈は、東辺の中央から50cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が80cm程張り出し、燃燒部はちょうど壁際に有り、焚口幅40cm・奥行125cmを測る。

遺物は、南壁際に「編物石」がまとまっていた外は、全体に散在して出土した。

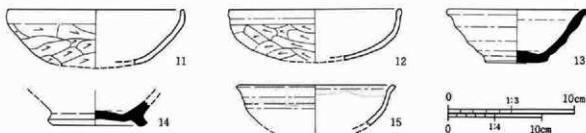
第15号住居跡 (第86・87図、図版23・58) 位置 708.0Cポイント北側

本住居跡は、遺構確認段階での検出が遅れたために、東半部を掘り過ぎてしまい、十分な資料が得られなかった。平面形は、東西方向に長い隅丸方形を呈すると思われる。規模は、東西方向3.40m・南北方向3.10m程になると考えられる。

壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、ローム層の壁面を25cm確認した。床面は軟弱で、竈は東辺の中央からやや南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていたが、掘り過ぎて壊してしまった。



第14号住居跡出土遺物



第87図 第14・15号住居跡出土遺物実測図

第41表 第14・15号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	2/3残存。 口 12.0cm 高 3.5cm	中央及び北壁 跡6地点に散 在。 床面上約30cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底一体部磨削り。口縁部横ナデ。底部に黒 塗有り。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	
2	杯 (土師器)	ほぼ定形。 口 12.1cm 高 3.9cm	北壁跡 床面上39.5cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底一体部磨削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	
3	杯 (土師器)	1/2残存。 口 12.4cm 高 4.1cm	中央部3地点 に散在。 床面上約18cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部磨削り。体部磨ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	
4	杯 (土師器)	1/2残存。 口 12.4cm 高 3.9cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②明褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底一体部磨削り。口縁部横ナデ。底部に黒 塗有り。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	
5	杯 (土師器)	2/3残存。 口 11.7cm 高 3.3cm	中央及び西壁 4地点に散在。 床面上約25cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部磨削り。体部磨ナデ。口縁部横ナデ。 底部に黒塗有り。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	
6	杯 (土師器)	1/2残存。 口 15.3cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底一体部磨削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	
7	鉢 (土師器)	1/2残存。 口 19.4cm 高 6.9cm	中央部に散在。 床面上約55cm。	①砂粒及び剛鉄粒を 含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底一体部磨削り。口縁部横ナデ。 内面 底一体部ナデ。口縁部横ナデ。火はぎによ る割離痕有り。	
8	杯 (土師器)	3/4残存。 口 11.0cm 高 4.0cm	北東部 床面上59cm。	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部磨削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	
9	壺 (土師器)	1/5残存。 口 22.0cm	床面上22cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 体部磨削り。頸部磨ナデ後、ナデ。口縁部 横ナデ。 内面 体部磨ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
10	壺 (土師器)	1/3残存。 底 6.9cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②黒褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部磨削り。体部斜め方向磨削り。底付着。 内面 底部磨削り後、ナデ。体部磨ナデ後、ナ デ。	
11	杯 (土師器)	1/5残存。 口 14.2cm	西壁跡 床面上17cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底一体部磨削り。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ。火はぎによる割離痕有り。	
12	杯 (土師器)	1/6残存。 口 13.7cm	南東隅 床面下6.0cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部磨削り。体部磨ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	
13	杯 (須恵器)	ほぼ定形。 口 11.2cm 高 4.2cm 底 5.0cm	壺子前 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転口クロ成。底部砂底。口縁部横ナ デ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に底付着。	

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
14	高台付椀 (須恵器)	底部のみ。 底 7.8cm	観手前 床面上13.0cm。	①砂粒及び細礫を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転赤切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。 内外共に残存者。	二次焼成によりやや軟質化。
15	高台付椀 (灰輪)	1/6残存。 口 12.6cm	西側 床面上5.0cm。	①精選された粘土。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に遺け掛けによる淡灰褐色輪。	

第16号住居跡 (第88・89図、図版23・59) 位置 706.5Gグリッドの北東部

本住居跡は、南側で9号溝と重複関係にあり、南東隅が壊されてしまっていたが、他の部分の遺存状態は良好であった。なお、新旧関係は覆土の記録にも明らかなように本住居→9号溝である。平面形は、南北方向が長く、南辺がやや張り出した不整隅丸方形を呈する。

規模は、東辺3.6m・南辺2.7m・西辺3.2m・北辺2.8mを測り、主軸方位はN4°Eである。貯蔵穴部分も含めた床面積は約7.9㎡であったと思われる。

壁は、5°前後の傾斜を以てローム層まで掘り込まれており、現存高25～35cmを測る。

床面には多少の凹凸が認められ、中央部が若干窪んでいた。床は地山層を掘り込み、そのまま踏み固めて使用していたことが確認された。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

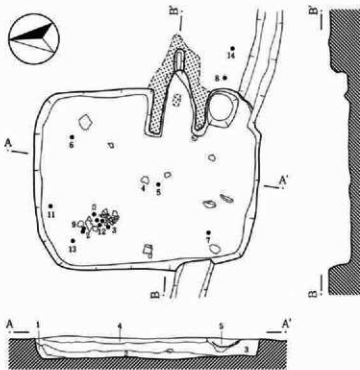
第42表 第16号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/2残存。 口 10.8cm 高 3.6cm	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい藍色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部蔑削り。体部粗い丸ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。脛・口縁部横ナデ。	31号住居土中出土と接合。
2	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 13.2cm 高 3.2cm 底 7.1cm	北西部。	①砂粒及び細礫を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転赤切り後、周縁部蔑削り。体部下端蔑削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
3	高台付椀 (須恵器)	底部1/2残存 底 7.0cm	北西部。	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転蔑削り。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。	
4	高台付椀 (須恵器)	3/4残存。 底 6.7cm	中央部。	①砂粒を多く含む。 ②灰黄色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転赤切り。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。 内外共に窯が付着し、火はぜによる割傷痕有り。	二次焼成によりやや軟質化。
5	高台付椀 (須恵器)	底部のみ。 底 7.1cm	中央部。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転赤切り。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。 内外共に残存者。	

第2節 検出された遺構と遺物

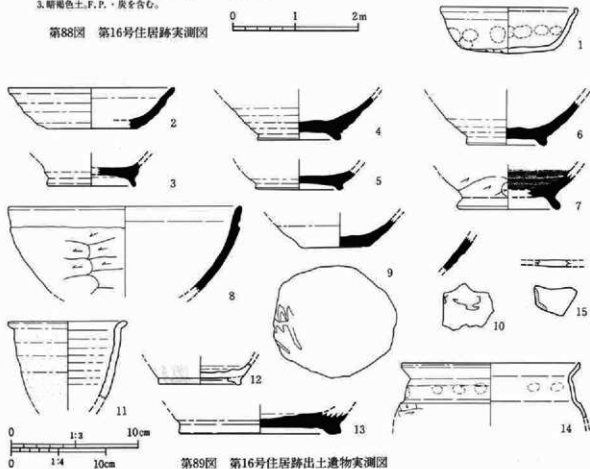
竈は、東壁の中央から40cm程南寄りの位置に、地山層を不整形に掘り込み、灰白色粘土を使用して構築されており、燃焼部はほぼ壁際にある。東壁から60cm袖が張り出しており、焚口幅50cm・奥行110cmを測り、その先に35cmに亘って煙道がとり付く比較的大型の竈である。火床面は6cm程掘り窪め土を入れ換えて床としていた。

遺物は北西部に集中して出土した。



- 1. 褐色土、ロームを多く含む。
- 2. 黒褐色粘質土、焼土・ロームを含む。
- 3. 暗褐色土、F.P.・炭を含む。
- 4. 暗褐色土、F.P.・炭・ロームを含む。
- 5. 9号溝の産土。

第88図 第16号住居跡実測図



第89図 第16号住居跡出土遺物実測図

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
6	高台付椀 (須恵器)	1/3残存。 底 6.3cm	北東部。	①砂粒を含む。 ②灰黄色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。 内外共に煤付着。	
7	高台付椀 (須恵器)	1/3残存。 底 8.2cm	南西部。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 丁寧な磨き。黒色処理。	所謂ロクロ土師器。
8	鉢 (須恵器)	1/6残存。 口 18.6cm	住居外。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部磨削ナデ。 内面 丁寧な磨き。煤付着。	所謂ロクロ土師器。
9	杯 (須恵器)	体一底部 底 5.6cm	北西部。	①砂粒及び細礫を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 戳文「金」が。
10	高台付椀？ (須恵器)	体部小破片	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。全面に煤付着。	体部外面に墨書有り。 戳文不明。
11	平瓶？ (灰釉)	口縁1/3残存 口 9.5cm	北壁際。	①精選された粘土。 ②灰黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。刷毛施りの淡緑褐色釉。 内面 回転によるナデ。	
12	瓶 (灰釉)	底部1/2残存 底 8.7cm	北西部。	①精選された粘土。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転磨削ナデ。貼付け高台。液け掛けによる緑褐色釉。 内面 回転によるナデ。	底部外面に「×」磨き有り。
13	壺？ (須恵器)	底部のみ。 底 12.8cm	北西部 床上上39.0cm。	①砂粒及び細礫を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部ナデ。貼付け高台。 内面 剥落のため不明。	
14	壺 (土師器)	口縁部良好。 1/4残存。 口 18.8cm	覆内他1地点。	①砂粒及び細礫を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部磨削ナデ。口縁部ナデ。 内面 体部磨削ナデ後、ナデ。口縁部磨削ナデ。 内外共に煤付着。	
15	杯 (土師器)	底部小破片。	覆土中。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 磨削ナデ。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 戳文不明。

第17号住居跡(第90・91図、図版24) 位置 706.5Bグリッドの北部

本住居跡は、7個のピット及び15号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、遺存状態は良好であった。なお、新旧関係については地層断面の記録に明らかのように本住居が後出する。平面形は、東西方向が長く、北東隅が50cm程突出し、北辺が若干歪んだ隅丸不整形を呈する。

規模は、東辺3.35m・南辺3.8m・西辺3.6m・北辺4.3mを測り、主軸方位はN9°Eである。床面積は12.5m²である。

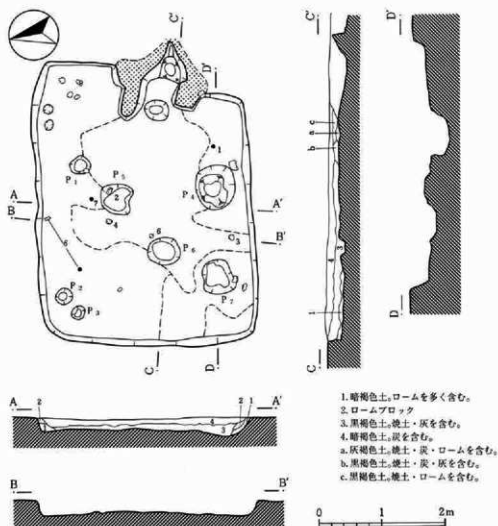
壁は、5°前後の傾斜を以てローム層まで掘り込まれており、現存高16～23cmを測る。

床面には多少の凹凸が認められ、壁の周辺部は約10cm窪んでいた。床面のピットのうち、P₁・P₂・P₃・P₆・P₇については、性格は不明ながらも後世の擾乱であることが確認された。P₄は径70cm・深さ31cm

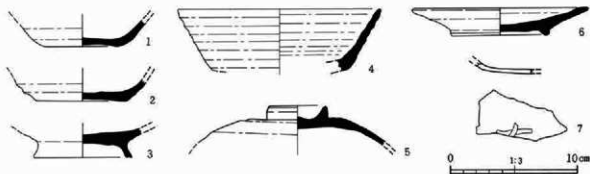
第2節 検出された遺構と遺物

を測り、遺物は出土しなかったものの貯蔵穴の可能性が高い。また、P₅は径40～50cm・深さ13cmの不整形形の穴であるが、底面に灰白色粘土が貼られており、検出状況から推して床下土坑であると考えられる。床面下については10cm程掘り込み、土を入れ換えて整地している様子が確認された。さらに、前述の15号獨立柱建物跡の柱穴2個を検出した。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、東壁の中央からやや南寄りの位置に、地山層を不整形に掘り込み、灰色粘土を使用して構築されて



第90図 第17号住居跡実測図



第91図 第17号住居跡出土遺物実測図

第17章 書上上原之城遺跡

おり、燃焼部はほぼ壁際に有る。東壁から30～80cm軸が張り出しているが、地山層を掘り残した上を灰色粘土で覆っており、突口幅45cm・奥行75cmを測り、その先に20cmに亘って煙道が確認された。火床面下は、径30cm・深さ20cmの挿鉢状に掘り込み、土を入れ換えて床としていた。

遺物は、全域に散らばって出土した。

第43表 第17号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	底部のみ残存。 底 6.0cm	南東部 床面直上。	①砂粒及び細礫を多く含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナデ。	
2	杯 (須恵器)	底部のみ残存。 底 7.3cm	中央部 床面上13cm。	①砂粒及び細礫を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文不明。
3	高台付椀 (須恵器)	底部のみ残存。 底 7.8cm	南壁際 床面上16cm。	①ほぼ均質。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
4	高台付椀 (須恵器)	体-口縁部 1/5残存。 口 16.1cm	中央部 床面上14.5cm。	①砂粒を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。貼付け高台後の墨ナデ有り。 内面 回転によるナデ。	
5	蓋 (須恵器)	3/4残存。 柄 4.6cm	床面上13.5cm。	①砂粒及び細礫を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。天井部回転彫削後、柄み貼付け。 内面 回転によるナデ。	
6	高台付皿 (須恵器)	1/3残存。 口 13.9cm 高 2.1cm 底 7.8cm	中央部 床面上14cm。	①砂粒を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。 内外共に煤付着。	二次焼成によりやや軟質化。
7	杯 (土師器)	底部小破片。	中央部 床面上8.0cm。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 蔑削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「布」か。

第18号住居跡（第92・93図、図版24） 位置 706.5Bグリッドの南部

本住居跡は、北東隅が攪乱で壊されていたが、他の部分の遺存状態は比較的良好であった。また、15号据立柱建物跡と重複関係にあるが、新旧関係については、調査記録から本住居跡が後出することが明らかである。さらに、本住居覆土の最上層には浅間火山給源のB軽石純層が認められた。平面形は、南北方向が長く、南辺がやや歪んだ隅丸不整形を呈すると思われる。

規模は、東西方向3.20m・南北方向4.05mを測り、主軸方位はN11°Eである。貯蔵穴部分も含めた床面積は約10.8㎡である。

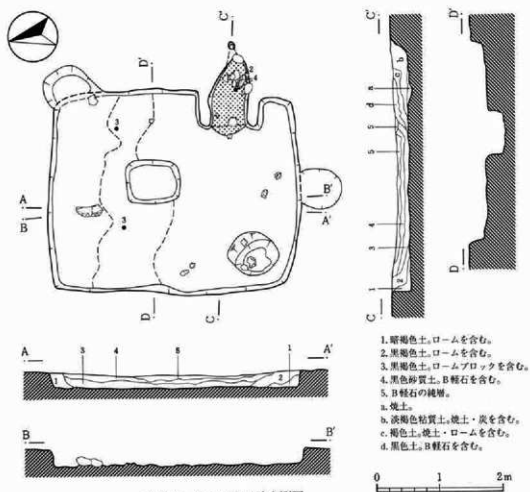
壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、現存高21～31cmのローム層の壁面を確認した。

床面は、北側に約1mの帯状に軟い部分があったが、他は強く踏み固められていた。南東隅には、径55～70cm・深さ31cmの不整形の穴が穿たれていたが、覆土及び出土遺物の様相から推して、貯蔵穴と考えられ

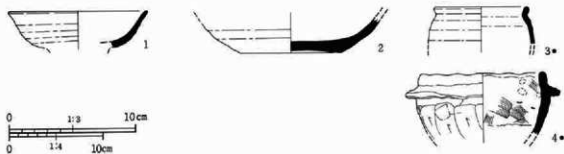
第2節 検出された遺構と遺物

る。床面の調査によって、前述の15号掘立柱建物跡の柱穴1個を検出し、地山層を掘り込み、そのまま踏み固めて床面としていたことが確認された。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、東辺の南東隅から110cm程北寄りの位置に、地山層を馬蹄形に掘り込み川原石と暗黄褐色の粘質土を使用して構築されており、燃焼部は東辺とはほぼ同一直線上に有る。東壁から45~55cm袖が張り出しており、焚口幅55cm・奥行120cmを測る比較的大型のものであり、右壁面及び煙道端部には川原石が貼られていた。さらに、火床面の中央には棒状の川原石を立てて支脚として使用していたことが確認された。火床面下には



第92図 第18号住居跡実測図



第93図 第18号住居跡出土遺物実測図

第三章 書上上原之城遺跡

特別な施設はなかったが、長期間の使用を物語るかのように、灰かきによる若干の窪みが認められた。遺物は、竈部分に集中して出土した。

第44表 第18号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	高台付筒 (埴塼器)	1/6残存。 口 11.1cm	竈内。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。貼付け高台のナデ痕有り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2	杯 (埴塼器)	1/2残存。 底 8.0cm	竈内。	①砂粒を含む。 ②黒褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。丁寧な磨き。 内面 丁寧な磨き。 内外共に黒色処理か?	底部内外面褐色。 所謂ロクロ土師器。
3	小型壺 (埴塼器)	1/4残存。 口 10.0cm	北隅 床面上6~16cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。体部磨ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4	羽釜 (埴塼器)	1/2残存。 口 13.1cm	竈内。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・軟質。	外面 体部磨削り。磨貼付け。口縁部横ナデ。 内面 磨ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。煤付着。 内外共に増強圧痕が残る。	

第19号住居跡 (第94~96図、図版24・59・60) 位置 706.5Cポイント付近

本住居跡は、北辺で15号掘立建物跡と重複関係にあるが、先後関係については、本住居が後出することが確認されている。平面形は、東西方向が長く、南辺の中央部が65×205cmの範囲に亘って長方形状に張り出した隅丸不整形を呈する。

規模は、東辺4.11m・南辺5.10m・西辺4.56m・北辺5.40mを測り、主軸方位はN16°Eである。床面積は、23.6㎡である。

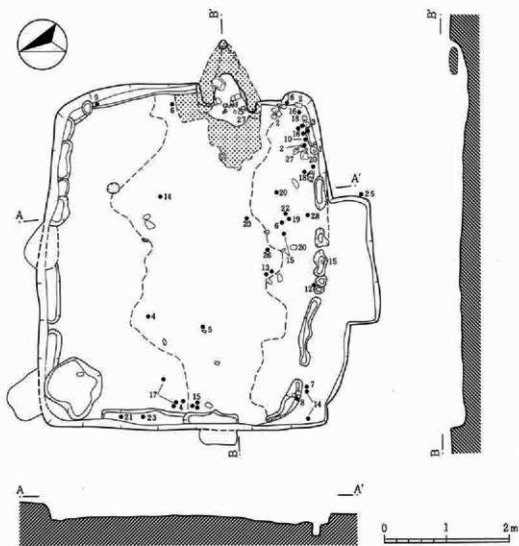
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、ローム層の壁面を17~28cm確認した。

床面には多少の凹凸が認められ、中央部がややこんもりとしていた。竈の手前及び中央部は、強く踏み固められており、壁際には幅15~20cm・深さ5cm前後の周溝が断続的に巡っていた。なお、前述の張り出し部には周溝は認められなかった。北西隅には径約80cm・深さ13cmの不整形の穴が有り、土器片が出土したが、性格は不明である。

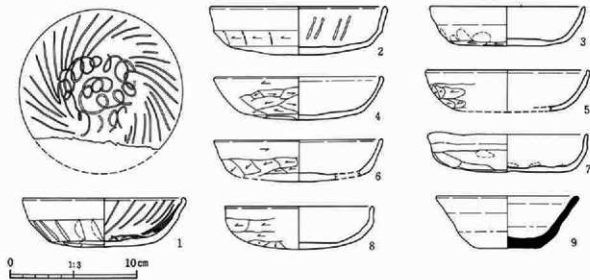
竈は、東辺の中央から65cm程南寄りの位置に川原石と粘土を使用して構築されていた。袖が約30cm張り出し、燃焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅60cm・奥行90cmを測る。大型の竈である。火床面には支石が倒れた状態で残っていた。また、竈の天井と思われる粘土が一部残っていたが、かなり押し潰された状態であった。

遺物は、竈部分及び南東隅・西壁際に集中して出土した。

第2節 検出された遺構と遺物

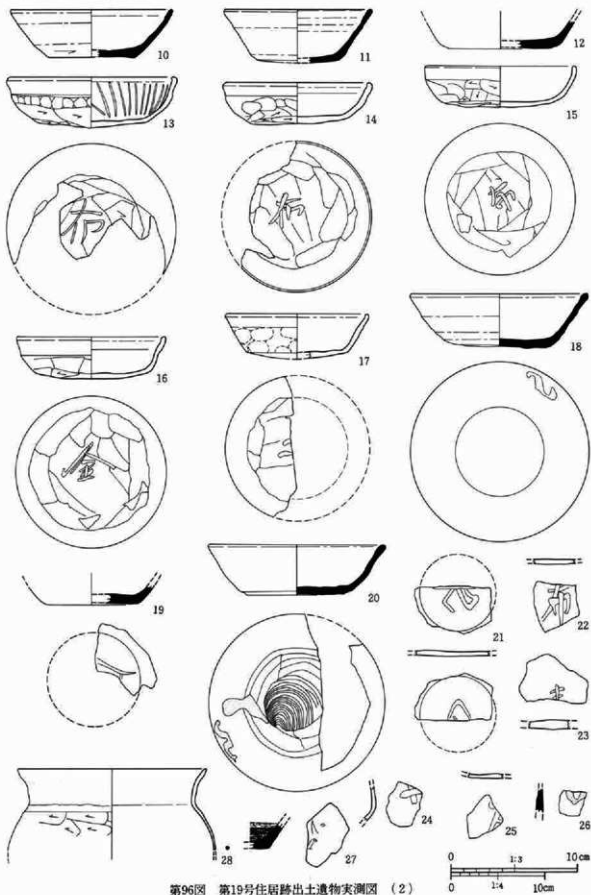


第94図 第19号住居跡実測図



第95図 第19号住居跡出土遺物実測図 (1)

第9章 青上上原之城遺跡



第96图 第19号住居跡出土遺物実測图 (2)

第45表 第19号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③組成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	3/4残存。 口 13.0cm 高 3.8cm	南壁際 床面直上。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部中央ナデ。底部周縁～体部裏削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。暗文を施す。	二重暗文有り。
2	杯 (土師器)	1/3残存。 口 14.2cm 高 3.8cm	南東部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部中央ナデ。底部周縁～体部裏削り。口縁部横ナデ。 内面 器面の荒れが目立つ。底部ナデ。体～口縁部横ナデ。暗文を施す。	二重暗文有り。
3	杯 (土師器)	ほぼ定形。 口 12.3cm 高 3.1cm	南壁際 床面直上。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部裏削り。体部裏ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
4	杯 (土師器)	1/4残存。 口 13.5cm 高 3.4cm	西壁際 床面上7.5cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部裏削り。体部粗い裏ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
5	杯 (土師器)	1/4残存。 口 13.1cm 高 3.3cm	南西部 床面上15.5cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部裏削り。体部粗い裏ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
6	杯 (土師器)	1/3残存。 口 13.5cm 高 3.3cm	南及び東壁際 床面上4.5cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部裏削り。体部粗い裏ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
7	杯 (土師器)	4/5残存。 口 12.7cm 高 3.0cm	南西隅 床面直上。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部裏削り。体部粗い裏ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	歪みが著しい。
8	杯 (土師器)	1/2残存。 口 11.9cm 高 3.4cm	南西隅 床面直上。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部裏削り。体部粗い裏ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。 内外共に窪付着。	
9	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 11.3cm 高 4.1cm 底 5.0cm	北東隅 床面上3.0cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
10	杯 (須恵器)	1/5残存。 口 12.5cm 高 3.8cm 底 6.8cm	南東隅 床面直上。	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色。 ③濃灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部裏削り。体部下端裏削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
11	杯 (須恵器)	1/6残存。 口 11.8cm 底 4.5cm	竈内。	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部裏削り。体部下端裏削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	所謂ロクロ土師器。
12	杯 (須恵器)	底部小破片 底 8.2cm	南壁際 床面直上。	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部裏削り。 内面 回転によるナデ。	
13	杯 (土師器)	1/2残存。 口 13.5cm 高 4.0cm	南側 床面上7.5cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部裏削り。体部下半裏削り。体部上半裏ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。放射状暗文。軟文「布」。	底部外面に墨書有り。

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③地成	成・整形の特徴	備考
14	杯 (土師器)	3/4残存。 口 11.8cm 高 3.2cm	南西部地1地 点 床面上4.5cm。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部磨削り。体部粗い縄ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「布」。
15	杯 (土師器)	3/4残存。 口 12.0cm 高 3.2cm	西壁際地2地 点 床面直上。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部磨削り。体部粗い縄ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「布」。
16	杯 (土師器)	完形。 口 11.8cm 高 2.3cm	南東部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部磨削り。体部粗い縄ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「金」。
17	杯 (土師器)	1/3残存。 口 11.5cm	南壁際 床面上7.5cm。	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部磨削り。体部粗ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文不明。
18	杯 (須恵器)	完形。 口 14.1cm 高 4.1cm 底 7.5cm	南東隅 床面直上。	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部磨削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「乙」か。 所謂ククロ土師器。
19	杯 (須恵器)	底部小破片 底 6.5cm	南壁際 床面上4.5cm。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部磨削調整。 内面 回転によるナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「金」か。
20	杯 (須恵器)	4/5残存。 口 14.0cm 高 4.0cm 底 7.8cm	南側4地点に 散在。 床面直上。	①砂粒を少し含む。 ②橙色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部磨削り。口縁部横ナデ。口縁部に煤付着。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「人」か。 所謂ククロ土師器。
21	杯 (土師器)	底部 1/3残存。	西壁際	①砂粒を含む。 ②明褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 磨削り。 内面 ナデ。	底部内外面に墨書有り。 釈文「人」か。
22	杯 (土師器)	小破片。	南壁際 床面直上。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 磨削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「布」。
23	杯 (土師器)	底部 1/3残存。	西壁際	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化灰・良好。	外面 磨削り。 内面 ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文不明。
24	杯 (土師器)	小破片。	覆土中。	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部磨削り。体部磨ナデ。 内面 ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「布」か。
25	杯 (土師器)	小破片。	覆土中。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化灰・良好。	外面 磨削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文不明。
26	杯 (須恵器)	小破片。	南側 床面上6.0cm。	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。 所謂ククロ土師器か。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
27	杯 (須恵器)	小破片。	南東部及び 壺内。	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転口ワロ成形。底部回転承切り後、無調整。 内面 丁寧な施磨き。黒色処理。 所謂口ワロ土師器。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明。
28	壺 (土師器)	1/2残存。 口 cm	南東部。	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部施磨り。頸部施ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部施ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第20号住居跡（第97・98図、図版24・25・60・61） 位置 706.0Dグリッドの北側

本住居跡は、16号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、本住居が後出するために遺存状態は極めて良好であった。また、下層の覆土中からは炭化材が出土しており、本住居が焼失家屋であることを物語っていた。平面形は、南北方向が長く、北辺の東側がやや歪んだ隅丸方形を呈する。

規模は、東辺3.75m・南辺3.3m・西辺3.6m・北辺3.3mを測り、主軸方位はN4°Eである。周溝部分を除いた床面積は8.75㎡である。

壁は、5°前後の傾斜を以てローム層まで掘り込まれており、現存高29～44cmを測る。

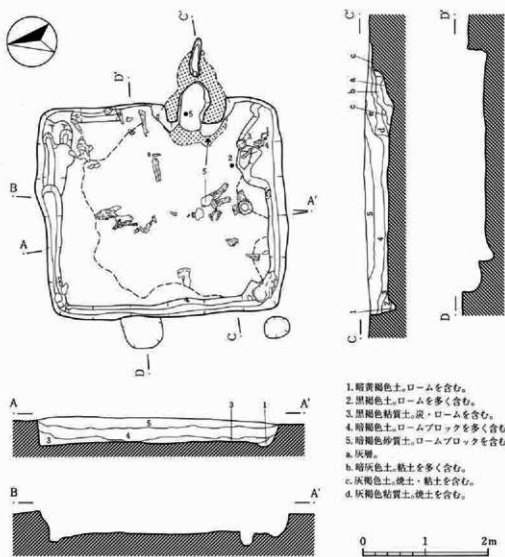
床面には多少の凹凸が認められたが、北側の両隅部分を除いて強く踏み固められていた。また、東辺の南側を除いて、幅約15cm・深さ4～9cmの周溝が検出された。床面の調査によって、住居のほぼ中央に径約120cm・深さ22cmのロームブロック及び粘土の詰まった床下土坑を検出したが、遺物は出土しなかった。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東壁の南東隅から130cm程北寄りの位置に、地山層を馬蹄形に掘り込み、灰色粘土を使用して構築されており、燃焼部はほぼ壁際に有る。東壁から40～50cm袖が張り出しており、焚口幅40cm・奥行85cmを測り、その先に70cmに亘って煙道が確認された。火床面下には特別な施設は認められなかった。

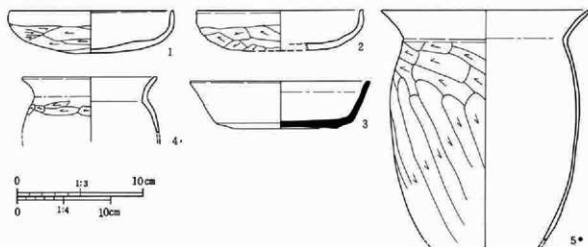
遺物は、南東部に集中して出土した。

第46表 第20号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	ほぼ完形。 口 12.9cm 高 3.3cm	南東隅 床面上12.5cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施磨り。口縁部横ナデ。 内面 底部施ナデ。体～口縁部横ナデ。 内外共に光沢のある輝行者。	二次焼成に よりやや軟 質化。
2	杯 (土師器)	1/4残存。 口 13.3cm	南東部 床面上22.3cm	①ほぼ均質。 ②にふい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施磨り。体部施ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
3	杯 (須恵器)	口縁1/4欠損 口 14.3cm 高 3.6cm 底 8.5cm	南東部 床面直上に正 位の状態で。	①砂粒及び細礫を少 し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口ワロ成形。底部回転承切り後、周 縁部施磨り。 内面 回転によるナデ。	



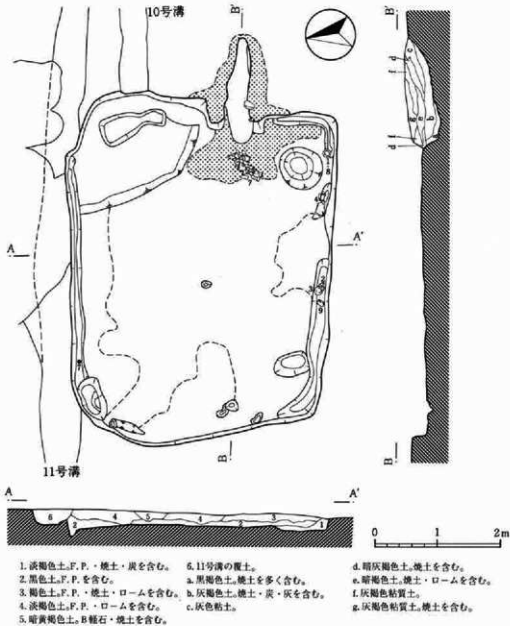
第97図 第20号住居跡実測図



第98図 第20号住居跡出土遺物実測図

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
4	壺 (土師器)	体-口縁部 ほぼ完形。 口 14.3cm	南東部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 体部直削り。頸部直ナデ。口縁部横ナデ。 内面 火はぜによる剝離が著しい。頸部直ナデ。 口縁部横ナデ。内外共に煤付着。	二次焼成に よりやや軟 質化。
5	壺 (土師器)	口縁-体部 1/2残存。 口 21.8cm	庭手前。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 体部斜め方向直削り。頸部横方向直削り。 口縁部横ナデ。 内面 直ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。火はぜに よる剝離痕有り。	二次焼成に よりやや軟 質化。

第21号住居跡（第99・100図、図版25・61） 位置 706.0Cグリッドの南側



第99図 第21号住居跡実測図

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

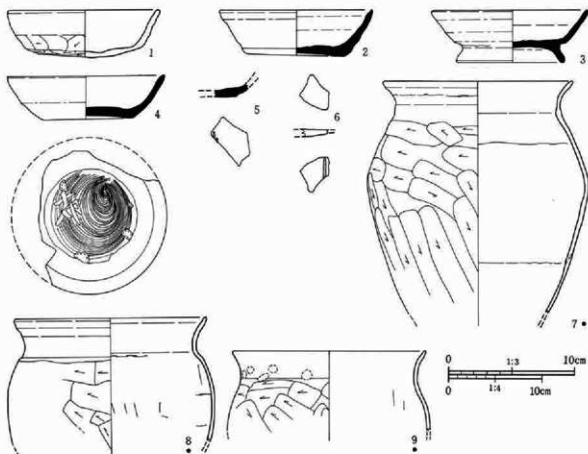
本住居跡は、10・11号溝と重複関係にあるが、北壁の上部を壊されたのみで、遺存状態は比較的良好であった。新旧関係については、地層断面の記録にも明らかなように本住居が先行する。平面形は、南北方向が長く、西辺がやや重んだ隅丸不整形を呈する。(北東隅の乱れは、5号風倒木の影響により、多少掘り過ぎてしまったためである。)

規模は、東西方向東辺4.90～5.65m・南北方向4.00～4.35mを測り、主軸方位はN15°Eである。周溝部分を除いた床面積は約18.6㎡である。

壁は、5°前後の傾斜を以てロー層層まで掘り込まれており、現存高25～33cmを確認した。なお、前述の通り、北東隅の壁面については明確な面を捉えられなかった。

床面はほぼ平坦であったが、周辺部が若干窪んでおり、壁際を除く大部分の範囲に亘って強く踏み固められていた。また、西辺を除いて、幅15～25cm・深さ約6cmの周溝が途切れながら存在することが確認された。貯蔵穴は、南東隅に、径約70cm・深さ30cmの截頭円錐形のものが検出された。床面下については、地山層を10cm掘り窪め、土を入れ換えて床としていたことが確認された。さらに、2個の床下土坑を検出した。遺憾ながら地層断面の記録が残されていないために性格は不明である。

遺物は、竈の手前及び南壁際に集中して出土した。



第100図 第21号住居跡出土遺物実測図

第47表 第21号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	完形。 口 12.2cm 高 3.7cm	南東隅 床面直上に正 位の状態。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部彫削り。体部軽い彫削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	
2	杯 (須恵器)	完形。 口 12.1cm 高 3.6cm 底 8.1cm	南壁際 床面直上。	①砂粒及び細礫を少し含む。 ②黄灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口口成形。底部回転糸切り後、周縁部彫削り。 内面 回転によるナデ。	
3	高台付椀 (須恵器)	ほぼ完形。 口 12.5cm 高 4.2cm 底 8.6cm	南壁際 床面直上。	①砂粒及び細礫を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口口成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
4	杯 (須恵器)	口縁1/2欠損 口 12.6cm 高 3.4cm 底 7.2cm	南壁際 床面直上。	①砂粒及び細礫を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口口成形。底部回転糸切り後、周縁部調整。 内面 回転によるナデ。	底部外面に墨書有り。釈文「布」。
5	杯 (須恵器)	底部小破片。	南方覆土内。	①ほぼ均質。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転口口成形。底部彫削り。 内面 斜磨が著しい。	底部外面に墨書有り。釈文不明。
6	杯 (土師器)	底部小破片。	覆土中。	①ほぼ均質。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 彫削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。釈文不明。
7	甕 (土師器)	3/4残存。 口 20.4cm	竈手前 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下半斜め方向彫削り。体部上半横方向彫削り。頸部彫削り後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 彫削り後、ナデ。口縁部横ナデ。	
8	甕 (土師器)	1/8残存。 口 20.5cm	南東部 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部斜め方向彫削り。頸部横方向彫削り。頸一口縁部彫削り後、横ナデ。 内面 体一頭部彫削り後、ナデ。口縁部横ナデ。	
9	甕 (土師器)	口縁部 1/4残存。 口 20.6cm	南壁際。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部彫削り。頸部彫削り後、ナデ。口縁部横ナデ。当頭圧痕有り。 内面 体部彫削り後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第22号住居跡 (第101・102図、図版25・61・62) 位置 706.0Dポイント東側

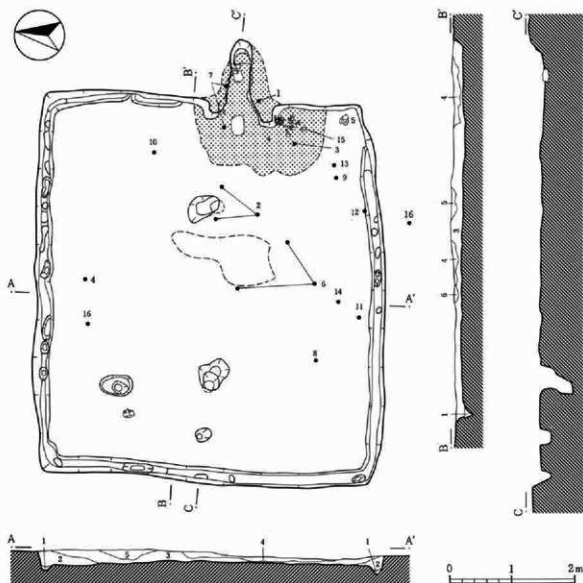
本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出された。平面形は、西辺がやや歪んだ、東西方向に長い隅丸方形を呈する。

規模は、東西方向5.56m・南北方向6.00mを測り、東辺の走向はN5°Eである。床面積は28.3㎡である。壁は5°前後の傾斜をもって掘り込まれており、ローム層の壁面を13~19cm確認した。

床面には多少の凹凸があるが、竈の手前及び中央部は強く踏み固められていた。南東隅を除いて、幅約15cm・深さ10~15cmの周溝が巡っていた。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から45cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋外に有り、焚口幅50cm・奥行90cmを測る。

遺物は南東部に集中して出土した。本住居の年代については9世紀前半の時期が考えられる。



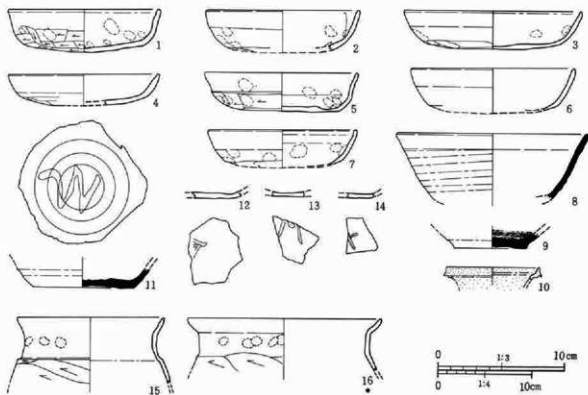
1. 暗黄褐色粘質土。
2. 黒褐色土、焼土・炭を含む。
3. 暗褐色土、F.P.・焼土・ロームを含む。
4. 暗褐色土、灰色粘土を含む。
5. 暗黄褐色土、焼土を含む。
6. 黄褐色土、焼土・ロームブロックを含む。

第101図 第22号住居跡実測図

第48表 第22号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/2残存。 口 12.1cm 高 3.4cm	竈上部。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部肥削り。体部粗い丸削り。口縁部横ナデ。火はぜによる刺離痕有り。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
2	杯 (土師器)	体一口縁部 1/4残存。 口 12.2cm	竈手前 床面上4.0cm。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部肥削り。体部粗い丸削り。口縁部横ナデ。 内面 底一体部肥削り痕が残る。口縁部横ナデ。	

第2節 検出された遺構と遺物



第102図 第22号住居跡出土遺物実測図

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③地成	成・整形の特徴	備考
3	杯 (土師器)	1/3残存。 口 14.1cm 高 3.2cm	竈手前 床面上4.5cm。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部蹴削り。体部胎頭圧痕有り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
4	杯 (土師器)	1/6残存。 口 12.0cm	北壁部。	①砂粒を含む。 ②橙色、黄褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部蹴削り。体部尾ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底一体部ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に繋付着。	
5	杯 (土師器)	ほぼ定形。 口 12.0cm 高 3.0cm	南東隅 床面上2.5cm。	①砂粒を含む。 ②明褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部蹴削り。体部粗い蹴削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
6	杯 (土師器)	1/4残存。 口 13.0cm	中央部。	①ほぼ均質。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部蹴削り。体部粗い蹴削り。口縁部横ナデ。 内面 体～口縁部横ナデ。 内外共に繋付着。	
7	杯 (土師器)	1/4残存。 口 11.9cm	竈周辺。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部蹴削り。体部粗い蹴削り。口縁部横ナデ。 内面 体～口縁部横ナデ。 内外共に繋付着。	
8	高台付碗 (須恵器)	体～口縁部 1/5残存。 口 15.2cm	南西部 床面上7.5cm。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転口クロ成形成。体部下端に高台貼付け後のナデが残る。 内面 回転によるナデ。	

第III章 書上上原之城遺跡

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
9	杯 (須恵器)	底部残存。 底 5.7cm	南東部 床面上13.0cm	①ほぼ均質。 ②にぶい褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周辺部磨削り。 内面 細かな荒磨き。黒色処理。	所謂ロクロ土師器。
10	瓶 (灰輪)	口縁1/8残存 口 10.3cm	北東部 床面直上。	①精選された胎土。 ②オリーブ褐色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 濃緑褐色釉を施す。	
11	杯 (須恵器)	底部残存。 底 8.0cm	南壁際 床面上10cm。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、未調整。 内面 回転によるナデ。内外共に薬付着。	底部内面に墨書有り。 釈文不明。
12	杯 (土師器)	底部小破片。	南壁際 床面上6.5cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 磨削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「金」か。
13	杯 (土師器)	底部小破片。	南東部 床面上11.5cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 磨削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「布」か。
14	杯 (土師器)	底部小破片。	南壁際 床面直上。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 磨削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「布」か。
15	甕 (土師器)	口縁1/6残存 口 15.7cm	竜右傍 床面上6.5cm。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 体部磨削り。頸部薬ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部薬ナデ。口縁部横ナデ。	
16	甕 (土師器)	1/4残存。 口 20.8cm	北西部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 体部磨削り。頸部薬ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部薬ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に薬付着。	二次焼成によりやや軟質化。

第23号住居跡（第103図、図版25） 位置 705.5Eグリッド北東部

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、西辺がやや歪み、南北方向が若干長い隅丸方形を呈する。

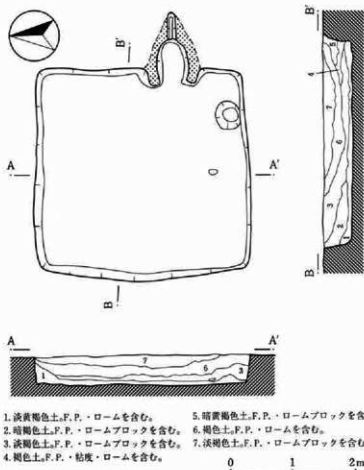
規模は、東西方向3.21m・南北方向3.45mを測り、東辺の走向はN3°Eである。床面積は9.7㎡である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高40～44cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、周溝及び柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東部に有り、径40～44cm・深さ26cmで、截頭円錐状に掘り込まれていた。

竈は、東辺の中央から40cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が約20cm張り出し、燃焼部は屋外に有り、焚口幅34cm・奥行66cmを測る。

遺物は覆土中より土師器・須恵器の細片が出土したのみで、実測に耐えられるような接合関係は得られなかった。



1. 淡黄褐色土、F.P.・ロームを含む。 5. 暗黄褐色土、F.P.・ロームブロックを含む。
 2. 暗褐色土、F.P.・ロームブロックを含む。 6. 褐色土、F.P.・ロームを含む。
 3. 淡褐色土、F.P.・ロームブロックを含む。 7. 淡褐色土、F.P.・ロームブロックを含む。
 4. 褐色土、F.P.・粘度・ロームを含む。

0 1 2m

第103図 第23号住居跡実測図

第24号住居跡（第104・105図、図版26・62） 位置 705.5 Hグリッド西側

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出された。平面形は、南辺がやや歪み、東辺の北半部が若干張り出した隅丸方形を呈する。

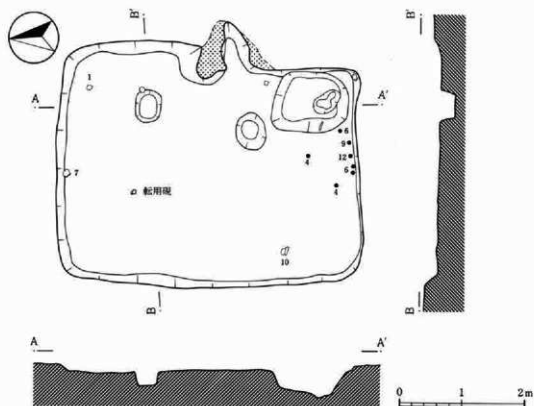
規模は、東西方向3.36～3.78m・南北方向4.83mを測り、西辺の走向はN7°Eである。床面積は15.0㎡である。

壁は12°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高9～15cmのローム層の壁面を確認した。

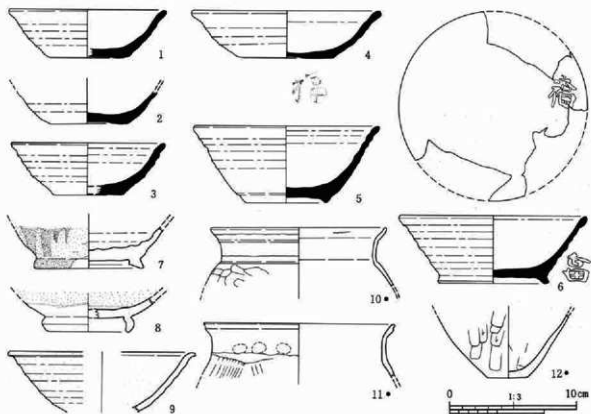
床面はほぼ平坦で、周溝及び柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に有り、120×100cmの隅丸方形で、深さは30cmである。

竈は、東辺の中央から30cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。燃燒部は屋外に有り、焚口幅35cm・奥行75cmを測る。

遺物は南東部に集中して出土した。本住居の年代については9世紀後半の時期が考えられる。



第104図 第24号住居跡実測図



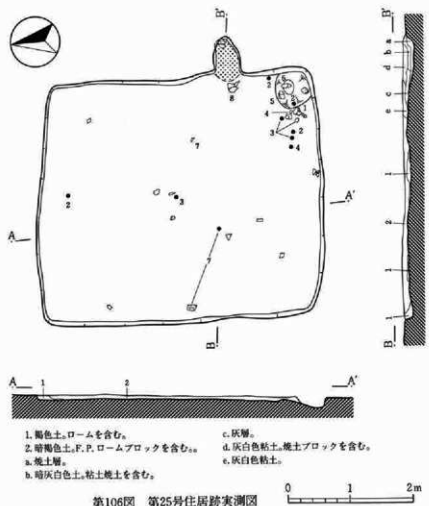
第105図 第24号住居跡出土遺物実測図

第49表 第24号住居跡出土土物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	1/8残存。 口 12.5cm 高 4.3cm 底 6.8cm	北東部 床面上5.5cm。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。 内外共に扉付き。	二次焼成によりやや軟質化。
2	杯 (須恵器)	底部残存。 底 6.0cm	南東部。	①砂粒を含む。 ②黄灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。扉付き。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
3	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 12.2cm 高 4.1cm 底 5.6cm	床面直上。	①砂粒及び細礫を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に扉付き。	
4	杯 (須恵器)	完形。 口 15.1cm 高 3.7cm 底 7.2cm	南壁際 床面上18cm。	①砂粒及び細礫を多く含む。 ②にふい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部調整。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部外面に墨書有り。 教文「福」。
5	高台付杯 (須恵器)	1/4残存。 口 14.8cm 高 6.0cm 底 6.9cm	南東部	①砂粒及び細礫を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6	高台付杯 (須恵器)	2/3残存。 口 14.8cm 高 6.0cm 底 6.9cm	南壁際 床面上20cm。	①砂粒及び細礫を含む。 ②浅黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内外面に墨書有り。 教文「福」。
7	瓶 (灰釉)	底部残存。 底 8.6cm	北壁際 床面上6.0cm。	①精選された胎土。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転調整。貼付け高台。漬け掛けによる緑褐色釉。 内面 回転によるナデ。底面の一部に緑褐色釉。	
8	瓶 (灰釉)	1/2残存 底 7.3cm	覆土中。	①精選された胎土。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転調整。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。 内外共に漬け掛けによる緑褐色釉。	
9	瓶 (灰釉)	1/4残存。 底 7.3cm	南壁際 床面上20cm。	①精選された胎土。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に漬け掛けによる淡緑褐色釉。	
10	壺 (土師器)	1/4残存。 口 18.6cm	南西部 床面上4.0cm。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部彫削り。肩部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体一筋部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
11	壺 (土師器)	1/6残存。 口 20.3cm	窟内。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部彫削り。肩部削い渡ナデ。頸部圧痕有り。口縁部横ナデ後、横ナデ。 内面 体一筋部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
12	壺 (土師器)	底一部份 残存。 底 4.2cm	南壁際 床面上19.5cm。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部彫削り。扉付き。 内面 横ナデ後、ナデ。	

第25号住居跡 (第106・107図、図版26・62) 位置 705.5Hグリッド南東部

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出された。平面形は、各辺が若干張り出した隅丸不整形を呈す



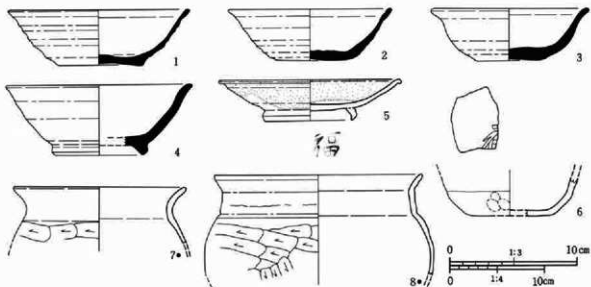
第106図 第25号住居跡実測図

る。規模は、東西方向3.81~3.90m・南北方向4.29~4.59mを測り、西辺の走向はN4°Eである。床面積は16.5m²である。

壁は、確認面からの掘り込みが浅く、現存高8~13cmのローム層の壁面を確認した。

床面には多少の凹凸があり、周溝及び柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅にあり、径約60cm・深さ38.5cmで、截頭円錐状に掘り込まれていた。

竈は、東辺の中央から75cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋外に有り、焚口幅40cm・奥行65cmを測る。



第107図 第25号住居跡出土遺物実測図

第2節 検出された遺構と遺物

遺物は、南東隅及び中央部に集中して出土した。本住居の年代については9世紀後半の時期が考えられる。

第50表 第25号住居跡出土遺物観察表

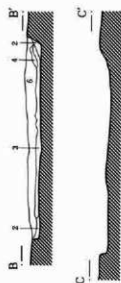
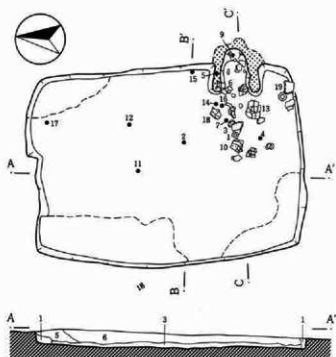
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	1/2残存。 口 14.4cm 高 4.1cm 底 6.7cm	南東隅 床面直上。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に窪付着。	二次焼成によりやや軟質化。
2	杯 (須恵器)	4/5残存。 口 12.9cm 高 3.9cm 底 6.0cm	南東隅及び北 側 床面直上。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部差削り調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3	杯 (須恵器)	3/4残存。 口 12.1cm 高 4.0cm 底 5.3cm	南東隅及び中 央部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部差調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4	高台付碗 (須恵器)	1/3残存。 口 14.6cm 高 5.5cm 底 7.6cm	南東隅 床面直上。	①砂粒及び細礫を含む。 ②黒色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部切り離し技法不明。貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に窪付着。	二次焼成によりやや軟質化。
5	皿 (灰釉)	1/3残存。 口 14.5cm 高 3.2cm 底 7.4cm	貯蔵穴内。	①精選された胎土。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部差削り。体部下平差削り。貼付け高台。 内面 底部ナデ。体-口縁部回転によるナデ。 内外共に溜け掛けによる緑褐色釉。	底部外面に墨書有り。 釈文「福」。
6	杯 (土師器)	底一体部 1/6残存。	貯蔵穴内。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部差削り。体部下平差ナデ。体部上半横ナデ。 内面 底部ナデ。体部横ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「福」。
7	壺 (土師器)	1/2残存。 口 18.4cm	南西部 床面直上。	①砂粒及び陶鉄鉱粒を含む。 ②橙褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部差削り。頸部差ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体-頸部差ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
8	壺 (土師器)	1/3残存。 口 22.1cm	籠手前 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②橙褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部差削り。頸部差ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体-頸部差ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第26号住居跡(第108~110図、図版26・63) 位置 705.5Eポイント西側

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出された。平面形は、各辺が若干張り出した隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.85~3.00m・南北方向4.26~4.35mを測り、東辺の走向はN10°Eである。床面積は11.6㎡である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、ローム層の壁面を9~22cm確認した。

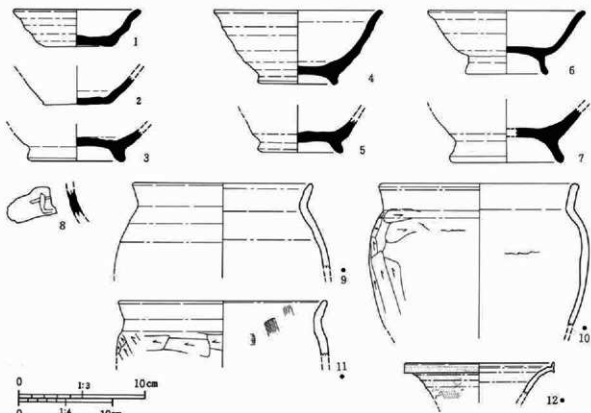
床面には多少の凹凸があるが、北東隅及び西縁部を除いて、強く踏み固められていた。なお、周溝・柱穴



第108図 第26号住居跡実測図



1. ロームブロック。
2. 淡褐色土、F、Pを含む。
3. 黒色土、F、Pを含む。
4. 黒色土、F、P・焼土を含む。
5. 淡褐色土、F、P・ロームブロックを含む。
6. 暗褐色土、F、P・ロームを含む。



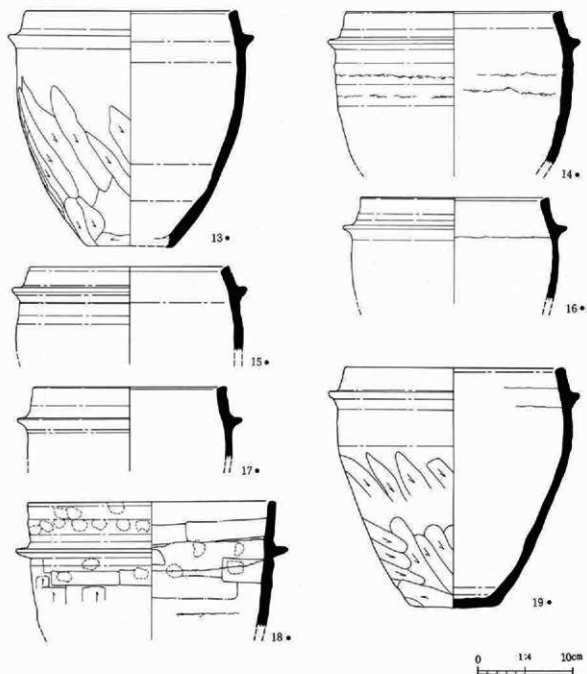
第109図 第26号住居跡出土遺物実測図 (1)

及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から90cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。燃焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅45cm・奥行50cmを測る。

遺物は竈の手前に集中して出土した。本住居の年代については10世紀後半の時期が考えられる。

第27号住居跡 欠番



第110図 第26号住居跡出土遺物実測図 (2)

第51表 第26号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 10.2cm 高 2.7cm 底 5.2cm	竈手前 床面上5.0cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炭・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
2	杯 (須恵器)	1/2残存。 底 5.4cm	中央部 床面上7.0cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炭・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 底部ナデ。体部回転によるナデ。	
3	高台付椀 (須恵器)	底部残存。 底 7.8cm	竈手前 床面上6.0cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炭・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。横付着。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
4	高台付椀 (須恵器)	1/2残存。 口 13.4cm 高 5.8cm 底 6.4cm	竈手前 床面上9.5cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炭・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。 内外共に横付着。	二次焼成によりやや軟質化。
5	高台付椀 (須恵器)	底部残存。 底 6.8cm	竈内。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炭・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
6	高台付椀 (須恵器)	1/3残存。 口 12.1cm 高 5.0cm 底 6.3cm	竈内。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炭・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
7	高台付椀 (須恵器)	1/2残存。 底 9.0cm	竈手前 床面上13.5cm。	①砂粒を含む。 ②浅黄褐色。 ③酸化炭・硬質。	外面 右回転口クロ成形。貼付け高台。ナデのため底部切り離し技法不明。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
8	杯 (須恵器)	体部小破片	覆土中。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転口クロ成形。 内面 回転によるナデ。横付着。	体部外面に形書有り。 釈文「七」か。
9	羹 (土師器)	1/5残存。 口 19.1cm	竈内。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③酸化炭・硬質。	外面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に横付着。	二次焼成によりやや軟質化。
10	羹 (土師器)	2/3残存。 口 21.1cm	竈手前 床面上5.5cm。	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色。 ③酸化炭・硬質。	外面 体部縦方向施削り。肩部横方向施削り。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に横付着。	二次焼成によりやや軟質化。
11	羹 (土師器)	口縁部1/4残存。 口 22.0cm	中央部 床面上12.0cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炭・硬質。	外面 肩部縦方向施削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に横付着。	二次焼成によりやや軟質化。
12	甌 (灰輪)	口縁1/8残存。 口 16.0cm	北東部 床面上4.0cm。	①砂粒及び細礫を少し含む。 ②暗褐色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転口クロ成形。緑褐色釉。 内面 回転によるナデ。	
13	羽釜 (須恵器)	1/2残存。 口 22.3cm 高 24.8cm 底 9.0cm	竈手前 床面上8.0cm。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炭・硬質。	外面 横方向寛ナデ。体部下平斜め方向施削り。 鈿貼付け。口唇部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 粗い寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
14	羽釜 (須恵器)	1/2残存。 □ 22.8cm	籠手前 床面直上。	①砂粒を少し含む。 ②灰黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 体部下半部方向歪ナダ後、ナダ。体部上半 横方向歪ナダ。跗貼付け。口唇部歪ナダ。口縁部 横ナダ。 内面 横方向歪ナダ。口縁部横ナダ。	
15	羽釜 (須恵器)	1/4残存。 □ 21.2cm	東壁部 床面上16.5cm。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 横方向歪ナダ。跗貼付け。口唇部歪ナダ。 口縁部横ナダ。 内面 横方向歪ナダ。口縁部横ナダ。	
16	羽釜 (須恵器)	1/5残存。 □ 19.8cm	籠手前 床面上15.0cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 横方向歪ナダ。跗貼付け。口唇部歪ナダ。 口縁部横ナダ。 内面 横方向歪ナダ。口縁部横ナダ。	17と同一個 体の可能性 有り。
17	羽釜 (須恵器)	1/3残存。 □ 20.6cm	北東部 床面上8.5cm。	①砂粒を含む。 ②浅黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 横方向歪ナダ。跗貼付け。口唇部歪ナダ。 口縁部横ナダ。 内面 横方向歪ナダ。口縁部横ナダ。	16と同一個 体の可能性 有り。
18	羽釜 (須恵器)	口縁部小破 片 □ 26.2cm	籠手前 床面上15.0cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 粗い横方向歪ナダ。跗貼付け。口唇部歪ナ ダ。口縁部横ナダ。 内面 粗い横方向歪ナダ。口縁部横ナダ。指頭圧 痕有り。	個の可能性 有り。
19	羽釜 (須恵器)	1/4残存。 □ 23.4cm 高 25.4cm 底 9.0cm	南東隅 床面上7.5cm。	①砂粒を多く含む。 ②浅黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 横方向歪ナダ。体部下半部方向歪削り。 跗貼付け。口唇部歪ナダ。口縁部横ナダ。 内面 粗い歪ナダ後、ナダ。口縁部横ナダ。	

第28号住居跡（第111・112図、図版26・64） 位置 705.0G グリッド中央部

本住居跡は、20号溝によって一部擾乱を受けていたが、遺存状態は比較的良好であった。平面形は、南北方向が若干長いが、均整のとれた隅丸方形を呈する。

第52表 第28号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	高台付杯 (須恵器)	4/5残存。 □ 13.1cm	南東隅 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転クロコ成。底部回転糸切り。 体部削削り後、高台貼付け。口縁部横ナダ。 内面 歪ナダ後、ナダ。口縁部横ナダ。	高台割落。
2	杯 (須恵器)	完形。 □ 12.7cm 高 4.2cm 底 5.5cm	貯蔵穴中。	①砂粒を多く含む。 ②灰黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転クロコ成。底部回転糸切り後、未 調整。口縁部横ナダ。 内面 回転によるナダ。	
3	高台付瓶 (須恵器)	ほぼ完形。 □ 13.6cm 高 5.9cm 底 7.2cm	竈内に散在。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転クロコ成。ナダのため底部切り難 し技法不明。貼付け高台。 内面 回転によるナダ。 内外共に塗付着。	二次焼成に よりやや軟 質化。
4	罎 (土師器)	口縁部 1/5残存。 □ 22.3cm	南東部 床面上8cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部削削り。口縁部横ナダ。 内面 体部歪ナダ。口縁部横ナダ。 内外共に塗付着。	

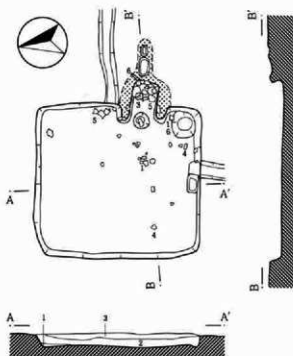
第11章 書上上原之城遺跡

規模は、東西方向2.40m・南北方向2.64mを測り、西辺の走向はN13°Eである。床面積は5.4㎡である。壁は5°前後の傾斜を以て掘り込まれており、ローム層の壁面を13~25cm確認した。

床面はほぼ平坦で、周溝及び柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に有り、径約42cm・深さ25cmで、截頭円錐状に掘り込まれていた。

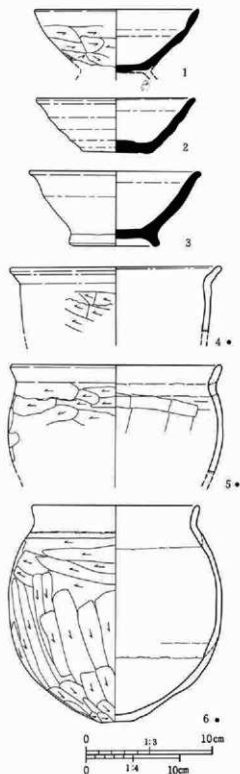
竈は、東辺の中央から40cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が約24cm張り出し、燃烧部は屋外に有り、焚口幅40cm・奥行70cmを測る。

遺物は竈内及び南半部に集中して出土した。本住居の年代については10世紀前半の時期が考えられる。



1. ロームブロック。
2. 黒褐色土、F.P.・ロームブロックを含む。
3. 褐色土、F.P.を含む。

第111図 第28号住居跡実測図



第112図 第28号住居跡出土遺物実測図

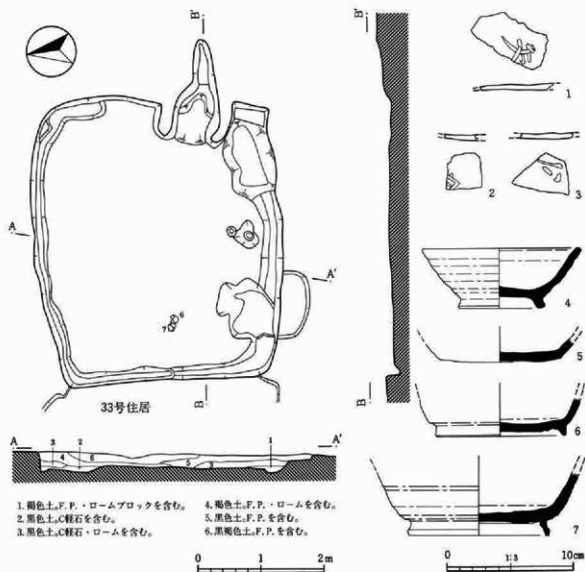


第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・注量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
5	壺 (土師器)	1/3残存。 口 22.2cm	竈内に散在。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部荒削り。口縁部横ナデ。 内面 体部荒ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	二次焼成によりやや軟質化。
6	壺 (土師器)	1/2残存。 口 17.8cm 高 23.6cm 底 3.8cm	竈内及び野蔵 穴付近に散在。 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部砂底。体部荒削り。肩部荒ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部下半ナデ。体部上半荒ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。内外共に煤付着。	

第29号住居跡 (第113・114図、図版27・64) 位置 705.0Gポイント

本住居跡は、33号住居の一部を壊して構築されていた。南辺の一部に攪乱が認められたが、平面形は、東



第113図 第29号住居跡実測図

第114図 第29号住居跡出土遺物実測図

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

西方向が長く、北辺及び東辺がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。

規模は、東西方向4.20～4.56m・南北方向3.45～3.75mを測り、西辺の走向はN5°Eである。床面積は12.4m²である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高30～45cmのローム層の壁面を確認した。

床面には多少の凹凸があり、全体的に強く踏み固められていた。東辺の一部を除いて、幅約25cm・深さ5cmの周溝が巡っていた。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から30cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が約50cm張り出し、燃燒部はちょうど壁際に有り、焚口幅47cm・奥行96cmを測る。

遺物は少なかったが、覆土中から3点の墨書土器が出土しており、須恵器碗(7)も硯に転用された可能性がある。本住居の年代については8世紀後半の時期が考えられる。

第53表 第29号住居跡出土土物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	底部小破片	覆土中。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 蔑削り。 内面 ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「矢」か。
2	杯 (土師器)	底部小破片	覆土中。	①砂粒を含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 蔑削り。 内面 ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「奥」か。
3	杯 (土師器)	底部小破片	覆土中。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 蔑削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「集」か。
4	高台付椀 (須恵器)	1/4残存。 口 12.6cm 高 4.8cm 底 7.0cm	覆土中。	①砂粒及び細礫を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5	高台付椀 (須恵器)	底部完存。 底 9.6cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部蔑削り。 内面 回転によるナデ。	所謂ロクロ土師器。
6	杯 (須恵器)	底部完存。 底 10.2cm	南西部 床面上19cm。	①砂粒及び細礫を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、全面粗い蔑削り。高台貼付け。 内面 回転によるナデ。摩耗が著しい。	転用瓶か?
7	高台付椀 (須恵器)	2/3残存。 底 11.1cm	南西部 床面上25.5cm。	①砂粒及び細礫を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部蔑削り。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。少し摩耗している。	

第30号住居跡 (第115・116図、図版27・64) 位置 704.5Gグリッド

本住居跡は、竈の痕跡及び遺物の分布によってその存在を確認したに過ぎず、明確な図面を残し得なかった。詳細不明。

第31号住居跡 (第115・117図、図版27・65) 位置 704.5Gグリッド

本住居跡は、6号溝によって中央部を壊されていた。平面形は、西辺がやや張り出した隅丸不整形方を呈する。

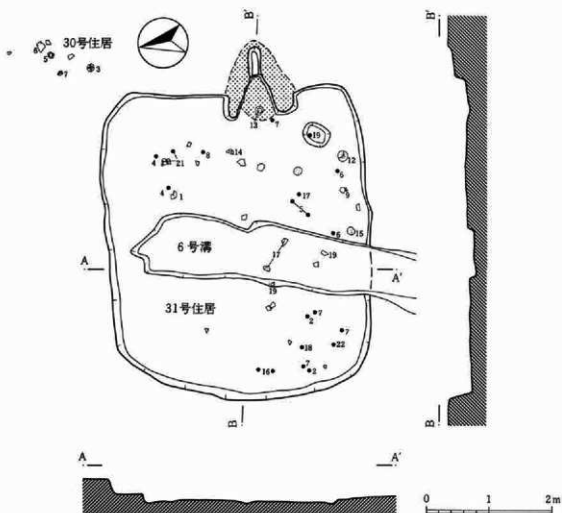
規模は、東西方向4.65m・南北方向4.05~4.20mを測り、東辺の走向はN16.5°Eである。床面積は19.1㎡である。

壁は、5°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高23~27cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、全面に亘って強く踏み固められていた。なお、周溝・柱穴及び貯藏穴は検出されなかった。

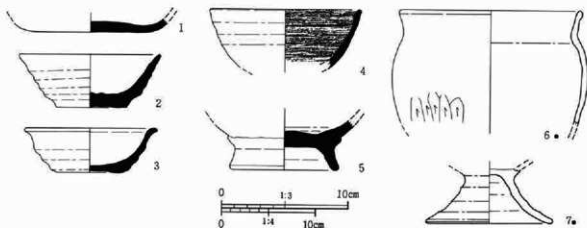
竈は、東辺の中央から30cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が約38cm張り出し、燃焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅60cm・奥行65cmを測る。

遺物は全域に散らばって出土した。本住居の年代については9世紀前半の時期が考えられる。



第115図 第30・31号住居跡実測図

第III章 書上上原之城遺跡

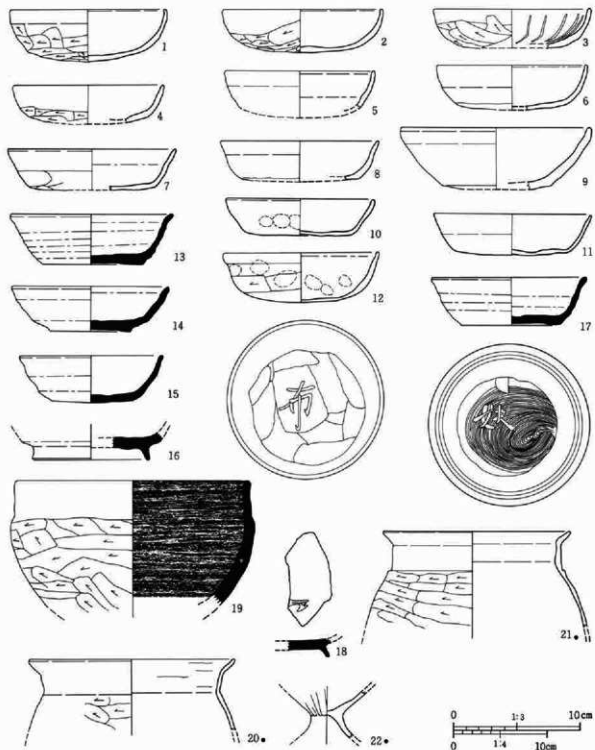


第116図 第30号住居跡出土遺物実測図

第54表 第30号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	鉢 (須恵器)	1/3残存。 底 8.6cm		①砂粒を含む。 ②赤色。 ③酸化炎・硬質。	外面 底-体部削り。 内面 回転によるナデ。底部に黒色付着物有り。 底部内面黒青有り。軟文不明。	所謂ロクロ土師器。
2	杯 (須恵器)	ほぼ完形。 口 11.2cm 高 4.2cm 底 5.6cm		①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転赤切り後、無調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に黒付着。	二次焼成によりやや軟質化。
3	杯 (須恵器)	完形。 口 10.6cm 高 3.5cm 底 5.3cm		①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転赤切り後、無調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
4	高台付輪 (須恵器)	1/6残存。 口 12.1cm		①砂粒を少し含む。 ②棕色。 ③酸化炎・良好。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部横ナデ。 内面 丁寧な磨き。黒色処理。	所謂ロクロ土師器。
5	高台付輪 (須恵器)	底部のみ。 底 8.7cm		①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転赤切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。 内外共に黒付着。	二次焼成によりやや軟質化。
6	壺 (土師器)	1/6残存。 口 19.5cm		①砂粒を含む。 ②浅黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部削り。頸部削り後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部削り後、ナデ。口縁部横ナデ。	
7	脚付壺 (土師器)	1/2残存。 底 10.2cm		①砂粒を多く含む。 ②棕色。 ③酸化炎・良好。	外面 横ナデ。 内面 削り後、ナデ。裾部横ナデ。	

第2節 検出された遺構と遺物



第117図 第31号住居跡出土遺物実測図

第55表 第31号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/2残存。 □ 12.4cm 高 4.1cm	北東部 床面上24cm。	①砂粒を少し含む。 ②黒褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部鈍削り。体部粗い丸削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。 内外共に扉着。	
2	杯 (土師器)	1/2残存。 □ 12.3cm 高 3.4cm	南西部 床面上20cm。	①砂粒を含む。 ②淡赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部鈍削り。体部粗い丸ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
3	杯 (土師器)	1/5残存。 □ 12.5cm	竈内。	①砂粒を含む。 ②浅黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部鈍削り。体部丸ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。粗い放射状 暗文を施す。	
4	杯 (土師器)	1/4残存。 □ 11.4cm	北東部 床面上12cm。	①砂粒を少し含む。 ②棕色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部鈍削り。体部粗い丸ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。 内外共に指頭瓦痕が多く残る。	
5	杯 (土師器)	1/4残存。 □ 12.0cm	南東部 床面上23cm。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部粗い丸ナデ。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ。	
6	杯 (土師器)	1/4残存。 □ 11.9cm	南東部 床面上11.5cm。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部鈍削り。体部粗い丸ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
7	杯 (土師器)	1/5残存。 □ 13.0cm	籠手前及び南 西部に散在。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部鈍削り。体部下半粗い丸ナデ。体部上 半～口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
8	杯 (土師器)	1/4残存。 □ 12.6cm	北東部 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②明褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部鈍削り。体部粗い丸ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
9	鉢 (土師器)	1/6残存。 □ 15.1cm	北東部 床面直上。	①砂粒を少し含む。 ②棕色。 ③酸化炎・硬質。	外面 底部鈍削り。体部下半丸削り。体部上半～ 口縁部横ナデ。 内面 体～口縁部横ナデ。	二次焼成に よりやや軟 質化。
10	杯 (土師器)	1/2残存。 □ 11.9cm 高 2.9cm	覆置土中。	①砂粒を含む。 ②棕色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部鈍削り。体部粗い丸ナデ。口縁部横ナ デ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
11	杯 (土師器)	1/3残存。 □ 12.5cm 高 3.3cm	竈内。	①砂粒を多く含む。 ②明褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部鈍削り。体部粗い丸ナデ。口縁部横ナ デ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	
12	杯 (土師器)	完形。 □ 12.5cm 高 3.9cm	南東部 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部鈍削り。体部粗い丸ナデ。口縁部横ナ デ。 内面 底部ナデ。体～口縁部横ナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文「布」。
13	杯 (須恵器)	1/4完形。 □ 12.9cm 高 4.0cm 底 8.1cm	竈内。	①砂粒及び細礫を多 く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転クワ口成形。底部回転糸切り後、周 縁部鈍削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	造・整形の特徴	備考
14	杯 (須恵器)	1/5残存。 口 12.5cm 高 3.55cm 底 6.5cm	甕手前 床面上22.5cm	①砂粒を多く含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ口成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
15	杯 (須恵器)	ほぼ完形。 口 11.4cm 高 3.25cm 底 6.4cm	南壁際 床面上6.0cm	①砂粒及び繊維を少し含む。 ②明赤褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ口成形。底部回転糸削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	所謂ロクロ土師器。
16	高台付椀 (須恵器)	底 9.4cm	南西部 床面上19.5cm	①砂粒及び繊維を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ口成形。底部削り。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。	
17	杯 (須恵器)	完形。 口 12.3cm 高 3.75cm 底 7.9cm	中央部 床面上9.0cm	①砂粒及び繊維を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ口成形。底部回転糸切り後、周縁部削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「[残]」。
18	高台付椀 (須恵器)	底部小破片。	南西部 床面上16.5cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ口成形。底部回転削り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文不明。
19	鉢 (須恵器)	1/5残存。 口 18.6cm	南西部 床面上19cm	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③還元炎・硬質。 ④酸化炎・良好。	外面 体部削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	所謂ロクロ土師器。
20	甕 (土師器)	口縁部小片 口 21.8cm	北東部 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・良好。	外面 体部削り。頂部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部削り後、ナデ。口縁部横ナデ。	
21	甕 (土師器)	1/4残存。 口 19.8cm	北東部。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③還元炎・良好。	外面 体部削り。頂部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部削り後、ナデ。口縁部横ナデ。	
22	脚付甕 (土師器)	底部破片。	南西部 床面上5.0cm	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③還元炎・良好。	外面 脚部ナデ。体部削り。 内面 脚部削りナデ。体部削り後、ナデ。	

第32号住居跡(第118・119図、図版27・65) 位置 707.0Hグリッド西側

本住居跡は、18・19・38号掘立柱建物跡と重複関係にある。先後関係については、19・38号掘立柱建物→本住居→18号掘立柱建物の順になると考えられる。平面形は、北辺及び西辺がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。

規模は、東西方向3.40～4.20m・南北方向3.30～4.11mを測り、東辺の走向はN9°Eである。床面積は11.5m²である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高7～24cmのローム層の壁面を確認した。

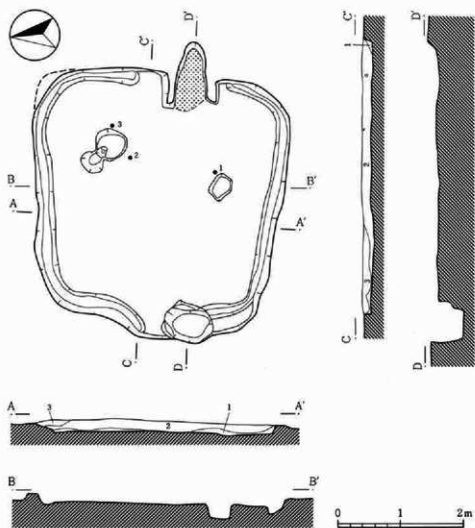
床面には多少の凹凸があり、西辺の一部を除いて、幅約15cm・深さ5cmの周溝が巡っていた。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から40cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が35cm張り出し、燃焼

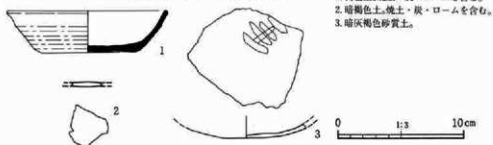
第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

部はちょうど壁際に有り、笑口幅48cm・奥行95cmを測る。

遺物は少なかつたが、本住居の年代については9世紀前半の時期が考えられる。



第118図 第32号住居跡実測図



1. 褐色土・焼土・炭・ロームを含む。
2. 暗褐色土・焼土・炭・ロームを含む。
3. 暗灰褐色砂質土。

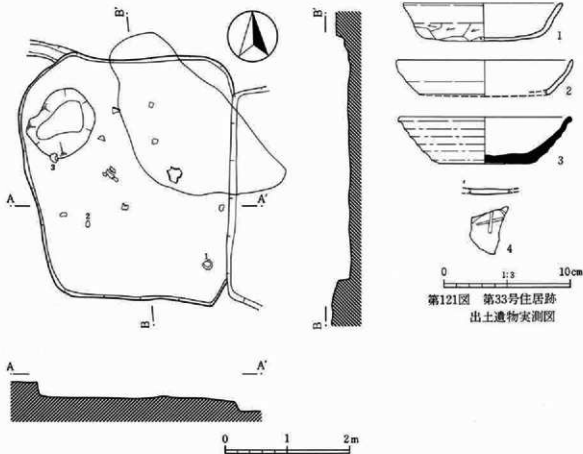
第119図 第32号住居跡出土遺物実測図

第56表 第32号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③地肌	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	完形。 口 12.8cm 高 3.3cm 底 7.4cm	南東部 床面上14cm。	①砂粒及び粗礫を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転糸切り後、中央を残し削り。体部下端削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2	杯 (土師器)	底部小破片。	北東部 床面上12cm。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文不明。
3	杯 (土師器)	底部のみ。	北東部 床面上10.5cm。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 削り。 内面 ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文四十か。

第33号住居跡 (第120・121図、図版27・66) 位置 705.0Gポイント西側

本住居跡は、前述の通り、29号住居によって東縁部を壊されてしまっており、遺存状態が芳しくなかった。平面形は、東・西両辺が歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.85～3.39m・南北方向3.90mを



第120図 第33号住居跡実測図

第121図 第33号住居跡
出土遺物実測図

第三章 書上上原之城遺跡

測り、南辺の走向はN11°Wである。

壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、現存高11～24.5cmのローム層の壁面を確認した。なお、北東部については風倒木痕があるために、黒褐色の壁面となっていた。

床面には多少の凹凸があり、あまりしっかりとしていなかった。周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されず、竈についても全く手掛かりを欠く。

遺物は全域に散らばって出土した。本住居の年代については8世紀中頃の時期が考えられる。

第57表 第33号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	ほぼ完成。 口 12.6cm 高 3.0cm	南東隅 床面上6.5cm。	①ほぼ均質。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。体部浅ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体→口縁部横ナデ。	
2	杯 (土師器)	1/4残存。 口 13.9cm	南西部 床面上4.0cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。体部浅ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体→口縁部横ナデ。	
3	杯 (須恵器)	1/2残存。 口 13.7cm 高 3.7cm 底 7.2cm	北西部 床面上18.0cm。	①砂粒及び細礫を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転クロコ成。底部回転糸切り後、周縁部丸削り。 内面 回転によるナデ。	
4	杯 (土師器)	底部小破片	覆土中。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 丸削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「本」か。

第34号住居跡（第122～124図、図版27・66） 位置 702.5Bグリッド

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、南・東両辺が歪んだ隅丸不整形を呈する。なお、本住居を特徴付ける事として、床面上約20cmの所から須恵器大甕(12)が潰れた状態で出土しており、住居の廃棄後さほど経ない時期に搬入されたと考えられるが、その意味するところは不明である。

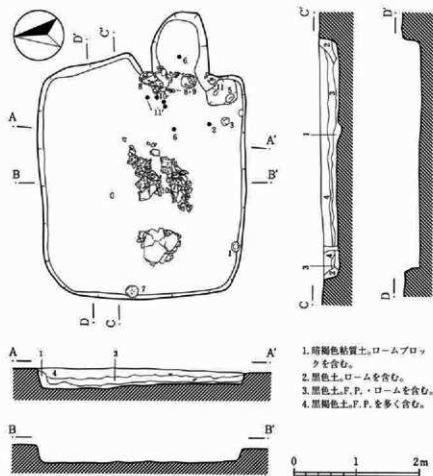
規模は、東西方向3.40～3.90m・南北方向3.15～3.30mを測り、西辺の走向は磁北と一致する。床面積は10.4㎡である。

壁は、3°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高20～30cmのローム層の壁面を確認した。

床面には多少の凹凸があり、全面に亘って強く踏み固められていた。南東隅が若干窪んでいたが、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から55cm程南寄りの位置に、粘土と土師器甕を使用して構築されていた。両方の袖の芯材に甕を倒立させ、さらに2個の甕を横に組み合わせて架構して焚口としていた。竈以北がやや張り出すために、北側の袖が35cm程住居内に出るが、燃焼部は屋外に有り、焚口幅42cm・奥行約90cmを測る。

遺物は、竈周辺に集中して出土した。本住居の年代については8世紀後半の時期が考えられる。

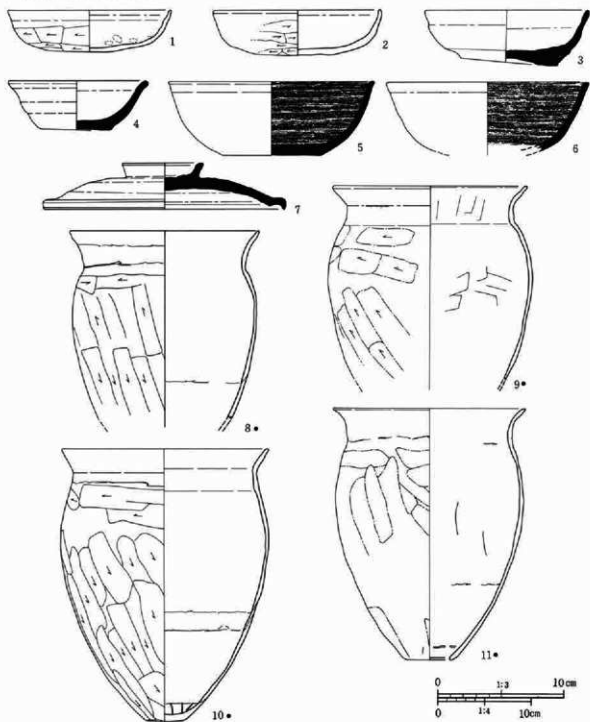


第122図 第34号住居跡実測図

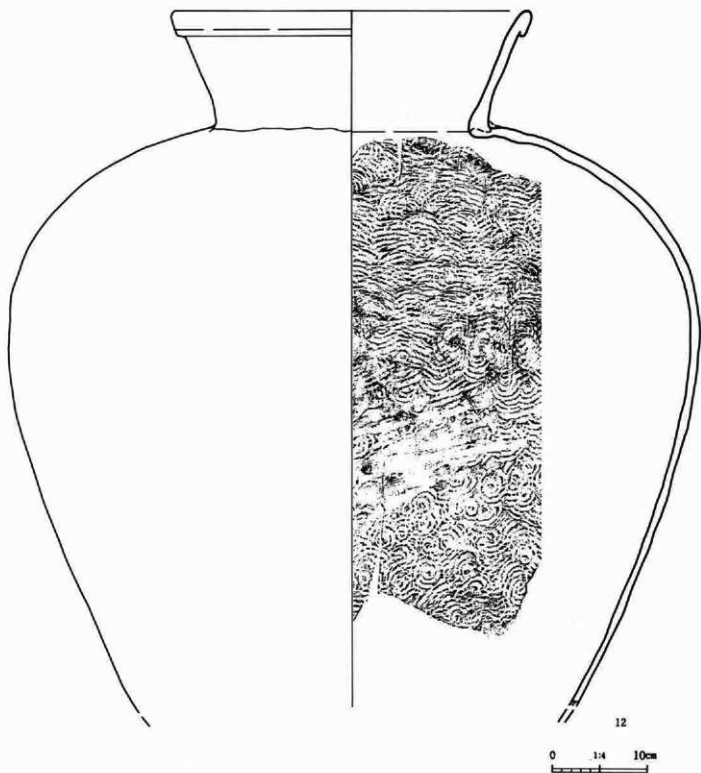
第58表 第34号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	定形。 口 13.0cm 高 3.3cm	南東部に正位 の状態。 床面上8.0cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。体部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体→口縁部横ナデ。	
2	杯 (土師器)	1/2残存。 口 13.4cm 高 3.05cm	南東部。	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。体部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体→口縁部横ナデ。	
3	杯 (須恵器)	2/3残存。 口 13.0cm 高 4.1cm 底 7.8cm	南東部 床面上5.5cm。	①砂粒及び細礫を含 む。 ②明オリーブ灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周 縁部丸削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4	杯 (須恵器)	定形。 口 11.1cm 高 3.8cm 底 5.7cm	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無 調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第三章 書上上原之城遺跡



第123図 第34号住居跡出土遺物実測図 (1)



第124図 第34号住居跡出土遺物実測図 (2)

第三章 書上上原之城遺跡

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
5	鉢 (須恵器)	1/2残存。 口 16.4cm 高 5.75cm 底 7.9cm	貯蔵穴内。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底一体部下半削り後、全体に丁寧な磨き。 内面 丁寧な磨き。黒色処理。	所謂ロクロ土師器。
6	鉢 (須恵器)	口縁部小片 口 16.1cm	竈内及び竈手前。 床面上5.5cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・硬質。	内外共に丁寧な削り。 内面 黒色処理。	5と同一個体か？
7	蓋 (須恵器)	完形。 口 19.2cm 高 4.6cm 横 5.5cm	西壁際に内面を上にして 床面上8.0cm。	①砂粒及び細礫を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。頂部回転削り後、横貼付け。 内面 回転によるナデ。	
8	蓋 (土師器)	1/3残存。 口 20.2cm	竈左袖の芯材	①砂粒を多く含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部削り。頂部蓋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 粗い蓋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
9	蓋 (土師器)	3/4残存。 口 20.6cm	竈右袖の芯材	①砂粒を多く含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部削り。頂部蓋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部蓋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
10	蓋 (土師器)	ほぼ完形。 口 22.0cm 高 28.7cm 底 4.2cm	竈手前 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部削り。体部縦方向削り。唇部横方向削り。口縁部横ナデ。 内面 体部蓋ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
11	瓶 (土師器)	2/3残存。 口 20.6cm 高 26.6cm 孔 2.4cm	竈手前 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部縦方向削り。唇部横方向削り。口縁部横ナデ。 内面 体部蓋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第35号住居跡（第125・126園、図版28・67） 位置 702.5C グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、南・北両辺がやや歪み、南北方向に長い台形状の隅丸方形を呈する。

規模は、東西方向3.09～3.30m・南北方向3.75～4.35mを測り、西辺の走向はN 3°Wである。床面積は11.

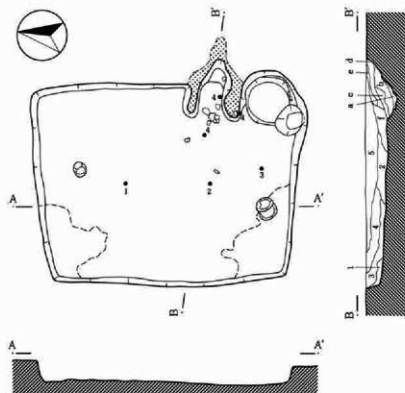
第59表 第35号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/2残存。 口 16.1cm	中央部 床面上4.0cm。	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部削り。体部蓋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。火はぜによる剥離痕有り。	
2	杯 (土師器)	1/5残存。 口 16.2cm	中央部 床面上4.5cm。	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底一体部削り。口縁部横ナデ。 内面 火はぜによる剥離が著しい。口縁部横ナデ。	

5㎡である。

壁は、5°前後の傾斜を以て掘り込まれており、ローム層の壁面を23~31cm確認した。

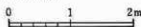
床面はほぼ平坦で、西側の両隅を除いて強く踏み固められていた。貯蔵穴は南東隅に有り、径80cm・深さ9cmで、あまりしっかりとしていなかった。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。



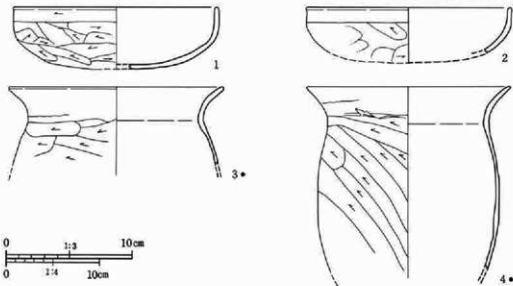
竈は、東辺の中央から50cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が約45cm張り出し、燃焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅45cm・奥行62cmを測る。

遺物は、覆土の上層部では土師器・須恵器の細片が多く見られたが、実測に耐えられるような接合関係が得られたものは、図示した4点だけである。本住居の年代については8世紀中頃の時期が考えられる。

第125図 第35号住居跡実測図



1. 黒褐色土、ロームを多く含む。
2. 黒褐色土、焼土を含む。
3. 暗褐色土、ロームを含む。
4. 暗褐色土、F.P.・ロームを含む。
5. 黒褐色土、F.P.を多く含む。
- a. 灰層。
- b. 灰色粘土、焼土・灰を含む。
- c. 暗褐色土、F.P.・焼土を含む。
- d. 灰褐色土、F.P.・焼土・粘土を含む。
- e. 暗褐色土、F.P.・焼土を含む。
- f. 暗褐色粘質土、焼土を含む。



第126図 第35号住居跡出土遺物実測図

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
3	甕 (土師器)	1/3残存。 口 22.9cm	南側 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部施削り。頂部施ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部施ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 火はぜによる割離が著しい。	
4	甕 (土師器)	1/3残存。 口 21.6cm	竈内に散在。	①砂粒を多く含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部削め方施削り。頂部施ナデ後、ナデ。 口縁部横ナデ。 内面 体部粗い施ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第36号住居跡(第127・128図、図版28・67) 位置 702.0Bポイント北側

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、北西隅を掘り過ぎてしまったが、比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。

規模は、東西方向3.00m・南北方向2.94mを測り、東辺の走向はN4°Wである。床面積は7.4㎡程になると思われる。

壁は、2°前後の傾斜を以て掘り込まれており、ローム層の壁面を21~26cm確認した。

床面には多少の凹凸があり、南半部が強く踏み固められていた。貯蔵穴は南東隅に有り、36×46cm・深さ6.5cmの不整形方形に掘り込まれていたが、あまりしっかりとしていなかった。

竈は、東辺の中央から30cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が50cm程張り出して、

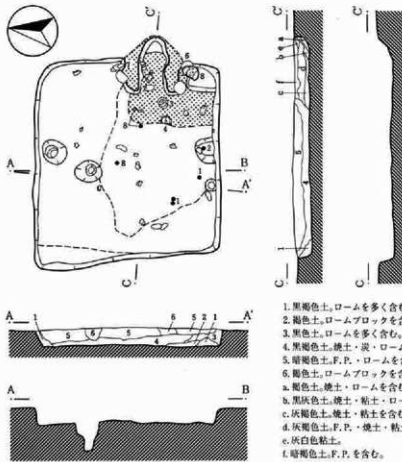
第60表 第36号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/3残存。 口 11.9cm	南側 床面上6.6cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施削り。体部施ナデ。口縁部横ナデ。 底面に黒斑有り。 内面 底部ナデ。体→口縁部横ナデ。 内外共に集付着。	
2	杯 (土師器)	1/2残存。 口 12.5cm 高 3.9cm	南側際 床面上11.5cm	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施削り。口縁部横ナデ。底面に黒斑有り。 内面 底部ナデ。体→口縁部横ナデ。	
3	杯 (土師器)	完形。 口 15.3cm 高 3.7cm	羅手前に正位の 状態。 床面上3cm。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施削り。体部施ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体→口縁部横ナデ。 内外共に火はぜによる割離が著しい。	二次焼成によりやや軟質化。
4	杯 (土師器)	3/4残存。 口 14.6cm 高 3.4cm	羅手前に正位の 状態。 床面上16cm。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施削り。口縁部横ナデ。 内面 火はぜによる割離有り。底部ナデ。口縁部横ナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
5	杯 (須恵器)	口縁小破片	掘り方内。	①砂粒及び細礫を少し含む。 ②にぶい黄橙色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロコク成形。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に集付着。	

第2節 検出された遺構と遺物

燃烧部はちょうど壁際に有り、
 焚口幅42cm・奥行70cmを測る。
 火床面の中央部からは石が出土
 したが、支脚に使用したものは
 なかった。

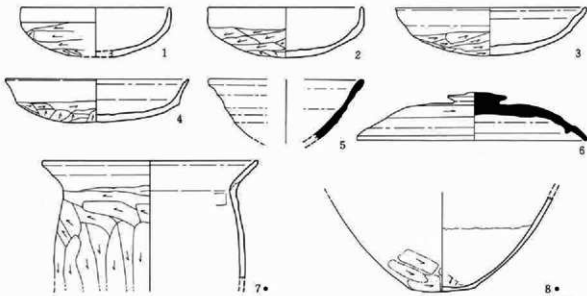
遺物は全域に散らばって出土
 した。本住居の年代については
 8世紀前半の時期が考えられ
 る。



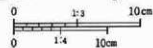
第127図 第36号住居跡実測図



1. 黒褐色土、ロームを多く含む。
2. 褐色土、ロームブロックを含む。
3. 黒色土、ロームを多く含む。
4. 黒褐色土、焼土・泥・ロームを含む。
5. 暗褐色土、F.P.・ロームを含む。
6. 褐色土、ロームブロックを含む。
- a. 褐色土、焼土・ロームを含む。
- b. 黒灰色土、焼土・粘土・ロームを含む。
- c. 灰褐色土、焼土・粘土を含む。
- d. 灰褐色土、F.P.・焼土・粘土を含む。
- e. 灰白色粘土。
- f. 暗褐色土、F.P.を含む。



第128図 第36号住居跡出土遺物実測図

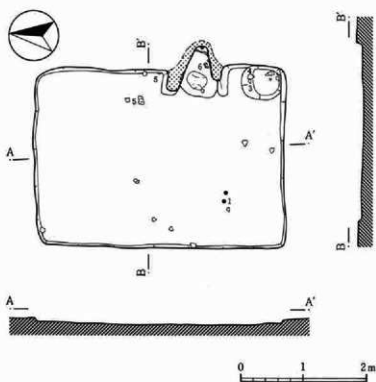


第三章 書上上原之城遺跡

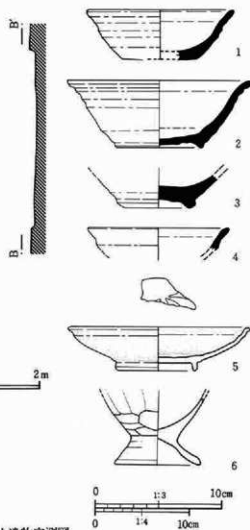
No	器種・器形	残存・分量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
6	蓋 (須恵器)	ほぼ完形。 口 18.3cm 高 3.8cm 横 4.6cm	蔵右袖上 床面上9.5cm。	①砂粒及び細礫を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 頂部回転削り後、つまみを付ける。縁部横ナデ。 内面 中央部指頭圧痕有り。縁部回転によるナデ。	右回転ロクロ成形。
7	甕 (土師器)	体～口縁部 1/4残存。 口 22.9cm	蔵左袖の外側 付近 床面上7.0cm。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部縦方向削り。肩部横方向削り。頂部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部指い置ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。内外共に葺付着。	
8	甕 (土師器)	3/4残存。 底 6.8cm	蔵右袖の外側 付近 床面上8.0cm。	①砂粒を多く含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部削り。体部斜め方向削り。 内面 底～体部削ナデ後、ナデ。	二次焼成によりやや軟質化。

第37号住居跡 (第129・130図、図版28・67) 位置 702.0Eポイント北側

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、北辺が多少張り出すが、比較的均整のとれた、南北方向に長い隅丸方形を呈する。



第129図 第37号住居跡実測図



第130図 第37号住居跡出土遺物実測図

第2節 検出された遺構と遺物

規模は、東西方向2.80m・南北方向3.99mを測り、西辺の走向はN3°Wである。床面積は10.2㎡である。壁は、遺構検出面からの掘り込みが浅いために、現存高5～8cmのローム層の壁面を確認したに過ぎない。床面にはほぼ平坦で、全面に亘って強く踏み固められていた。貯蔵穴は南東隅に有り、54×64cm・深さ29cmの不整形形状に掘り込まれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から50cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が32cm程張り出して、燃焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅64cm・奥行70cmを測る。火床面の中央には支脚に使用したと考えられる焼石が残っていた。

遺物は竈周辺及び南半部から出土した。本住居の年代については10世紀前半の時期が考えられる。なお、竈北側の壁際から鉄製紡錘車が出土したが、所在不明のため図示し得なかった。

第61表 第37号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 11.7cm 高 3.9cm 底 5.9cm	南西部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄棕色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、未調整。体部下半部削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
2	高台付碗 (須恵器)	1/2残存。 口 14.6cm 高 5.3cm 底 7.0cm	注記消えのため出土地不明。	①砂粒を含む。 ②灰黄色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台陸付け。 内面 底部ナデ。体→口縁部回転によるナデ。 内外共に陸付着。	
3	高台付碗 (須恵器)	底部のみ。 底 6.3cm	貯蔵穴内。	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台陸付け。 内面 回転によるナデ。 内外共に陸付着。	底部内面に焼成後の刺青「×」有り。
4	高台付碗? (須恵器)	口縁部小破片。 口 11.2cm	貯蔵穴内。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。表文不明。
5	皿 (灰釉)	4/5残存。 口 14.5cm 高 3.4cm 底 6.5cm	東壁際 床面上9.0cm。	①精選された胎土。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。 流し掛けによる淡緑褐色釉。	
6	脚付壺 (土師器)	1/2残存。 底 9.0cm	竈覆土中。	①砂粒を含む。 ②にぶい棕色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部削削り。脚部削削り後、ナデ。 内面 削削り後、ナデ。	

第38号住居跡 (第131・132図、図版28・68) 位置 701.5Eグリッド

本住居跡は、北西隅に擾乱土坑が重複していたが、遺存状態は比較的良好であった。平面形は、西辺がやや張り出すが、比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。

規模は、東西方向2.60～2.70m・南北方向3.00mを測り、東辺の走向は磁北と一致する。床面積は7.5㎡である。

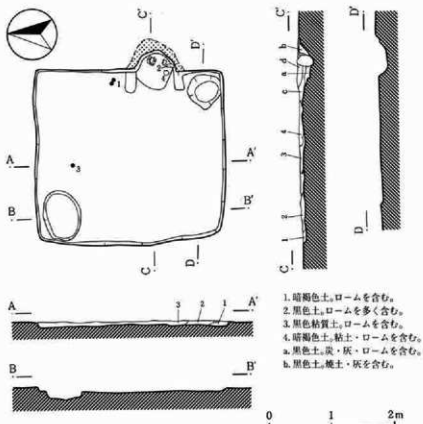
壁は、遺構検出面からの掘り込みが浅いために、現存高2～6cmのローム層の壁面を確認したに過ぎない。床面には多少の凹凸が有り、南半部は強く踏み固められていた。貯蔵穴は南東隅に有り、径54cm・深さ6cm

第三章 書上上原之城遺跡

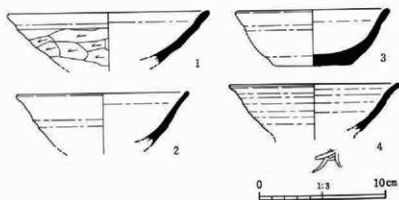
で截頭円錐状に掘り込まれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から40cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。調査時に袖を掘り過ぎてしまったが、袖が約34cm張り出し、燃烧部はちょうど壁際に有り、焚口幅約60cm・奥行約64cmを測る。火床面の中央には支脚に使用したと考えられる川原石が立てられていた。

遺物は竈周辺に集中して出土したが、細片が多かった。本住居の年代については10世紀中頃の時期が考えられる。



第131図 第38号住居跡実測図



第132図 第38号住居跡出土遺物実測図

第62表 第38号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	高台付碗 (須恵器)	1/4残存。 口 16.0cm	竈左側 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にふい灰褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部粗い肌削り。口縁部強い横ナデ。高台 貼付け後のナデ痕有り。 内面 横ナデ。 内外共に薬行着。	
2	高台付碗 (須恵器)	1/5残存。 口 13.8cm	竈内。	①砂粒を含む。 ②灰黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に薬行着。	二次焼成に よりやや軟 質化。
3	杯 (須恵器)	1/4残存。 口 12.2cm 高 4.4cm 底 6.2cm	北西部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周 縁部薬削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に薬行着。	二次焼成に よりやや軟 質化。
4	高台付碗 (須恵器)	2/3残存。 口 13.5cm	竈中。	①砂粒を多く含む。 ②灰黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。高台貼付け後、ナデ。 内面 回転によるナデ。	体部外面に 墨書有り。 戳文「平」か。

第39号住居跡 (第133・134図、図版28・68) 位置 702.5Gポイント西側

本住居跡は、27号掘立柱建物跡及び4・17・18号溝と重複関係にある。先後関係については、27号掘立柱建物跡→本住居→溝の順になると考えられるが、各溝の順は捉えられなかった。平面形は、南辺の遺存状態が芳しくないが、各辺が若干歪みながらも比較的均整のとれた隅丸不整形を呈する。

規模は、東西方向3.96～4.14m・南北方向3.30mを測り、西辺の走向はN3°Eである。床面積は12.9㎡程になる。

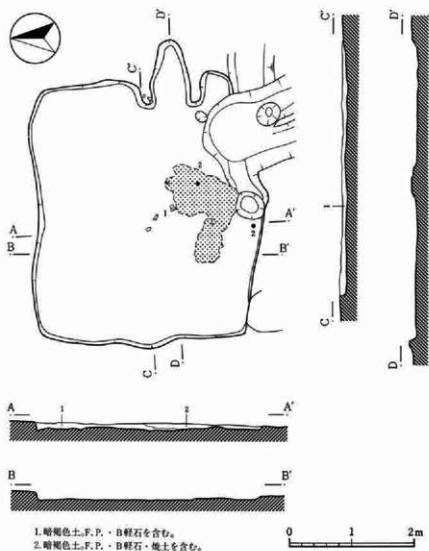
壁は、遺構検出面からの掘り込みが浅いために、現存高5～13cmのローム層の壁面を確認したに過ぎない。床面はほぼ平坦であったが、中央部のやや南側が強く焼けており6cm程高くなっていた。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から60cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が35cm程張り出し、熱焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅50cm・奥行96cmを測る。

遺物は南半部から出土した。本住居の年代については10世紀中頃の時期が考えられる。

第63表 第39号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	高台付碗 (須恵器)	1/4残存。 口 13.6cm 高 5.2cm 底 6.0cm	中央部 床面上10.0cm	①砂粒及び細塵を多 く含む。 ②にふい灰褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部粗い肌削り。貼付け高台。口縁部横ナ デ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。火はぜによる割れ痕 有り。	二次焼成に よりやや軟 質化。
2	高台付碗 (須恵器)	1/5残存。 口 14.5cm 高 4.9cm 底 7.4cm	南壁際 床面上9.5cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。貼付け高台。ナデのた め底部切り履し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	二次焼成に よりやや軟 質化。



第133図 第39号住居跡実測図



第134図 第39号住居跡出土遺物実測図

第40号住居跡 (第135・136図、図版29・68) 位置 701.0Fポイント北側

本住居跡は、2号溝によって攪乱を受けており、遺存状態が芳しくなかった。平面形は、南・西両辺がやや張り出した、東西方向に長い隅丸方形を呈する。

規模は、東西方向3.06～3.21m・南北方向2.70～2.76mを測り、東辺の走向はN7°Eである。床面積は8.2m²程になると考えられる。

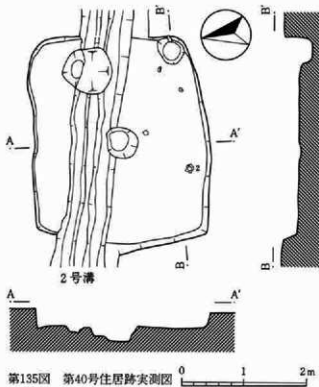
壁は、3°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高20～28.5cmのローム層の壁面を確認した。

第2節 検出された遺構と遺物

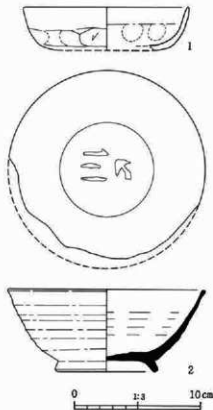
床面はほぼ平坦で、全面に亘って強く踏み固められていた。貯蔵穴は南東隅に有り、径34-42cm・深さ20cmで、截頭円錐状に掘り込まれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、他の遺構の状況から推して、東辺に構築されていたと考えられるが、溝による擾乱のため詳細は不明である。

遺物は南半部にまとめて出土した。本住居の年代については9世紀前半の時期が考えられる。



第135図 第40号住居跡実測図



第136図 第40号住居跡出土遺物実測図

第64表 第40号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/4残存。 口 13.1cm	注記消えのた め出土地不詳。	①ほぼ均質。 ②橙色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部施釉。体部粗い土ナデ。指頭圧痕有 り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	
2	高台付椀 (須恵器)	2/3残存。 口 15.7cm 高 6.5cm 底 8.1cm	南壁面体面直 上に正位の状 態。	①砂粒及び繊維を少 し含む。 ②灰黄色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転口クロ成形。底部回転未切り後、高 台貼付け。 内面 回転によるナデ。	底部内面に 墨書有り。 戳文「福」。

第41号住居跡(第137・138図、図版29・69) 位置 709.0Hグリッド北西部

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出されており、遺存状態は比較的良好であった。平面形は、南・東両辺がやや歪んだ、南北方向に長い隅丸不整形を呈する。

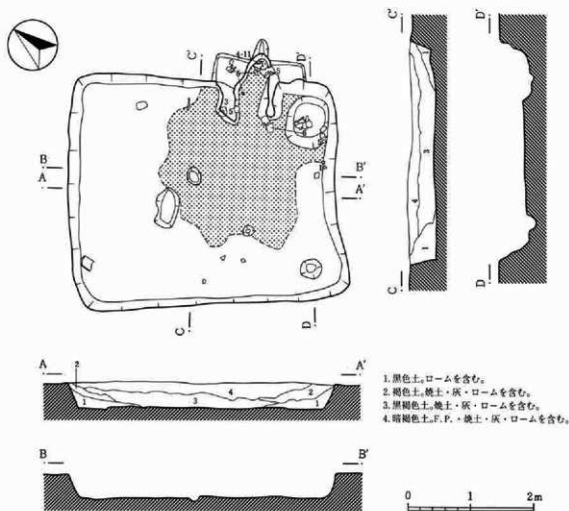
規模は、東西方向3.36～3.78m・南北方向4.14～4.29mを測り、西辺の走向はN36°Wである。床面積は、41.5㎡である。

壁は、10°前後の傾斜を以て掘り込まれており、ローム層の壁面を32～45cm確認した。竈の遺存状況から推して、当時の生活面との比高差はさほど無かったものと考えられる。

床面はほぼ平坦で、中央部から南東部にかけて焼土の分布が見られ、強く踏み固められていた。貯蔵穴は南東隅に有り、66×82cm・深さ10cmの隅丸形状に掘り込まれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から55cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が52cm程張り出して、燃烧部はちょうど壁際に有り、焚口幅40cm・奥行95cmを測る。更に、煙道部を25cm程確認した。

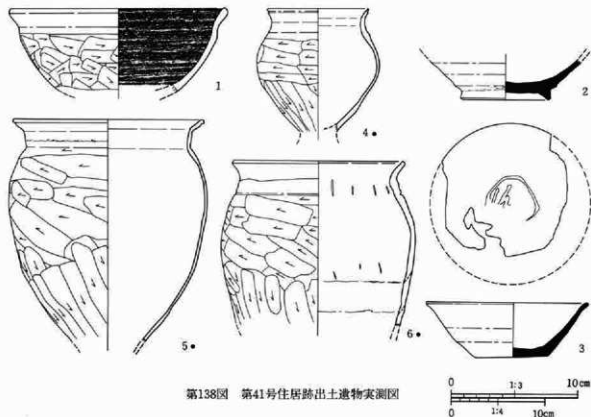
遺物は竈周辺に集中して出土した。なお、竈の両脇は30～48cm張り出しており、一種の棚状施設となっていた。土師器甕(6)は、この上から出土した破片と竈中出土の破片とが接合したものである。本住居の年代については9世紀後半の時期が考えられる。



1. 黒色土、ロームを含む。
2. 褐色土、焼土・灰・ロームを含む。
3. 黒褐色土、焼土・灰・ロームを含む。
4. 暗褐色土、F.P.・焼土・灰・ロームを含む。

第137図 第41号住居跡実測図

第2節 検出された遺構と遺物



第138図 第41号住居跡出土遺物実測図

第65表 第41号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・分量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	鉢 (土師器)	1/3残存。 口 17.4cm	南壁際にすり 落ちた状態。 床面上21cm。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部施削り。口縁部横ナデ。口縁部に光沢のある煤付着。 内面 細かな施磨き後、黒色処理。火はぜによる割離痕有り。	
2	高台付鉢 (須恵器)	底部完存。 底 7.4cm	竈内。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。内外共に煤付着。	
3	杯 (須恵器)	1/2残存。 口 12.8cm 高 4.3cm 底 5.7cm	竈左袖上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	底部内面に 墨書有り。 釈文不明。
4	脚付甕 (土師器)	脚部欠損。 口 10.8cm	竈内。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下半斜め方向施削り。体部上半横方向施削り。頸部施ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部丁寧なナデ。頸部施ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。内外共に煤付着。	
5	甕 (土師器)	底部欠損。 口 20.4cm	竈及び野礫穴 周辺に散在。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下半斜め方向施削り。体部上半横方向施削り。頸部施ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部施ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に火はぜによる割離が著しい。	二次焼成に よりやや軟 質化。

第三章 書上上原之城遺跡

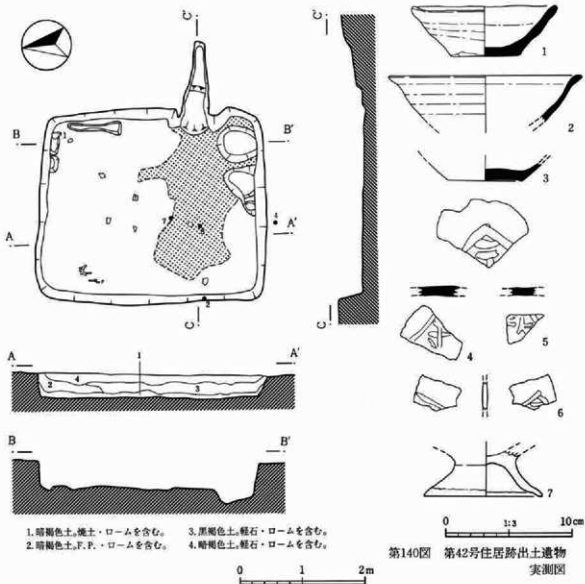
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
6	甕 (土師器)	底部欠損。 口 18.4cm	竈内に散在。	①砂粒及び細礫を多く含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下斜め方向瓦削り。体部上半横方向施削り。頂部瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 粗い瓦ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	二次焼成によりやや軟質化。

第42号住居跡 (第139・140図、図版29・69) 位置 707.5Gグリッド

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、北辺がやや歪み、南北方向に長い隅丸方形を呈する。

規模は、東西方向2.90～3.05m・南北方向3.40～3.60mを測り、西辺の走向はN7°Eである。床面積は約9.0㎡である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、ローム層の壁面を31～42cm確認した。竈の遺存状況から推して、当時



第2節 検出された遺構と遺物

の生活面との比高差はさほど無かったものと考えられる。

床面には多少の凹凸があるが、南半部には焼土の分布が見られ、強く踏み固められていた。貯蔵穴は南東隅に有り、径約60cm・深さ20cmで鉄頭円錐状に掘り込まれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。竈は、東辺の中央から70cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が15cm程張り出して、燃焼部は屋外に有り、焚口幅45cm・奥行70cmを測る。更に、煙道部を70cm程確認した。

遺物は全域に散らばって出土した。本住居の年代については10世紀前半の時期が考えられる。

第66表 第42号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 11.6cm 高 3.8cm 底 5.6cm	北東隅にずり落ちた状態。	①砂粒を含む。 ②灰黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外共に墨付着。	二次焼成によりやや軟質化。
2	杯 (須恵器)	1/6残存。 口 15.3cm	南西部にずり落ちた状態。	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。体部に不定方向の粗いナデが有る。 内面 回転によるナデ。	
3	杯 (須恵器)	底部1/4残存 底 5.9cm	中央部 床面上28.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「金」か。
4	杯 (須恵器)	底部小破片。	南壁際 住居外 床面上40.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り。 内面 回転によるナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「金」か。
5	杯 (須恵器)	底部小破片。	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り。 内面 回転によるナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「金」か。
6	杯 (土師器)	底部小破片。	覆土中。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 甕張り。 内面 ナデ。	底部内外面に墨書有り。 釈文「金」か。
7	脚付甕 (土師器)	脚部3/4残存 底 9.4cm	中央部 床面上6.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 甕ナデ後、横ナデ。 内面 底部残ナデ後、ナデ。脚部付け後、横ナデ。 内外共に墨付着。	

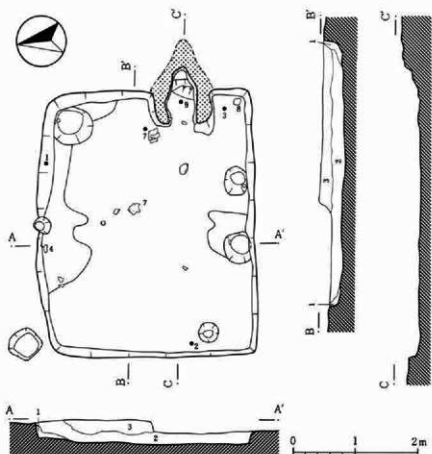
第43号住居跡(第141・142図、図版29・69) 位置 707.5Hポイント

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。掘立柱建物跡を検出するために南西部を削り取ってしまったが、遺存状態は比較的良好であった。平面形は、北辺がやや張り出すが、比較的均整のとれた、東西方向に長い隅丸方形を呈する。

規模は、東西方向4.10～4.20m・南北方向3.30～3.50mを測り、西辺の走向はN5°Eである。床面積は11.9m²である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、ローム層の壁面を12～25cm確認した。

床面には多少の凹凸があるが、全面に亘って強く踏み固められていた。貯蔵穴は北東隅に有り、径60cm・深さ31cmで鉄頭円錐状に掘り込まれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

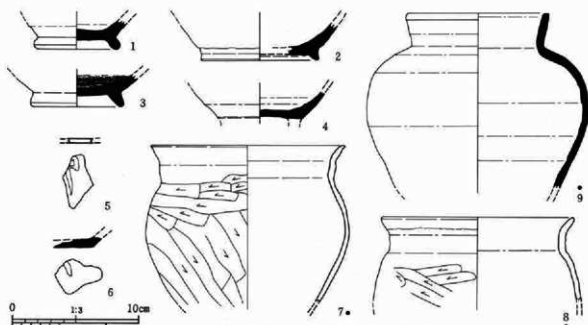


1. 褐色土・ロームを含む。
2. 黒褐色土・F.P.・ロームブロックを含む。
3. 黒褐色土・F.P.を含む。

第141図 第43号住居跡実測図

竈は、東辺の中央から70cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が60cm程張り出して、燃焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅40cm・奥行95cmを測る。

遺物は全域に散らばって出土した。注目すべきものとして石製の紡錘車（第216図3）がある。本住居の年代については9世紀中頃の時期が考えられる。



第142図 第43号住居跡出土遺物実測図

第67表 第43号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	高台付椀 (須恵器)	1/2残存。 底 6.8cm	床面上13.5cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。貼付け高台。ナデのため底部切り離し技法不明。 内面 回転によるナデ。	
2	高台付椀 (須恵器)	1/3残存。 底 9.4cm	西壁際 床面上10.0cm。	①砂粒及び細礫を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
3	高台付椀 (須恵器)	底部1/2残存 底 7.5cm	南東隅 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部下端彫削り。底部、高台貼付け後、全面ナデ。 内面 丁寧な磨き。黒色処理。	
4	高台付椀 (須恵器)	1/2残存。	北壁際 床面上4.0cm。	①砂粒を少し含む。 ②黒褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。 内外共に塗付着。	二次焼成によりやや軟質化。
5	杯 (土師器)	底部小破片。	覆土中。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 彫削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「奉」か。
6	杯 (須恵器)	底部小破片。	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り。 内面 割離が著しい。	底部外面に墨書有り。 釈文不明。
7	甕 (土師器)	1/2残存。 口 20.6cm	壺手前及び中央部。 床面上13.5cm。	①砂粒及び細礫を少し含む。 ②灰黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部縦方向彫削り。肩部横方向彫削り。頸部裏ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部ナデ。肩部裏ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に火はぜによる割離痕有り。	
8	甕 (土師器)	体-口縁部小破片。 口 20.6cm	南東隅 床面上6.0cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部彫削り。頸部裏ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部裏ナデ。口縁部横ナデ。火はぜによる割離痕有り。	
9	短頸甕 (須恵器)	1/3残存。 口 15.0cm	壺内。	①砂粒及び細礫を含む。 ②青灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。頸部彫削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。高火度のため発泡。	32号住No. 51と接合。

第44号住居跡 (第143・144図、図版30・69) 位置 707.5Eグリッド北東部

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、北・東両辺が張り出した、南北方向に長い隅丸不整形を呈する。

規模は、東西方向2.28～2.76m・南北方向2.94～3.24mを測り、西辺の走向はN4°Wである。床面積は7.0m²である。

壁は、確認面からの掘り込みが浅かったが、前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高13～18cmのローム層の壁面を確認した。

床面には多少の凹凸があり、あまりしっかりとした床面ではなく、調査時に一部掘り過ぎてしまった。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

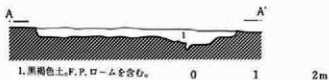
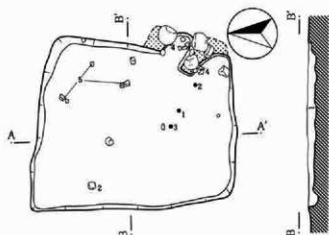
甕は、東辺の中央から40cm程南寄りの位置に、粘土と川原石を使用して構築されていた。左袖を掘り壊し

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

てしまったが、燃焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅約45cm・奥行約55cmを測る。

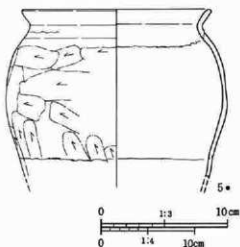
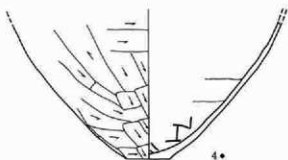
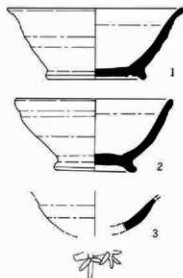
遺物はほぼ全城に散らばって出土した。本住居の年代については10世紀前半の時期が考えられる。

第45号住居跡 欠番



1.黒褐色土、F.P.ルームを含む。

第143図 第44号住居跡実測図



第144図 第44号住居跡出土遺物実測図

第68表 第44号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	高台付碗 (須恵器)	1/4残存。 口 14.8cm 高 5.6cm 底 7.6cm	南東部 床面直上。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。貼付け高台。底部裏ナデ及びナデのため切り難し技法不明。 内面 底部ナデ。体～口縁部回転によるナデ。	
2	高台付碗 (須恵器)	1/2残存。 口 12.6cm 高 5.7cm 底 6.5cm	東手前 床面直上。	①砂粒を少し含む。 ②明ナリーブ灰色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。貼付け高台。ナデのため底部切り難し技法不明。 内面 回転によるナデ。 内外共に膠附着。	二次焼成によりやや軟質化。

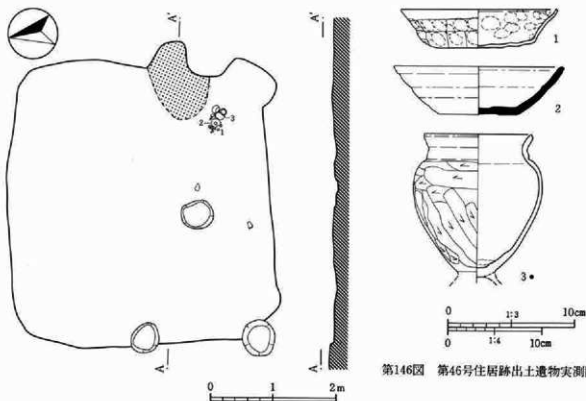
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
3	杯 (須恵器)	体部1/3残存	中央部 床面上8.0cm。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ口成形。 内面 回転によるナデ。	体部外面に 墨書有り。 款文「林」か。
4	壺 (土師器)	1/6残存。	竈周辺。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 縦方向捲削り。 内面 廻ナデ後、丁寧なナデ。	
5	壺 (土師器)	1/3残存。 口 19.9cm	北東部。	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下半縦方向捲削り。体部上半横方向捲削り。口縁部横ナデ。 内面 体部廻ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。 内外共に墨付着。	

第46号住居跡 (第145・146図、図版30・67・70) 位置 707.0Bポイント

本住居跡は、掘り込みが浅かったために、依存状態が極めて芳しくなかった。まとまって出土した遺物と踏み固められた面の広がり及び焼土の分布から辛うじて調査できた。平面形は、東西方向が若干長い隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、東西方向4.20m・南北方向4.00～4.20m程の範囲が強く踏み固められていた。なお、床面には多少の凹凸があり、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から40cm程南寄りの位置に焼土が認められたので、この付近に構築されていたものと考えられるが詳細は不明である。

遺物は一箇所にまとまって出土した。本住居の年代については9世紀後半の時期が考えられる。



第145図 第46号住居跡実測図

第146図 第46号住居跡出土遺物実測図

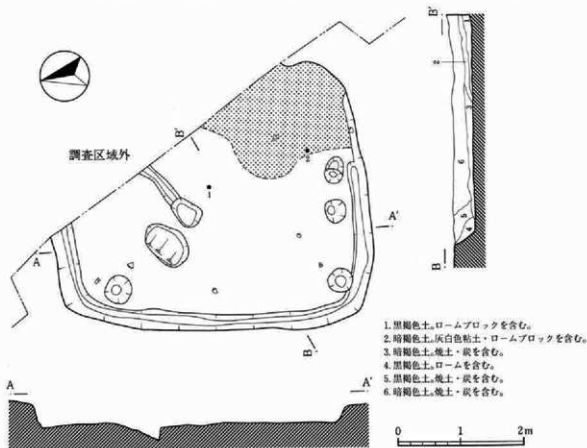
第69表 第46号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	3/4残存。 口 12.4cm 高 3.0cm	籠手前 床面直上。	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部粗い塊削り。体部粗い塊ナデ。指頭圧痕が強く残る。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体→口縁部横ナデ。	
2	杯 (須恵器)	ほぼ正形。 口 14.0cm 高 3.8cm 底 6.4cm	籠手前 床面直上。	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3	脚付壺 (土師器)	1/2残存。 口 11.5cm	籠手前 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 体部斜め方向施削り。肩部横方向施削り。頸→口縁部横ナデ。 内面 底部指ナデ。体部指ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。内外共に籠付着。	

第47号住居跡 (第147・148図、図版30) 位置 707.5Aグリッド

本住居跡は、33号掘立柱建物跡と重複関係にあり、先後関係については本住居が先行すると考えられる。なお、北東部が調査区域外にかかるため未完掘である。平面形は、南北方向に長い隅丸方形を呈すると考えられる。

規模は、東西方向4.20m・南北方向5.10m以上の大きさになると考えられる。なお、西辺の走向はN10°



第147図 第47号住居跡実測図

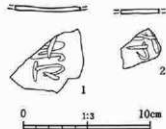
第2節 検出された遺構と遺物

Eである。

壁は、10°前後の傾斜を以て掘り込まれており、ローム層の壁面を20～40cm確認した。

床面はほぼ平坦で、幅約15cm・深さ5cm前後の周溝が巡っていた。なお、確認した範囲内においては、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、南東部に焼土の分布が認められたので、東辺に構築されていたと考えられるが、詳細は不明である。遺物はほぼ全域に散らばって出土したが、細片が多かった。本住居の年代については9世紀前半の時期が考えられる。



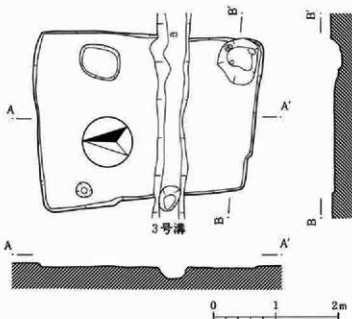
第148図 第47号住居跡出土遺物実測図

第70表 第47号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	底部小破片。中央部。		①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 磨削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「吉」か。
2	杯 (土師器)	底部小破片。南東部。		①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 磨削り。 内面 ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「布」。

第48号住居跡(第149図、図版30) 位置 702.0C グリッド

本住居跡は、遺構確認面からの掘り込みが浅い上に、3号溝によって攪乱を受けており、遺存状態が芳しくなかった。平面形は、北・西両辺がやや張り出した、南北方向に長い隅丸不整形を呈する。



第149図 第48号住居跡実測図

規模は、東西方向2.40～2.85m・南北方向3.21～3.54mを測り、東辺の走向は磁北と一致する。床面積は8.5m²程になると思われる。

壁は、掘り込みが浅いために、辛うじてローム層の壁面を3～5cm確認したに過ぎない。

床面はほぼ平坦であったが、あまりしっかりとしていなかった。貯蔵穴は南東隅に有り、径65～70cm・深さ10cmで、不整截頭円錐状に掘り込まれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

第三章 書上上原之城遺跡

竈については全く手掛かりを欠く。

遺物は、覆土中から土師器・須恵器の細片が出土したが、実測に耐えられるような接合関係は得られなかった。

第49号住居跡（第150図、図版30） 位置 700.5Fグリッド

本住居跡は、遺構確認面からの掘り込みが浅い上に、16号溝によって攪乱を受けており、遺存状態が芳しくなかった。平面形は、北・東両辺がやや張り出した、南北方向に長い隅丸不整形を呈する。

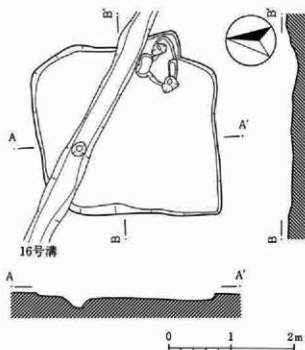
規模は、東西方向2.28～2.64m・南北方向2.88～2.94mを測り、西辺の走向は磁北と一致する。床面積は約6.6㎡である。

壁は、掘り込みが浅いために、辛うじてローム層の壁面を5～6.5cm確認したに過ぎない。

床面には多少の凹凸があり、あまりしっかりとしていなかった。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から55cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。燃焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅約40cm・奥行約80cmを測る。

遺物は覆土中から土師器・須恵器の細片が出土したが、実測に耐えられるような接合関係は得られなかった。



第150図 第49号住居跡実測図

(2) 掘立柱建物跡

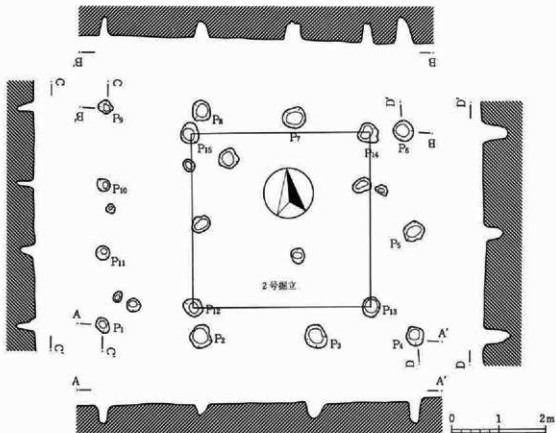
第1号掘立柱建物跡(第151図、図版31) 位置 710.0Fポイント西側

本建物跡は、2号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、先後関係については、柱穴の切り合いが無いために不明である。平面形は、2間×3間で、東西棟の建物跡である。なお、西側のみ3間になっており、ここを出入り口としていたものと考えられる。

規模は、東辺4.30m(14.5尺)・南辺6.60m(22尺)・西辺4.50m(15尺)・北辺6.30m(21尺)を測り、棟の走向はN4.5°Eである。

柱穴は、径30~40cm、深さ30~60cmの不整形形の掘り方で、南辺の柱通りが若干ずれている。

柱間寸法は、桁方向が7尺・8尺で梁方向が7尺で設計されたものと思われる。



第151図 第1・2号掘立柱建物跡実測図

第2号掘立柱建物跡(第151図、図版31) 位置 710.0Fポイント西側

本建物跡は、前述の通り、1号掘立柱建物跡に内接して建てられている。平面形は、1間×1間で、東西方向が若干長い、方形建物である。

規模は、南北方向3.60m(12尺)・東西方向3.80m(12.5尺)で、棟の走向はN7°Eである。

柱穴は、径40~50cm・深さ40cm前後の不整形形の掘り方で、均整のとれた配置となっている。

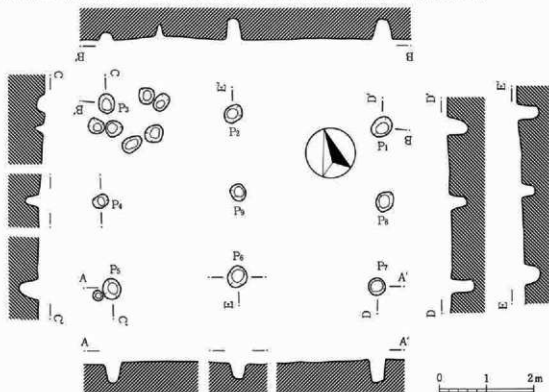
第3号掘立柱建物跡 (第152図、図版31) 位置 709.0Bグリッド

本建物跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、2間×2間で、北辺がやや歪んだ東西棟の総柱建物跡である。

規模は、東辺3.30m (11尺)・南辺5.80m (19尺)・西辺3.90m (13尺)・北辺5.80m (19尺)を測り、棟の走向はN18°Eである。

柱穴は、径35～45cm・深さ16～50cmの不整形形の掘り方で、南辺及び西辺の柱通りが若干ずれている。

柱間寸法は、桁方向が9尺・10尺、梁方向が5尺等間隔で設計されたものと考えられる。



第152図 第3号掘立柱建物跡実測図

第4号掘立柱建物跡 (第153図、図版33) 位置 709.0Cポイント南側

本建物跡は、5号掘立柱建物跡と重複関係にある。先後関係については、覆土の状況及び走向から、本建物跡が先行すると思われる。平面形は、2間×2間で、西辺及び北辺が若干歪んだ方形を呈する。

規模は、東辺4.20m (14尺)・南辺4.40m (14.5尺)・西辺4.20m (14尺)・北辺4.20m (14尺)を測り、棟の走向はN13.5°Eである。

柱穴は、径40～70cm・深さ24～59cmの不整形形の掘り方で、底面の一部が二段になっている。柱痕は確認されていないが、底部の状況から推して、径20cm前後の柱が立てられていたと思われる。

柱間寸法は、桁方向・棟方向共に7尺を基準に設計されたものと思われる。

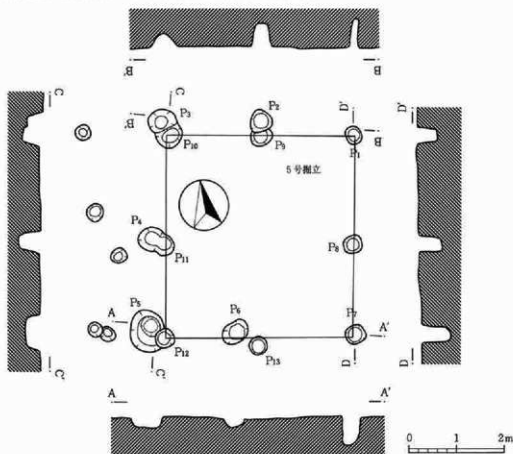
第5号掘立柱建物跡 (第153図、図版33) 位置 709.0Cポイント南側

本建物跡は、前述の通り、4号掘立柱建物の東辺の3つの柱穴をそのまま利用して、西側5つの柱穴を掘り直して改築されたものと考えられる。平面形は、2間×2間で、西辺が若干歪んだ方形を呈する。

規模は、東西方向4.05m (13.5尺)・南北方向4.20m (14尺)を測り、棟の走向はN9.5°Eである。

柱穴は、径40～60cm・深さ19～59cmの不整形形の掘り方で、径20cm前後の柱が立てられていたと思われる。

柱間寸法は、桁方向・梁方向共に7尺で設計されたものと思われる。



第153図 第4・5号掘立柱建物跡実測図

第6号掘立柱建物跡 (第154図、図版33) 位置 708.5Bグリッド

本建物跡は、7号掘立柱建物跡と重複関係にある。先後関係については、覆土の状況及び棟の走向から推して、本建物が先行すると考えられる。平面形は、1間×2間で、南北棟の建物となっている。

規模は、東西方向3.90m (13尺)・南北方向4.00mを測り、棟の走向はN1°Eである。

柱穴は、径30～50cm・深さ10～72cmの截頭円錐状に掘り込まれており、P₂・P₅は若干ずれて配されている。

柱間寸法は、梁行13.5尺・桁行13尺で設計されたものと思われる。

第7号掘立柱建物跡 (第154図、図版33) 位置 708.5Bグリッド

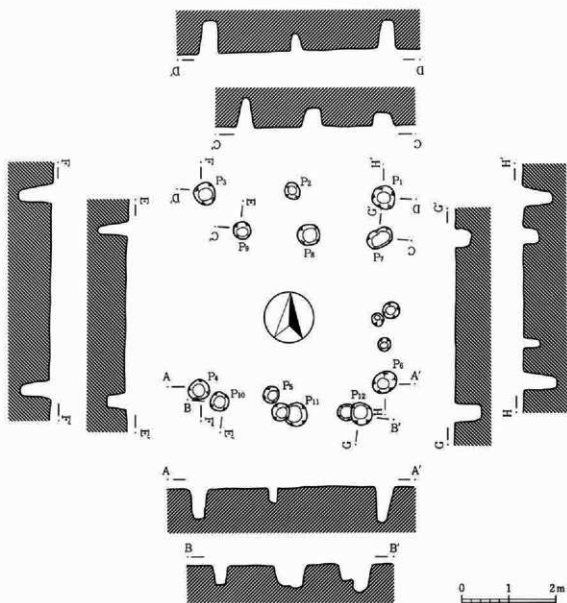
本建物跡は、前述の通り、6号掘立柱建物跡とは重なっており、規模及び位置から推して、改築がなされたものと考えられる。平面形は、1間×2間で、南北棟の建物となっている。

規模は、東西方向3.00m (10尺)・南北方向3.60m (12尺)を測り、棟の走向はN7°Eである。

柱穴は、径40～50cm・深さ32～64cmの截頭円錐状に掘り込まれており、南西隅が若干歪んだ配置となっている。

いる。

柱間寸法は、桁方向5尺・梁方向6尺を基準に設計されたものと思われる。



第154図 第6・7号掘立柱建物跡実測図

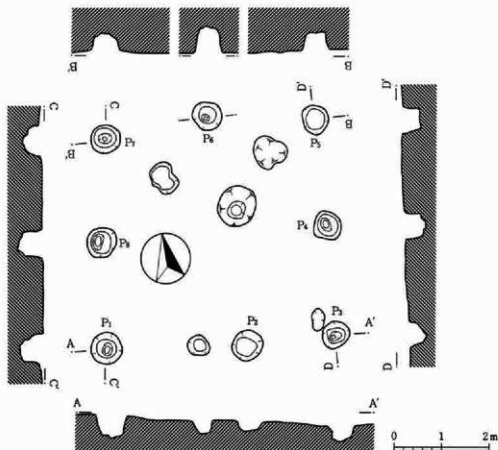
第8号掘立柱建物跡 (第155図、図版34) 位置 710.5Dポイント南側

本建物跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、2間×2間で、東西方向が20~30cm程長い東西棟の建物と思われる。

規模は、東辺4.60m・南辺4.80m・西辺4.50m・北辺4.60mを測り、棟の走向はN86°Eである。

柱穴は、径55~65cm・深さ20~54cmの載頭円錐状に掘り込まれており、P₂・P₅を除いて径約20cmの柱の据え痕が確認された。北辺は、P₇がずれて配されたため柱通りが悪く、北西部が若干歪んでいる。

柱間寸法は、桁方向・梁方向共に7.5尺を基準に設計されたものと考えられる。



第155図 第8号掘立柱建物跡実測図

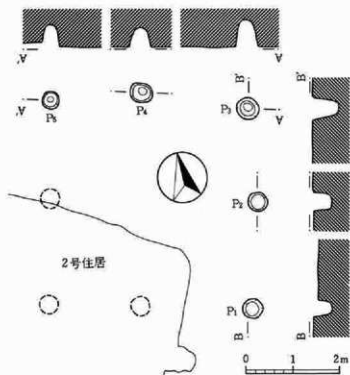
第9号掘立柱建物跡 (第156図) 位置 710.0Cポイント東側

本建物跡は、2号住居跡と重複関係にある。先後関係については、調査時の所見により、住居廃棄後に建てられたことが明らかになっている。調査手順の関係から南西部の図面を残し得なかったが、平面形は、2間×2間で、P₂・P₄が柱通りからはずれ、やや歪んだ方形の建物である。

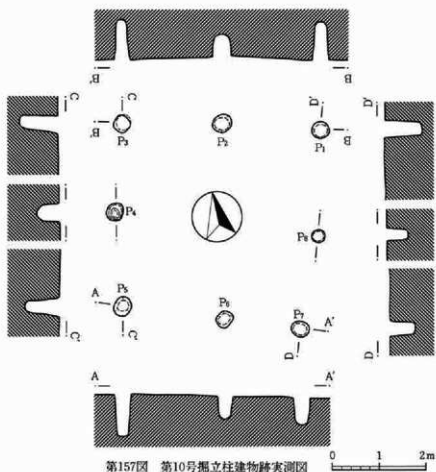
規模は、東辺4.20m (14尺)・北辺4.20m (14尺)を測り、棟の走向はN12.5°Eである。

柱穴は、径40~50cm・深さ34~54cmの載頭円錐状に掘り込まれており、P₃~P₅には径約20cmの柱の据え痕が確認された。

柱間寸法は、桁方向・梁方向共に7尺を基準に設計されたものと考えられる。



第156图 第9号掘立柱建物跡実測図



第157图 第10号掘立柱建物跡実測図

第10号掘立柱建物跡 (第157図、図版34) 位置 710.0Bポイント南側

本建物跡は、9号掘立柱建物跡に近接しているが、重複はしておらず、単独で検出された。平面形は、2間×2間で、南東部が著しく歪んだ、東西棟の不整形建物である。

規模は、東辺4.20m (14尺)・南辺3.80m (12.5尺)・西辺3.80m (12.5尺)・北辺4.20m (14尺)を測り、棟の走向はN73°Wである。

柱穴は、径30-40cm・深さ43-81cmの截頭円錐状に掘り込まれていた。柱通りを見ると、P₈がややずれた配置となっている。

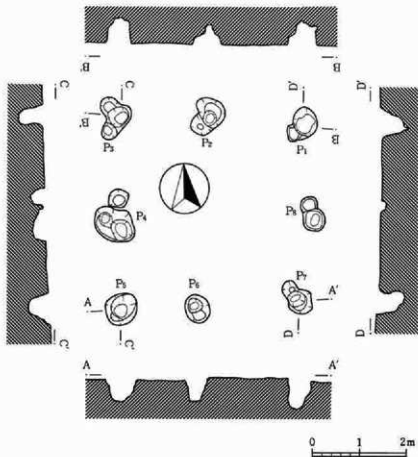
第11号掘立柱建物跡 (第158図、図版35) 位置 709.0Dポイント北側

本建物跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、2間×2間で、南東部がやや歪むが、南北棟の建物跡である。

規模は、東西方向3.93-3.96m (13尺)・南北方向4.17m (14尺)を測り、棟の走向はN1°Eである。

柱穴は、径45-60cm・深さ28-61cmの不整形の掘り方で、截頭円錐状に掘り込まれていた。また、P₂・P₃・P₄・P₇の状態から推して、少なくとも2回の建て替えがなされたと考えられる。

柱間寸法は、桁方向7尺・梁方向6.5尺で設計されたものと考えられる。



第158図 第11号掘立柱建物跡実測図

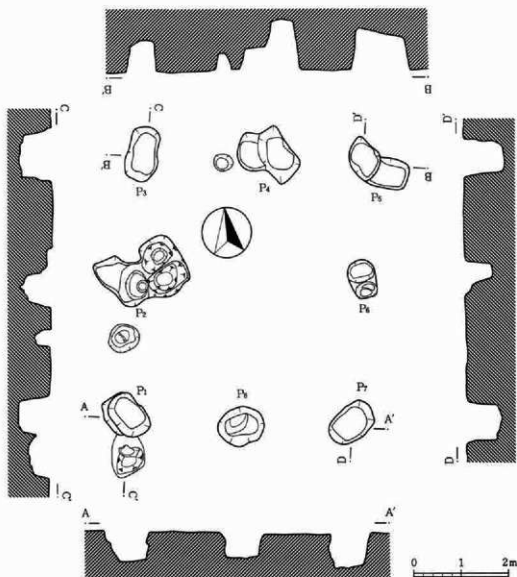
第12号掘立柱建物跡 (第159図) 位置 707.5Bポイント

本建物跡は、21・22・33号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、先後関係については、柱穴の切り合い関係によって、本建物跡が最も先行することが確認されている。平面形は、2間×2間で、比較的均整のとれた南北棟の建物跡である。

規模は、東辺5.64m (19尺)・南辺4.62m (15.5尺)・西辺5.64m (19尺)・北辺4.65m (15.5尺)を測り、棟の走向はN10°Eである。

柱穴は、65～70×100～110cm・深さ44～70cmの隅丸方形の掘り方で、隅部の柱穴は対角線に直交するように掘られている。

柱間寸法は、桁方向の東辺8・11尺、西辺9・10尺、梁方向7.5尺・8尺で設計されたものと考えられる。



第159図 第12号掘立柱建物跡実測図

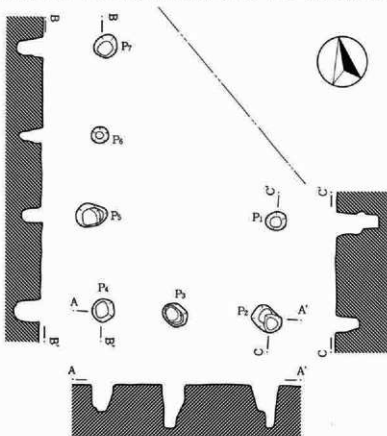
第13号掘立柱建物跡 (第160図) 位置 707.0A グリッド北側

本建物跡は、北東部が調査区域外にかかるため未完掘である。また、33号掘立柱建物跡と重複関係にある。先後関係については、直接に切り合い関係を持つ柱穴は無いが、柱穴の形態・出土遺物の様相から推して、本建物跡が後出すると思われる。平面形は、2間×2間で、西辺がやや乱れた長方形を呈する建物跡と思われる。

規模は、南辺3.60m (12尺)・西辺5.70m (19尺)を測り、棟の走向はN14°Eである。

柱穴は、径40~50cm・深さ40~90cmの不整円形の掘り方で、底面の一部が二段になっている。柱痕は確認されていないが、底部の状況から推して、径20cm前後の柱が立てられていたと思われる。

柱間寸法は、桁方向が5尺・7尺で、梁方向は南側から7尺・6尺・6尺で設計されたものと思われる。



第160図 第13号掘立柱建物跡実測図

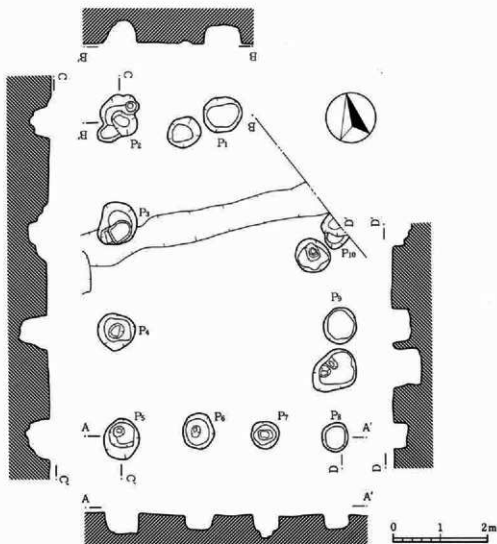
第14号掘立柱建物跡 (第161図、図版36) 位置 705.5A グリッド

本建物跡は、北東部が調査区域外にかかるため未完掘である。また、36号掘立柱建物跡及び10・11号溝と重複関係にあるが、前後関係については、柱穴の切り合い関係によって、36号掘立柱建物跡→本建物跡→10・11号溝の順であることが明らかになっている。平面形は、3間×3間の長方形を呈する南北棟の建物跡と思われる。

規模は、南辺4.50m (15尺)・西辺6.60m (22尺)を測り、棟の走向はN12°Eである。

柱穴は、径55~80cm・深さ40~60cmの不整円形の掘り方で、底面の一部には柱痕が確認されており、径約20cm前後の柱が立てられていたと考えられる。

柱間寸法は、桁方向・梁方向共に7尺で設計されたものと思われるが、南辺は5尺等間隔にして、3間にしている。



第161図 第14号掘立柱建物跡実測図

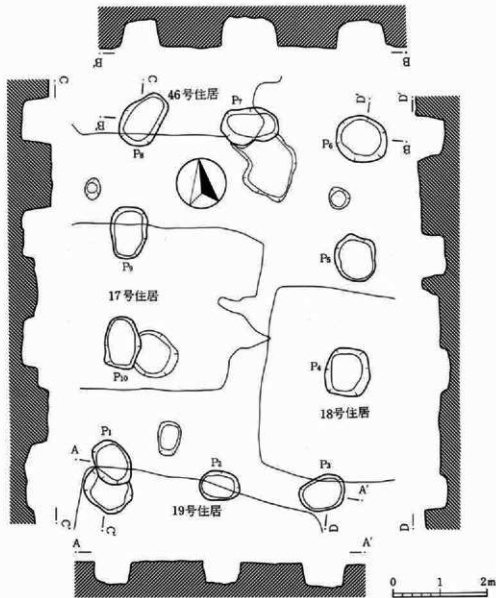
第15号掘立柱建物跡 (第162図、図版36) 位置 706.5B グリッド

本建物跡は、17-19・46号住居跡と重複関係にある。先後関係については、本建物跡が最も先行と思われる。平面形は、2間×3間で、比較的均整のとれた、南北棟の建物跡である。

規模は、桁方向7.59m (25.3尺)・梁方向4.65-4.68m (15.5尺)を測り、棟の走向はN11°Eである。

柱穴は、60-95cm×85-100cm・深さ17-58cmの隅丸方形の掘り方で、四隅の柱穴は対角線に直交するように掘られている。

柱間寸法は、桁方向8.5尺・梁方向7.5尺・8尺で設計されたものと思われる。



第162図 第15号掘立柱建物跡実測図

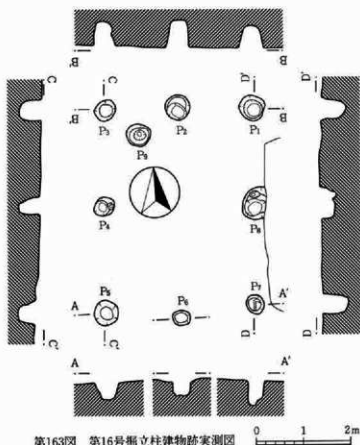
第16号掘立柱建物跡（第163図、図版37） 位置 706.5Eポイント周辺

本建物跡は、20号住居跡と重複関係にあるが、先後関係については、調査時の所見により、本建物跡が後出することが明らかになっている。平面形は、2間×2間で、南辺がやや乱れた長方形形状を呈する南北棟の建物跡である。

規模は、東辺4.20m（14尺）・南辺3.15m（10.5尺）・西辺4.20m（14尺）・北辺3.00m（10尺）を測り、棟の走向は $N4^{\circ}E$ である。

柱穴は、径40～50cm・深さ30～60cmの円形の掘り方で、底面の一部が二段になっているものも認められた。柱痕は確認されなかったが、底部の状況から推して、径15cm前後の柱が立てられていたと思われる。

柱間寸法は、桁方向が5尺等間隔で、梁方向が7尺等間隔で設計されたものと思われる。



第163図 第16号掘立柱建物跡実測図

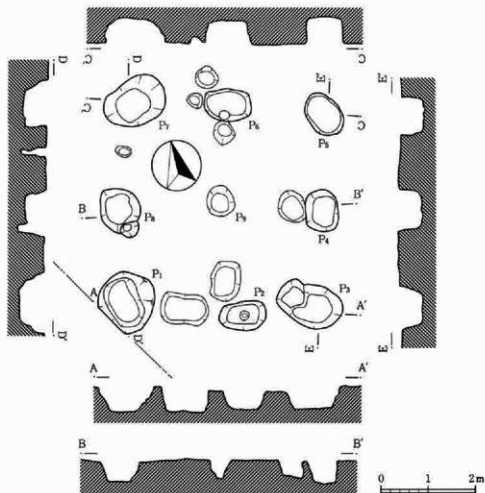
第17号掘立柱建物跡（第164図） 位置 708.5Hグリッド

本建物跡は、南西隅の一部が調査区域外にかかるが、確認された範囲内においては重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、2間×2間の正方形を呈する総柱の建物跡である。

規模は、四辺共に4.20m（14尺）を測り、南北棟の走向はN15°Eである。

柱穴は、80×100cm・深さ50～60cmの隅九方形の掘り方で、四隅の柱穴は対角線と垂直になるように掘られている様子が認められた。なお、柱穴の配置を見るとP₉が対角線の交点よりも若干北西に寄っており、掘り方も円形を呈している他のものと異なっているが、東柱と考えた場合には差し支え無いものと思われる。明確な柱痕は確認されていないが、P₂の底部には、径20cm程の浅い窪みが認められたので、同程度の柱が立てられていたと思われる。また、覆土の記録が残されていないために判然としませんが、或はP₁₀も本建物跡に伴うものかも知れない。

柱間寸法は、南辺を除いて各辺共に7尺等間隔で、南辺は5尺・9尺で設計されたものと思われる。ただし、P₁₀が本建物跡に伴うとした場合には、中央を4尺とし、両脇を5尺としたと思われる。



第164図 第17号掘立柱建物跡実測図

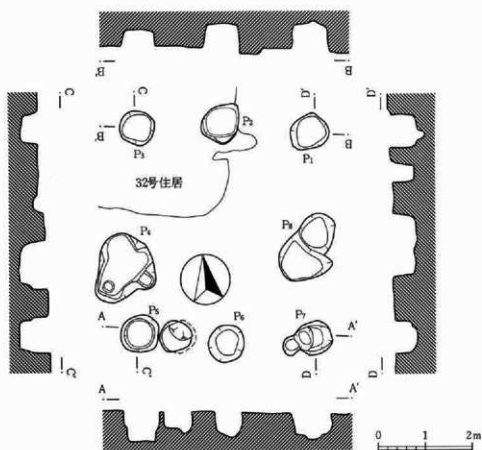
第18号掘立柱建物跡〔第165図、図版37〕 位置 706.5Hグリッド

本建物跡は、32号住居跡及び19・38・39号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、先後関係については、柱穴の切り合い関係によって、19・38号掘立柱建物跡→本建物跡→32号住居跡の順であることが明らかになっているが、39号掘立柱建物跡との関係については不明である。平面形は、2間×2間で、南北棟の建物跡である。

規模は、東辺・西辺が共に4.50m (15尺)、南辺・北辺が共に3.60m (12尺)を測り、棟の走向は $N7^{\circ}E$ である。

柱穴は、径70～80cm・深さ50～70cmの円形の掘り方で、ほぼ円筒状に掘られていた。一部の柱穴の底面には柱痕が認められ、径20cm前後の柱が立てられていたと考えられる。

柱間寸法は、桁方向が5尺・10尺で、梁方向が6尺等間隔で設計されたものと思われる。



第165図 第18号掘立柱建物跡実測図

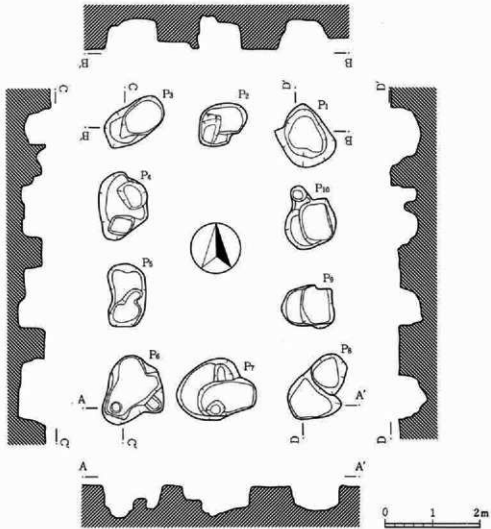
第19・38号掘立柱建物跡（第166図、図版45） 位置 706.5Hグリッド

本建物跡は、32号住居跡及び18・39号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、先後関係については、柱穴の切り合い関係によって、19・38号掘立柱建物跡→18号掘立柱建物跡→32号住居跡の順であることが明らかになっているが、39号掘立柱建物跡との関係については不明である。（調査時に19・38号掘立柱建物跡と二棟の番号を付したが、同規模で建て替えが行われたものと考え、一括して扱うこととする。）平面形は、2間×3間で、比較的均整のとれた南北棟の建物跡である。

規模は、東西方向3.93m（13尺）・南北方向5.88m（19.6尺）を測り、棟の走向はN1°Eである。

柱穴は、70×100cm・深さ38～59cmの隅丸方形の掘り方で、四隅の柱穴は対角線に直交するように掘られている。底面の一部には柱痕が確認されており、径20cm前後の柱が立てられていたものと思われる。

柱間寸法は、桁方向・梁方向共に6.5尺で設計されたものと思われる。



第166図 第19・38号掘立柱建物跡実測図

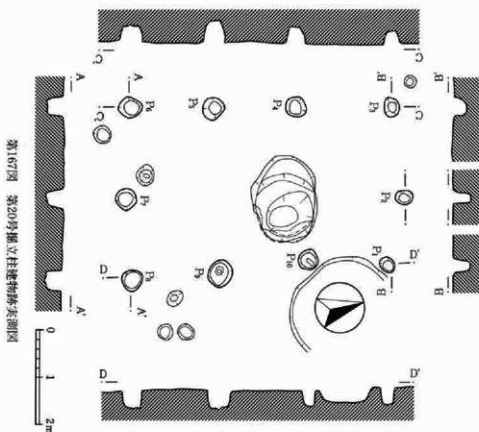
第20号掘立柱建物跡 (第167図、図版38) 位置 705.0B・Cグリッド

本建物跡は、1号土坑及び5号井戸と重複関係にあるが、先後関係については、柱穴の切り合い関係が見られなかったため不明である。平面形は、2間×2間で、東辺及び北辺がやや乱れた長方形を呈する、南北棟の建物跡である。

規模は、東辺5.40m (18尺)・南辺3.60m (12尺)・西辺5.55m (18.5尺)・北辺3.30m (11尺)を測り、棟の走向N12°Eである。

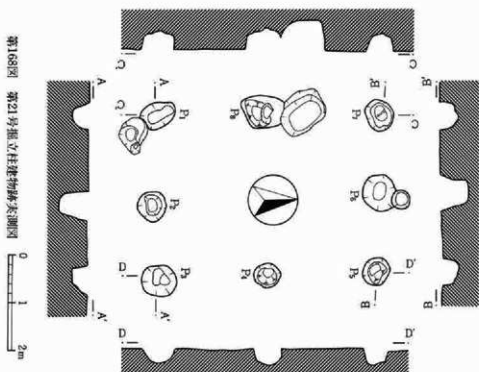
柱穴は、径30~50cm・深さ30~50cmの不整形の掘り方で、ほぼ円筒状に掘られていた。明確な柱痕は確認されていないが、P₉の底部には径約15cm程の浅い窪みが認められたので、同程度の柱が立てられていたと思われる。なお、柱穴の配置を見ると、P₂及びP₁₀の柱通りが若干外れてしまっている。

柱間寸法は、6尺を基準として設計されたものと思われるが、5尺~7尺まで散らばっており、桁方向の対峙する柱の通りが整っていない。



第21号掘立柱建物跡 (第168図) 位置 707.0 Bグリッド

本建物跡は、12・22号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、先後関係については、柱穴の切り合い関係によっ



て、本建物跡が最も後出することが明らかになっている。平面形は、2間×2間で、東辺がやや乱れた長方形形状を呈する、南北棟の建物跡である。

規模は、東辺4.65m (15.5尺)・南辺3.30m (11尺)・西辺4.80m (16尺)・北辺3.30m (11尺)を測り、棟の走向はN2°Eであると思われる。

柱穴は、径50~80cm・深さ30~60cmの不整形形の掘り方で、円筒ないしは截頭円錐状に掘られており、明確な柱痕は確認されなかった。なお、柱穴の配置を見ると、桁方向・梁方向共に柱の通りはほぼ直線になっている。

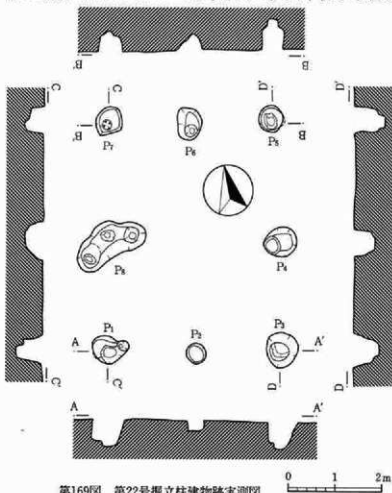
柱間寸法は、桁方向が8尺等間隔で、梁方向が5尺・6尺で設計されたものと思われる。

第22号掘立柱建物跡 (第169図) 位置 707.0Bグリッド

本建物跡は、12・21号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、先後関係については、柱穴の切り合い関係によって、12号掘立柱建物跡→本建物跡→21号掘立柱建物跡の順であることが明らかになっている。平面形は、2間×2間で、東辺及び北辺がやや乱れた長方形形状を呈する、南北棟の建物跡である。

規模は、東辺4.75m (15.5尺)・南辺3.60m (12尺)・西辺4.80m (16尺)・北辺3.45m (11.5尺)を測り、棟の走向はN9°Eであると思われる。

柱穴は、径40~70cm・深さ25~70cmの不整形形の掘り方で、底面の一部には、柱痕が確認されており、径約20cm前後の柱が立てられていたと考えられる。なお、柱穴の配置を見ると、北辺の柱通りが若干ずれている。



第169図 第22号掘立柱建物跡実測図

柱間寸法は、桁方向が8尺等間隔で、梁方向が6尺等間隔で設計されたものと思われる。

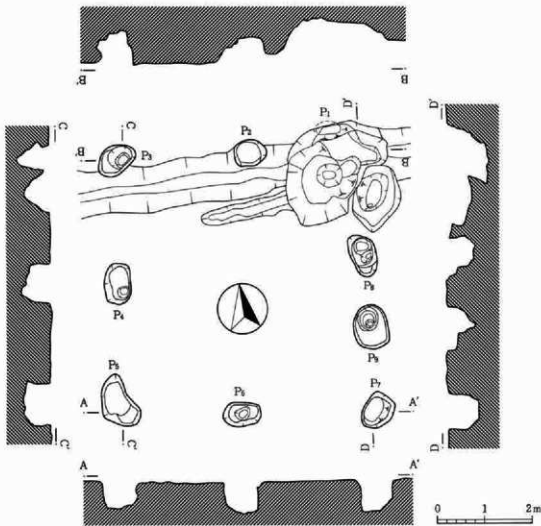
第23号掘立柱建物跡 (第170図) 位置 705.5C グリッド

本建物跡は、7号溝と重複関係にあるが、先後関係については、調査時の所見によって、本建物跡が先行することが明らかになっているが、北東隅の柱穴は検出し得なかった。平面形は、2間×3間で、東辺がやや乱れた正方形状を呈する建物跡である。

規模は、南辺5.40m (18尺)・西辺5.40m (18尺)を測るが、東辺及び北辺については、前述の通り、柱穴を欠くために不明である。南北棟の走向はN9°Eである。

柱穴は、60×80cm・深さ50~60cm隅丸方形の掘り方で、一部の柱穴の底部には柱痕が認められ、径約20cm前後の柱が立てられていたと考えられる。なお、柱穴の配置を見ると、隅の柱穴は対角線と垂角になるように掘られている様子が認められた。

柱間寸法は、東辺を除き、三辺共に9尺等間隔で設計されたものと思われるが、東辺は出入りを意図したものであろうか、中央を4尺とし、両脇を7尺として3間で構成されている。



第170図 第23号掘立柱建物跡実測図

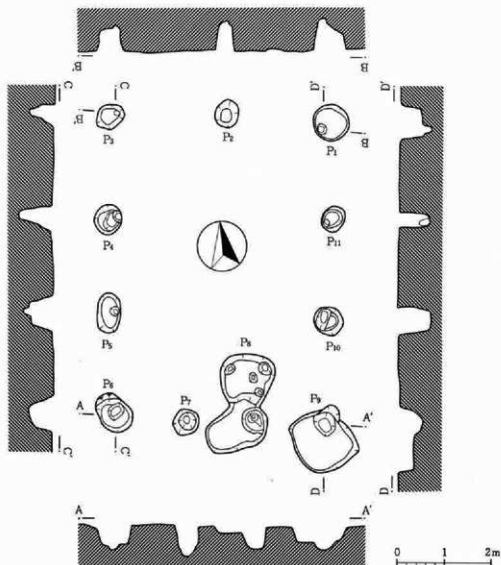
第24号掘立柱建物跡（第171図、図版38） 位置 705.0Eグリッド

本建物跡は、2号土坑と重複関係にあるが、先後関係については明らかにし得なかった。平面形は、2間×3間で、南北棟の建物跡である。なお、南辺が3間になっており、ここを出入り口としていたものと考えられる。

規模は、東西方向4.48m（15尺）・南北方向6.40m（21尺）を測り、棟の走向はN6°Eである。

柱穴は、径50～70cm・深さ45～60cmの不整形形の掘り方で、均整のとれた配置となっている。

柱間寸法は、梁方向7.5尺、桁方向7尺で設計されたものと思われる。



第171図 第24号掘立柱建物跡実測図

第25号掘立柱建物跡（第172図、図版39） 位置 706.5Aグリッド

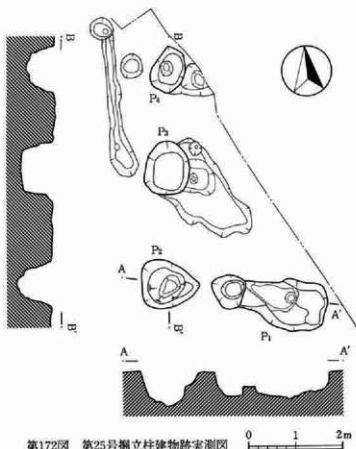
本建物跡は、東半部が調査区域外にかかるため未完掘であるために、詳細は不明である。調査時点では重複遺構が無く、単独で存在すると思われたが、検討の結果、建て替えがなされたと考えられる。平面形は、柱穴の形状及び他の遺構の状況から推して、2間×2間と考えられる。

第三章 書上上原之城遺跡

規模は、東西方向3.40m以上・南北方向4.60mを測り、西辺の走向は $N 8^{\circ} E$ である。

柱穴は、 $95-105\text{cm} \times 70-95\text{cm}$ ・深さ $48-64\text{cm}$ の隅丸方形の掘り方で、隅部の柱穴は対角線方向に直交するように掘られていた。

柱間寸法は、8尺等間隔で設計されたものと思われる。



第172図 第25号独立柱建物跡実測図

第26号独立柱建物跡 (第173図、図版39) 位置 706.5 I ポイント

本建物跡は、29・30・37号独立柱建物跡と重複関係にあるが、先後関係については明確にし得なかった。

平面形は、2間×3間で、南北棟の建物跡である。

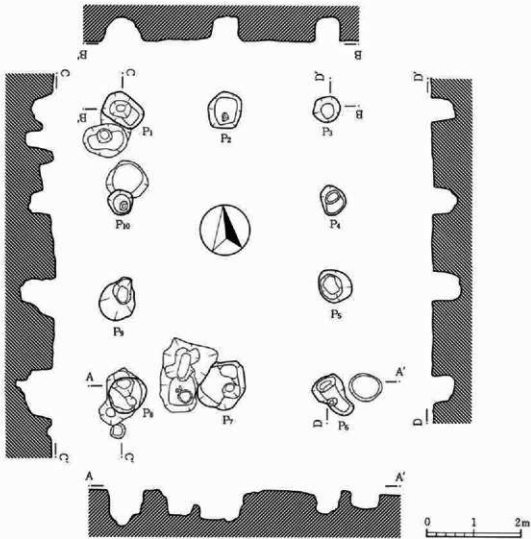
規模は、東西方向4.50m (15尺)・南北方向5.80m (19.5尺)を測り、棟の走向は $N 5^{\circ} E$ である。

柱穴は、径 $58-72\text{cm}$ ・深さ $40-78\text{cm}$ の不整形の掘り方で、隅部の柱穴は対角線方向に直交するように掘られていた。

柱間寸法は、梁方向7.5尺・桁方向6.5尺で設計されたものと考えられる。

第27号独立柱建物跡 (第174図、図版40) 位置 702.0 G グリッド

本建物跡は、39号住居跡と重複関係にある。先後関係については、本建物跡が後出することが確認されている。平面形は、2間×3間で、東西棟の建物跡である。



第173図 第26号掘立柱建物跡実測図

規模は、東西方向13.20m (44尺)・南北方向5.10m (17尺)を測り、棟の走向はN67°Eである。
柱穴は、80×130cmの不整形の掘り方で、隔部の柱穴は対角線方向に直交するように掘られていた。
柱間寸法は、梁方向8.5尺、桁方向14.5尺等間隔で設計されたものと考えられる。

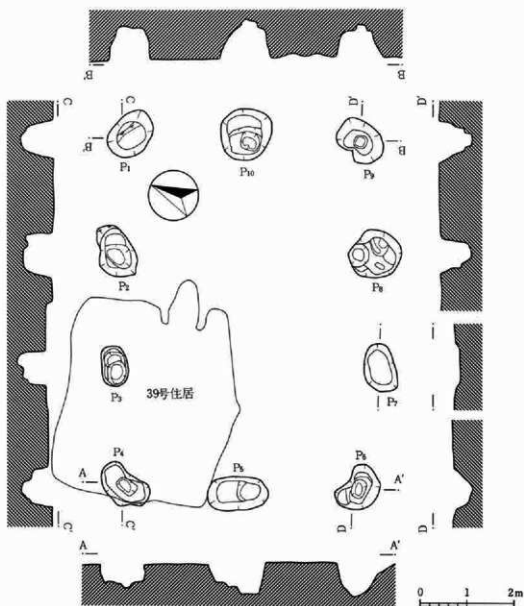
第28号掘立柱建物跡 (第175図、図版40) 位置 701.5E・Fグリッド

本建物跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、2間×2間で、西辺がやや歪んだ東西棟の建物跡である。

規模は、東辺4.20m (14尺)・南辺4.20m (14尺)・西辺4.20m (14尺)・北辺4.50m (15尺)を測り、棟の走向はN5°Wである。

柱穴は、径38~60cm・深さ22~44cmの不整形の掘り方で、P₁がややずれて配されている。

柱間寸法は、梁方向7尺、桁方向7尺・8尺で設計されたものと考えられる。



第174図 第27号掘立柱建物跡実測図

第29号掘立柱建物跡（第176図、図版41） 位置 706.51ポイント

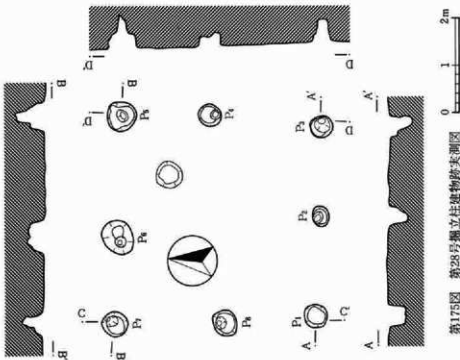
本建物跡は、26・30・37号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、先後関係については明確にし得なかった。
平面形は、2間×3間で、南北棟の建物跡である。

規模は、東西方向4.20m（14尺）・南北方向5.40m（18尺）を測り、棟の走向はN1°Eである。

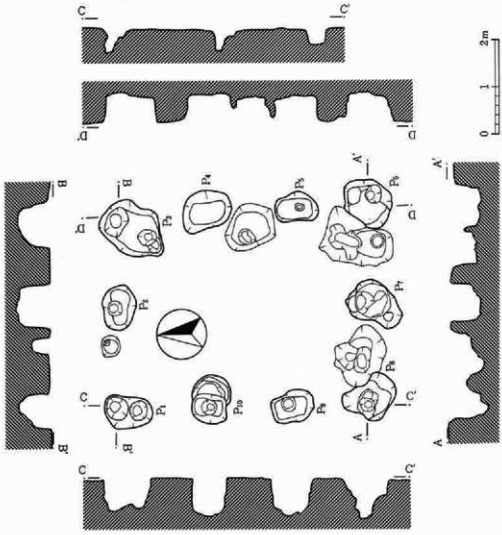
柱穴は、60×90cmの隅九方形の掘り方で、隅部の柱穴は対角線に直交するように掘られている。

柱間寸法は、桁方向6尺、梁方向7尺等間隔で設計されたものと考えられる。

第2節 検出された遺構と遺物



第175図 第28号独立柱建物跡実測図



第176図 第29号独立柱建物跡実測図

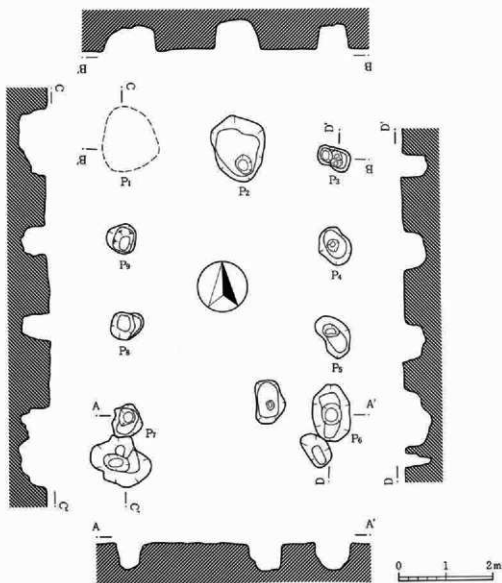
第30号掘立柱建物跡 (第177図、図版41) 位置 706.51ポイント

本建物跡は、26・29・37号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、先後関係については明らかにし得なかった。また、北西隅の柱穴は実測ミスのため記録が残せなかった。平面形は、2間×3間で南北方向に棟を持つ建物跡である。

規模は、東西方向4.50m (15尺)・南北方向5.70m (19尺)を測り、棟の走向はN2°Eである。

柱穴は、径50~70cm・深さ46~65cmの不整形形の掘り方で、底面には径約20cmの柱据え痕が残っていた。

柱間寸法は、梁方向が6尺・8尺、桁方向6尺等間隔で設計されたものと考えられる。

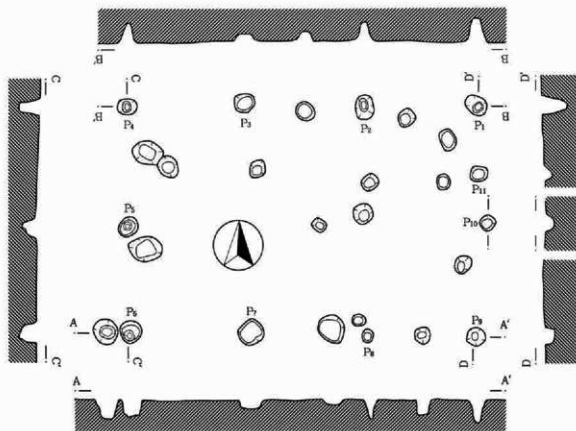


第177図 第30号掘立柱建物跡実測図

第31号掘立柱建物跡 (第178図、図版42) 位置 701.0Dグリッド

本建物跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、2間×3間で、東西棟の建物跡である。なお、東側のみが不規則な3間になっていた。恐らくは、ここを出入り口としていたものと思われる。

規模は、東西方向7.40m (24.5尺)・南北方向4.80m (16尺)を測り、棟の走向はN89Wである。柱穴は、径35～45cm・深さ14～46cmの不整形形の掘り方で、比較的均整のとれた配置になっている。柱間寸法は、梁方向・桁方向共に8尺等間隔で設計されたものと考えられる。



第178図 第31号掘立柱建物跡実測図

0 1 2m

第32号掘立柱建物跡 (第179図、図版42) 位置 704.5Fポイント

本建物跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、3間×4間で、平行四辺形状を呈する南北棟の建物跡である。相対する柱穴P₃・P₁₀の部分には仕切りがあったかも知れない。

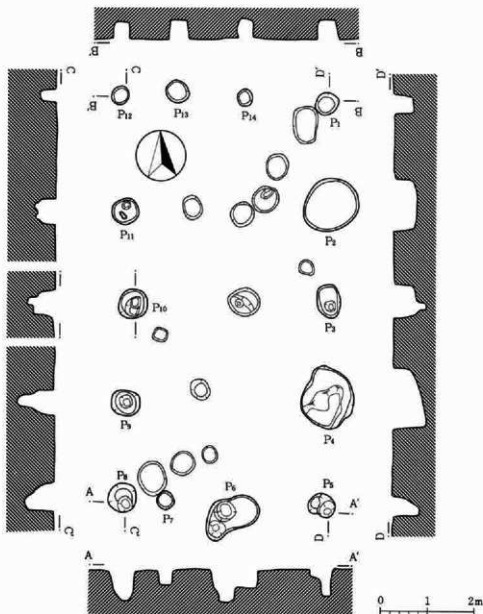
規模は、東辺8.60m (28.6尺)・南辺4.30m (14.3尺)・西辺8.60m (28.6尺)・北辺4.40m (14.6尺)を測り、棟の走向はN5°Eである。

柱穴は、径32～68cm・深さ33～60cmの不整形形の掘り方で、西辺の柱通りがややずれている。P₂・P₄・P₈については、検出時にやや掘り過ぎた可能性が考えられる。

柱間寸法は、企画性を見い出せない。

第33号掘立柱建物跡 (第180図、図版43) 位置 707.5Aグリッド

本建物跡は、東半部が調査区域外にかかるため未完掘であり、47号住居跡及び12・13号掘立柱建物跡と重複関係にある。先後関係については、47号住居跡に後出することは確認されたが、その他の遺構に関しては不明である。平面形は、他の遺構の状況から推して、2間×3間で、南北棟の建物跡と考えられる。

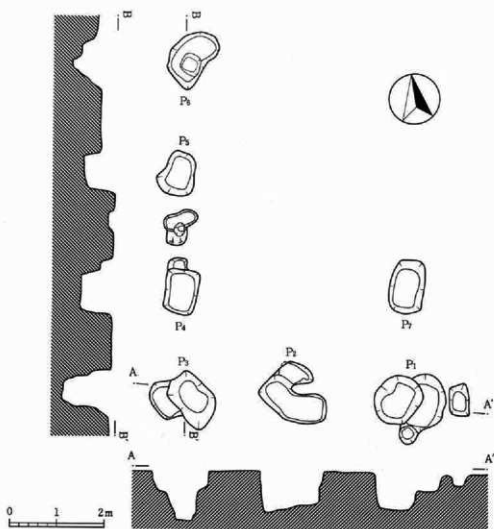


第179図 第32号掘立柱建物跡実測図

規模は、南辺4.70m (15.6尺)・西辺7.00m (23.3尺)を測り、棟の走向はN10°Eである。
 柱穴は、70×110cm程の隅丸方形の掘り方で、隅部の柱穴は対角線に直交するように掘られていた。
 柱間寸法は、梁方向・桁方向共に8尺等間隔で設計されたものと思われる。

第34号掘立柱建物跡 (第181図、図版43) 位置 704.0Bポイント

本建物跡は、北東部の一部が調査区域外にかかるため未完掘であるが、確認された範囲内においては重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、2間×2間で、東西方向が若干長い総柱の建物跡である。
 規模は、東西方向3.96m (13.2尺)・南北方向3.75m (12.5尺)を測り、棟の走向はN85°Wである。
 柱穴は、径40～60cm・深さ40～55cmの不整形円の掘り方で、底面の一部には柱痕が確認されており、径15cm



第180図 第33号掘立柱建物跡実測図

前後の柱が立てられていたと考えられる。なお、P₉は中心からやや西にずれており、本建物跡に伴わない可能性も否定できない。

柱間寸法は、桁方向が6尺・7尺、梁方向が6尺等間隔で設計されたものと思われる。

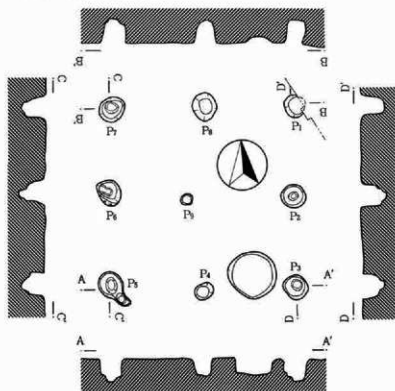
第35号掘立柱建物跡（第182図、図版44） 位置 704.5Bポイント北側

本建物跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、2間×3間で、東西方向が若干長い総柱の建物跡である。西辺のみが3間となっており、ここを出入り口として使用していたものかも知れない。

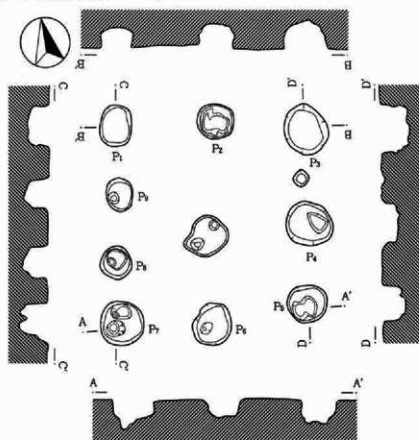
規模は、東西方向4.23m（14.1尺）・南北方向4.00m（13.3尺）を測り、棟の走向はN79°Wである。

柱穴は、径65～90cm・深さ38～62cmの比較的大振りな不整形の掘り方で、底面の一部には柱痕が確認されており、径15cm前後の柱が立てられていたと考えられる。なお、底面の状態から推して、建て替えが行われた可能性が大である。

柱間寸法は、桁方向・西辺が4尺・6尺、東辺が7尺、梁方向は6.5尺で設計されたものと思われる。



第181図 第34号掘立柱建物跡実測図



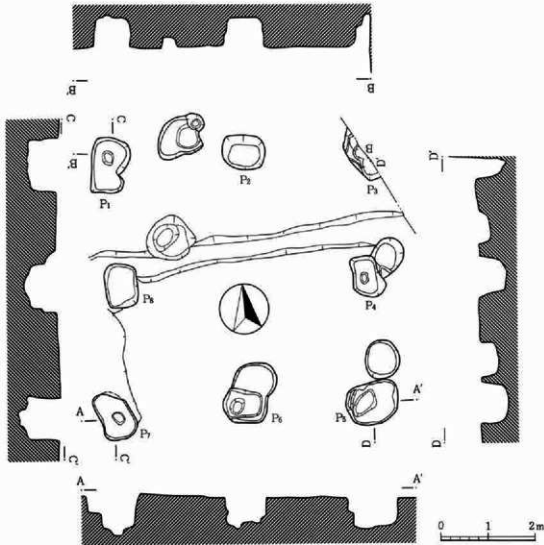
第182図 第35号掘立柱建物跡実測図

第36号掘立柱建物跡 (第183図、図版44) 位置 705.5グリッド

本建物跡は、北東隅が調査区域外にあるために未完掘である。また、11号溝及び14号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、先後関係については、柱穴の切り合い関係によって、本建物跡→14号掘立柱建物跡→11号溝の順になることが明らかになっている。平面形は、2間×2間で、ほぼ方形を呈する建物跡と考えられる。規模は、南辺5.34m (17.8尺)・西辺5.40m (18尺)を測り、西辺の走向はN5°Eである。

柱穴は、70×100cm・深さ50~70cmの不整形の掘り方で、隅部の柱穴は対角線に直交するように掘られている。柱痕は確認されていないが、底部の状況から推して、径30cm前後の柱が立てられていたと思われる。また、柱穴の状態から、建て替えが行われたものと考えられる。

柱間寸法は、桁方向・梁方向共に、9尺等間隔で設計されたものと思われる。



第183図 第36号掘立柱建物跡実測図

第37号掘立柱建物跡 (第184図、図版45) 位置 706.5 I ポイント

本建物跡は、南西の一部が調査区域外にかかるため未完掘である。また、26・29・30号掘立柱建物跡と重

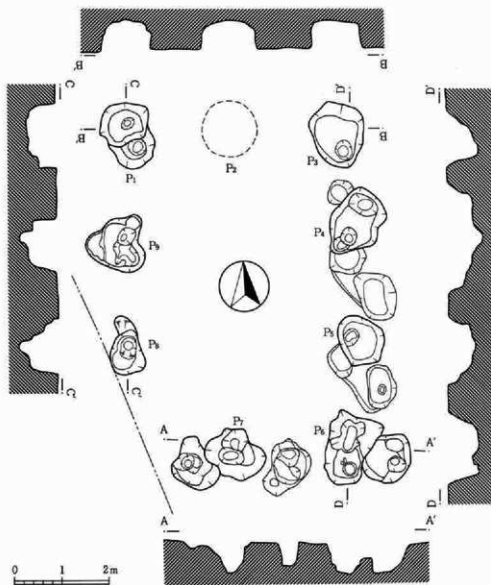
第三章 書上上原之城遺跡

複関係にあるが、先後関係については明らかにし得なかった。平面形は、2間×3間で、南北棟の建物跡である。なお、北辺中央の柱穴については、実測ミスのため平面図の記録を残せなかった。

規模は、東西方向4.80m (16尺)・南北方向7.23m (24尺)を測り、棟の走向はN4°Eである。

柱穴は、60×90cm・深さ65~85cmの隅丸不整形の掘り方で、隅部の柱穴は対角線に直交するように掘られている。底面の一部には、柱痕が確認されており、径20cm前後の柱が立てられていたと考えられる。なお、底面及び柱穴の平面形の状態から推して、建て替えが行われたものと考えられる。

柱間寸法は、桁方向・梁方向共に、8尺等間隔で設計されたものと思われる。



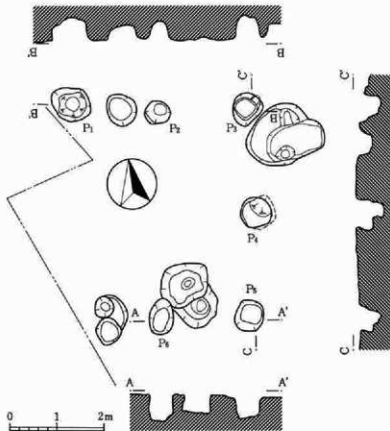
第184図 第37号掘立柱建物跡実測図

第39号掘立柱建物跡 (第185図) 位置 706.5H・1グリッド

本建物跡は、西側が調査区域外にかかるため未完掘である。また、18・19・37・38号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、先後関係については明らかにし得なかった。平面形は、2間×2間で、東西棟の建物跡と思

われる。

規模は、東辺4.50m（15尺）を測り、東西方向は4.32mを確認した。棟の走向はN82°Wである。
柱穴は、径50～60cm・深さ27～55cmの不整形形の掘り方で、底部はやや隅丸方形に掘られていた。
柱間寸法は、梁方向7.5尺・桁方向6尺で設計されたものと思われる。



第185図 第39号掘立柱建物跡実測図

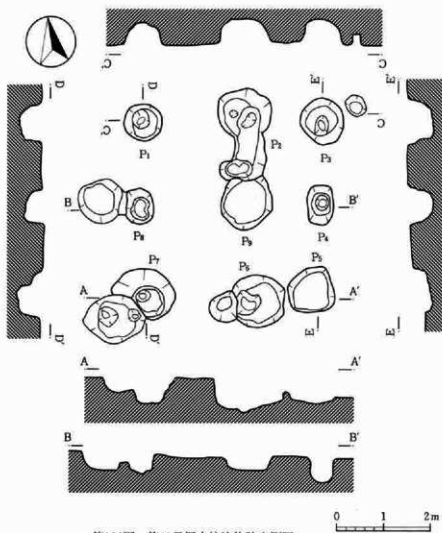
第40号掘立柱建物跡（第186図、図版46） 位置 707.01ポイント北側

本建物跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、2間×2間で、比較的均整のとれた正方形の総柱建物跡である。なお、柱穴の状態から推して、西側に別の建物跡の存在が考えられるが、確認は出来なかった。

規模は、東西方向・南北方向共に、3.75m（12.5尺）を測り、西辺の走向はN10°Eである。

柱穴は、径60～80cm・深さ39～56cmの円形の掘り方で、ほぼ円筒状に掘られていた。底面の一部には柱痕が確認されており、径20cm前後の柱が立てられていたものと思われる。

柱間寸法は、4.5尺・5.5尺・7.5尺・8.0尺に散らばっている。



第186図 第40号掘立柱建物跡実測図

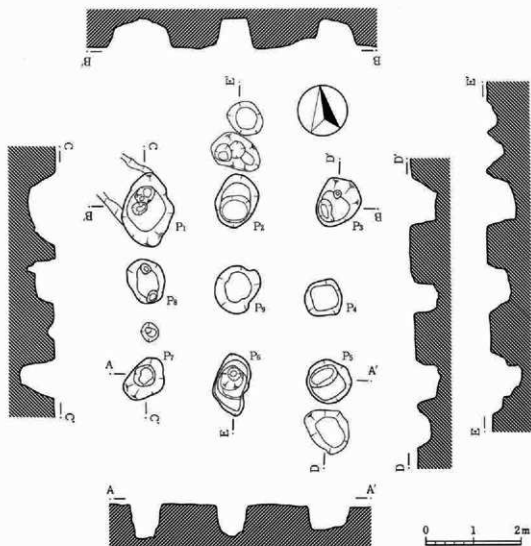
第41号掘立柱建物跡（第187図、図版46） 位置 707.5H・Iグリッド

本建物跡は、1号井戸と重複関係にあるが、柱穴の切り合い関係が僅かであったために、先後関係については判然としない。平面形は、2間×2間で、正方形を呈する総柱の建物跡である。

規模は、東辺・西辺が共に3.60m（12尺）、南辺・北辺が共に3.90m（13尺）を測り、棟の走向はN79°Wである。

柱穴は、径70～80cm・深さ50～80cmの不整形形の掘り方で、底面の一部には柱痕が確認されており、径約25cm前後の柱が立てられていたと考えられる。なお、柱穴の配置を見ると、対角線の交点に東柱が位置しており、良く均整がとれている。

柱間寸法は、桁方向が6.5尺等間隔で、梁方向が6尺等間隔で設計されたものと思われる。



第187図 第41号掘立柱建物跡実測図

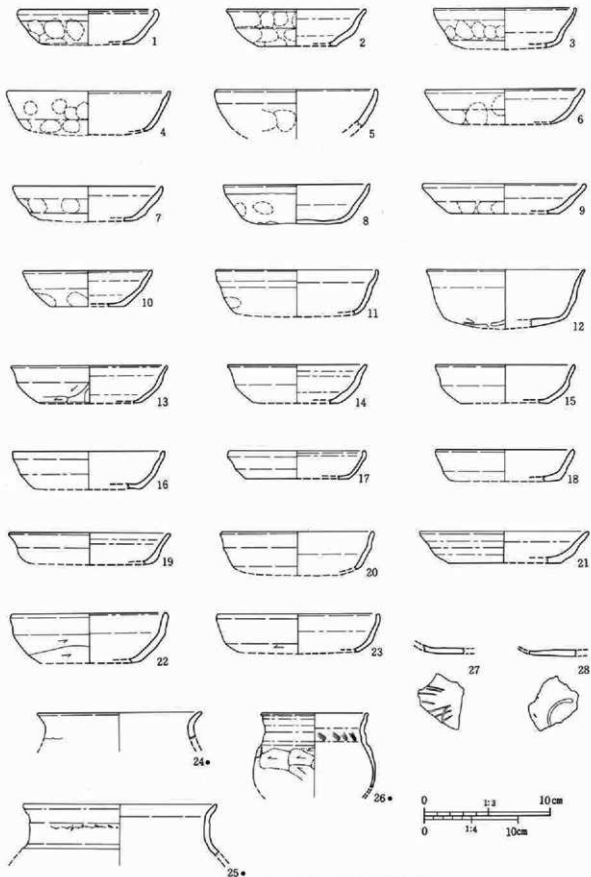
出土遺物 (第188・189図)

今回の掘立柱建物跡の調査によって、柱穴の掘り方の中から土師器・須恵器の細片が何点か出土したが、大部分が小破片であり、所属時期を特定できるような資料は以下に掲げたものだけであった。

遺物を概観すると、9世紀代に所属すると考えられるものが多いように見受けられる。このことから遺構の時期を決定することは、柱穴掘り方出土の遺物と柱痕の覆土中より出土したものが区別されておらず出土状況が必ずしも明確になっていないために早計に過ぎるが、一応の目安となると思われる。また、柱痕の覆土中から出土した遺物が即ちその遺構に伴うものとも考えることもできないが、建物が廃棄された時期を知る手掛かりにはなるとと思われる。

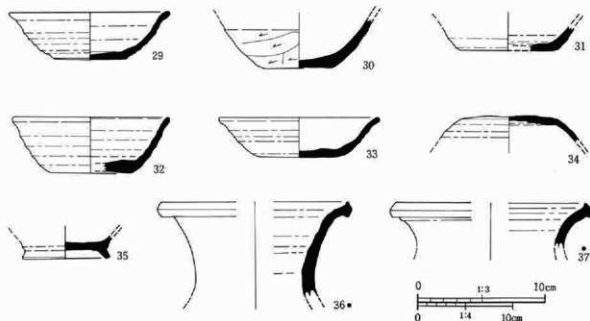
今回の調査結果では、遺構の時期を特定できるような資料は得られなかったが、本来的に掘立柱建物跡の遺物については、「まつり」の際に柱穴に意図的に埋納されたもの以外にはその所属の可否の判断は非常に難しいと考えている。

第三章 書上上原之城遺跡



第188図 掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1)

第2節 検出された遺構と遺物



第189図 掘立柱建物跡出土遺物実測図 (2)

第71表 掘立柱建物跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/4残存。 口 11.3cm	27号掘立P ₂	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部跳削り。体部粗い荒ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
2	杯 (土師器)	1/5残存。 口 11.1cm	25号掘立	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部跳削り。体部粗い荒ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
3	杯 (土師器)	1/4残存。 口 11.4cm	37号掘立P ₅	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部跳削り。体部粗い荒ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
4	杯 (土師器)	1/5残存。 口 13.0cm	15号掘立P ₅	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部跳削り。体部粗い荒ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
5	杯 (土師器)	1/8残存。 口 13.0cm	24号掘立P ₈	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部跳削り。体部粗い荒ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
6	杯 (土師器)	小破片。	21号掘立P ₄	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部跳削り。体部粗い荒ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
7	杯 (土師器)	1/3残存。 口 12.0cm	15号掘立P ₅	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部跳削り。体部粗い荒ナデ。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。	
8	杯 (土師器)	1/5残存。 口 12.0cm 高 3.1cm	36号掘立P ₁	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部跳削り。体部跳ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。	

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
9	杯 (土師器)	小破片。	15号掘立P ₅	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。火はぜによる割離痕有り。	
10	杯 (土師器)	小破片。	15号掘立P ₅	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
11	杯 (土師器)	小破片。	23号掘立P ₁₀	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
12	杯 (土師器)	小破片。	29号掘立P ₄	①砂粒を含む。 ②赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
13	杯 (土師器)	1/4残存。 口 12.5cm	15号掘立P ₅	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。	
14	杯 (土師器)	小破片。	25号掘立P ₁	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。	
15	杯 (土師器)	小破片。	15号掘立P ₆	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。	
16	杯 (土師器)	1/4残存。 口 12.1cm	14号掘立P ₁₁	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。内外共に火はぜによる割離痕有り。	
17	杯 (土師器)	小破片。	32号掘立P ₅	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
18	杯 (土師器)	小破片。	36号掘立P ₁ 覆土。	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。煤付着。 内面 ナデ。	
19	杯 (土師器)	口縁部 1/4残存。 口 12.8cm	14号掘立P ₁₁	①砂粒を少し含む。 ②黄褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
20	杯 (土師器)	口縁部 小破片。	12号掘立P ₇ 覆土。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
21	杯 (土師器)	小破片。	19号掘立P ₇	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部施削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
22	杯 (須恵器)	1/4残存。 口 12.5cm	37号掘立P ₆	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炭・硬質。	外面 底一体部施削り。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
23	杯 (土師器)	1/4残存。 口 13.0cm	18号掘立P ₆	①砂粒を含む。 ②赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 体部下端施削り。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。	

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
24	甕 (土師器)	口縁部 小破片。	44号掘立	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 頸部寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
25	甕 (土師器)	口縁部 小破片。	23号掘立P ₁₀	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 頸部寛削り。頸部寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
26	小型甕 (土師器)	口縁一体部 1/2残存。 口 11.3cm	12号掘立P ₉	①砂粒を含む。 ②赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 体部寛削り。頸部寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
27	杯 (土師器)	底部小破片。	37号掘立P ₃	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部寛削り。 内面 ナデ後、二重暗文を施す。	
28	杯 (土師器)	底部小破片。	37号掘立P ₁	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 底部寛削り。 内面 ナデ後、らせん状暗文を施す。	
29	杯 (須恵器)	1/2残存。 口 12.8cm 高 3.8cm 底 5.9cm	710 L ビット内。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転承切り後、周縁部寛削り。 内面 回転によるナデ。 内外共に火ばぜによる割離痕有り。	二次焼成によりやや軟質化。
30	杯 (須恵器)	底部のみ。 底 5.9cm	710 L S ビット内。	①砂粒を多く含む。 ②淡黄褐色。 ③還元炭・硬質。	外面 底一体部寛削り。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。	
31	杯 (須恵器)	1/5残存。	12号掘立P ₄	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転承切り後、周縁部寛削り。 内面 回転によるナデ。	
32	杯 (須恵器)	1/4残存。 口 12.6cm 高 4.4cm 底 6.5cm	24号掘立P ₈	①砂粒及び細礫を含む。 ②灰白色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転承切り後、無調整。体部下端削り。 内面 回転によるナデ。	
33	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 12.8cm 高 3.1cm 底 6.2cm	23号掘立P ₁₁	①砂粒を多く含む。 ②灰色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転承切り後、無調整。 内面 回転によるナデ。	
34	蓋 (須恵器)	1/4残存。	26号掘立P ₅	①砂粒を少し含む。 ②灰色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。天井部傾い回転削り。 内面 回転によるナデ。	
35	高台付甕 (須恵器)	底部1/2残存 底 7.0cm	40号掘立 No. 8	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転承切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
36	甕 (須恵器)	口縁部 小破片。	40号掘立 No. 4	①砂粒を多く含む。 ②灰色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	
37	甕 (須恵器)	口縁部 小破片。	37号掘立P ₉	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	

(3) 井戸跡

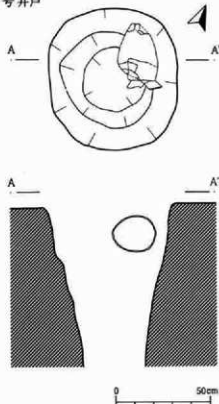
本遺跡の調査において、総計7基の井戸跡が検出された。必ずしも十分な資料を得ることはできなかったが、その概要は以下の通りである。

1号井戸 (第190、図版47) 位置 707.5Aグリッド

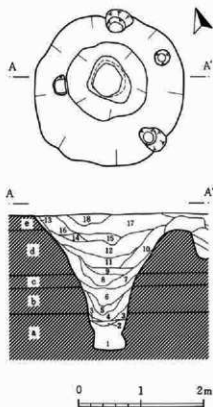
発掘調査時点では「1号土坑」と命名して調査を行ったが、検討の結果、井戸跡と考えられるので、改名した。径が小さかったために完掘できなかった。平面形は、隅丸方形で、80cm程下位からは円筒状に掘り込まれている。規模は、上端部で東西方向70cm・南北方向75cm、45cm下位からは径55cmになり、深さ82cmまで確認した。

井筒構造は認められなかったが、地山を直接利用した「素掘り井戸」と考えられる。また、井桁も残っていないが、45cm程下位まで埋め込まれていたものと思われる。

1号井戸



2号井戸



2号井戸

1. 灰黄褐色粘質土。しまりが無い。
2. 灰黒色粘土。しまりが無い。
3. 黄褐色粘質土。ロームを多く含む。
4. 黒褐色粘質土。ロームブロックを多く含む。
5. 淡黄褐色粘質土。ロームブロックを多く含む。
6. 黒褐色粘質土。ロームを含む。
7. 淡黄褐色粘質土。ロームを多く含む。
8. 黒褐色粘質土。ロームを多く含む。
9. 暗褐色粘質土。

10. 淡褐色粘質土。ロームを多く含む。
11. 黒褐色粘質土。ロームを少し含む。
12. 黒褐色粘質土。ロームブロックを多く含む。
13. 淡黄褐色土。ロームを含む。
14. 暗褐色粘質土。F.P.・ロームを含む。
15. 暗黄褐色土。ロームブロックを多く含む。
16. 淡褐色粘質土。F.P.・ロームを含む。
17. 黒褐色土。F.P.・ロームブロックを含む。
18. 灰黒色土。F.P.・ロームを含む。

- a. 淡黄褐色粘土。
- b. 灰黄褐色粘土。
- c. 灰黄褐色ローム層。
- d. 黄褐色ローム層。
- e. ローム層移層。

第190図 井戸跡実測図 (1)

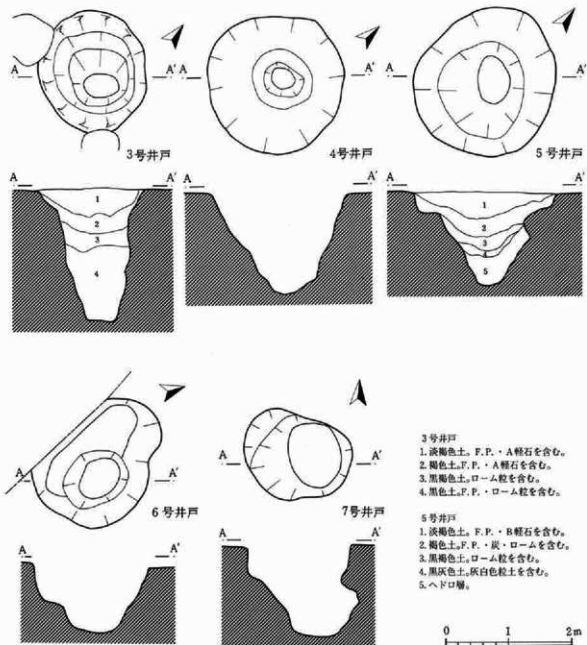
第2節 検出された遺構と遺物

遺物は、上端付近に土師器片が横倒しになって出土した。(第190図参照) なお、調査時の所見によると、自然埋没であったと考えられる。

2号井戸 (第190図、図版47) 位置 710.0Dポイント東側

「原園芸試験場第二遺跡」の調査において検出されたものである。平面形は、上端部が円形で、底部は不整形になっており、105cm程下位からはラップ状に上に広がっている。規模は、上端部で径2.40m・深さ95cm付近では径1.30m・底部では径50cm程になっている。深さは2.15mを測る。

井筒構造は確認されておらず、地山を直接に利用した「素掘り井戸」と考えられる。底面から25cm程上部に



第191図 井戸跡実測図 (2)

第三章 書上上原之城遺跡

「あぐり」が発達していたので、湧水量はさほど多くなかったものと思われる。

遺物は、覆土中から土師器の小片が出土したが、実測に耐えられるような接合関係は得られなかった。なお、覆土の状況から推して、長期に亘り、徐々に埋まっていったと考えられる。

3号井戸（第191図、図版47） 位置 707.5Hグリッド

調査時には「1号井戸」としたが、改名した。本井戸跡は、41号掘立柱建物跡と重複関係に有り、調査時の所見により、本井戸が後出することが確認されている。平面形は、上端部は南北方向がやや長い長円形で、下部は不整隅丸方形を呈する。35cm程下位からやや上に開くが、概ね截頭円錐状に掘り込まれていた。規模は、上端部で長径1.95m・深さ35cm付近では一辺1.30m前後・底径約50cmである。深さは2.10mを測る。井筒構造及び井桁構造、共に検出されなかったが、地山を直接に利用した「素掘り井戸」と考えられる。明確な出土遺物は無いが、覆土の状況から推して、一気に埋めたのではないと思われる。

4号井戸（第191図、図版47） 位置 705.5Hグリッド

調査時には「2号井戸」としたが、改名した。平面形は、円形を呈し、截頭円錐状に掘り込まれていた。規模は、上端部で径2.20m・底径40cm前後で、深さ1.60mを測る。井筒構造及び井桁構造、共に検出されなかったが、地山を直接利用した「素掘り井戸」と考えられる。なお、調査時の所見によると、湧水量はさほど多くなかったものと思われる。

5号井戸（第191図、図版47） 位置 704.0Fグリッド中央部

調査時には「3号井戸」としたが、改名した。平面形は、南北方向に長い長円形を呈する。上端から30cm程下位には、やや平坦な面が認められる。規模は、長径2.40m・短径2.15mで、深さ1.53mを測る。井筒構造及び井桁構造、共に検出されなかったが、深さ70cm付近に「あぐり」が発達していたので、地山を直接に利用した「素掘り井戸」と考えられる。覆土の状況から推して、徐々に埋まっていったと考えられる。

6号井戸（第191図、図版47） 位置 704.0Hグリッド

調査時には「4号井戸」としたが、改名した。西側が調査区域外になるために完掘できなかった。平面形は、南北方向に長い長円形を呈すると思われる。上端から60cm程下位には、やや平坦な面が認められる。あるいは別遺構が重複していたものかも知れないが、確認し得なかった。規模は、南北方向2.25m・深さ1.10mを測り、東西方向は1.60mまで確認した。

7号井戸（第191図、図版47） 位置 705.0Cポイント北側

調査時には「5号井戸」としたが、改名した。20号掘立柱建物跡と重複関係に有るが、切り合い関係が無いために、先後関係は不明。平面形は、上端は東西方向が長い不整長円形で、底部は南北方向が長い長円形を呈する。上端から45cm程下位には、やや平坦な面が認められた。位置的にやや偏在しているので、井桁構造の下部と考えるよりも、別遺構の重複が有ったものかも知れない。規模は、上端部で長径1.80m・短径1.30m、深さ1.45mを測る。深さ80cm付近に「あぐり」が発達していたので、地山を直接に利用した「素掘り井戸」であったと考えられる。

(4) 溝 跡 (第53・54図、図版48・49)

本遺跡の調査において、21条の溝跡が検出されたが、その概要は以下の通りである。必ずしも十分な資料が得られなかったために、重複遺構との先後関係及び所属時期や性格が明確になったものばかりではないが、中世の屋敷地を画していたのではないかと考えられるものに、1・3号溝及び8・9・12号溝がある。更に、10・11号溝は、出土遺物の分析から、中世前半の道路跡ではないかと考えられる。また、12号溝については、確証が無いが、平安時代の一時期の集落を画していた溝である可能性が有る。

1号溝

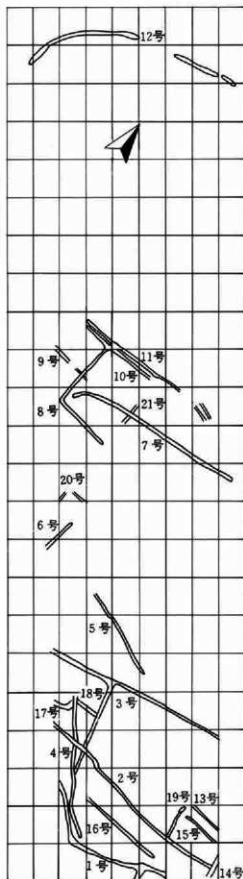
調査区の南西部、700.0Cグリッドから701.5Gグリッドにかけて、総延長62mを検出した。上端部の幅105~130cm、深さは13~23cmで、700.5Gポイント付近で「くの字」に折れ曲がり、700.0Eポイントの北側で東と南に分岐している。東西方向の走向はN74°E・南北方向の走向はN12°Eである。南北両端の底面レベル差は、北側が42cm高くなっている。

2号溝

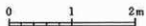
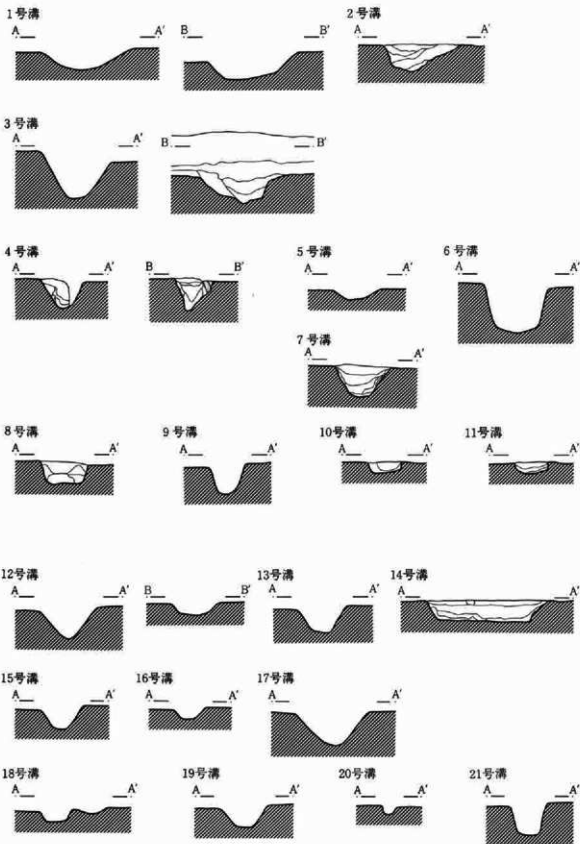
調査区の南西部700.5Cグリッドから702.0Hグリッドにかけて、総延長38mを検出した。覆土中にはB軽石を含み、上端部の幅35~40cm、深さ36~42cmで、701.5Fグリッドでやや曲がるが、走向はN85°Wである。南北両端の底面レベル差は、西側が4cm程高くなっている。明確な出土遺物が無いために時期は不明であるが、40号住居跡よりも新しいことは確認されている。

3号溝

調査区南側、701.5~703.0グリッドにかけて、「Tの字」状に検出された。上端部の幅55~95cm、深さ24~35cmで、東西方向の走向はN80°E・南北方向の走向はN10°Wである。東西両端の底面レベル差は、東が15cm程高くなっている。1号溝と共に中世の屋敷地を画していた溝跡と考えられる。



第192図 溝跡位置図



第193図 溝跡断面実測図

4号溝

調査区の西側、700.5Gグリッドから702.5Gグリッドにかけて、総延長46mを検出した。上部部の幅55～95cm・深さ14～30cmで、走向はN37°Wである。南北両端の底面レベル差は、北側が4cm高くなっている。40号住居跡よりも新しいことは確認されている。

5号溝

調査区の中央やや南寄りの702.5Dグリッドから703.5Fグリッドにかけて、総延長22mを検出した。上部部の幅55～70cm・深さ13～15cmで、走向はN67°Wである。南北両端の底面レベル差は、南側が14cm程高くなっている。所属時期は不明である。

6号溝

調査区の西側、704.0Hグリッドから704.5Gにかけて、総延長13mを検出した。上部部の幅90～100cm・深さ30～39cmで、走向はN7°Eである。南北両端の底面レベル差は、北側が13cm高くなっている。31号住居跡よりも新しいことは確認されている。

7号溝

調査区のほぼ中央部、705.0Aグリッドから706.5Gグリッドにかけて、総延長60mを検出した。上部部の幅95～120cm・深さ50～52cmで、西端が若干折れ曲がるが、走向はN85°Eである。底面には多少の凹凸が認められるが、東西両端のレベル差は殆ど無い。所属時期は不明である。

8号溝

調査区のほぼ中央部、705.5Fグリッドから707.0Fグリッドにかけて、総延長45mを検出した。706.0Hポイント北側ではほぼ直角に折れ曲がっている。北側部分の走向はN5°Eである。南北両端の底面レベル差は、北側が45cm高くなっている。

9号溝

調査区の西側、706.5Fグリッドから707.0Hグリッドにかけて、総延長17mを検出した。上部部の幅40～70cm・深さ15～23cmで、西側がやや広くなる。走向はN81°Wである。東西両端の底面レベル差は、西側が3cm高くなっている。

10号溝

11号溝と共に、道路の側溝的な役割を果たしていたと考えられるものである。706.0Bグリッドから707.5Gグリッドにかけて、総延長53mを検出した。上部部の幅43～55cm・深さ9～12cmで、走向は概ね東西方向である。東西両端の底面レベル差は、西側が18cm高くなっている。

11号溝

10号溝の北側に併走して、総延長54mを検出した。上部部の幅43～98cm・深さ12～16cmで、東側にやや歪んだ部分が有る。東西両端の底面レベル差は、西側が34cm高くなっている。

12号溝

調査区の北端で、710.5Aグリッドから710.5Iグリッドにかけて、弧状に掘られていた。やや不鮮明な部分があるが、総延長58mを検出した。上部部の幅75～143cm・深さ約35cmである。明確な出土遺物は無いが、調査時の所見によると、平安時代の集落を囲む溝ではないかと思われる。

13号溝

調査区の南東部700.5Aグリッドから701.0Bグリッドにかけて、総延長12mを検出した。上部部の幅55～85cm・深さ20～25cmで、走向はN8°Wである。東西両端の底面レベル差は、西側が4cm高くなっている。

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

15号溝と共に、道路の劃分的な役割を果たしていたものかも知れない。

14号溝

調査区の南東隅、700.0Cグリッドから700.5Bグリッドにかけて、総延長8mを検出した。覆土中にはB軽石が多く含まれていた。上端部の幅156~200cm・深さ約30cmで、走向は概ね南北方向である。南北両端の底面レベル差は、北側が7cm高くなっている。

15号溝

調査区の南東部、700.5Bグリッドから701.0Cグリッドにかけて、総延長13mを検出した。13号溝の南側に約2.5mの間隔を持って併走している。上端部の幅50~65cm・深さ11~13cmで、走向はN8°Eである。西側はやや不明瞭だが、底面のレベル差は、東側が2cm程高くなっている。

16号溝

調査区の南端、700.0Dグリッドから701.0Gグリッドにかけて、総延長30mを検出した。上端部の幅40~50cm・深さ12~13cmで、走向はN10°Wである。東西両端の底面レベル差は東側が3cm高くなっている。49号住居跡よりも新しいことは確認されている。

17号溝

調査区の西側、702.5G・Hグリッドに、総延長8mを検出した。上端部の幅90~95cm・深さ約23cmで、「くの字」状に折れ曲がっている。東西両端の底面レベル差は、西側が4cm高くなっている。39号住居跡よりも新しいことは確認されている。

18号溝

3号溝と4号溝に挟まれて、702.0F・Gグリッドに、総延長8mを検出した。上端部の幅30~45cm・深さ9~11cmで、走向はN9°Wである。東西両端の底面レベル差は、東側が8cm高くなっている。39号住居跡よりも新しいことは確認されている。

19号溝

調査区の南東部、700.5Cグリッドに、総延長11mを検出した。北端は不整形円形になっており、南側は2号溝に合わさっている。上端部の幅60~90cm・深さ11~20cmで、走向はN24°Wである。南北両端の底面レベル差は、北側が4cm高くなっている。

20号溝

28号住居跡を壊して、705.0G・Hグリッドに、総延長9mを検出した。上端部分の幅28~30cm・深さ10~13cmで、走向はN13°Eで、28号住居跡の部分ではほぼ直角に折れ曲がっている。両端部の底面レベル差は、西側が10cm高くなっている。

21号溝

調査区のほぼ中央部、706.0Eグリッドに、総延長8mを検出した。7号溝との先後関係は捉えられなかった。不明上端部の幅35~50cm・深さ14~26cmで、走向はN13°Eである。南北両端の底面レベル差は、南側が12cm高くなっている。

(5) 土坑

本遺跡の調査によって、総計11基の土坑が検出された。1～4号土坑は、「県園芸試験場第二遺跡」の調査時に確認されたものであり、他は、昭和58年度の調査によって検出されたものである。必ずしも十分な資料が得られなかったために、所属時期・性格を解明できたものは殆ど無い。各遺構の概要は、以下の通りである。

1号土坑(第194図) 位置 709.0Dグリッド

本土坑は、2号土坑と共に、昭和48年度に調査されたものである。平面形は、南北方向に長い、比較的均整のとれた、隅丸長方形を呈する。規模は、148cm×100cm・深さ45cmを測り、長辺の走向はN7°Wである。底部には炭化層が認められたが、性格は不明である。

2号土坑(第194図) 位置 709.0Dグリッド

本土坑は、1号土坑の西側に重複していたが、先後関係については明確にし得なかった。平面形は、南北方向が長い、不整長円形を呈する。規模は、長径170cm・短径136cmで、深さは39.5cmを測る。

3号土坑(第194図) 位置 710.0Cグリッド

本土坑は、8号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、切り合いが無かったため、先後関係は不明である。平面形は、南北方向に長い長円形を呈する。規模は、長径120cm・短径80cm・深さ25cmを測る。底面には炭化物の薄い層が有り、覆土は炭化物・ロームブロックを多く含む暗褐色土が詰まっており、一気に埋め戻された状況を呈していた。出土遺物が無いために、所属時期は不明である。

4号土坑(第194図) 位置 709.5Cグリッド

2号井戸の南側に接するように検出されたが、明確な出土遺物が無いために、所属時期は不明である。平面形は、東西方向が若干長い不整円形を呈する。規模は、径95～100cm・深さ20cmを測る。底面には炭化物の薄い層が認められた。

5号土坑(第194図) 位置 705.Gグリッド

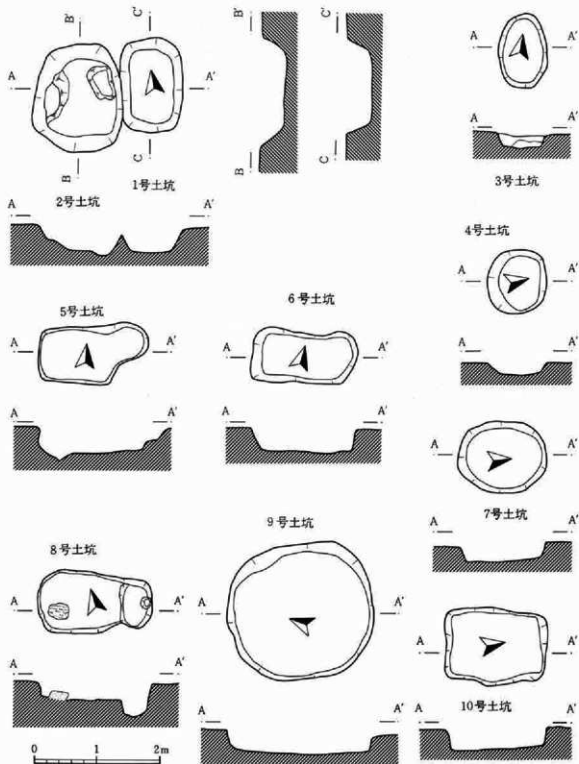
本土坑は、重複遺構が無く単独で検出された。平面形は、北東隅が突出した不整隅丸長方形を呈するが、あるいは、他のビットが重複していたのかも知れない。規模は、172cm×90cm・深さ52cmを測り、長辺の走向はN89°Wである。

6号土坑(第194図) 位置 703.5Dグリッド

本土坑は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、東辺がやや乱れるが、東西方向に長い隅丸長方形を呈する。規模は、166cm×76cm・深さ42cmを測り、長辺の走向はN11°Eである。

7号土坑(第194図) 位置 704.0Fポイント北側

本土坑は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、南北方向が長い長円形を呈する。規模は、長径140cm・短径112cmで、深さは34cmを測る。長軸の走向は、ほぼ磁北と一致している。



第194图 土坑实测图 (1)

8号土坑 (第194図) 位置 705.0Fポイント北側

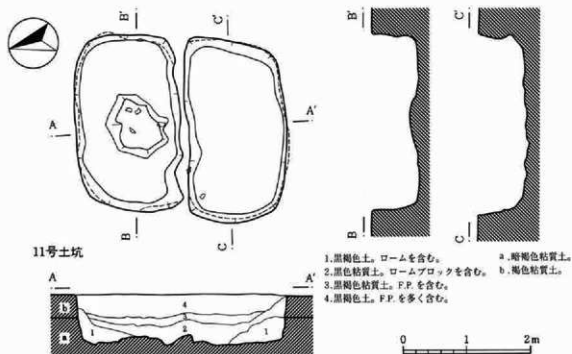
調査時においては「2号土坑」としたが、改名した。本土坑は、24号掘立柱建物跡と重複関係に有るが、先後関係については、本土坑が後出することが確認されている。平面形は、東西方向が長い不整隅丸方形を呈する。規模は、182cm×97cm・深さ26cmを測り、北辺の走向はN80°Eである。底部には焼石が残っていたが性格は不明である。

9号土坑 (第194図) 位置 705.0Bグリッド

調査時においては「1号土坑」としたが、改名した。本土坑は、20号掘立柱建物跡と重複関係に有るが、先後関係については明確に得なかった。平面形は、不整円形で、規模は、長径 232cm・短径 212cmで、深さは39cmである。

10号土坑 (第194図)

調査時においては「3号土坑」としたが、改名した。平面形は、南北方向に長い隅丸方形を呈する。規模は、東西方向110~125cm・南北方向 160cm・深さ30cmを測り、西辺の走向はN15°Eである。覆土中には灰白色



第195図 土坑実測図 (2)



第196図 11号土坑出土遺物実測図

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

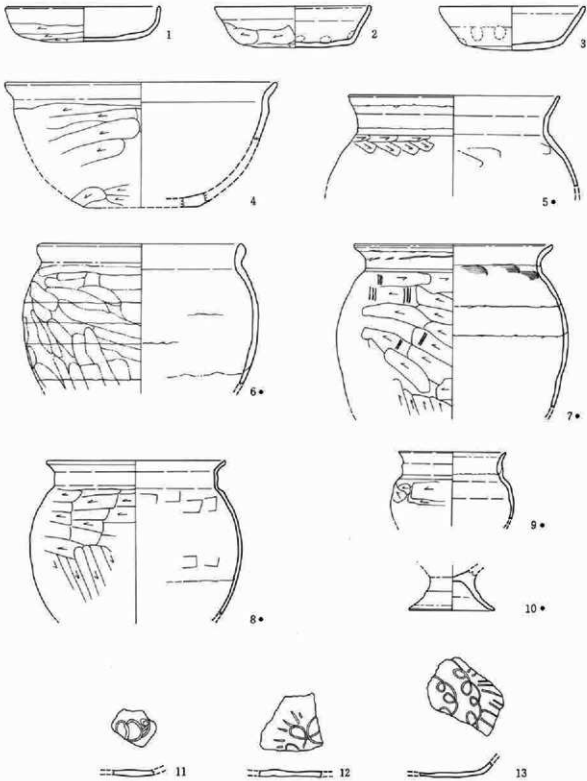
粘土を含んでいたが、性格は明らかにし得なかった。

11号土坑（第195・196図、図版50） 位置 705.5Gポイント西側

本土坑は、遺構確認段階で27号住居跡と命名され、調査を行ったが、調査結果から土坑と認定した。平面形は、南東部がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.95m・南北方向3.40mで、深さ72～79cmを測る。底部は、約20cmの障壁によって南北に二分されている。北側の中央部は15cm程高くなっており、土師器甕の口縁部破片が出土した。粘土の探掘坑ではないかと考えられる。

(6) その他の出土遺物

A. グリッド出土遺物



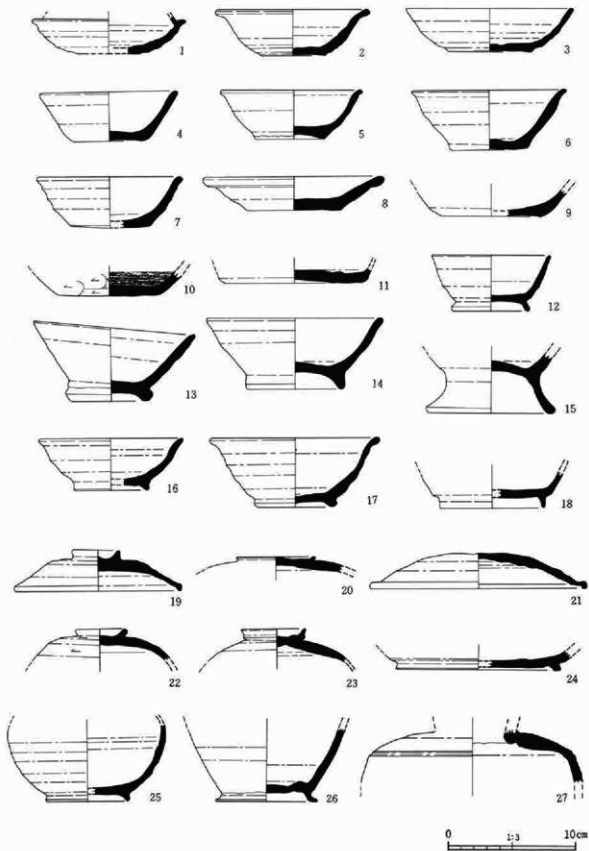
第197図 グリッド出土遺物実測図 (1)



第72表 グリッド出土遺物観察表(1)

No	器種・器形 (土師器)	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/2残存。 口 12.3cm 高 2.7cm	704.0 F No32, 33, 34	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。体部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体→口縁部横ナデ。	
2	杯 (土師器)	1/2残存。 口 12.5cm 高 3.3cm	707.0 A No5, 6	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。体部粗い横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体→口縁部横ナデ。	
3	杯 (土師器)	1/8残存。 口 11.6cm	707.0 B No21, 81	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部丸削り。体部粗い横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底→体部ナデ。口縁部横ナデ。	底部内面に 粘土カス付 着。
4	鉢 (土師器)	1/4残存。 口 21.7cm 底 9.2cm	701.0 G No24他5片。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底→体部丸削り。口縁部横ナデ。 内面 丁寧な裏磨き。黒色処理。	
5	壺 (土師器)	1/5残存。 口 22.4cm	706.0 H No39, 45, 61, 63	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部丸削り。頸部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
6	壺 (土師器)	1/5残存。 口 22.1cm	707.5 F No11	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部丸削り。口縁部横ナデ後、横ナデ。 内面 体部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	所謂「土釜」 状を呈する。
7	壺 (土師器)	口縁→体部 1/2残存。 口 20.8cm	706.5 F No4	①砂粒を多く含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部丸削り。頸部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
8	壺 (土師器)	口縁→体部 1/5残存。 口 18.9cm	707.0 H No249	①砂粒を多く含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部丸削り。頸部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
9	小型壺 (土師器)	口縁→体部 1/4残存。 口 11.4cm	707.5 C No2	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部丸削り。頸部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
10	脚台壺 (土師器)	脚座1/2残存 底 9.0cm	707.0 B No2	①砂粒を含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	内外共にナデ。 底部内面が若干窪む。	
11	杯 (土師器)	底部小破片。	706.0 B No25	①砂粒を少し含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 丸削り。 内面 ナデ後、ラセン状暗文を施す。	
12	杯 (土師器)	底部1/4残存	706.0 H F7	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 丸削り。 内面 ナデ後、二重暗文を施す。	
13	杯 (土師器)	底部1/3残存	707.5 C No39	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底→体部丸削り。 内面 ナデ後、二重暗文を施す。	

第2節 検出された遺構と遺物



第198図 グリッド出土遺物実測図 (2)

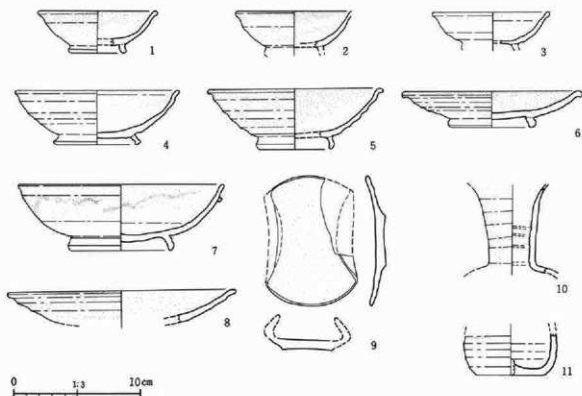
第73表 グリッド出土遺物観察表(2)

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須恵器)	1/4残存	705.0G	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。体部下半回転施削り。 内面 回転によるナデ。	
2	杯 (須恵器)	1/2残存 口 12.3cm 高 3.6cm 底 5.2cm	703.0F	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。火はぜによる割傷が著しい。	
3	杯 (須恵器)	1/2残存 口 13.2cm 高 3.3cm 底 6.6cm	707.0A	①砂粒を多く含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4	杯 (須恵器)	1/2残存 口 11.0cm 高 3.8cm 底 5.8cm	701.0G	①砂粒を多く含む。 ②暗灰色。 ③還元炎・軟質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内外面に煤付着。	
5	杯 (須恵器)	杯 口 11.5cm 高 3.9cm 底 5.8cm	709.0B	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6	杯 (須恵器)	4/5残存 口 12.2cm 高 4.6cm 底 6.0cm	701.0C	①砂粒を含む。 ②暗灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
7	杯 (須恵器)	1/2残存 口 11.5cm 高 4.1cm 底 6.4cm	708.0G	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部砂底。体下半回転施削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
8	皿 (須恵器)	1/2残存 口 14.5cm 高 2.6cm 底 7.4cm	707.0F	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・軟質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部回転施削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
9	杯 (須恵器)	底部1/4残存 底 8.0cm	707.0H	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転施削り。 内面 黒色処理。	所謂ロクロ土師器
10	杯 (須恵器)	底部1/2残存 底 7.8cm	表録	①砂粒を多く含む。 ②浅黄色。 ③酸化炎・硬質。	外面 底～体部手持ち施削り。 内面 黒色処理。	所謂ロクロ土師器
11	杯 (須恵器)	底部1/3残存 底 11.1cm	700.0G	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、体部端施削り。 内部 回転によるナデ。	底部外面にXの線刻有
12	高台付碗 (須恵器)	1/5残存 口 9.4cm 高 4.4cm 底 6.2cm	704.5F	①砂粒を含む。 ②緑灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第2節 検出された遺構と遺物

No.	器種・器形	残存・量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
13	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 12.8cm 高 5.8cm 底 6.5cm	707.5E	①砂粒を含む。 ②浅黄色。 ③還元炎・軟質。	外面 右回転ロクロ成形。底部高台貼付け後、全面ナデ。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
14	高台付碗 (須恵器)	2/3残存 口 14.1cm 高 5.6cm 底 7.3cm	704.5G	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・軟質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
15	高台付碗 (須恵器)	底部2/3残存 底 10.2cm	701.0G	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・軟質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
16	高台付碗 (須恵器)	1/4残存 口 11.4cm 高 4.1cm 底 5.9cm	702.0B	①砂粒を多く含む。 ②灰褐色。 ③還元炎・軟質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
17	高台付碗 (須恵器)	1/3残存 口 13.6cm 高 5.5cm 底 6.7cm	701.0E	①砂粒を多く含む。 ②にぶい青色。 ③還元炎・軟質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
18	高台付碗 (須恵器)	底部1/3残存 底 8.3cm	707.5H	①砂粒を含む。 ②にぶい青色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
19	蓋 (須恵器)	11ヶ方形 口 13.3cm 高 3.2cm 横 3.8cm	705.5C	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。天井部回転旋削り後、狭み貼付け。 内面 回転によるナデ。	
20	蓋 (須恵器)	狭み部 横 6.3cm	708.0E	①砂粒を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。天井部回転旋削り後、狭み貼付け。 内面 回転によるナデ。	
21	蓋 (須恵器)	口 17.2cm	706.5B	①砂粒を多く含む。 ②浅黄色。 ③還元炎・軟質。	外面 右回転ロクロ成形。天井部回転糸切り後、周縁部回転旋削り。 内面 回転によるナデ。	
22	蓋 (須恵器)	横 4.0cm	704.0E	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。天井部回転旋削り後、狭み貼付け。 内面 回転によるナデ。	
23	蓋 (須恵器)	横 5.1cm	西側表探	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。天井部回転旋削り後、狭み貼付け。 内面 回転によるナデ。	
24	高台付碗 (須恵器)	底部1/4残存 底 13.0cm	707.5H	①砂粒を少し含む。 ②オリーブ灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転旋削り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
25	蓋 (須恵器)	1/5残存 底 8.9cm	709.0E	①砂粒を少し含む。 ②オリーブ灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転旋削り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	

第199章 書上上原之城遺跡



第199図 グリッド出土遺物実測図 (3)

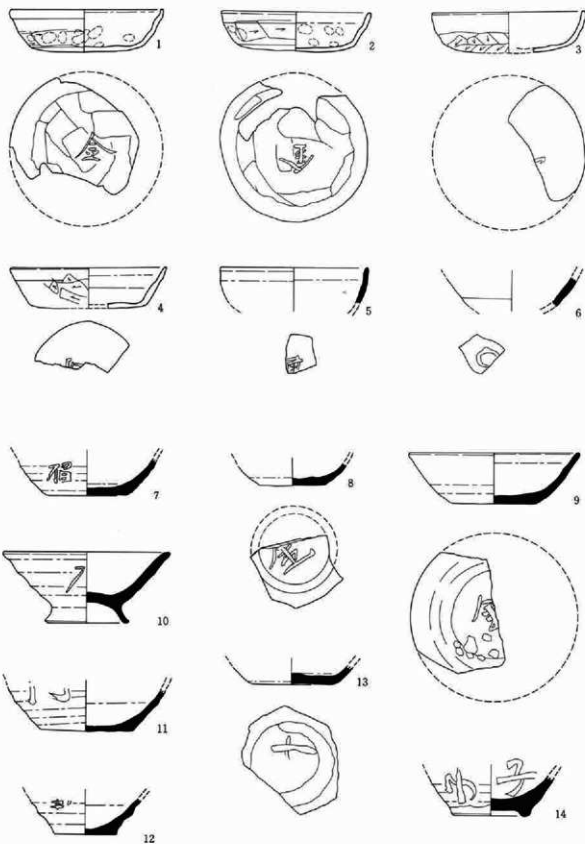
No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
26	蓋 (須恵器)	1/2残存 底 10.8cm	708.0E	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。	
27	蓋 (須恵器)	1/6残存	707.01	①砂粒を多く含む。 ②灰色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	

第74表 グリッド出土遺物観察表(3)

No.	器種・器形 (灰輪陶器)	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	高台付椀 (灰輪陶器)	1/5残存 口 9.6cm 高 3.3cm 底 4.6cm	707.0H	①緻密 ②灰白色 ③還元炎・硬質	外面 右回転ロクロ整形。貼り付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
2	高台付椀 (灰輪陶器)	1/3残存 口 9.4cm 高 3.6cm	707.0H	①緻密 ②灰白色 ③還元炎・硬質	外面 右回転ロクロ整形。貼り付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
3	高台付椀 (灰輪陶器)	2/3残存 口 9.4cm	707.0H	①緻密 ②灰白色 ③還元炎・硬質	外面 右回転ロクロ整形。貼り付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
4	高台付椀 (灰輪陶器)	小破片 口 13.0cm 高 4.2cm 底 7.0cm	西側表探	①緻密 ②灰白色 ③還元炎・硬質	外面 右回転ロクロ整形。底部回転糸切り。貼り付け高台。 内面 回転によるナデ。	
5	高台付椀 (灰輪陶器)	1/5残存 口 14.0cm 高 4.7cm 底 6.2cm	710.0D	①緻密 ②灰白色 ③還元炎・硬質	外面 右回転ロクロ整形。底部回転糸切り。貼り付け高台。 内面 回転によるナデ。	
6	高台付皿 (灰輪陶器)	1/3残存 口 14.4cm 高 2.8cm 底 7.0cm	707.0H	①緻密 ②灰白色 ③還元炎・硬質	外面 右回転ロクロ整形。底部回転糸切り。貼り付け高台。 内面 回転によるナデ。	
7	高台付椀 (灰輪陶器)	1/3残存 口 16.4cm 高 5.2cm 底 8.5cm	707.0H	①緻密 ②灰白色 ③還元炎・硬質	外面 右回転ロクロ整形。底部回転糸切り。貼り付け高台。 内面 回転によるナデ。	
8	皿 (灰輪陶器)	1/4残存 口 18.2cm	707.0H	①緻密 ②灰白色 ③還元炎・硬質	外面 右回転ロクロ整形。 内面 回転によるナデ	
9	耳皿 (灰輪陶器)	2/3残存 口 10.2cm 高 1.4cm 底 3.8cm	707.0H	①緻密 ②灰白色 ③還元炎・硬質	外面 右回転ロクロ整形。底部回転糸切り後未調整。 内面 回転によるナデ。	
10	長頸瓶 (灰輪陶器)	口縁部分 頸径 5.2cm	708.0H	①緻密 ②灰白色 ③還元炎・硬質	外面 右回転ロクロ整形。	
11	小瓶 (灰輪陶器)	1/4残存 底 5.4cm	707.0H	①緻密 ②灰白色 ③還元炎・硬質	外面 右回転ロクロ整形。底部回転糸切り後未調整。	

第三章 書上上原之城遺跡

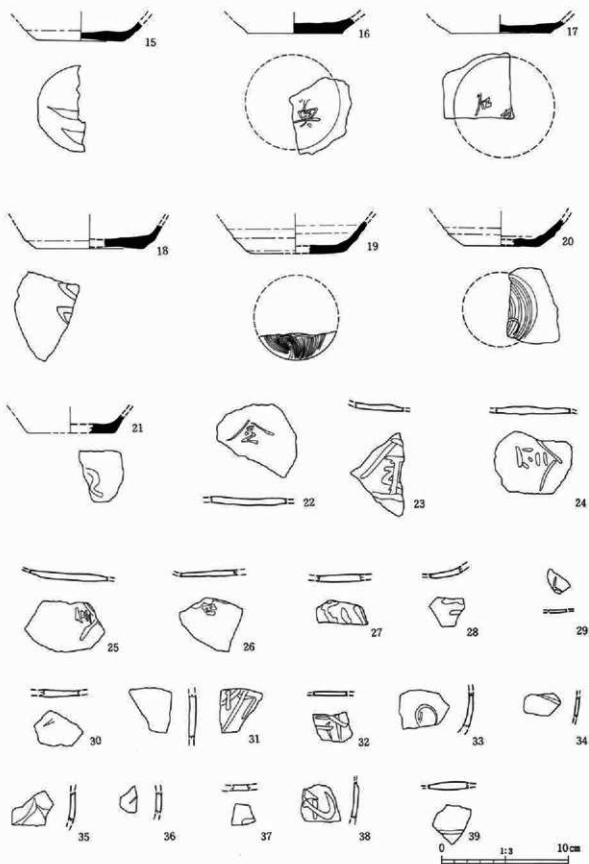
B. 墨書土器



第200図 墨書土器実測図 (1)

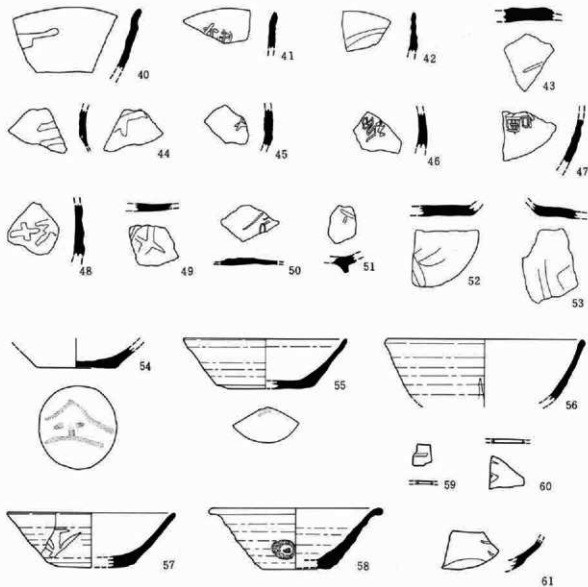
0 1:3 10cm

第2節 検出された遺構と遺物



第201図 墨書土器実測図(2)

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡



第202図 黒書土器実測図 (3)

第75表 黒書土器観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/4残存。 口 12.2cm 高 3.3cm	26号獨立P。	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部肥削り。体部粗い異ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	底部外面に 墨書有り。 戳文「金」
2	杯 (土師器)	3/4残存。 口 11.8cm 高 3.0cm	706.5H No. 85	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部肥削り。体部粗い異ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	底部外面に 墨書有り。 戳文「金」
3	杯 (土師器)	1/5残存。 口 12.4cm 高 3.3cm	704.0F No. 29	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部肥削り。体部粗い異ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体一口縁部横ナデ。	底部外面に 墨書有り。 戳文不明。

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
4	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 12.4cm	37号掘立P ₂	①砂粒を少し含む。 ②にぶい赤褐色。 ③還元炎・良好。	外面 底部施削り。体部粗い裏ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。火はぜによる割離痕有り。	底部外面に墨書有り。 釈文不明。
5	杯 (須恵器)	小破片。	23号掘立P ₁₀	①砂粒を含む。 ②明褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 体部施削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。黒色処理。	体部外面に墨書有り。 釈文「福」
6	杯 (須恵器)	小破片。	14号掘立P ₂	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 体部ナデ。 内面 回転によるナデ。黒色処理。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。
7	杯 (須恵器)	1/3残存。 底 6.5cm	705.0G No. 48	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転余切り後、未調整。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「福」
8	杯 (須恵器)	底部1/2残存 底 5.6cm	37号掘立P ₉	①砂粒を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転余切り後、未調整。 内面 回転によるナデ。内外共に煤付着。	底部外面に墨書有り。 釈文「金」
9	杯 (須恵器)	1/4残存。 口 13.6cm 底 4.0cm 底 6.9cm	37号掘立P ₈	①砂粒を少し含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転余切り後、周縁部施削り。体部下端回転施削り。口縁部横ナデ。 内面 火はぜによる割離が著しい。 内外共に煤付着。	底部外面に墨書有り。 釈文「金」
10	高台付碗 (須恵器)	2/3残存。 口 13.4cm 高 5.6cm 底 6.7cm	700.0E No. 2	①砂粒を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転余切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。
11	杯 (須恵器)	1/2残存。 底 7.2cm	705.5H No. 48	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転余切り後、未調整。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。
12	杯 (須恵器)	1/3残存。 底 5.0cm	700.0D No. 6	①砂粒を少し含む。 ②暗褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転余切り後、未調整。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。
13	杯 (須恵器)	底部2/3残存 底 6.7cm	27号掘立P ₄	①砂粒を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転余切り後、周縁部施削り。 内面 回転によるナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文不明。
14	高台付碗 (須恵器)	1/3残存。 底 6.2cm	701.0E No. 17	①砂粒を含む。 ②黒色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転余切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。 内外共に煤付着。	底部内面に「子」 体部外面「子」
15	杯 (須恵器)	底部1/2残存 底 7.1cm	29号掘立P ₄	①砂粒及び細塵を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転余切り後、未調整。 内面 回転によるナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文不明。
16	杯 (須恵器)	底部1/4残存 底 7.6cm	36号掘立P ₄	①砂粒を少し含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転施削り。 内面 回転によるナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「□美」

第三章 書上上原之城遺跡

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③地成	成・整形の特徴	備考
17	杯 (須恵器)	底部1/4残存 底 8.0cm	風倒木 No. 7	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色。 ③還元夾・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転削り。 内面 回転によるナデ。 内外共に火はぜによる割離痕有り。	底部外面に 墨書有り。 釈文「石□」
18	杯 (須恵器)	底部1/5残存 底 8.6cm	704.0F No. 87	①砂粒を少し含む。 ②灰白色。 ③還元夾・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転削り後、周 縁部削り。 内面 回転によるナデ。	底部内面に 墨書有り。 釈文「人」か。
19	杯 (須恵器)	体~底部 1/3残存。 底 7.5cm	706.5H No. 7	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色。 ③還元夾・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転削り後、未 調整。 内面 回転によるナデ。火はぜによる割離痕有り。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明。
20	杯 (須恵器)	体~底部 1/4残存。 底 5.9cm	708.5D P ₂	①砂粒を含む。 ②黒褐色。 ③還元夾・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転削り後、未 調整。体部に保付着。 内面 回転によるナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明。
21	杯 (須恵器)	小破片。 底 6.7cm	701.0E No. 6	①砂粒を少し含む。 ②灰色。 ③還元夾・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転削り後、未 調整。 内面 回転によるナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文「乙」か。
22	杯 (土師器)	底部3/4残存	29号掘立P ₄	①砂粒を含む。 ②赤褐色。 ③酸化夾・良好。	外面 削り。 内面 ナデ。	底部内面に 墨書有り。 釈文「金」
23	杯 (土師器)	底部1/3残存	37号掘立P ₃	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化夾・良好。	外面 削り。 内面 ナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文「金」
24	杯 (土師器)	底部3/4残存	19号掘立P ₄	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化夾・良好。	外面 削り。 内面 ナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文「金」
25	杯 (土師器)	底部小破片	706.0H	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③酸化夾・良好。	外面 削り。 内面 ナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文「金」
26	杯 (土師器)	底部小破片	19号掘立P ₄	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③酸化夾・良好。	外面 削り。 内面 ナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文「金」か。
27	杯 (土師器)	底部小破片	701.5F No. 6	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化夾・良好。	外面 削り。 内面 ナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文「金」か。
28	杯 (土師器)	底部小破片	707.0A P ₁	①砂粒を少し含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化夾・良好。	外面 削り。 内面 ナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文「布」か。
29	杯? (土師器)	小破片。	707.5H No. 48	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化夾・良好。	外面 削り。 内面 ナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明。
30	杯 (土師器)	底部小破片	706.0H	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化夾・良好。	外面 削り。 内面 ナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明。

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
31	杯 (土師器)	底部小破片	704.0C No.9	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 鹿形。 内面 ナズ後、ラセン状暗文。	底部外面に 墨書有り。 釈文「布」
32	杯 (土師器)	底部小破片	706.5A No.6	①砂粒を少し含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 鹿形。 内面 ナズ。	底部外面に 墨書有り。 釈文「布」
33	杯 (須恵器)	小破片。	Ⅱ区西側 表採。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 鹿形。 内面 回転によるナズ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明。
34	杯? (須恵器)	小破片。	14号溝覆土。	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 割離により不明。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明。
35	杯 (土師器)	小破片。	Ⅱ区西側 表採。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 鹿形。 内面 ナズ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明。
36	杯 (土師器)	小破片。	Ⅱ区西側 表採。	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 ナズ。 内面 ナズ。	体部内面に 墨書有り。 釈文不明。
37	杯 (土師器)	小破片。	709.0H No.21	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 鹿形。 内面 ナズ。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明。
38	杯 (土師器)	小破片。	707.0I	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 鹿形。 内面 ナズ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明。
39	杯 (土師器)	小破片。	706.5H No.2	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 鹿形。 内面 ナズ。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明。
40	杯 (須恵器)	1/5残存。 口 14.6cm	701.5E No.33	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 体部鹿形。口縁部横ナズ。 内面 回転によるナズ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明。
41	杯 (須恵器)	小破片。	706.5H No.56	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部横ナズ。 内面 回転によるナズ。	体部内面に 墨書有り。 釈文「福」
42	杯 (須恵器)	小破片。	706.0H No.14	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部横ナズ。 内面 回転によるナズ。	体部内面に 墨書有り。 釈文不明。
43	鉢? (須恵器)	小破片。	706.5H No.35	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 回転鹿形。 内面 回転によるナズ。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明。
44	杯 (須恵器)	小破片。	701.5E No.36	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナズ。	体部内外面 に墨書有り。 釈文不明。

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
45	高台付輪? (須恵器)	小破片。	708.0H No.133	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明。
46	高台付輪? (須恵器)	体部小破片	707.5F No.5	①砂粒を含む。 ②灰黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文「福」
47	杯? (須恵器)	体部小破片	707.5H P ₂	①砂粒を含む。 ②黄灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文「福」
48	高台付輪? (須恵器)	体部小破片	707.5G No.105	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明。
49	杯 (須恵器)	底部小破片	706.0H	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り。調整 不明。 内面 回転によるナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明。
50	杯 (須恵器)	底部小破片	707.0H No.251	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り。調整 不明。 内面 回転によるナデ。	底部内面に 墨書有り。 釈文「金」か。
51	高台付輪 (須恵器)	底部小破片	708.0G	①砂粒を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。	底部内面に 墨書有り。 釈文不明。
52	杯 (須恵器)	底部小破片	706.0H	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、未 調整。 内面 回転によるナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文「布」か。
53	杯 (須恵器)	底部小破片	40号覆立 No.1	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り。(摩 滅のため調整不明。) 内面 回転によるナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明。
54	杯 (須恵器)	底部残存。 底 6.5cm	707.5H No.129	①砂粒を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、未 調整。 内面 回転によるナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文「金」
55	杯 (須恵器)	1/5残存。 口 13.0cm 高 3.9cm 底 7.1cm	707.0H P ₂	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、未 調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明。
56	高台付輪? (須恵器)	口縁一部 4/5残存。 口 16.0cm	705.5H No.49	①砂粒を含む。 ②淡赤褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明。
57	杯 (須恵器)	1/5残存。 口 13.4cm 高 4.3cm 底 7.0cm	707.0I	①砂粒を含む。 ②浅黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、未 調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明。
58	杯 (須恵器)	1/6残存。 口 13.7cm	701.0F No.39	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文「日」か。

C. 金属・石・土製品

本遺跡から出土した金属製品は、第203・204図に示した通りである。種類としては、刀子・鎌・紡錘車・その他が見られた。1・2は、平棟で棟区のみを作る片区造りの刀子片であり、10号住居跡出土。3は、紡錘車の紡軸と考えられる。15号住居跡出土。4・5は、平棟造りの刀子片であり、19号住居跡出土。6は、平棟で棟区のみを作る片区造りの刀子の茎部分の破片であり、22号住居跡出土。7は、小刀の茎部分で、径4mmの目釘穴がある。22号住居跡出土。8は、端部全体を折り返す直刃鎌破片で、31号住居跡出土。9は、紡錘車の紡軸と考えられる。24号住居跡出土。10は、平棟で棟区のみを作る片区造りの刀子であり、全長16.8cmを測る。茎部分には木質が残っていたが、樹種は不明。41号住居跡出土。11は、平棟であり棟区のみを作る片区造りの刀子破片であり、31号住居跡出土。12は、茎付の薄手の刃物の破片と思われるが、詳細は不明。13は、平棟で棟区のみを作る片区造りの刀子破片である。14は、刀子の茎破片。15は、断面方形・全長6.4cmを測るが、詳細不明。16は、「コ」の字形に折れ曲がっているが、紡錘車の紡軸と思われる。17～19も紡錘車の紡軸と思われる。12～19は、全て42号住居跡出土。26・21は共に釘かと思われるが、詳細不明。共にグリッド出土。

第204図に掲載したものは、昭和48年度の調査で出土したものと及び707.0Gグリッド出土遺物であるが、遺憾ながら所在不明のため、詳細は不明である。8は、7号住居跡出土の曲刃鎌である。9は、1号住居跡出土の刀子の茎部破片である。10は、グリッド出土の鉄斧である。

砥石 (第204図)

合計7点が出土した。いずれも、甘楽郡南牧村砥沢産と考えられる流紋岩製である。

1は、端部を欠いているが、中央に近づくにつれて、研ぎ減りが顕著であり、ほぼ半分位の厚さになっている。側面も使用したと思われるが、広い二面ほど滑沢ではなかった。17号住居跡出土。現存長8.5cm・幅4.7cm・重さ176.5gである。

2は、両端部を欠く小片である。断面は、肩の部分がやや崩れるが、概ね長方形形状を呈する。24号住居跡出土。現存長2.8cm・幅2.8cm・重さ13.9gである。

3は、両端部を欠くが、1と同様に研ぎ減りが顕著に認められる。側面はさほど使用しなかったようである。36号掘立柱建物跡の柱穴の覆土中よりの出土である。現存長5.0cm・幅5.0cm・重さ88.3gである。

4は、一方の端部を欠き、残った一方は研ぎ減りによって尖っている。使用方法がやや異質であったと考えられる。14号溝の覆土中よりの出土である。現存長9.2cm・幅2.5cm・重さ76.0gである。

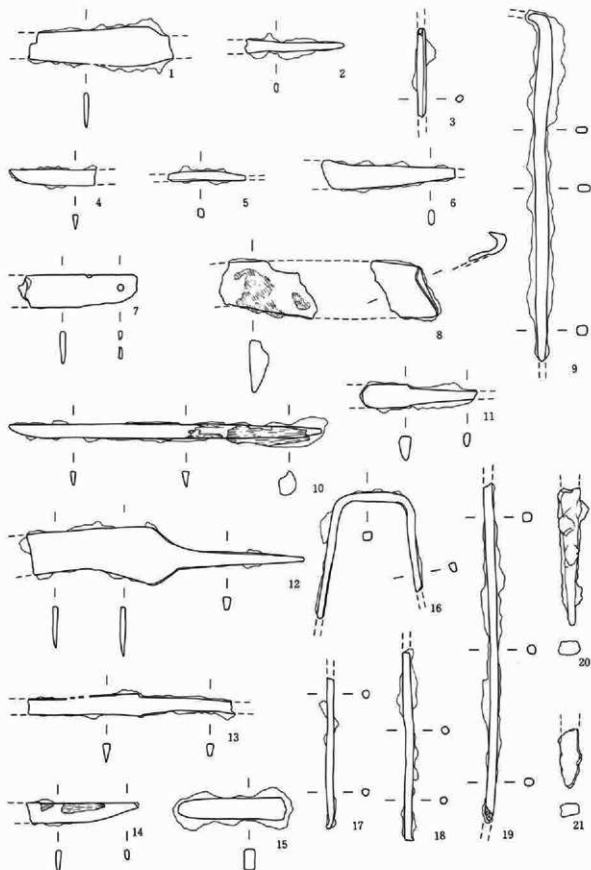
5は、両端部を欠く小片である。断面は、側面がやや窪むが、概ね正方形形状を呈する。707.5Gグリッド出土。現存長2.1cm・幅2.4cm・重さ23.8gである。

6は、両端部が研ぎ減りによって尖っている。中央部が盛り上がった状態が残っており、使用方法がやや異質であったと考えられる。一面のみを使用しており、他の面には、切り出した時の条線のようなものが残っている。708.0Gグリッド出土。現存長15.5cm・幅3.3cm・重さ115.4gである。

7は、火を受けたようで、やや脆くなっており、表面はさほど滑沢な状況ではなかった。707.5Gグリッド出土。現存長7.8cm・幅5.3cm・重さ484.5gである。

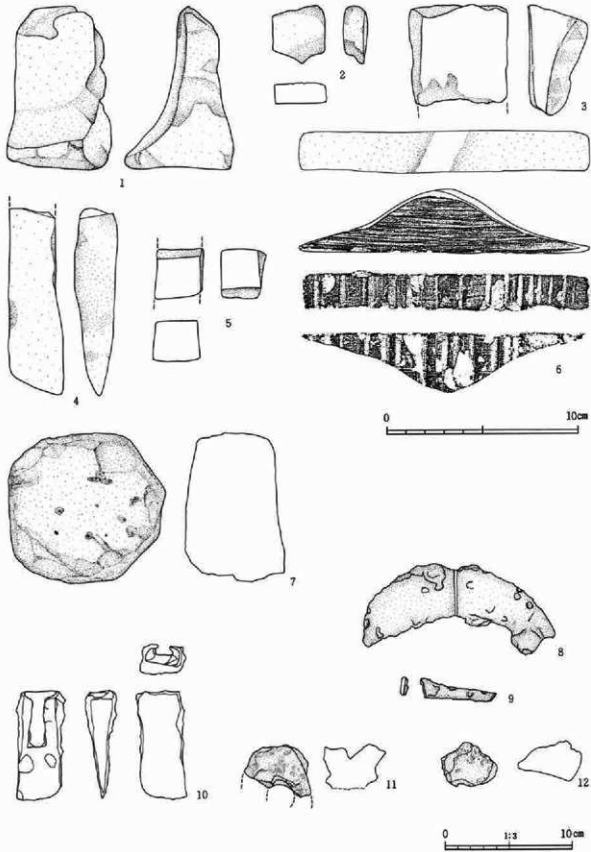
羽口 (204図)

11・12共に小破片であるため、詳細は不明である。11は708.0グリッド出土。12は23号掘立柱建物跡の柱穴覆土中出土である。



第203図 金属製品実測図 (1) 0 10cm

第2節 検出された遺構と遺物



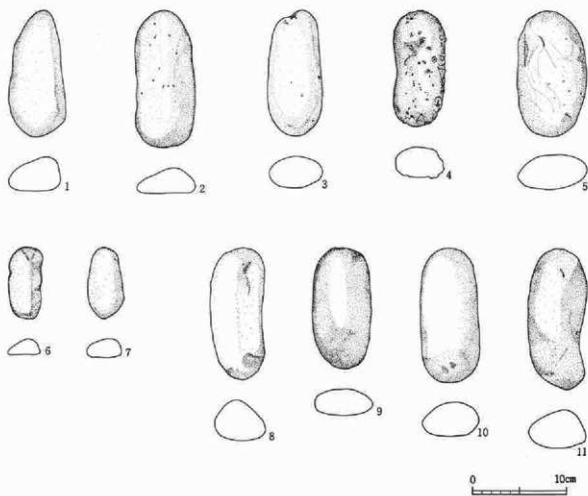
第204図 金属製品実測図 (2)

編物石 (第205図)

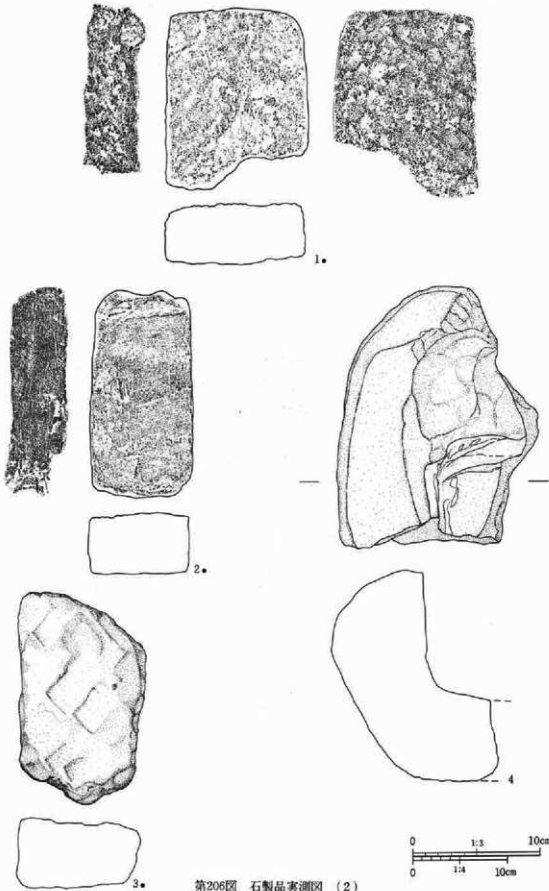
14号住居跡から7点、36号住居跡から4点、合計11点が出土した。4は、火を受けたために表面の一部が剥落していた。14号住居跡のものは、南壁際の床面上にまともって出土した。36号住居跡のものは、床面全体に散らばって出土した。書上下吉祥寺遺跡の項で述べた通り、一応、編物石と考える。

第76表 編物石観察表

No	出土位置	石質	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	No	出土位置	石質	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	14号住	石英閃緑岩	13.3	5.5	426.7	7	14号住	浴鉄凝灰岩	7.5	3.7	88.9
2	14号住	輝石安山岩	14.4	6.1	419.0	8	36号住	頁岩	13.8	5.6	501.8
3	14号住	輝石安山岩	13.0	5.7	402.5	9	36号住	閃緑岩	12.7	6.2	370.6
4	14号住	石英閃緑岩	12.2	5.2	376.8	10	36号住	砂岩	14.2	6.5	562.8
5	14号住	輝石安山岩	13.2	7.5	554.7	11	36号住	輝石安山岩	14.7	6.0	609.8
6	14号住	輝緑岩	7.6	3.5	708.0						



第205図 石製品実測図 (1)



第206図 石製品実測図 (2)

甕用材 (第206図)

1は、41号住居跡の南西隅から出土。土塊であるが、火を受けてレンガ状になっている。片方の端部を欠くが、現存長19.2cm・幅14.9cm・厚さ6.4cm・重さ2050gである。

2は、706.5Cグリッド出土。凝灰質砂岩の載石で、端部がやや欠けているが、ほぼ直方体状になっている。現存長21.9cm・幅11.2cm・厚さ6.4cm・重さ1830gである。

3は、31号住居跡の甕中から出土。凝灰質砂岩の削り石で、両端部が崩れてしまっているが、ほぼ直方体状を呈する。表面には、幅約3cmのノミ痕が残っている。現存長22.8cm・幅13.4cm・厚さ7.4cm・重さ2300gである。

4は、13号住居跡の甕右袖の芯材に使われていたものである。粗粒の輝石安山岩で、石製蔵骨器の破片と考えられる。深さ約10cmの隅九方形の掘り込みが有り、上面も粗く調整されている。現存長20.0cm・幅15.3cm・重さ4125gである。

以上、出土状態は異なるが、いずれも甕用材と考えられる。

土 錘 (第207図)

合計5点が出土した。

1は、8号住居跡出土。一方の端部を欠くが、現存長5.5cm・最大径2.3cm・孔径1.0cm。

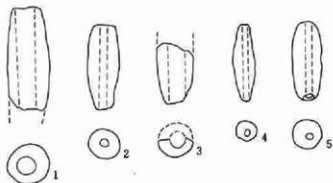
2は、706.0Hグリッド出土。ほぼ完形品であり、長さ4.6cm・最大径1.8cm・孔径0.4cm。

3は、708.0グリッド出土。小破片であるが、現存長3.1cm。

4・5は、共に遺跡地周辺の表採品である。

4は、完形品であり、紡錘状をしている。全長4.1cm・最大径1.2cm・孔径0.3cm。

5は、完形品であり、円筒状をしている。全長4.2cm・最大径1.6cm・孔径0.4cm。



第207図 土錘実測図



第3節 まとめ

(1) 中世以降の遺物と遺構群について

1. 出土遺物の全容

兩道跡から出土した中世以降の遺物は、全体として次のような状況を示している。(破片総数)

	土器			瓦	陶器		磁器			土製品	金属器
	瓦質	土師質	須恵器		焼締	施釉	舶載	近世	近代		
書上下吉祥寺	211	45	1	10	8	50	1	13	5	2	0
書上上原之城	5	2	0	6	2	35	7	9	2	0	1

これらは大半が遺構に伴わない出土状態であるが、明確な出土状況を示す遺構は、次のものである。

書上下吉祥寺 1号溝(第53図)、4号溝(第53図)、6号溝(第53図)、13号溝(第53図)、
墓塚(第53図)

なお6号溝と13号溝の交差部付近からは、遺構を明確には呈さない状態で、近世の土器陶磁器を主体とした大量の遺物の一括出土が見られた。

書上上原之城 14号溝(第192図)、31号掘立柱建物跡(第178図)

比較概観すれば、書上下吉祥寺では、溝を中心に出土する土器類が多いのに対して、書上上原之城では、掘立柱建物跡を含む遺構などから陶磁器の出土が目立っている。

上記各遺物のうち、47点を次に報告したい。

2. 陶磁器

磁器は、舶載青磁片(1-7)がまず注目される。これらは竜泉窯系(1-3・7)と推定されるもの、及び同安窯の可能性もあるもの(4・5)などであるが、いずれも蓮弁文刻花碗の破片である。なお7は、書上上原之城の31号掘立柱建物跡の柱穴から出土した。日本への渡来時期は明確にしがたいが、12世紀中葉から13世紀中葉と考えられる¹⁾。

4点の染付碗(8-11)のうち、8は発色と底部の銘より近代の産であることは間違いない。9-11は、18世紀代の肥前系の⁽¹⁶⁾産だが、9と10は透明釉の状態が異なる。11は、胎土が全く異なり磁器には含まれない半磁器である。いずれも書上下吉祥寺からの出土である。

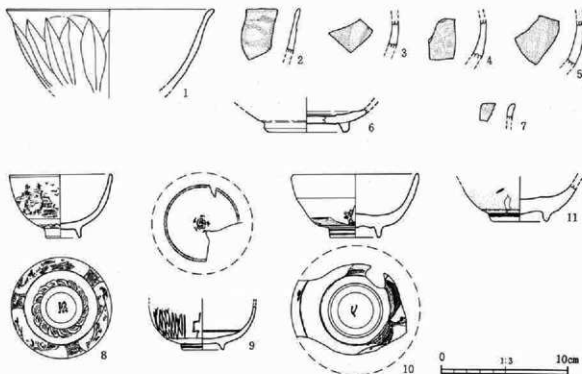
施釉陶器(12-14)3点は、近世の瀬戸・美濃の産である。15は、唐津系である。播鉢は、施釉のもの(16a・16b)と焼締のもの(17)がある。施釉のものは、ほとんど同質の破片が他に少なからずある。焼締のものは、泉州塚産の可能性ある。施釉のものと共伴出土であり、口縁部の3段の稜に特徴がある。いずれも書上下吉祥寺の出土である。染付碗9と施釉陶器片口鉢・播鉢は、天明三年の浅間山爆発で埋没した渋川市中村遺跡から同様の出土例がある²⁾。

3. 土器

土器は、大きく還元中性炎焼成の瓦質土器、酸化炎焼成の土師質土器に分かれる。また古代の須恵器の系譜を引く硬質還元炎焼成の須恵質のものも小片1片が書上下吉祥寺遺跡で出土した。(図示していない。)

図示した27点の概要は、次の通りである。

調理具 控鉢(20-24) 瓦質土器ばかり5点があり、書上下吉祥寺の6・13号溝交点付近の一括出土であ



第208図 中・近世陶磁器実測図 (1)

第77表 中・近世陶磁器観察表

No	出土状態	種類	形態	残存	法量	胎土・技法・彫形の特徴	釉の特徴	備考
1	原不明	磁器	碗	口縁	—	硬質灰白色。素地外面編蓮弁文刺花。	青磁。緑灰色釉厚い。	竜泉窯系
2	原不明	磁器	碗	口縁	—	硬質灰色。素地外面蓮弁文刺花。	青磁。釉色やや灰白。貫入あり。	竜泉窯系
3	原不明	磁器	碗	体部	—	硬質灰白色。素地外面編蓮弁文刺花。	青磁。青灰色釉。	竜泉窯系
4	吉3溝附近	磁器	碗	体部	—	硬質緑灰色。素地外面蓮弁文刺花。	青磁。緑褐色釉薄い。	同安窯系?
5	原8溝附近	磁器	碗	体部	—	硬質緑灰色。素地外面蓮弁文刺花。	青磁。緑褐色釉、内面スリップ。	同安窯系?
6	原不明	磁器	皿	底部	底	軟質・灰色。削り高台。	青磁。淡緑色釉厚い。見込純目状・高台内側無釉。貫入あり。	
7	原31掘立	磁器	碗	口縁	—	硬質灰白色。器内厚く大きく外反。	青磁。青灰色釉。貫入あり。	竜泉窯系
8	吉1溝附近	磁器	碗	完存	口 8.2 底 2.9 高 5.0	白色硬質。高台小さい。	ペロアイ染付。裏面摺り山水花鳥園高台内に「成364」銘。	美濃
9	吉6・13溝 交点附近	磁器	碗	1/3	底 3.4	白色硬質。低い削り高台。	須須染付。外面交差文帯。見込手掻き五弁花文。透明釉光沢。	肥前
10	同上	磁器	碗	1/3	口10.0 底 4.0 高 4.9	白色硬質。器高低く、口径大きい。体部外面に後。	須須染付。草本文。底部に記号。透明釉薄く湿感あり。	肥前
11	同上	半磁器	碗	1/4	底 4.7	灰色。貫入左一右。器壁厚く重い。	須須染付。無釉部有り。透明釉光沢。	肥前

る。20-23は、ほぼ同一の大きさ・器形と思われるが、口縁の形態がそれぞれ異なる。

24は、他と全く異質な薄手のもので邑楽郡大泉町の小泉焼の可能性が考えられる。

煮沸具
盤(30-36) 器高のややある30を除いた6点は、中性・酸化炎土師質土器である。34を除いた残りはすべて書上下吉祥寺の6・13号溝交点付近の一括出土である。体部及び底部に焼成後穿孔した例は興味深い。特に31と32は、銅線が孔内に残存していた。

火鉢(25-27) 25と26は、ほぼ同一形態の瓦質土器で、出土状態も上記一括出土及びその付近である。やや形態の異なる27は、近くの4号溝の出土である。

不明(28・29) 形態は分らないが、煮沸具(火処)に含まれるだろう。共に瓦質土器。

貯蔵具
甕(37・38) 37は大形で焼締に近い焼きである。38は、鉢の可能性もある。両者とも他の瓦質土器とはかなり焼成が異なる。

不明(39・40) 形態は分らないが、貯蔵具に含まれるだろう。共に瓦質土器。

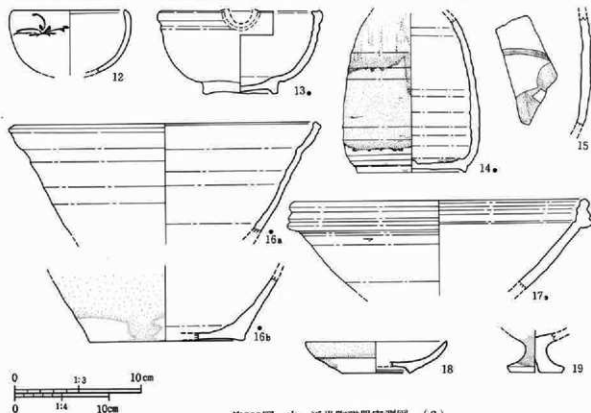
調度具
小皿(41-43) 書上下吉祥寺の墓塚から出土した3点の土師質土器で、灯明皿であろう。43は片口であり、41も片口。

泥人形(44・45) 書上下吉祥寺から出土した土師質のもので、共に極めて似ている。屋敷神への供物品と思われる。

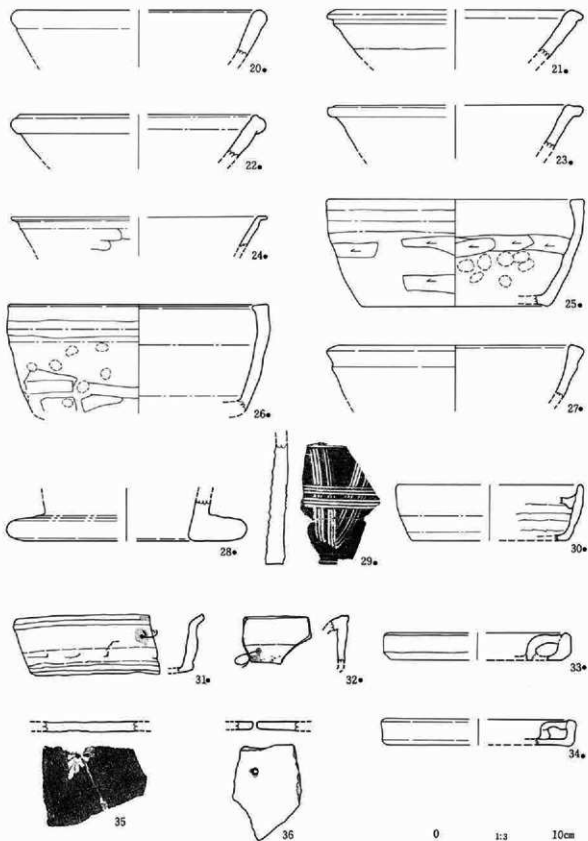
不明(46) 瓦質土器で内部中央で孔があるが、容器とは考えにくい。

以上のうち、捏鉢の5点、火鉢の1点、盤の6点は、書上下吉祥寺の6・13号溝交点付近で、一括投棄された状態で出土している。なお前述のようにこの投棄地点からは、澁川市中村遺跡で類似した陶磁器が出土している。そのため、これらの瓦質・土師質の土器群は、18世紀後半の年代をあてることができるだろう。

甕状の瓦質土器2点(37・38)は焼成状態より中世の産の可能性はあるが、その他は近世であろう。



第209図 中・近世陶磁器実測図(2)



第210図 中・近世土器類実測図 (1)

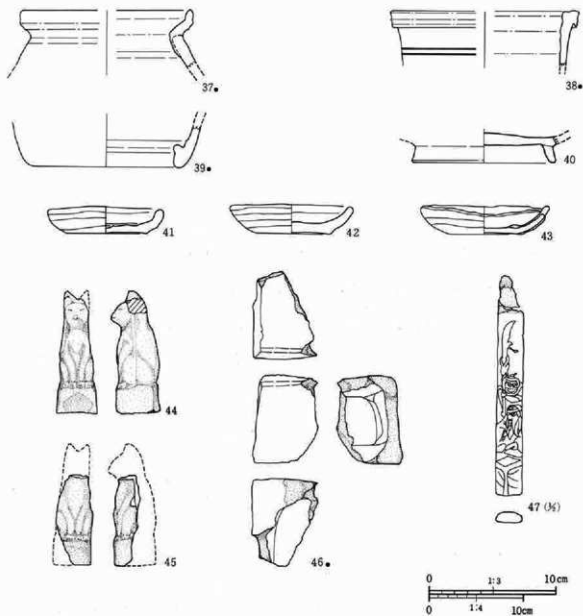
第3節 まとめ

No	出土状態	種類	形態	残存	法量	胎土・技法・器形の特徴	輪の特徴	備考
12	吉6・13溝 交点附近	輪軸陶器	輪	1/5	口9.5	軟質黄白色。口縁やや内反	長石釉鉄絵赤本文。	瀬戸・ 美濃か
13	同上	輪軸陶器	片口	1/4	口17.6 底8.0 高8.7	硬質灰色。口縁上面水平で口底あり 高台下面大きく歪む。	高台部以外に胎軸、全体に不均 一。	瀬戸・ 美濃
14	吉6溝	輪軸陶器	徳利	1/4	底11.5	硬質灰色。白色底物粒含む、底い り高台。内面口クロ目。	胴部下位まで胎軸。上位窟室。 内面自然胎。	瀬戸・ 美濃
15	吉不明	輪軸陶器	皿?	体部	—	軟質黄白色。厚手。外面口クロ目。	灰胎地に青緑輪軸線、鉄上絵付。	唐津系
16a	吉6・13溝 交点附近	輪軸陶器	鐏鉢	口縁	—	軟質黄白色。底物粒・小礫含む。 左回わり放射状スリ目。	胎軸、体部下位・底部無胎。	瀬戸・ 美濃
16b	吉4溝	輪軸陶器	鐏鉢	底部	底16.2	同上。	胎軸。体部下位。底部無胎。	同上
17	吉6・13溝 交点附近	焼締陶器	鐏鉢	口縁	—	硬質。石英・砂粒含む。輪轆後胎軸 調整。口縁直立し有様。	胎火完成。口縁に僅かに自然 胎。	泉州郡?
18	厚16溝附近	輪軸陶器	小皿	1/5	底5.5	軟質灰黄色。砂粒含む。削り込み高 台。体部下位右回転削り調整痕。	鉄軸やや窟室。体部下位、底部 無胎。ハケ塗り。	瀬戸・ 美濃
19	原14溝	輪軸陶器	甕埴	脚部	底4.4	硬質灰色。砂粒含む。底部右回転 削り無調整後、調整孔あける。	鉄軸ハケ塗り。光沢あり。	瀬戸・ 美濃

第78表 中・近世土器類観察表

No	出土状態	種類	形態	残存	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
20	吉6・13溝 交点附近	瓦質土器	控鉢	口縁	—	やや玉縁状口縁、内面使用痕。	気泡・砂粒多い。外面回転調整痕。 還元焼成やや軟質。	
21	同上	瓦質土器	控鉢	口縁	—	口縁上面平滑、外に小さく突出、 内面使用痕。	気泡・砂粒多い。外面上位回転調 整。中位削り。還元焼成やや軟質。	
22	同上	瓦質土器	控鉢	口縁	—	口縁上面円平滑、外に幅広く突 出内面使用痕。	気泡・砂粒多い。口縁折り込み。 外面上位回転調整還元焼成やや軟 質。	
23	同上	瓦質土器	控鉢	口縁	—	口縁上面平滑、外に大きく突出 内面使用痕。	気泡・砂粒多い。口縁折り曲げ、 外面回転調整、還元焼成やや軟質。	火鉢の可 能性もあ る。
24	同上	瓦質土器	控鉢	口縁	—	肉薄。口縁上面平滑、外に突出、 外成やや大。	気泡多い。口縁折り曲げ、外面へ 削り。還元焼成やや硬質。	小泉焼?
25	吉6溝	瓦質土器	火鉢	1/5	—	口徑は底徑より少し大。口縁上 面平滑、体部上位やや肉厚。内 上面僅か2次焼成。	気泡多い。輪轆後外ヘラナア、内 オサエ・削り・回転調整・還元焼 成軟質。外面研磨。	
26	吉6・13溝 交点附近	瓦質土器	火鉢	1/4	口27.7	口徑は底徑より少し大。口縁上 面平滑、体部かなり直立。内上 面僅か2次焼成。	気泡多い。輪轆後外ヘラナア一部 研磨、内面回転調整、還元焼成軟質。 外面研磨。	
27	吉4溝	瓦質土器	火鉢	口縁	—	口縁上面平滑、肉厚。かなり直 立。内面やや摩耗。	気泡、砂粒含む。口縁上ヘラナア 外上削り、中性焼成やや軟質。	

第Ⅲ章 書上上原之城遺跡



第211図 中・近世土器類実測図 (2)

No	出土状態	種類	形態	残存	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
28	吉 4溝	瓦質土器	不明	口縁	—	器内極めて厚い。大型の底部有孔の器を持つ器形。	砂粒多い。内外面回転調整痕。還元焼成硬質。	置き台か。
29	吉 11溝	瓦質土器	不明	下部	—	大形で底部を持たない形態。焼素後被焼痕。	気泡多い。外髷状工具施文。内口クロ目。還元焼成軟質。	火処。
30	吉 6・13溝 交点附近	瓦質土器	盤	1/4	高 5.9 径	口縁上面平滑、体部極く内反しながら外翻。外 2次焼成。	気泡あり、輪積接ナズ調整。耳はりつけ、還元焼成軟質。	

第3節 まとめ

No.	出土状態	種類	形態	残存	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
31	吉6・13溝 交点附近	土師質土器	盤	1/5	高 5.6	口縁外に張り出す、体部中位焼成後挿孔銅線残存。外2次焼成。	気泡あり。輪積後ナラ調整、中性焼成軟質。	補修使用。
32	同上	土師質土器	盤	口縁	—	耳部下に焼成後挿孔、銅線残存。外面2次焼成。	気泡・砂粒多い。回転調整痕、酸化焼成軟質。	同上
33	同上	土師質土器	盤	耳部	高 2.9	器高低い、体部下端内傾。体底部外面2次焼成。	気泡・砂粒多い。回転調整痕、酸化焼成軟質。	
34	原 14溝	土師質土器	盤	1/5	高 2.8	器高低い、口縁やや歪む。体底部外面2次焼成。	気泡・砂粒多い。体部外回転調整痕、底部土台痕・酸化焼成軟質。	
35	吉6・13溝 交点附近	土師質土器	盤	底部	厚 0.8	平坦。	気泡あり。外土台痕。内研摩後木葉状印文。中性焼成軟質。	36と同一か。
36	同上	土師質土器	盤	底部	厚 0.8	焼成痕挿孔。	気泡あり。外土台痕・内研摩。	
37	吉 8土坑	瓦質土器	壺	口縁	—	口縁直立、頸部大きく内曲。肩部まで肩状。肉厚。	気泡、白色鉱物粒含む。輪積後回転調整。還元焼成硬質。	
38	原 9住附近	瓦質土器	壺?	口縁	—	口縁上面平滑、垂直に折り込む体部直立状。磨擦後鉄分附着。	気泡多い。輪積後回転調整、細い櫛状工具施文。還元焼成肌荒れあり硬質だが軽い。	
39	吉 1~3溝 交点附近	瓦質土器	不明	底部	—	削りこみ高台で底部中空の器形。	気泡やや少ない。外面磨擦、内面回転調整。還元焼成やや軟質。	
40	吉4・9溝 附近	瓦質土器	不明	底部	底11.4	高台薄手で外反。内面は割れ多い。	気泡・砂粒含む。底部回転へつ削り調整。付け高台。還元焼成軟質。	
41	吉 墓坑	土師質土器	小皿	完存	口 9.2 底 6.5 高 1.9	口縁厚手で直立さき。内部薄みあり。内面2次焼成。	砂粒・気泡多い。体部内外回転調整痕・口縁角質多い。底部左回転糸切り無調整。酸化焼成軟質。	灯明皿か。
42	同上	土師質土器	小皿	完存	口 9.8 底 6.0 高 2.2	体部外傾度大きく、やや浅い。内面2次焼成。	砂粒・気泡多い。口縁砂粒による亀裂。内外面回転調整痕、底部左回転糸切り無調整。酸化焼成軟質。	
43	同上	土師質土器	片口 小皿	完存	口10.2 底 5.3 高 2.2	口縁内反さきで薄みあり、口部はあまり張り出さない。見込み蛇目状。内面2次焼成。	砂粒・気泡多い。内外面回転調整痕、底部左回転糸切り無調整。酸化焼成軟質。	
44	吉 1・2溝 附近	土師質土製品	狐形泥人形	ほぼ完存	底 3.3 高 9.5	方形以上に直立する狐像。立面的造形。中空。	砂粒多い。表裏押型成形後張り合わせ。酸化焼成硬質。	屋敷神への供物か。
45	吉 1~3溝 交点附近	土師質土製品	狐形泥人形	片面	—	台やや高いが、狐像は44と同一。	同上	同上
46	吉 13溝	瓦質土器	不明	端部	高 8.7	中空台状形態。底部を持たない。磨擦後鉄分附着。	気泡・砂粒多い。粘土板張り合わせ。還元焼成やや軟質。	
47	原 2・3溝 交点附近	銅鉄小刀	小刀	柄部	幅 1.3 厚 0.6	片面に長巻を持つ人物立像と冠を着用する人物座像を鑄造。	肉厚の図像を鑄造した長方形の銅片を刀身をはき込んで巻こむ。	題材不明。

第四章 書上上原之城遺跡

4. 書上下吉祥寺遺跡の遺構群

本遺跡では、6号溝と13号溝の交点付近出土の一括の遺物が目を引く。調査時には遺構を確認し得なかったが、土状のものへの埋納の可能性がある。これらはいづれも、18世紀後半の日常雑器である。

同様の日常雑器を出土した6号溝・13号溝それぞれに1号溝の南側は直交しており、東西約38m・南北約32mほどの方形区画を呈している。この区画の北西隅と考えられる1号溝屈曲部からは、屋敷神（稲荷）への供物と思われる弧形泥人形が出土しているため、この区画は屋敷跡の可能性はある。なお6号溝は東に平行する7号溝があり、この間は、道路と思われる。この道路は、2号溝と11号溝の間へも続いている。

これらの溝に平行あるいは直交する2号溝と11号溝も上記屋敷跡とそれほど時期が異なるない地割の溝と思われる。他にも屋敷跡が存在したかもしれない。

これに対して方向の異なる3号溝と8号溝は、伊勢崎市教育委員会の調査結果^{注4}によれば、同一の直角に曲がる近世の溝とされる。この溝と1～6号の各掘立柱建物跡は、軸方向が似ているため同一時期の可能性が考えられる。ただ前記の屋敷跡の想定区画とは異なって、同程度の広さの区画は考えられない。また建物の位置から3号溝近くに集中しているのも、より広範囲な遺構群であろう。

なお土師質小皿を出土した墓墳は単独であり、遺構群としての推定は難しい。

5. 書上上原之城遺跡の遺構群

本遺跡では、明確な遺物出土状態を示した遺構として、竜泉窯系の青磁小片（7）を出土した31号掘立柱建物跡が中世前半（13世紀頃）と考えられ、瀬戸美濃系の施軸陶器乗燭（19）と土師質土器盤（34）を検出した14号溝が18世紀後半とすることができる。

31号掘立柱建物跡と同様の軸方向をとる周辺の1・3号溝も同じ時期の可能性が考えられ、これらの溝と31号及び同じ軸方向の28号掘立柱建物跡を含めた南北約40m強の中世の屋敷跡を想定できる。また3号溝が続く西側も連続する屋敷地と考えると良いだろう。

またその北西に約60m離れて、8・9・12号溝に囲まれた南北約20mの小さな方形区画がある。この周辺でも同安窯系？青磁小片（5）が出土しており、この区画内の軸方向を同一にする16号掘立柱建物跡の存在を考えれば、中世前半の屋敷地跡の可能性は全くは否定できない。なお12号溝に平行する10・11号溝は、同じ時期の道路跡と考えると良いだろう。

以上のように本遺跡では、やや軸方向を異にするものの、船載青磁片を出土した中世前半の屋敷跡2箇所を検出した。そして、他の出土状態不明の船載青磁片存在を見るならば、本遺跡調査範囲を大きく取り囲む形で中世前半の屋敷跡群の存在を想定することができる。

なお銅柄鉄小刀（47）は、近世のものと思われ、18世紀後半の14号溝との関係が着目されるが、他の出土遺物が少ないため、広い遺構群としての解釈は現段階では難しい。

（坂井）

注1 竜泉窯系のもは、大宰府発出土資料の分類によれば1～5類となり、同編年では書期2小期（13世紀中葉）になる。同安窯系？としたものは、軸色の差異からの判断だが、器形的には竜泉窯1～5類に入れられるかもしれない。それらを考慮して、同編年の書期の1小期と2小期の幅とした。参考 横田賢次郎・森田 勉、「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」、九州歴史資料館研究集4、1978 出光美術館、『近年発見の泉址出土中国陶磁器』、1982。

注2 九州陶磁資料館 『国内出土の肥前陶磁』、1984

注3 渋川市教育委員会、『中村遺跡』、1986

注4 伊勢崎市教育委員会、『下吉祥寺遺跡、原之城遺跡』、1982

(2) 陶硯について

書上原上之城遺跡は、上武道路建設地域内にあり、伊勢崎市豊城町に所在する。遺跡を構成する主な遺構は、奈良・平安時代の堅穴住居跡を中心として形成されている。

本遺跡より検出された陶硯は、いずれも小破片であり、計7点で個体数にして3～4個体のものと考えられ、いずれも有脚の円面硯と考えられる。その他須恵器杯型土器の見込部を使用した転用硯が見られる。

①円面硯 (第212図1)

2個の小破片からなるため、正確な計測値は知り得ないが、復元上面径が20cm前後の、比較的大型品になる。脚部は欠損しているが、円形と考えられる透かし痕が観察され、割付け復元ではこの種の透かしは脚部の周囲に4～6個配される。硯面には断面形が三角形の幅の狭い内堤が巡り、その外縁には内堤よりかなり低い痕跡程度の外堤が形成される。内・外堤に囲まれた海に当たる部分は、硯面より僅かながら高くなっている。硯面は摩滅の度合いが強く光沢を放つ。また、透かしの位置からして、外堤の下位にはやや幅広い凸帯が存在するようである。焼成は良好で、明褐色を呈する。胎土は比較的密で、黒色粒が若干混じる。

②円面硯 (第212図2・3)

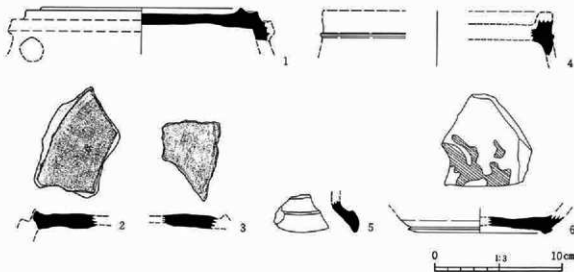
3個の小破片で、接合は出来ないが、同一個体と考えられる。3片とも硯面の周縁に近い部分である。復元上面径は20cmをやや下回る大きさになる。堤は欠損して不明であるが、内面の脚部へ移る折れる位置具合からすると、硯面の縁辺を巡る堤と考えられる内堤を持たない形状になる。硯面の中央部が僅かに膨らみ、堤へ向かって緩く低くなり堤縁は僅かに窪んでいる。硯面の中央部近くはかなり摩滅しているが、周縁部は製作時の器面調整と思われる細かい回転条痕が観察される。焼成は良好で、明褐色を呈する。胎土は白色細粒・黒色粒を混じえる。

③円面硯 (第212図4)

外堤部分と考えられる。堤の下位には低い凸帯が巡る。焼成は良好で、明褐色を呈する。胎土は白色粒を混じえ、黒色粒が僅かに器表に浮く。色調・胎土から2・3と同一個体の可能性がある。

④円面硯 (第212図5)

脚端部と考えられる。小破片のため、詳細は不明である。焼成は良好で、灰白色を呈する。胎土は緻密である。



第212図 硯実測図

第三章 書上上原之城遺跡

⑤転用硯 (第212図6)

須惠器杯型土器の見込み部を使用している。体部は欠損しており、底径8cmを測る。底部は中央部に静止糸切り痕が残る、周辺は回転磨削を施す。擦面の摩滅は弱い。焼成は良好で、灰色を呈する。胎土はやや粗く、白色細粒を多く混じえる。

以上、書上上原之城遺跡出土の陶硯4点・転用硯1点について、その概略を述べた。近年、大規模な発掘調査が実施され、陶硯の検出が多く知られるようになり、今日からすれば1983年に奈良国立文化財研究所により刊行された、「陶硯関係文献目録」で紹介された陶硯及びその出土遺跡の数は、飛躍的な増加が見られる。群馬県においても同様な傾向にあり、管見した資料ではあるが集成を試みたい。

群馬県内出土の陶硯

陶硯の出土遺跡は、宮殿跡・官衙跡・寺院跡・集落跡・窯跡などを中心として、その多くが検出される。宮殿跡では平城宮跡、官衙跡では多賀城跡・下野国府跡などからの出土資料の多さが注目される。一遺跡から出土する陶硯の量は、その遺跡の持つ本来の性格や機能によって左右されると考えられるが、一般的には組織的・計画的な大規模発掘調査によるところが大きいようである。

県内においては、上野国府跡をはじめとする官衙関連遺跡や窯跡についての、計画的な発掘調査が実施されることが少なく、陶硯資料に接する機会には恵まれない。しかしながら、ここ数年、県内各所で大規模な発掘調査が行われ、整理作業の進展も手伝って陶硯資料は増えつつある。また、官衙関連の遺跡や窯跡の発掘調査が少ない群馬県にとって集落跡からの出土資料がその多くを占めている。

かつて県内に出土した陶硯を管見したことがある^①。当時10遺跡10余点を数えた資料も、現在ではそれに倍する出土遺跡があり、資料数も55点あまりに達している。ここでは、県内出土で、報告されている陶硯を概観する。なお、転用硯については、その機能や意義は陶硯と何等変わるところがないと考えるが^②、資料の多さや抽出・認定に疑問が感じられ、ここでは必要最小限にとどめ、特には触れない。また、石硯についても扱わない。

①洞Ⅰ・Ⅲ遺跡 利根郡月夜野町字洞 (第213・214図)

洞Ⅰ遺跡からは包含層より風字硯が検出されている。硯尻部分に緑帯が巡り、筆置きと考えられるえぐりが見られる。底面に脚刺落痕が残る。硯尻幅8.5cm。洞Ⅲ遺跡は円面硯で2号住居跡出土である。内堤は無く、高い緑が巡る。脚部には四方に長方形の透かしが穿たれる。硯面の摩滅度は弱い。上面径10.4cm・底径13cm・器高4.2cm。

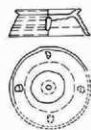
②大釜遺跡 沼田市大釜町・堀廻町 (第213図)

14号住居跡出土の円面硯は、硯面に内堤が巡り、刺落痕から外堤が設けられていたと考えられる。脚部には4個の円形透かしを配し、透かし間は2本単位縦刻線が3組単位で施される。硯面の摩滅度は弱い。内堤径10.8cm・脚径17.1cm・器高5.1cm。

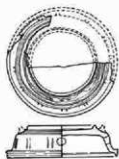
③後田遺跡 利根郡月夜野町大字師字後田・青岳他 (第213図)

陶硯は9点検出されているが、すべて円面硯である。1～3は129号住居跡出土で、同一個体と考えられる。硯面には内堤が巡り、低い外堤により海部が作られる。脚部は4個の長方形透かしと、透かし間は7本単位の縦刻で構成される。復元計測値は、内堤径10cm・外堤径12cm・脚径18cm・器高6.2cm。4・5は脚端部小片で、透かしや刻線などは見られない。脚径は18～20cm。6は硯面に貼付痕が残る、海部を形成する外堤が設けられる。全体に器内が薄く、低い脚部を有する。硯面には光沢があり使用度は高い。内堤径14cm・

第3節 まどめ



洞川遺跡



大釜遺跡



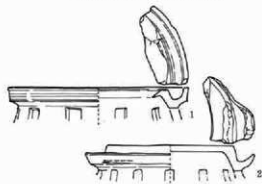
保渡田東遺跡



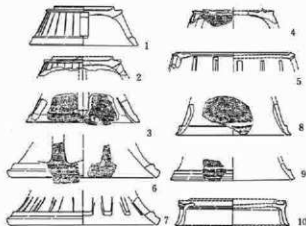
中島遺跡



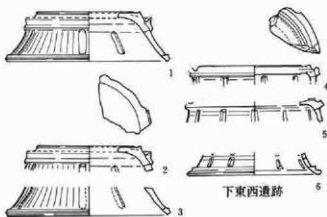
上野国分僧寺・尼寺中間地域



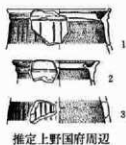
鳥羽遺跡



後田遺跡



下東西遺跡



推定上野国府周辺



熊野堂遺跡



日高遺跡



上洲名



本宿・郷土遺跡

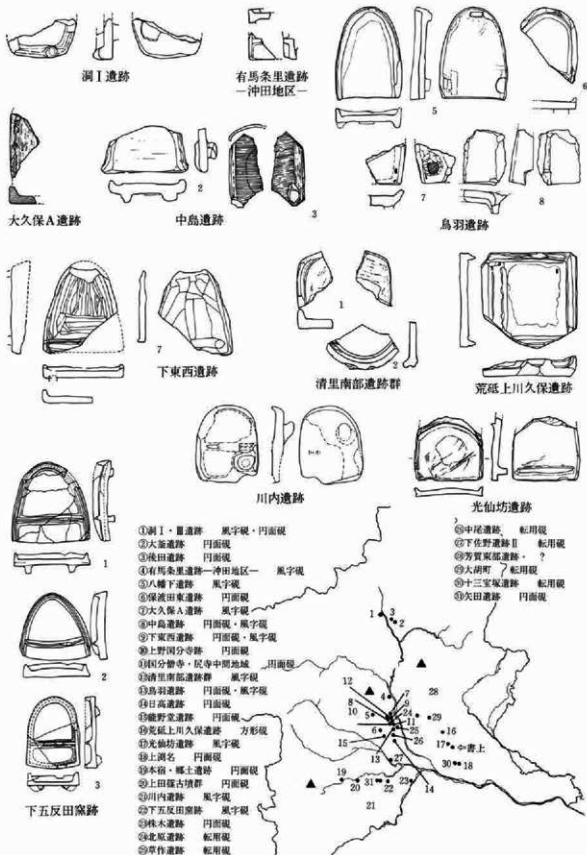


上田篠古墳群



株木遺跡

第213図 群馬県出土円面硯 (1/6)



外堤径17.2cm・脚径18cm・器高4.4cm。形状は短頭壺の蓋に類似し、転用の可能性もあるが、紐の貼付がなく、本来的に硯として意識されたと考えられる。7は170号住居跡出土で、硯部から脚部にかけての小片である。海部は無く、硯面は外周に緑帯が巡る。脚部には2個の方形透かし痕が認められ、割り付け復元では、15~16個が配される。上面径は20cm前後になるうか。8は脚端部の小片で、2個の透かし痕が認められる。割り付け復元では、15~16個となる。脚径23~24cm。

④有馬条理遺跡—沖田地区— 渋川市八木原・沖田 (第214)

硯は、遺跡内での採集品である。風字硯か方形硯と見られるが、硯尻部小片のため、詳細は不明である。縁は硯尻に巡らず、硯面を前後に区切るようにやや内側に入って縁が設けられる。底面には脚部剝落痕が残る。

⑤八幡下遺跡⁷⁾ 北群馬郡榛東村別分

風字硯である。かなり大型で、硯尻を除き縁帯を巡らす。縁帯は貼付されたものではなく、端部を折り曲げて形成される。

⑥保渡田東遺跡 群馬郡群馬町保渡田東 (第213回)

3点の円面硯が検出されている。いずれも整穴住居跡からの出土である。1は6区第6号住居跡出土で、硯面径17cmのかなり大型品である。硯面は、中央部が窪み、内堤は作られない。硯面よりかなり下位に凸帯の貼付痕が残る、これを外堤とするときかなり深い海部が形成される。脚部にはメガネ状透かしが穿たれ、割り付け復元では4箇所に配される。上面径推定21.5cm・脚径25.4cm・器高6.7cm。2・3は小型品である。2は6区1号住居跡出土で、やや膨らみを持つ硯面より低く、断面三角形の堤が巡る。また、この堤よりさらに下位に凸帯の剝落痕が残る。硯面の使用痕は顕著で、墨が付着する。上面現存径9.2cm・硯面径9.2cm。3は5区7A号住居跡出土で、硯面中央は窪み、墨が付着する。硯面より低く、形骸化した小さな堤が巡る。上面径11.6cm。

⑦大久保A遺跡⁸⁾ 北群馬郡吉岡村大久保 (第214回)

硯は、I区第39号住居跡から出土しており、小片のため詳細は不明であるが、風字硯と考えられている。断面矩形の縁は施削りが施される。硯面は滑沢である。

⑧中島遺跡¹¹⁾ 前橋市青梨町字中島・中原 (第213・214回)

円面硯1点・風字硯2点が検出されている。遺物毎の記載が無く、詳細は不明である。1は83号住居跡出土の円面硯で、硯面径の割には高い脚部が付く。硯面は窪みをなし、低い内堤が巡る。外堤は観察できないが、欠損状態からは、存在したと考えられる。脚は高くハの字状に広がり、長方形の透かしが四方に配されている。内堤径6cm・脚径14cm・器高7.4cm。2は21号住居跡出土で、風字硯と考えられる。硯尻部で硯尻辺を除き縁が巡る。脚は2足貼付されている。硯幅14cm。3は56号住居跡出土で、風字硯の形状かと思われる。肉肉が薄く、硯面は縦いU字状を呈する。縁は貼付によるものではなく、U字状の硯面から端部を短く直立させて形成している。底面には脚の剝落と思われる痕跡が表現されている。

⑨下東西遺跡¹¹⁾ 前橋市青梨町・群馬郡群馬町北原 (第213・214回)

円面硯4点・風字硯1点が検出されている。円面硯はすべて掘立柱建物跡群を北辺から南辺にかけて区画する溝SD52から出土している。1は、2・3が同一個体と考えられ復元されたものである。硯面端部には低い堤が巡る。硯面よりかなり低い位置に凸帯が設けられるが、海部を形成する外堤とは考えられない。脚部は6箇所に長方形の透かしが配され、その間には9本単位の縦刻線が施される。内堤径16.7cm・外堤径20.2cm・脚径25.3cm・器高8cm。4は硯面が欠損する。脚部には長方形の透かしが認められ、割り付け復元では

12箇所である。視面端部の破損状態から、浅い海部を形成する堤が巡ると考えられる。5は視面から脚部にかけての小片である。視面端は僅かな高まり程度の内堤を巡らす。視面よりやや下がった位置に海部を形成する外堤の痕跡が認められる。脚部に長方形の透かし痕が認められ、割付復元では12箇所になる。内堤径18cm。6は風字視で、竪穴住居跡S J 175からの出土である。縁帯が巡り、視頭部は縁帯が他より高くなる。視尻部は視面に入り込んで凸帯を貼付し、中央やや右寄りに筆置きと考えられるえぐり痕が観察される。脚は視頭部に剥落痕が、また、視尻に1足が貼付されており、3足であったと思われる。長さ14.6cm・視尻幅13cm。

⑩上野国分寺跡 群馬郡群馬町東国分・引間、前橋市元総社町

円面視である。金堂跡南東部より出土しているが、遺構には伴っていない。報文によれば「須恵質の堅ちな焼成で、陸(視面)の部分は滑らかでよく使い込まれた状態を示している。」写真掲載のため、詳細は不明であるが、視面部分破片で、内堤が設けられれば、視面よりやや下がった位置に、深く幅広い海部を形成する丈の高い外堤が付く。かなりの大型品になろう。

⑪国分寺中間地域 前橋市元総社町・群馬郡群馬町東国分 (第213図)

円面視3点である。視面には明瞭な内堤が巡り、内堤よりやや高い外堤が設けられる。外堤によって作られる海部は視面とほぼ同じ高さである。脚部は直線的に開き、刻線が施される。刻線はX印と縦線で構成され、X印間には2条1組の縦刻線が2組、さらにこの間に短い縦刻線を配する。内堤径14cm・外堤径17.4cm・脚径21cm・器高6.9cm。2は1と酷似するが、外堤及び脚端部の形状・計測値、脚部の刻線構成に相違がみられ、別個体とした。視面の様相は1に類似するが、外堤断面は端部が尖る。また、脚端部は丸みを持つ。脚部に施される刻線はX印と2条1組の縦線が交互に配される。内堤径12.3cm・外堤径16.2cm・脚径19cm・器高6.7cm。3は脚端部である。長方形の透かしが穿たれ、割付復元では8箇所になる。透かし間には7条の縦刻線が施される。脚径19.2cm。

⑫清里南部遺跡群 前橋市青梨町 (第214図)

風字視である。1は視頭から視側にかけての小破片である。周縁には断面矩形の高い縁が巡っている。2はやや丸みが強い視頭部と考えられる。断面丸みを持つ縁が巡る。いずれも遺物についての記述がなされず、摩滅具合など詳細は不明である。

⑬鳥羽遺跡 前橋市鳥羽町・元総社町、群馬郡群馬町稲荷台・塚田 (第213・214図)

円面視4点、風字視3点が出土している。1はH1号掘立柱建物跡を囲む12号溝殻の出土である。視面には内堤が無く、視面よりかなり低い位置から断面矩形の強く張った外堤が設けられ、深く幅広い海部を作る。脚部には2箇所に長方形の透かし痕が認められ、割付復元では10箇所になる。内面には朱墨が付着する。視面径22.4cm・外堤径29cmの大型品になる。2も12号溝から出土している。視面は高く突出する形をとり、外堤はかなり低い位置から大きく張り出し、深く幅広い海部を形成する。脚部には2箇所の長方形透かしが認められ割付復元では12箇所になる。視面径20cm・外堤径27cmの、これもかなり大型品である。3は視面から脚部にかけての部分である。視面には低い内堤が巡り、断面矩形の直立する外堤が設けられる。脚部は長方形透かし2箇所に認められ、その間には縦刻線10条が施される。視面の摩滅が著しい。内堤径12.8cm・外堤径17.2cm。4はH区の表採品である。円面視としてはかなり小型品である。視面には痕跡程度の内堤が巡り、外堤も低く浅い海部を作る。脚部には透かし・刻線などは認められない。上面径6cm。5はG61号住居跡出土で風字視である。視尻を除き縁が巡る。脚は3足で、視頭・視尻に貼付される。成形・調整は丁寧に、視面の摩滅も著しい。長さ14.6cm・視尻幅19.8cm。6はG10号住居跡出土である。視尻の小片で、側面には縁を設ける。底面には脚部の剥落痕が見られる。7はK区の採集品である。視尻部の破片で、側面には縁の剥

落痕が認められる。底面の縁辺は丈の高い断面矩形の凸帯を貼付し、脚とする。視尻の高さは3.5cmになる。凸帯は視尻に向かい高くなり、視面に傾斜をもたせる。また、視尻近くはこの凸帯を約1/3の高さまで削り取っている。8はI区出土である。視面の周囲には縁を巡らし、視尻部は視面内に凸帯を貼付する痕跡が見られる。底面には脚部の剥落痕がある。

⑭日高遺跡⁽¹¹⁾ 高崎市日高町小字村西・村前・中堀添、中尾町村東 (第213図)

円面視である。脚部小片で、脚径20.7cmに復元される。やや膨らみを持ち、長方形の透かし痕が認められるが、単位は不明である。視が検出されたのは154号溝で、8～9世紀末頃に機能していた灌がい用水路と考えられている。同溝からは、未使用ながら須恵器壺片の側縁を研磨して風字視状に成形した転用視(?)や11点の墨書土器が伴出している。

⑮熊野堂遺跡⁽¹²⁾ 高崎市大八木町 (第213図)

視は13号住居跡出土で、杯型の体部を円盤で覆い視面とする円面視の一種である。視面の周辺には櫛插刺突文を施し、その外縁は匙状工具による浅い窪みが巡る。この窪みは海部を意識したものではなく、体部と視面が接合された時の調整痕と考えられる。視面の片側には大小4個の穴が穿たれるが、位置やその数から筆立てのためとは考えられない。内部は空洞である。視面は摩滅する。視面径13.9cm・底径11.5cm・器高4.5cm。

⑯荒砥上川久保遺跡⁽¹³⁾ 前橋市東大室町 (第214図)

視は4区11号住居跡より出土している。形状は方形で(10.2×10.1cm)、ほぼ正方形を呈する。視面の四周には断面三角形の縁を貼付するが、一辺の縁はその剥落痕から、端部より1cm程内側に設けられる。側面及び欠損部は摩滅が著しく、砥石として転用されている。視面中央は使用痕が顕著。

⑰光仙房遺跡⁽¹⁴⁾ 伊勢崎市三和町・本関町 (第214図)

風字視である。77号住居跡の出土で、視頭部が欠損している。視面は中央部がやや盛り上がり作りは粗い。視尻を含めた周縁部に断面略三角形の縁が巡る。また、視面中央部と思われる部分には両縁と接続する弧状の内堤を設ける。この内堤上方の視頭部にも使用痕が認められており、二面視としてよい。底面の視尻部内側に断面矩形の凸帯が横方向に貼付され、脚部となって視面に傾斜をつけている。現存長10cm。視面の使用痕は著しい。

⑱上淵名遺跡⁽¹⁵⁾ 佐波郡境町上淵名 (第213図)

視は無脚の円面視である。視面の中央がやや窪み、断面三角形の内堤が巡る。外堤は内堤よりやや高く、U字状の海部を作る。内堤径8cm・外堤径10cm・器高1.5cm。

⑲本宿・郷土遺跡⁽¹⁶⁾ 富岡市一ノ宮字本宿、同市田島字郷土 (第213図)

視はMT 34号住居跡出土で、無脚の円面視と考えられる。視面には断面略三角形の内堤が巡る。幅広い海部を形成する外堤が設けられるが、端部の欠損によって詳細は不明である。内堤径9.6cm・底径10cm・器高(2.5cm)。

⑳上田篠古墳群⁽¹⁷⁾ 富岡市田篠・諏訪平・原町 (第213図)

円面視で、E地点からの出土で、遺構には伴わない。視面中央部は高く、断面略三角形の明瞭な内堤が巡る。海部は凹状になり外堤は視面より高く断面矩形を呈する。脚部には四方に方形の透かしを穿ち、透かし間は5本単位の縦割線で構成される。内堤径11.2cm・外堤径15.4cm・脚径18.4cm・器高7.2cm。

㉑川内遺跡⁽¹⁸⁾ 多野郡吉井町大字吉井(旧川内村) (第214図)

視は風字視で、61号住居跡出土である。視面の全周に縁を巡らし、視面を前後に分ける堤を設け、二面視

とする。また、右後部には凸帯で囲まれた小穴が作られる。脚部は硯頭部右に1足が貼付されているが、位置的には前後に4足であると考えられる。長さ12.2cm・幅9.5cm。

②下五反田窯跡 多野郡吉井町多比良 (第214図)

灰原より風字硯3点が出土している。1は硯尻がやや開き気味である。硯面の周辺・硯尻を除き断面三角形の縁を巡らす。硯面にはやや硯尻に近く横に凸帯を貼付し凸帯の右寄りに筆置きと思われるV字状の窪みを付ける。脚は硯頭1・硯尻2の3足である。長さ17cm・硯尻幅16.7cm。2は硯尻が大きく開く。無脚であるが表面は1と同様の作りを為し、硯面に貼付された横凸帯の右寄りに浅いV字状の窪みを付ける。硯面を巡る縁は硯尻端部まで至らずに途切れる。長さ14cm・硯尻幅15cm。3は硯尻の開きは無い。全体に縁が回り、硯面を前後に二分する凸帯を貼付する、二面硯である。硯面に貼付された凸帯と硯尻部の縁には右寄り部分にU状の窪みが設けられ、両者は対応する位置にある。脚は硯頭・硯尻に各2足を有する。長さ15cm・硯尻幅11.2cm。

③株木遺跡 藤岡市上下塚字株木 (第213図)

硯は円面硯で、H-8号住居跡出土である。脚端部の小片である。長方形と思われる透かし痕が3箇所認められる。

群馬県内出土の陶硯について概略を述べた。実見した点数を除き報文の参照や、写真図版の観察のため記述に誤りが多々あることとお断りしておく。本文中で触れなかった転用硯については、第215図にその出土遺跡を示しておいた。第215図に示すことが出来なかったが、大胡町⁽²¹⁾・前橋市芳賀東部⁽²²⁾田地遺跡からも出土していると言われる。

前述したように、県内における陶硯は所謂集落跡出土の例が多い。27遺跡55点の内、集落跡16例39点・官寺関係遺跡3例10点・窯跡1例3点・その他3例3点である。集落跡は、遺跡数で約60%・点数で70%を占める。従来、集落跡は、陶硯の出土地に含まれながらも、ややもすれば、官衙・寺院などの資料に重きが置かれてきたように思われる。さらに、陶硯が存在することによって派生する遺構・遺跡の性格分析よりも、陶硯自体の研究に、より強い流れがあった。しかし、ここでも陶硯を出土する遺構・遺跡などの分析には至らずに、集成にとどまってしまったが、陶硯の所属する時代・社会背景を踏まえた上での、遺構・遺跡の歴史的位置付けが今後の課題である。県内出土の陶硯資料について、本項では具体的な年代観を与えてはいないが、大づかみには円面硯と風字硯には、明らかに年代差が見られる。円面硯、特に、大型円面硯に関しては、その多くが8世紀代から9世紀前半代に比定できると考えている。分布状況で、最も集中するのは利根川右岸・上野国府推定地周辺が顕著であり、当然のことながら国府を中心とした律令政治の直接影響下にあった地域と見ることができる。また、各地域に点的に見られる陶硯出土遺跡は、周辺域での中心的役割を負っていた遺跡(集落)と考えられる。

まとめ

硯の存在は、少なくとも窯跡を除き、その出土地に文字を読み書きできる人間がいたことが想定される。ところで、我が国における文字の使用は、大陸国家との恒常的な接触によってもたらされた、仏教関係を初めとする精神的・物質的文物によって、ある種の階層に定着していったと考えられる。しかし、文字の使用が本格化するのには、やはり律令体制の確立をまたねばならない。文字資料の飛躍的な増加現象は、中央・地方を問わず、官殿・官衙・寺院跡など、律令体制の政治的・文化的中心施設から出土する陶硯・転用硯・木

簡・墨書土器などの量に示される。一方、前項に掲げたように、視は集落跡からの出土も多く知られる。「刀筆の吏」の言葉に代表されるように、文字中心の文書主義・文字を伝達方法の中心とする律・令の成文法をよりどころにする政治機構は、陶視がその一つの現れであるとするならば、集落跡という財貨・労働・軍事など、律令体制を支えるための取存対象にも明らかに痕跡を残していることになる。また、律令機構の中でそれらを末端の単位として位置付けていたと考えられる。

集落跡を中心に考えた場合、視を持つ集落と持たない集落が存在する。資料の採取に限界を認めながらも、両者に、その背景や機能に何等かの相異があるものとする。集落跡から出土する遺物は、その質・量にそれほどの差はない。ある一定範囲の中で、当該遺跡の位置付けは、そのものの分析と同時に、周辺地域との時代的・質的な比較検討が必要とされるが、陶視の存在はそのための指標の一つになり得ると考えられる。

8・9世紀、律令体制期と言われる時代の中で、一般に集落跡とされる遺跡では、時代的な面からの律令は伝えられるが、具体的資料を見出すことは困難である。漠然とした時代概念の中にあり、各々の集落跡の内実までは追り得ないのが現状であり、ややもすれば集落とかけ離れた異質の遺跡からの資料によって性格付けがなされがちである。視に限らず、量的には僅かな特殊遺物視されるものの中にも、時代や文化を反映するものがあり、それらこそが最も端的に示す場合すらあると考えている。

註

- (1)『有馬桑里遺跡—沖田地区—』 渋川市教育委員会
- (2) 森 郁夫『古代の墨書土器』【太平洋史叢】第4号 昭和60年「数々の風字模や円面模とともに二百点を越す転用模は、一般百人が使用するものである。』
- (3)【図1・Ⅱ・Ⅲ遺跡】 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 利根川右岸段丘上に位置し、平安時代の聖穴住居跡6軒、粘土採掘場などが検出されている。洞窟群、及び須志郎工業跡とされる森田・森田遺跡と密接な関連が考えられている。円面模出土の洞窟遺跡2号住居跡はロクロピット、台石などが検出されており工務跡の可能性もある。
- (4)【大室遺跡・金山古墳群】 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 利根川左岸、三峰山西南麓に続く上位階段段丘上に位置する。奈良—平安時代の聖穴住居跡29軒などが検出され、銅製鏡、墨書土器が出土している。
- (5)【年報】1・2 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982, 1983 利根川左岸の段丘上に位置し、「岩窟Ⅰ」文化とはほぼ同時期に考えられている旧石器時代から中・近世に至る複合遺跡である。古墳—奈良—平安時代にかけて聖穴住居跡32軒を擁する集落跡で、その周辺には多少の酒造が認められる6世紀代と9世紀代以降にピークをむかえたとされる。銅製丸鏡、金銅製金具、国分寺系瓦葺の空形をもつ軒丸瓦、鹿柄重葺軒平瓦・瓦葺形製品をはじめ「内殿」などの17点の墨書土器が出土している。軒丸瓦は単身11葉十中周で吾妻郡平瓦葺布地のものと類似するとされ、遺跡内に小仏堂か小規模寺院の存在が想定されている。
- 陶視資料の使用や遺跡概略についての御教授は大江正行氏の御厚意による。
- (6)と同じ。本遺跡は有馬桑里遺跡の一角に位置し、奈良時代建立とされる有馬桑里跡推定地の周辺にある。古墳—奈良—平安時代の聖穴住居跡56軒、古墳時代の水田跡、平安期と考えられる製鉄跡跡群・小竈遺跡跡などから構成される。遺跡の中心時期は平安時代である。緑釉・灰釉陶器などの地井戸跡より墨書土器の出土もある。
- (7)榎原村教育委員会 新編 朝氏の御教授による。
- (8)【保流田東遺跡】 群馬町教育委員会 1985 遺跡は榛名山東南麓、粗毛ヶ原原状地の末端に位置し、原状地伏流水を流す中小河川の一つ吾沢川右岸にある。聖穴住居跡49軒・掘立建物跡5棟など奈良時代を中心とした集落跡である。1—7の調査区よりなる。
- (9)【大久保A遺跡】 吉岡村教育委員会 1986 遺跡は榛名山東南麓の端部にあり、台地を開削し東流する諸河川の1つ駒寄川の兩岸（Ⅰ区・Ⅱ区）に位置する。古墳—奈良—平安時代にかけての聖穴住居跡255軒、掘立建物跡10棟、掘立遺構などが検出されている。緑釉陶器・銅製方刀・刀装具・瓦葺・墨書土器などが出土している。また転用模もみられ、須志郎製片の黒線を衝き楕円形に仕上げている。
- (10)【中島遺跡発掘調査概報】 昭和55年度 前橋市教育委員会 昭和56年 遺跡は榛名山東南麓を南東流する平野川と八幡川にはさまれた台地上に位置する。八幡川、牛池川を隔て、南には上野園分寺があり、また三影陶器・風字模なども出土した清里南遺跡群に近接している。奈良—平安時代にかけての軒の聖穴住居跡4軒出土し、二影（三影）・緑釉陶器・金属製品（高方）などが出土している。また御付灰産段瓦と報告されている遺物は口径が大きい銅は規模を思わせ四足火舎の可能性が有る。
- (11)【下東遺跡】 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 遺跡は榛名山東南麓の緩斜面の末端にあり、八幡川と平野川にはさまれた低台地上に位置する。宝塔山・蛇穴古墳や山玉塚寺など上野園律令期の代表的遺跡に隣接している。主に7世紀後半から11世紀にかけての遺構が検出され、奈良—平安時代の聖穴住居跡197軒をはじめ溝及び欄干に囲まれた11棟余りの掘立建物跡などが検出されている。この溝・欄干によって区画された内庭は7世紀末から8世紀第1四半期にかけての限定された時期に存在したとされ、在為有力豪族の私的な顔とも、また官署施設などにも推定されている。さらに具体的には群馬郡の郡衙の可能性も指摘されている。
- (12)【史跡上野園分寺跡発掘調査概報Ⅱ】 群馬県教育委員会 1981 上野園分寺は昭和55年度より保存整備事業のための調査が続けられている。周辺地には山王寺跡・上野園推定地などがあり、古代上野園諸遺跡の中心の環境に位置している。

第四章 書上上原之城遺跡

- 03 【解説】1・2・3 新群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982-1984. 「上野国分懸寺・尼寺中間地域」 新群馬県埋蔵文化財調査事業団, 1986. 本遺跡は縄文時代以降全時代を網羅する大複合遺跡である。聖穴住居跡1330余軒を数え、その他遺構・遺物は多様、多様である。上野国分懸寺、尼寺の中間部にあり、国分寺の跡跡を反映する遺跡として注目される。ここに掲載した視は整理途中の未発表資料であり、また本遺跡が抱える視のすべてではない。資料掲載については整理担当の木津博明、飯田正信両氏の御厚意による。
- 04 【高田遺跡群・西大宮遺跡群・南東市部遺跡群】 前橋市教育委員会, 1980 聖穴住居跡の分布から北群・中群・南群に分けられており、住居数は28軒を数える。北群は割川などの出土から製鉄跡の存在が想定されている。南群は三彩・緑釉陶器・銅製刀・墨書土器などの出土があり他の群には見られない特殊性が考えられている。風字鏡・転用鏡はこの南群からの出土である。なお前記中島遺跡とは同じ台地状にあり、きわめて近接しているところから同一遺跡として考えることもできる。
- 05 【島羽遺跡】 新群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 本遺跡は上野野国指定地域の西方に位置し、染谷川を挟んで対岸にある。古墳時代前期から奈良平安時代にかけての800余軒の聖穴住居跡の他5種の鍛冶工房跡や、三重の葺と三重の構りに囲まれた掘立柱建物跡などが検出されている。なお、2-4の陶器は未報告資料である。本遺跡は転用鏡が多数出土しているが現状では実数を把握できていない。観型の資料数から墨書土器の存在が予想されるが現在のところ皆無に近く、特徴的現象である。
- 06 【日高遺跡】 新群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 本遺跡は相馬ヶ原形状地が残り、自然堤防が形成される低湿地帯にある。東国で最初に発見された弥生時代水田跡をはじめ、方形周溝墓などの諸遺構や多様な木器類を出土した遺跡として著名である。
- 07 【熊野堂遺跡】 新群馬県埋蔵文化財調査事業団・1984
- 08 【寛政上川久保遺跡】 新群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 本遺跡は赤城山麓の丘陵性台地の末端にあり沖積地をのぞむ。鍛冶遺構など聖穴住居跡97軒余りを検出している。出土遺物には「司」、「上家」などの墨書土器、灰釉陶器・赤土用・転用鏡などがあがる。
- 09 【年報】3 新群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984 本遺跡は大間原状地西端に位置し船川の左岸台地上に立地する。古墳5基の他平安時代聖穴住居跡・掘立柱建物跡などが検出されている。なお陶器資料は未報告であり資料掲載は飯塚風氏の御厚意による。
- 28 【明神遺跡発掘調査報告書・附土器名出土古瓦、磁器調査報告】 地野教育委員会 1975 視は町道で水道管敷設の際検出されたものである。視発見の前に隣接地で布目瓦が多数の出土とともに検出されているところから築跡の存在が想定されている。視との関係は不明であり、両者の検出地点は20mの距離がある。
- 29 【本宿・郷土遺跡発掘調査報告】 富岡市教育委員会 昭和56年 本遺跡は鍋川左岸の段丘上に位置し、縄文・古墳・奈良・平安時代の聖穴住居跡の他中世に至る諸遺構が検出されている。ガラス玉・石製丸剣・銅鏡・青白磁・鈴型転用鏡・墨書土器など多様な遺物がある。遺跡の成立背景には周辺の太子堂塚古墳(前方後円)、堂山船荷古墳築造を、また「上野国一宮」貫前神社の物部氏系外來人の信仰集団などが考えられている。
- 22 【上田藤古墳群 原田藤遺跡発掘調査報告書】 富岡市教育委員会 1984 本遺跡は鍋川右岸に位置し、河岸より20m、50m程度の河岸段丘が形成され、下位の段丘上に立地する。包蔵地原田藤遺跡内に6世紀後半から末頃の築造になると、上田藤古墳群がある。聖穴住居跡は古墳・奈良平安時代に属する18軒が検出されている。遺跡内より墨書土器1点が出土する。
- 23 【川内遺跡発掘調査報告書】一回版編一 吉井町教育委員会, 1982 本遺跡は鍋川右岸の河岸段丘に位置し、北方約1kmに多胡岡または東方谷地を挟んで瓦・須恵器が伴地された下五反田遺跡が存在する。弥生・奈良平安時代の聖穴住居跡57軒が検出され、墨書土器の出土もある。なお本報告が一回版編のため遺物についての記載がなく図及び写真観察によって記述した。
- 24 【下五反田遺跡発掘調査報告】 国士館大学文学部考古学研究室 1986 本遺跡は1号・2号築跡が調査され
- 25 【株木遺跡】 藤岡市教育委員会 1984 本遺跡は神流川右岸の藤岡台地東端の段丘部に位置する。奈良平安時代の住居跡28軒、掘立柱建物跡4種の他、版築を施し礎石をもつ建物跡が検出されている。平版など鍛冶産灰陶器・帯金具・墨書土器・転用鏡の出土がある。
- 26 大胡町の足軽グラウンド遺跡 須恵器転用鏡(未発表) 大胡町教育委員会 山下直信氏の御教授による。
- 27 井上唯道「鐘割をもつ鈴鐘車」一群馬県における事例を中心として— 古代学研究 115号 古代学研究会 1987

(3) 文字資料について

文字資料については、一般の集落からの出土遺物では、墨書・刻書の類が認められる。これについては、以前、県下の墨書・刻書資料を集成したことがあったが、それに照らして、本遺跡の資料を見てみたい。また、近年、特に群馬県下を中心とする地域で、紡錘車に文字を線刻したものがあり、本遺跡でもそれが認められたので、これについても簡単に触れておきたい。

1. 墨書土器について

「八寸B遺跡」における墨書土器は総数 116点を数える。この数は県内の一遺跡における出土点数からすると最も多い遺跡の一つである。そこで、この資料をまずいくつかの観点から分析してみよう。

まず、器種別でみると、土師器と須恵器の比率は、57:59とほぼ半数ずつである。この率は、県内の趨勢からすると須恵器への墨書の比率が高い傾向にある。このことは、本遺跡が須恵器の供給地の金山丘陵から至近距離にあることと無関係ではありえず、全体の器種でみても須恵器の率が高いと言える。

次に、墨書を施した土器の器形についてみると、すべて杯・碗類に限定されている。この内、碗に墨書したものは7点で、他はすべて杯である。これは特に全果的な傾向と矛盾するものではない。墨書位置についてみると、体部と底部の区別では底部が圧倒的に多いが、全果の傾向より少ない傾向が窺える。しかしこれは本質的なものではなく、同一傾向とみて誤りなからう。むしろ、この中で問題になるのは位置で、外面と内面に分けた場合、外面が圧倒的に多いのは盛器としての性格から当然のことであるが、本遺跡についてみると、内面に墨書する比率がやや高いことである。このことは、前に述べた須恵器の多い傾向と連動するものとみられる。このことは須恵器の場合、土師器よりも内面に墨書する率が極端に高くなる傾向があるからである。特に焼成時における窯の中におけるイブシの及ばない部分が白色に近いことから、意識してそれを選択する。その際、杯類を伏せて焼くため、内面が白色のものが多いことが原因として考えられる。次に、墨書土器を出土する遺構についてみてみよう。まず、同一遺構から複数出土しているものを拾うと、第80表のようである。なお、住居跡数は47軒であり、その内墨書を出土するのは24軒であり、全体の住居跡数に対する墨書を出土する住居跡数の比率は50%である。

また、掘立柱建物跡については19号掘立・37号掘立が、柱穴から複数の墨書土器を出土していることが注目される。

次に、墨書内容についてみてみよう。この釈文については、可能な限り判読し、推定も含めて整理したの

第79表 墨書土器の比率

	八寸B遺跡	全果資料	備 考
器 土師器	57(49.1%)	73.7%	
須恵器	59(50.9%)	26.3%	
器 杯	109(94.0%)	86.5%	
形 碗	7(6.0%)	9.4%	
部 体部	37(31.9%)	23.2%	
分 底部	79(68.1%)	76.8%	
位 外面	99(81.8%)	88.4%	数121は両方にあ
置 内面	22(18.2%)	11.6%	るものを含む。

第80表 墨書土器出土遺構

	遺構番号	遺構数(%)	備 考
1点	2, 17, 24, 25, 26, 30 33, 37, 38, 40, 41, 44	12 (50)	
2-3点	4, 16, 21, 29, 31, 32 43, 47	8 (33)	
4-5点	22, 42	2 (8)	
10点以上	19	1 (4)	

第三章 書上上原之城遺跡

が第81表である。特に「金」・「福」・「布」の多いことが注目される。

2. 墨書内容の集約

第81表にみる「金」については、書体に三通りほどがあるが、読みそのものについては問題無いものと考えられる。一般に言われる人名との関連で考えれば、この「金」は姓であり、金氏存在を裏付けるものであろう。この金氏は、従来の文献に見られる氏族としては比較的多く、その出自をみると、新羅系の渡来人である旨が記録されている。

群馬県に関しては、神功皇后紀以来、数次に互り新羅に上毛野氏が派遣され、攻めている記事や、百済の男女2000人を東国に居住させる（660年）記事などがある。更に、766年には、新羅人子午足ら193人に吉井連姓を与えるなどの記事があり、新羅との関連はかなり濃厚であった可能性が高い。そうした状況下での「金」の19点に及ぶ墨書の出土は注目される。

とりわけ、一つの遺構から複数の「金」が出土していることも、その住居に居住していた人が金氏である可能性を示している。特に19号住居・42号住居は複数出土しており、また、掘立柱建物跡の柱穴からも出土して、金氏が掘立柱建物に居住するような、集落中でもかなり中心的な勢力を保持していた氏族である可能性を示唆している。

その次に多い「布」については、15点が出土している。竪穴住居跡からの出土点数は「金」よりも多い。複数出土しているのは19号住居（4点）・22号住居（2点）があり、共に「金」の字を出土する住居と重複する。この「布」は「金」と同様、人名とみれば、「布世」・「布勢」・「布利」・「布留」・「布師」などがあるが不明である。ただ、以前、佐波郡境町上矢島遺跡でも「布」が集中して出土した例があり、地名の「布知名（瀧名）」との考えを示されたことがあったが、これも、今回の資料の出土で再検討を要することとなる。

「福」については、文献に見える人名では「大唐人・高麗人・漢人・百済臣」等の記述が見られることからすると、これも渡来系の可能性がある。更に、「布勢公足」を「福勢伎美太利」とする書き方もあることからすると、この「福」と「布」とは案外、共通する姓を示す可能性も強い。

その他の文字としては31種ほどあるが、その意味するものは不明である。

これら墨書土器の時的的なものを見ると、8世紀末から11世紀のものまで及んでいるが、その中心となる時期は9世紀である。とりわけ、時期の分かるものの比率で言えば66%が9世紀前半・24%が9世紀後半ということになり、両者を合わせると90%が9世紀に含まれることになるから、墨書の盛行した時期は9世紀であると言える。

第81表 墨書土器対照表

文字	出土遺構	数(%)	総点数
金	2, 16, 19, 22, 42	5	19
	19掘立, 26掘立, 37掘立	(21)	
布	17, 19, 21, 22, 31, 43, 47	7	15
		(29)	
福	24, 25	2	6
		(8)	
その他	4, 26, 29, 30, 32, 33, 37	10	76
	38, 40, 41	(42)	

第82表 時期別墨書土器対照表

時期	点数	%
8世紀末	1	0.9
9世紀前半	46	39.6
9世紀後半	17	14.7
10世紀前半	3	2.6
10世紀後半	2	1.7
11世紀	1	0.9
不明	46	39.6

特に10世紀以降の墨書は傾向性も指摘できないような散らばりをみせるようで、墨書そのものの性格が変化することも考えられる。

次に、墨書からみた遺跡の性格に触れてみたい。各遺構からの出土遺物からみると、この集落は7世紀末には竪穴住居が出現して集落の萌芽が見えはじめるが、集落の北半が中心であったとみられる。

その後8世紀末までは住居も4軒ほどで、殆ど変化なく推移してきたとみられる。

9世紀初め頃になると、13軒ほどの竪穴住居と8棟ほどの掘立柱建物が出現したとみられる。その配置を見ると、今回調査した部分のほぼ中央部分に当たる。その配置は北西部に竪穴住居2軒と掘立柱建物5棟ほどが一群に配され、更に、その南に竪穴住居が6軒ほど主軸を同じにして配される。また、前の掘立柱建物群と広場を隔てて、竪穴住居と掘立柱建物群がある。中央部は空地として広場になっていたものとみられる。しかも、その中の一群は大型の掘立柱建物と総柱の倉庫3棟を背後にもつ配置である。こうした配置は、郷の中心部に当たるものかも知れない。即ち、集落の背後に倉庫群と掘立柱建物群がまとまり、その東に竪穴住居が並び、一部に掘立柱建物をもつ形で、特に中央に広場をもつ形は特異である。

この状況に加えて、墨書土器が、こうした掘立柱建物群とそれを取り巻く竪穴住居跡を中心に出土する。しかも、掘立柱建物跡の柱穴からも墨書土器が出土し、竪穴住居跡と時期的に共存することを立証している。また、倉庫とみられる総柱建物跡が3棟あり、郷長階層と関連する掘立柱建物群とみられる大型建物跡群と近接していることは、この倉庫が徴税と関連し、それを管理する郷長階層の居宅の隣接地に置かれたものであろうか。更に、墨書土器を出土する竪穴住居跡が20m間隔ほどで分散する傾向をみせており、集落中の戸主層の分散状況を推察させる。しかも、墨書に同一文字がかなりまとまって出土する様子は、こうした郷長・戸主層が同族により構成されていた可能性を示している。

また、墨書中に倉庫群の周辺から出土したものに「倉」様の文字が含まれており、この総柱建物が、律令制下において倉庫とし利用されていたことを立証するかも知れない。

いずれにしても、本遺跡は、郷の中心をなす部分であることは疑いなく、そのために有識読字階層が集中して居たため、墨書土器が多量に出土することになったものであろう。更に言えば、渡来系の人達が多く居住していたこともあり、余計多くの墨書土器を出土することになった可能性も指摘できそうであるが、推論の域を出ない。

隣接する部分の墨書土器についても、Ⅱ区13号住居で「金」が出土しており、本遺跡との関連がみられる。また、「鉄」は「匠」であるが、これと同じものが区31号住居でも出土しており、同一住居内に居住する親族の範囲を示すものであろうか。

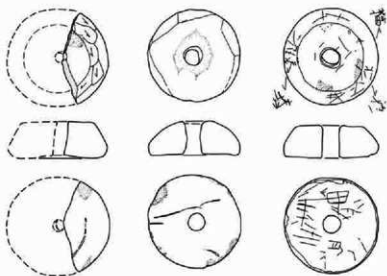
3. 線刻紡錘車について

群馬県内で既に30点を越す線刻紡錘車が発見されているが、書上上原之城遺跡・上植木宅町田遺跡でも出土した。書上上原之城遺跡では43号住居からの出土で、滑石製。断面が偏平台形で、径5.1cm・厚さ1.7cm。側面及び下面に文字様のものが見受けられるが、その中の二つで、側面の「福」・「美」が読み取れそうである。彫りが浅く、時期的には9世紀後半のものと思われる土器と共伴する。特に、「福」の字については、墨書中にも6点もの「福」があり、それとの関連が目される。

上植木宅町田遺跡の事例は、断面が台形で、滑石製。径3.6cm・厚さ1.7cm。文字様のものも見られるが判然としない。

この二つの例を他の県内の出土事例で補うと、殆どが人名とかかわるものであることからすれば、書上上原之城遺跡の「福・美」は吉祥的な内容を示すとも考えられない。むしろ、墨書との関連でみれば、やはり人名とみる方が妥当とも受けとめられる。この線刻の意図については、調・庸との関連で、織物を割り当てられた郷土階層が、それを記念して文字を彫ったか、または、調・庸に供する道具の指定で線刻を行ったのではないかとする試論を述べた。([古代学研究115])

いずれにしても、たくさんの文字資料を出す背景については、より広範な立場での分析と文献資料の対比・近隣遺跡との比較検討を要しよう。(井上)



第216図 紡錘車実測図

(第46図) 墨書土器一覽

No	遺構	器種別	器形別	墨書部位	墨書内容		時期	備考
					墨書	积文		
1	13住	須惠	杯	体部外面	珠	姪	9C中	46-3
2	13住	須惠	杯	体部外面		金		46-5
3	13住	土師	杯	体部外面		?		46-6
4	13住	土師	杯	体部外面		?		46-7
5	13住	土師	杯	体部外面		?		46-8
6	13住	土師	杯	体部外面		?		46-9
7	13住	土師	杯	体部外面		?		46-10
8	13住	土師	杯	体部外面		?		46-11

(第56図)

No	遺構	器種別	器形別	墨書部位	墨書内容		時期	備考
					墨書	积文		
5		土師	杯	体部内面	大	?		破片
6		須惠	杯	体部外面		?		破片
7		土師	杯	体部内面		?		破片

(第200図)

No	遺構	器種別	器形別	墨書部位	墨書内容		時期	備考
					墨書	积文		
1	26掘立	土師	杯	底部外面		金	9C後	破片
2		土師	杯	底部外面		金	6C	
3		土師	杯	底部外面		?	9C前	
4	37掘立	土師	杯	底部外面		?		
5	23掘立	土師	杯	体部外面		?		
6	14掘立	土師	杯	底部外面		?		
7		須惠	杯	体部外面		福	9C(前)	
8	37掘立	須惠	杯	底部外面		金	9C前	
9	37掘立	須惠	杯	底部外面		金	9C前	
10		須惠	碗	体部外面			10C前	
11		須惠	杯	体部外面		?	9C(前)	
12		須惠	杯	体部外面		?	10C後	
13	27掘立	須惠	杯	底部外面				
14		須惠	碗	底部内面		子	10C後	

(第201図)

No	遺構	器種別	器形別	墨書部位	墨書内容		時期	備考
					墨書	积文		
15	29掘立	須惠	杯	底部外面		?	9C前	破片
16	36掘立	須惠	杯	底部外面		□奥		
17	風倒木	須惠	杯	底部外面		石人?	9C前	
18		須惠	杯	底部内面		?	9C前	
19		須惠	杯	底部外面		?	9C前	
20		須惠	碗	底部外面		?	9C前	
21		須惠	杯	底部内面		乙?	9C後	
22	29掘立	土師	杯	底部外面		金?		
23	37掘立	土師	杯	底部外面		金		
24	19掘立	土師	杯	底部外面		金		
25		土師	杯	底部内面		金		
26	19掘立	土師	杯	体部外面		金		
27		土師	杯	底部外面		川?		
28		土師	杯	底部内面		(布)		
29		土師	杯	底部外面		?		
30		土師	杯	底部外面		?		
31		土師	杯	底部外面		布		
32		土師	杯	底部外面		布		
33	表採	土師	杯	体部外面		?		
34	14溝	土師	杯	体部外面		?		
35	表採	土師	杯	体部外面		?		
36	表採	土師	杯	体部内面		?		
37		土師	杯	底部外面		?		
38		土師	杯	体部外面		?		
39		須惠	杯	底部外面		?	9C前	

(第202図)

No	遺構	器種別	器形別	墨書部位	墨書内容		時期	備考
					墨書	积文		
40		須惠	杯	体部内面		?	10C前	破片
41		須惠	杯	体部内面		福		
42		須惠	杯	体部内面		?		
43		須惠	杯	底部外面		?		
44		須惠	杯	底部内面		?		
45		須惠	杯	底部外面		?		

46		須惠	杯	体部外面		福		破片
47		須惠	杯	体部外面		福		破片
48		須惠	杯	体部外面		?		破片
49		須惠	杯	底部外面		?		破片
50		須惠	杯	底部内面		金		破片
51		須惠	碗	底部内面		?		破片
52		須惠	杯	底部外面		(布)		破片
53	40掘立	須惠	杯	底部外面		?		
54		須惠	杯	底部外面		?		
55		須惠	杯	体部外面		?	9C前	
56		須惠	碗	体部外面		?	9C後	
57		須惠	杯	体部外面		?		
58		須惠	杯	体部外面		?		
59		土師	杯	底部外面		?		
60		土師	杯	底部外面		?		
61		土師	杯	体部外面		?		

No	遺構	器種別	器形別	墨書部位	墨書	积文	時期	備考
1	2住	土師	杯	体部外面		金	8C末	混入? 64-18
2	4住	須惠	杯	体部外面		国	9C後	69-4
3	4住	須惠	杯	底部内面		止	9C後	破片 69-5
4	16住	須惠	杯	体部外面		金	9C後	89-9
5	16住	須惠	杯	体部外面		?	9C後	破片 89-10
6	16住	土師	杯	底部外面		?	9C後	破片 89-15
7	17住	土師	杯	底部外面		布	9C後	破片 91-7
8	19住	土師	杯	底部外面		布	9C前	96-13
9	19住	土師	杯	底部外面		布	9C前	96-14
10	19住	土師	杯	底部外面		布	9C前	96-15
11	19住	土師	杯	底部外面		金	9C前	96-16
12	19住	土師	杯	底部外面		?	9C前	96-17
13	19住	須惠	杯	体部外面		乙	9C前	96-18
14	19住	須惠	杯	底部外面		金?	9C前	96-19
15	19住	須惠	杯	体部外面		人?	9C前	96-20
16	19住	土師	杯	底部内面		人?	9C前	96-21
17	19住	土師	杯	底部外面		布	9C前	破片 96-22
18	19住	土師	杯	底部外面		?	9C前	96-23
19	19住	土師	杯	体部外面		布?	9C前	破片 96-24

20	19住	土師	杯	底部外面		?	9C前	破片 96-25
21	19住	土師	杯	体部外面		?	9C前	破片 96-26
22	19住	須惠	杯	底部外面		?	9C前	破片 96-27
23	21住	須惠	杯	底部外面		布	100-4	
24	21住	土師	杯	底部外面		?	9C前	破片 100-5
25	21住	須惠	杯	体部外面		?	9C前	破片 100-6
26	22住	須惠	杯	底部内面		?	9C前	102-11
27	22住	土師	杯	底部外面		金?	9C前	破片 102-12
28	22住	土師	杯	底部外面		布	9C前	破片 102-13
29	22住	土師	杯	底部外面		布?	9C前	破片 102-14
30	24住	須惠	碗	体部外面		福	9C前	105-6
31	25住	土師	杯	底部外面		福	9C(後)	107-3
32	26住	須惠	杯	体部外面		七	11C前	破片 109-8
33	29住	土師	杯	底部外面		矢	9C前	破片 113-1
34	29住	土師	杯	底部外面		奥?	9C前	破片 113-2
35	29住	土師	杯	底部外面		集	9C前	破片 113-3
36	30住	土師	杯	底部外面		?	9C前	116-1
37	31住	土師	杯	底部外面		布	9C後	117-12
38	31住	須惠	杯	底部外面		妖(姪)	9C後	117-17
39	32住	土師	杯	底部外面		?	9C前	破片 119-2
40	32住	土師	杯	底部外面		四十	9C前	119-3
41	33住	土師	杯	底部外面		本?	9C前	破片 121-4
42	37住	須惠	杯	体部外面		?	9C後	破片 130-4
43	38住	須惠	杯	体部外面		平?	9C前	132-4
44	40住	須惠	杯	底部内面		川	9C後	136-2
45	41住	須惠	杯	底部内面		?	9C後	破片 138-3
46	42住	須惠	杯	底部外面		金	9C前	140-3
47	42住	須惠	杯	底部外面		金	9C前	破片 140-4
48	42住	須惠	杯	底部外面		金	9C前	破片 140-5
49	42住	土師	杯	底部内面		金	9C前	破片 140-6
50	43住	土師	杯	底部外面		布	9C後	破片 142-5
51	43住	須惠	杯	底部外面		?	9C後	破片 142-6
52	44住	須惠	杯	体部外面		林	10C前	破片 144-3
53	47住	土師	杯	底部外面		吉		破片 148-1
54	47住	土師	杯	底部外面		布		破片 148-2

(4) 八稜鏡の出土とその意味



第217図 八稜鏡出土位置図

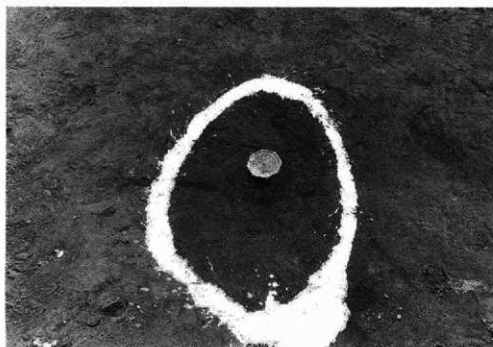
① 出土状態

書上上原之城道跡の調査範囲の北西部の浅いピットより八稜鏡が出土した。位置は、8～10号の各竪穴住居跡に囲まれたピット群にあたっている（第217図）このピット群は、北東側に大きな攪乱が存在するため、図のような考察線は引けるものついに掘立柱建物跡としてまとめることができなかったものである。

八稜鏡は、第217図に示した位置で遺構確認作業の際に、ピットの埋土内より鏡背面を上にして検出された。（写真1）しかしその後このピットを掘り下げたところ、図示しないほど極めて浅い状態で底に至ってしまった。そのため図に現われた掘立柱建物の柱穴と考えられるピットとは、性格を異にするものと思われる。

以上によりこの銅鏡は掘立柱建物内部に遺棄されていた、と推定することができる。

写真1
八稜鏡出土状態
周囲の白線は、
ピットの確認線



第三章 書上上原之城遺跡

この建物の年代については、直接的な他の共伴遺物を抽出しえないことにより、明確にはしがたい。しかし周辺の10×14mの範囲のグリッド取り上げ遺物(これらの中には各ピットの埋土中のものが含まれている)を検討したところ、次のような結果が得られた。

種類	器種	破片総数	口縁破片小計	8C	9C	10C	11C	時期不明
土師器	甕	392	48	16	—	—	—	32
+	椀 杯	89	47	36	7	—	4	—
須恵器	椀 杯	43	39	15	10	14	—	—
合計		524	134(100%)	67(50%)	17(13%)	14(10%)	4(3%)	32(24%)

なお周辺の竪穴住居の年代は、9世紀8・10号住、10世紀9号住と考えられる。そのため、ピット群の建物には、8世紀のものが多いが、11世紀代のもも少し含まれる、との推定ができる。本銅鏡は、8世紀の産とは考えられないため、11世紀代前後の掘立柱建物の遺物と思われる。

② 鏡面の観察

本鏡は、径7.7cm、縁厚0.3cm、鈕厚0.5cm、重量約68gを測る青銅鏡である。外形は八稜形を呈し、鏡面は平面、そして広瀬都巽の分類に従えば、縁は薄鋳式彫削低縁、界隈は円形段圍、鈕は花形座／花芯座で鏡頭円錐形の鈕である。(第218図)

サビの付着は極めて少なく、破損も見られない完器である。鑄造は比較的良好で、鏡背文様も肉厚で、内区を中心到手ずれ使用痕の光沢が一部に見られるが、文様は明瞭に見ることができる。そして特徴的なこととして鑄造後に、縁部の内外面及び鈕頂に綿密な研磨を行なっている。この研磨のために縁部の各稜線はいずれも鋭く、特に外端部は両面研磨で利器の状態に近く、全体に質感を高まらせている。

鏡背文様は、外区に飛雲文、内区に瑞花双鳥文を配している。飛雲文は、3個1組となり八稜に対する形で配されているが、1箇所だけ2個1組になっている。またそれぞれが2筋以上に細かく表現されているものと、全く簡略なものととのばらつきが見られる。内区は、鈕座の外側に忍冬状唐草とも考えられる左右に花を下げる瑞花を一方に配し、その間に花喰的な感じで外向き左方向の飛鳥を一對並べている。

管見の範囲では本鏡と全く同文のものは他には見出せなかったが、部分的な類似は次のようなものがある。

- 飛雲文 1. 個人蔵唐草双鳳八稜鏡¹ 2. 個人蔵草花八稜鏡² 3. 男体山山頂出土瑞花双鳳八稜鏡³
 4. 赤城山小沼出土唐草八稜鏡⁴
 瑞花文 5. 京都阿弥陀寺藏花喰鳳凰八稜鏡⁵ 6. 貫前神社藏瑞花双鳳八稜鏡⁶ 7. 赤城山小沼出土唐草八稜鏡⁷
 8. 韓国国立中央博物館藏高麗羅伝書文八稜鏡⁸ 9. 同二風二獸文八稜鏡⁹
 鈕 座 10. 個人蔵永延2(988)年銘瑞花双鳳八稜鏡¹⁰

飛雲文は、3・4・5とはほぼ同時期、双鳥文は6・8・9の意匠と5が組み合わせられて7のようなものになり、その延長線上にあるものと思われる。瑞花文については、類似例を見出せなかった。本鏡の製作年代



第218図 書上上原之城遺跡出土八稜鏡

は、10より後出であり、瑞花双鳥文系八稜鏡の下限が12世紀中葉と考えられることから、11世紀から12世紀前半の間にはいると思われる。

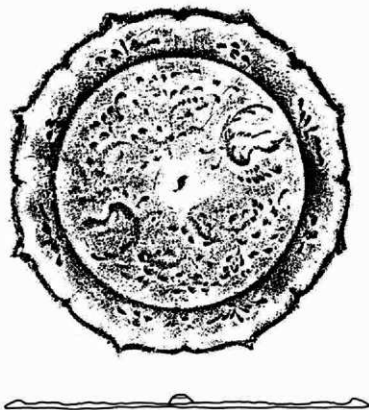
③ 県内出土の八稜鏡

群馬県内出土及び伝世の八稜鏡は、次のものがある。

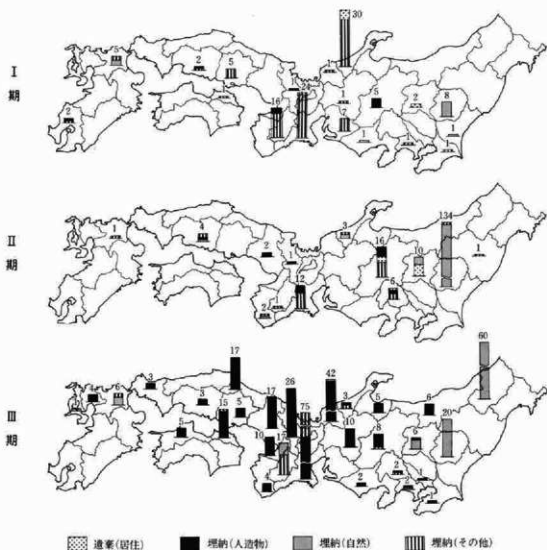
[出土鏡]		出土遺構	鏡背文様	状態	径cm	伴出遺物時期	備考
1.	富岡市本宿遺跡 ¹⁵	壑穴住居	不明	写	径 8.5	11世紀前半	
2.	同上	耕作土層	*	写	径 8.8		
3.	群馬町烏羽遺跡 ¹⁶	壑穴住居	草花文	完存	7.7		
4.	同上	*	唐花文?	小片	15以上	10世紀後半	船載鏡?
5.	高崎市正観寺遺跡 ¹⁷	*	草花文	写	径11.2	11世紀前半	
6.	* 天田・川俣遺跡 ¹⁸	*	瑞花双鳥文	完存	10.2	11世紀前半	
7.	前橋市赤城山山頂小沼 ¹⁹	山頂池	唐草文	完存	6.9		
8.	同上 ¹⁹	*	唐草双鳥文	完存	11.3		
9.	同上 ²⁰	*	瑞花双鳥文	写	不明		
10.	同上 ²⁰	*	瑞花唐草文	完存	不明		
[伝世鏡]		伝世地	鏡背文様	状態	径cm	備考	
11.	宮城村三夜沢赤城神社 ²¹		瑞花双鳥文	完存	9.1		
12.	前橋市産金神社 ²²		*	*	17.6		
13.	* 二之宮町個人		*	*	9.8	第219図	
14.	富岡市貫前神社 ²³		*	*	14.2		
15.	同上 ²⁴		*	*	15.5		
16.	同上 ²⁵		*	*	11.5		
17.	鬼石町鏡守神社 ²⁶		唐花双鳥文	*	10.4		
18.	上野村野葉神社 ²⁶		瑞花双鳥文	*	9.0		
19.	個人 ²⁷		*	*	10.7		

以上のうち13は、下境秀雄氏所蔵の未発表資料で第219図のように三角縁・緩斜へ字圏・素文座鈕を呈する。径9.8cm、縁厚0.2cm・重量61gを測り、縁部には手ずれと磨耗痕がかなりある。文様もやや肉薄で摩滅が見られる。踏み返し鑄造と思われる。

本遺跡例を含めれば、出土鏡は6遺跡11面、伝世鏡は7箇所9面になる。出土鏡は、赤城山小沼例以外の7面が壑穴住居と本例の掘立柱建物の出土である点に特徴がある。また伝世鏡を含めれば、国府周辺²⁸(3~6)、県西部地域(1・2、14~18)、赤城山周辺(7~12及び本例)と三箇所の分布域が想定できる。



第219図 下境秀雄氏所蔵八稜鏡



第220図 県別の出土鏡面数

④ 全国の奈良・平安時代の鏡蓋の出土状態

管見の範囲で伝世鏡以外の全国の奈良・平安時代の出土鏡は、684面が知られる。これらをその出土状態により区分すると次の4種に大別できる。

- A 埋納
- 1 自然対象への埋納 (山頂・池)
 - 2 人造対象への埋納 (寺院・仏像・経塚・墳墓)
 - 3 その他の対象への埋納 (狹義の祭祀遺跡)
- B 遺棄
- 居住空間への遺棄 (竪穴住居・掘立柱建物)

次に鏡の種類及び時期による区分を便宜的に次のように考える。

- I期 唐式鏡 (船載鏡もしくはその踏み返し鏡)・素文鏡 8～10世紀
- II期 和鏡 (八稜鏡) 10世紀後半～12世紀前半
- III期 〃 (非八稜鏡) 11世紀後半～12世紀後半

第3節 まとめ

I期は、北部九州から瀬戸内沿岸そして畿内に点々と分布があるが、それにもまして石川・三重での大量の面数と東山道ルートでの広がり特徴がある。この時期の出土状態は、73%が狭義の祭祀遺跡(A3)への埋納である。代表例としては、石川県の寺家遺跡³⁷の堅穴以外の23面、三重県の八代神社遺跡³³の23面、平城京道路側溝³⁴の10面などがある。なお伝世鏡の可能性もあるが、日光男体山山頂³⁵にはすでに漢式鏡1面と唐式鏡7面が埋納されている。この時期の総面数は114面である。

II期は、極めて特異な分布が見られる。I期に引き続き北部九州・瀬戸内そして石川・三重にも散見するが、この時期の鏡数193面の実に69%にあたる133面が男体山山頂のみで出土している。そして群馬・長野・山梨の中部山岳地域を併せれば、八稜鏡前出土の85%にまで達する。当然出土状態は、自然対象への埋納(A1)が全体の73%を占めており、男体山以外は、赤城山小沼³⁶4面、石川県白山山頂³⁷2面などとなる。他にやまとまった出土としては、八代神社遺跡の8面と長野県阿弥陀堂遺跡³⁸の溝内出土の4面がある。

III期は、出土鏡面数が爆発的に増え377面になり、これに連れて分布も東北北部と九州中南部を除いて全国的に広がる傾向になる。これは、経塚埋納の普及が大きな要素になっており、経塚を中心とする非自然対象への埋納(A2)が全体の60%になっている。経塚の出土鏡としては、三重県多度神社経塚³⁹の29面を筆頭に、福井県深山寺経塚⁴⁰の28面などがあり、5面以上の非八稜鏡を埋納した経塚は全国に14遺跡もある。その一方、II期に連なる自然対象への埋納は、山形県の羽黒山鏡⁴¹が池の60面を第一として、男体山の20面、奈良県金峯山の7面などと依然として続いている。

以上まとめれば、唐式鏡は狭義の祭祀遺跡への埋納、和鏡の八稜鏡は自然対象への埋納、和鏡の非八稜鏡は経塚への埋納というような出土状態の大勢があることになる。なお、ここで対象とした前記684面中の42%にあたる286面が、東山道地域で発見されたことは注目に値するだろう。

⑤ 遺棄された鏡

本報告の瑞花及鳥文八稜鏡は、前述のように掘立建物内部で発見されたものである。そして堅穴住居内で住居に伴うものとして出土したものを含めて、遺棄された鏡として考えてみる。これは、土器などの遺物がそれらの遺構より検出されるのと同じ意味である。このような例は、次のように19面があり、684面中の僅か3%に過ぎず、また地域的にも偏っている。

時期	遺跡名	遺構	出土鏡	出土状態	伴出遺物	年代
I	1 石川県羽咋市寺家遺跡 ³⁷	16号堅穴	海歌菊菊鏡1	堅穴燻染後埋納	土器・鉄器	8C前
	2 同上	21号堅穴	素文鏡1	＊	＊	8C前
	3 同上	24号堅穴	海歌菊菊鏡1	＊	＊	8C前
	4 同上	26号堅穴	素文鏡1	＊	同上・不明金銅製品	＊
	5 石川県金沢市戸永C遺跡 ⁴³	5号竪立	唐式円鏡片	周 辺	緑釉・灰釉	9・10C
	6 三重県明和町富吉跡 ⁴⁴		小型銅鏡1			平安前
	7 群馬県榛東村別分八幡遺跡 ⁴⁵	2区5号住	小型銅鏡1	床面近く	土器	9C前
	8 千葉県千葉市文六第2遺跡 ⁴⁶	A005号住	狹梨及繁鏡1	床面近く		平安中
	9 群馬県群馬町鳥羽遺跡 ⁴⁸	38号住	唐花八稜鏡?片	床面直上	土器	10C後
II	10 同上	1・3号住	草花?八稜鏡1	床面近く	＊	＊
	11 ＊ 高崎市正観寺遺跡 ⁴⁷	72号住	草花八稜鏡1	床面直上	＊・鉄製帯金具・鎌・鏡	11C後
	12 ＊ ＊ 天沼川押遺跡 ⁴⁹	72号住	瑞花及鳥八稜鏡1	床面直上	＊	11C前
	13 ＊ 富岡市本宿遺跡 ⁵⁰	127号住	八稜鏡片	覆 土	＊	11C
	14 山形県柳町二の宮遺跡 ⁴⁷	堅穴住居	八稜鏡1	＊	＊	11C
	15 長野県茅野市判ノ木山西遺跡 ⁴⁸	14号住	八稜鏡片2	＊	＊・灰釉・鉄製帯・鎌	平安後
	16 ＊ 栄村桑落遺跡 ⁴⁹	堅穴住居	瑞花及鳥八稜鏡1	床面上	＊・＊ 鉄條 ＊	平安後
	17 ＊ 長野市浅川西条遺跡 ⁵⁰		銅代草鳥鏡1			平安
	18 福島県郡山市馬場中路遺跡 ⁵¹	4号住	瑞花及鳥八稜鏡1	ビツト中		11C初

以上とそして本報告例以外に、長野県の木曾福島町二本木遺跡・奈川村ミドウ原遺跡・佐久町藤見沢遺跡⁵²の各八稜鏡出土遺構も堅穴住居の可能性がありますが、詳細不明のためここでは除外する。

第三章 書上上原之城遺跡

まず注目されるのは、6・8・17を除いてすべて中部山岳地方とその周辺にあることである。もちろん、西日本地域での堅穴住居の早い消滅や掘立柱建物への遺物の帰属の問題などはあるが、それにしてもこの地域でのこのような出土状態が多いのは事実である。

遺跡の性格を考えると、これらは次のように区分できる。

A 有力神社の近傍遺跡 1~4 (気多神社) 6 (伊勢神宮) 13 (貫前神社) 14 (美相神社)

B 国府の近傍遺跡 9・10 (上野国府) 11 (同左)⁵³ 12 (同左) 14 (甲斐国府)

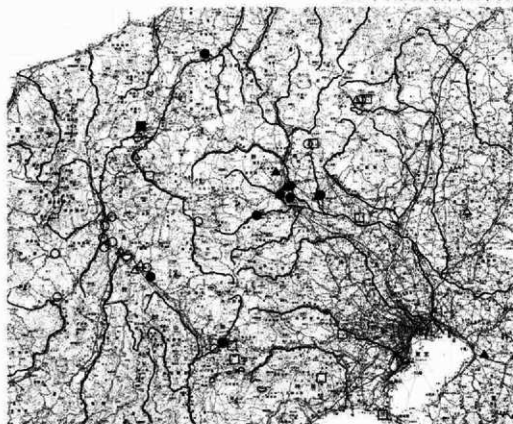
以上の遺跡出土鏡は、それぞれの神社・国府との関係で考えるのが、もっとも理解しやすい。5は報告では、大型の掘立柱建物群を中心とした「一般集落とは大きく異なる性格」であることを強調している。長野県の3例は単純には考えにくい。15は諏訪大社上社から約10kmの路離であり、17は山岳信仰の飯縄山頂から約8kmの地点に位置する。16は、報告では「運輸交通業者としても大きな役割を果たした」「山中流浪の山の民」の遺跡としている。交通路の要素は、神社・国府・山岳信仰のいずれとも結び付くことには、注意せねばならない。また鉄器特に鐵の共伴例が3遺跡あることも示唆的である。

それでは、遺棄の意味は何であろうか。高価な品であり信仰的価値の大きい鏡を、どうして居住地内に残し去ってしまったのか。今のところ、天災・兵火などの突発的事態のためという他の答えはない。ただ、これらの鏡は日常的な携行品ではなく、また所持者/家族にとって他者には託しがたい品である、と類推することはできる。

本遺跡出土鏡は、日光男体山信仰からの影響で生れた赤城山小沼もしくは二之宮赤城神社⁵⁴への納鏡を企図して護持されていたものが、突発的事態のために遺棄された。と考えるのが妥当であろう。

(本稿の執筆には、総貫邦男氏及び菊池誠一氏御教示によるところが大きく、ここに謝意を記したい。)

1987年1月10日執筆。88年2月27日一部加筆。⁵⁵



第221図
関東甲信越
地方出土鏡
分布図

- ▲ 遺棄鏡 I期
- 遺棄鏡 II期
- 遺棄鏡 III期
- △ 埋納鏡 I期
- 埋納鏡 II期
- 埋納鏡 III期

第3節 まとめ

- 1 11世紀以降の遺物を特定することは、本県地域の土器編年の中では必ずしも確定はしていない。層位的には、1102（天仁1）年と推定される浅間8群石の有無が問題になるが、これらのピット群は、その点も調査所見には表わせなかった。従って編年上のこの年代観は、あくまで推定である。
- 2 広瀬郡史、「和紙の研究」、角川書店、1974。
- 3 広瀬 前掲書 熱田神宮、「特別展 日本の説」、1980 群馬県立歴史博物館、「群馬の古鏡」、1980 福井県立博物館、「古鏡の美 出土鏡を中心に」、1986 など。
- 4 広瀬 前掲書9)、8組のうち4組が軀形。径10.6cm、重量137g。
- 5 広瀬 前掲書38)、かなり類似。径9.1cm、重量75g
- 6 福井県博 前掲書 29-11、ほぼ同様。径8.6cm。
- 7 群馬県博 前掲書 85、ほぼ同様。径6.9cm。
- 8 広瀬 前掲書7)、図風文であり、鳳凰の形態はかなり異なるが、花境鳥文の複製と考えられる。径11.5cm、重量231g。
- 9 群馬県博 前掲書 89、飛鳳形態や似る。径11.5cm。
- 10 大塚啓雄、「神道考古学講座」5、星山房、1972、第14頁左上。飛鳳形態は左方向花境状で直径は近い。径不明。
- 11 群馬県神文化研究院、「群馬県銅鏡」、1983、89-1。右方向飛鳳四羽。飛鳥形態や似る。径14.6cm。
- 12 同上 100-1。右方向飛鳳四羽。径15.2cm、開城付近出土。
- 13 広瀬 前掲書38)、かなり類似。最古の紀年銅鏡。径11.2cm、重量173g。
- 14 広瀬 前掲書 和紙年表による。
- 15 宮岡市教育委員会、「本宿・郷土遺跡」、1981。この遺跡は、真前神社の古墳地。
- 16 群馬県歴史文化財調査事業団「年報1」、1982及び同、「鳥羽遺跡G H 1区」、1986。3と4はそれぞれ全く別の位置の型欠けより出土。この遺跡は、国府の古墳地。
- 17 高崎市教育委員会、「正統寺遺跡群(昔)」、1981。
- 18 同上「天田・川神遺跡」、1983。
- 19 群馬県博 前掲書 86。
- 20 大塚啓雄 前掲書 第14頁左下。
- 21 群馬県博 前掲書 無番。
- 22 同上 90。
- 23 同上 88。
- 24 同上 87。
- 25 同上 91。
- 26 同上 92。
- 27 同上 93。
- 28 鳥取県倉吉市の首青岡行跡より磁化鳥文鳥八段鏡(径11.4cm)の複製が出土していることは示唆的である。
- 29 2と3と同じ文鏡及び「磐城郡保田遺物出土地名表」、「国立歴史民俗博物館研究報告」7、1980より集成した数に本例を加えた。但し三重県八代神社出土土鏡は、和紙のうち八段鏡を除いた33面をすべて目録中に含めたが、これには鎌倉以降のものも混じっている。実際にはまだ漏れていると思われる。なおここでは、和紙の八段鏡とは異なるためこのような時期設定にした。本稿執筆後、16面の出土鏡を確認した。内訳は、1期人造物鏡2(涼部)、2期遺棄2(長野・群馬)、3期人造物鏡3(長野・千葉・福岡)、4期その他鏡1(大塚・滋賀)、5期人造物鏡4(千葉・滋賀)、6期その他鏡1(滋賀)である。竜巻鏡一、「平安時代の集落遺跡出土鏡の性格―東日本出土例を中心に―」、「物質文化」49、1987による。
- 30 鏡はそれ自体で歴史遺物とされており、広瀬には全てが歴史遺物と見なしている。そのためここでは区別して考えた。
- 31 広瀬 前掲書 和紙年表及び、前田洋子、「和紙の流通」、「考古学ジャーナル」185、1981によれば、磁化鳥文系の八段鏡の紀年銘は、永延2(988)一仁平4(1154)年であり、非八段鏡の現存は享保4(1077)年である。
- 32 石川県歴史文化財センター、「寺家遺跡発掘調査報告1」、1986、「羽市寺家遺跡の検討」、「古代を考える」29、1981。
- 33 歴史 前掲書。
- 34 金子初之、「平城京と都」、歴史 前掲書。
- 35 大塚啓雄 前掲書。
- 36 同上
- 37 福井県博 前掲書。
- 38 茅野市教育委員会、「横井・阿弥史遺跡」、1983。この内3面は、溝埋没土中で重なって置かれた状態で出土。
- 39 福井県博 前掲書 及び熱田神宮 前掲書。
- 40 福井県博 前掲書。
- 41 大塚啓雄 前掲書。鏡が強への埋納鏡はこの後も盛行し江戸時代まで総数600面以上になるといわれている。
- 42 広瀬 前掲書。
- 43 石川県教育委員会、「金沢市戸水C遺跡」、1983。
- 44 三重県考古学調査事務所、「史跡吉野宮跡発掘調査報告」、1983。
- 45 榊原史教育委員会、「別分八幡下遺跡 甲野田遺跡」、1987。
- 46 石橋一忠、「千重文六第2遺跡出土の銅鏡について」、「貝塚博物館紀要」、千重文加曾貝塚博物館、1984。
- 47 歴史 前掲書。
- 48 長野県教育委員会、「長野県中央遺跡文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野市・原村 その3―」、1981。
- 49 榊原史、「平安期に見られる山地区住民の遺跡」、「信濃」20-4、1968。
- 50 長野県教育委員会、「浅川・西条」、1980。
- 51 福島県郡山市教育委員会、「郡山東部墓」、1983、筆者未見。
- 52 榊原史 前掲書 及び「長野県史 考古資料編 遺跡地名表」、1981。榊原氏は、兼落遺跡を含めてこれら4例を赤井原民居址である山道遺跡としている。しかし群馬県西道郡報告書(48)は、それに疑問を呈している。その後の確認で、京都府長岡京市長岡京跡の堀立方から四仙輪紋文八段鏡(8世紀末)、長野県上伊那郡原宿町大原第2遺跡の1号土層土から八段鏡(10-11世紀)、高崎市下大塚遺跡の型欠け居から磁化鳥文鳥八段鏡(平安後期)が出土していることが分かった。(竜巻鏡一 前掲書による)
- 53 天田・川神遺跡から上野町埋定地までは、直径6cmであるが、表裏基準線と考えられる凹行から直線的に南下する「国府道」に沿っている。
- 54 2之宮赤城神社(前掲書二之宮町)は、三宮赤城神社(勢多郡宮城村)と並ぶ赤城山信仰の中心地の一つで、本遺跡からは直線距離6kmであり、この直線は埋定地山道の遺跡に近接する。
- 55 執筆後、一年間さらにも多くの新資料の存在を確認し、また無形出土鏡の性格に細かく検討を加えた地域誌一氏の論考(2009年)が発表された。ここでは、基礎的な追加資料を付記することでの、同氏の考え方については別の機会に論じたい。なおこの論考の中の1編-6-2での本遺跡出土鏡としたものは、下塚青島式銅鏡の誤りである。

(5) 土器の分類と集落の変遷について

1. 書上原之城遺跡出土土器について

本遺跡には、奈良～平安時代の集落の姿相がまとまった形で残されている。ここでは、この集落跡の構造や変遷を分析するための時間軸として、本遺跡で検出された土器群を用いた時期区分を試みた。

本遺跡では、単独で検出された遺構が大部分であるため、一括遺物の抽出は比較的容易であるが、遺構の重複が少ないため、遺物相互の新旧関係を検索する手段を欠く。従って、ここでは土師器杯・甕、須恵器杯・碗といった、主要構成器種それぞれの変遷観をもとに序列を与え、同時性を示す一括資料との合理性を図って各段階設定を行い、これを時間軸にそのまま置き換えている。これは本遺跡出土土器のみによる変遷観であるため、各段階の持つ時間幅は均等ではなく、間断する時期等の存在も十分考えられる。また、段階設定された土器群の把握についても、普遍性の抽出による型式概念規定は行っておらず、本遺跡における特殊性を帯びたまま、現象として一括資料を提示したに過ぎない。従って、ここに示す土器の変遷観は、一定の地域性を持つ型式編年としては昇化しておらず、あくまでも本遺跡の集落構造把握のための時間的序列を与える目安として用いることを付記しておきたい。

以上の考え方と方法に基づき、ここでは、奈良～平安時代の土器群を1～10期に段階区分を行った。以下に、その代表的な器形を掲げ、概要を述べる。

1期 土師器杯は、底全体に寛削りを施し、口縁が短く内傾ぎみに屈曲するもので、口径は12cm前後にまとまる。口唇が丸みを持つことから、初源形態のものより新しい段階と考えられる。14号住居では、これに鬼高式の系統を引く外反口縁の杯が伴っている。また、口径20cmの碗が見られるが、形態は杯に類似しており、同一器種による法量変化を示すものとも考えられる。甕は、全形を知るものが無いが、口縁が大きく開き、器壁の比較的厚い長胴の形態をとると考えられる。底部は、粘土の圧延による整形であり、体部全体を縦～斜め方向の寛削りを行うものが多い。

2期 土師器杯は、前段階より口縁がやや幅広く、直立あるいは外傾ぎみに変化し、器高の浅いものが増える。口径は10cm・12cm・14cm大とほぼ3法量が見られる。1期で見られた古式の杯は見られず、代わって口径が15cm大で口縁が大きく折れて外半する皿状の杯が現れる。これは、胎土や技法の違いから鬼高式とは無縁の新器形であると考えたい。甕は長胴で肩の張りが少なく器壁が比較的厚いものである。口縁は、「く」字状に外反し、口唇はツマミナデによって弱く内側に屈曲する。頸部は横方向に厚く寛削りを行うため、小さな段を残すものが多い。共存する須恵器は、蓋・杯・高台付碗・播鉢・壺等で、蓋は退化したカエリを残し、環状と偏平な擬宝珠状のつまみを持つものがある。杯は口径15～16cmで、底部に全面回転寛削りを行う。

3期 土師器杯は、口縁が直立するものと外反するものがあり、いずれも曲線的に立ち上がる。この頃より、口縁・体部・底部の分離が始まるらしい。口径が13cmと16cm大の2法量が見られる。また、34号住居跡からは金属輪の模倣形態と思われる丁寧な寛削りを施した碗が伴出しており注目される。甕は口縁が曲線的な「く」字状で、肩が張る胴の短い形態に変化する。胴の寛削りは、肩を横、中位以下を縦方向に行うものが定形化する。器壁は、全体的に同じ厚さで薄く作られており、前段階から大きく技法的転換を遂げたことを窺わせる。須恵器杯は、口径13～14cmで、器形は前段階とほぼ同じであるが、底部を糸切り離し後周縁回転寛削りを行う。蓋は、カエリが消滅し、つまみは大型化した環状のものと、偏平化の進んだ擬宝珠状のものが見られる。

4期 土師器杯は、口縁・体・底部の分離が明確化し、体部は指押さえのみで寛削りを行わないものが現れる。口径は12～14cmに収まり、前段階までの法量変化は見られない。甕は前段階のものを継承し、口縁が直

立して中位で屈曲する形態が多くなる。須恵器杯は口径12~14cm大で、底部を回転糸切り離した後、周縁回転施削を行う。この頃より、墨書土器の急激な増加が窺われる。

5期 土師器杯は口縁が外反し、丸みを持つ短い体部とやや丸みを持つ平底へと変化する。甕は口縁がいわゆる「コ」字状を呈するが、まだ定形化されておらず、屈曲や外反度にバラエティが見られる。須恵器杯はやや内湾ぎみに開くもので、底は糸切り離しのままが多くなる。新器種として、器高の高い高台付碗が加わる。

6期 土師器杯は丸みを持つ体部が失せ、平底から体部が屈曲して立ち上がり、外反する口縁を経て口唇は小さく内屈する。須恵器杯は底径が口径の1/2前後になり、口縁が弱く外反する。甕は「コ」字状口縁が定形化した段階で、屈曲部と口唇外側に沈線状のナデを施すのが特徴である。また、内傾ぎみの口縁は外傾あるいは直立のものより新しいものと考えられる。この段階で猿投窯K-90号窯式段階と思われる灰釉陶器が伴出しており注目される。

7期 土師器杯は6期よりも更に強く口縁の外反するものが見られるが、量的には須恵器が主体となっている。須恵器杯は底部が口径の1/2以下になり、口縁が強く外反する。高台付碗は杯とほぼ同形態を呈し、体部下半の湾曲が強く、高台は丸みを持つようになる。甕は6期と大きな変化は見られないが、器壁のやや厚いものが現われる。須恵器は十分な還元がなされず軟質焼成のものが目立つようになる。

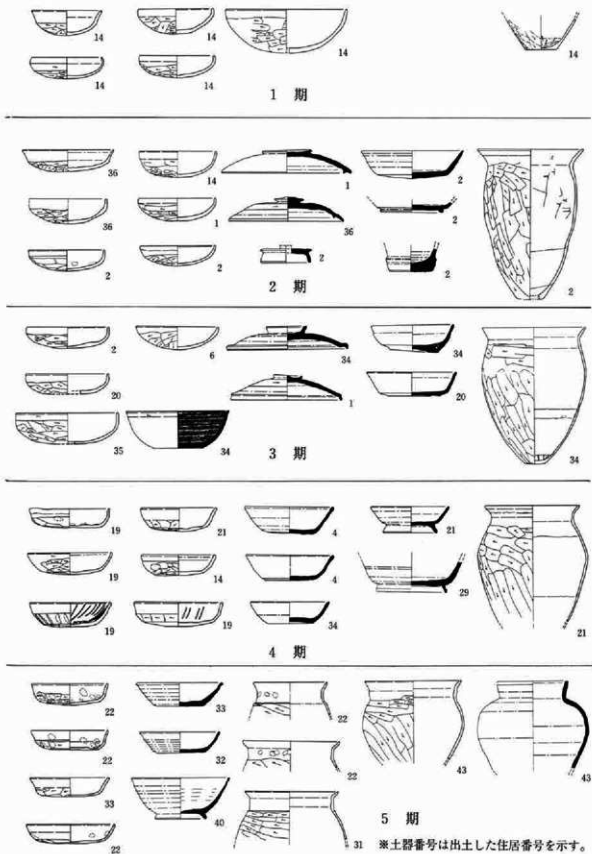
8期 土師器杯は、底に粗い施削を施し、須恵器杯に近似した形態をとると思われるが数が少ないため不明な点もある。須恵器杯は7期よりも更に底径が小さくなり、体部の開きが直線的になる。高台付碗は杯とほぼ同形態で、高台は退化し、低く丸いものになる。甕は7期の「コ」字口縁が残る、退化した「コ」字口縁に厚手の器壁を持つものが新たに現われる。これは、いわゆる「土釜」の初期段階のもので、胎土に砂粒を多く含んでおり、一見「コ」字蔵型甕とは別系統とも考えられるが、施削技法はそのまま継承している。恐らく、用途上の変化に対応して作られたものであろう。これと関連して、この時期に羽釜が出現していた可能性が高い。なお、本期には猿投窯K-90号窯式あるいは美濃光ヶ丘1号窯式段階の灰釉陶器が伴出している。

9期 土師器杯は小振り、底付近を施削し整形しており、壺んだものが殆どである。伝統的土師器技法による末期段階と考えられる。須恵器はロクロ成形を行うが、焼成は赤褐色で軟かい土質となる。杯はやや小振りになり、底から内湾して体部が開くものと、突出した底から直線的に体部がひろくものがある。高台付碗は杯と同形態を呈し、高台には退化したもの、逆に高く長いものが現われる。甕は器壁の厚い「土釜」と羽釜とが主体を占める。いずれもロクロ整形によるものが見られ、前段階から土器生産体制が変化したことを示している。

10期 杯は器高の低い小振りなものになる。高台付碗は前段階を継承するが、杯部が浅く「足高台」を持つものが多くなる。甕は短く単純に外反する口縁の「土釜」で、羽釜は前段階に比べて、口唇や湾曲部の稜が弱く丸みを持つものが主体となる。なお、美濃虎渓山1号窯式と思われる灰釉陶器が伴出している。

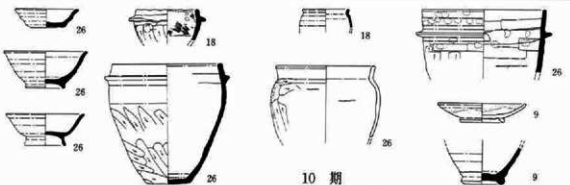
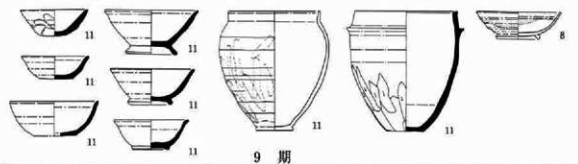
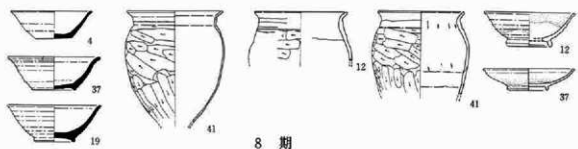
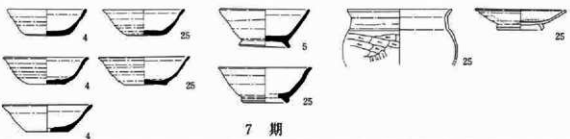
以上の各段階に実年代観を与えることにする。2期に相当する埼玉県大里郡岡部町内出遺跡14号住居からは「和同開珎」(初鑄 708年)、4期と5期の中間に位置付けられる愛宕山遺跡4号住居からは「万年通寶」(初鑄 760年)、5期に相当する上野国分僧寺・尼寺中間地域第77号住居からは「富寿神寶」(初鑄 818年)、7期に相当する観音山古墳周溝内土坑からは「貞観永寶」(初鑄 870年)・「寛平大寶」(初鑄 890年)⁽³⁾が伴出しており、これより、1期-8世紀第1四半期、2期-8世紀第2四半期、3期-8世紀第3四半期、4期-8世紀第4四半期、5期-9世紀前半、6期-9世紀後半、7期-9世紀末-10世紀初頭、8期-10世紀前半、9期-10世紀中葉-後半、10期-10世紀末-11世紀初頭と考えておきたい。

第三章 書上上原之城遺跡



第222図 土器変遷図 (1) (縮尺 $\frac{1}{2}$ 變類は $\frac{1}{2}$)

第3節 まとめ



第223図 土器変遷図 (2) (縮尺 $\frac{1}{2}$ 変類は $\frac{1}{2}$)

2. 遺構について

本遺跡では、竪穴住居跡47軒・掘立柱建物跡41棟・井戸跡7基・溝跡21条等が検出されており、時代は縄文時代前期から平安時代中葉まで及ぶ。奈良～平安時代の集落が中心で、これに一部中世と思われる遺構が伴う。

今回の調査地点は、東西に展開する集落のほぼ中央付近に当たると考えられる。西側隣接地は、伊勢崎市教育委員会によって調査が実施され、同一集落の存在が確認されているが、これは道路部分のみの調査であるため、集落変遷や構造上の特徴を捉えるには不十分であった。従って、本遺跡における遺構の分析によって、この集落の実態解明を図ろうとするものである。以下、各遺構毎にその特徴を述べることにする。

竪穴住居跡について

本遺跡からは47軒が検出されており、時期は前節における土器編年に従えば8世紀前半～11世紀中葉までの約300年以上に亘る。なお、各住居の時期については、次節で述べることにして、ここでは主に構造上の特質について述べる。

住居の平面形は、正方形・縦長長方形・横長長方形にほぼ三分される。大きさは、最大が一辺6mで、最小は2.8mのものである。正方形と縦長長方形を呈する住居は、比較的大型で、横長長方形のものは小型である。この傾向は、時間差を反映していると考えられ、大まかには9世紀代を境にして、古いものが縦長長方形か正方形、新しいものが横長長方形と捉えて良いようである。ただし、大きさについては、同時期存在のものにも大小の差は十分に考えられるところであり、あくまでも相対的な比較上の傾向差にとどまる。

竈は、いずれも東側に設けられており、このことは竈位置の選定が余程特殊な事情が無い限り、各時代を通じて普遍的な約束事になっていたことを物語っている。本地域においては、冬から初春にかけて「空っ風」として有名な強い北西風が吹く。風向きは煙道を通して竈機能に大きな影響を与える。この結果、風を避けるために竈を東壁に設置したものであろう。主軸方向は殆どが南-北か、東-西であり、このことは竈と同様に各時代を通じたなんらかの規制があったと考えるべきだろう。

掘立柱建物跡について

総数41棟が検出されている。この内、4棟については建て替えの可能性がある。掘立柱建物跡は、住居・倉・作業小屋等の幾つかの性格が考えられるが、多くの場合それらを峻別出来るだけの証拠を伴って検出されることは無く、一括して述べられることが多い。ここでも、最初から性格を規定せず、第一次作業として形態分類から始めたい。

平面形は、長方形と正方形とに二分される。更に、柱列が側柱のみか総柱かで二分出来る。また、規模の大小が分類要素として考えられるが、これは柱間寸法と間取りとの在り方に置き換えられる。以上が、分類の基準として考えられるが、これらは各建物の性格に起因するものと予想され、時代性を十分に反映したものとは考えにくい。そこで、時代性を把握する要素として、柱穴掘り方の形状を考慮に入れてみた。本遺跡で検出された柱穴には、隅丸長方形・楕円形・円形の3種類が見られる。円形の掘り方については、縄文時代から近世に至るまで普遍的に存在しており、その意味では時代性を反映していないと言えるが、これについては前述の3要素との組み合わせで検討してみたい。以上の4要素によって分類された結果は、以下の通りである。

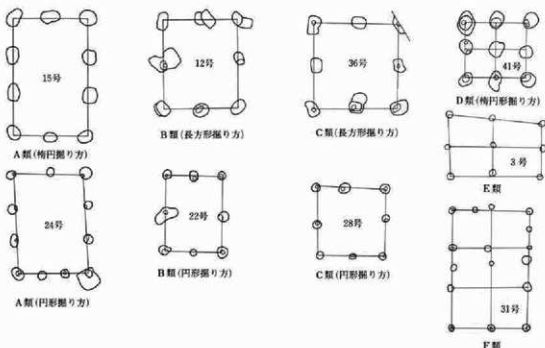
- A類……長方形を呈し、間取りは2間×3間を基本とする。側柱のみ。
- B類……長方形を呈し、間取りは2間×2間を基本とする。側柱のみ。
- C類……正方形を呈し、間取りは2間×2間を基本とする。側柱のみ。

D類……………正方形を呈し、間取りは2間×2間を基本とする。総柱。

E類……………長方形を呈し、間取りは2間×2間。総柱。

F類……………長方形が基本で、間取りは梁間2間で、桁行が3間ないし4間。柱間寸法が不均等。

A類・B類・C類は側柱のみで、平地床の建物を想定でき、D類・E類は総柱で倉庫等の高床建物が想定できよう。このように、以上の分類は主に建物自体の性格を反映している可能性が強い。そこで注目したいのは、柱穴の掘り方である。先に述べた長方形・楕円形・円形の掘り方は、A～D類のいずれにも見られる。しかも、この異なる掘り方で同類のものが重複している。最も多く検出されたA類を例に上げれば、26号と37号にみられるように、同類ではほぼ同規模の同じ性格と思われる建物が、異なる柱穴形状を持ち、重複している。このことから、この両者に時間差を想定することができよう。この場合長方形→楕円形→円形と変遷するものと考えたい。7～8世紀代の宮都の建物や寺院の柱穴掘り方は、正方形か長方形が多い。本遺跡で見られる長方形掘り方は、この系統を引く建方技術と考えたい。長方形ないし楕円形掘り方の柱穴の特徴は、四隅部が、柱列軸線から45°近く角度を振り、対角の柱穴と相対する向きで掘り込まれることである。また、殆どが柱痕跡を残すが、中央とは限らず掘り方の中で柱位置を調節したかのように見受けられる。このことから、長方形・楕円形の掘り方は柱列軸や柱間寸法のズレを調整し、かなり厳密な建て方をするためのものと考えられよう。これは、A～D類のいずれも長方形の掘り方を持つものほど、柱列・柱間寸法にバラツキが無く、ほぼ設計どおりと思われる柱の建て方位置を示していることからもうなづける。また、このことから、楕円形や円形掘り方の建物は厳密性を要求されない、簡易な建物であるとも考えられるが、これについては建物の配置関係等から検討する必要がある。



第224図 掘立柱建物の類型

3. 集落の変遷

ここでは、まず前節で扱った土器編年観と遺構の検討を基に各遺構に時期を与え、同時存在の可能性の高い遺構群としてのまとまりを抽出してみたい。竪穴住居跡の時期別分類は以下の通りである。

1期-14号住 2期-1・2・15・36号住 3期-6・20・34・35号住 4期-19・21・29号住
5期-3・22・31・32・40・43・(47)号住 6期-(7)・16・17・24・46号住 7期-4・5・
25号住 8期-12・30・37・41・42・44号住 9期-8・13・28・38・39号住
10期-9・11・18・26号住

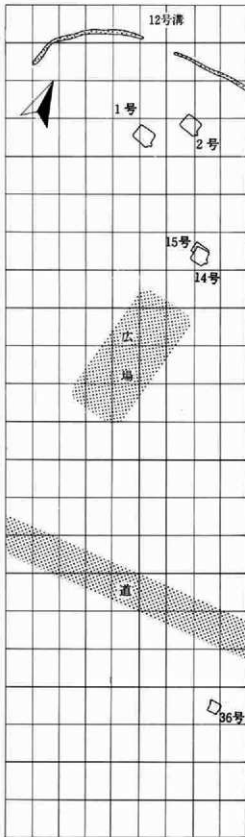
ここでは出土土器相互の比較によって時期分類したものが多く、しかし、実際には一軒の住居から出土する土器群は、時間的に近接する前後段階の土器を含むことが多く、互いに全く同時期と判断できるものは少ない。また、廃棄された土器の時期と実際に住居が存在していた時期とは多少の時間的なずれを考慮しておく必要がある。以上の点を考慮し、ここでは、細分された編年観を直結させることによって本来の同時期存在の遺構群を分割してしまうといったミスを避けるため、集落変遷の時間単位を大きくとり、全体をⅠ～Ⅵ期の6時期区分とした。

掘立柱建物跡については、楕円形掘り方を持つA類の15号が4期の土器を出土する19号住を切っており、6期と考えられる17号住に切られている。これより15号掘立柱建物跡の時期は5期に位置付けられる。また、円形掘り方を持つB類の18号掘立柱建物跡は5期の32号住を切っており、6期以降のものと考えられる。一方、掘立柱建物跡の柱穴から出土する土器は破片が多く、埋没状況の不明なものが多いことから、時期決定の根拠としては弱い。本遺跡の場合、出土土器はほぼ4～7期のものに限定されている。23号掘立柱建物跡は長方形と楕円形の掘り方を持つC類で、部分的に溝と重複するが、柱穴から5期の土器が出土している。また、同様に長方形と楕円形の掘り方のB類である12号からも5期の小型甕(台付甕)が出土している。更に、その他の土器を出土する13棟を検討したところ、掘り方が長方形のものは4期、楕円形のものは5期、大型円形のものは6～7期に、ほぼ位置付けられることが判明した。ただし、楕円形と大型円形の掘り方は識別困難なものもあり、同時存在を想定できる場合も考えられる。なお、小型円形の掘り方を持つ建物(1～7・10・11・16号掘立柱建物跡等)は、土器が殆ど出土せず時期を限定する根拠を欠くが、前節での検討により大方は8期以降と位置付け、また、一部については7期以前のものと位置関係を重視して時期を想定したものもある。

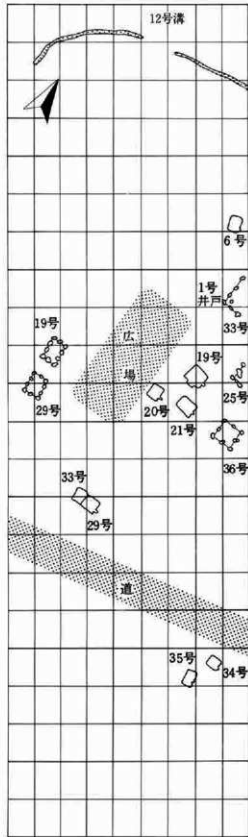
4期-19・29・33・36・(25)号掘立 5期-12・14・15・17・23・35・37・38・40・41号掘立
6・7期-18・21・24・26・27・28・(8)・(34)号掘立
8期以降-1～7・10・11・13・16・20・22・32号掘立

以上のように、各掘立柱建物跡の時期を想定したがあくまでもこれは前節における分析方法によるものであり、出土土器の多い竪穴住居跡ほどの確実性は無い。従来多く行われてきた主軸方向や配置関係を重視する方法によれば、かなり異なる結果が出ることも考えられる。従って、これから述べる集落の構造と変遷は、あくまでも一方法による仮説の提示であることを明記しておく。

Ⅰ期 土器編年の1・2期に当たる。竪穴住居は台地の高い部分に4～5軒、谷付近に1軒が存在する。7～8mの間隔を置いて2軒が対をなすように見受けられるが、住居の規模や構造上に大きな差は無い。むしろ、台地部の住居に比べて南東の谷部分縁辺の1軒は規模が小さく、異質な性格を想定させる。なお、集落の北側を弧状に取り巻く12号溝は、これより北側で住居跡・掘立柱建物跡等が全く検出されていないことから、集落の限界を示す環濠として、この時期から存在していた可能性がある。

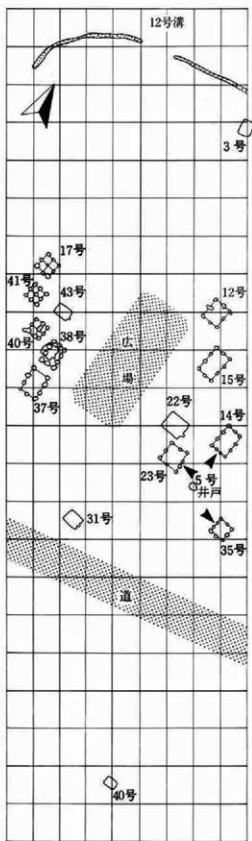


I 期

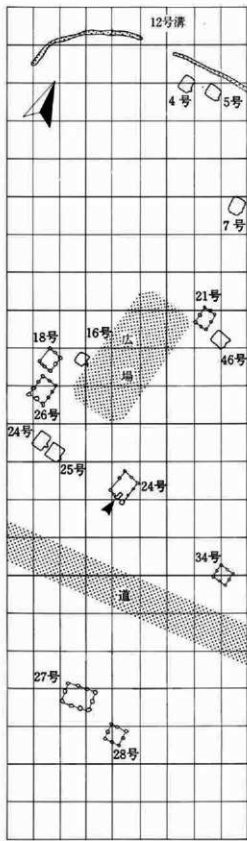


II 期

第225図 時期別遺構分布図 (1)

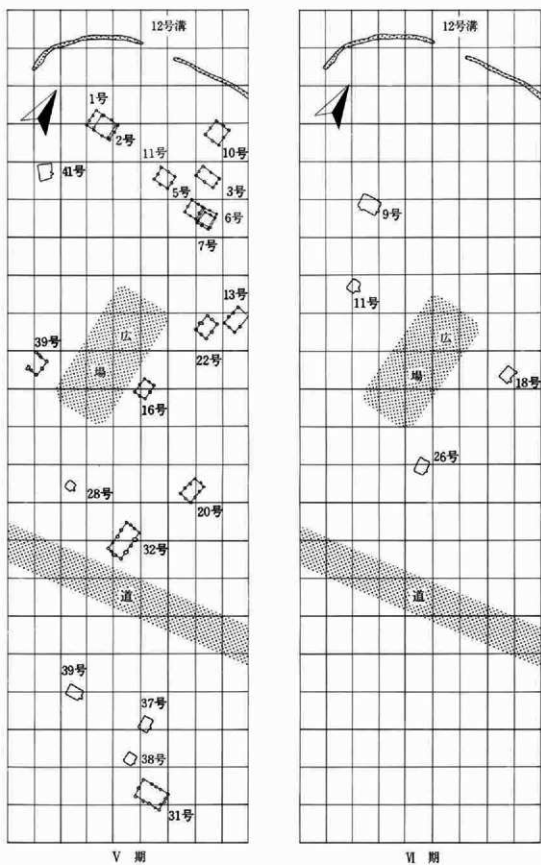


Ⅲ 期



Ⅳ 期

第226図 時期別遺構分布図 (2)



第227図 時期別遺構分布図 (3)

Ⅱ期 土器編年の3・4期に当たる。竪穴住居は台地の中央付近に南下し、敷軒が集中する傾向を見せる。ここでは規模の大小が見られる。また、Ⅰ期同様に谷付近で2軒の住居が見られるが、出土土器から時期が前後する可能性もある。この時期に注目されるのは、掘立柱建物の出現である。いずれも竪穴住居と同じ台地中央付近で北東側と南西側の2箇所に分かれて位置する。これらはいずれも長方形の掘り方を持つA類とC類で、平地住居としての可能性が考えられよう。この時期の新しい段階で倉庫（17号掘立柱建物）が伴う可能性も考えられる。33号掘立柱建物内には、井戸が1基存在するが、建物自体との関係は不明である。

Ⅲ期 土器編年の5期に当たる。竪穴住居・掘立柱建物ともに大部分が台地中央付近に位置しており、竪穴住居1軒が谷付近に存在する。掘立柱建物は2期の建て替えと見られるものも含めて敷軒が増加しており、A～D類が出揃う。倉庫も西側に3棟が立てられる。注目されるのは、14・23・35号掘立柱建物で、23・35号はC類で、同時期の大型竪穴住居とほぼ同じ規模を持つ。この3者は、一辺の柱列のみ3間の変則的なもので、出入り口部分と考えられる構造を示す（図中矢印で示す）。この出入り口部分は、ややずれるが、南側の中間位置の方向に開口している。そして、この3者に囲まれた空間の中央には井戸が1基位置し、更に23号掘立柱建物の北側には長さ6mを測る大型の竪穴住居が存在しており、これらの遺構群が同時期における有機的な関連を持っていたことが容易に想像できる。あるいは、これを「戸」として捉えることも可能かと思われる。また、西側の倉庫を含む建物群は、これらと30m近く離れており、全く別のまとまりを形成していたことが注目される。

Ⅳ期 土器編年の6・7期に当たる。竪穴住居と掘立柱建物の数はⅢ期とほぼ同じであるが、その分布はⅢ期でのまとまりが崩れ全体に散在する傾向を見せる。なお、掘立柱建物の内、変則的な柱間の出入り口部分を設けた建物はこの時期にも見られ（24号掘立柱建物）、これらの開口が南側を指向していることが注目される。また、西側の倉庫群は無くなり、代わって東側に1棟が立つ。又南側谷付近で東西棟の掘立柱建物2棟が新たに建てられる。竪穴住居の形状は、この時期より殆どが同規模で全体的に小型化し、横長長方形を呈するものが現われる。なお、西側の部分ではⅡ期からⅤ期までの間、掘立柱建物が継続的に建てられており、この付近からは灰軸陶器が集中して出土している。灰軸陶器を所有することが、当時における動産所有能力の優位性を示すものと仮定すれば、この地点で検出された建物は村落内の有力者の居宅域と考えることも出来よう。

Ⅴ期 土器編年の8・9期に当たる。竪穴住居は中央付近と北側、そして谷付近の南側の3箇所に分散傾向を見せる。掘立柱建物も、前段階の建て替えと考えられるものも含め、全体に分散傾向を示し、各建物が独立するような景観を見せる。ただし、北側に掘立柱建物が集中するのは新たな動向として注目される。この時期では、前段階で見られた住居の小型化傾向が更に進み、一辺3mに満たないものも現れる。一方、掘立柱建物についても小型化しており、建て方も規格性が薄れてくる。

Ⅵ期 土器編年の10期に当たる。この時期の竪穴住居で明らかなのは、僅か4軒で前段階から比べ、急激に減少する。掘立柱建物も数棟存在すると思われるが、明らかではない。竪穴住居の形状と規模は、Ⅴ期とほぼ同様である。なお、谷部付近における住居は、この時期にはみられない。全体に分散傾向が極端に進行し、開村化した段階と考えられるが、あるいは集落の中核部が別の地点に移動した可能性も考えられよう。

4. まとめ

以上のように、6期区分された各段階における集落景観と変遷過程を追って見たが、ここではこれらを経括して集落変遷の流れと構造について概要を述べまとめたい。

まず、構造についてであるが、集落の範囲は北側の溝・南側の谷を限界とした約200mの幅を持ち、東西に幅広く広がるものと考えられる。北の境をなす溝は、弧状に回り、中央で8m程途切れる部分が見られるが、これは恐らく集落と外部を結ぶ出入り口と考えられる。これより北方には、時期は異なるものの7世紀末～8世紀初頭段階と思われる古墳群が存在しており、この集落の形成時には墓域としての意識が残っていた可能性がある。とすれば集落の存続する間においても、この地域は墓域として利用されたものであろうか。南側低地は、遺構としては検出されなかったが、水田地帯と考えて間違いなかろう。低地縁辺に等高線と平行して走る数条の溝は、水田への灌漑用水として使われていた可能性も強いだろう。集落の中核は、有力者の住宅や倉庫群の在り方から、調査区中央付近と考えられる。また、数は少ないが、谷地付近に建てられた堅穴住居は、Ⅰ～Ⅳ期まで集落の全期間を通して存在した可能性があり、ここに居住する人間は、村落の中央部とは別に何等かの異なる役割を担っていた可能性を考えたい。これに関連して注目されるのは、集落中央部と低地付近との間に見られる15m程の空地帯である。これは西側隣接地での調査でも確認されており⁽¹⁾、ほぼ東西に延びていることが明らかである。このことから、この部分に東西走向の道を想定することは不可能ではなかろう。この場合、道の形成が集落の形成の以前か以降かは重要な問題であるが、ほぼ東西を指すこと、これを西方に延長した約1kmには上植木庵寺があること、北側約2kmには東山道・推定路がほぼ東西に走向していること等を考え合わせると、当時においてかなり主要な道路であった可能性もあり、本遺跡で検出された集落は、この道路に沿って形成された計画的村落ではないかとも考えられる。このことは、Ⅲ・Ⅳ期に見られた掘立柱建物の出入り口部分が南側を指向していた事実とも無関係ではあるまい。また、全期間を通して、中央部に空白地が見られるが、おそらく農事・祭事等に用いる共同広場的な性格が考えられよう。

集落の期間は、前述の通り、8世紀代前半から始まり、ほぼ350年間続いたと考えられる。この間、最も発展を示したのは、Ⅱ・Ⅲ期の8世紀後半～9世紀代であろう。この時期には、倉庫群・有力者住宅が有り、一般農民層と思われる堅穴住居数も最も多いことから人口もピークを示したと考えられる。しかし、10世紀以降のⅣ～Ⅶ期は、次第に住居数も減少し、配置も散漫になってくる。このことは、当時における社会機構の変化、つまり律令制が崩壊し、代わって荘園制による村落支配が始まることや、疫病の流行等による村落経済の疲弊との密接な関係を想定することが出来る。

以上のように、本遺跡は8世紀になって開かれた計画的な村落であると想定され、それが隆盛から衰退への道をたどったことが明らかになった。今後は、この集落が周辺村落とどのような関係にあったのか、また、最初の開発を行った人々がどこから来たのか、そしてどこへ移って行ったのか等、本村落の歴史を解明する上で更に広い地域を視野に入れて検討を進めるべきと思われる。

註

(1) ここでは、北武蔵地域の土器について技法や形態変化の動態を詳細に分析された鈴木徳雄氏の考え方に負うところが多く、上野地域についても同様の動態観が大方において認められるものと考えている。鈴木「発表要旨 古代北武蔵における土器器製作手法の展開」土曜考古第7号 1983、「いわゆる北武蔵系土器器の動態」土曜考古第9号 1984を参照。

(2) 「粘土に礫を含み、頸部のしまりが僅かに認められる短い外反する口縁、大きい平底に特徴がある」カマを羽釜と対比させて、井上唯量が提唱した。井上「蘇馬郡下の歴史時代の土器」蘇馬県史研究8 1978年

(3) 土器も「和同開珎」も床より浮いた状態で出土した一括遺物であるが、住居とは無関係である可能性が高い。鬼形芳夫他「内出遺跡」西出遺跡調査会 1986年

第三章 書上上原之城遺跡

- (4) (2) に同じ。
- (5) 桜岡正信氏御教示。報告書は近く刊行される予定である。
- (6) 【史跡 観音山古墳】 群馬県教育委員会 1981年
- (7) 【原之城遺跡・下古祥寺遺跡】 伊勢崎市教育委員会 1982年
- (8) (7) に同じ

上植木壺町田遺跡

第Ⅳ章 上植木沓町田遺跡

第1節 調査の概要

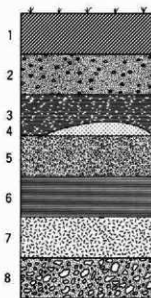
(1) 調査の方法と経過

本遺跡は、伊勢崎市三和町地内に所在し、昭和51年度に伊勢崎市教育委員会によって発掘調査された「舞沼東遺跡」の西120mに位置するところから、事業名称を「舞沼東Ⅱ遺跡」と命名した。遺跡地の大部分は水田として利用されていたが、昭和51年度の「大正用水東部土地改良事業」に伴い、圃場整備が実施されており、自然地形の改変が少なからず認められた。このために、まず地形図及び現況の観察により sta. No. 472~753の区間をⅠ区、sta. No. 753以北をⅡ区として調査を進めることとした。

昭和58年度の調査は、本調査に入る前のトレンチ掘りの試掘調査と、試掘調査成果に基づく全面発掘を行った。試掘調査は、当初計画の「J K 16」の発掘調査に加え、「原之城跨道橋」・「柏川橋梁」の建設工事に対応するために、発掘調査地点の拡散があったが、三名の担当者がそれぞれ分担することとして、微高地部分に当たるⅡ区の試掘調査を、5月6日~7月13日に実施した。この結果、sta. No. 753~762の区間については、溝・Pitの存在が確認されたが、No. 763以北については低湿地であり、遺跡とは認められないとの成果を得た。湿地部分に当たるⅠ区の試掘調査は、湯水期を待って1月5日から調査に入ったが、道路の基礎填工工事の期間を確保するために、浅間火山給源のB軽石層が認められた部分については、拡張して本調査を実施したが明確な遺構は存在しなかった。



第228図 調査区位置図



第229図 Ⅰ区標準土層模式図

1. 耕作層。
2. 黒褐色土、B軽石を含む。
3. オリーブ灰色土、B軽石を多く含む。
4. B軽石純層。
5. 黒色土、F.P.を含む。
6. 黒色粘質土、(腐植質を多く含む)
7. 灰白色シルト。
8. 砂礫層。

第IV章 上植木志町田遺跡

I区の調査終了と同時に、II区の全面発掘を開始した。II区の調査対象地は幅40m・長さ180mに及び、微高地を斜めに横断していたが、調査区全域に上武道路のセンター杭を基準として、東西方向7m・南北方向10mの方眼をかけて、「J K16」と同様な調査方法を探り、堅穴住居跡12軒・掘立柱建物跡3棟・井戸跡13基・溝跡25条・地下式土坑1基等を検出し調査を行った。

昭和59年度は、新たな調査体制の下に4月31日から調査に入り、前年度の補完調査と土壌墓14基の調査を実施し、5月31日に終了した。

(2) 調査成果の概要

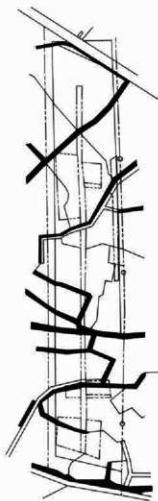
本遺跡における今回の発掘調査で、検出された遺構は既述の通りであり、縄文時代の遺構は検出されなかったが、若干の縄文式土器・石器が出土している。また、弥生時代に属する遺構・遺物は全く検出されなかったが、本遺跡が縄文時代から中・近世に及ぶ複合遺跡であることが判明した。

縄文時代については、明確な遺構が検出されなかったために、詳細は不明である。しかし、本遺跡の東方約100m付近に所在する「鯉沼東遺跡」において、縄文時代中期に属すると考えられる5軒の堅穴住居跡が発見・調査されており、本遺跡地もそれらの人々の生活域の一部であったろうことが推察される。

古墳時代になると、本遺跡地周辺でも居住域の拡散があったことが窺える。12号住居跡は石田川式土器を出土しているが、「鯉沼東遺跡^{※1}」で6軒・北方約500mに所在する「舞台遺跡^{※2}」で1軒の同時期の住居跡が検出されている。分布調査の結果では、本遺跡地の西側にも濃密な土器の散布が見られるため、住居跡の存在が推定される。以後、規模の大小は有るものの、3遺跡共に古墳時代を通じて居住の場となっていたことが確認された。なお、生産域は明らかにし得なかったが、西側約1kmの粕川左岸に累々と構築された「本間町古墳群」が、人々の墓城であったろうと思われる。

奈良時代の様相は判然としなが、平安時代になると、集落の拠点は西側に広がる「光仙房遺跡^{※3}」へと移って行ったと考えられる。

中・近世には、本遺跡地は、溝によって区画された居住地と、墓域とに利用されていたことが明らかになった。また、多くの井戸跡が、居住空間と有機的な関連を以て穿たれたものであることが考えられるに至った。



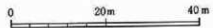
第230図 I区トレンチ位置図

注

- ※1 「鯉沼東遺跡・舞台遺跡」伊勢崎市教育委員会 1977年
大正用水東部土地改良事業に伴う発掘調査の概要報告ではあるが、縄文時代の堅穴住居跡5軒・古墳時代の堅穴住居跡17軒・平安時代の堅穴住居跡2軒・中世の溝跡等の資料を載せている。
- ※2 ※1と同一文献。
F地点において、古墳時代の堅穴住居跡6軒・平安時代の住居跡1軒等を調査している。
- ※3 「上武道路」に係る発掘調査で、古墳9基と平安時代を中心とした集落跡を調査している。
〔年報〕3・4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984・1985年



第231図 II区遺構概念図



第2節 検出された遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

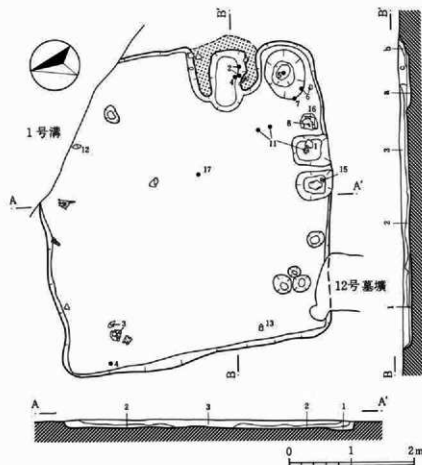
第1号住居跡(第232・233図、図版83・89) 位置 760.5Dグリッド

本住居跡は、北東隅を1号溝によって掘り取られ、南西部には12号土壌墓が重複していた。先後関係については、本住居がいずれにも先行することが確認されている。平面形は、南東部がやや張り出した隅丸方形を呈すると思われる。

規模は、東西方向4.30m・南北方向4.10mを測り、西辺の走向はN4°Eである。

壁は、上部を殆ど削り取られており、検出面からの掘り込みは浅く、ローム層の壁面を5~11.5cm確認した。

床面はほぼ平坦で、硬く踏み固められていた。また、床面直上には炭化材が残り、中央部分が火を受けて赤く変色しており、焼失家屋であることを示していたが、上屋構造を知ることのできる様な資料は得られなかった。周溝及び柱穴は検出されなかったが、南東隅には短径65cm・長径75cmの不整形形をした深さ約80cmの截頭円錐状の穴が穿たれており、ロームブロックを含む褐色土が詰まっていた。内部からは、土師器高杯・



- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 褐色土、軽石・ロームを含む。 | a. 褐色土、焼土・灰を含む。 |
| 2. 淡褐色土、軽石・ロームを含む。 | b. 赤褐色土、焼土・炭を含む。 |
| 3. 黒褐色土、F.P.を含む。 | c. 赤褐色土、軽石・焼土を含む。 |

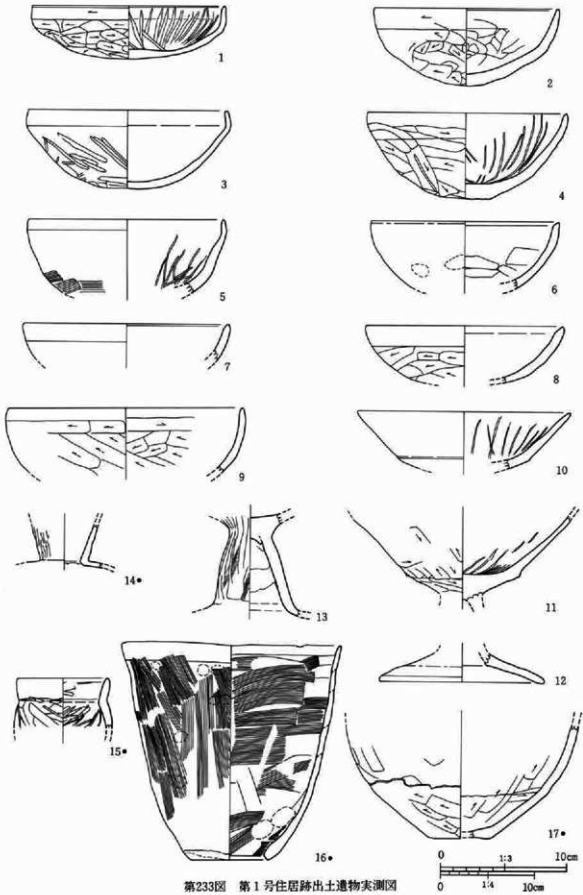
鉢片等が出土しており、貯蔵穴と考えられる。床面下の精査によって7個のピットを検出したが、性格は不明である。なお、南辺の2個の隅丸方形ピットからは本住居に伴うと考えられる遺物が出土しているので、竈跡あるいは出入り口であったかも知れない。

竈は、東辺の中央から90cm程南寄りの位置に、ローム層を掘り残して袖の芯にして、粘土を用いて構築されていた。燃焼部は住居内に有り、焚口幅45cm・奥行80cmを測る。火床面は7cm程窪んでおり、内部には灰と土師器甕の破片が残っていた。

遺物は、ほぼ全域に散らばって出土しており、全体の様相から推して、本住居の年代については5世紀後半の時期が考えられる。

第232図 第1号住居跡実測図

第2節 検出された遺構と遺物



第233図 第1号住居跡出土遺物実測図

第83表 第1号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	3/4残存。 □ 15.4cm 高 4.2cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②赤色。 ③酸化炎・良好。	外面 底一体部手持ち一箇所。口縁部横ナデ。 磨いた様な光沢がある。 内面 ナデ後、体部に放射状施磨き。火はぜによる割離痕有り。内外共に光沢のある煤が付着。	
2	杯 (土師器)	1/2残存。口 縁部1/10。 □ 14.6cm 高 6.1cm	床面上25cm。	①砂粒・岡鉄鉱粒・ 3mm程の小石を多く 含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部斜方向施磨り。粗い磨き。口縁部横ナデ。底一体部に黒炭有り。 内面 磨・莖ナデ。口縁部横ナデ。底一体部に煤が付着。	
3	杯 (土師器)	完形。正位 □ 15.9cm 高 6.2cm	正位で覆れて 出土。	①細砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底一体部手持ち箇所。口縁部横ナデ。 内面 体一口縁部横ナデ。底部は火はぜにより割離。内外共に煤が付着。	
4	杯 (土師器)	1/3残存。 □ 15.9cm 高 6.8cm 底 3.9cm	貯蔵穴内他2 地点。 床面上2~12 cm。	①砂粒・岡鉄鉱粒を 含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好	外面 口縁部横ナデ。体部斜め方向施磨り。体部下横方向施磨り。 内面 ナデ後、放射状施磨き。底面施押さえ。底一体部に煤付着。火はぜによる割離痕有り。	
5	杯 (土師器)	口縁一体部 1/6残存。 □ 15.7cm	貯蔵穴内。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下半部磨り。体部上半部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ後、放射状施磨き。	
6	杯 (土師器)	体一口縁部 1/6残存。 □ 15.0cm	南東部 床面上20cm。	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部粗い磨ナデ。口縁部横ナデ。 内面 磨ナデ後、ナデ。口唇部磨ナデ。煤付着。	
7	杯 (土師器)	口縁部小破 片。 □ 16.4cm	貯蔵穴内。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部磨ナデ。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。口唇部磨ナデ。光沢のある煤付着。	
8	杯 (土師器)	体一口縁部 1/4残存。 □ 15.6cm	南東部	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部斜め施磨り。口縁部横ナデ。体部に粘土の屑りカス付着。 内面 ナデ後、粗い磨き。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	
9	杯 (土師器)	体一口縁部 1/5残存。 □ 18.7cm	覆土中。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部磨り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ後、粗い磨き。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	
10	高杯 (土師器)	杯体一口縁 部1/4残存。 □ 17.0cm	貯蔵穴内。	①細砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 杯底一体部カキ目整形。口縁部横ナデ。 粘土の屑りカス・煤付着。 内面 ナデ後、放射状施磨き。	
11	高杯 (土師器)	杯底一体部 1/4残存。	南東部3地点。	①砂粒を少し含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 施磨り後、粗い磨き。強い施磨りを経て焼を形成する。 内面 ナデ後、粗い磨き。体部に放射状施磨き。 内外共に煤付着。	
12	高杯 (土師器)	杯一胴部 1/3残存。 底 13.1cm	北東部	①はば均質。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 ナデ後、粗い磨き。 内面 横ナデ。施磨りにより胴部との境に稜有り。 内外共に煤付着。	

第2節 検出された遺構と遺物

13	高杯 (土師器)	脚部	南西部。	①砂粒を少し含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 施削り後、粗い荒ナデ。頸-脚部に荒いハケ目が残る。 内面 脚部横方向の施削り。基部横ナデ。 内外共に光沢のある煤付着。	
14	埴 (土師器)	頸-口縁部 1/3残存。 頸部径 5.1cm	覆土中。	①ほぼ均質。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 ナデ後、施磨き。頸部に荒の圧痕がある。 内面 横ナデ。口縁部荒い施磨き。火はぜによる割離有り。 内外共に煤付着。	
15	小型甕 (土師器)	体-口縁部 1/4残存。	南東部ビッド 中。	①砂粒・細粒鉄粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部施削り後、粗い施磨き。口縁部横ナデ。 内面 粗い施磨き。 内外共に煤付着。	
16	瓶 (土師器)	ほぼ完形。 口 23.4cm 高 23.3cm 底 8.0cm	南東隅。横転して押し潰された状態。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 指頭圧痕が目立つ。体部下半部施削り。上半浅いハケ目調整。口縁部横ナデ。底部周縁指押え。 内面 粗いハケ目調整。底部周縁施削り。火はぜによる割離有り。	
17	甕 (土師器)	底-体部 1/3残存。 底 6.4cm	中央部 床面上25cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 施削り後、体部上半粗いナデ。 内面 指ナデ後、粗い荒ナデ。火はぜによる割離有り。	

第IV章 上植木密町田遺跡

第2号住居跡(第234・235図、図版83・99) 位置 761.0Eグリッド

本住居跡は、北西隅を1号地下式土坑によって掘り取られ、南東部には耕作に伴うと思われる土坑が重複していた。先後関係については、本住居跡がいつれにも先行することが確認された。平面形は、南東部に方形の張り出し部分を持った不整隅丸方形を呈すると思われる。

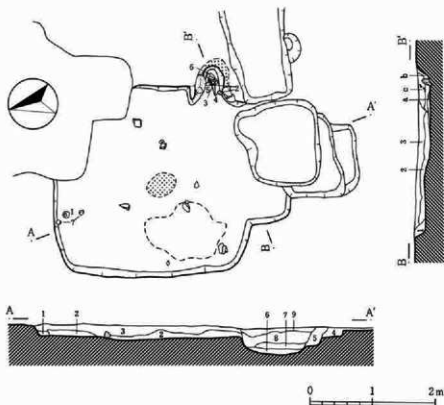
規模は、東西方向3.00m・南北方向2.46mを測り、西辺の走向はN15°Eである。

壁は10°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高10~14cmのローム層の壁面を確認した。

床面には多少の凹凸があり、中央部に径50cm程の焼け込みが有りやや窪んでいた。南西隅は硬く踏み固められていた。確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から90cm程南寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。燃焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅45cm・奥行55cmを測る。両側壁及び支脚に使用したと思われる石が残っていた。また、須恵器杯・碗が2個体ずつ重なりあって出土した。

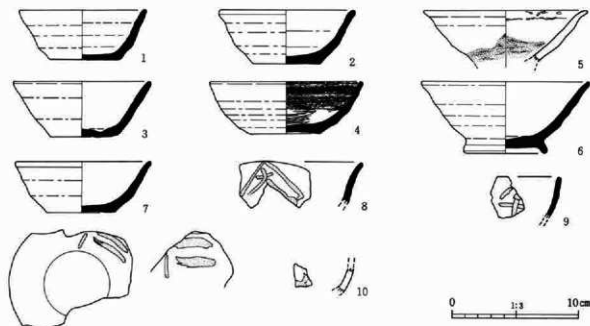
遺物は、ほぼ全域に散らばって出土しており、墨書土器片3点が注目される。本住居の年代については、9世紀後半の時期が考えられる。



- | | | |
|---------------------|----------------------|--------------------|
| 1. 褐色土・F.P.を含む。 | 5. 汚れたローム層。 | 9. 暗褐色土・F.P.を含む。 |
| 2. 暗褐色土・F.P.を含む。 | 6. 注記層。 | a. 焼土と灰の混土層。 |
| 3. 褐色土・F.P.・ロームを含む。 | 7. 淡褐色土・F.P.を含む。 | b. 暗褐色土・焼土・灰を含む。 |
| 4. ローム層を含む。 | 8. 暗褐色土・F.P.・ロームを含む。 | c. 淡褐色土・F.P.・灰を含む。 |

第234図 第2号住居跡実測図

第2節 検出された遺構と遺物



第235図 第2号住居跡出土遺物実測図

第84表 第2号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (須志器)	完形。 口 10.2cm 高 3.9cm 底 5.6cm	北西部。 床面直上。 正位の状態で 出土。	①は均質。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部に煤付着。	
2	杯 (須志器)	完形。 口 10.8cm 高 4.2cm 底 5.8cm	甕内に散在。	①は均質。 ②褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部に光沢のある煤付着。	二次焼成によりやや軟質化。
3	杯 (須志器)	3/5残存。 口 11.0cm 高 4.3cm 底 5.3cm	甕内に散在。	①は均質。 ②灰白色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り。口縁部回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。内外共に光沢のある煤付着。雑質のためか、底面が歪む。	二次焼成によりやや軟質化。
4	杯 (須志器)	3/4残存。 口 12.2cm 高 4.2cm 底 5.7cm	甕支石上に被せられた状態で出土。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・軟質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部回転によるナデ。 内面 黒色処理。磨りき。火はぜによる割離痕有り。二次焼成により灰畫が一部消失。	ロクロ使用土器器。

第5章 上植木老町田遺跡

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
5	碗 (須恵器)	口縁一部 1/4残存。 口 13.0cm	竈内に散在。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。内外共に体部下平に光沢のある煤付着。	二次焼成によりやや軟質化。
6	高台付碗 (須恵器)	3/4残存。 口 13.3cm 高 5.6cm 底 6.6cm	竈内に散在。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部回転によるナデ。 底部回転糸切り残、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。内外共に体部に煤付着。	二次焼成によりやや軟質化。
7	杯 (須恵器)	2/3残存。 口 10.8cm 高 4.1cm 底 5.2cm	北西壁際。	①ほぼ均質。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。
8	杯 (須恵器)	口縁部 小破片。	覆土中。	①砂粒を含む。 ②黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。
9	杯 (須恵器)	口縁部 小破片。	覆土中。	①砂粒を含む。 ②黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。
10	杯 (土師器)	底一部 小破片。	竈中。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 重削り。 内面 ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文不明。

第3号住居跡(第236・238回、図版84・100) 位置 760.0E・Fグリッド

本住居跡は、南西隅に11号住居が重複していたが、その他に耕作に伴うと思われる多くの土坑が重複しており、調査時においては先後関係を明らかにし得なかったが、出土遺物の様相から推して、本住居跡→11号住居跡の順になると考えられる。平面形は、東辺がやや歪んでおり、南北方向が若干長い隅丸不整形を呈すると思われる。

規模は、東西方向4.10m・南北方向4.20mを測り、西辺の走向はN26°Wである。

壁は、上部を殆ど削られている上に、重複による攪乱が著しいために遺存状態が芳しくなかったが、ローム層の壁面を4～16cm確認した。

床面はほぼ平坦で、中央部が若干高く強く踏み固められていた。南東隅には長径60cm・短径50cmの不整形円形をした深さ50cmの穀頭円錐状の穴が穿たれており、焼土・炭化物を含む褐色土が詰まっていた。内部からの出土遺物は無かったが、周辺部に多くの遺物が散在していたことから、貯蔵穴であった可能性が高いと思われる。確認し得た範囲内においては、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面下の精査によって、径30～50cm・深さ10～20cmの6個のビットを検出したが、性格は不明である。

竈については全く資料を得られなかったが、貯蔵穴の近くの東辺に構築されていたものと思われる。

遺物は東半部に多く認められ、中央部からは完形に近い土師器甕が正位の状態でも出土した。全体の様相から推して、本住居の年代については5世紀中頃の時期が考えられる。

第11号住居跡(第236・239図、図版99) 位置 760.0Fグリッド

本住居跡は、前述の通り3号住居を壊して作られていたが、調査時における確認が不十分であったために、詳細は不明である。平面形は、比較的均整のとれた隅丸方形を呈すると思われる。

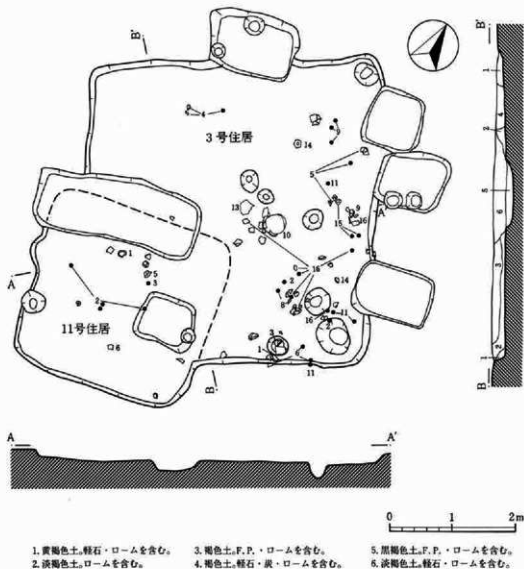
規模は、東西方向2.55mを測り、南北方向については1.80mを確認した。西辺の走向はN17°Wである。

壁はほぼ垂直にルーム層まで掘り込まれており、現存高4.5~8.5cmを確認した。

床面はほぼ平坦で、3号住居の床面よりも3cm程高かったが、踏み固められたような様相は認められなかった。確認し得た範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。なお、床面下まで掘り込まれた2個の方形土坑は、ロームブロックを多量に含んだ締まりのない土が詰まっていたことから推して、耕作に伴う土坑である可能性が高いと思われる。

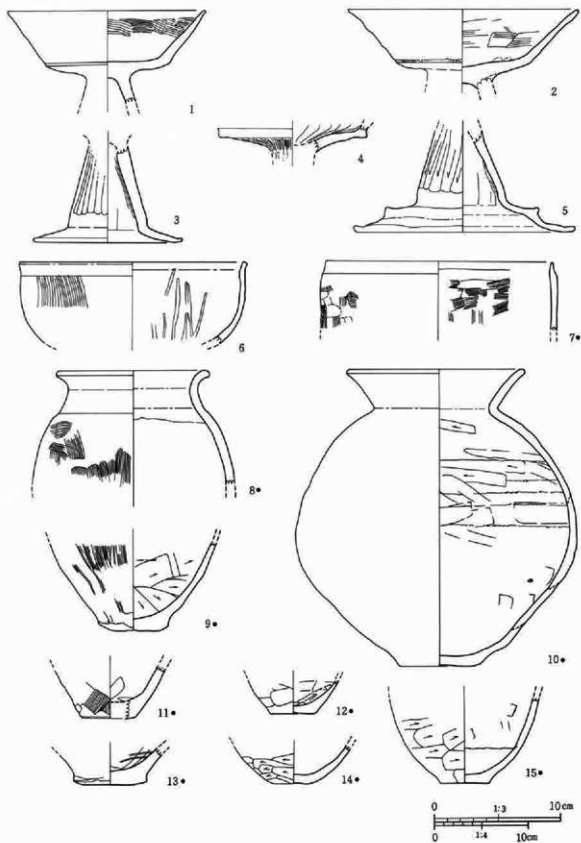
竈については全く資料を得られなかった。

遺物は、比較的中央部分にまともっており、須恵器類には10世紀前半の様相が認められるので、本住居の年代についてもこの頃と考えられる。

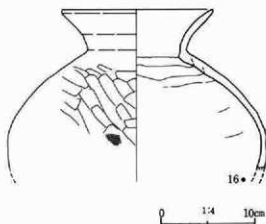


第236図 第3・11号住居跡実測図

第四章 上植木老町田遺跡



第237图 第3号住居跡出土遺物実測图 (1)



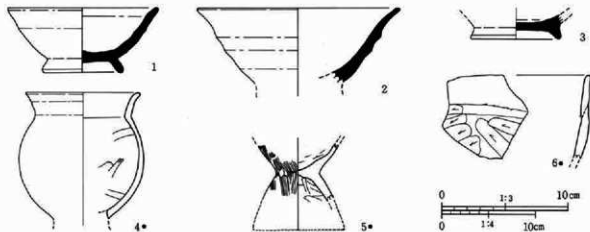
第238図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第85表 第3号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・分量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	高杯 (土師器)	杯部残存。 口 15.8cm	南東壁際 床面上6cm。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 脚部接合後、ナデ。杯底部粗い蔑ナデ後、ナデ。体部横ナデ。 内面 体部に粗い刷毛目有り。体一口径部横ナデ。脚部指ナデか。内外共に駆付着。	
2	高杯 (土師器)	杯部1/3残存 口 18.4cm	南東部2地点 床面上5cm。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 杯底部粗い蔑ナデ後、ナデ。体部横ナデ。 内面 体部に粗い刷毛目有り。体一口径部横ナデ。底部周縁に指頭痕有り。	
3	高杯 (土師器)	脚部残存。 底 11.8cm	南東壁際 床面上7cm。	①砂粒を少し含む。 ②浅黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 脚部粗い蔑ナデ。裾部横ナデ。 内面 脚部横方向蔑削り。裾部横ナデ。	
4	高杯 (土師器)	杯底部 1/2残存。 径 11.9cm	西側 床面直上。	①はは均質。 ②棕色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部粗い蔑削き。後部横ナデ。 内面 ナデ後、放射状蔑削き。火はぜによる割れ痕有り。接合は差し込み式か。	
5	高杯 (土師器)	脚部1/3残存 底 17.8cm	東壁際 床面上2cm。	①はは均質。 ②浅黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 脚部粗い蔑ナデ。裾部横ナデ。 内面 脚部横方向蔑削り。裾部横ナデ。裾周縁部に粘土カス付着。	
6	鉢 (土師器)	体一口径部 1/5残存。	南東壁際 床面上5~10cm。	①はは均質。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下端横方向蔑削り。粗い刷毛目有り。 口径部横ナデ。 内面 体部ナデ後、粗い放射状蔑削き。口径部横ナデ。内外共に駆付着。	
7	皿 (土師器)	口径部小片。	北東部。 床面上2cm。	①はは均質。 ②にぶい黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部縦方向の粗い刷毛目。口径部横ナデ。 内面 体部縦方向、口径部縦方向の粗い刷毛目後、ナデ。内外共に駆付着。	
8	壺 (土師器)	口径一底部 残存。 口 16.4cm	南東部 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部縦一斜め方向の粗い刷毛目後、ナデ。 頸一口径部横ナデ。 内面 体一頸部蔑ナデ。口径部横ナデ。 内外共に駆付着。	
9	壺 (土師器)	体部下半一 底部残存。 底 7.6cm	東壁際 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部蔑押さへ。体部上→下の縦方向の粗い刷毛目。体部下端横ナデ。 内面 横一斜め方向の蔑ナデ後、ナデ。 内外共に駆付着。	8の下半部と考えられる。

第四章 上植木老町田遺跡

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
10	甕 (土師器)	ほぼ完形。 口 19.0cm 高 31.3cm 底 7.8cm	中央部床面直 上に正位の状 態で出土。	①砂粒を多く含む。 ②棕色。 ③酸化炎・良好。	外面 底～付部火はぜによる刺離が著しい。口縁部横ナデ。 内面 体部下斜め方向の裏ナデ。上半部横方向の裏ナデ。口縁部横ナデ。	
11	甕 (土師器)	底部残存。 底 5.8cm	南東隅 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい棕色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施押し、体部斜め方向の粗い刷毛目。 内面 裏ナデ後、ナデ。外面に煤付着。	
12	甕 (土師器)	底部残存。 底 5.0cm	覆土中。	①ほぼ均質。 ②黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施ナデ。体部施削り後、ナデ。 内面 丁寧なナデ。 内外共に煤付着。	
13	壺 (土師器)	底部残存。 底 8.0cm	中央部 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②棕色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部細かな裏ナデ。体部裏ナデ後、ナデ。 内面 裏ナデ後、粗い施磨き。	
14	甕 (土師器)	底部残存。 底 4.0cm	北東部 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部ナデ。体部施削り後、ナデ。煤付着。 内面 ナデ。	丁寧な作りをしている。
15	甕 (土師器)	体部～底部 残存。 底 5.0cm	東壁部 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部施削り。体部施削り後、ナデ。 内面 粗い裏ナデ後、ナデ。火はぜによる刺離痕有り。内外共に煤付着。	
16	壺 (土師器)	体～口縁部 1/3残存。 口 15.8cm	中央部 床面直上。	①ほぼ均質。 ②黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部裏ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部裏ナデ。頸部に粘土の接合痕が残る。 口縁部横ナデ。	13の上半部と考えられる。

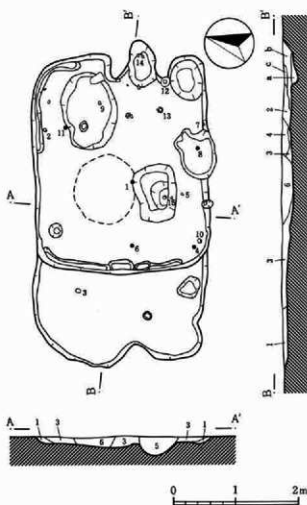


第239図 第11号住居跡出土遺物実測図

第86表 第11号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	高台付筒 (須恵器)	1/2残存。 口 11.9cm 高 5.1cm 底 6.5cm	中央やや北側 床面上6cm。	①砂粒を少し含む。 ②浅黄色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部糸切り磨した後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。光沢の有る煤が厚く付着。	二次焼成によりやや軟質化。

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	底・整形の特徴	備考
2	高台付甕 (須恵器)	体-口縁部 1/3残存。 口 16.2cm	中央部4地点 床面上6cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい藍色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口ロ成形。口縁部に歪み有り。高台貼付け痕有り。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
3	高台付甕 (須恵器)	高台部残存。 底 7.0cm	中央部 床面上5cm。	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転口ロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。底面全体に粗いナデ。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
4	脚付壺 (土師器)	体-口縁部 1/2残存。 口 12.3cm	3号住居北西部 部3地点。 床面上5-9cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい藍色。 ③還元炎・良好。	外面 体部火はぜによる剝離が著しい。口縁部横ナデ。 内面 体部粗いナデ。口縁部横ナデ。 内外共に係付着。	
5	脚付壺 (土師器)	体部下位- 脚部残存。	中央部 床面上11cm。	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・良好。	外面 脚部粗い刷毛目。体部刷毛目調整。方向は共に下-上。 内面 脚部粗いナデ。体部粗ナデ。	3号住居に伴うか。
6	鉢? (土師器)	口縁部 小破片。	南側。 床面上6.5cm。	①砂粒を多く含む。 ②黄褐色。 ③還元炎・良好。	外面 体部斜め方向蔑削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。焼成前ひび割れの輪郭痕有り。	3号住居に伴うか。



第240図 第4号住居跡実測図

第4号住居跡(第240・241図、図版84・101)

位置 758.0Cグリッド

本住居跡は、北西部に5号井戸が重複していたが、本遺跡の中にあつては、遺存状態が比較的良好であった。平面形は、東西方向が長く、南辺及び東辺がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。

規模は、東西方向4.30-4.50m・南北方向2.50mを測り、西辺の走向はN10°Wである。なお、本住居は西側に1.5m拡張されている状況が覆土の観察によって観察されたが、しっかりとした壁面は捉えられなかった。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高8~12cmのローム層の壁面を確認した。

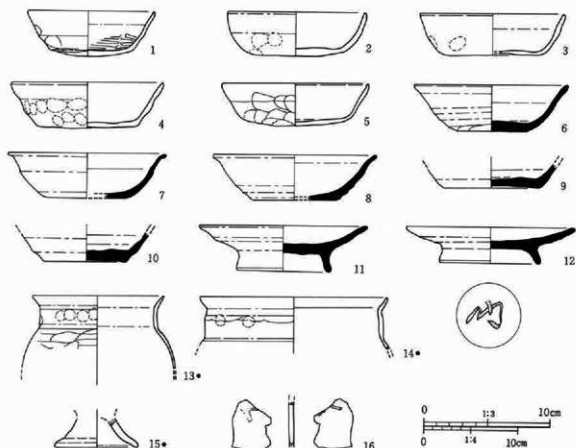
1. 黄褐色土。ロームを含む。
2. 黒色土。F.P.・ロームを含む。
3. 黄色土。F.P.・ロームを含む。
4. 黄褐色土。F.P.・炭・ロームを含む。
5. 黄褐色土。F.P.・炭を含む。
6. 黄色土。F.P.・埴土・炭を含む。
- a. 黄色土。埴土・炭を含む。
- b. 埴土・灰の混土層。
- c. 黄褐色土。F.P.・炭を含む。

第四章 上植木町田遺跡

床面はほぼ平坦で、中央部に径約 110cm程の範囲で焼けた部分が認められ、西辺及び北辺の東半部には幅約10cm・深さ 5cm前後の周溝が巡っていた。南東隅には長径65cm・短径50cmの長円形をした深さ26cmの貯蔵穴が穿たれていた。床面のピットは後世のものであるが、性格は不明である。

竈は、東辺の中央から35cm程南寄りの位置に、構築されていた。燃焼部ははちょうど壁際に有り、焚口幅45cm・奥行き70cmを測る。火床面は12cm程窪んでいた。

遺物は、東半部に集中しており、全体の様相から推して、本住居の年代については 9 世紀後半の時期が考えられる。



第241図 第4号住居跡出土遺物実測図

第87表 第4号住居跡出土遺物観察表

No.	容器・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	3/4残存。 口 10.2cm 高 3.6cm 底 6.5cm	床面上10cm。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部手持ち丸削り。体部に指頭圧痕有り。 口縁部横ナデ。 内面 底-体部ナデ。	
2	杯 (土師器)	3/4残存。 口 11.1cm 高 3.5cm 底 7.9cm	北東部壁際。 床面直上。	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 手持ち丸削り。体部に指頭圧痕有り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体-口縁部横ナデ。 内外共に集付着。	

第2節 検出された遺構と遺物

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
3	杯 (土師器)	3/4残存。 口 11.6cm 高 3.0cm 底 7.9cm	北西部。 床面上10cm。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部指い手持ち彫り。体-口縁部指頭圧痕有り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体-口縁部横ナデ。	
4	杯 (土師器)	2/3残存。 口 12.2cm 高 3.6cm 底 8.1cm	南西部。 床面上10cm。	①砂粒を少し含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部手持ち彫り。体部に指頭圧痕有り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体-口縁部横ナデ。 内外共に彫り着。	
5	杯 (土師器)	1/3残存。 口 11.7cm 高 3.4cm 底 8.5cm	東壁際。床面直上。	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部手持ち彫り。体部に指頭圧痕有り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。底部周縁-口縁部横ナデ。	
6	杯 (須恵器)	完形。 口 12.2cm 高 3.7cm 底 5.5cm	床面直上に正位で出土。	①砂粒を多く含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、体部下端手持ち彫り。 内面 回転によるナデ。	
7	杯 (須恵器)	1/5残存。 口 12.6cm 高 3.6cm 底 6.0cm	東壁際ビット内。	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナデ。	
8	杯 (須恵器)	1/5残存。 口 13.0cm 高 3.5cm 底 6.6cm	東壁際ビット内。	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、体部下端彫り。 内面 回転によるナデ。	
9	杯 (須恵器)	1/4残存。 底 7.6cm	北東部ビット内。	①砂粒を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部彫り。 内面 回転によるナデ。	
10	杯 (須恵器)	底部残存。 底 6.7cm	南西隅。 床面上8cm。	①はは均質。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、周縁部彫り。底部指い丸ナデ。 内面 回転によるナデ。底面に捺痕有り。	転用碗か?
11	高台付皿 (須恵器)	3/4残存。 口 13.4cm 高 3.7cm 底 7.5cm	北東壁際。 床面上4cm。	①砂粒を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 底部回転による彫り後、全面ナデ。 内外共に彫り着。	
12	高台付皿 (須恵器)	完形。 口 13.5cm 高 2.8cm 底 8.1cm	甕手前に被せられた状態。	①砂粒を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文不明。
13	甕 (土師器)	口縁-胴部残存。 口 14.0cm	甕手前に、口縁を上にして潰れて出土。	①はは均質。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 胴-肩部彫り。頸部に指頭圧痕有り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	胴部甕の上部と考えられる。
14	甕 (土師器)	口縁部1/6残存。 口 20.0cm	甕内に散在。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 肩部彫り。胴部に指頭圧痕有り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。口縁部に彫り着。	他にも破片があるが、接合不能。

第四章 上植木老町田遺跡

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	底・整形の特徴	備考
15	脚付甕 (土師器)	脚部残存、 底 8.8cm	中央部ピット 内。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炎・良好。	内外共に横ナデ。	
16	杯 (土師器)	底部破片。	覆土中。	①砂粒を少し含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 蓋削り。 内面 ナデ。 内外面共に墨書有り。破片のため釈文不明。	

第5号住居跡(第242・243図、図版84・102) 位置 758.5Eグリッド

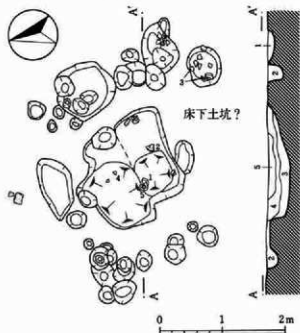
本住居跡は、微高地のほぼ頂部に位置し、現地表面から遺構確認面までの深さが約5cmしかなかった為に、遺存状態が極めて悪かった。結果的に、竈の痕跡と貯蔵穴及び、僅かに残った床面の精査によって土坑・ピット等を検出したにとどまった。平面形は、遺存状態から推して、東西方向が長い方形を呈すると思われる。

規模は、東西方向3.80m・南北方向2.70m以上になると考えられる。

床面は、遺物の出土状況から辛うじて確認できる程度であったが、貯蔵穴は、長径65cm・短径50cm・深さ20cmの載頭円錐形で、内部から須恵器高台付皿が出土した。

竈は、東辺の南寄りの位置に構築されていたが、上部を欠くために詳細は不明である。

遺物は、少なかったが、貯蔵穴から出土した須恵器皿には9世紀後半の様相が認められるので、本住居の年代についてもこの頃と考えられる。



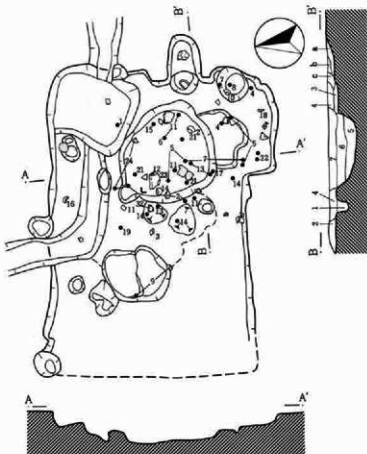
第242図 第5号住居跡実測図



第243図 第5号住居跡出土遺物実測図

第88表 第5号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	3/4残存。 口 12.1cm 高 3.3cm 底 7.8cm	床下土坑内。	①ほぼ均質。 ②棕色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部手持ち鹿削り。体部に帯頸圧痕有り。 口縁部横ナデ。 内面 底一体部横ナデ。 内外共に口唇部強い横ナデ。	
2	杯 (土師器)	3/4残存。 口 12.4cm 高 3.4cm 底 7.7cm	床下土坑内。	①ほぼ均質。 ②棕色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部手持ち鹿削り。体部に帯頸圧痕有り。 口縁部横ナデ。 内面 底一体部横ナデ。 内外共に口唇部強い横ナデ。	底部外面に 墨書有り。 表文不明。
3	杯 (須恵器)	ほぼ定形。 口 12.0cm 高 3.1cm 底 6.8cm	貯蔵穴内。	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転クロコ成形。底部回転糸切り後、周 縁部鹿削り。 内面 回転によるナデ。	
4	杯 (須恵器)	底部残存。 底 6.8cm	床下土坑内。	①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転クロコ成形。底部回転糸切り後、周 縁部鹿削り。 内面 回転によるナデ。	
5	高台付皿 (須恵器)	ほぼ定形。 口 12.3cm 高 3.4cm 底 7.9cm	床下土坑内。	①砂粒を多く含む。 ②灰色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転クロコ成形。底部回転糸切り後、高 台貼付け。 内面 回転によるナデ。	重ね焼き痕 が三日月状 に残る。



第6号住居跡(第244～246図、国版84・103)位置 758.5Fグリッド

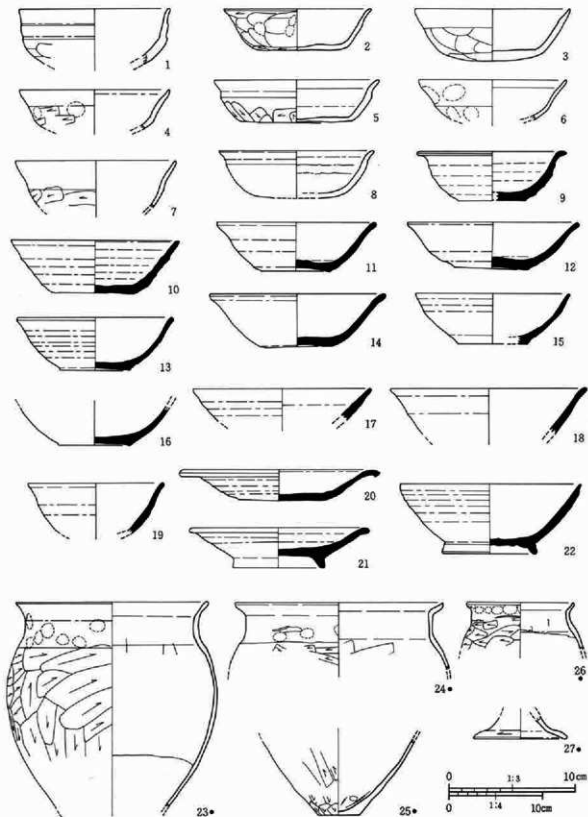
本住居跡は、16号溝及び、耕作に伴うと考えられる土坑の重複が著しかったために、西辺部の残存状況が悪く、明確な壁を捉えることができなかった。先後関係については、本住居が最も先行することが確認されている。平

1. 注記漏れ。
 2. 褐色土・F・P・灰を含む。
 3. 鮮褐色土・炭・ロームを含む。
 4. 褐色土・軽石を含む。
 5. 暗褐色土・炭・ロームを含む。
 6. 淡褐色土・炭・ロームを含む。
 7. 淡褐色土・焼土・灰・ロームを含む。
- a. 灰層。
b. 褐色土・焼土・炭を含む。
c. 焼土層。

0 1 2m

第244図 第6号住居跡実測図

第四章 上植木町田遺跡



第245图 第6号住居跡出土遺物実測图 (1)

面形は、南東隅及び北東隅に30～50cm×140cm前後の方形張り出し部を持ち、東辺がやや歪んだ東西方向に長い隅丸不整形を呈すると考えられる。

規模は、南北方向3.40mを測り、東西方向については4.70mを確認した。北辺に直行する線の走向はN10°Eである。

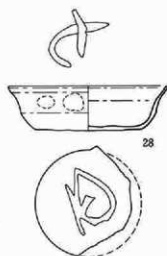
壁はほぼ垂直にローム層まで掘り込まれており、残存高6～15cmを測る。

床面はほぼ平坦で、中央部には長径1.5m・短径1.35m・深さ15cmの不整形の穴による攪乱が認められた。踏み固められた範囲等は不明である。確認し得た範囲内においては、周溝及び柱穴は検出されなかったが、覆土及び出土遺物の様相から推して貯蔵穴と考えられる、径45～55cm・深さ25cmで不整形をした穴が南東隅に認められた。

竈は、東辺の中央から40cm程南寄りの位置に川原石と粘土を用いて構築されており、焚口幅45cm・奥行き75cmを測る。燃焼部は壁外に有り、火床面には灰層が2cm程認められ、中央部には支脚に使用したと考えられる石が遺存していた。

遺物はほぼ全域に散らばって出土したが、細片が多かった。全体の様相から推して、本住居の年代については9世紀後半の時期が考えられる。

遺物はほぼ全域に散らばって出土したが、細片が多かった。全体の様相から推して、本住居の年代については9世紀後半の時期が考えられる。



第246図 第6号住居跡

出土遺物実測図 (2)

第89表 第6号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	底・整形の特徴	備考
1	杯蓋 (須恵器)	小破片。 口 12.0cm	北東部。 床面上9cm。	①ほぼ均質。 ②黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 天弁部鈍削り。体部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
2	杯 (土師器)	3/4残存。 口 11.7cm 高 3.2cm 底 7.4cm	中央部土坑内。	①ほぼ均質。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部手持ち鈍削り。体部粗いナデ。口縁部横ナデ。底一体部に龍頭圧痕有り。 内面 体一口縁部横ナデ。 内外共に集付着。	
3	杯 (土師器)	1/3残存。 口 12.4cm 高 4.1cm 底 8.0cm	中央部床面上 12cm。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・軟質。	外面 底部手持ち鈍削り。体部斜め方向鈍削り。 口縁部横ナデ。 内面 体一口縁部横ナデ。 内外共に口縁部に集付着。	
4	杯 (土師器)	体一口縁部 1/3残存。 口 11.9cm	南東隅。 床面上10cm。	①ほぼ均質。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下端鈍削り。体部粗い鈍削り後、ナデ。 口縁部横ナデ。 内面 体一口縁部横ナデ。	

第IV章 上植木宅町田遺跡

No	器種・器形	残存・量数	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
5	杯 (土師器)	1/3残存。 口 13.1cm 高 3.4cm 底 8.7cm	中央部土坑及 び覆土中。	①砂粒を含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部手持ち彫削り。体部粗い彫削り。口縁部強い横ナダ。 内面 底一体部ナダ。口縁部強い横ナダ。 内外共に煤付着。	
6	杯 (土師器)	体一口縁部 1/4残存。 口 11.8cm	中央部土坑内。	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部に指頭圧痕有り。口縁部横ナダ。 内面 体一口縁部横ナダ。	
7	杯 (土師器)	体一口縁部 1/3残存。	中央部土坑内。	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 体部下端彫削り。指頭圧痕有り。口縁部横ナダ。 内面 体一口縁部横ナダ。内外共に煤付着。	
8	杯 (土師器)	1/4残存。 口 12.3cm 高 3.8cm 底 6.8cm	貯蔵穴内。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部手持ち彫削り。体部粗いナダ。指頭圧痕有り。口縁部強いナダ。 内面 底一体部ナダ。	
9	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 12.0cm 高 3.9cm 底 5.3cm	西側土坑内。	①砂粒を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロコ口成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナダ。	
10	杯 (須恵器)	2/3残存。 口 13.4cm 高 4.2cm 底 6.3cm	貯蔵穴内。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロコ口成形。底部回転糸切り後、周縁部手持ち彫削り。 内面 回転によるナダ。	二次焼成によりやや軟質化。
11	杯 (須恵器)	2/3残存。 口 12.7cm 高 3.8cm 底 5.4cm	中央部土坑内。	①砂粒を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロコ口成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナダ。	
12	杯 (須恵器)	ほぼ完形。 口 13.7cm 高 4.1cm 底 5.9cm	中央部土坑内。	①砂粒及び小礫を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロコ口成形。底部回転糸切り後、無調整。口縁部回転によるナダ。 内面 回転によるナダ。	
13	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 12.5cm 高 4.2cm 底 5.5cm	中央部土坑部。	①砂粒を多く含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロコ口成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナダ。	
14	杯 (須恵器)	1/2残存。 口 14.0cm 高 4.2cm 底 6.0cm	中央部土坑内。	①砂粒及び褐鉄鉱粒を含む。 ②赤褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロコ口成形。底部回転糸切り後、周縁部彫削り。 内面 回転によるナダ。 内外共に煤付着。	二次焼成によりやや軟質化。
15	杯 (須恵器)	1/4残存。 口 12.2cm 高 4.0cm 底 5.5cm	中央部土坑内。	①砂粒を多く含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロコ口成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナダ。	二次焼成によりやや軟質化。
16	杯 (須恵器)	底一体部1/2 残存。 底 5.8cm	北壁際。 床面直上。	①砂粒を含む。 ②灰褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロコ口成形。底部回転糸切り後、周縁部手持ち彫削り。 内面 回転によるナダ。内外共に煤付着。	

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
17	杯 (須恵器)	1/4残存。 口 14.2cm	中央部土坑内。	①砂粒を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	
18	杯 (須恵器)	口縁1/4残存 口 15.5cm	南東隅。 床面上7cm。	①砂粒を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
19	杯 (須恵器)	1/5残存。	中央部。 床面上10cm。	①砂粒を多く含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。 内面 回転によるナデ。	
20	皿 (須恵器)	3/4残存。 口 16.0cm 高 2.5cm 底 6.5cm	中央部土坑内。	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、無調整。 内面 回転によるナデ。 内外共に煤付着。二次焼成によりやや軟質化。	
21	高台付皿 (須恵器)	ほぼ完成。 口 14.2cm 高 3.2cm 底 7.2cm	中央部土坑内。	①砂粒及び小礫を含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。 内外共に煤付着。二次焼成によりやや軟質化。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。
22	高台付碗 (須恵器)	1/4残存。	中央部土坑内。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。 内外共に煤付着。二次焼成によりやや軟質化。	
23	甕 (土師器)	口縁一部残存。 口 20.4cm	中央部土坑内。	①砂粒を含む。 ②赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 胴部斜め方向彫削り。肩部横方向彫削り。 頸部粗い荒ナデ。指頭圧痕有り。口縁部横ナデ。 内面 体部ナデ。頸部粗い荒ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	
24	甕 (土師器)	口縁部1/8残存。 口 22.1cm	中央部土坑内。	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 肩部彫削り。頸部粗い荒ナデ。口縁部横ナデ。口唇部に沈線有り。頸部に指頭圧痕有り。 内面 肩部荒ナデ。胴一口縁部横ナデ。	
25	甕 (土師器)	体部下位～底部残存。 底 4.4cm	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部一定方向の彫削り。体部斜め方向彫削り。煤付着。 内面 底部粗い荒ナデ。体部火はぜにより割離。	
26	甕 (土師器)	口縁一部残存。	中央部土坑内。	①ほぼ均質。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 胴一肩部彫削り。頸部粗い荒ナデ。口縁部横ナデ。胴一口縁部に指頭圧痕有り。 内面 丁寧なナデ。口縁部横ナデ。 口縁部に煤付着。	脚付甕の上部と考えられる。
27	脚付甕 (土師器)	脚部2/3残存 底 10.0cm	覆土中。	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	内外面共に横ナデ。 内外共に煤付着。	
28	杯 (土師器)	2/3残存。 口 12.7cm 高 3.5cm 底 8.4cm	北西部。	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部手持ち彫削り。体部下半粗い荒削り。 指頭圧痕有り。口縁部横ナデ。 内面 体一口縁部横ナデ。	底部内外面に墨書有り。 釈文不明。

第IV章 上植木老町田遺跡

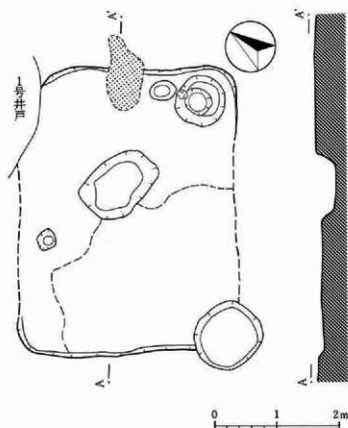
第7号住居跡(第247・248図、図版85・104) 位置 759.5Dグリッド

本住居跡は、北東隅が1号井戸によって掘り取られおり、南東隅には円形のピットが重複していた。先後関係については、本住居がいずれにも先行することが確認されている。平面形は、上部を殆ど削られているために遺存状態が芳しくない部分があるが、東西方向が長く北辺がやや歪んだ隅丸不整形を呈すると考えられる。

規模は、東西方向4.45m・南北方向3.40m程の大きさと考えられる。西辺の走向はN30°Wである。

壁は、緩い南傾斜地形であり遺構検出面からの掘り込みが浅く残りが悪いが、現存高2~14cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、南西部を除いて強く踏み固められていた。周溝及び柱穴は検出されなかったが、南東



第247図 第7号住居跡実測図

第90表 第7号住居跡出土遺物観察表

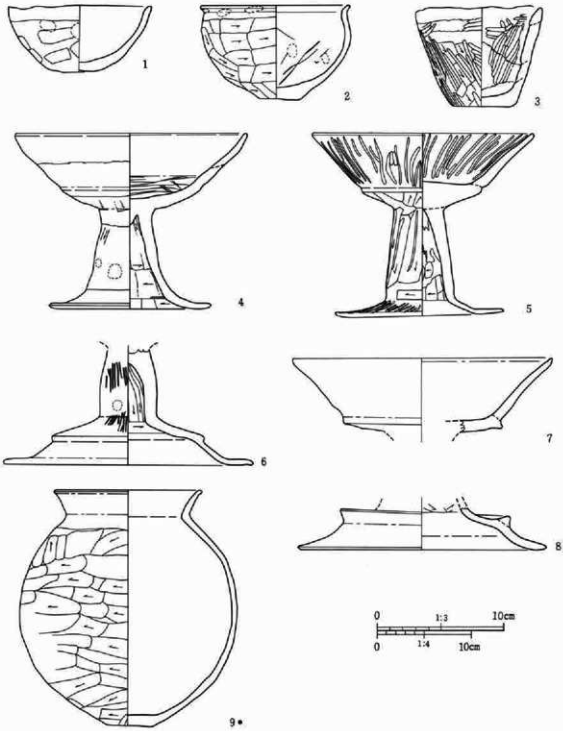
No.	器種・器形	残存・量数	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	口縁2/3欠損 口 11.4cm 高 5.3cm 底 4.5cm	貯蔵穴内一括 出土。	①砂粒を少し含む。 ②赤褐色。 ③酸化灰・良好	外面 体部横方向の粗い彫削り。底部彫押さえ。 口縁部横ナデ。 内面 ナデ後、粗い磨磨き。口縁部横ナデ。火は ぜによる割離痕有り。内外共に煤附着。	
2	杯 (土師器)	3/4残存。 口 11.9cm 高 7.3cm 底 3.1cm	貯蔵穴内一括 出土。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 体部横方向の粗削り。底部彫押さえ。口縁部 横ナデ。 内面 磨ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に口縁部に煤附着。	

隅に径80cmの円形で深さ40cmの載頭円錐形をした貯蔵穴と考えられる穴が検出された。内部からは遺物が多量に出土した。なお、中央部の85cm×120cm・深さ34cmの隅丸方形の穴については、本住居よりも後出するものであることが確認されているが性格は不明である。

竈は、東辺のほぼ中央部に構築されていたが、上部を殆ど削られてしまったために詳細は不明である。焼土及び灰の分布範囲は図示した通りである。

遺物は、図示したものは全て貯蔵穴内出土であり、他に西側を中心にして10数点の細片が出土しているが、実測に耐えられるような接合関係は得られなかった。本住居の年代については5世紀中頃の時期が考えられる。

第2節 検出された遺構と遺物



第248図 第7号住居跡出土遺物実測図

第四章 上植木宅町田遺跡

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
3	鉢 (土師器)	完形。 口 10.0cm 高 7.8cm 底 4.5cm	貯蔵穴内一括 出土。	①ほぼ均質。 ②灰黄色。 ③酸化炎・良好。	外面 施削り後、体部粗い施磨き。口縁部横ナデ。 底～体部の半分に煤が付着し半環状状態。 内面 ナデ後、粗い施磨き。粘土接合痕が明瞭に残る。	竈用支柱の可能性大。
4	高杯 (土師器)	ほぼ完形。 口 18.5cm 高 13.8cm 底 12.6cm	貯蔵穴内一括 出土。	①砂粒を少し含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 杯底～脚部粗いナデ。杯・裾部横ナデ。 内面 杯部ナデ。脚部縦方向施削り。裾部ナデ。 接合は差し込み後、施磨き。 内外共に煤付着。	
5	高杯 (土師器)	ほぼ完形。 口 17.6cm 高 14.4cm 底 13.3cm	貯蔵穴内一括 出土。	①ほぼ均質。 ②赤色。 ③酸化炎・良好。	外面 杯底～脚部施削り後、粗い施磨き。杯・裾部放射状施磨き。 内面 杯部ナデ後、体部放射状施磨き。脚部縦方向の粗い施削り。裾部ナデ。内外共に煤付着。	
6	高杯 (土師器)	脚部1/4残存 底 19.0cm	貯蔵穴内一括 出土。	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炎・良好。	外面 脚部粗いナデ。裾部横ナデ。 内面 脚部施磨き。上半部縦方向施削り。下半部ナデ。接合は差し込み後、施磨き。	
7	高杯 (土師器)	杯部1/2残存 口 20.8cm	貯蔵穴内一括 出土。	①ほぼ均質。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	内外共に丁寧なナデ。縦・口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	
8	高杯 (土師器)	裾部残存。 底 19.2cm	貯蔵穴内一括 出土。	①ほぼ均質。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	貼付け凸帯。内外共にナデ。脚部内面縦方向の施削り。内外共に煤付着。	
9	甕 (土師器)	3/4残存。 口 15.7cm 高 24.5cm 底 4.7cm	貯蔵穴内一括 出土。	①砂粒を多く含む。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 底～体部施削り。胴上半部粗いナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴下半部刺磨きが著しい。上半部施削り。 外面及び口縁部内面に煤付着。	

第8号住居跡(第249・250図、図版85・105) 位置 760.5Gグリッド

本住居跡は、西半部が調査区域外にかかるために未完掘である。また、耕作に伴うと考えられる土坑の重複が著しかったために遺存状態が芳しくなかった。平面形は、隅丸方形を呈すると考えられる。

規模は、北辺1.10m・東辺3.05mを確認した。東辺の走向はN49°Wである。

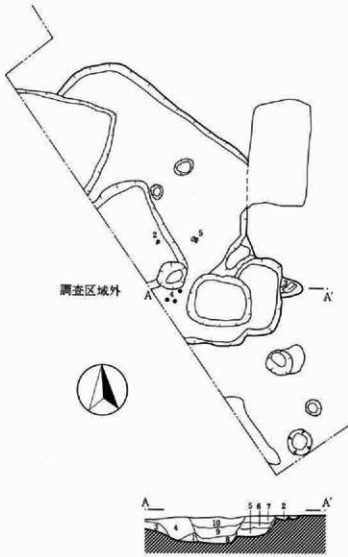
壁は30°前後の傾斜を以てローム層まで掘り込まれており、現存高16～30cmを測る。

床面はほぼ平坦で、全体的に強く踏み固められていた。確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。なお、P₁は覆土の状況から推して土坑墓の可能性が高い。

竈については、南東隅の一部に焼土が認められたが、詳細は不明である。

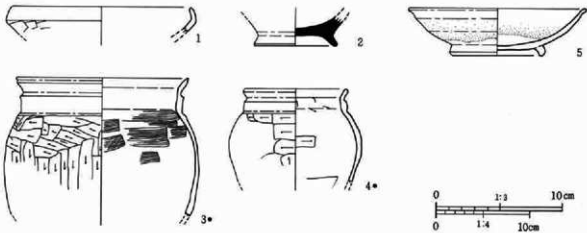
遺物は南東部に多く散在していた。本住居の年代については10世紀前半の時期が考えられる。

第2節 検出された遺構と遺物



1. ローム層。
2. 焼土層。
3. 淡褐色土。ロームを含む。
4. 褐色土。ロームを含む。
5. 暗褐色土。焼土・炭・ロームを含む。
6. 淡褐色土。炭・ロームを含む。
7. 褐色土。ロームブロックを含む。
8. 黄褐色土。ロームブロックを含む。
9. 褐色土。炭・ロームを含む。
10. 黒色土。F.P.・炭を含む。

第249図 第8号住居跡実測図



第250図 第8号住居跡出土遺物実測図

第91表 第8号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	口縁部小破片。 口 14.2cm	覆土中。	①ほぼ均質。 ②明赤褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 体部斜め方向彫削り。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ。	
2	高台付碗 (須恵器)	底一体部下 端1/2残存。 底 6.6cm	住居内P ₃ 中。	①砂粒を多く含む。 ②黄褐色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転口クロ成。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。火はぜによる割離痕有り。	二次焼成によりやや軟質化。
3	壺 (土師器)	体一口縁部 1/4残存。 口 18.4cm	南東隅 床面上12cm。	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 胴部縦方向彫削り。肩部横方向彫削り。頸部強い蔑ナデ。口縁部横ナデ。口唇部に沈線有り。 内面 体部ナデ。肩部蔑ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。火はぜによる割離痕有り。	
4	壺 (土師器)	上半1/2残存 口 11.0cm	南西隅 床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炭・良好。	外面 胴部斜め一横方向彫削り。肩部横方向彫削り。頸部強い蔑ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部強い蔑ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内外共に煤付着。	脚付壁の上部と考えられる。
5	高台付皿 (灰釉陶器)	1/5残存。 口 14.2cm 高 3.8cm 底 7.6cm	南東部 床面直上。	①ほぼ均質。 ②灰白色。 ③還元炭・硬質。	外面 右回転口クロ成。底部切り離し調整後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。重ね焼き痕有り。 内外共に漬け掛けによる淡緑色釉。	

第9号住居跡(第251図、図版85) 位置 759.0Eグリッド

本住居跡は、遺構確認面からの掘り込みが浅く、土坑の重複があったために遺存状態が芳しくなかった。

平面形は、東西方向がやや長く北東隅及び西辺がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。

規模は、東西方向3.80m・南北方向3.66m程になると考えられる。東辺の走向はN19°Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高2.5～11cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、強く踏み固められていたが溝溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈については全く資料を欠く。

遺物は、南東部を中心に土師器及び回転糸切り底の須恵器杯の細片が出土したが、実測に耐えられるような接合関係は得られなかった。

第10号住居跡(第252・253図、図版85) 位置 757.5Dグリッド

本住居跡は、耕作に伴うと考えられる2号土坑及び1号掘立柱建物跡と重複関係にある。先後関係については、本住居が最も先行することが確認されている。平面形は、東西方向が長く、北辺がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。

規模は、東西方向3.76m・南北方向2.90mを測り、西辺の走向はN16°Eである。

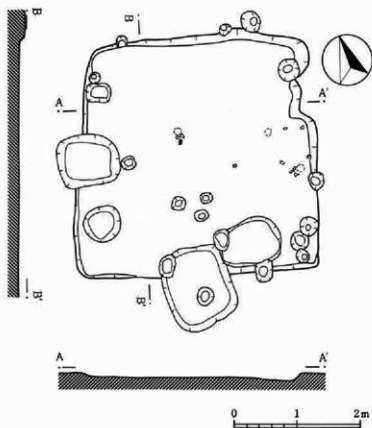
壁は、上部を殆ど削り取られており、ローム層の壁面を2.5～5.5cm確認した。

床面はほぼ平坦で、中央部の60×110cmの範囲が焼けており、南東隅からは炭化材が出土した。このことから、本住居は焼失家屋と考えられる。また、東辺を除いて幅約15cm・深さ約5cmの周溝が巡っていた。なお、中央の穴には炭化物を含む黄褐色土が詰まっていたことから床下土坑と考えられる。

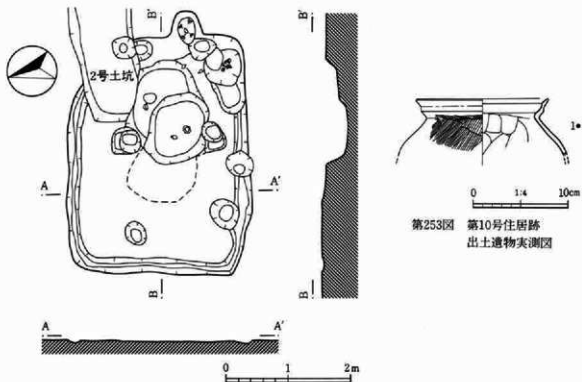
竈は、東辺の中央からやや南寄り位置に構築されており、火床面が若干窪んで焼けていたが、上半部が

削り取られてしまっていたために詳細は不明である。

遺物は竈周辺に集中して出土したが、殆どが細片であり、実測に耐えられるような接合関係は得られなかった。



第251図 第9号住居跡実測図



第253図 第10号住居跡
出土遺物実測図

第252図 第10号住居跡実測図

第92表 第10号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	壺 (土師器)	口縁一部破 口 14.0cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 下→上方向の斜め刷毛目。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	混入品。

第12号住居跡(第254・255図、図版85・105・106) 位置 756.5Gグリッド

本住居跡は、調査区の南西部に位置しており、西側の大部分が調査区域外にかかる。拡張部分においては、現地表面から床面レベルまでの深さが15cmしかなく、耕作に伴う攪乱のため、遺存状態が極めて悪かった。北壁及び東壁の一部を検出したのみであるが、平面形は、残存状況から推して、南北方向が長い隅丸方形を呈すると考えられる。

規模は、東西方向6.40m・南北方向5.34m以上の大きさで、東辺の走向はN10°Eである。

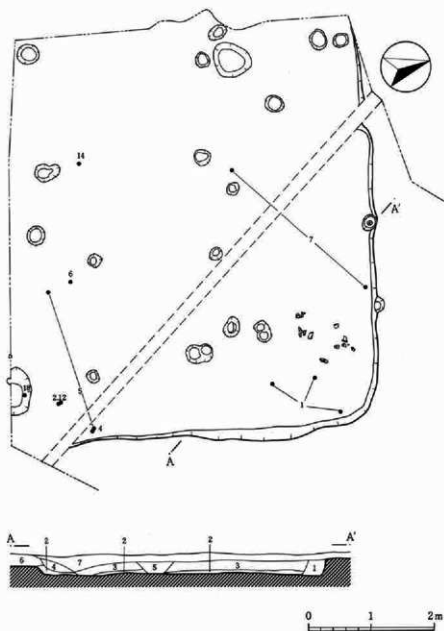
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高8～16cmのローム層の壁面を確認した。

床面は、確認し得た範囲内においてはほぼ平坦であったが、あまりしっかりとしていなかった。また、10数個のピットが検出されたが、柱穴と考えられるものは認められなかった。

遺物は細片が多かったが、ほぼ全域に散在していた。なお、周囲の畑から採集した遺物も考慮すると、本住居の年代については、5世紀前半の時期が考えられる。

第93表 第12号住居跡出土遺物観察表

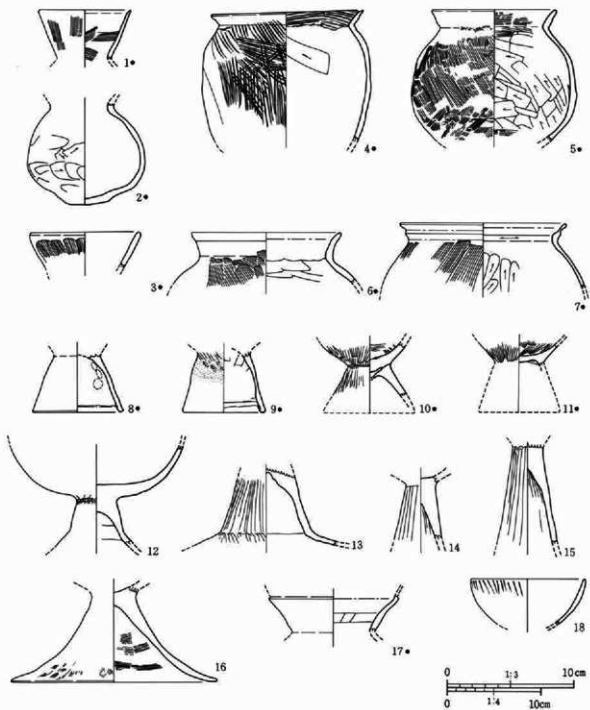
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	広口壺 (土師器)	口縁部 1/2残存。 口 9.8cm	東側。	①ほぼ均質。 ②浅黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 縦方向の細かい刷毛目後、口縁・肩部横ナデ。 内面 横～斜め方向の細かい刷毛目後、口縁部横ナデ。内外共に赤色塗彩。	2の口縁部と考えられる。
2	埴 (土師器)	口縁部欠損 底 4.6cm	南東部 床面上8cm。	①ほぼ均質。 ②浅黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 底部横ナデ。体部塗磨き後、赤色塗彩。 内面 火はぜによる割離が著しい。	二次焼成によりやや軟質化。
3	埴 (土師器)	口縁部残存 口 11.8cm	覆土中。	①砂粒を少し含む。 ②明黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 縦方向の細かい刷毛目後、口縁・肩部横ナデ。 内面 壺ナデ後、口縁部横ナデ。	
4	壺 (土師器)	体一口縁部 1/2残存。 口 16.2cm	南東部 床面上4cm。	①砂粒を少し含む。 ②赤色。 ③酸化炎・良好。	外面 胴部縦方向の粗い刷毛目。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。肩部横ナデ。口縁部粗い刷毛目後、口唇部横ナデ。	
5	壺 (土師器)	体一口縁部 1/3残存。 口 17.7cm	南側2地点。 床面上4cm。	①ほぼ均質。 ②橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 胴部下下部細かい刷毛目。上半部粗い刷毛目。肩部細かい刷毛目。口縁部横ナデ。 内面 胴部横ナデ。肩部粗い刷毛目。口縁部細かい刷毛目後、横ナデ。内外共に灰付着。	
6	壺 (土師器)	口縁部 1/3残存。 口 16.0cm	南側 床面上6cm。	①ほぼ均質。 ②にぶい橙色。 ③酸化炎・良好。	外面 肩部下→上方向の刷毛目。口縁部横ナデ。 内面 肩部横ナデ。頂部に粘土接合痕が明確に残る。口縁部横ナデ後、横ナデ。	



- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 黒褐色砂質土。軽石・炭を含む。 | 5. 暗褐色土。ロームを含む。 |
| 2. 茶褐色土。ロームを含ん。 | 6. 耕作土。ロームブロックを含む。 |
| 3. 茶褐色土。軽石・炭を含む。 | 7. 耕作土。 |
| 4. 草木による攪乱。 | |

第254図 第12号住居跡実測図

第四章 上桶木老町田遺跡



第255図 第12号住居跡出土遺物実測図

第2節 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
7	甕 (土師器)	口縁部 1/2残存。 口 17.7cm	北東部2地点。 床面上9cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 肩部下→上方向の粗い斜め刷毛目。口縁部横ナデ。 内面 肩部下→上方向の浅ナデ。肩部横方向の粗い浅ナデ後、口縁部横ナデ。	
8	脚付甕 (土師器)	脚部1/3残存 底 9.7cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②灰色。 ③酸化炎・良好。	外面 浅ナデ後、ナデ。 内面 粗い浅ナデ。底面浅ナデ。指頭圧痕が残る。内外共に窪付着。	
9	脚付甕 (土師器)	脚部1/3残存 底 8.8cm	覆土中。	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 下平部浅ナデ。上半部浅ナデ後、粗い刷毛目。 内面 上半部縦方向のナデ。下半部横方向のナデ後、折り返し。底面浅ナデ。内外共に窪付着。	
10	脚付甕 (土師器)	体部・脚部 片。	覆土中。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 脚部・体部共に上→下方向の粗い刷毛目。 内面 脚部浅ナデ後、ナデ。体部左回りの粗い刷毛目後、ナデ。ホヅをはめ込んで底面を作る。接合部内面ナデ。	
11	脚付甕 (土師器)	底部小片。	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 上→下方向の粗い刷毛目。 内面 内側底部から放射状の浅ナデ。外側粗い浅ナデ。内外共に窪付着。	
12	高杯 (土師器)	杯部・脚部 1/2残存。	南側 床面上8cm。	①はは均質。 ②黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 脚部粗い浅ナデ。杯部ナデ。 内面 脚部縦方向のナデ後、横方向のナデ。杯部ナデ。	
13	高杯 (土師器)	脚部残存。	覆土中。	①はは均質。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 脚部上→下方向の浅磨き。裾部縦線→内側方向の浅磨き。 内面 脚部横方向の粗いナデ。裾部浅ナデ後、横ナデ。内外共に窪付着。接合は貼付け法か。	
14	高杯 (土師器)	脚部破片。	西側 床面上6cm。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 下→上方向の細かい浅ナデ。 内面 匙状工具を回転させたナデ。 内外共に窪付着。	
15	高杯 (土師器)	脚部破片。	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 下→上方向の細かい浅ナデ。 内面 匙状工具を回転させたナデ。	
16	高杯 (土師器)	脚部1/2残存 底 16.4cm	覆土中。	①はは均質。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 脚部浅ナデ後、丁寧なナデ。裾部細かい刷毛目後、横ナデ。 内面 脚部横方向の細かい刷毛目。裾部横ナデ。	赤色塗彩を施す。
17	甕 (土師器)	頸部1/4残存	覆土中。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 横ナデ。 内面 浅ナデ後、横ナデ。	
18	杯 (土師器)	口縁部 1/3残存。	覆土中。	①はは均質。 ②淡黄褐色。 ③酸化炎・良好。	外面 口縁部粗い刷毛目後、ナデ。 内面 ナデ。	

(2) 掘立柱建物跡

本遺跡からは、3棟の掘立柱建物跡が検出された。明確な出土遺物が無かったために、所属時期を特定できないが、形態・規模等より推して、中近世の建物跡と考えられる。なお、その他にも柱穴になるのではないかと思われる穴が、多数存在した。特に、2～3号井戸周辺の758.5～759.5B・Cグリッド、及び8号井戸周辺の760.0Fポイント付近に散在する穴については、出土遺物の分析によって建物の存在が想定されている。しかしながら、発掘調査中及び整理作業を進める中で、十分な検討を加えたつもりではあるが、結果的に、新たな掘立柱建物遺構を抽出することはできなかった。各遺構の概要は以下の通りである。

第1号掘立柱建物跡 (第256図・図版86) 位置 757.5Eポイント北側

本建物跡は、10号住居跡と重複しており、先後関係については、本建物跡が後出することが確認されている。平面形は、2間×3間で、東西方向に棟を持つ建物跡である。

規模は、桁方向4.00m・梁方向2.80mを測り、棟の走向はN85°Wである。

柱穴は、径30～50cm・深さ40～50cmの円形の掘り方で、概ね円筒状に掘られていた。柱痕は検出されなかったが、底部の状況から推して、径15cm前後の柱が立てられていたと思われる。

P₂・P₇の位置に偏りが認められ、南北方向の柱通りが著しく乱れているが、一応、建物跡と認定した。その他にも、図示した通り、周辺のE～Gラインにかかるピットは、形態・規模・配置等から推して、建物跡あるいは横列になる可能性が大である。明確な出土遺物が無かったために、所属時期は不明である。

第2号掘立柱建物跡 (第257図・図版86) 位置 758.0Dグリッド

本建物跡は、10号溝と重複しており、先後関係については、本建物跡が先行することが確認されている。平面形は、2間×2間で、東西方向に棟を持つ建物跡である。

規模は、桁方向4.40m・梁方向4.20mを測り、棟の走向はN84°Wである。

柱穴は、径約40cm・深さ40cm前後の円形の掘り方で、截頭円錐状に掘り込まれていた。柱穴は検出されなかったが、底部の状況から推して、径10cm前後の柱が立てられていたと思われる。

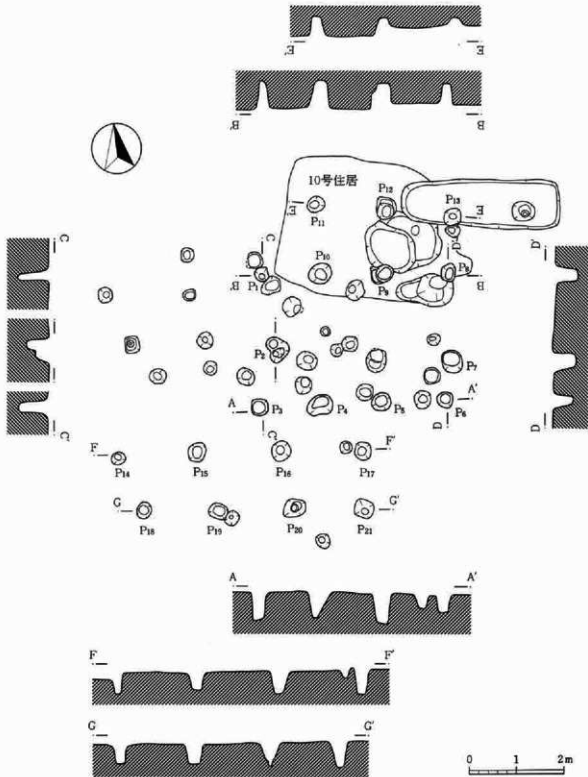
P₆・P₈の位置に偏りが認められ、柱通りが若干乱れているが、柱間寸法は7尺等間隔で設計されたものと思われる。

第3号掘立柱建物跡 (第257図・図版87) 位置 759.0Fグリッド

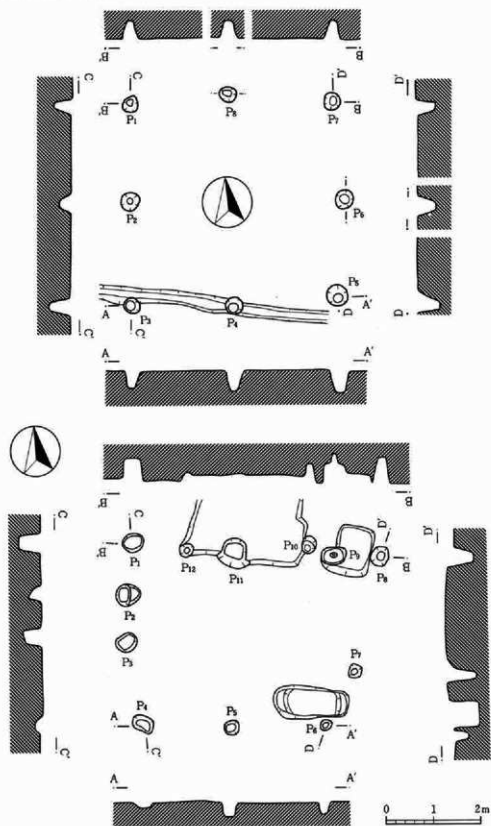
本建物跡は、1号溝と重複しており、先後関係については、本建物跡が後出することが確認されている。なお、周辺には多くのピットが認められ、加えて、耕作に伴うと考えられる攪乱が著しかったために、建物跡としての認定にやや疑問が残るものである。平面形は、柱間に規格性が認められないきらいはあるが、覆土の状況から推して、南北方向に長い不整形形状を呈する。

規模は、東西方向4.00m～5.40m・南北方向3.60m～3.80mを測り、南辺の走向はN85°Wである。

柱穴は、径20～50cm・深さ20～60cmの隅丸不整形の掘り方である。



第256号 第1号掘立柱建物跡実測図



第257図 第2号・3号掘立柱建物跡実測図

(3) 土墳墓・火葬跡

はじめに

本遺跡からは、土墳墓13基と火葬跡1基が検出された。土墳墓の分布は、大きく発掘区の南隅と北西の二つに分けられる。発掘区の南隅では、10基(1~10号土墳墓)が近接・重複して構築されており、墓域は、更に南に広がっていると考えられる。北西では、地下式土墳の周辺に3基(12~14号土墳墓)が10~15mの間隔をおいて構築されている。火葬跡は、発掘区の中央に土墳墓から離れて、単独で構築されている。本跡は、検出時には11号土墳墓としていたため、本報告では11号土墳墓は、欠番になっている。

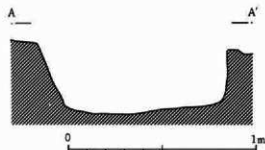
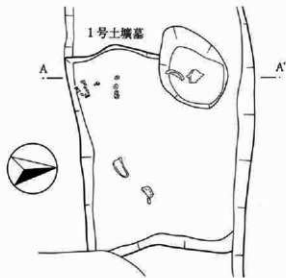
1号土墳墓

発掘区南隅で検出され、2号土墳墓と一部が重複している。新旧関係は、重複部分が一部であるため不明である。形態は、攪乱で削平されているため明らかではないが、他の土墳墓の形態から、隅丸長方形と考えられる。規模は、東西112cm・南北92cm・深さ25~50cmを測る。墓域北西のピットは、遺物の出土状態から、本土墳墓より古いと考えられる。

埋葬姿勢は、骨が遺存していないため、不明である。甕の出土位置から、頭位は西で、南向きと考えられる。甕の北に近接して、永楽通寶・天聖元寶各2枚・政和通寶・感平元寶が各1枚出土している。他に、埋土下層からふいごの羽口、上層から土師質土器皿と不明土製品が出土している。羽口は、2.5m南の3号土墳墓からも出土しているため、混入と考えられる。また、不明土製品は、表土出土のものと接合しているため、本土墳墓には伴わないと考えられる。

2号土墳墓

発掘区南隅で検出され、1号土墳墓と一部が重複している。新旧関係は、重複部分が一部であるため不明である。形態・規模は、南北110cm・東西77cm・深さ35cmの隅丸長方形である。主軸方位は $N3^{\circ}E$ である。埋葬姿勢は、遺存人骨と甕の出土位置から、右側臥屈葬と考えられる。頭位は北である。甕の北に近接して紹聖元寶・至和元寶が各一枚出土している。



第258図 土墳墓実測図(1)

3号土墳墓

発掘区南隅で検出され、2号土墳墓の東に位置し、4号土墳墓と一部が重複する。新旧関係は、重複部分が一部であるため不明である。形態・規模は、南北98cm・東西76cm・深さ10cmの隅丸長方形である。北側のピットは、本土墳墓より古い。

埋葬姿勢は、骨が遺存していないため、不明である。歯は墓壁北側中央から出土しており、頭位は北であるが、顔の向きは不明である。北西隅からは、至道元寶・皇宗通寶が各一枚、不明古銭が二枚出土している。

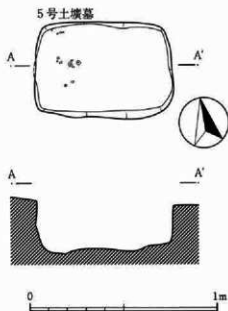
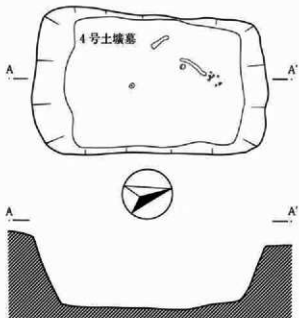
4号土墳墓

発掘区南隅で検出され、3号土墳墓の南に位置し、北壁が重複する。新旧関係は、重複部分が一部であるため不明である。形態・規模は、南北126cm・東西73cm・深さ38cmの隅丸長方形である。主軸方位は、N14°Eである。

骨は遺存状態が悪く、骨片2点が出土しているのみであり、埋葬姿勢は不明である。歯は、北側中央から出土しており、頭位は北と考えられる。墓壁の中央付近で、洪武通寶・永楽通寶・天聖元寶各一枚、不明古銭が二枚出土している。

5号土墳墓

発掘区南隅で検出され、4号土墳墓の東1.3mに位置する。形態は隅丸長方形で、規模は他の土墳墓に比して、やや小さく、東西73cm・南北51cm・深さ



第259図 土墳墓実測図 (2)

27cmを測る。主軸方位はW11°Nである。

埋葬姿勢は、骨が遺存しておらず、不明である。頭位は西であるが、顔の向きは、歯が西側全体から出土しているため不明である。歯の東に近接して、洪武通寶・景德元寶・至和元寶が各一枚出土している。

6号土壌墓

発掘区南隅で検出され、5号土壌墓の東に近接して構築されている。形態・規模は、南北110cm・東西73cm・深さ36cmの不整隅九長方形である。主軸方位はN0.5°Wである。

墓壇の東隅には頭骨が遺存しており、頭骨内とその西には歯が散乱している。埋葬姿勢は不明であるが、頭位は北で、西向きと考えられる。墓壇中央西寄りから、洪武通寶二枚・天聖元寶・紹聖元寶・永樂通寶・不明古銭各一枚が出土している。また、中央からは、不明鉄製品が出土している。

7号土壌墓

発掘区南隅で検出され、3号土坑に近接する。形態・規模は、南北116cm・東西68cm・深さ41cmの不整隅九長方形である。

本土壌墓は、歯・骨共に遺存していない。墓壇中央と西側中央から、洪武通寶・永樂通寶・元祐通寶・天聖元寶・乾元重寶・宗通元寶？が各一枚出土している。

8号土壌墓

発掘区南隅で検出され、7号土壌墓の南西に近接して構築される。9号土壌墓と東壁が重複している。新旧関係は、本土壌墓が古く、9号土壌墓が新しい。形態・規模は、南北97cm・東西60cm・深さ23cmの不整隅九長



第260図 土壌墓実測図 (3)

方形である。主軸方位は、 $N 9^{\circ} W$ である。

骨や歯は遺存しておらず、遺物も出土していないが、形態や構築位置・埋土から、土壌墓と判断した。

9号土壌墓

発掘区南隅で検出され、8号土壌墓と重複する。新旧関係は、本土壌墓が新しく、8号土壌墓が古い。形態・規模は、南北110cm・東西69cm・深さ14cmの楕円形である。主軸方位は、 $N 9^{\circ} W$ である。

骨は遺存しておらず、埋葬姿勢は不明である。歯は墓壇の北西と西から出土している。頭位は北で、西向きと考えられる。歯の西と南に近接して、至和元寶・天聖元寶・紹聖元寶が各一枚出土している。また、墓壇北東の埋土上層から、土師質土器皿が三枚出土している。

10号土壌墓

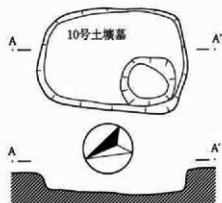
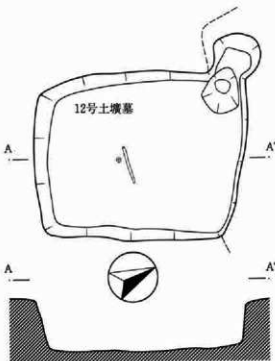
発掘区南隅で検出され、6号土壌墓の南東に位置する。形態・規模は、南北80cm・東西54cm・深さ11cmの隅丸長方形である。主軸方位は、 $N 27^{\circ} E$ である。墓壇北東のピットは、伴うかどうか不明である。

骨は遺存しておらず、埋葬姿勢は、不明である。歯は墓壇北西から出土しており、頭位は北で、西向きであると考えられる。

12号土壌墓

発掘区の北西で検出され、1号住居跡と重複している。形態・規模は、南北113cm・東西90cm・深さ27cmの隅丸長方形である。主軸方位は、 $N 27^{\circ} E$ である。墓壇北東隅のピットは、本土壌墓には伴わない。

埋葬姿勢は骨が遺存していないため、不明である。歯は墓壇の北西から出土しており、頭位は北で、西向きと考えられる。また、墓壇中央からは、不明鉄製品と紹聖元寶が出土している。



第261図 土壌墓実測図 (4)



13号土墳墓

発掘区の北西で検出され、土坑と重複する。新旧関係は、本土墳墓が新しい。東壁の上部は、攪乱により削平されている。形態・規模は、南北116cm・東西69cm・深さ39cmの隅丸長方形である。主軸方位は、N10、5°Eである。

骨が遺存していないため、埋葬姿勢は不明である。歯は、他の土墳墓と異なり、北東から出土している。このため、頭位は北で、東向きと考えられる。

14号土墳墓

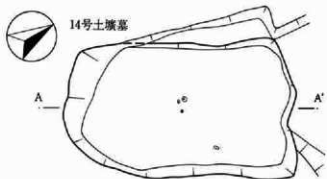
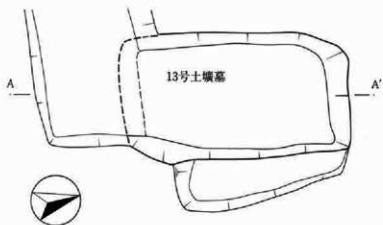
発掘区の北西で検出された。形態・規模は、南北123cm・東西80cm・深さ36cmの不整隅丸長方形である。主軸方位は、N28°Eである。

骨と歯共に遺存しておらず、埋葬姿勢・頭位共に不明である。墓壇中央と東壁北側から、紹聖元寶・不明古銭が各二枚、元符通寶・熙寧元寶が各一枚出土している。なお、不明古銭の一枚には、布と赤色顔料が付着している。

1号火葬跡

発掘区のはほぼ中央に、単独で存在する。形態は、東に30cmの張り出しをもつ隅丸長方形で、規模は、南北116cm・東西66cm・深さ38cmを測る。主軸方位は、N1°Eである。西壁のピットは本火葬跡より新しく、張り出し部の先端付近は攪乱されている。

埋土下層には、多量の炭化物が認められ、南壁を除く各壁は、強く火を受けている。また、底部の壁の付近にも、焼土が認められた。本跡か



第262図 土墳墓実測図 (5)

らは、骨や歯が検出されなかったため、本報告では、火葬跡とした。

まとめ

本遺跡から検出された13基の土壌墓からは、土師質土器皿・波来銭・不明鉄製品が出土している。土師質土器皿は、1号土壌墓から一枚、9号土壌墓から三枚出土している。1号土壌墓出土の土師質土器皿は、口径に比して底径が大きく、器高が低い。これに比べ、9号土壌墓出土の土師質土器皿は、底径小さく器高が高い。これらの特徴を、県内の土師質土器皿の変遷観に当てはめると、前者は16世紀、後者は15世紀末～16世紀のものと考えられる。

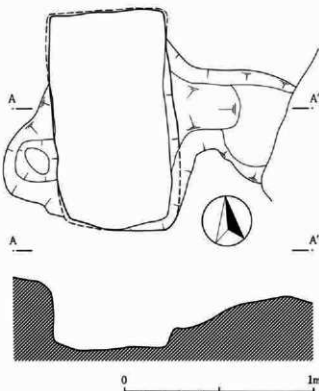
波来銭は、13基のうち10基から、北宋銭24枚・明銭10枚・唐銭1枚・不明7枚の計42枚が出土している。波来銭は、伝世性があるうに、後跡のものが存在するなど、年代決定の手段にはなりにくい。しかし、新旧関係不明の土壌墓

(1・2号土壌墓と3・4号土壌墓)についてみると、いずれも一方にのみ、明銭が認められる。全体では、明銭を出土した土壌墓は5基あるが、これらは互いに重複し合うことはない。また、16世紀代の1号土壌墓には明銭が認められるが、15世紀末～16世紀の9号土壌墓には認められない。従って、本遺跡に関しては、明銭の有無が年代の差を示していると推察される。

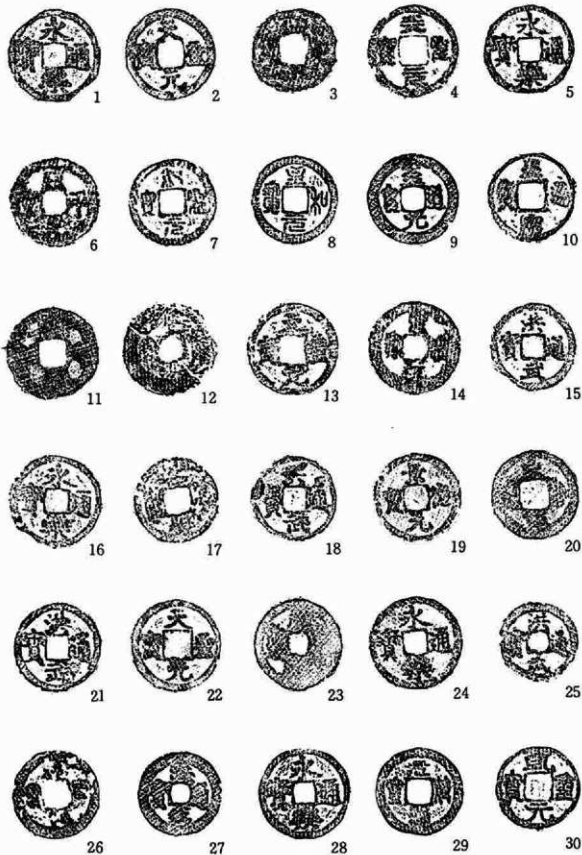
本遺跡の墓域は、発掘区南隅と北西の二つに分けられ、明銭を有する5基は、全て南隅に位置しており、北西の墓域のほうが造墓終了時期が早かったと思われる。また、明銭を出土した5基は、南隅の墓域中でも北寄りに集中する傾向が認められ、南から北に墓域を拡大していったものと考えられる。また、その造墓終了時期は、1号土壌墓の年代から、16世紀代と考えられる。

火葬跡に関しては、遺物が全く出土していないため、時期は判然としないが、後に居住域となる台地の中央に位置していることから、土壌墓群より後の所産とは考えにくく、北西の土壌墓群と同じかやや先行するものと考えられる。実年代では、15世紀末～16世紀以前の可能性が高い。また、火葬跡(墓)は、板碑と密接な関係を有していたことが、新倉午山遺跡¹⁸²・一ノ入遺跡¹⁸³などで指摘されている。本遺跡の場合、板碑は溝や井戸からの出土であり、造立場所が不明であるため、必ずしも火葬跡と関連していたとは言えないが、その時期は14世紀中頃～15世紀であり、先の年代と矛盾しない。従って、火葬跡の年代を14世紀中頃～15世紀と推定しておきたい。

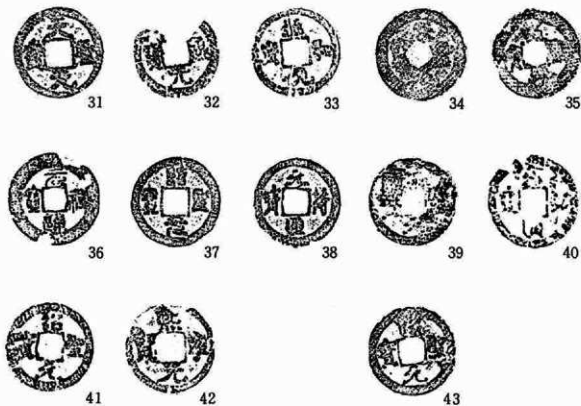
本遺跡は、14世紀中頃～15世紀に火葬跡が築造され、これと同時期、若しくはやや遅れて二つの土壌墓群が形成され始め、全体が墓域となっている。16世紀になると、南隅の一群のみが墓域となり、その後の造墓は行われていない。16世紀には墓域の縮小が認められる。台地の中央には、井戸・溝が検出されており、居住域がかなり近接していたことが窺える。この後、本遺跡は、江戸時代には、全体が居住域となっていく。



第263図 1号火葬跡実測図



第264図 出土銭貨拓影 (1)



第265図 出土錢貨拓影 (2)

第94表 土壌墓出土銭貨一覧表

No	出土遺構	銭文	径	孔	初鋳年	No	出土遺構	銭文	径	孔	初鋳年
1	1号-1	永楽通寶	24mm	6mm	1408年	23	6号-2	紹聖元寶	23mm	5mm	1094年
2	1号-1	天聖元寶	24mm	7mm	1023年	24	6号-3	永樂通寶	24mm	6mm	1408年
3	1号-2	政和通寶	22mm	8mm	1111年	25	6号-4	洪武通寶	21mm	5mm	1368年
4	1号-3	天聖元寶	24mm	8mm	1023年	26	6号-5	不明	23mm	8mm	—
5	1号-4	永樂通寶	24mm	6mm	1408年	27	7号-1	元祐通寶	22mm	5mm	1086年
6	1号-5	感平元寶	24mm	6mm	998年	28	7号-1	永樂通寶	24mm	6mm	1408年
7	2号-1	紹聖元寶	23mm	7mm	1094年	29	7号-1	洪武通寶	23mm	7mm	1368年
8	2号-2	至和元寶	23mm	7mm	1054年	30	7号-2	乾元重寶	22mm	7mm	758年
9	3号-1	至道元寶	24mm	6mm	995年	31	7号-2	天聖元寶	24mm	7mm	1023年
10	3号-1	皇宋通寶	23mm	7mm	1039年	32	7号-2	宋元通寶	22mm	7mm	960年
11	3号-1	不明	24mm	7mm	—	33	9号-1	至和元寶	23mm	7mm	1054年
12	3号-1	不明	25mm	7mm	—	34	9号-2	天聖元寶	24mm	7mm	1023年
13	4号-1	天聖元寶	24mm	7mm	1023年	35	9号-3	紹聖元寶	23mm	7mm	1094年
14	4号-1	不明	24mm	6mm	—	36	14号-3	元祐通寶	24mm	6mm	1086年
15	4号-2	洪武通寶	23mm	6mm	1368年	37	14号-1	紹聖元寶	23mm	7mm	1094年
16	4号-2	永樂通寶	24mm	6mm	1408年	38	14号-1	元符通寶	23mm	7mm	1098年
17	4号-2	不明	22mm	7mm	—	39	14号-1	不明	23mm	7mm	—
18	5号-1	洪武通寶	23mm	6mm	1368年	40	14号-2	紹聖元寶	24mm	7mm	1094年
19	5号-1	景德元寶	23mm	6mm	1004年	41	12号-1	紹聖元寶	23mm	7mm	1094年
20	5号-1	至和元寶	23mm	7mm	1054年	42	14号-4	熙寧元寶	23mm	8mm	1068年
21	6号-1	洪武通寶	23mm	6mm	1368年	43	707.0-B	紹聖元寶	23mm	7mm	1094年
22	6号-2	天聖元寶	24mm	7mm	1023年						

注

注1. 大江正行『群馬県と周辺地域の中世土師瓦工図』、『群馬考古通信第7号』1980年

注2. 鈴木敏弘他『新倉午王山遺跡』和光市午王山遺跡調査会 1981年

注3. 鎌岡 勝他『一ノ入遺跡』埼玉県教育委員会 1980年

第IV章 上植木宅町田遺跡

地下式土壙 (第266・267図、図版92・111)

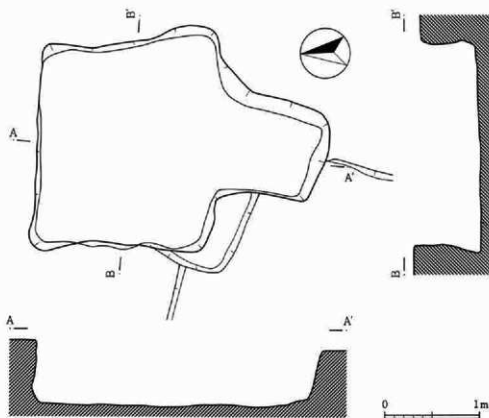
本土壙は、調査区の北西端の761.0Fポイントの北側で検出され、2号住居跡を壊して構築されていた。平面形は、南側へ入り口の施設と考えられる竪穴の張り出し部を持ち、本体である地下室は、南東部がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。

規模は、竪穴部分の上端部幅は95cm・深さ50cmを測り、底部の壁際はややこもりとしていた。本体の地下室は、東西方向1.95～2.15m・南北方向1.75～1.90mを測る。

壁は、やや内傾しながら立ち上がり、天井部へと続いていたと思われる。天井部が、ドーム状を成していたか否かは、不明である。

床面はほぼ平坦で、灰白色シルト層まで掘り込まれていたために、やや軟弱であった。

天井部が崩落したと考えられるローム層下の覆土中には、細かな炭化物が含まれており、床面の一部及び床面近くの壁面には、火を受けたために赤く変色している部分が認められた。なお、崩落したと考えられるローム層の上部からは、若干の土師器・須恵器の小破片と共に、滑石製紡錘車・緑陶器碗及び、板碑の破片と思われる緑泥片岩の小破片が出土している。(第267図) 紡錘車の側面及び広端面には、積文は不明であるが、線刻が認められた。径3.6cm・厚さ1.7cm・孔径7mmで、截頭円錐形を呈する。緑陶器碗は、口径12.6cm・器高4.4cm・底径6.9cmで、内外面に濃緑色の釉が施されている。底部外面にも若干の釉がかかった部分が認められるが、偶然に付着したものと考えられる。成形はロクロを使用したと考えられ、底部全面を丁寧に回転施削りした後に、高台を貼り付けている。胎土は精選されており、やや肌色がかっている。焼成は良好である。板碑片と考えられる遺物については、図示し得なかった。



第266図 地下式土壙実測図

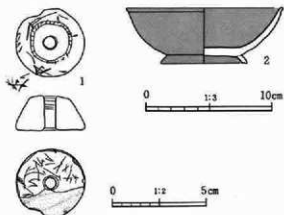
第2節 検出された遺構と遺物

本土墳は、江崎 武氏の分類に従えば、「無段式B-1」に相当すると思われる。調査区内では、本土墳の外には検出されなかったが、県内の他の遺跡例から推して、この付近から検出される可能性は高いと思われる。

※ 江崎 武 「中世地下式墳の研究」

『古代探査 Ⅱ』1988年 早稲田大学出版部 所収。

なお、群馬県内の調査で、前掲書に集成された外に前橋市・西大塚遺跡群（北山遺跡）・芳賀北部開地遺跡・二之宮宮下西遺跡、渋川市・中村遺跡等でも検出されている。



第267図 地下式土墳出土遺物実測図

(4) 井戸跡

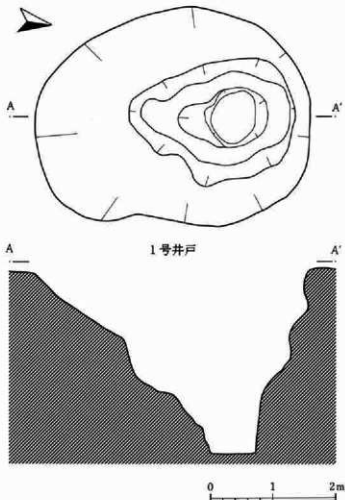
本遺跡の調査によって総数13基の井戸跡が検出された。時期を特定することは難しいが、遺跡全体の様相及び出土遺物の時間幅を考慮した場合、概ね中近世の遺構であると考えられる。遺跡地は前述の通り、沖積地の中に、北面から舌状に細長く延びた低台地である。遺跡地の水位は高く、どこを掘っても水が得られることから、井戸の占地はもっぱら生活の便によったものと考えられる。形状や規模はまちまちであるが、7～9号井戸及び4・6・10・13号井戸については、等間隔で一直線上にのる様な配置が観取され、規格性を持った地割りが考えられる。

さ井に当たっては「井筒」の形態が大きく関与することが指摘されているが、本遺跡においては、13号井戸を除いて、井筒の遺構が残っているものは無かった。多くのものが、地山を直接に井筒とした「素掘り井戸」であり、当初から二次的な井筒構造を持たなかったものと思われる。井桁構造は、勿論残っていなかったが、遺構検出面における平面形は不整形形と尻すばまりの楕円形を呈するもの(1・11・12号井戸)とがあり、井桁構造の相異が考えられる。

覆土の状態から見ると、上層部に粘土が詰め込まれており、明らかに人為的な埋填の形跡を残すものと、自然に埋没したかの様に思われるものがあった。しかし、史料上に見られる井戸に関する儀礼や民俗例から推して、全くの自然埋没のものはごく少数であったと考えられる。むしろ、土地利用の差異によって上層部の埋め方が違ったと考えるほうが妥当と思われる。なお、下層部の状態については、湧水量が多かったために十分な観察ができなかったが、概ね有機質を多量に含んだ土であった。

掘り方は漏斗状を呈するものと円筒状を呈するものが認められた。側壁面の中位から下位にかけては「あぐり」と呼ばれる影らみ部分があったが、湧水量が豊富で、基盤層に粘性がありしっかりとしていたためであろうか、あまり発達していなかった。

出土遺物については、上層から出土したものは少なく、殆どのものが中・下層より出土したことを調査時に確認している。縄属時期の幅は広く、縄文時代前期末葉の浮島式に比定される土器片から、中近世の陶磁器までが見られる。その他に、木製品(漆器椀・曲物・呪符木筒)・石製品(石臼・捏鉢・板碑)及び自然遺物(竹木・種子・昆虫の羽根)等様々なものが出土した。各遺構の概要は、以下の通りである。



第268図 井戸跡実測図 (1)

1号井戸（第268図、図版93） 位置 760.0Dポイント西側

本井戸跡は、7号住居跡の一部を壊していた。平面形は、上端部は南北方向が長い長円形であるが、底部はほぼ円形を呈する。底面の標高は、79.2mである。

規模は、上端部で長径4.40m・短径3.50m、深さ2.85mを測り、底径は約70cmである。

遺物は、縄文土器から石臼（第282図1）・板碑（第284図2）・漆器椀・栗の実等が出土した。

2号井戸跡（第269図） 位置 759.0Cグリッド

本井戸跡は、9号溝によって一部壊されていた。平面形は、比較的整った円形で、概ね円筒状に掘られていた。形態・規模等から推して、あるいは、土坑としたほうが適切なものかも知れない。

規模は、径1m・深さ60cmを測る。

出土遺物は無く、所属時期は不明である。

3号井戸跡（第269図、図版93） 位置 759.0Cグリッド

本井戸跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、南北方向が若干長い不整形円形で、概ね円筒上に掘られていた。底面の標高は、79.5mで、礫層まで達していた。

規模は、上端部で東西方向1.05m・南北方向1.30m、深さ2.49mを測る。

遺物は、曲物・陶磁器・羽口片等が出土した。

4号井戸跡（第269図、図版93） 位置 759.0Cグリッド南東部

本井戸跡は、北側にピットが重複しており、やや変形してしまっているが、平面形は、整った円形を呈し、円筒状に掘られている。底面の標高は、80.4mである。

規模は、上端部で径1.00m、深さ1.57mを測り、底径は55cmである。

5号井戸跡（第269図、図版93） 位置 758.5Dポイント北側

本井戸跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、上端部は概ね円形で、深さ50cm付近からは方形に掘られている。底面の標高は、79.7mで、礫層まで達していた。

規模は、上端部径2.00m・深さ2.34mで、底部は一辺90～95cmの方形になっている。

遺物は、呪符木筒の出土が目される。

6号井戸跡（第269図、図版93） 位置 758.5Dグリッド北西部

本井戸跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、南北方向が若干長い円形を呈する。底面の標高は、79.7mである。

規模は、上端部の径が東西方向1.00m・南北方向95cmで、深さ2.34mを測り、底径は70～80cmである。

遺物は、石臼が出土した。

7号井戸跡（第269図、図版93） 位置 760.0Eグリッド南東隅

本井戸跡は、西側に19号溝が重複しており、東側には耕作に伴うと考えられる土坑が掘られていた。19号溝との先後関係については、明確にし得なかった。平面形は、南北方向に長い不整形円形で、底部はやや北側に偏して掘られている。底面の標高は、80.4mである。

規模は、上端部で東西方向1.30m・南北方向1.45m、深さ1.79mを測り、底径は約80cmである。

8号井戸跡（第270図、図版94） 位置 760.5Fグリッド

本井戸跡は、掘立柱建物跡の柱穴になるのではないかとと思われるピットが多数存在する部分に位置する。平面形は、南北方向が若干長い不整形円形を呈する。底面の標高は、80.1mである。

規模は、上端部が長径1.10m・短径1.05m、深さ2.14mを測り、底径は65cmである。

第IV章 上植木老町田遺跡

遺物は、板碑(第284図1)・石臼・陶磁器等が出土した。

9号井戸跡(第270図、図版94) 位置 760.5Gグリッド

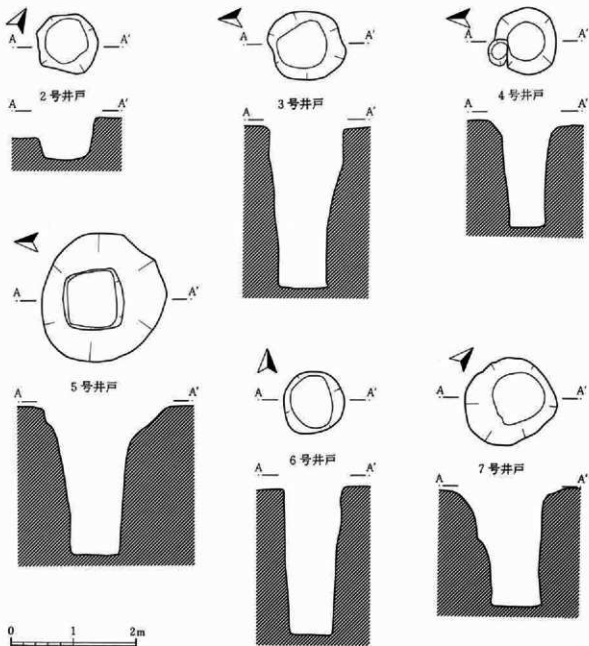
本井戸跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、比較的整った円形で、1m程下位からはラッパ状に上に広がっている。底面の標高は、79.3mである。

規模は、上部で径1.70m、深さ2.84mを測り、底径は65cmである。

遺物は、陶磁器が出土した。

10号井戸跡(第270図、図版94) 位置 758.5Eポイント

本井戸跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、上部が東西方向に長い長円形で、底部は

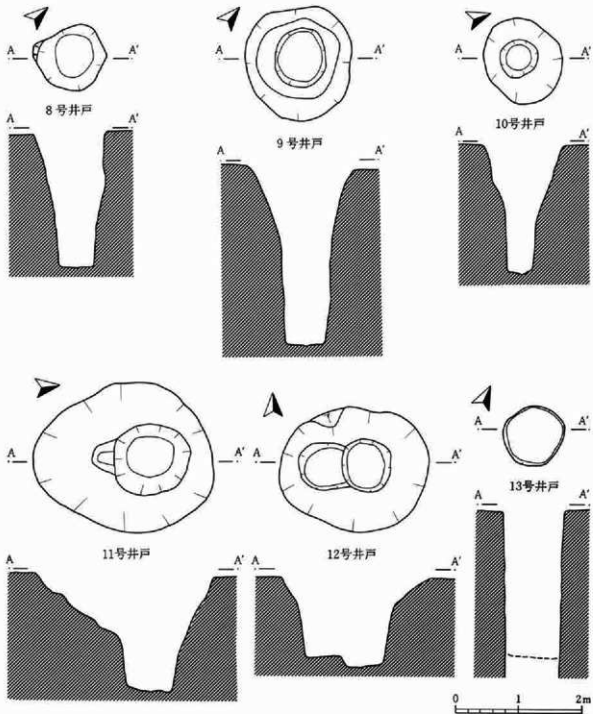


第269図 井戸跡実測図(2)

円形を呈する。1 m程下位からはラッパ状に上に広がっている。底面の標高は、80.0mである。

規模は、上端部で長径1.40m・短径1.15m、深さ2.00mで、底径は35cmである。

なお、本井戸の上部には黄褐色粘土がぎっしりと詰まっており、覆土の状況から推して、廃棄に当たって、一気に埋められたと考えられる。



第270図 井戸跡実測図 (3)

第IV章 上植木宅町田遺跡

11号井戸跡 (第270図、図版94) 位置 756.5Fグリッド

本井戸跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、南北方向に長い長円形を呈し、95cm程下位からは急速にラッパ状に上に広がっており、底部はやや北側に偏在して掘られていた。底面の標高は、80.1mである。

規模は、上端部で長径2.85m。短径2.35m、深さ1.56mを測り、底径は65～75cmである。

12号井戸跡 (第270図、図版94) 位置 756.6Fグリッド北東隅

本井戸跡は、11号井戸の南側5m程の所にあり、重複遺構は無かった。平面形は、上端部が東西方向に長い長円形で、底部は二個の円が合わさった様になっており、東側が20cm程低くなっていた。東側の底面の標高は80.3mである。覆土の観察では時期差が認められなかったが、二つの井戸が重複していたのかも知れない。なお、覆土はB軽石を多量に含む暗褐色砂質土が主であった。

規模は、上端部で長径2.40m・短径2.00m、深さ1.43mを測り、底径は両方とも60～70cmである。

遺物は、瓦・陶磁器等が出土した。

13号井戸跡 (第270図、図版94) 位置 758.0Fグリッド

本井戸跡は、黄褐色粘土によって埋め戻されておられ、検出作業が遅れた。平面形は、比較的整った円形で、驚くほど奇麗な円筒状に掘られていた。しかしながら、径が小さかったために掘り過ぎてしまった。底部は、青灰色シルト層であり、礎層は認められなかった。

規模は、径95cmで、深さは2.30m程になると思われる。(標高79.7m)

遺物は、全く出土していない。

(5) 溝跡

本遺跡の調査において、25条の溝跡が検出されたが、その概要は以下の通りである。中・近世の屋敷地を画するものも認められるが、第231図に見られるように、現在の地割りと非常に良く一致しているものが殆どである。

1号溝

調査区の北側、759.0Gグリッドから760.5Dグリッドにかけて、総延長42.2mを検出した。上端部の幅1.60～2.40m・深さ約1.20mで、760.0Dグリッドで折れ曲がり、15cm程急激に低くなる。南側部分の走向はN12°Eである。南北両端の底面レベル差は、南側が80cm程低くなっている。板碑・陶磁器等が出土した。

2号溝

調査区の南東隅、756.0Cグリッドから756.5Bグリッドにかけて、総延長12mを検出した。上端部の幅約60cm・深さ10cm前後で、東側に緩く湾曲していた。性格不明。

3号溝

調査区の北東部、760.0Bグリッドから761.0Bグリッドにかけて、総延長34.3mを検出した。上端部の幅約50cm・深さ6～15cmで、761.0Dポイント西側でほぼ直角に折れ曲がるが、南側部分の走る。南北両端の底面レベル差は、殆ど認められない。道路の側溝的役割を果たしていたものと考えられる。

4号溝

760.5Cグリッドから761.0Fグリッドにかけて、総延長29.8mを検出した。上端部の幅50～75cm・深さ6～15cmで、761.0Eポイント西側で折れ曲がるが、東側部分の走向はN80°Wである。東西両端の底面レベル差は、殆ど認められない。3号溝と同様、道路の側溝的役割を果たしていたものと考えられる。

5号溝

調査区の北側、759.0Gグリッドから760.5Cグリッドにかけて、総延長 m を検出した。上部部の幅約40cm・深さ30cm前後で、760.5Dポイント付近ではほぼ直角に折れ曲がるが、南側部分の走向はN70°Eである。3・4号溝に先行し、6号溝と共に、道路の側溝的な役割を果たしていたものと考えられる。

6号溝

5号溝の南側に1m程の間隔を持って並走している。形状・規模共に、5号溝とはほぼ同様である。

7号溝

759.5Bグリッドから760.0Dグリッドにかけて、総延長23.0mを検出した。上部部の幅50～80cm・深さ20cm前後で、西側は二つに分岐している。東西両端の底面レベル差は、東側が16cm程低くなっている。

8号溝

760.0Dグリッドから761.0Bグリッドにかけて、総延長13.6mを検出した。上部部の幅約55cm・深さ10～25cmで、走向はN10°Eである。南北両端の底面レベル差は、南側が32cm程低くなっている。3・22号溝に先行する。性格不明。

9号溝

757.5Fグリッドから759.0Cグリッドにかけて、一部途切れる部分があるが、総延長46.2mを検出した。上部部の幅約50cm・深さ30cm前後で、走向はN3.5°Eである。南北両端の底面レベル差は、南側が31cm低くなっている。水田の用水であったと考えられる。

10号溝

758.0Dグリッドから758.5Fグリッドにかけて、総延長25mを検出した。上部部の幅30～50cm・深さ10cm前後で、走向はN83°Wである。東西両端の底面レベル差は、西側が7cm程低くなっている。水田の用水であったと考えられる。

11号溝

757.5Cグリッドで、総延長6.8mを検出した。上部部の幅20～30cm・深さ4cm前後で、走向はN79°Wである。東西両端の底面レベル差は、西側が9cm程低くなっている。10号溝と同一の溝であった可能性が高い。

12号溝

756.5Eグリッドから757.0Bグリッドにかけて、総延長23.6mを検出した。上部部の幅70～160cm・深さ17cm前後で、走向はN15°Eである。南北両端の底面レベル差は、南側が5cm低くなっている。

13号溝

765.5Dグリッドから757.0Fグリッドにかけて、総延長 m を検出した。上部部の幅約1.2m・深さ13cm前後で、走向はN80°Wである。東西両端の底面レベル差は、殆ど認められない。

14号溝

13号溝の南側に1m程の間隔を持って並行している。総延長17.5mを検出した。上部部の幅約1.3m・深さ8cm前後で、走向はN73°Wである。東西両端の底面レベル差は、西側が5cm低くなっている。

15号溝

調査区の西側、758.0Fグリッドから758.5Eグリッドにかけて、総延長12mを検出した。上部部の幅30cm・深さ6cm前後で、走向はN7°Eである。南北両端の底面レベル差は、南側が4cm低くなっている。

16号溝

調査区の西側、758.0Eグリッドから758.5Fグリッドにかけて、総延長14.7mを検出した。「コの字」状に

第IV章 上植木宅町田遺跡

折れ曲がっており、6号住居跡を壊している。上部部の幅60～70cm・深さ22～26cmで、西側部分の走向はN3°Eである。両端部の底面レベル差は、殆ど認められない。水田の用水であったと考えられる。

17号溝

758.5Eグリッドにおいて、総延長6.6mを検出した。上部部の幅50～60cm・深さ11～37cmで、南側が開く弧状になっていた。東西両端の底面レベル差は、東側が8cm程低くなっている。性格不明。

18号溝

9号溝の東側に、1.6m程の間隔を持って並行している。上部部の幅約30cm・深さ15cm前後で、走向はN19°Eである。南北両端の底面レベル差は、南側が25cm程低くなっている。9号溝と共に、道路の側溝的な役割を果たしていたと考えられる。

19号溝

調査区の北側、760.5Eグリッドにおいて、総延長6.6mを検出した。上部部の幅約30cm・深さ10cm前後で、東西方向に蛇行している。東西両端の底面レベル差は、殆ど認められない。性格不明。

20号溝

調査区の北西部、761.0E・Fグリッドにおいて、総延長10mを検出した。上部部の幅40～50cm・深さ9cm前後で、「L字」状に折れ曲がっており、西側部分の走向はN75°Wである。東西両端の底面レベル差は、西側が5cm程低くなっている。水田の用水であったと考えられる。

21号溝

761.0Gグリッドから761.5Bグリッドにかけて、総延長32.5mを検出した。上部部の幅50～80cm・深さ20cm前後で、走向はN56°Eである。東西両端の底面レベル差は、西側が22cm程低くなっている。水田の用水であったと考えられる。

22号溝

調査区の北東部で3号溝及び8号溝に挟まれ、総延長5.30mを検出した。上部部の幅50～90cm・深さ13cm前後で、走向はN15°Eである。性格不明。

23号溝

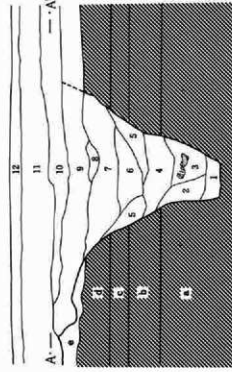
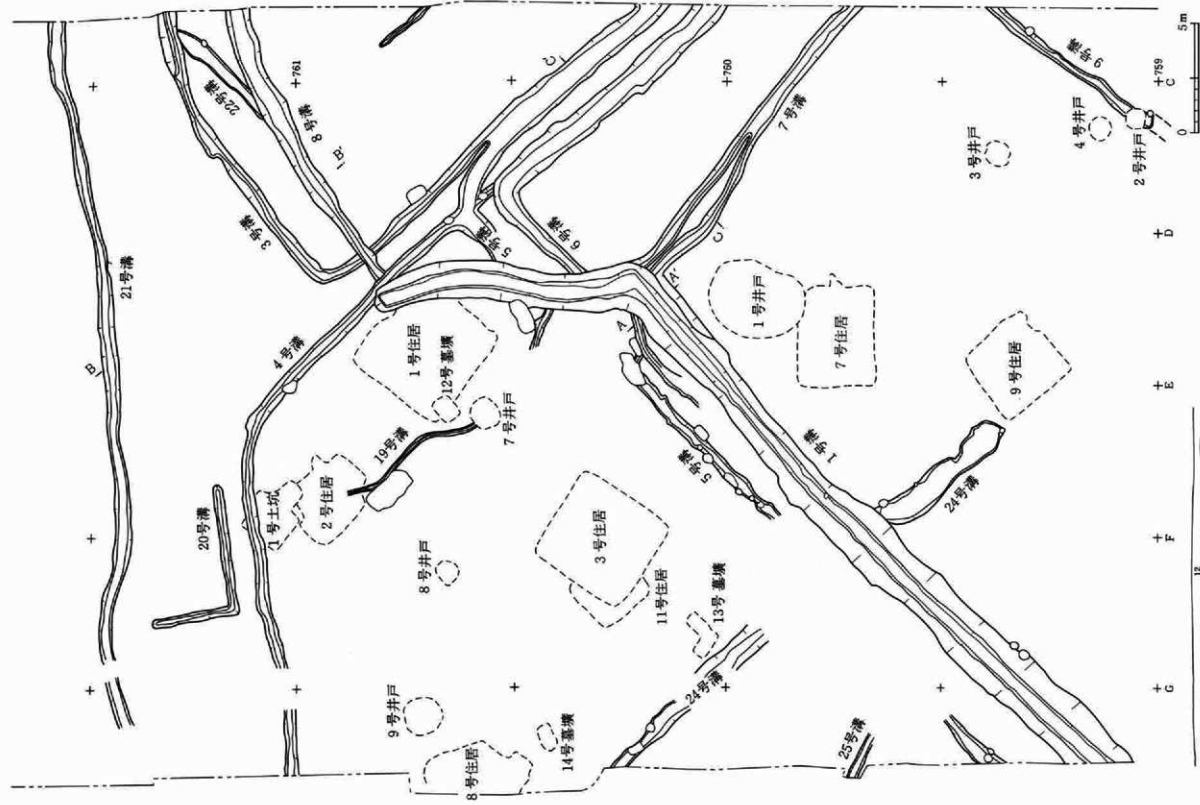
757.0Dグリッドにおいて、総延長4.7mを検出した。二本が並行しているが、いずれも上部部の幅約70cm・深さ8cm前後で、走向はN9°Eである。南北両端の底面レベル差は、北側が4cm程低くなっている。性格不明。

24号溝

759.0Eグリッドから760.0Gグリッドにかけて、総延長23.5mを検出した。上部部の幅50～140cm・深さ23cm前後で、走向はN85°Wである。東西両端の底面レベル差は東側が15cm程低くなっている。

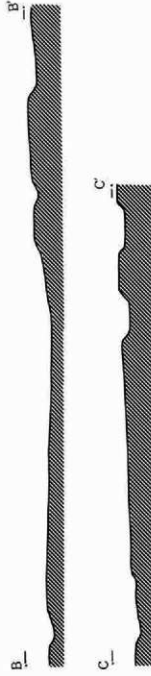
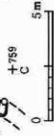
25号溝

759.5Gグリッドにおいて、総延長5.5mを検出した。上部部の幅40～80cm・深さ16cm前後で、走向はN83°Eである。東西両端の底面レベル差は、殆ど認められない。性格不明。



1. 暗灰褐色土。(F.P.層)
2. 淡灰色土。C層と多く含む。
3. 暗灰褐色土。暗物質を多く含む。
4. 暗灰褐色土。暗物質を多く含む。
5. 暗灰褐色土。暗物質を多く含む。
6. 暗灰褐色土。暗物質を多く含む。
7. 淡茶褐色土。B層を含む。
8. 暗灰褐色土。暗物質を多く含む。
9. 暗灰褐色土。暗物質を多く含む。
10. 暗灰褐色土。暗物質を多く含む。
11. 暗灰褐色土。暗物質を多く含む。
12. 新拌土層。

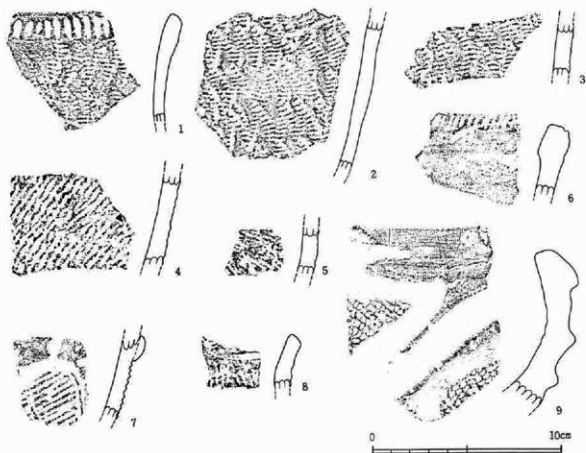
- a. 青灰色粘質土。(不排水層)
- b. 淡灰色粘質土。(不排水層)
- c. 灰白色粘質土。(不排水層)
- d. 暗褐色土。
- e. 暗褐色土。



第271図 溝跡実測図

(6)その他の出土遺物

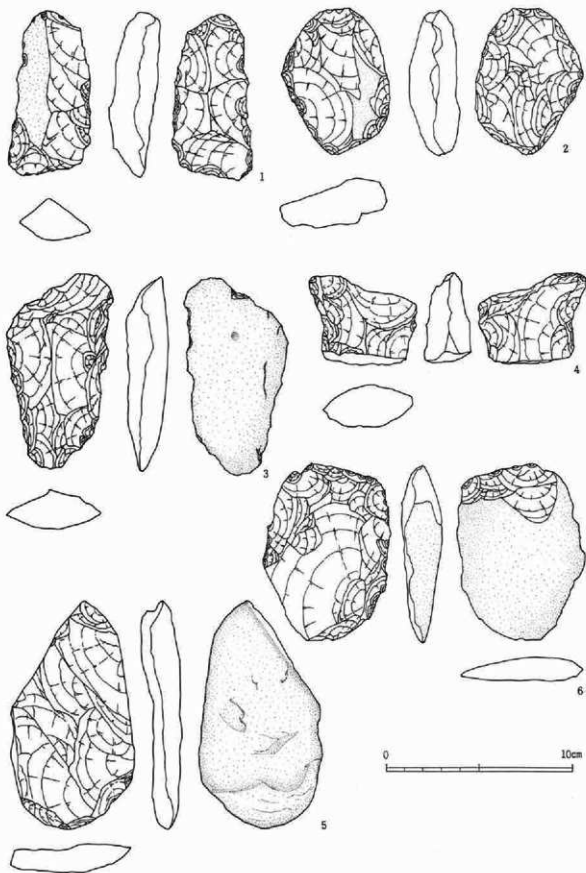
A. 縄文土器・石器



第272図 縄文土器拓影・実測図

第95表 石器観察表

No	器種	出土位置	石質	①長さ(cm) ②幅(cm) ③厚さ(cm) ④重さ(g) ⑤特徴
1	不定形石器	756.5D	黒色頁岩	①8.8 ②4.3 ③2.7 ④86.9g ⑤先端部及び両側縁に細部調整を行っている。
2	不定形石器	1号井戸	黒色頁岩	①7.7 ②5.7 ③2.3 ④126.3g ⑤側縁部全体に細部調整を行っている。
3	不定形石器	8号井戸	黒色頁岩	①10.4 ②5.6 ③2.3 ④130.3g ⑤先端部及び両側縁に細部調整を行っている。
4	不定形石器	3号住	頁岩	①4.6 ②5.7 ③2.5 ④64.4g ⑤縁部欠損。打製石片か?
5	不定形石器	757.0F	カルンフェルス	①12.2 ②6.5 ③2.1 ④179.8g ⑤先端部の片面に細部調整を行っている。
6	不定形石器	8号井戸	黒色頁岩	①9.4 ②6.7 ③2.2 ④110.0g ⑤先端部に細部調整を行っている。



第273図 石器実測図

B. 瓦 (第274・275図、図版110)

今回の調査によって、合計12点の瓦が検出された。各々の概要は以下の通りである。

1は、4号住居跡出土の丸瓦片である。粘土の接合痕が残っており、粘土紐桶巻き作りであることが知れる。端面は、雑な調整であるが、一面に整えてある。分割時に使用した鋭い刻線が凸面に残っている。凹面の布面痕は、1cm当たり7本×9本であるが、雑にナデ消している。明赤褐色を呈する。

2は、4号住居跡出土の丸瓦片である。凹面には、桶巻き作りの際の幅5cmの模骨痕が残っている。布目の圧痕はカキ目を入れて消している。端面は、凹面を1cm程削っており、二面に調整している。凸面は、縦方向の篋削りを行っているが、一部に粘土板の接合痕が観察できる。胎土は砂粒を多く含み、鈍い黄褐色に焼きあがっている。

3は、4号住居跡出土の丸瓦片である。凹面の布面圧痕は、1cm当たり9本×9本である。鈍い黄褐色を呈する。

4は、6号住居跡出土の丸瓦片である。凹面の布目圧痕は、カキ目で粗くナデ消されている。凸面は横方向の丁寧なナデを施す。灰白色を呈する。

5は、12号井戸出土の丸瓦片である。凹面には、粘土板を切り取った際の糸切り痕が残り、凸面は縦方向の篋削りを行っている。灰白色を呈する。

6は、6号住居跡出土の丸瓦片である。凹面には、1cm当たり5本×7本の布目圧痕があり、粘土板の合わせ目が観察できる。端面は二面調整で仕上げているが、横方向の篋ナデを施した凸の端に分割線が残っている。灰白色を呈する。

7は、4号住居跡出土の平瓦片である。凹面には1cm当たり5本×6本の布面圧痕が残り、凸面は縦方向の篋削りを行い、端面三面削りで仕上げている。鈍い黄褐色を呈する。

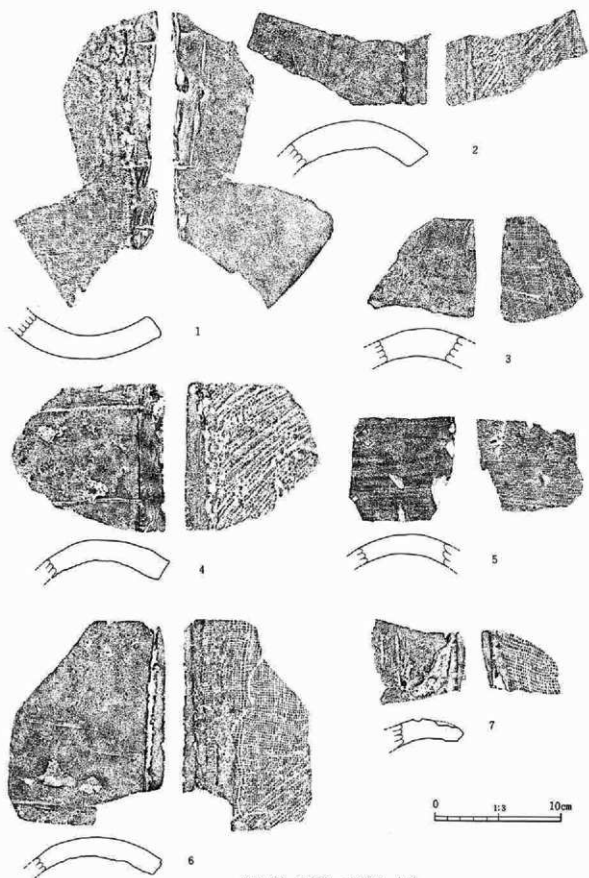
8は、12号井戸覆土中出土の平瓦片である。凹面は剥離しているが、凸面には正格子の叩き目が残っている。鈍い橙色を呈する。

9は、1号井戸出土の平瓦片である。凹面は剥離が著しく、布目圧痕が僅かに残る。凸面は斜格子叩き後粗い篋削りを行っている。鈍い橙色を呈する。

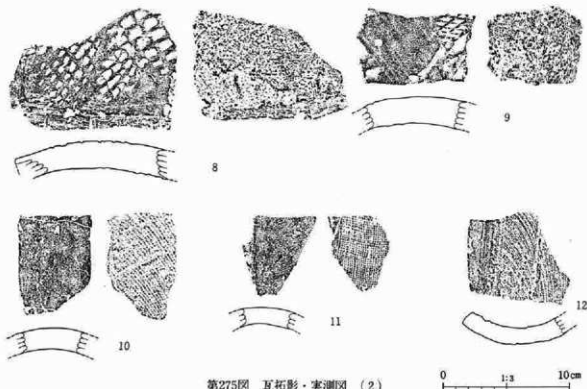
10は、6号住居跡出土の平瓦片である。凹にはカキ目が認められ、凸面は縦方向の篋削りを施して仕上げている。鈍い黄褐色を呈する。

11は、グリッド出土の丸瓦片である。凹面には1cm当たり6本×6本の布目圧痕が認められ、凸面は縦方向の篋削りをして仕上げている。浅黄褐色を呈する。

12は、6号住居跡出土の丸瓦片である。凹面には幅3cmの模骨痕が明瞭に残り、凸面は縦方向の篋削りをして仕上げている。鈍い黄褐色を呈する。



第274図 瓦拓影・実測図 (1)



第275図 瓦拓影・実測図 (2)

C. 金属製品・羽口・砥石 (第276・277図、図版108)

1は、グリッド出土の小刀で、

2は、12号土壌墓の副葬品であり、全長19.7cm・幅1.3cmを測る。片側には布が付着して残っていた。

3は、6号土壌墓の副葬品であり、全長15.6cm・最大径9mmを測る。両端部が尖っており、一方には木質が残っていた。用途不明。

4は、グリッド出土である。二枚の鉄板が錆付いて「L字」状になっている。長い方は、全長6cm・幅1.3cmを測り、端部には径3mmの孔があいている。短い方は、2.8cm・幅9mmを測る。用途不明。

5～7は、羽口の破片であるが、小破片のため詳細は不明である。5は、グリッド出土。6は、1号土壌墓の覆土中出土。7は、3号井戸の覆土中出土。

砥石

今回の調査によって、合計5点が出土した。いずれも甘楽郡南牧村砥沢産と考えられる流紋岩製である。

1は、端部を欠いているが、中央に近づくにつれて、研ぎ減りが認められる。四面共に使用している。9号住居跡出土。現存長5.6cm・幅4.0cm・厚さ3.4cm・重さ125.8gである。

2も1と同様であるが、研ぎ減りが顕著である。1号井戸出土。現存長6.5cm・幅1.7cm・重さ45.9gである。

3は、端部を少し欠くが、四面共に使用しており比較的滑沢であった。1号井戸出土。現存長7.9cm・幅3.5cm・重さ182.9gである。

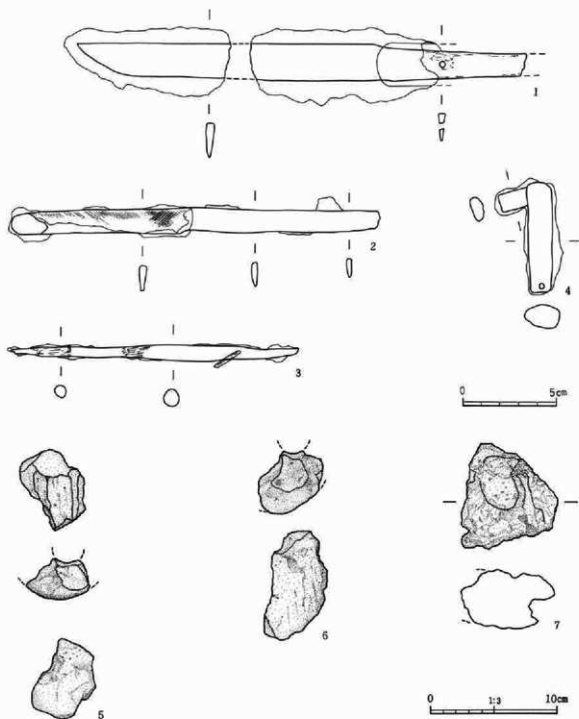
4は、端部を欠いており、四面共に使用しているが中央に近づくにつれて急激に細くなっている。10号住居跡出土。現存長9.5cm・最大幅4.8cm・最小幅2.6cm・厚さ3.0cm・重さ183.4gである。

5は、ほぼ完形であり四面共に使用しているが、変則的な使用のためか断面形が変形を呈する。9号井戸

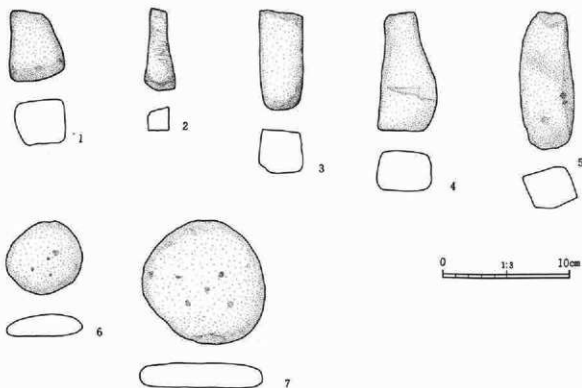
第四章 上植木沓町田遺跡

出土。現存長11.0cm・幅4.3cm・厚さ3.4cm・重さ157.3gである。

6・7は安山岩の円礫であり表面がやや滑沢になっているものである。6は1号住居跡出土。7は1号溝出土。



第276図 金属・土製品実測図



第277図 木製品実測図

D. 木製品 (第278～281図・図版112～115)

今回の調査によって、1・5・8号井戸より木製品が出土したが、遺憾ながら保管中に注記が消えてしまい、遺物の所属遺構が不明になってしまったものがある。

1・2は、5号井戸出土の呪符木簡であり、「木簡研究」第6号に資料紹介したものである。当時は釈文不明の部分が多かったが、水野正好 奈良大学教授の御教授によって1の左側は「⁽¹⁾赤口白舌随節滅」(赤きはほ、白きけぶり、ときにしたがいてきゆ)と書かれていることが判明した。天中節に用いられる呪符と思われる。右側は「三宝帰依所 御加持故」としておく。現存長16.0cm・幅3.2cm・厚さ2mmを測る。

2は、下端部及び片側縁部が欠損しているが、現存長25.7cm・幅3.8cm・厚さ1mmを測る。風化が著しく釈文が判然としないが、「□急々如律令☆」と見える。上部の4～5文字が不明のため「まじない」の内容は不明。(1については、「草戸千軒 No47」に「三宝荒神符と天中の呪句」、2については、「文化財学報」第四集に「鬼神と人とその動き—招福除災のまじなひに」と題した水野正好 教授の論考を参照されたい。)

3・4は、径約18mmで、4は欠損しているが端部が弓管状に加工されていることから、丸木弓の可能性が考えられる。3は現存長11.9cm、4は現存長13.7cmを測る。5は、現存長11.9cm・幅3.0cm・厚さ7mmを測り、題簽状に加工されているが、用途不明である。3～5は9号井戸から出土。

6は、3号井戸出土で、桶の蓋あるいは底板と考えられる。3枚の板目を釘で接合し、径22.4cm・厚さ8mmの円板に仕上げている。端部に径約1.5cmの孔があげられている。

7・8・10・12・14・16は同一遺構から出土したものであるが、所属遺構不明。

7は、径20.7cm・厚さ8mmの一枚板で、端部に径約1cmの孔があげられている。8は、二枚以上の板を接

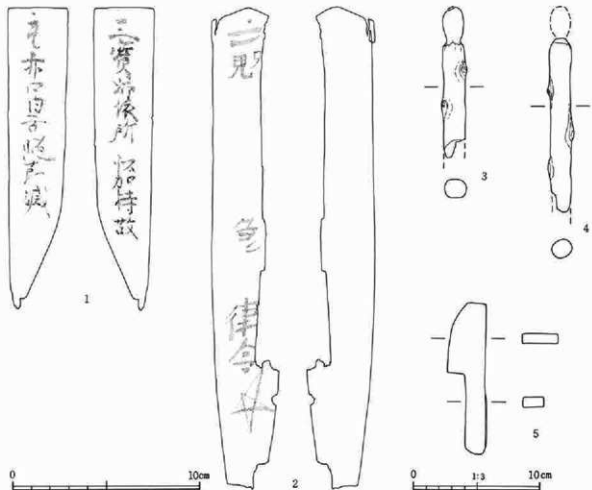
合して径17.8cm・厚さ5mmの円板にしたと考えられる。10は、径9.8cm・厚さ3.5mmの柀目の一枚板で、曲物の底板と考えられる。12は、二枚の柀目板を接合して、径20.8cm・厚さ6mmの円板に仕上げている。径4mm程の留め孔が4箇所にあることから底板と考えられる。14は、三枚以上の板を接合して、径17.3cm・厚さ7mmの円板にしたと考えられる。一部に「への字」状の焼印の跡が残っている。16は、径19.6cm・厚さ7mmの柀目の一枚板である。

9・11・13・15・17も同一遺構出土である。

18・19は同一の井戸から出土した曲物の残片である。18・19共に接合部は三重になっており、18は欠損が著しいため不明であるが、19は推定深さ9cm程の容器と考えられる。

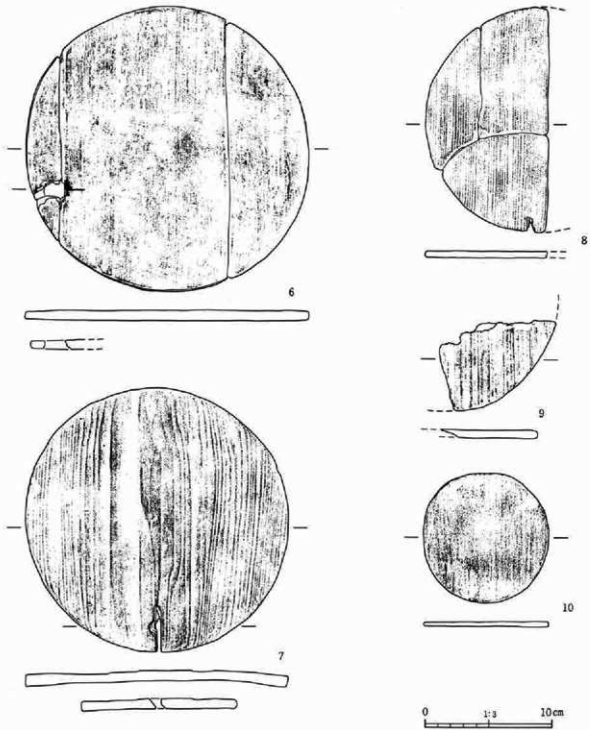
20は、現存長18.1cm・幅2.8cm・厚さ1.7cmの角柱状を呈するが用途不明。21は、現存長21.2cm・幅5.9cm・厚さ1.5mmの板状を呈するが用途不明。20・21は1号井戸出土。

なお、1号井戸からは図版113に示した輪も出土している。



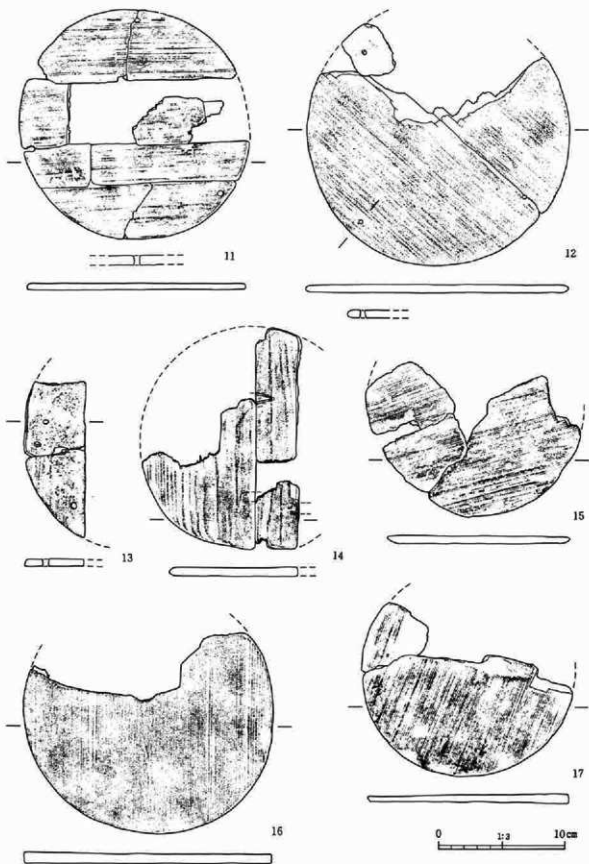
第278図 井戸跡出土木製品実測図 (1)

第2節 検出された遺構と遺物



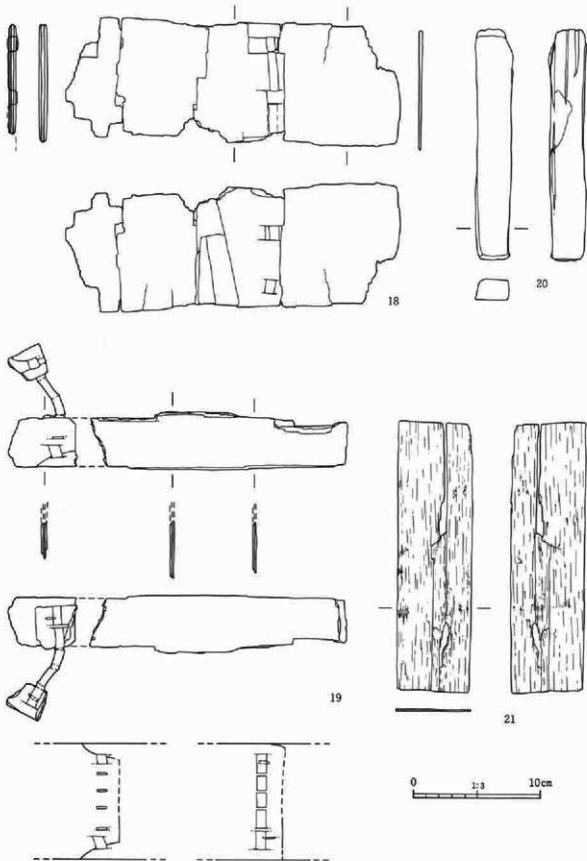
第279図 井戸跡出土木製品実測図 (2)

第四章 上植木老町田遺跡



第280図 井戸跡出土木製品実測図 (3)

第2節 検出された遺構と遺物



第281図 井戸跡出土木製品実測図 (4)

第Ⅳ章 上植木老町田遺跡

E、石製品（第282・283図、図版116）

本遺跡の井戸・溝跡から出土した石製品は、石臼・小鉢・板碑であるが、その概要は、以下の通りである。なお、板碑については、別項目を立てて扱った。

1は、1号井戸から出土した粉挽き臼の下臼の「はんざり」部分の小破片である。使用石材は、粗粒の輝石安山岩で、丁寧に磨かれて仕上げられている。外縁の推定径は、37.8cmである。

2は、6号井戸から出土した粉挽き臼の上臼の極小破片である。使用石材は、粗粒の輝石安山岩である。上縁部は、窪みから緩やかなカーブを描きながら立ち上がる。

3は、8号井戸から出土した粉挽き臼の上臼の極小破片である。使用石材は、粗粒の輝石安山岩である。上縁部は、窪みからやや外反しながら直線的に立ち上がる。

4は、8号井戸から出土した粉挽き臼の上臼の破片である。使用石材は、粗粒の輝石安山岩である。外縁の推定径は、33.4cmである。全体的に丸みを持った作りである。

5は、8号井戸から出土した粉挽き臼の上臼の破片である。全体の形状がやや台形状を呈する。使用石材は、粗粒の輝石安山岩である。外縁の推定径は、28.9cmである。上縁部は、窪みからやや外反しながら直線的に立ち上がる。挽き手穴は隈丸方形で、2.6cm×2.8cm・深さ3.6cmである。

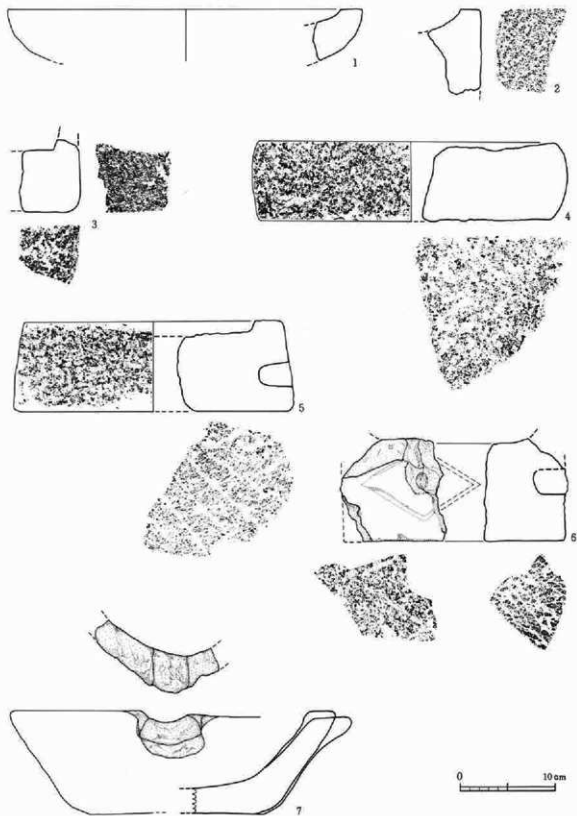
6は9号井戸から出土した茶臼の上臼の破片である。使用石材は、粗粒の輝石安山岩で、丁寧に磨いて仕上げられている。外縁の推定径は23.7cmである。上縁部は、窪みから緩やかなカーブを描きながら立ち上がると思われる。挽き手穴の周囲には一辺8cm程の菱形の飾りが付く。挽き手穴は隈丸方形で、2.8cm×3.0cm・深さ4.0cmである。

7は、9号井戸から出土した小鉢の破片である。口縁部の一部が、片口状になっており、直線的に立ち上がるが、その他の部分はやや内湾ぎみに立ち上がる。使用石材は、粗粒の輝石安山岩である。推定径34.6cm・高さ11cmである。

8は、1号溝から出土した粉挽き臼の上臼の極小破片である。使用石材は、粗粒の輝石安山岩である。上縁部は、窪みからやや外反しながら直線的に立ち上がる。

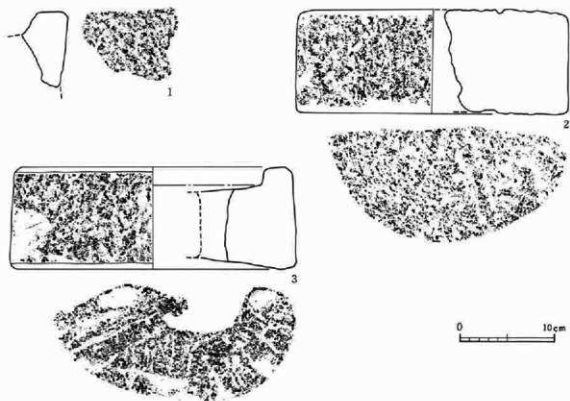
9は、1号溝から出土した粉挽き臼の下臼の破片である。使用石材は、粗粒の輝石安山岩である。推定径29.0cm・高さ11cmで、5cm程の「ふくみ」が認められる。

10は、1号溝から出土した粉挽き臼の上臼の破片である。上下の縁部には丁寧な面取りが施されている。使用石材は、粗粒の輝石安山岩である。推定径29.4cm・高さ11cmである。上縁部は窪みからほぼ垂直に立ち上がる。供給口の径は、3cm程になると思われる。



第282図 石白実測図 (1)

第IV章 上植木老町田遺跡



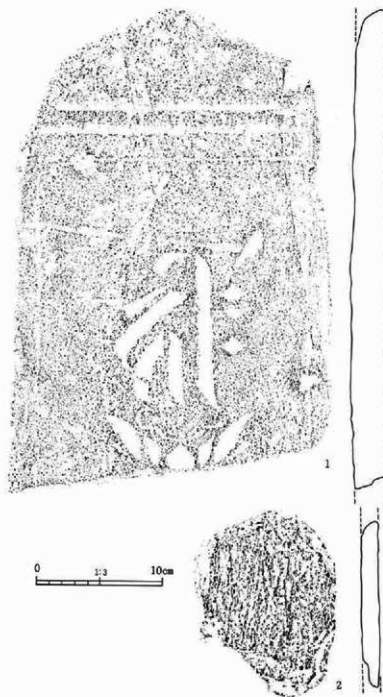
第283図 石臼実測図 (2)

F. 板 碑

8号井戸出土の板碑 (第284図—1)

この板碑は、高さ38.5cm・上幅24.5cm・下幅26cm・厚さ2.5cmを測る板碑上部破片である。上部に比べ下部の幅がやや広がる。石材は、長石を多量に含む緑泥片岩である。碑面は、磨滅してはいるものの平坦であり、製作時には磨き等の丁寧な整形が施されていたものと思われる。また、裏面には、下部(完形時には副中部)にノミ痕が横方向に平行して残る。ノミ痕の幅より、工具幅は、1cm程と思われる。

碑面の主尊は、薬研彫りのキリク(阿弥陀如来種子)で、キリクの「イー」が「アク点(涅槃点)」の間を抜けない書体である。主尊が一尊であるか三尊であるかについては、蓮台(蓮座)より下部が欠損しているため、不明である。蓮台は、主尊と同じく薬研彫りで、蓮弁は、やや外反して立ち上がる。また、蓮弁の上には、蓮実を描く。頂部山形は、現存では、磨滅・破損のため、若干丸味を帯びているが、残存部より三角形を呈していたことが窺える。二条線は、単なる線刻によるものではなく、彫りは浅いが、側面から見るとテラス状を呈する。二条線の左右端の切り込みの有無は、磨滅のため不明である。他の装飾として、幹線が描かれている。天蓋は無く、華瓶等については欠損のため、有無も明らかではない。紀年銘も欠損のため、不明ではあるが、この板碑の造立年代を各部の特徴より推察するに、まず、二条線が刻まれており、かつ、やや崩れてはいるものの、線刻に至るまで



第284図 板碑拓影実測図 (1)

第四章 上棟木老町田遺跡

の簡素化ではない点。種子の書体。蓮台の蓮実と、蓮弁の立ち上がり等の蓮台の形状。上部幅より下部幅が広い点。また、ある程度の厚みを持ち、推定全長で80cm程であろうと思われる大きさなどから、14世紀初頭から中頃にかけての造立であろうと推察される。

この板碑は、井戸内出土のものであり、出土状態や、板碑の破損状態から考えて、井戸内に人為的に廃棄されたものと思われるが、その廃棄年代については、板碑の碑面や角の稜が若干磨滅していることから、ある程度の造立期間を考慮し、14世紀中頃から15世紀中頃ぐらいの時期に廃棄されたものであろうと考えられる。

1号井戸出土の板碑（第285図-4）

この板碑は、高さ33cm・上幅14.5cm・下幅15.5cm・厚さ2cmを測る板碑右上部の破片であり、種子部分での推定全幅は、27cm程である。石材は、長石を多量に含む緑泥片岩であり、前述の8号井戸出土の板碑の石材と類似する。碑面は、磨滅してはいるが平坦であり、製作時において、磨き等の丁寧な整形が施されていたものと思われる。また、裏面には、下部（完形時には胴中部）にノミ痕が横方向に平行して残るが、磨滅のため、明瞭ではない。碑面の主尊は、キリク（阿弥陀如来種子）の右下に、サ（観音菩薩）が残っているため、阿弥陀三尊種子であったことが窺える。彫りはキリク・サ共に薬研彫りではあるが、浅く、竹彫りに近くなっている。蓮台は、中尊のキリクのみに残り、脇侍のサの下部は欠損しているため、蓮台の有無は不明である。蓮台の形状は、蓮弁が左右にやや開き気味に立ち上がり、外側の蓮弁は、下部で左右が結ばれており、蓮実を描かれていない。二条線はなく、磨滅のため明らかではないが、二条線左右端の切り込みもないものと思われる。天蓋・枠線も描かれておらず、華瓶の有無は、欠損のため不明である。紀年銘も欠損のため不明ではあるが、この板碑の造立年代を各部の特徴より推察するに、二条線が欠落し刻まれなくなっている点。主尊種子の刻字法の薬研彫りが、浅く丸味を帯びている点。蓮台の蓮弁が、やや開いている点などから、14世紀中頃から末頃にかけての造立であろうと推察される。また、本遺跡の周辺の伊勢崎^市三光町石川琴子氏宅所在の「文和三年（1354年）」銘の板碑、および、同三光町武孫平氏宅所在の「永徳二年（1382年）」銘の板碑の蓮台が本板碑の蓮台と類似しているため、造立年代もこれに近いものと考えられる。

本板碑も、井戸内出土のものであり、前述の8号井戸出土の板碑と同様に、人為的に廃棄されたものであろうと考えられ、その廃棄年代は、碑面の磨滅等を考慮し、14世紀後半から15世紀末頃であろうと推察される。

1号溝出土の板碑（第285図-3）

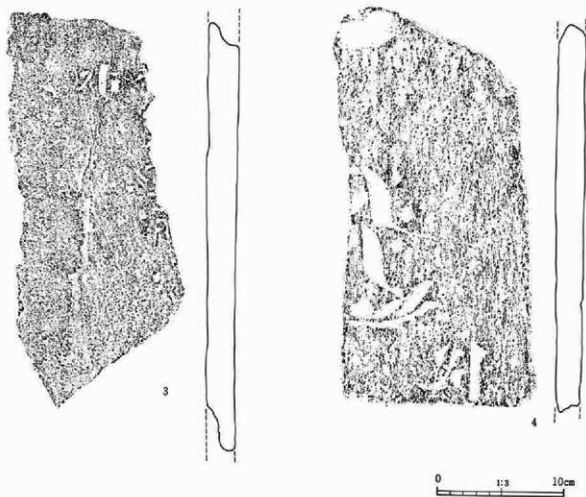
この板碑は、高さ32cm・幅11~14.5cm・厚さ2.5cmを測る板碑左中部破片である。石材は、長石を少量含む緑泥片岩であり、土中の鉄分が付着し酸化したため、全体に錆が付着する。碑面は、磨滅してはいるが平坦であり、製作時において磨かれていると思われるが、その整形は、比較的荒い。裏面の左上部には、ノミ痕が横方向に平行して残る。ノミ痕より工具幅は、1cm強と思われる。碑面の主尊は、中尊のキリクは、欠損のため残っていないが、三尊脇侍のサク（勢至菩薩）が残っているため、阿弥陀三尊種子であることがわかる。彫りは、竹彫り（断面がU字形）であり、彫りは浅い。蓮台は、欠損し不明であるが、三尊の中尊のみに蓮台を配し、脇侍には蓮台が描かれていない。枠線・華瓶はなく、天蓋・二条線については、有無も不明である。紀年銘は、ちょうどその部分で割れているため、「月」の文字のみが判読できるだけで、他の

第2節 検出された遺構と遺物

文字は、端がかかる程度で判読できない。造立年代については、脇待の彫り方より推定するほかはなく、およそ14世紀後半から15世紀後半頃にかけての造立と考えられる。また、廃棄の推定年代は、15世紀初頭より16世紀初頭頃と考えられる。

1号溝出土の板碑（第284図-2）

この板碑は、高さ14cm・幅11cm・厚さ1.7cmを測る板碑上部破片である。この破片の左右両端には、加工・整形痕が残るため、幅11cmの小型板碑の上部破片であることが判る。頂部山形は、磨滅もあるが、当初から粗雑な整形であったものと思われる。石材は、他の板碑と若干異なり、雲母と長石を多量に含む緑泥片岩で、



第285図 板碑拓影実測図（2）

や絹雲母片岩に近い。二条線はなく、碑面が磨滅しており、主尊については不明である。また、紀年銘・華瓶等については、欠損のため不明である。この板碑の造立年代については、小型板碑であることから14世紀後半から15世末頃にかけての造立と考えられ、また、廃棄年代については、15世紀中頃から16世紀中頃であろうと推察される。

まとめ

本遺跡より出土した4基の板碑は、みな井戸や溝から出土したものであり、前述のとおり井戸や溝内に人為的に廃棄されたものである。そこで、板碑の廃棄問題について若干述べてみたい。

板碑の井戸・溝よりの出土例は、本遺跡のみならず多くの遺跡より検出されている。発掘調査により出土した板碑の大半が井戸や溝からの出土とみられる。これは、中世の遺構として明瞭に検出できうるものが、井戸・溝・土塙墓等に限られ、他の遺構の調査例が少ないことによるのかもしれないが、ともかく井戸・溝よりの板碑出土例の報告は多い。では、なぜ板碑が井戸や溝内より出土するのであろうか。まず、井戸を例にとり遺構の側から考えると、石組みの井戸の井戸枠材として板碑片を利用するような場合を除いて、板碑が井戸に廃棄される場合、井戸は、既にその機能を果たさず、廃絶されたものと考えられる。それは、水が漏れるなり、何等かの理由で井戸水が利用できなくなった場合と、その地を離れるため、使用可能な井戸を廃絶する場合とがあると考えられる。どちらにしても、井戸としての機能を果たさなくなり、自然、若しくは人為的に埋没する過程にあるものといえる。次に板碑の側から考えると、板碑は本来、卒都婆（供養塔）であり、墓標とは性格が異なる。これは、板碑の多くは没者（被供養者）の名を記さないことから判る。つまり、誰の物であるということは二の次であり、本来は、仏に対して極楽往生を願い板碑を造立し、造立したことでその意義を終える。しかし、石製ということには、永く形を留めどめる目的を含んでいるやもしれず、また、現在なお造立時のままその姿を留めどめている板碑もあることから、現在の木製卒都婆が廃棄・焼却されると同様に板碑も取り扱われたとは考えにくい。つまりは、造立者自らか、もしくは造立者と関係ある者の手により廃棄されることは通常有り得ず、造立している限り供養塔としての意義が存続としていられる。そして、前述の井戸の廃絶と合わせ板碑が廃棄される場合の第一の理由は、造立地（供養域）の土地利用の変更に伴う土地の整理にあると考えられ、その背景には板碑造立者集団の衰退等による勢力交代が大きく関わっていると考えられる。これが、板碑を出土する井戸・溝などの遺構が中世の館（屋敷）や城郭等に関連するものであれば、なおその色は濃くなる。また、ここで廃棄という行為を考えると、遺跡の井戸や溝より出土する板碑のほとんどが完形品ではなく破片が多く、これが投棄された際に割れたものではないことは、同一の遺構内に接合する破片が少ないことから判る。このことから、破片化したものを廃棄したか、もしくは廃棄の際に人為的に分割した後に投棄していると考えられる。また、もうひとつの特徴として、管見では井戸より出土する板碑のほとんどが板碑の種子を含む上半部が多く、下半部の出土が少ないように思われる。その理由として推察されることは、井戸には井戸信仰（井戸神信仰）があり、むやみに不要物を投棄することは原則としてなく、また、板碑の上半部の主尊は仏であり、やはりこれもむやみに廃棄しかねる。この両者への配慮から井戸内へ板碑の主尊部を廃棄するのではないかと考えられ、その行為は廃棄というより、むしろ埋納という意図があったのではないかと考えられる。

（新倉）

註

註1 『伊勢崎市史』伊勢崎市史編纂室編（昭和58年）

石川等子氏蔵 「文和三年二月二日 仁作三十一才病没 成骨供養子三人」銘の阿弥陀三尊種子板碑 掲載NO.49

武 孫平氏蔵 「永徳二年」銘の阿弥陀三尊種子板碑 掲載NO.98

第3節 まとめ

(1) 中・近世の陶磁器・土器と遺構群

1. はじめに

本遺跡の今回調査範囲からは、総数249片の中近世の産と思われる陶磁器・土器が出土している。これらは、種別・形態別には次のように分離できる。

種別	供膳	調理	煮炊	貯蔵	調度	建具	合計 (%)
磁器	10	0	0	0	0	1	11 (4)
施釉陶器	21	3	1	0	5	0	30 (12)
焼締陶器	0	2	0	34	0	0	36 (14)
須恵質土器	1	6	0	6	0	0	13 (5)
瓦質土器	4	5	50	26	0	2	87 (35)
土師質土器	7	2	45	15	2	1	72 (29)
合計	43	18	96	81	7	4	249
(%)	(17)	(7)	(39)	(33)	(3)	(2)	

種別では、瓦質・土師質を中心とする土器数が、全体の7割近くになっている。磁器と施釉陶器に大型の器形が少いせいもあるが、全体として土器類の点数が多いことは確かであろう。

形態別では、大型の器形が想定される煮炊・貯蔵のものが多い。供膳に比べより大きな器形である調理形態が少いことには、やや注目できる。

全体としては、供膳形態は施釉陶器、調理形態は磁器以外の各種、煮炊形態は瓦質・土師質の土器、貯蔵形態は焼締陶器がそれぞれ主体を占めていたと思われる。調度・建具は絶対量がかなり少ない。

2. 陶磁器 (362頁第286図)

総片数77片より14片を図示した。供膳形態では、1・2は13・14世紀代の舶載品であり、3・4は17世紀から18世紀の所産であろう。7は蓋受けがあり、機能としては供膳に含まれるかもしれない。5は内面が施釉されていない調度形態の香炉である。6は片口の半載注口である。調理形態の8と9は、近世の播鉢である。9は、泉州堺屋産の可能性もある。

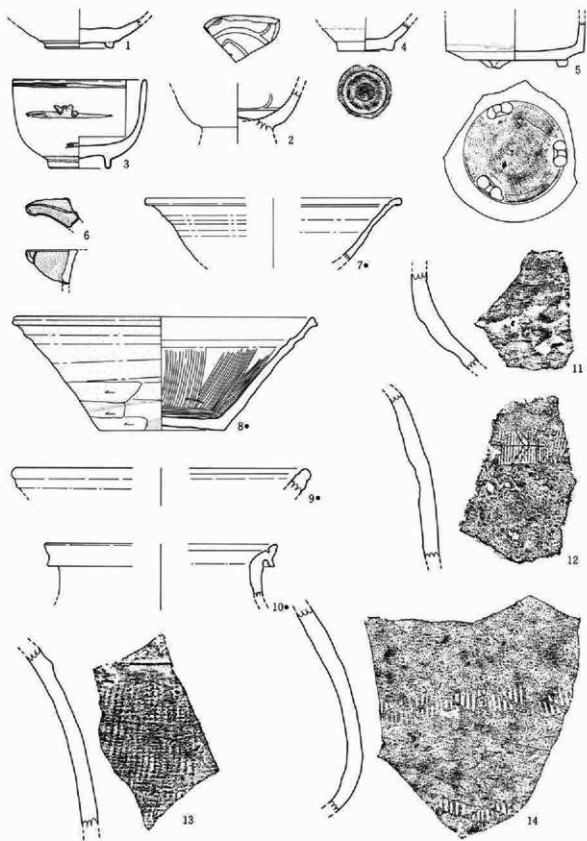
貯蔵形態 (10-14) は、常滑産の大甕類が主体であり、多くが土坑から出土している。10は、常滑の特徴を良く示す口縁片で、14世紀代のものであろう。

これらは、全体として見れば青磁と大甕類を除いて近世のものが多い。

第96表 中近世陶磁器観察表

No	出土状態	種類	形態	残存	法量	胎土・技法・器形の特徴	釉の特徴	備考
1	8号井戸	磁器	碗	底部	底 5.5	硬質灰色。素地内外面文状刺花。 削り高台。	青磁。緑褐色輪漚い。貫入あり。	同安原系?
2	12号住居付近	磁器	碗?	底部	—	硬質灰色。素地内面刺花、削り高台。	青磁。緑灰色釉。貫入あり。	竜泉原

第四章 上植木沓町田遺跡



第286図 中・近世陶磁器実測図

No	出土状態	種類	形態	残存	法量	胎土・技法・器形の特徴	釉の特徴	備考
3	1号溝	手組器	碗	片	口10.6 底4.9 高7.0	灰白色微砂粒含む。口縁接合痕。	呉須染付。透明釉光沢。底部付 五輪割れ多い。貫入あり。	肥前
4	3号井戸	施軸陶器	碗	底部	底4.4	硬質灰色砂粒含む。体部接合痕。 底部削り出し。	天目釉。	瀬戸・美濃
5	1号溝	施軸陶器	香炉	底部	底11.0	軟質灰黄色。底部右回転調整。脚貼 り付け。	鉛釉。内面釉たれ。重ね焼き痕。 遺棄後2次焼成。	瀬戸・美濃
6	6号溝	施軸陶器	片口	注口	—	硬質灰黄色。上面水平。口先外反し やや膨む。	灰釉。	瀬戸・美濃
7	1号溝	施軸陶器	鉢?	口縁	—	硬質灰黄色。口タ口目。口縁大きく 外反。内面蓋受け。	灰釉。遺棄後2次焼成。	瀬戸・美濃
8	9号井戸	施軸陶器	指鉢	片	口31.4 底13.4 高12.1	軟質黄白色気泡砂粒多い。輪積後回 転調整。口縁内外面に縦い線。右回 転で指目作製。	錆釉ハケ塗り。むらが多く底部 にたれる。	瀬戸系
9	3号住居	焼締陶器	指鉢	口縁	—	硬質暗紫色砂粒含む。内外面焼。	酸化赤焼成焼締。	
10	6・7号溝 付近	焼締陶器	壺	口縁	—	灰白色硬質。雲母石英粒含む。口縁 接合痕。折り返し直立。	還元後酸化赤焼成。内外面自然 釉銀化。	常滑
11	12号井戸	焼締陶器	壺	肩部 付近	—	灰色硬質。砂・石英粒多い。輪積後 外面叩き調整。	還元後酸化赤焼成。	常滑
12	3号土坑	焼締陶器	壺	肩部	—	暗灰色硬質。微砂粒含む。外面格子 状叩き調整。	還元後酸化赤焼成。	
13	4号土坑	焼締陶器	壺	肩部	—	暗灰色硬質。砂・石英粒含む。輪積 痕。外面縦い沈線	還元後酸化赤焼成。外面自然釉 銀化。焼成後2次焼成。	
14	5号土坑	焼締陶器	壺	胴部	—	灰色軟質。砂粒多い。内面輪積痕無 調整。外面叩き調整。	還元赤焼成。外面自然釉銀化。	常滑

3. 土器 (367・368頁第287・288図)

総片数172片より37片を図示した。供膳形態は、須恵質(1・2)、瓦質(3)、土師質(4～8)がある。須恵質のものは、古代の須恵器からの流れが考えられる特徴が胎土・焼成状態に見られる。1は小さめの袋物の可能性も考えられる。瓦質のものも、2次焼成や内面磨耗痕からすれば、別の機能形態の場合もありうる。土師質のものは、いわゆるカワラケと呼ばれる一群のもので、形態的には古代以来の供膳の様相を示しているが、いずれも嘉もしくはその近くからの出土であり、実際に食用に使われたのかは疑わしい。小さめで片口状の器形でやや硬質の中性炎ぎみのもの(5・7・8)と、少し大きめで口の無いより軟質の酸化度の強いもの(4・6)に分かれる。しかし4・5・8は9号墓からの一括出土であり、両者の差がどの程度の意味を持つかは不明である。

それらの土師質の供膳形態のものと製作技法がほとんど変わらず、ただ大きさのみが小さいのが9と10である。これらは、油煙付着状態から見て明らかに調度形態である灯明皿として使われていたものである。両者は共に1号溝からの出土であるが、器形と焼成(9が酸化強く、10は中性ぎみ)が異っているため、同

一の時期のものとは断定できない。なお、調度形態としては他に、須恵質の小形の壺(28)がある。

調理形態では、各種の捏鉢がある。須恵質は11・17で、注口部片である17は硬質で良好な作りであり東播磨などの畿内地方産の可能性もある。また11もかなり程度は良く現時点で在地産とは考えにくい。瓦質のものは12・13・15・16であるが、12は底部が薄く磨耗痕もないため、容器の底かもしれない。土師質のものは14である。

煮炊形態のものは18・25・29・37で、このうち火鉢と考えられるのは、18・20と24で、いずれも瓦質である。体部に円孔が確実に認められるのは、24で、内面中心にススが見られる。他にススの付着は19の外面に僅かあるのみだが、器形的な特徴よりこれを火鉢とした。

瓦質の21と23は、鍋の種類であろう。同じく22は、置き台の底部片、土師質の25は置きカマド状のもの、の把手と思われる。

中世初頭に鉄鍋の形態を模倣して生まれたと考えられるいわゆる内耳鍋は、本県地域に普遍的に見られるが、ここでは29-35までを示した。このうち29と30が土師質で、他は瓦質である。29-31と33-35はいずれも8号井戸からの一括出土で、34も9号井戸から検出された。この場合、瓦質と土師質の差は、あまり意味がないことかもしれない。

近世後半と考えられる内耳釜(36・37)は共に瓦質で、1号溝からの出土である。

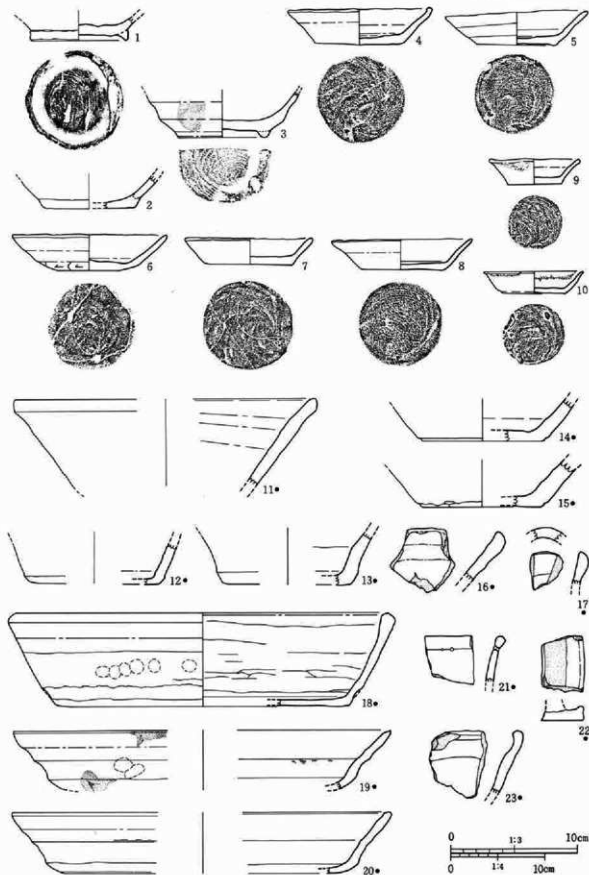
貯蔵形態のものは、瓦質の甕状のもの底部(26)片が、6・10号井戸より出土し接合した。

瓦質の円盤状土製品(27)は、平瓦を2次成形したものである。本県ではまだほとんど注目されていないものだが、西日本の中世遺跡ではかなり出土しており、用途としては投げる武器(印地/飛鏢)であろう。

以上のような土器類は、墓以外からは1号溝を除いて大半が井戸からの出土である。これらは、雑器として破損時に意識的に投棄されたからであろう。

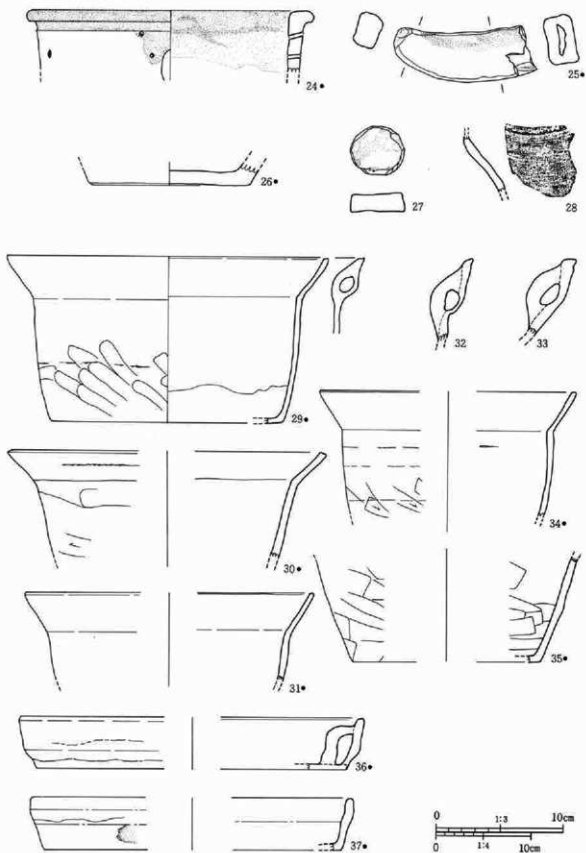
第97表 中・近世土器観察表

No	出土状態	種類	形態	残存	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
1	12号井戸	須恵質土器	壺?	底部	底 7.8	高台低く断面三角。器壁やや厚。	砂粒多く軟質。高台貼付け。	
2	9号井戸	同上	杯	同上	底 7.3	底径小さい。	雲母粒含み軟質。底部右回転糸切り後体部接合。	
3	8号井戸	瓦質土器	壺?	同上	底 7.6	高台断面台形。器壁厚く体部外反傾向。	砂粒多く軟質。底部右回転糸切り後高台貼付け。体底部2次焼成痕。	内面やや磨耗
4	9号墓	土師質土器	小皿	完存	口11.5 底 6.9 高 2.8	口縁やや内反。型みあり。見込みやや明確な内縁。	砂粒多く軟質。底部左回転糸切り後周縁軽いナア調整。見込み指頭痕。	
5	9号墓	同上	小皿 (片口)	完存	口11.0 底 6.2 高 2.7	口縁片側大きく外傾し片口状。平面楕円形。見込み内接なし。	砂粒含みやや硬質。底部左回転糸切り後無調整。外面やや2次焼成ざらみ。	
6	12号住居付 近	同上	小皿	完存	口12.3 底 4.8 高 2.8	体部下位・底部間縁いれ。見込みややや上げ底状。	砂粒含み軟質。底部左回転糸切り後周縁削り調整。	
7	1号墓	同上	小皿	片	口10.2 底 7.0 高 2.1	口径に比べ器高低い。口縁やや肉厚で外反ざらみ。やや歪む。	砂粒含みやや硬質。底部左回転糸切り後内外面軽い削り調整。内面2次焼成痕。	



第287図 中・近世土器実測図 (1)

第四章 上植木沓町田遺跡



第288図 中・近世土器実測図 (2)

第3節 まとめ

No	出土状態	種類	形 態	残存	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
8	9号墓	土師質土器	小甕 (片口)	完存	口11.3 底 6.5 高 2.4	口縁やや外傾ぎみで片側外傾度大きく片口状。見込み縁の内縁	砂粒含みやや硬質。底部左回転糸切り後無調整。	
9	1号溝	同上	灯明皿	ほぼ完存	口 7.2 底 4.3 高 2.1	口縁・体部外反。口縁やや玉縁状。僅かに片側歪みあり。	砂粒含みやや硬質。底部左回転糸切り後無調整。見込み指頭痕。内外面2次焼成痕。	
10	1号溝	同上	灯明皿	完存	口 7.8 底 4.8 高 1.7	体部内反ぎみ。口縁やや玉縁状で僅かに外反。	砂粒含み硬質。底部左回転糸切り後無調整。口縁片側2か所内外面スス付着。	
11	1号井戸	須恵質土器	控鉢	口縁	—	口縁外面に後。体部大きく外傾	砂粒少く硬質。輪轡後ナデ調整。内面磨耗痕。	
12	3号井戸	瓦質土器	鉢程?	底部	—	体部やや直立ぎみ。底部深い。	石英粒多く含み軟質。体部輪轡、下端軽いなデ。底案後2次焼成。	容器の可能性あり
13	1号溝	同上	控鉢	底部	—	器壁全体に厚い。体部上外反傾向。	石英・砂粒含み軟質。体部コバ調整後ナデ。体部内面上磨耗痕。	
14	10号溝付近	土師質土器	控鉢	底部	—	体部下端円縁・底部やや上げ底ぎみ。底径小さいか。	砂粒含み硬質。底部右回転糸切り後無調整。体部内面上磨耗痕。	
15	1号井戸	瓦質土器	控鉢	底部	—	器壁全体に厚い。体部外傾度強い。底部端まくれる。	砂粒含みやや硬質。体部下位穴が多い。体部内面上磨耗。下磨成。	
16	9号住居付近	同上	控鉢	口縁	—	口縁半玉縁状。下位に後。	砂粒少くやや軟質。外面下削りぎみ。内面磨耗痕。	
17	3号井戸付近	須恵質土器	控鉢	口部	—	口縁半玉縁状。弯曲度大きい。	砂粒少く硬質。内外面ナデ。	束縛糸?
18	1号溝	瓦質土器	火鉢	耳	口41.1 底31.0 高 9.8	器高低く、体部やや内反ぎみ。底部やや薄く、口縁厚い。	微砂粒含み硬質。底部・体部下端土型成形。外面上ナデ・中指頭調整。内面磨磨。底案後鉄分付着。	
19	1号溝	同上	火鉢	小片	高 5.1	体部大きく外傾し、内外面に後。	微砂粒含み軟質。体部下端削り調整。中位指頭痕。外面僅かスス付着。	20と同形
20	1号溝	同上	火鉢	小片	高 6.4	体部大きく外傾し、内外面に後。	砂粒含み軟質。体部下端削り調整。外面僅か合痕。底案後鉄分付着。	19と同形
21	8号井戸	同上	鍋	口縁	—	体部直立ぎみ外反、口縁やや玉縁状で沈線上に2孔。	砂粒含みやや軟質。内面軽い磨磨。	
22	11号溝付近	同上	置き台	底部	幅 4.4	有孔の器形の底部が隅状に外方に張り出た部分か。	砂粒少くやや硬質。底部土型成形。表面、端部ナデ調整。	
23	3号井戸	同上	鍋	口縁	—	外傾する体部から玉縁状の口縁内反。	石英粒多く軟質。内外面ナデ調整。外面全面に厚くスス付着。	
24	9号井戸	同上	火鉢	口縁	口30.6	口縁水平に外に張り出し、下に凹部。不規則に大小小孔。	砂粒少く軟質。内外面回転ナデ調整。小孔は焼成前、内口縁スス。	
25	1号墓	土師質土器	置きかマド?	把手	幅 5.1 厚 3.2	矢張り直方体状で全体に弯曲。基部倒中空。	砂粒含み軟質。粘土板折り曲げ成形。調整不良。片面にスス付着。	

第IV章 上植木宅町田遺跡

No	出土状態	種類	形態	残存	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
26	6・10号井戸	瓦質土器	裏?	底部	径17.2	器壁厚い。平面形やや歪む。	砂粒多く軟質。軽い削り調整。内面無調整。土型成形か。	
27	12号住居	瓦質土器	円盤状土製品	完存	幅4.3 厚1.5	上下面平坦で平面楕円形に近い。	砂粒少く硬質。平瓦端部片を削って成形。	重量 31.2g
28	3号井戸	灰黒質土器	壺	肩部	—	器壁やや薄くナメ削状。	微砂粒含み軟質。内面頸部接合痕。	
29	8号井戸	土質土器	鍋	尻	口34.2 底24.6 高17.5	口縁やや内反ぶみに外傾。体部同じく直立。耳部やや細い。	微砂粒含み軟質。体部外面接合痕残り。下位斜方削り後ナメ調整外面スス付着。内面上位磨耗痕。	産後段 分付着。
30	8号井戸	同上	鍋	口縁	—	口縁。体部内反度弱く、底径はやや小さめ。	砂粒含み軟質。体部外面下位削り調整。外面スス付着。	
31	8号井戸	瓦質土器	鍋	口縁	—	口縁外傾度弱い。口唇内面やや張り出す。	微砂粒含みやや硬質。内面やや磨耗。外面スス付着。	
32	6号土坑	同上	鍋	耳部	—	耳部厚さ不均一。	砂粒含み硬質。	
33	8号井戸	同上	鍋	耳部	—	器壁やや厚く、耳部太い。	砂粒含み軟質。外面スス付着。	
34	9号井戸	同上	鍋	尻	—	やや小さめ。器壁薄い。	砂粒含みやや軟質。輪縁後体部外面下位削り。内面上位磨耗痕。	
35	8号井戸	同上	鍋	体部	—	器壁やや厚い。	砂粒含み軟質。輪縁後外面削り。内面コバナゲ。外面スス付着。	
36	1号溝	同上	盤	耳部	高5.7	耳部太く直角に接合。器壁やや厚い。	微砂粒含みやや硬質。底部土型成形。外面スス付着。	
37	1号溝	同上	盤	小片	高5.5	器壁やや厚い。	砂粒少くやや硬質。外面スス付着。	

4. 遺物出土状態から見た遺構群の特徴

遺構からの出土が確実な陶磁器・土器片の形態別の出土状況は、次のようになる。

	供膳	調理	煮炊	貯蔵	調度	建具	合計	その他
1号溝	3	1	2	9	2	0	17	石臼3、板碑2
2号溝	1	0	0	0	0	0	1	
6号溝	0	0	1	0	0	0	1	
9号溝	0	0	0	1	0	0	1	
10号溝	1	0	0	0	0	0	1	
12号溝	1	0	1	1	0	0	3	
13号溝	0	0	0	2	0	0	2	
18号溝	0	0	1	1	0	0	2	
1号土壇墓	2	0	1	0	0	0	3	
7号土壇墓	1	0	0	0	0	0	1	
9号土壇墓	3	0	0	0	0	0	3	
1号井戸	0	3	0	22	0	0	25	石臼1
3号井戸	1	2	5	4	0	0	12	
6号井戸	0	0	1	2	0	0	3	石臼1
8号井戸	2	0	1	13	1	0	17	石臼3、板碑1
9号井戸	1	1	4	2	0	0	8	石臼1、石摺鉢1
10号井戸	0	0	0	1	0	0	1	
12号井戸	1	0	0	2	0	0	3	
3号住居跡	0	1	0	0	0	0	1	
4号住居跡	1	0	0	0	0	0	1	
6号住居跡	1	0	0	0	0	1	2	
12号住居跡	11	1	1	0	1	2	16	
土坑小計	0	0	1	4	0	0	5	
合計	30	9	19	64	4	3	129	

以上のような形態別の出土分布を見ると、供膳形態では土壘墓群とその周辺が多い。当然これらは副葬品のためのものが主体であろう。ただ図示したような土師質の小屋以外に磁器片も含んでいるため、近世の居住要素もこの周辺ではうかがえる。

調理形態は、1号井戸と3号井戸が割合が多い。また煮炊形態は、3号井戸と9号井戸に多くの出土が見られる。貯蔵形態では、1号井戸と8号井戸で10片以上の出土がある。これらの状況を考えれば、1・3号井戸周辺、8・9号井戸周辺の2か所の台所的空間が考えられる。なお遺構に伴わない破片の分布では、3号井戸の南側で煮炊形態3片・貯蔵形態3片・8号井戸の周辺で煮炊形態3片、9号井戸の南側で煮炊形態7片・貯蔵形態4片が見られ、上記の想定をさらに補強している。

次に時代観をある程度しぼることのできる遺構は、中世が1号井戸・3号井戸・8号井戸・6号溝、近世が9号井戸・1号溝と考えられる。

これらの状況を総合的に考え、併せて各遺構の配置状況を含めて見てみるならば、1号溝の東西に中世以来の居住空間／屋敷地を想定することができ、そして西側の9号井戸を中心とする部分が少くとも近世まで存続したと考えられる。東側は、2～4号井戸周辺のピット群が主な建物であった可能性があり、同様に西側は8号井戸周辺のピット群がそれに当たる。またそれぞれに分布する長方形土坑群は、これらの屋敷建物廃絶後それほど時間的にはなれない時点より建物跡区画を意識して形成されたと思われる。

なお南方の中世の土壘墓群一帯は、近世には11・12号井戸を中心とする屋敷地に変化したと考えられる。

(坂井)

- 注1 須恵質・瓦質・土師質との3種分類は、基本的に甕上土層之城・下吉祥寺両遺跡でのものと同様である。須恵質は硬質還元焼成、瓦質は軟質還元中性焼成、土師質は軟質酸化焼成のものを示す。いずれも最終焼成や施釉のものを含んでいない。なお瓦質と土師質は明確に区分できないものもあるが、基本的には製作時の最終焼成の状態で判断した。
- 注2 土師質の皿状のものを調査で一般にカワラケと総称するが、ここで見られるように小皿としたものと灯明皿としたものは機能異なる。前者は古代以来の壺という器形呼称を用いても良いのであろうが、用途から考えれば実際に供膳に使われたことを連想させる壺という呼称をここでは避けた。これは中近世の土器の編年研究の中でかなり論じられているものであるが、両者の識別が重要な意味を持っているかと考えられる。
- 注3 中近世の煮炊形態の中でも火鉢類はかなり多様な器形が想定されるが、基本的には火気とするため大型か厚肉の器形が要件となる。また体部に通気のための円孔のある例がある。(馬淵和雄、「中世都市鎌倉の煮炊形態」、『青山考古』第5号、1967)しかし18のように内面研削されているものも、全体の器形からは今のところ火鉢と考えねばならない。
- 注4 円盤状土製品の出土例は少ないが、広島県福山市の草戸干軒町遺跡では、第32次調査では総数127点の出土があり、そのうち51点は室町時代中頃の時期とされ、この時期以降土師質土器に替って無釉陶器(常滑・備前変片)と瓦利用が増えている。(広島県草戸干軒町遺跡調査研究所、「草戸干軒町遺跡——第32次発掘調査概要——」, 1983)また同遺跡第33次調査出土の総数81点の大きさの变化は、鎌倉時代に径5cm前後であったものが室町時代には径2～4cmと小型化し、そして江戸時代には径5～6cmと再び大型化する傾向が指摘されている。(同前、「草戸干軒町遺跡——第33次発掘調査概要——」, 1984)鳥取県広瀬町の富田川河床遺跡からは昭和57年度の調査で総数106点が出土し、径は2～9cm、重量は11.6～209.2gで、備前変片を利用した径5cm以下重量38.9g平均のものが最も数が多い。そして「あまり摩滅することがない方法によって使用され……多くはある程度の硬度が必要であった……日常生活のうえの必需品ではなかった」と重要な所見が報告されている。(鳥取県教育委員会、「富田川」, 1984)一方文献的な研究では、武器としてのツブツが南北朝から戦国時代までの戦乱で多く使用されたことがあるばかりでなく、平安時代末期以降「無用の民や農民たちのみならず、一般町人・農民、さらに侍までもが興奮のつばに臨んで『前線除災の意味がとくに濃く染められ……また政治的な非常事態にさいしても、不埒な相手に対する批判の意の表現としても、突如、くりひろげられた』行為として飛騨/印地/石打ち/石合戦が注目されている。(横井 清、「悪党と飛騨・東と遊び」、『週刊朝日百科日本の歴史』中世1—①、朝日新聞社、1986)本遺跡の例は、1点だけであるため、形態分類としては次の建具の項目に入れたが、本来はこれと同様の機能を持っていたものであろう。

(2) 上植木沓町田遺跡出土の人歯について

(調査研究員 石守 晃)

1. 出土人歯の状況

上植木沓町田遺跡の9基の土城墓から出土した歯牙は、破片を含め 136点以上あるが、これらは形態的に人歯と考えられる。これらの歯牙は腐蝕・粗造化が進行しており、すべての人歯は歯根部が欠落し、多くはいわゆるエナメルキャップまたはその破片の状態出土している。

2. 歯 種

出土した人歯についての所見は、下表の通りである。

No.	土城番号	取上No.	歯 種	咬耗度	計 測 値 (m)			備 考
					天野	歯冠の幅	歯冠の厚み	
1	S Z 0 1	No. 9	上顎右側中切歯	0度	9.33		近心面等欠損	
2	◇	◇	上顎右側側切歯	0度	7.43			
3	◇	◇	上顎右側犬歯	0度	7.71			
4	◇	◇	上顎右側第1小臼歯	0度	7.65	9.35		
5	◇	◇	上顎右側第1 (又は第2)大白歯	0度	11.46	11.40		
6	◇	◇	上顎右側第3大白歯	0度	9.83	11.09		
7	◇	◇	上顎左側中切歯	0度	9.57		歯根側欠損	
8	◇	◇	上顎左側第1小臼歯	1度	7.55	9.52		
9	◇	◇	上顎右側第2小臼歯	0度	7.02	9.37		
10	◇	◇	上顎左側第1 (又は第2)大白歯	0度	11.12	11.59		
11	◇	◇	下顎右側中切歯	1度			舌側遠心側欠損	
12	◇	◇	下顎右側側切歯	0度	6.37		舌側面歯根側欠	
13	◇	◇	上顎左側犬歯	0度	6.82			
14	◇	◇	下顎右側第1小臼歯	0度	7.62	7.58		
15	◇	◇	下顎右側第2小臼歯	0度	7.53	8.18		
16	◇	◇	下顎右側第1大白歯	1度	12.30	11.57		
17	◇	◇	上顎左側第2大白歯	0度	10.14	11.31		

18	*	*	下顎左側中切歯	1度	5.74		舌側面歯根欠
19	*	*	下顎左側側切歯	1度	6.20		舌側遠心側欠損
20	*	*	下顎左側犬歯	0度	6.99		
21	*	*	下顎左側第1小白歯	0度	7.68	7.78	
22	*	*	下顎左側第2小白歯	0度	7.71	8.18	
23	*	*	下顎左側第1大白歯	1度	12.21	10.76	
24	*	*	下顎左側第2大白歯	0度	11.38	10.30	5咬頭
25	*	*	上顎左側側切歯				舌側面欠損
26	*	*	上顎左側第1大白歯	2度			頬側近心咬頭欠
27	*	*	下顎右側第1大白歯				咬耗2度以上
28	*	*	下顎左側犬歯				咬耗2度以上
29	*	*	下顎左側第1大白歯				咬耗3度程度
30	SZ02	No. 3	上顎左側第2小白歯	2度	8.08		
31	*	No. 4	上顎左側中切歯	1度	9.12	7.44	
32	*	*	上顎左側犬歯	3度	8.06		
33	*	*	下顎左側第2小白歯	4度	7.79	9.15	
34	*	No. 5	上顎右側犬歯	2度	8.20		
35	*	*	上顎右側第2大白歯				
	*	*	(又は第1)大白歯	1度	10.13	12.53	
36	*	*	上顎右側第3大白歯	1度	8.04	11.14	
37	*	*	上顎左側第3大白歯	2度	8.23	11.95	齧歯(C ²)か
38	*	*	下顎右側第1小白歯	1度	8.29	9.61	
39	*	*	下顎右側第2小白歯	2度	7.99	9.10	
40	*	*	下顎左側第1 (又は第2)大白歯	3度			頬側側等咬頭欠
41	*	No. 7	下顎大白歯遠心面片				1片
42	*	*	上顎左側側切歯				遠心側欠損
43	SZ03	No. 2	上顎左側第1小白歯	3度	7.01	8.91	

第IV章 上植木宅町田遺跡

44	◇	◇	上顎左側第2小白歯	2度	6.46	8.98	
45	◇	◇	上顎左側第1大白歯	3度	9.41	10.19	
46	◇	◇	上顎左側第2大白歯	3度	9.13	10.44	
47	◇	◇	下顎左側側切歯	2度	6.20		
48	◇	No. 3	下顎左側第1小白歯	3度	7.00	7.19	
49	◇	◇	下顎左側第2小白歯	1度	6.76		
50	◇	No. 4	上顎左側中切歯	2度	8.50		
51	◇	No. 5	下顎右側犬歯	3度	7.73	7.81	
52	◇	◇	下顎右側第1小白歯	3度	6.80	7.16	
53	◇	No. 6	上顎右中切歯				遠心・舌側側欠
54	◇	◇	上顎右側第2小白歯	3度	6.96	8.89	
55	◇	◇	上顎右側第1 又は第2大白歯				3度以上
56	◇	◇	下顎大白歯				遠心側残存
57	◇	◇	白歯破片等				9片
58	S Z 0 4	No. 3	上顎右側中切歯	3度			舌側面欠損
59	◇	◇	上顎右側犬歯	3度			
60	◇	◇	上顎右側第1小白歯	3度	7.05		頬側側欠損
61	◇	◇	上顎右側第2小白歯	3度			頬側側欠損
62	◇	◇	上顎右側第3大白歯	3度	8.51	10.32	
63	◇	◇	上顎左側犬歯	2度	7.68	8.08	
64	◇		切歯等破片				8片
65	S Z 0 5	No. 2	下顎右側第1小白歯	3度	7.60	9.18	
66	◇	◇	上顎右側第2小白歯	3度	6.21	8.64	
67	◇	◇	上顎左側第2大白歯か	3度			咬合・頬側残存
68	◇	No. 3	上顎左側第1大白歯	3度		10.54	遠心面一部欠損
69	◇	◇	下顎右側第2 (又は第1)大白歯	1度		9.10	近心咬頭欠損

第3節 まとめ

70	◇	◇	下顎左側第1小臼歯	2度	6.93	8.39	
71	◇	◇	下顎左側第2小臼歯	1度	8.12	8.70	
72	◇	No. 4	上顎左側側切歯	2度	7.12		
73	◇		下顎左側中切歯	1度	5.36		
74	◇	No. 5	上顎右側中切歯か				唇側遠心齲残存
75	◇	No. 6	上顎右側第3大臼歯	1度	7.57	9.60	齲歯(C2)か
76	◇	No. 5	下顎左側第2小臼歯	2度	6.17	7.75	
77	S Z 0 6	No. 10	上顎右側側切歯	1度	7.58		舌側面上半欠損
78	◇	No. 11	上顎右側犬歯	3度			舌側面上半欠損
79	◇	NO. 12	下顎右側第1小臼歯	3度	7.42	8.52	
80	◇	◇	下顎右側第2小臼歯	3度	7.73	8.61	
81	◇	No. 13	上顎左側中切歯	1度	7.69		
82	◇	◇	上顎左側側切歯	2度	6.23		
83	◇	◇	上顎左側第1小臼歯	2度	7.49	10.03	
84	◇	◇	下顎左側第2小臼歯	3度	7.60	8.92	
85	◇	No. 11	上顎右側第1 又は第2大臼歯	1度	10.46	12.31	
86	◇	No. 12	上顎右側中切歯	0度	9.17		
87	◇		臼歯片など				6片
88	S Z 0 9	No. 4	上顎右側側切歯	2度	6.59		
89	◇	◇	上顎右側犬歯	2度	8.14	8.61	舌側面一部欠損
90	◇	◇	下顎右側第1大臼歯	2度	11.81	10.58	
91	◇	◇	下顎右側第2大臼歯	2度	11.14	10.07	
92	◇	◇	下顎左側第1大臼歯	3度	10.50	10.03	
93	◇	No. 5	上顎右側中切歯				唇側面のみ残存
94	◇	◇	下顎右側犬歯	2度	7.32		
95	◇	◇	下顎左側犬歯	3度	7.81		
96	◇	◇	下顎左側第1小臼歯	2度	7.46	8.21	

97	◇	◇	下顎左側第2大白歯	3度	10.79	10.31	
98	SZ12		白歯片など				12片
99	SZ13	1-8	上顎右側第3大白歯	0度	7.96	10.05	
100	◇	◇	下顎右側第1 又は第2大白歯	0度			舌側面欠損
101	◇	◇	下顎左側第1 又は第2大白歯	1度			遠心頸欠損
102	◇	◇	大白歯片				3片
103	◇	◇	破片				9片以上

3. 個体の同定

出土した人歯は各土壌墓毎に同一個体のものであるか否かの確認を、歯種、咬耗度、歯の質等を考慮しながら行った。この結果、下記のように2基の土壌墓からは2個体分の人歯が出土していることが確認されたため、本遺跡には11個体以上の遺体が埋葬されていたと推定される。

- (1) SZ1号土壌墓 No. 8 と No. 25 が同一歯種であること、および No. 26 ~ No. 29の咬耗度が No. 1 ~ No. 24の咬耗度が異なり、前者より後者の粗造化が進行していることから、No. 1 ~ No. 24の一群とNo. 25 ~ No. 29の一群は別個体のもと考えられる。(以下前者を「個体A」後者を「個体B」と仮称する)
- (2) SZ2号土壌墓 単一個体のもと思われる。(以下「個体C」と仮称する)
- (3) SZ3号土壌墓 単一個体のもと思われる。(以下「個体D」と仮称する)
- (4) SZ4号土壌墓 単一個体のもと思われる。(以下「個体E」と仮称する)
- (5) SZ5号土壌墓 No. 71 と No. 76 が同一歯種であること、No. 76の計測による値が他の歯に比べ小さいことからNo. 76は本墓出土の他の人歯とは別個体のもと思われる。(以下前者を「個体F」後者を「個体G」と仮称する)
- (6) SZ6号土壌墓 NO. 77 と No. 86 が同一歯種であること、No. 77 ~ No. 84の一群とNo. 85 ~ No. 86の歯の大きさが前者に比し後者の方が大きいことなどから、この2群は別個体のもと考えられる。(以下前者を「個体H」、後者を「個体I」と仮称する)
- (7) SZ9号土壌墓 同一個体のもと思われる。(以下「個体J」と仮称する)
- (8) SZ12号土壌墓 歯種等が同定できないため不詳だが、1個体以上と考えられる。(以下「個体K」と仮称する)
- (9) SZ13号土壌墓 同一個体のもと思われる。(以下「個体L」と仮称する)

4. 年齢と性別

① 年齢

出土人歯の咬耗の状況から天野(1951)の分類により年齢を推定すると、現代人でいえば個体A・個体I・個体Lは10歳代～20歳代、個体C・個体F・個体G・個体Hは30歳代、個体B・個体D・個体Jは30歳代～40歳代、個体Eには40歳代以上という年齢が与えられる。もっとも、近世以前の人々の咬耗の進行状況は現代人のそれに較べて著しいため、現代人に対する咬耗度と年齢についての研究成果を単純に当てはめることはできないのであるが、前述の年齢より上回ることは考えられない。従って、個体A・個体C・個体G・個体H・個体I・個体Lは青年期、個体B・個体D・個体E・個体Jは壮年期のものとして把握できると思われる。

咬合様式が缺状咬合である場合、歯群の中で上顎切歯は咀嚼等による咬耗という影響を最も受けにくい、現代人のそれに最も近いものであると思われる。缺状咬合は古墳時代人からの傾向であり、本遺跡出土人歯が缺状咬合であった可能性は少なくなく、上顎切歯の咬耗度から導き出される年齢は死亡時の年齢を比較的良好に示すものと考えられる。上顎切歯の咬耗度から推定される年齢は、個体A・個体Hは10歳代、個体C・個体G・個体Hは20歳代、個体D・個体Jは30歳代、個体Eは40歳代である。

なお、個体Kについては年齢を特定できなかった。

② 性別

性別については、性差の大きい犬歯を用い、犬歯が失われている場合は大白歯を用いて、その計測値を上糸(1962)と権田(1959)の値に照らして推定した。その結果、個体A・個体C・個体D・個体I・個体Jは男性、個体E・個体G・個体Hは女性であると判断された。計測値は個体Eを除き、極めて明確に男性的または女性的数値を示したが、個体Eも女性的数値を比較的良好に示している。個体Fは小白歯であるが女性的値を示している。

なお、個体B・個体K・個体Lについては、性別を特定することはできなかった。

③ 顔の形

Milus House の分類法による上顎中切歯の形態分類によって顔の形の推定がある程度行えるのであるが、比較的良好な状況で残存する個体A・個体C・個体D・個体E・個体H・個体Iについて顔の形の推定を試みた。その結果、生前において個体Aは尖形(逆三角形)、個体Cは尖円形(丸みのある逆三角形)、個体Dは方尖形(左右の顔の縁が平行で顎の部分は逆三角形)、個体E・個体H・個体Iは方尖円形(丸みのある方尖形)の顔形を呈していたことが推定された。

④ 臼歯による咀嚼

臼歯でモノを咀嚼する場合、左右いづれを多く用いたかを推定するため、犬歯及び小白歯の咬耗による歯冠の形態を観察したところ、その形態から上下顎の対向関係が、個体C・個体D・個体Jは左右側共に一歯対二歯咬合、個体E・個体Iは右側が一歯対一歯咬合・左側が一歯対二歯咬合、個体Fは左右側共に一歯対一歯咬合であったことが推定された。これを石守(1982)による分類によって判断すると、臼歯で咀嚼する場合、個体C・個体D・個体Jは右側の顎、個体E・個体G・個体Iでは左側の顎を主に使っていたと推定された。

5. まとめ

本遺跡の各土壌墓の埋葬者の所見は以下の通りである。

S Z 1号土壌墓 顔形が尖形と想定される青年期(10歳代)の男性と考えられる個体Aと、壮年期のもの

第IV章 上植木宅町田遺跡

考えられる個体Bが埋葬されていた。出土した歯牙の本数などの遺存状況から本土墳墓の埋葬者は前者であり、後者は前者の埋葬時に掘り返されたなどの理由から本土墳墓に紛れ混んだものと思われる。

- S Z 2号土墳墓 顔形が尖円形と想定される青年期(20歳代)と考えられる個体Cが埋葬されていた。
- S Z 3号土墳墓 顔形が方尖形と想定される青年期(30歳代)の男性と考えられる個体Dが埋葬されていた。
- S Z 4号土墳墓 顔形が方尖円形と想定される壮年期(40歳代)の女性と考えられる個体Eが埋葬されていた。
- S Z 5号土墳墓 いづれも青年期(20歳代)の女性と考えられる個体F・個体Gが埋葬されていた。S Z 6の埋葬者は個体Gである。
- S Z 6号土墳墓 顔形が方尖円形と想定される青年期(20歳代)の女性と考えられる個体Hと、顔形が方形と想定される青年期(10歳代)の男性と考えられる個体Iが埋葬されていた。出土した歯牙の本数などの遺存状況から、本土墳墓の埋葬者は個体Hであると思われる。
- S Z 9号土墳墓 青年期(30歳代)の男性と考えられる個体Jが埋葬されていた。
- S Z 12号土墳墓 年齢・性別不明の1個体以上の人間(個体J)が埋葬されていた。
- S Z 13号土墳墓 青年期のものと考えられる個体Kが埋葬されていた。

今回調査を担当した上植木宅町田遺跡出土の歯は、ほとんどエナメルキャップの状態ですべて出土しており、そこから得られる被埋葬者に関するデータも多くはないが、上述のように若干の考察を行った。その成果は現代人に対する研究に基づいており、近世以前の人歯に単純に当てはめられるものではないと思われるが、被葬者を検討し考慮するに一定の基準を与え得るものと考えている。

歯の出土した9基の墓壇に関連する被埋葬者は12人であり、このうち複数の個体が確認された墓壇は3基であった。性別による個体数の差は認められなかったが、総じて青年期に死亡したと考えられるものが多く、幼児期あるいは老年期のものは認められなかった。また、想定される顔の形は方尖円形・尖形・尖円形・方尖形であり、卵円形(丸顔)・方形(角顔)・尖円形は確認されなかった。

参考文献

- 藤田恒太郎(柳野忠大 改定)『歯の解剖学』第21版 1977
- 森木 和男『法医学』1974
- 石守 晃『顎と歯と一歯対一歯咬合及び一歯対二歯咬合についての一調査』『感応寺址』小田原市文化財調査報告書第12集 1982

(3) 上植木沓町遺跡出土の馬歯

宮崎 重雄

I. はじめに

当遺跡は、大間々扇状地の西端にあり、大井戸の湧水池の開折谷および微高地部分に位置する。上武道路の建設に伴い昭和59年1月5日～3月31日と同年4月31日～5月31日の二次に渡って発掘調査が行われ、16世紀に当地に居を構えた豪族の屋敷跡を囲んでいたと思われる溝から、ウマの上顎白歯が内耳鍋・石臼・青磁器・板碑などを伴って出土した。溝は幅が2.2m・深さが1mある¹⁾。

近年、開発に伴う発掘調査が盛んになるにつれて、馬歯・馬骨の出土も多くなってきたが、16世紀のものと限定される例はきわめて乏しく、当時の馬の形態を知る上で、この馬歯は意義のある資料といえる。

本稿は次の基準に従っている。

1. 馬歯の咬合面の名称はSIMPSON〔長谷川・原田²⁾〕によった。
2. 馬の体高の分類は林田³⁾に従った。
3. 計測器具は1/20mmのノギスを使用した。
4. 注の番号は本文、図表類とも共通し、参考・引用文献の番号を表わしている。

II. 群馬県を中心とする馬史の概要

北関東に馬がすみついたのは、化石の資料で見る限り更新世の末で、栃木県安蘇郡葛生町の石灰岩の山でいくつかの白歯が見つかった⁴⁾⁵⁾。これらの化石馬は、歯の大きさから現生の中型在来馬相当の大きさであることがわかっている。次の縄文時代には、邑楽郡板倉町の旧海老瀬村北（現在の寺西）貝塚から中手又は中足骨が出土したと報告されている⁶⁾が、発掘調査によったものでなく、付近の民家に保管されていたもので、時代については疑問視されている。また、金子⁷⁾は、これまで日本で確実に縄文時代といえる馬歯・馬骨は出土してないと述べている。したがって、板倉町の馬骨は後世のものともておく方が無難なようである。古墳時代になると、群馬県内だけでも45基以上の古墳からハニワウマの出土があり、馬具・馬装具の出土している古墳も多数におよんでいる。当時かなりの数の馬が飼養されていたとみることができる。ただし、馬の遺存体そのものの出土となるとこれまでになく、直良⁸⁾は土師文化期のものとして、新田郡笠懸村阿左美出土の馬骨を報じているが、時代は不詳である⁹⁾。8世紀の奈良朝になって、上毛野国が東北地方の平安や開拓の前進基地的存在になると、兵馬の飼養がますます盛んになった。上毛野国には、赤城・榛名・浅間などの火山の山麓地帯が広がっていて、放牧地・牧場にむいていたことがそれを可能にした。10世紀の平安時代に書かれた『延喜式』によれば、上野国には9牧が設置され、毎年50頭の馬が朝廷に貢進されていた。この頃には駅の制度が整い、上野国を通る東山道に5つの駅が置かれ、各駅に15～20頭の馬が常備されて、駅馬・伝馬として人や物資を運んだ。駅馬又は伝馬の可能性のある馬骨は佐波郡境町の十三宝塚遺跡で出土している¹⁰⁾。また、この頃の馬骨としては、北群馬郡岡岡村の久保A遺跡出土の4頭分のものが知られている¹¹⁾。それ以降の時代になると、馬は主に戦国用、運搬・農耕用に飼養されてきたが、系統的に小さいのを特徴とする日本の馬は、背の高いのは強健でなく、戦国に不向きであるとされ、農民にも飼養代が多くなると敬遠されてきた。諸国の領主が軍事目的に産馬改良の努力するようになったのは鎌倉時代以降である。南北朝時代を經

第四章 上植木巻町遺跡

て、いわゆる戦国時代に至ると各地の武将・領主による産馬改良がますます盛んになって、背の高い馬でも戦闘活動に耐えられるようになった。木曾馬の基礎が築かれたのもこの頃とされている¹³¹。ちなみに、新田義貞の鎌倉攻め(1333)で戦死した馬の体高は、平均129cm、最小109.0cm、最大140.1cmであった¹³³。また、江戸時代の農馬は、体高4尺(121cm)を「定尺」と呼んで標準とされていた¹⁴¹。近世前期から中期とされる高崎市中尾遺跡出土の馬は、推定体高が116.7cmであり、江戸後期から明治初期のものとしてされる同市下佐野Ⅱ遺跡出土の馬は、1号馬が132.0cm、2号馬が119.1cmである¹⁶¹。

Ⅲ. 日本の在来馬

近世以前の日本にいた馬の姿は、各地に残存する在来馬にしのぶことができる。現存する在来馬は体型から中型馬(体高125~135cm)と小型馬(体高100~125cm)に分類されている。長野県木曾地方の木曾馬宮崎県都井岬の御崎馬、北海道渡島半島の土産馬は中型馬に属し、南西諸島の与那国馬、宮古馬、トカラ馬四国の野間馬は小型馬に属し、対馬に住む対州馬は両者の中間である。小型馬は縄文後期から弥生時代にかけて華南から琉球諸島・薩南諸島に導入され、九州・四国・本州に伝播された。弥生時代から古墳時代になると朝鮮半島を経由して中型馬が日本に入ってきた。その結果、日本には両者が併存することになった。³¹

Ⅳ. 馬歯の特徴

歯は、動物の器官のなかでは最も堅固で、風化作用にも強いいため、他の組織や器官が消失してしまっても残っていることが多い。発掘現場で最も目につける獣骨は馬歯である。固い葉や茎をもつ禾本科植物を咀嚼するため、馬は独特な適応をとり、次のような特徴の歯を持つに至った。①前臼歯の後臼歯化¹⁷¹。一般に動物の前(小)臼歯は、後(大)臼歯より小さく、形も違っているが、馬では両者がきわめて良く似ている。このためバラバラで出土した馬の歯は、歯種の判定がきわめて難しい。もし、本来の順序通りに埋存していた場合には、取り上げる前に番号を付けておくと、歯種が不明になることもなく、資料的価値を損わないで済む。②咬合面の複雑化。どの歯も咬合面に複雑なエナメル褶襞が走っていて、咀嚼を効率的に行えるようになっている。③長歯化。顎骨におさまっている歯は非常に長く、磨り減るにつれて顎骨のなかの歯がせり出してくる。歯が咬耗し尽くしてしまうと馬は咀嚼できなくなってしまうため、このような適応をした。歯根の閉鎖後は歯の成長は止まり、あとは磨り減るばかりで、どの程度咬耗しているかで、およその年齢を知ることができる。特に切歯の咬耗度は年齢査定に最も有効で大事に扱う必要がある。

V. 記載

ウマ (Equus Caballus)

時代、16世紀

出土部位、左上顎第2前臼歯一同第3後臼歯、右上顎第3前臼歯一同第3後臼歯、上顎骨片

性別、不明

体型、中型馬と小型馬の中間型?

i). 保存状況

残存しているのは、馬の左右の上顎臼歯と、それに付着していたと思われるごくわずかの骨片である。各歯とも歯根部に多少の破損があり、歯冠セメントの大部分が剥離しているが、概して保存は良好である。左右の第2前臼歯を除き、どの歯にも藍鉄鉱(ビビアナイト)が生成されており、湿地に長い間埋存していたことを示している。自然遺物に藍鉄鉱が生成されていた例は、登呂遺跡出土の木片¹⁸¹、藤原京出土の馬歯平城京の馬骨などいくつか知られるようになってきたが、群馬県内では高崎市日高遺跡出土の弥生時代のシカの角が藍鉄鉱に置換されていたことがある²¹¹。藍鉄鉱の組成は $Fe^{2+} + (Pe^2)^2 + 8H_2O$ で、空气中で酸化されると

濃青色になる性質をもっている。本遺跡の藍鉄鉱は地下水の中に含まれる鉄分が菌性セメント質と咬合面の象牙質を構成する溝と反応して生成されたもので、濃青色を呈し、結晶粒として認められる部分もある。

本遺跡の馬歯で藍鉄鉱が生成しているのは、咬合面の象牙質と咬合面から幅約1.5cmの歯の周囲で、各歯とも共通している。また、第3後臼歯だけ左右いずれも歯髓腔、又は歯根管にも生成されている。これらの状況から、馬歯は埋没時には、顎骨におさまっていたが、その後、顎骨だけが腐食してしまって現状のようになったと考えられる。

ii). 本馬の臼歯について

本馬の臼歯には下顎のものが存在しない。残存している上顎臼歯の内訳は、左が第2前臼歯から第3後臼歯までの6本と右が第3前臼歯から第3後臼歯までの5本である。

上顎の全臼歯列長は161.8mmあり、現生中型在来馬の木曾馬の最小のもの162.5mm²²⁾よりわずかに小さいが、小型馬の済州島馬の151.0mm²²⁾よりはだいぶ大きい。したがって、本馬は大型馬と小型馬の中間型、すなわち対州島馬ほどの大きさの馬格が予想される。表—98によって群馬県と長野県の奈良・平安時代馬の5例^{9,10,23)}と上顎全臼歯列長を比較すると、本馬は小さい方から2番目に入る。しかし、群馬県の近世馬の高崎市巾尾遺跡出土の1例¹⁴⁾や近世—近代馬の同市下佐野Ⅱ遺跡出土の2例¹⁵⁾と比較すると、そのいずれよりも大きい。

本馬の臼歯は、第2前臼歯と第4前臼歯が比較的大きめの歯冠長を有するが、歯冠長幅指数は、第2後臼歯以外はこの歯も小さく、近遠心（前後）方向に細長い歯をしていたことがわかる。本馬の第3後臼歯の咬合面には、後小窩（Postfossette）の遠心側の次附歯（Hypostyle）あたりに相接する大小2つの楕円形のエナメル褶がある。筆者の知る範囲では類例は1例しかなく、直良が長崎県五島列島久高産の右上顎第3後臼歯を報告しているのみであるが、これは年令が進み咬耗が増すために現われるものなのか、あるいは個体変異なのかは類例の増加を待って検討をしていきたい。

どの歯も咬耗は正常で、咬合線はゆるやかに凸湾し、ヒトでいうなめらかなシェーの曲線をなしている。歯冠高すなわち臼歯の咬耗度から予想される本馬の年令は10才程度である。解剖学的歯冠高は、萌出が最も早く、咬耗期間の一番長い第1後臼歯が最も低く、以下第2前臼歯、第2後臼歯、第4前臼歯、第3後臼歯の順で歯冠高が高くなっていて、ほぼ萌出の順序通りになっている。各歯が咬耗される時間の長さに見合った歯冠高を有しているということで、過度の咬耗や異常咬耗をしているものはない。

各臼歯の近・遠心両面の隣接面は光沢をもっていて、はっきりと識別できる。またどの歯も歯根によったところに27~63本の周波条が確認できる。

基準となる犬歯が見い出されていないため、性別は不明である。

VI. 議論

出土したのは、上顎臼歯に付着していたわずかの上顎骨片だけで、溝内にもたらされた時に既に他の部位を欠いていたと思われる。本来なら近接して存在するはずの下顎骨を欠き、溝内にもそれを流失させてしまうほどの流れがあったとは考えにくい。上顎臼歯にも水流で磨耗された痕跡が見当たらないからである。また少量とはいえ、上顎の骨片が残るくらいだから、他の部位の骨がもともとあったのならば、たとえわずかでも残っていてよさそうなのである。今のところ、他所で土葬または日晒しにされて、軟組織がなくなり、上顎骨と下顎骨が分離した段階で、上顎骨（頭蓋骨）だけを持ち込んだのか、生首の下顎骨だけを切り取って、上顎骨（頭蓋骨）だけを持ち込んだのかのどちらかと考えられる。それでは何故に上顎骨（頭蓋骨）だけを持ち込んだのだろうか。一つ考えられるのが雨乞い習俗である。東北地方や長野県・神奈川県・兵庫県などの雨乞い習俗のなかに、馬の生首あるいは骨を池や湖に投入する例があるが、本遺跡の場合もこれに類

第IV章 上植木宅町田遺跡

したものであるかも知れない。あるいは、単なる食料の残りであるかも知れないが本馬は老令に近いとはいえ廐馬にしてしまうほどの年令ではない。まだ実用に耐えうる馬を食料にしてしまうというのは、特別の事情のない限り考えにくいことである。やはり雨乞い習俗か、他の祭祀的な何かを想定するのが妥当であろう。

Ⅵ. おわりに

16世紀と限定されている貴重な馬歯を調査できたのは、群馬県埋蔵文化財調査センターの飯塚誠氏のご好意によるもので、ここで心からお礼申し上げます。また、本稿をまとめる際に、数々のご教示を賜った群馬県立前橋第二高等学校の松高栄治氏、参考文献として大いに活用させていただいた「群馬と馬」²⁴⁾の筆者・柴田鉦三郎氏には深甚なる感謝の意を表します。

参考・引用文献

- 1). (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 (1985) 『年報』・No.4, pp.16~17.
- 2). Simpson G・G (長谷川善和監修・原田俊治訳) (1979) 馬と進化・どうぶつ社。
- 3). 林田重幸 (1978) 日本在来馬の系統に関する研究。日本中央競馬会。
- 4). 宮崎重雄・三島弘幸 (1981) 栃木県葛生町石沢野石場のウマ (Equus) の臼歯の化石について。地球科学・Vol.35, No.2, pp.87~90.
- 5). Nagasawa・J (1967) On the fossil equine teeth from Kuzuu, Tochigi prefecture and Tokyo city. Trans. proc. palaeont. soc. Japan. N.S., no.66, 83~91.
- 6). 宮崎重雄 (1954) 群馬県邑楽郡海老瀬村北貝塚試掘概報。岡毛古代文化・1・pp.53~57.
- 7). 金子浩昌 (1983) 有馬条埋遺跡出土の馬歯・牛歯、『有馬条埋遺跡』—第2分冊平安時代。群馬県渋川市教育委員会, pp.281~283.
- 8). 直良信夫 (1984) 日本馬の考古学的研究。校倉書房。
- 9). 松高栄治 (談話)。
- 10). 群馬県依佐郡埴野町教育委員会 (1975・76, 77), 十三宝塚遺跡発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ。
- 11). 宮崎重雄 (1986) 吉岡村大久保A遺跡出土の馬歯・馬骨『大久保A遺跡』Ⅱ区・第2分冊。吉岡村教育委員会。群馬県教育委員会。日本道路公団, pp.372~378.
- 12). 沢崎田 (1987) 馬は語る。岩波書店。
- 13). 林田重幸 (1957) 中世日本の馬について。日本畜産学会報, Vol.28, No.5, pp.301~306.
- 14). 市川健夫 (1981) 日本の馬と牛。東京書籍。
- 15). 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 (1983, 84), 中尾 (遺構編・遺物編)。
- 16). 宮崎重雄 (1986) 下佐野遺跡 (13地区) 出土の馬骨について『下佐野遺跡』—Ⅱ地区(1), 縄文時代・古墳時代論。群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団。日本鉄道建設公団, pp.252~256.
- 17). Abel・O (1914) Die vorzeitlichen Säugetiere. Gustav Fischer, Jena.
- 18). 山崎一雄他 (1948) 登呂遺跡発掘の木片に附着せる藍鉄鉱について。科学, Vol.18, pp.42.
- 19). 土肥孝 (1983) 日本古代馬における犠牲馬『文化財論叢』。奈良国立文化財研究所, pp.383~400.
- 20). 松井章 (1987) 養老院教令の考古学的考察—鹿れ馬牛の処理をめぐって—。信濃, Vol.39, No.4, pp.231~256.
- 21). 宮崎重雄・木崎喜雄 (1982)。
- 22). 岡部利雄 (1953) 本曾馬について『日本在来馬に関する研究』文部省科学試験研究報告No.9, pp.73~162.
- 23). 高谷重夫 (1982) 雨乞習俗の研究。法政大学出版局。
- 24). 柴田鉦三郎 (1975) 群馬と馬。上毛新聞紙上連載記事。

第99表 上植木老町田馬歯計測値・比較表 (単位mm)

		第2前臼歯	第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯	第3後臼歯		
中 世 末 16A D	歯冠長 L	36.2	28.0	26.2	23.6	23.3	27.2		
	R		27.8	27.0	23.5	23.5	27.0		
	歯冠幅 L	20.6	25.5	25.3	24.5	23.3	22.6		
	R		25.2	25.4	23.6	23.2	22.0		
	歯冠高 L	34.7	38.0	44.3	35.7	41.1	45.0		
	R		39.9	43.8	36.8	46.3	45.8		
16A D	長幅指数 L	56.9	91.1	96.5	103.3	100.0	83.1		
	R		90.6	94.1	100.4	98.7	81.5		
奈良 平安	池畑 No 1	歯冠長	35.8	29.5		24.3	26.7	29.3	
		歯冠幅	21.8	23.4		21.8	22.3	25.0	
		長幅指数	60.9	79.3		89.7	83.5	85.3	
	* No 2	歯冠長	28.0+	28.6	26.0	23.9	24.5	29.3	
		歯冠幅		26.3	26.2	26.3	25.6	25.4	
		長幅指数		92.0	100.8	110.0	104.5	86.7	
平 安	大久保 A No 1	歯冠長		26.4	25.6	21.8	25.4	22.1	
	○	歯冠幅	23.0	25.0	25.8	23.0	22.3	24.0	
		長幅指数		94.7	100.8	105.5	87.8	108.6	
	* No 2	歯冠長		38.8	28.3	27.3	24.5	26.1	30.6
		歯冠幅		24.5	27.4	27.0	26.4	25.2	23.3
		長幅指数		63.1	96.8	98.9	107.8	96.6	76.1
十三宝塚 ○	歯冠長		37.7	30.7	27.6	25.8	26.2	30.4	
	歯冠幅		23.8	26.7	25.8	25.4	23.6	20.6	
	長幅指数		63.1	87.0	93.5	101.6	90.1	67.8	
下在野 近世 近代	下在野 Ⅱ	歯冠長	35.4	25.0	24.7	20.4	23.2	33.0	
		歯冠幅	22.5	25.0	25.3	21.8	18.9	21.9	
		長幅指数	63.6	100.0	102.4	106.9	81.5	66.4	

第100表 上植木老町田上顎全臼歯列長計測値・比較表 (単位mm)

	時 代	計 測 値
上植木老町田	中世末 (16A P)	161.8
池畑 No 1	奈良~平安	166.0
* No 2		152.7
大久保 A No 2	平 安	169.4
十三宝塚	*	169.4
野大付 No 4	*	166.2
中 尾		146.0
下在野 No 1	近世~近代	156.0
* No 2		141.0
木曾馬 最大	現 生	184.0
最小		162.5
平均		173.2 (N = 6)
清川島馬	*	151.0

付 編

1. 書上上原之城遺跡の古墳

はじめに

旧遺跡名称「書上遺跡」として調査を実施したうち、その南端に2基の古墳および井戸1基、溝2条が調査されている。J R両毛線の北側からの発見であるが、立地上は新遺跡名称「書上上原之城遺跡」に含まれるので本報告書に掲載しておく。

この付近は、南傾斜の洪積台地を湧水に伴う小規模な河川が南方へ開折し、沖積地が枝状に広がる地域である。古墳の乗る台地も西方は赤堀との境にある大井戸湧水池からの谷に画され、東は天ヶ堤からの小谷によって分たれている。古墳はこの両沖積地に挟まれた幅700m程の南に延びる台地の東辺に位置する。「上毛古墳総覧」によれば、旧書上町の東南部一帯には約30基の古墳が記載されているが、我々の調査した頃は墳丘の残存するものは全く無くなっていた。

付近は古墳の分布の稠密地帯であり、台地上は西に高山古墳群、南へ大道西古墳群・大道東古墳群・権現山北古墳群・権現山古墳群・権現山南古墳群・横塚古墳群と続き、6世紀以降の群集墳を形成している。また西方対岸には5世紀後半の丸塚山前方後円墳（全長81m）、6世紀初めの恵下古墳（円墳27m）なども有り、7世紀中頃創建の上植木庵寺も近い。南方700mには谷を挟んで6世紀の豪族居館と考えられる原之城遺跡がある。

1号墳（第289～293図、図版125～127・131・132）

外形 墳丘盛土は全く失われており、試掘調査によって発見されたものである。確認面はローム層上面であり、当然堆積していたであろう表土は失われ、築造面も不明である。ただし、墳丘裾部には周堀があり、1号墳の規模を知ることができた。

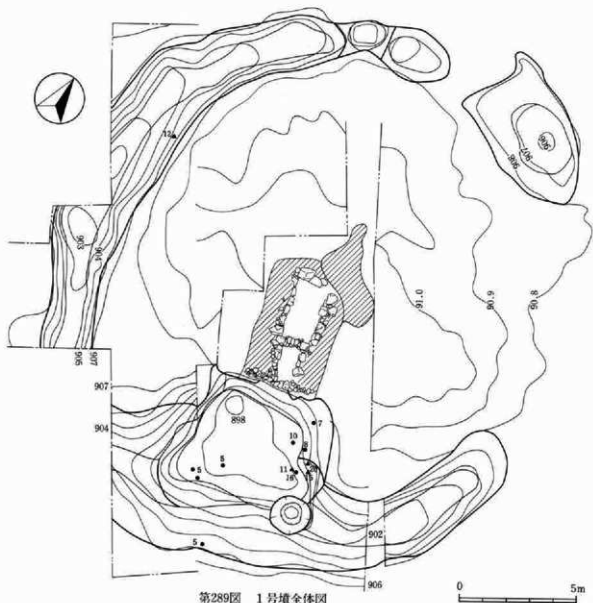
周堀の外縁形は、やや長円形である。南北の長径が23.9m・東西の短径が23.0mである。周堀は全周するわけではなく、東半は北東部の円周上に短い溝がみられ、2ヶ所が切れている。周堀幅は2.3～3.1mで、深さは確認面から0.4ないし0.5m程である。断面はU字形である。周堀が切れる端部の立ち上がりは明確な法面を構成しており、当初から東半部には周堀が巡っていなかったようである。周堀内縁の径は長径19.4m・短径16.4m（推定）程である。類似の他の古墳例から考えると、墳丘はこの内側に数mのテラスを設け、その内部に若干の盛土をした程度と考えられる。なお、東半部の周堀欠部は、その幅1.1mと10.2mの2ヶ所である。埴輪・葺石等は全く認められなかった。

石室 輝石安山岩自然石を用いた同軸型横穴式石室である。奥壁は墳丘の中央よりやや奥に位置する。全長は4.68mである。支室主軸はN-5°30'-Wで、入り口を南に向ける。ほぼ当時の真北に近い。石室は地表を掘りくぼめた掘り方内に構築される。従って入り口は地表下になるため、周堀と入口とを方形に掘りくぼめて前庭部が設置されている。支室の右奥隅部は大きく破壊されている。

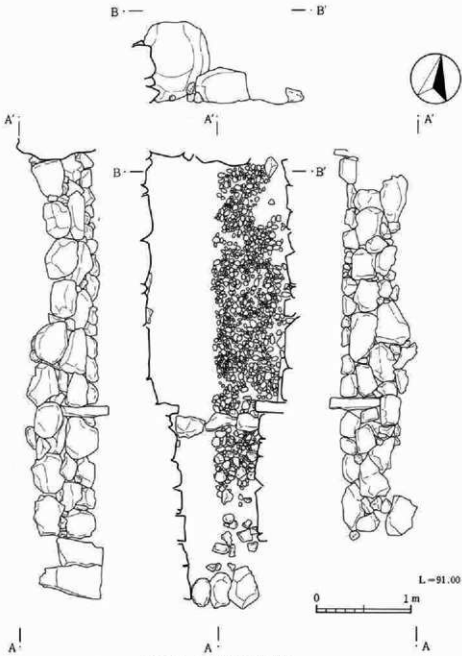
支室 輝石安山岩割石を用いて、長方形の平面を構成する。構築面はローム層内に設けられた掘り方底面であり、奥から入り口に向かって10cm低くなっている。排水を考えた結果であろうか。奥壁石は横に3石の大石を用いている。左側の奥壁石は85cmの高さがあるが、奥壁高はさらに高かったと思われる。このことから奥壁は多石積の構成と考えられる。左右の側壁石は根石に小振りの自然石を用いている。横25cm・縦15cm・奥行20cm程の自然石を揃えている。これによって、石室内面の位置と上に乗せる壁石の安定を図っているようである。袖部は左右とも板状石を用いている。掘り方面に約15cm程埋め込み、羨道よりも内側に突出させ、いわゆる玄門柱状の構造となっている。この玄門石は石室床面から40cmまでの高さで留まり、上部には羨道

壁と同様な自然石が乗っている。疑似的な玄門構造と言える。玄室と羨道を分ける欄石は玄門石の手前羨道奥に配されている。自然石3石で構成され、玄門奥から13cm手前に並ぶ。床面は約10cmの厚さに拳大の川原石が敷かれている。このように構成された玄室の床面の平面規模は、中央長2 m 70cm、左長2 m 65cm、右長2 m 56cm、奥壁幅1 m 38cm、中央幅1 m 45cm、前幅1 m 32cmとなる。また玄門は奥行10cm、幅80cm、玄室からはみ出し幅は左で25cm、右で27cm、羨道からの出は左右とも5 cm程である。2段目以上の左右の壁石は30cm×50cm程の大石を用いて積まれ、3段目までが残っている。ほぼ横目の通った積み方で、奥壁上端の高さからみて、さらに上段が有ったと思われる。壁面の内傾はさほど顕著ではない。

羨道 平面形は、長さ1 m 98cm、奥幅90cm、入口幅75cmである。床面は奥を榎石、手前は間仕切石で画されている。側壁の扱いは玄室と類似する。ただ入口部の左壁は玄門と同様の板石を立て、平口面を壁面としている。右壁の同部分も抜き取られているが、左壁同様の板石があつたものと考えられる。床面の奥半分は拳大の川原石が敷き込まれているが、前半分はやや粗乱きみである。欄石と間仕切石に画された羨道には閉塞石が充填されている。床石よりは大幅りの角礫がランダムに用いられていた。

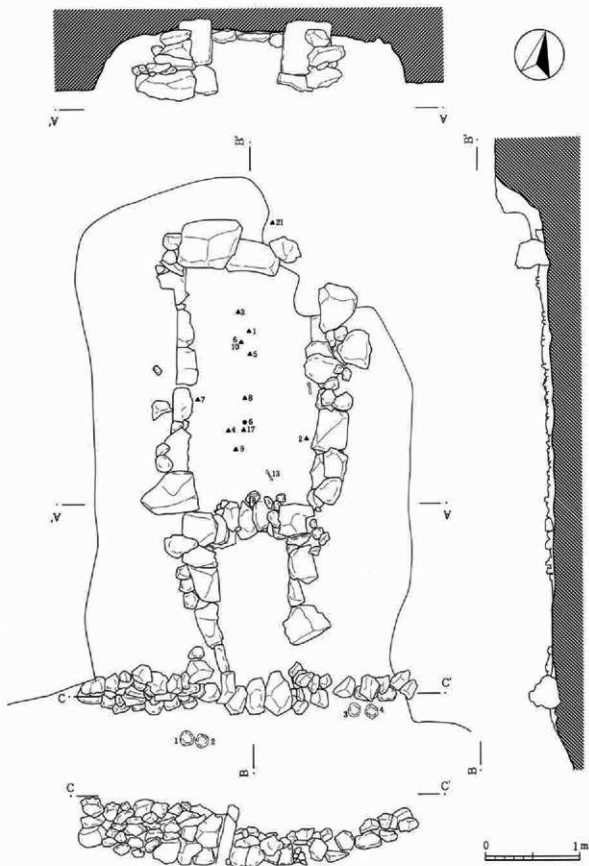


第289図 1号墳全体図



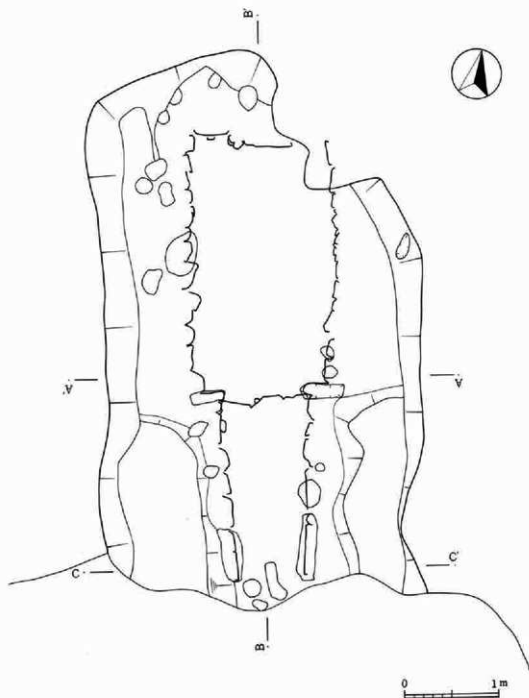
第290図 1号墳石室展開図

前庭部 入口部は板状の壁石から左右に直線的に開く。左壁から左方に1.60m、右壁から右方へ1.25m、これに入口幅75cmを加えた3.60mが前庭の上底をつくる。20cm大の角礫を60cm程の高さに積み上げている。底面は掘り方底と一致しており、正面形は緩いU字状になる。底面から20cm上に、底面のカーブと相似形に7~8cmの厚さで浅間山B軽石が堆積している。左右の端部も掘り方範囲と一致している。このことは、石室入口部の正面観を構成すると共に、石室裏込め土の崩落を防ぐ実利的な役目も果たしている。全体の形状は、外方へやや開く台形状の平面形で、底面は石室底面から45cm、周堀より40cm低く据えられている。奥行5m、下底6.80mの規模である。なお、周堀との接続部辺りに1号井戸が穿たれている。



第291图 1号墳遺物出土状態

石室掘り方 平面形は長方形を呈する。右奥隅が壊されているので、全形はわからないが、左奥隅部は丸みを持ち、奥辺は主軸に斜めの掘り方を持つので、やや不整形となるようである。確認面での長軸長6.00m、幅3.85mである。現状での深さは60cm程である。この深さと石室壁石の残存高はほぼ一致している。上半部を削平された結果であろう。掘り方法面の勾配は側壁の位置する長辺で60°、奥壁を配する短辺で42°程である。底面は平らであるが、法面へは緩く移行する。また、羨道の側壁の裏側には15~20cmの厚さで掘り残しがあり、当初から両袖型石室構造を意識して掘削したことがうかがえる。共に壁石の落し込みに効果がある方法であろうか。短辺手前は前庭となる。底面平面形は長さ5.4m・幅2.8m程である。

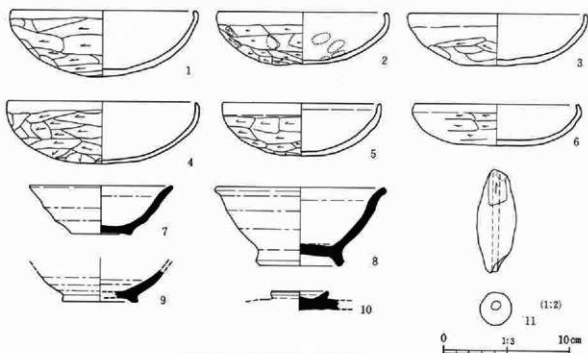


第292図 1号墳石室掘り方実測図

付 編

遺物出土状況 石室内出土の19点の遺物はすべて玄室内で検出された。出土状況を見ると、多くは床面に近い所から出土しているものの、散在傾向があり、原位置を保っているものは少ない。中央部から半完形の土師器碗（6）が出土している。床面から15cm上位にあるが、前庭出土の碗類に近い特徴を持つ。他は鉄鉢が17点、刀子2点である。

前庭部からは、入口の両脇に土師器碗が2個ずつ正位置で並置されていた。極めて意識的な配置であり、供献の在り方を知る良好な資料といえる。左方の1・2は茶褐色を呈し、焼締りの良い碗であり、右方の3・4も形状は近似するものの、やや薄手で赤褐色を呈する。この他、類似した土師器碗が1個（5）出土している。また、鉄族片5点が前庭東辺から出土している。底面から高いところからの出土である。なお、これに近い所から高台付碗が3個体分出土している。いずれも破片であり、攪乱により混入したものと思われる。



第293図 1号墳関係遺物実測図

第101表 1号墳関係出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	完形。 口 15.0cm 高 5.3cm	前庭部。	①砂粒を含む。 ②橙 色。 ③酸化灰・良好	外面 底～体部手持ち彫削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
2	杯 (土師器)	完形。 口 13.6cm 高 4.1cm	前庭部。	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底～体部手持ち彫削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
3	杯 (土師器)	完形。 口 14.4cm 高 4.1cm	前庭部。	①砂粒を含む。 ②橙 色。 ③酸化灰・良好。	外面 底部手持ち彫削り。体部横い彫ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
4	杯 (土師器)	完形。 口 15.4cm 高 5.0cm	前庭部。	①砂粒を含む。 ②橙 色。 ③酸化灰・良好	外面 底～体部手持ち彫削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	

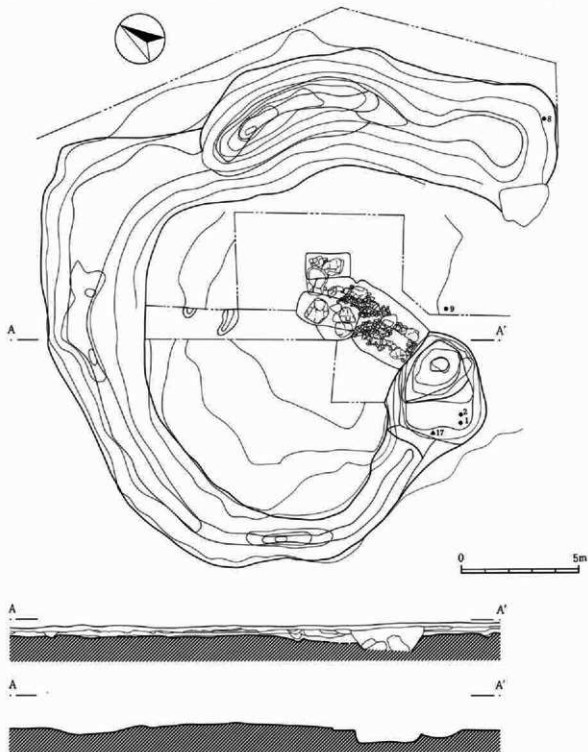
1 書上上原之城遺跡の古墳

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③地成	成・整形の特徴	備考
5	杯 (土師器)	1/2残存。 口 12.6cm 高 4.2cm		①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化鉄・良好。	外面 底一腰部手持ち鹿削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
6	杯 (土師器)	1/2残存。 口 13.1cm 高 3.3cm		①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化鉄・良好。	外面 底一腰部手持ち鹿削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
7	杯 (須恵器)	1/3残存。 口 14.4cm 高 3.8cm 底 4.4cm		①砂粒を含む。 ②淡黄色。 ③還元鉄・硬質。	外面 右側店口ク口成形。底部側面糸切り未調整。 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
8	高台付碗 (須恵器)	1/3残存。 口 13.6cm 高 6.2cm 底 7.0cm		①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元鉄・硬質。	外面 右側回転ク口成形。底部回転糸切り後、高台貼り付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
9	高台付碗 (須恵器)	1/4残存。 底 6.0cm		①砂粒を多く含む。 ②灰黄色。 ③還元鉄・硬質。	外面 右側回転ク口成形。底部回転糸切り後、高台貼り付け。 内面 回転によるナデ。	
10	蓋 (須恵器)	つまみ部。 径 4.6cm		①砂粒を含む。 ②赤褐色。 ③酸化鉄・硬質。	外面 右側回転ク口成形。回転鹿削り。 内面 回転によるナデ。	
11	土 鐘	ほぼ完成。		①砂粒を含む。 ②赤褐色。 ③酸化鉄・良好。	全長5.5cm、最大径2.1cm、孔径4mm。	

付 編

2号墳 (第294～298図、図版128～129・131・132)

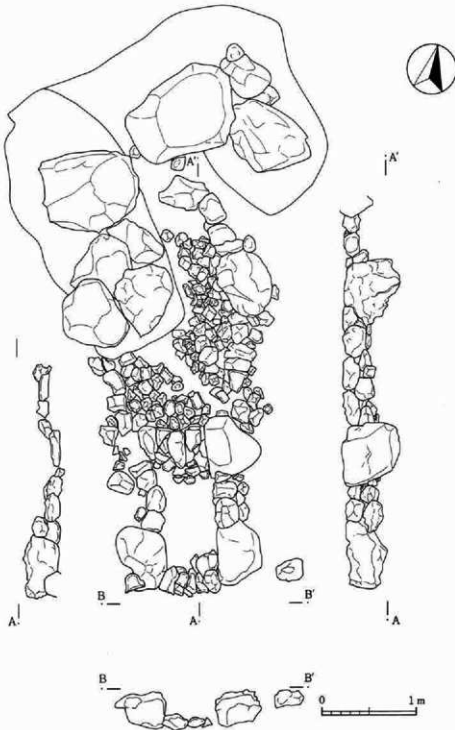
外形 1号墳と同じく、墳丘盛土は失われ、周堀によってその概況を知るにとどまる。周堀は不整形形で横穴式石室の開口する南側前庭部の東側が切れる。平面形は、西半部がほぼ整っているのに比べ、東半部は直線的な周堀となる。その外側に何等かの遺構があり、これに規制を受けたかのようなようであるが、調査区域外



第294図 2号墳全体図

1 善上上原之城遺跡の古墳

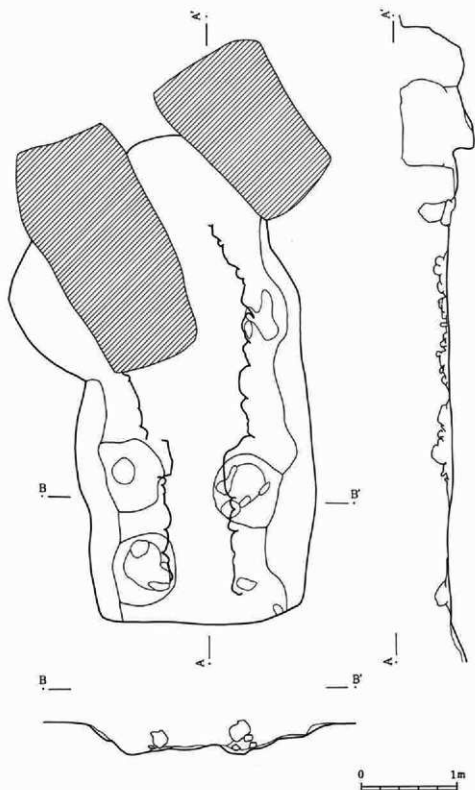
になるため確認していない。周堀外縁での直径は、南北で21.2m、東西で24.0mである。周堀は狭い所で幅1.5m、深さ30cm、広い所で幅5m、深さ1.2mと一定していない。断面は緩いU字形である。周堀内径は南北11.7m、東西15.8mで、石室長軸に直交する径が優る偏円になる。墳丘部はやや膨らみが残り、周堀内縁より墳丘中央は30cm程高くなっている。墳輪・葺石は全く認められなかった。



第295図 2号墳石室展開図

付 編

石室 主軸をN-5°-Eにとり、南方に開口する。自然石乱石積の両袖型石室である。全長は4.10mである。僅かに玄室の過半と羨道の根石が残っていただけであるが、平面形及び用材の扱い方についての知見を得ることができた。石室根石は、確認面から30cm程掘り込まれた掘り方内に設置される。根石は入口部、



第296図 2号墳掘り方実測図

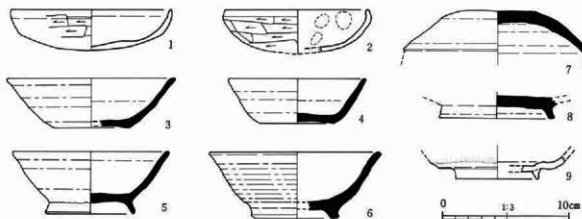
袖石、玄室中央部の要所に大石を据え、他は小振りな石を以て基礎の安定を図っている。玄室は奥壁の大部分と左壁の奥半が失われているため、やや正確さに欠けるが、その平面規模は概ね全長2.40m、奥幅0.85m、中央幅1.20m、前幅1.05mでやや膨張りが認められる。床面は拳大の自然石が敷き込まれている。

羨道は袖部と翻石とで分たれる。長さ1.7m、奥幅0.5m、入口幅0.55mである。床面には石を敷き込む等の施設は施されず、直接閉塞されたものである。

石室掘り方 石室内法と軸を合わせ長方形に掘り込まれていた。長さ5.1m、最大幅2.6m、深さ0.3mである。法面は36°と緩い。一部の側壁には据え付け穴が認められる。

前庭部 西方からまわり込む周堀の先端にとりつくような形で石室前に設けられる。形状は不整形円で、4m×4mの摺鉢状をしている。底面は石室床面より35cm低い。また、西方の周堀より40cm程低くなっている。

遺物出土状況 石室内からの出土は無い。前庭部から2個の土師器杯が出土している。1号墳出土の例品に形態・技法共に近似している。また、釘状鉄器が1点出土した。



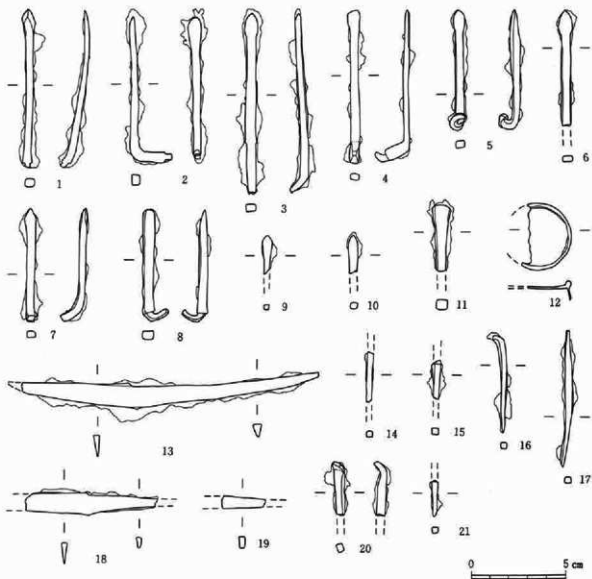
第297図 2号墳関係遺物実測図

第102表 2号墳関係出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	杯 (土師器)	1/2残存。 口 12.8cm 高 3.2cm		①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底-体部手持ち鹿脰形。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
2	杯 (土師器)	1/3残存。 口 11.5cm 高 3.3cm		①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・良好。	外面 底-体部手持ち鹿脰形。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
3	杯 (須恵器)	1/4残存。 口 13.4cm 高 3.8cm 底 6.0cm		①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色。 ③酸化灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り未調整。 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
4	杯 (須恵器)	1/2残存。 口 11.0cm 高 3.5cm 底 6.0cm		①砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り未調整。 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
5	高台付碗。 (須恵器)	1/3残存。 口 12.5cm 高 4.9cm 底 6.7cm		①砂粒を含む。 ②灰白色。 ③還元灰・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台貼り付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	

付 編

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
6	高台付輪 (須恵器)	1/3残存。 口 13.7cm 高 5.2cm 底 7.0cm		①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部回転赤切り後、高台貼り付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
7	蓋 (須恵器)			①砂粒を多く含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。回転黒削り。 内面 回転によるナデ。	
8	高台付輪 (須恵器)	底部のみ 底 9.2cm		①砂粒を多く含む。 ②灰黄褐色。 ③還元炎・軟質。	外面 右回転ロクロ成形。底部貼り付け高台。 内面 摩滅している。	
9	段 皿 (灰輪陶器)	底部のみ 底 6.6cm		①精選された粘土。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	外面 右回転ロクロ成形。底部削り出し高台か。 内面 重ね焼き痕有り。	



第298図 金属製造物実測図

第103表 金属製造物観察表

No	型 式	出 土 位 置	現 状	法 量						特 徴
				全長	鋒長	鋒幅	莖被長	莖 幅	莖 長	
1	莖被鑿箭式	玄室	茎 欠	8.3	1.5	0.7	6.2	0.4×0.4	(0.3)	全体が緩く曲がっている。
2	◇			9.4	1.4	0.7	7.7	0.5×0.4	(0.3)	莖被下半で直角に折れ曲がっている。
3	◇			9.4	1.1	0.7	5.6	0.6×0.4	(2.6)	鈍く残る。茎尻が欠けるが、他は残りが良い。莖下半で屈曲している。
4	◇		鋒一部欠	8.7	(1.2)	0.7	6.7	0.5×0.3	(0.8)	ほぼ定形に近いが、鋒先端が欠。莖被下半が屈曲している。
5	◇		完 形	8.8	1.2	0.6	8.2	0.5×0.4		莖下半が丸くなっている。茎部が不分明。
6	◇		莖被下半欠	6.1	1.4	0.8	(4.7)	0.5×0.3		莖被下半欠。
7	◇			6.5	1.4	0.6	(5.1)	0.4×0.3		莖被下半が屈曲している。
8	◇		鋒 欠	6.9			(5.5)	0.6×0.4	(1.4)	
9	◇		鋒のみ残	2.0	1.3	0.6	(0.7)	0.3×0.3		
10	◇			2.0	1.0	0.5	(1.0)	0.4×0.4		
11	◇	前庭	莖被一部残	3.4			(3.4)	0.6×0.5		鋒に向かって広くなる。莖被の形状は鑿箭式とは異なる。
14	◇	玄室	茎の一部残	2.6					2.6	
15	◇	前庭		2.1					2.1	
16	◇	玄室	莖被以上欠	5.5					5.5	茎部のみの残存品であるが、端部が曲がっている。
20	◇		茎のみ残						2.8	
20	◇	前庭	莖被の一部	2.3			(2.3)	0.4×0.3		折れ曲がった痕有り。
21	◇		茎のみ残	1.4					1.4	
	名 称	出 土 地 点	残存状態	法 量						特 徴
				全 長	刃部長	刃部元幅	鋒元幅	莖長	区	
13	刀 子	玄室	ほぼ完形	(15.8)	(5.9)	1.3	0.3	(0.7)	両区	刃元全長16.6cm。刀は使い込まれ短くなっている。緩やかな反りを持つ。
18	◇		刃と茎の一部	(7.0)	(3.3)	1.1	0.3	(3.7)		形態的には、No. 11の刀子と類似。
17	釘状金属器		完 形	7.2		0.4×0.4				両端が尖っている。断面方形。中央部が太い。

まとめ

1. 立地環境の特徴
2. 墳丘規模・形態の特徴
3. 石室規模・形態の特徴
4. 遺物の示す年代

1. 前項で触れたように2号墳の東にさらにもう1基の古墳の存在が想定し得るが、それにしても古墳群としての分布は散在的である。同じ台地上には南や西に大小の規模の古墳群が連なるが、本古墳群はその東北端に位置すると言える。台地東辺に立地するところから、これのやや北方の天ヶ池から南に細長く開析された沖積地を耕作した小集団の墓域であった可能性がある。現在この沖積地の中央に伊勢崎市と佐波郡東村の境界がきている。

2. 両古墳の外部及び内部構造の規模は、表の通りである。これを見ると、外形は1号墳が比較的整っているに比較し、2号墳が不整形であるが、規模にさほどの差の無いことが分かる。墳丘径は不明であるが、周堀内径からさらに1～2mのテラス状の平坦面の存在が通常の形状であることからみて、いずれも18～21m内外の直径であつたことが窺える。終末期古墳としては周辺の上原古墳（径12m）や光仙房遺跡の古墳（15m～20m）などから見て、決して規模の小さくないことが知られる。ただし、墳丘の盛土は石室の下半が地表下に構築されることからみて、さほど高いものではなかったと思われる。これに使用される土量は、石室掘り方の残土、周堀掘削土、掘り方掘削土が用いられたはずであり、これの土量に規制されたとも言える。また、両古墳の扶状の周堀の状況を考えて、盛土の必要量が確保されたための掘り残しとも解される。であるとすれば、周堀の意味するところは、外界と墓域を分ける結界的な役割と共に石室を覆う封土供給用の役割を果たしていたとも言える。今後周堀土と墳丘土との関係はさらに具体的事例に基づき検討を加えていきたいと考えている。

3. 石室は掘り方内に構築されている。1号墳が60cm、2号墳が30cmの深さを持っている。構築時の地表はさらにこれに数十cmの高さが考えられる。1号墳の壁高は1mをさほど超えなかったと考えられる。このことからみて、石室の2/3程が地表下に造られたことになる。従って、墳丘土はこれを覆う程度の低丘な盛土が想定される。このような構造なるがゆえに、地山を掘りくほめた前庭が必要になる。石室全長は古墳直径の約1/4、使用した基準は唐尺（1尺約30cm）と考えられる。

前庭は周堀の中に一段低くしつらえられ、内方に位置する石室入口までの間を掘り下げている。1号墳は石室入口から左右に開く立面を石垣で築く構造を持つが、2号墳は単に掘りくほめたのみで、形状も不整形である。前庭からは土器が発見されている。墓前で「まつり」が行われた証左といえる。形態的には台形状の前庭の退化したものと考えることができる。1号墳石室における玄門を意識しながらも、不完全な構成と相俟って本古墳群の年代と所属する階層を推定することができる。

4. 遺物は主として1号墳から出土している。1号墳玄室出土の鉄製品は刀子と鉄鏃である。終末期古墳の一般的副葬品と言える。刀子はかなり使い込まれており、生前携帯していた遺品であろうか。鉄鏃は鑿箭式のみであり、この時期の一般的型式である。他に鉄刀や須恵器が認められないのは、亡失したためというより、当初から副葬されなかった可能性が強い。2号墳は石室から釘状鉄器が1点出土したのみである。もともと副葬品の少ない古墳であったものであろう。両古墳とも前庭部から土器が出土している。特に、1号墳の石室入口両脇に2個づつ配された甕4個は、整形がそっくりで一括品といえる。ただ、左と右の2個づつの例品には焼締りに差があり、焼成時の差と考えられる。或は、2つのセットを一括して配置したものであ

1 書上上原之城遺跡の古墳

らうか。正位置におかれているところからみて、中には食物が盛られていたものであろう。

古墳築造の時期は、上記遺物の示す年代から考えて7世紀末から8世紀初めと考える。特に1号墳前庭から出土した土師器椀は8世紀前半の所産になるものであり、少なくともこの頃まで古墳の「まつり」が行われたことを示す貴重な資料と言える。

当地方には7世紀中頃の建立と考えられる上植木庵寺がある。古墳の乗る台地から谷一つを隔てた西方0.7kmにある。白鳳期に寺院建立の始まる当地方の真近のところで、なお、古制の古墳が営まれていることは大層興味深い事実である。一般的には東国にあっては7世紀代に切石積石室を有する終末期古墳に代表される首長達は、地域毎に寺院を建立し、これに財力を投下し、新しい支配体制に組み込まれていくとの社会構造の変化が解明されつつあるが、これは西方に藤手刀や巡方を出土した上原古墳（7世紀末～8世紀初め）があることでも、当地方の一般現象であることが分かる。いずれにしても、古代の初期寺院と終末期古墳とは同時に存在し、階層構造としては、同じヒエラルヒーに組み込まれていたことは明らかである。過渡期の現象と言える。

第104表 古墳対照表

		1号墳	2号墳	
周 型	外 長 径	23.9	24.0	
	短 径	23.0	21.2	
	内 長 径	19.4	15.8	
		短 径	16.4	11.7
墳 丘 径				
石 室 掘 方	長 辺	6.0	5.1	
	短 辺	3.85	2.6	
	深 さ	0.65	0.30	
石	全 長	4.68	4.10	
室	玄	長さ	2.70	2.40
		奥幅	1.38	0.85
		中央幅	1.45	1.20
	室	前幅	1.32	1.05
		残存高	0.85	0.60
羨 道	長さ	1.98	1.70	
	奥幅	0.90	0.50	
	入口幅	0.75	0.55	
主 軸 方 位		N5°30'W	N5°E	

2. 旧佐位郡北東部の地名分布の様相

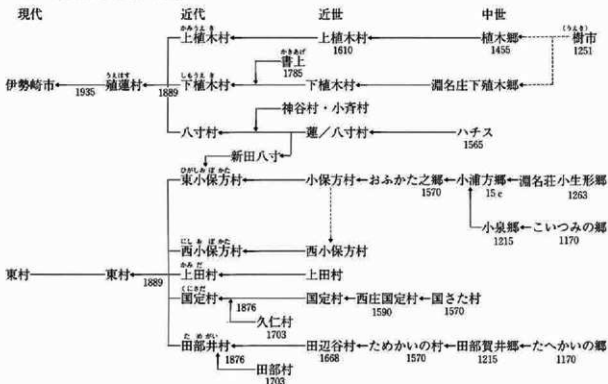
坂 井 隆

はじめに

本調査両遺跡の命名根拠とした小字名は、単純に考えれば寺院及び城館的用字になっている。しかし、今回の調査では、城館的狀況は認められるものの、完全な形で文字通りの遺構を検出したとは言いがたい。あるいは仮に検出されたとしても、純粋に考古学的方法によって確認したものを、小字名のような形で残っているものと合致させるには、地名学的な検討も当然必要である。

この地名学的方法とは、必ずしも方法論が確立している訳ではないが、ここでは周辺の地名分布の状態を時代ごとに確認することをもって、口承文化財である残存地名と埋蔵文化財である遺跡との関係を考える当面の指針としたい。なお、対象とするのは、本調査両遺跡の位置と自然的・人文的に近い関係にある、旧佐位郡北東部の稲川左岸と早川流域の伊勢崎市殖蓮地区及び佐波郡東村である。

1. 行政区画名称の変遷



本調査両遺跡は、現在伊勢崎市豊城町に含まれるが、殖蓮村以前は下植木村の字書上にあたる。この字書上は、第299図に見られるように下植木村の中では飛地であり、近世中期までは上植木村と下植木村の共同の入会地であったが、1785（天明5）年に開発されて下植木村分となった。

2. 近代初期の地名分布

今日まで最も大規模にこの地域の地名を収録しているのは、1881（明治14）年に編纂された群馬県議会図書室蔵「小字名調査」である。この資料は、地名考察にあたって少なからぬ制約があるが、この地域だけでも

次のような数の小字名を収録しており、極めて資料的価値が高い。

上植木村	93	下植木村	67	八寸村	66		
東小保方村	186	西小保方村	37	上田村	23	国定村	44
						田部井村	65

以上の計581個の地名を項目ごとに分けると、次のようになる。(下線は佐位郡内で同例があるもの)

A. 植物名用字

キ: フジノキ(上植)、ウメノキ(上植)、ボンキ(八)、マツノキ(上植)、ツネキ(東小)、
ナミキ(上)

サクラ: サクラダ・サクラハタ(西小)

スギ: スギノシタ・オオスギシタ(東小)

タケ: タケノハナ(下植・田)、タケノシタ(東小)

ヤナギ: ヤナギダ(田)、ヤナギサワ(東小・田)、ヤナギハタ(東小)

その他: エンジュクボ(園)、ダイコンガイド(田)、蓮池(八)、タマツバキ(下植)

ウメノキはウエキとの間に音の類似がある。

B. 動物名用字

エビ: エビガイド(下植)

ウ(ム)マ: ムマカイバ(上植)、ムマドノハヤシ(下植)

ウシ: ウシボリ(東小)、ウシコヅカ(下植)

キジ: キジノオ(東小・西小)

その他: コイヌマ(上植)、ムジナヅカ(下植)、リュウゲン(八・東小)

キジノオは、ほぼ早川沿いに他に4例がある。

C. 地形用字①(山など)

ヤマ: フタゴヤマ(東小)、権現山(八)、イシヤマ(上植)、ニシヤマ(田)、ヤマノカミ(田)、ダイニチヤマ(上植)、行者山(八)、ヒガシヤマ(田)、ホンヤマ(下植)、カンノンヤマ(東小)、コンジョウヤマ(東小)、シンヤマ(下植)、ソトヤマ(下植)、スワヤマ(田)、タカヤマ(東小)、ヤゴロウヤマ(東小)、ヤマウラ(下植)、ヤマノボウ(上)

ツカ: アカツカ(東小)、イチリツカ(上植)、カノイ/カノエツカ(下植)、カネツカ(東小)、マルツカ(上植)、ムジナヅカ(下植)、ナカザワツカ(東小)、オオツカ(東小)、ライコウツカ(東小)、テッペイツカ(八)、ツカモト(田)、ツカシタ(上)、ウシコヅカ(下植)、ヤザエモンツカ(東小)、ヨコツカ(八)、ヨツツカ(田)、サクラツカ(園)

ハヤシ: ミネバヤシ(園・田)、ボウズバヤシ(東小)、ハヤシアイ(東小)、ハヤシミナミ(下植)、ジンヤハヤシ(園)、カシマバヤシ(上植)、コバヤシ(東小)、クボウチハヤシ(西小)、ムマドノハヤシ(下植)、ライデンバヤシ(上植)、シンバヤシ(田)、イナリバヤシ(下植)

ミネ: ミネバヤシ(園・田)

ハラ: トエモンハラ(東小)、ハラ(上植)、ヒガシハラ(東小)、カミノハラ(上植)、ハラマ(田)、ハラヤマ(東小)、キタツバラ(八)、マツバラ(東小)、メイチハラ(下植)、ムカイハラ(下植・田)、ニシツバラ(八・東小・西小・園)、スワハラ(園)、タカハラ(東小)、アタゴハラ(東小)、シモハラ(東小・園)

ノ: ムカイノ(田)、ノアイ(東小)

付 編

クボ: クボ(上・田)、ミナミクボ(上植)、ニシクボ(上植)、クボウチ(西小)、マイクボ(国)、ナカクボ(田)、モトクボ(下植)、オオクボ(東小・田)、ニシドテクボ(田)、テンジクボ(国)、カワクボ(八)

イシヤマとニシヤマとの間に音の類似がある。ヤマとツカの※印は古墳である。ニシクボは他に10例あり、佐位郡の最多地名である。ハラは、集落を指すものもあると思われる。

D. 地形用字②(水に関するもの)

カワ: カワムカイ(八)、カミカワ(八)、シモカワ(八)、カワヨケ(東小)、カワクボ(八)、カワハラタ(上植)、シモカワラ(上植)

ヌマ: アカヌム(上植・下植)、コイヌマ(上植)、コヌマシタ(田)、ヌマシタ(東小)、ヌム/ヌマタ(上植)、ヌマヒガシ(東小)、ヌマハヤシ(東小)、ヌム(下植)、シンヌマドテ(上植)

イケ: アマガイケ(上・西小)、蓮池^{ヒコノ(ア)}(八)

イド: アライ(東小・田)、フクイ(国)、ヒライ(東小)、イドクチ(東小)、イドタ(下植)、イドノウエ(田)、メイド(下植)、ミツイマイ(東小)、ナカイ(田)、オイド(上植・下植)、タメガイ(東小・田)、タメイ(西小)

シミズ: カクヤシミズ(上植)、シミズ(東小)、シミズタ(下植)

イズミ: コイズミ(東小)、ホズミ(八)

その他: ジュウドノ/ズウドノ(東小・国・田)

ヌマをヌムとする例が多いが、地域語であろうか。メイドとオイドは同地域の対応地名である。ジュウドノ/ズウドノは水殿の字を使うことが多く、早川流域を中心に新田郡までいくつか分布している興味深い地名である。¹⁴

E. 農耕名称用字

タ: アイ/アエノタ(上植・下植・東小・西小)、ダイヤモンド(上植)、ゴタンダ(上植)、ハチ/ヤツタンダ(上植)、ヒガシタ(西小)、ホソダ(上植・田)、イドタ(下植)、イチョウダ(八・東小)、イシダ(上植)、カタダ(東小)、カミタ(上)、カモンダ(八)、マイダ/マイノタ(八・東小・西小)、マチダ(八・田)、ムカイダ(下植・西小・田)、ナカタンボ(上植)、ナイマダ(上植)、ニシタ(八)、ヌムタ(上植)、オカダ(東小)、サイトウダ(上植)、サクラタ(西小)、シミズタ(下植)、シモダ(八・上植・東小・田)、シタンダ(東小)、スミダ(下植・東小)、タシユク(西小)、タナカ(上植)、タカダ(上植・下植)、タバタ(下植)、テラダ(下植)、トリコダ(国)、ウメノキダ(東小)、ウシロダ(西小)、ウチダ(下植)、ヤクシダ(上植)、ヤタメ(下植)、ヤナギダ(田)、シンタ/シンデン(上植・東小)、テッピラシンデン(八)、ニシネシンデン(上植)

タの付く地名は、佐位郡全体で 152例になる。最も多いのは、近世中期以降の開田地名であるシンデン・シンタ・シンデンで14例ある。¹⁵次に位置を示す語の付いたシモダ(8例)、マイダ・ムカイダ(各6例)が多い。しかし、対称語のカミタ(3例)、ウシロダ(1例)は少ない。また、東西南北では、ニシダ(3例)に対し、他は1例と少い。

田の形状による地名としては、ホソダ(7例)、アイノタ(5例)、タカダ(4例)、オウギダ(3例)、スミダ(2例)が目につく。いづれも比較的狭い開析谷を中心とする佐位郡の水田可耕地の状況を、良く示している。ヤナギダ(4例)とタナカ(3例)は、文字通りの意味かは不明である。

数字を冠するものは、1〜9まで揃っているが、例数にばらつきがある。チョウダとするものは、イチョ

ウダ(6例)とマチダ(3例、チョウダからの変化か)がある。タンダは、2-9があるが、8(6例)と5・6(各4例)が多い。これらのチョウダとタンダは、桑里地名とも言われている。

以上、佐位郡全体から見たが、上記紹介の中では上植木村のものが比較的多い。^{注6}

ハタ: マイハタ/ハタケ(田)、ニシノハタ(東小・西小)、ヨキレハタ(上植・下植)、スミハタケ(東小)、ナカバタケ/ナカノハタ(上)、ドロバタケ(東小)、ヤナギハタ(東小)、サクラハタ(西小)、タバタ(下植)

ハタケの付く地名は、佐位郡全体でも24例であり、タに比べて圧倒的に少ない。殖産・東の8箇村の場合、近代初頭では田畑の割合は1:3であった。にもかかわらずハタケ地名が少ないのは、その開発が新しいことを意味しているのだろうか。なお、ヨキレハタは、焼畑地名と言われている。^{注8}

ツツミ: アマガツツミ(下植)、ツツミ(八・上植)

セキ: イチノセキ(上植)、セキ(上植)、セキヤマ(上植)、トメセキ(上植)

タと同様に、上植木のものが大半である。アマガツツミは前述のアマガイケと同一地点の呼称である。

メン: アブラメン(八)、イリメン(八)、ジゾウメン(上植)、カンジキメン(上植)、クマノメン(東小)

その他: ダイカンキョウ(東小)、カモンダ(八)、カキアゲ(下植・田)、サイトウダ(下植)、サンビヤッコ(田)、カイホツ(国)

これらは、耕地の所有形態を示すものと思われる。カキアゲは、入会地を指す普通名詞が地名化したものであろう。^{注9}

F. 集落・城館・道路名称用字

カイド: ベンカイド(田)、ダイコンカイド(田)、エビカイド(下植)、キタノカイト(東小)、クボカイド(田)、ヤカイド(国)

これらの全てが近畿地方のカイト(垣内)と同様の集落地名かは、はっきりしない。用字は、谷戸・皆戸・替戸であり、谷戸の中には南・東関東の谷呼称のヤトが混じっている可能性もある。街道は、後述。

ヤシキ: アラヤシキ(下植)、コヤシキ(国)、モトヤシキ(東小・西小・田)、ナカヤシキ(八)、シンヤシキ(東小)、ヤシキツキ(西小)

タクチ: タクチツキ(西小)、タクチウラ(上)

ホリ: ホリノウチ(上植・東小)、シンボリ(東小)、コシンボリ(上植)、ウシボリ(東小)

ハシ: ニマイバシ(八・下植)、リュウゲンバシ(東小)、タカナバシ(東小)

その他: ゲンノジョウ(下植)、クルウ(下植)、ナガミゾ(八・東小)、ムマカイバ(下植)、テラウチデ(国)、ジンヤマイ(東小)、ジンヤバヤシ(国)

これらも全てが集落・城館関係かは、不明なものもある。ホリは農業用水、ハシは道路に伴うものの可能性もある。

ミチ: アヅマミチ(上植・下植)、ミチウチ(東小)、ミチウエ・ミチシタ(東小)、オオミチ(八・東小)
カイドウ: ダチンカイドウ(東小)、ホズミカイドウ(八)

その他: ロクドウ(上)、ハチケンコウジマイ(東小)、ヨツジ(東小)

上田村のロクドウは、あづま道など3本の道が交わる六差路である(第2図)。また、アヅマミチと同意のアヅマも上植木にある。東小保方のオオミチ・ヨツジは、この地域をほぼ東西に横切る古道に沿っている。カイドウは、前記集落のカイドの場合もあるだろう。^{注10}
^{注11}

G. 人名用字

サイトウダ(上植)、ゲンタ(八)、カモンダ(八)、コンジョウボウ(東小)、コヘイマエ(東小)、
 コウセンボウ(上植)、ムマドノハヤシ(下植)、ライコウツカ(東小)、サゲンタ(東小)、テッペ
 イヅカ/テッピラシンデン(上植)、トエモンハラ(東小)、ヤザエモンツカ(東小)

これらもあくまで可能性としてあるものを掲げた。人名の場合、姓の大半は逆に地名から生まれたものであり、名は中世以前のものの識別が難しい。後述するように近世中期以降の關樂に名が付く場合がある。

H. 神社名用字

愛石：アタゴハラ(東小) 鹿島：カシマバヤシ(上植)
 権現：ゴンゲン(八) 熊野：クマノメン(東小)
 八幡：ハチマン/ヤハタ(上植・西小) 大神：オオカミ(西小)
 飯玉：イイタマ(八・下植) 若宮：ワカミヤ(東小)
 今宮：イマミヤ(東小) 八坂：ヤサカヌマシタ(八)
 天神：テンジン(下植・東小・国・田)、モトテンジン(東小)、テンジクボ(国)、テンジンツカ(東小)
 雷電：ライデン(八・下植・東小・西小)、ライデンバヤシ(上植)
 諏訪：スワノダイ(八)、スワハラ(国)、シャクジ(東小)
 その他：チジン(八)、ミムロ(東小)、ヤタメ(下植)、コオリタマ(下植)、ホズミカイドウ(八)、ヤマ
 ノカミ(田)

例数としては、この地域ではテンジンとライデンが多い。

I. 仏教系名称用字

地藏：チゾウメン(上植)、ロクチゾウ(上植)
 観音：カンノンドウ(上植)、クワンワンヤマ(東小)
 薬師：ヤクシ(下植)、トウツラヤクシ(上植)、ヤクシダ(上植)
 釈迦：シャカドウ(上植) 庚申：カノイ/カノエツカ(下植)
 仏名：ベンザイ(八)、ダイニチヤマ(上植)、ジウニテン(東小)
 寺名：ホウゾウジ(東小)、キチジョウジ(下植)、コンジョウボウ(東小)、コウセンボウ(上植)、ヤマ
 ノボウ(上)、ダイヤモンド(上植)
 その他：ボウズバヤシ(東小)、トリコダ(国)、ギョウジャサン(八)、ホンヤマ(下植)、エゲ(上植・
 下植)

テラ：テラヒガシ(下植・西小)、テラダ(下植)、テラツキ(西小)、テラウチデ(国)

ドウ・ボウの付く地名が全て仏寺に關係するかは、分からない。固有名としてホウゾウ/ホゾウは他に2例あるのは、偶然か。テラの付く方向語は、佐位郡全体では西が1例に対し東は3例ある。次の他の方位の場合とは逆になっており、集落での寺の位置と關係するのかもしれない。

J. 方位・色名称用字

ヒガシ：ヒガシ(上)、ヒガシオボカタ(東小)、ヒガシハラ(東小)、ヒガシタ(西小)、ヒガシクミ(下植)、
 ヒガシヤマ(西小)、ヒガシシュク(田)、ヒガシマチ(国)
 キタ：キタバラ(八)、キタクミ(八)、キタノカイト(東小)、キタノ(東小)、キタヤマ(西小)、キタ
 ノメ(田)、キタ(上)
 ミナミ：ミナミ(東小)、ミナミクボ(上植)

ニシ：ニシクボ(上植)、ニシヤマ(八・田)、ニシダ(八)、ニシヤ(八)、ニシッバラ(八・国・西小)、
ニシハタ/ニシノハタ(東小・西小)、ニシジマ/ニシガシマ(東小)、ニシマチ(国)、ニシネ(上
 植)、ニシオボカタ(西小)、ニシジュク(田)、ニシノメ(田)、ニシ(上)

以上のように方位語を冠する地名は、西が多い。主な一般地名要素ごとに佐佐郡全体の例を数えれば、次のようになる。

	クボ	ガイト	ハラ	クミ	マチ	シュク	ヤマ	タ	ノ	ヤシキ	ハタケ	計
東	1	0	1	1	1	2	1	1	0	0	0	8
南	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	4
西	11	0	9	1	2	1	2	3	1	1	2	33
北	1	1	5	1	0	0	1	1	1	0	0	11

ガイト・シュクを除いて、いづれも西が最高である。特にクボ・ハラ・ヤマ・タ・ハタケなど、非居住域名称において高率を占める。命名視点から東側にあることに留意したい。

アカ：アカツカ(東小)、アカサカ(八・東小)、アカヌム(上植・下植)

色彩名称用字は、この地域では以上だけであり、佐佐郡全体でも、アカが他に4例、シロが1例である。色彩名称の古語を検討すれば、他に存在する可能性は否定できないが、アオはここでは全く見られない。このことは、赤色の意味ではなく、アカギのアカと同じような別の意味が有ることを示唆している。

K. 数字用字

- 1：イチノセキ(上植)、イチリツカ(上植)、イッタンブ(田)
- 2：フタゴヤマ(上植・東小)、ニマイバシ(八・下植)、ニホンマツ(下植)
- 3：サンボンマツ(東小)、サンゲンヤ(上植)、サンビャッコク(田)、ミハシリ(東小)
- 4：ヨツヤ(東小)、ヨツオサ(東小)、ヨセブ(東小・田)、ヨツジ(東小)、ヨツツカ(東小・田)
- 5：ゴタンブ(田)
- 6：ロクヂゾウ(上植)、ロクドウ(上)
- 8：ハチス(八・下植・東小)、ハチケンマイ(東小)、ハチケンコウジマイ(東小)、ヤッサカ(八)
- 12：ジウニテン(東小)、ジウニノキ(上植)

4は、被差別部落に対する差別地名が含まれていると思われる。12は、宗教的意味があるようだ。

L. 意味不明のもの(既出を除く)

- イ：イソ(西小・田) オ：オオシタ(東小)、オサイ(八)、オオナウエ(東小)、オボカタ(東小・西小)、オモチ(東小)、オシダシ(国) カ：カサ(八)、カミヤ(八)、カケオリ/カチオリ(東小)
- ク：クニサダ(国) ケ：ケダイ(東小)、ケイモト(西小) コ：コシマキ(東小)
- サ：サカモリ(上植) ソ：ソク(東小) タ：タイコウチ(東小)、タテノ(国)、タケノハナ(下植・国)
- ツ：ツネキ(東小) テ：テツクソ(国)
- ト：トヅラ(上植・下植)、トウカナ(下植)、トウニシ(田) ノ：ノアイ(東小)
- ハ：ハタド(東小) ヒ：ヒイケイシ(上植) ホ：ホシヤ(東小)
- マ：マトイ(東小) ミ：ミトライ(東小)、ミトリ(田) ヤ：ヤムカイ(八)、ヤナカ(東小)
- リ：リュウゲン(八・東小) ワ：ワタリ(八) バ：バラモト(上植)
- ブ：ブタイ(上植) ダ：ダイ(東小) デ：デグチ(東小)

既に述べてきたように、これまで各項で抽出分類したのもかなり多くが分類した意味なのかは不明であ

る。ただジュウドノの例のように異なった地点で同じ地名が複数ある場合は、更に注意する必要がある。

以上の計 581個の『小字名調書』による地名は、この地域の地名考察の基本的資料であり、各個の原義と成立時代及び変化過程を探ることが出発点となる。(これまでの各地名は、『小字名調書』のフリガナを現代仮名遣いにより記し、また語頭・語尾に付くカミ(上)・シモ(下)などの二次的な付属名は省略した。)

3. 近世の地名分布

近世の地名の残された資料は、この地域ではかなり村ごとに差がある。特に上植木に『上植木元文書上帳』¹⁴という貴重な地誌が残っており、また上植木・下植木には『伊勢崎風土記』¹⁵の記載があるのに対し、他村は検知帳などの地方文書だけである。(八寸の文書は、現在まだ未刊のため、ここでは扱わない。)

A. 上植木村・下植木村

両村は、共に伊勢崎・前橋藩領をくり返した。『上植木元文書上帳』に記された18世紀前半の地名には、次のものがある。(()内の漢字は『伊勢崎風土記』、カタカナは『小字名調書』の地名)

① 上植木

集落名	関(セキガミ・セキシモなど)	堀ノ内(ホリノウチ)	赤坂(アカサカ)
	下西根(シモノシネ)	西纏(ニシネ)	関ノ原(関原、無)
	堤原(ツツミハラ)	田中(マイタナカ・ウシロタナカなど)	
	中屋敷(ナカヤシキ)		
山林名	関山(関山、セキヤマ)	らいでん山(雷電山、ライデンバヤシ)	
	かしま山(鹿島山、カシマバヤシ)	粕川通(無)	えげ山(恵家山、エゲ)
	関ノ山(無)	丸塚御山(マルヅカ)	
堰名	一ノ堰(イチノセキ)	二ノ堰(無)	
沼名	鯉沼(鯉沼、コイヌマ)	新沼(新沼、シンヌマドテ)	赤沼(アカヌマ)
塚名	智貝坊塚(無)	鏡泉/仙坊塚(コウセンボウ)	
地点名	白くら淵(白鞍淵、無)	寺庭(無)	大門田(ダイヤモンド)
	らんとう畑(無)	宿(無)	くほノ田(ミナミクボ)
	三蔵院屋しき(無)	正観寺(無)	御蔵やしき(無)
	あら屋敷(アラヤシキ)	地藏免(ジゾウメン)	宗高(ムネタカ)
	かんじき免(カンジキメン)		
湧水名	かくや清水(カクヤシミズ)		
道路名	東道通(吾妻道、アヅマミチ)→1697(元禄1)年上田村道標では「あすま」とある。		
寺社名	寺院：正観寺 三蔵院		
	田中：雷電(ライデンバヤシ)、諏訪		
	下西根：釈迦/釈迦堂(シャカドウ)、観音、地神、十二天(ジュウニノキ)、鹿島		
	三蔵院屋しき：阿弥陀、稲荷、地神、神明、地藏(ジゾウメン)		
	あら屋敷：薬師(トウヅラヤクシ)、阿弥陀		
	関/関山：観音(カンノンドウ)、八幡、村神/勝呂(村神祠)、大日(ダイニチヤマ)、酒盛		
	地藏(宴飯地藏、サカモリ)		
	堤原：薬師、浅間、鹿島	丸塚御山：稲荷	堀ノ内：薬師、諏訪

あげ山：稲荷 正観寺：薬師 御蔵屋敷：六地藏(ロクヂゾウ)
 かしま山：毘沙門 屋しきノ内：むく仏

上植木分では、『小字名調書』記載93地名の内47地名が漏れている。この47地名全部が明治初年までに新しく生まれたとは言えないが、そのうちに次の14のタの付く地名があることは興味深い。

カワハラタ、サイトウダ、シモゴタンダ、ナカタンボ、シモタカダ、カタダ、シント、マチダ、ハッタダ、ホソダ、ナイマダ、ヌマタ、イシダ

次に『伊勢崎風土記』による1798(寛政10)年の状況を見ると、次の通りである。

イ、元文・明治共にないもの 山林：丸山、久保山、小松山 塚：比久尼塚
 ロ、元文にあり明治にないもの 古跡：白鞍淵 仏寺：三蔵院

以上簡単にまとめれば、元文～明治の約150年間に継続した地名にも当然ながら、全く音が変化しないもの、かなり音が変化したものの2種があることが分かる。後者では、キョウセンボウヅカ→コウセンボウ、ジュウニテン→ジュウニキなどがある。元文の集落間ノ原は、寛政には山林間原になり、明治には地名そのものが消滅し、新しく集落名と思われるアイグミが出ている例は、興味深い。

② 書上

山林名：書上ヶ原/あづま七条ヶ谷(書上山/書上原、カキアゲグミなど)

新山(シンヤマ) 右馬殿林(馬殿塚、ムマドノハヤシ)

塚名：牛子山/塚(牛子塚、ウシコヅカ) 孫兵衛塚

池名：尼が堤/尼ヶ池(阿満池、アマガツツミ) 湧水名：大井戸(大井戸、オオイド)

この書上は、元文より約50年後の1785(天明5)年に正式に開墾されて、下植木村の飛び地になった。

③ 下植木

下植木の場合、書上以外は現状では次の『伊勢崎風土記』の記述しかない。()内の漢字は『上野国郡村誌 佐波郡』による。

山林名：愛岩山、飯玉山(カミイイタマなど)、雷電山(ライデン)

沼：北裏沼(土器沼、ヌマヒガシ・ヤマウラなど)

神社：赤城社(同) 仏寺：常清寺(浄清寺)、天増寺(同)

ここでは、沼の名が北裏沼→土器沼、そしてヤマウラ地名が現れている。

B. 八寸/蓮村

この村は、1798(寛政10)年～明治初年に小齊村と神谷村を併せており、また1797(寛政9)年以前に新田八寸という開墾地が生まれ、それは東小保方村に編入された。本来の八寸/蓮については、現状では全く資料が無い。ただ注意すべきは、『佐波郡村誌』に寺として吉祥寺の名があることである。恐らくこれは吉祥寺の誤記であり、同誌によれば1689(元禄2)年に僧玄海が開基したという。キチジョウジはこの村の字名ではないが、この寺はキチジョウジに隣接するリュウゲンあるいはベンザイにあったと思われる。

新田八寸については、1747(延享4)年の「八寸村名寄帳」と1859(安政6)年の「八寸祖御検見野帳」の資料がある。

延享 下ノ畑(無)、元屋敷前(無)、西ノ畑(ニシノハタケ)、下ノ畑(無)、上ノ山間(無)、
 道上(ミチウエ)、八寸前(ハチス?)、山ノ淵(無)、元屋敷浦(無)、新田淵(無)、
 新田直し(無)、権現免打出し(無)、堤ノ淵(無)、西ノ田洞御新畑(無)、
 安政 新田(無)、御手下下(ミタライシタ)、竜宮橋(リュウゲンハシ)、赤坂(無)、

延享のもので明治まで継続が確認できるものは、14例のうち3例でしかない。安政の資料は、検地の際の野帳の断片なので問題はあるが、ここで注意したいのは竜宮橋である。文字通りとすれば、リュウグウバシとなるだろう。これが正しければ、本村分のリュウゲンもリュウグウとなりうる。また、『小字名調査』との時間差はわずか22年であるにもかかわらず、引き継がないものがあるのも考えねばならない。

C. 小保方/東小保方村

この村は、近世初頭に旗本久永氏の知行地(陣屋支配)になり、少なくとも1797(寛政9)年以前には、次の8か組が成立していた。(『久永氏年貢借付覚書』)

台(ダイ)、新町(シンマチ)、八寸(ハチス)、三室上(ミムロ)、三室下(ミムロシモ)、
下野(シタヤ)、平井(ヒライ)、小泉(コイズミ)

なお、1889(明治22)年には、次の2集落が上記8か組と併せて区になっている。

下代(ケダイ)、下(シモ)

手元にある資料では、他に1697(元禄10)年の「笠懸野新田絵図」の次の記載だけである。

小泉村(コイズミ)、四ツ屋村(ヨツヤ)、平井村(ヒライ)

ここで村となっているのは、前記寛政の組と同じ意味と考えられるが、四ツ屋村は寛政以降組名から脱げている。なお、ジヤマエは明らかに近世の地名であろう。また、上田村の1697(元禄1)年の道標には、くわんおん通(カンノンヤマ)が記されている。

本村は、『小字名調査』記載が最多の186例あるにもかかわらず、近世資料は管見では前記だけであり、今後の資料発見が望まれる。

D. 西小保方村

本村は、基本的には前橋藩領である。管見の範囲では、地名資料は全くない。ただ明らかに小保方/東小保方に対応する村名であり、これは近世に生まれた地名であろう。

なお、テラツキには、天台宗の長安寺がある。

E. 上田村

本村は、天領である。ここには、1697(元禄10)年と1781(天明1)年の石造道標が残っているが、本村内の地名は記されていない。元禄のものは庚申信仰の銘もあるが、六差路の存在から仏教的な六道信仰にひっかけて成立したのがログドウの地名と考えられる。また、ヒガシ・キタ・ニシ・マイという方位名だけの地名があるのも、この村の特徴であろう。

F. 国定村

本村は、近世前期に旗本松波氏領であった後は、基本的に天領である。1671(寛文11)年に久仁村新田の開墾があり、明治初年に正式にこれを合併している。

文書資料としては、1626(寛永2)年と推定される「国定村御水帳」と1729(享保14)年の「検地帳」に次のような記載がある。

寛永 わかくさ開戸(無)、どうのひがし(無)、宮ノ西(無)、下条ノ入(無)、ど志やう/どぜう/と
ぜうかいと(無)、あるた(無)、志ミとう(無)

享保 中峰西(無)、中峰東(無)、とつこ田東(トリコダ)、曲沢境(無)

以上のように、明治まで引き続き資料はほとんどない。ただ本村の水田が極めて狭いことを考えれば、あるた→とつこ田東→トリコダ

との変化が推定できる。また、カイト地名は、ヤカイトしか明治には記されていない。

なお寺伝によれば、現在テラウチデにある養寿寺は、1626(寛永)年の焼失以前はコヤシキにあったと言う。またヒガシマチとニシマチの成立は、1674(延宝2)年頃とされている。ジンヤハヤシも近世の成立と考えられる。さらに東部のサンビャッコクなどの旧久仁村分は、当然寛文以降の命名と思われる。

G. 田辺谷/田部井村

本村は、旗本平岩氏の知行地である。1668(寛文8)年の郷帳には、田辺谷村と記されており、1671(寛文11)年には田部村新田¹³²⁴が開発されている。1703(元禄16)年の郷帳では、田部井村となっており、明治初年に田部村を合併している。田辺谷は「たへかい」と読まれるが、後述のように中世末では「ためかい」ともなっており、近世前期には古い「たへかい」の音が残っていたのだろう。

文書資料には、1769(明和6)年の「笠原勘兵衛御年貢割付」と1847(弘化4)年の「御年貢割付」がある。

明和 町田(マチダミチウエ・ミチシク)、原久保(無)、東会ノ原(ヒガシアイノハラ)、西会ノ原(ニシアイノハラ)、東宿(ヒガシノシク)、上大久保(カミオウクボ)、弁谷戸(ベンカイド)、会ノ原(ヒガシノシアイノハラ)

弘化 磯田(イツ他)、東ノ宿(ヒガシノシク)、弁谷戸(ベンカイド)、大原通り下(無)、東会の原(ヒガシアイノハラ)、中井(カミノシモナカイ)、宿(ヒガシノノシノシク)、間ノ原(ヒガシノシアイノハラ)、宮ノ下(無)、西ノ目(ニシノメ)、大根谷戸(ダイコンカイド)、西ノ宿(ニシノシク)、会之原(ヒガシノシアイノハラ)

この村の場合、ここに現れたものは殆ど変化が少なく、ただ方位や位置を示す語が冠された程度である。

以上のような近世の各資料に現れた例をまとめると、次のようになる。

	例数	明治まで音無変化	明治まで音有変化	明治以降消滅
前期(慶長～元禄)	8	0	1(13%)	7(87%)
中期(宝永～天明)	104	31(30%)	22(21%)	51(49%)
後期(寛政～慶応)	53	20(38%)	19(36%)	14(26%)
合計	165	51(31%)	42(25%)	72(44%)

即ち、全体の3割が音の変化無しに明治まで残っていたが、元禄以前に崩るものはない。また4割強は、明治には既に消滅しており、特に元禄以前のもはその率が極めて高い。

4. 中世の地名分布

この地域で管見の範囲で確認できる中世地名は、極めて少なく、ほとんど村/郷名だけである。¹³²⁵

A. 上植木・下植木

1251(建長3)	「街市/ウエキノイチ」(「念仏往生伝」、金沢文庫)
1299～1302(正安年間)	上植木と下植木分村と伝える。(「上植木元文書上帳」)
1366(貞治5)	「殖木宮」(下植木赤城神社宝塔銘)
1455(享徳4)	「殖木郷」(足利成氏書状写、正文書)
1456(享徳5)	「殖木」(赤堀正綱軍忠状写、赤堀文書)
15世紀	「殖木野」(「松陰私語」)
不明	「淵名庄下殖木郷」(「三百帖見聞奥書」、叡山文庫天海藏)
1558～1569(永禄年間)	「殖木」(「長尾景治・景家縁起」、下植木赤城神社藏) ¹³³⁰

付 編

1578(天正6) 「植木城」(同上)

植木城と関係する地名は、下植木のニシクルワ・ハヤシクルワ・ナカクルワである。

B. 八 寸

1565(永祿8) 「ハチス」(「長楽寺永祿日記」)

1570(永祿13) 「はちす」(「上杉輝虎判物」, 赤堀文書)

C. 小保方

1170(嘉応2) 「こいつミの郷」(新田庄田畠在家目録写、正本文書)

1215(建保3) 「小泉郷」(「將軍家政所下文写」, 同上)

不 明 「西庄」に押領された「こいつミの郷」(「新田庄知行目録」, 同上)

不 明 「宇夫方治郎」(平家物語)

1263(弘長3) 「河名荘小生形郷」(大東神社仏塔銘文)

15世紀 「小浦方郷」(「松陰私語」)

1570(永祿13) 「おふかた之郷」(「上杉輝虎判物」, 赤堀文書)

こいつミ→コイツミ、うふかた→おふかた→おほかた→オボカタの変化が見られる。

D. 国 定

不 明 「国定玄蕃」(「田部井氏系図」)

1504(永正1) 「国定越中守」(養寿寺藏千手観音懸仏銘)

1570(永祿13) 「国さた村」(「上杉輝虎判物」, 赤堀文書)

1590(天正18) 「西庄国定村」(養寿寺藏赤城神社御正体仏像銘)

E. 田辺谷

1170(嘉応2) 「たへかひの郷」(「新田庄田畠在家目録写」, 正本文書)

1215(建保3) 「田部賀井郷」(「將軍家政所下文写」, 同上)

不 明 「田部井太郎三郎泰寛」(太平記)

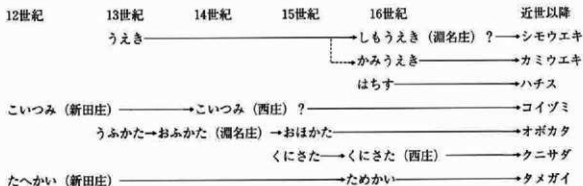
不 明 「西野目勘解由」(「宿清左衛門」(田部井氏系図))

1560(永祿3) 「田部井孫四郎」など(「関東幕注文」)

1570(永祿13) 「ためかひの村」(「上杉輝虎判物」, 赤堀文書)

たへかひ→ためかひ→タベガイの変化が見られる。なお、にしめ→ニシノメ、しく→ヒガシ/ニシノシクと小字名は、明治まで残っている。なお、カミモトヤシキには、田部井氏館跡が残っている。

以上をまとめると、次のような音変化が考えられる。



2 旧佐位郡北東部の地名分布の様相

にしめ————→ニシノメ
しく————→シク

なお、西庄/佐位庄と瀧名庄は、同じ荘園と言われている。

次に、「上野国神名帳」に記された神名について、簡単に触れたい。「上野国神名帳」には3種のテキストがあるが、このうちフリガナのあるりは、「一宮本」と「総社本」である。佐位郡分の神名は、次のとおりである。

大国玉 (ヲラクニタマ) 明神	八田女 (ヤタメ) 明神
郡王 (クニタマ/コヲリタマ) 明神	都奈 (トナ) / 郡都奈 (コヲリツナ) 明神
於神 (ヲカミ) 明神	穂積 (ホヅミ/ホツミ) 明神

これらの神名を、「小字名調査」の地名で検討してみると、ヲラクニタマ以外は、この地域で、次のような類似音地名が見られる。

ヤタメ明神 — ヤタメ (下植)	クニタマ/コヲリタマ明神 — コホリダマ (下植)
トナ/コヲリツナ明神 — トウカナ (下植)	ヲカミ明神 — オオカミ (西小)
ホヅミ/ホツミ明神 — ホヅミカイドウ (八)	

ヤタメとコヲリタマの類似音は、佐位郡では他に見られない。トナとトウカナは少し隔たりが大きい、ツナに類似しているのはツネキ(東小)くらいしかなく、さらに差が広がる。オオカミは、他に下武士(シモタケシ)村(現佐波郡境町)に大神という地名がある。フリガナは無いが、オオカミと読める。ホヅミ/ホツミは、保泉(ホヅミ)村(現佐波郡境町)の村名の方が類似性が有る。八寸のホヅミカイドウは、単純に考えれば、この保泉村へ向かう道筋となるが、カイドウがカイドの転化であるとするなら、このホヅミも単独で残る可能性がある。

いづれにしても、佐位郡全域で考えても、下植木に類似音地名が2例もしくは3例有ることは、注意すべきことである。

5. 古代の地名分布

古代の地名資料は少ないようだが、文献資料以外に、金石文・木簡・土器墨書など種類は少なくない。特に土器墨書は、本調査でもかなり検出されたように、この地域だけでも相当の量が現在までに出土しており、今後も増えるであろう。しかし、ここではそれらの考察は別の機会とし、古代の地名についての主たる文献資料である「和名抄」の郷名についての検討に絞りたい。

佐位郡の郷について、「和名抄」の東急本は下記8郷を記し、高山本はそのうち下の3郷を欠いている。

郷名	音	注記
名橋	奈波之	有桐原形奈波之
雀部	佐々伊倍	
美侶		
佐井/佐位		
瀧名/瀧名	布知奈	
岸新		
反治		
駅家		

「和名抄」の成立した10世紀前半には存在したはずのこれらの郷が、これまで検討してきた中世以降の地名に残存しているのが、ここでの考察事項である。そのためには、これらの郷名の発音が明らかにならねばならない。特に、音の記されていない5郷については、「和名抄」内での他の使用例の検討を行う必要がある。次に、漢字で表記された音が、実際にどのような発音になるのかを、古代日本語の音韻学的な検討(古代東国語の音韻変化を含む)を行って、それから発音の類似した地名をなるべく近い時代のものから探すというような方法を探ってみた。

- A. 名橋 音は奈波之とある。奈は、na (ナ)、波は、fa (ファ)、之は、si (スイ) で、併せれば、nafasi (ナファスイ) となる。上野国の音韻変化より考えれば、nafase (ナファセ) の可能性もある。注記意味不明。発音類似地名は、西小保方のナメシタがある。
- B. 雀部 音は佐々井倍とある。佐は、tsa (ツァ)、伊は、i (イ)、部は、fe (フェ乙類) で、併せれば、tsatsaife (ツァツァイフェ) となる。上野国の音韻変化より考えれば、語尾は、ufe (ウフェ) / efe (エフェ) / ofe (オフェ) の可能性もある。
三河国宝飯郡に雀部郷があるが、これは散々倍 (ツァツァフェ) と読まれている。発音類似地名は見当たらない。あるいは類例の多いツツミのような音に変化するか。
- C. 美侶 音は無いが、美は音字で mi (ミ)、侶は、万葉例で呂と同じの ró (ロ乙類) で、併せれば miro (ミロ) となる。上野国音韻変化より考えれば、muró (ムロ) / meró (メロ) / moró (モロ) の可能性もある。上総国呼森郡に三衆郷があるが、これは、mimoro (ミモロ) と読まれている。なお杞伊国に牟婁郡 (牟呂 muró ムロ) がある。発音類似地名は、東小保方のミムロ、茂呂村 (現伊勢崎市) のモロがある。
- D. 佐井/佐位 音は無いが、佐は音字で tsa (ツァ)、井・位とも音字で wi (ウイ) であり、併せれば、tsawi (ツァウイ) となる。上野国の音韻変化より考えれば tsawu (ツァウ)、tsawe (ツァウエ)、tsawo (ツァウオ) の可能性もある。発音類似地名は、見当たらないが、八寸のサカノウイのような音は一応注意したい。
- E. 瀧名/瀧名 音は布知奈とある。布は、fu (フ)、知は ti (ティ)、奈は na (ナ) で、併せれば、futina (フティナ) となる。上野国の音韻変化より考えれば、fotina (フォティナ)、fotuna (フォトゥナ)、fotena (フォテナ)、fotona (フォトナ)、fosina (フォスイナ)、fosena (フォセナ)、futuna (フトゥナ)、futena (フテナ)、futona (フトナ)、fusina (フスイナ)、fusena (フセナ) と多様な可能性もある。発音類似地名は、当然、上瀧名村・下瀧名村 (現境町) があるが、東小保のホシヤ、上植木と西野村 (現赤堀町) のフジノキも一応挙げておく。
- F. 岸新 音は無く、岸の字は「和名抄」の他の郡郷名で使用例が全く無い。新は、音字で nifu (ニフ) / nifi (ニフィ)、である。語尾が nifu/nifi になるのは、他の郡郷名では、若狭の遠敷郡と同郡の遠敷郷 wonifu (ウォニフ)、だけである。仮にそれと同音とすれば、岸の字は、wo (ウォ) 音の語頭用字として5例見られる麻の字の誤写と思われる。それらに上野国の音韻変化を考慮してみれば、nife (ニフェ) -, nifo (ニフォ)、-nufu (ニフ)、-nufe (ニフエ)、-nufu (ニフオ)、-nefu (ニネフ)、-nefe (ニネフェ)、-nefo (ニネフォ)、-nofu (ニノフェ)、-nofo (ニノフォ) 更にはこれらに wo (ウォ) が付く可能性もある。発音類似地名は、見当たらないが、ウォニフとすれば東小保方のオニゲシマな

どは注意すべきであろう。

- G. 反治 音は無いが、反は音字で fa (ファ)、治も音字で ti (ティ) / faru (ファル) / fari (ファリ) となる。なお、音字としての反の使用例は、他に 3 例^{注35}しか無い。上野国音韻変化を考えるとみれば、fasi (ファスイ)、fase (ファセ)、fatu (ファトゥ)、fate (ファテ)、fato (ファト)、fafare (ファファレ)、fafaro (ファファロ) の可能性もある。発音類似地名は、八寸のハチス、波志江村 (現伊勢崎市) のハシエ、伊与久村 (現境町) と香林村 (現赤堀町) のハシバ、中島村 (現境町) のアテノキがあげられる。
- H. 駅家 音は無いが、備中国小田郡に駅家郷があり、瓦末也 mumaya (ムマヤ) との音が付けられている。駅制の郷であるため、同音と思われる。上野国の音韻変化を考えるとみれば、momaya (モマヤ) の可能性もある。発音類似地名は、上植木のムマカイノ、下植木のムマドノハヤシ、今泉村 (現伊勢崎市) のムマサカが参考となる。

以上のような検討結果から、従来の郷比定地^{注36}を考えてみる。

- A. 名橋 ①山田郡大間々町桐原、②勢多郡新里村・粕川村東部、③佐波郡赤堀町香林
いずれも注記の桐原に引かれたものである。各説比定地周辺のより厳密な地名考証が必要である。
- B. 雀部 ①佐波郡境町、②伊勢崎市街地
①はサカイの音より出たものだが、中世以前に遡る可能性を検討せねばならない。②は残存地名の考証が必要である。
- C. 美侶 ①伊勢崎市茂呂町
茂呂の可能性はあるが、東小保方のミムロも同程度の音韻残存を示している。
- D. 佐井/佐位 ①佐波郡東村・赤堀町・伊勢崎市の一部、②伊勢崎市の南東
いずれも、漠然としている。八寸村の近世地名の検討が必要である。
- E. 淵名/湯名 ①佐波郡境町上淵名・下淵名
これはかなり妥当性はある。しかし、東小保方のホシヤも要検討である。
- F. 岸新 ①新田郡新田町
ウォニフとニフタでニフ地名としての共通性はあるが、佐位郡と新田郡が併存している理由の説明が必要である。
- G. 反治 ①伊勢崎市波志江町
一応妥当性はあるが、八寸の可能性も同程度である。
- H. 駅家 ①佐波郡東村～赤堀町曲沢・間野谷～伊勢崎市上植木、②伊勢崎市上植木
①は広すぎる。②はエキ→ウエキとするなら誤りである。下植木 (書上) のムマドノハヤシは、東道の近くであり要検討であろう。

このように見てみるならば、本調査の書上上原之城道跡の古代の集落は、ムマドノハヤシにも近く駅家郷の可能性も考えられる。

6. 小 結

これまで検討してきたように、本調査両道跡周辺の地名分布はかなり多彩であるが、命名根拠とした地名の意味は、次のようなものと思われる。

付 編

(1) カキアゲ

近世中期以前には、入会地を指す普通名詞であったと思われ、近世後期に農地の開墾に伴って地名化した。現在のところ中世以前まで遡る資料は見いだせないため、近世初頭頃に「草木をカキアゲる場所」というような意味で名詞化したと考えられる。

(2) キチジョウジ

ジの語尾を持つ地名は少ない。この場合、一応文字通りの寺と考えて良いだろう。周辺の他の現存する寺院の地名場合、固有名詞的な寺院名そのままのものはなく、テラを語幹とするものが一般的である。

『上野国郡村誌』によれば、八寸村の北方に元禄年間に吉祥寺という寺院が創建され、恐らく本小字に隣接もしくはかなり近い場所に同寺があり、カキアゲ（下植木）分のこの地は同寺の寺域であったのだろう。あるいは、18世紀後半の屋敷跡として検出された遺構群が、同寺の跡かも知れない。

(3) ゲンノジョウ

ジョウは、一般に中世城館と関係する地名である。本遺跡の調査では、13・14世紀の城館跡の一部と推定される遺構群が検出されている。周辺地域及び佐波郡全域でも、ジョウ地名は見当たらないが、中世城館跡としては、下植木のクルワ（植木城）、田部井のモトヤシキ（田部井館）、東小保方のナカミゾ（八寸館）が確認されており、国定のコヤシキも国定館跡と推定されている。

問題は、語頭のゲンノであるが、ケヌノ→ゲヌノ→ゲンノか、モト（元）ノ→ゲンノか、ゲ（下）ノ→ゲンノというような変化を今のところ想定できる。しかし今後の更なる追及が必要である。

なお、八寸の字リュウゲンに所在する古墳時代後期の館跡とこの地名を結び付けることは危険であり、リュウゲンはリュウグウの可能性もあることを、再度述べておく。

条里より変化して荘園制地名として全国に方位名+ジョウという地名が見られる。この場合、シモ（下）ノジョウ→ゲ（下）ノジョウ→ゲンノジョウという変化が考えられなくもないが、対応するカミ（上）ノジョウ（上）+ジョウが見られないため、現在のところとりたい。

2 旧佐位郡北東部の地名分布の様相

注

- 注1 「上棟木元文書上巻」(山田武術他編、『群馬県史料集 風土記編』、群馬県文化事業振興会、1967 所収)及び上棟木水利組合編『万歳記録帳』(「日本歴史地名大系10 群馬県の地名」、平凡社、1987 所収)による。なお、本両道跡は、調査時以来事業名の「八寸B」を冠してきたが、地名としては少なくとも近世以降はハチスに含めたことはない。
- 注2 「小字名調書」は、県下各村からの報告を照らして整理・編集された統計資料である。この整理・編集段階での誤記が見られ、特に漢字表記に対してのカタカナ書きのフリガナには明瞭な誤りが見られる。発音を最重要視する地名研究からすれば極めて問題となるが、原報告が生かされたフリガナの存在も否定はできない。
- 注3 原文は各町村ごとに上下2段の記載分けがあるが、その意味は全体としては不明である。ここに掲げた数字は、明らかに所属町村の誤りを調整した後の総数である。
- 注4 須田 茂、『重説遺跡』、新田郡新田町教育委員会、1984 によれば、新田郡新田町野井(重説)、岡村田(城説)、岡小全井(重説)、太田市沖野(増説)の4例があり、「生活用水や農業用水の水源地である自然湧水あるいは池沼をあがめることから発した形態ないし信仰を示す名称」とし、そして「水説と記されるのが本来の形で、「本来はズイドノであった」と推論している。佐位郡に隣接する前橋市二宮町と上埴町には同一地名で水説と城説がある。この場合、本来の形はショウドノであって、水説の字が当てられた、と考えられる。この例から考えれば、水説=ズイドノ=ショウドノの変化は音韻的に難しく、地名の原因から考えれば、むしろ文字にとらわれずにシウドノもしくはシウドノのよみがえりがあったとした方がよいと思う。
なお前記道跡は、古墳時代前期を中心とし平安時代前期まで続く集落道跡である。
- 注5 新田郡の新田は本来ツツタであり、近世の開田地名も時代も意味も全く異なるが、漢字のみの表記ではその誤別が難しい。
- 注6 明治10年頃の各村内の水田面積の比率は、下棟木28%、八寸17%、西小保17%、東小保13%、田部井7%、上田2%、田定1%である。一方これらの8か村の合計の水田の絶対面積の比率は、下棟木30%、東小保25%、上棟木17%、八寸15%、田部井6%、西小保5%、田定1%、上田0.3%である。(『上野国郡村誌 佐波郡』、群馬県文化事業振興会、1987による) 下棟木の田地名がやや少ないのは、残存地名そのものが東小保方・上棟木よりはるかに少ないためであろう。
- 注7 明治10年頃の8か村合計の水田面積は約38町に対して、額は1,001町である。(同上) しかし1668(寛文8)年の年貢の割合は、榎方が田方より多い村は、八寸・西小保方・田部井だけであり(上田は不明)、8か村合計の場合も、田方2,062石に対し榎方1,748石である。(除上田、前掲『群馬の地名』所収寛文郷帳による。ただし前掲『上棟木元文書上巻』によれば1738(元文3)年の上棟木村の耕地面積は、田方が44町、榎方10町である。)
- 注8 落合重信、『地名研究のすすめ』、国書刊行会、1982
- 注9 1769(天明6)年の田部井村の「並原池尻年貢割付」(『東村誌』1979 所収)によれば、カミオオカケの地目としてカキアゲハヤシ(播磨柿)がある。なお、同じ地目として考えられるものに、ハクヤマ(湖山)・ナカイヤシキ(中居原)・ミネハヤシ(基林)・ハワマ(原間)・ヨゼエモンハヤシ(左衛門村)・ハラヤマ? (湖山)があるが、これらの中には通称的な意味も大きく、後に小字名になったものもある。(『東村誌』1979 所収)
- 注10 ロクドウには2本の近置の道標があり、1697(元禄10)年と、1781(天明1)である。そのためこの地名は、遅くも17世紀末以前の成立であろう。
- 注11 この古道を東山道と推定する説がある。(群馬県教育委員会『歴史の調査報告書 東山道』、1983) なお八寸のオオミチは、この古道の北端でロクドウから伊勢崎方面への道の両側に位置する。
- 注12 諏訪信仰には、上社天現を現人神とする農耕信仰のなす神と上社社長官が信奉する符氣信仰的なミシャグチ神・ナカト神が複雑に混在している。(藤森愛一、『諏訪』、学生社、1964 及び 古部族研究会編、『諏訪信仰の発生と展開』、水井出版企画、1978)
- 注13 在来の地名の後に方位語が付く場合は、二次的なものであり、ここでは問題にしない。
- 注14 1738(元文3)年に上棟木村の村役人から伊勢崎藩に提出され、本来の書名は『古来之儀申付伝説書上巻 上棟木村』と言う。
- 注15 1796(寛政10)年に伊勢崎藩幕僚の関重忠が記した伊勢崎藩の地誌、漢文。前掲『群馬県史料集 風土記編』所収。
- 注16 新沼は1613(慶長18)年、新沼は1710(宝永7)年完成。なお新沼は、1862(文久2)年に旧地替えて八幡沼となる。
- 注17 正観寺は、寺庭に古時あったが、その故地は大門田・らんと畑・宿と言う。三蔵院は、寛政10-明治10年の間に廃絶している。
- 注18 当時すでに石仏のみで無堂状態になっている。
- 注19 これはいわゆるスグノスグノ神で古代以来の渡来系氏族の信奉する神である。この地域では、東小保方村にも藤呂神社(現在の大東神社)がある。この神は「北後二領、東二大領、南二田領、西二流木」のある場所を好むと記されている。四神風水説の現われであろう。明治10年頃に記録された『上野国郡村誌 佐波郡』には「村社」との記載がある。
- 注20 前掲『伊勢崎風土記』と『上野国郡村誌 佐波郡』より判断。
- 注21 前掲『東村誌』
- 注22 本村のリュウケンは、古墳時代の居館跡として注目された「原之城」道跡の所在地である。リュウケンを四神思想とする説があるが、リュウケンであればそれは驚かされる。ただし古墳等の開基の地名が支海という名であり、この支とリュウケンとの音も似ている。いづれにしても、本村の文書資料により確認しなければならぬ。
- 注23 前掲『東村誌』地取。
- 注24 「岡上開拓秘録」(前掲『東村誌』所収)による。
- 注25 共に前掲『東村誌』所収。なお『御水帳』は、1505(永正2)年と書かれているが、『東村誌』によりこの年とした。
- 注26 前掲『東村誌』所収。
- 注27 前掲『群馬の地名』所収。
- 注28 前掲『東村誌』所収。
- 注29 前掲『東村誌』・『群馬県の地名』による。
- 注30 前掲『上野国郡村誌 佐波郡』所収。
- 注31 「上野国神名帳」の原形は古代に成立したと思われるが、尾崎喜左衛門氏に神明号の検討から12世紀とし、総社本「上野国神名帳」の奥書には、

付 編

1298(永仁6)年の書写とある。従って、現在見られる形でのものは、中世として良いだろう。参考 尾崎喜左衛門、「上野国神名帳の研究」、尾崎先生著書刊行会、1974。

注32 大野 晋、『仮名遣と上代語』、岩波書店、1982 によれば、母音は a・i・u・e・o の 5 音、子音は k・ts・s・t・n・f・m・y・r・w・g・x・d・b・dz の 15 音が、万葉時代に存在した。

注33 上野国の場合、[**]・i→e・i→u・i→a・e→o・u→o・u→o・i→s・x→t・u 脱落の可能性が万葉時代には存在した。福田貞輔、『奈良時代東国方言の研究』、風間書房、1965 による。

注34 麻の字の使用例は、安房国安房郡の麻原郷 wofara (ウヱフアラ)、信濃国伊那郡の麻統郷 womi (ウヱミ)、同更級郡の麻統郷 womi (ウヱミ)、阿波国の麻植郷 wowe (ウヱウエ)、伊勢国多気郡の麻統郷 woumi (ウヱウミ)がある。

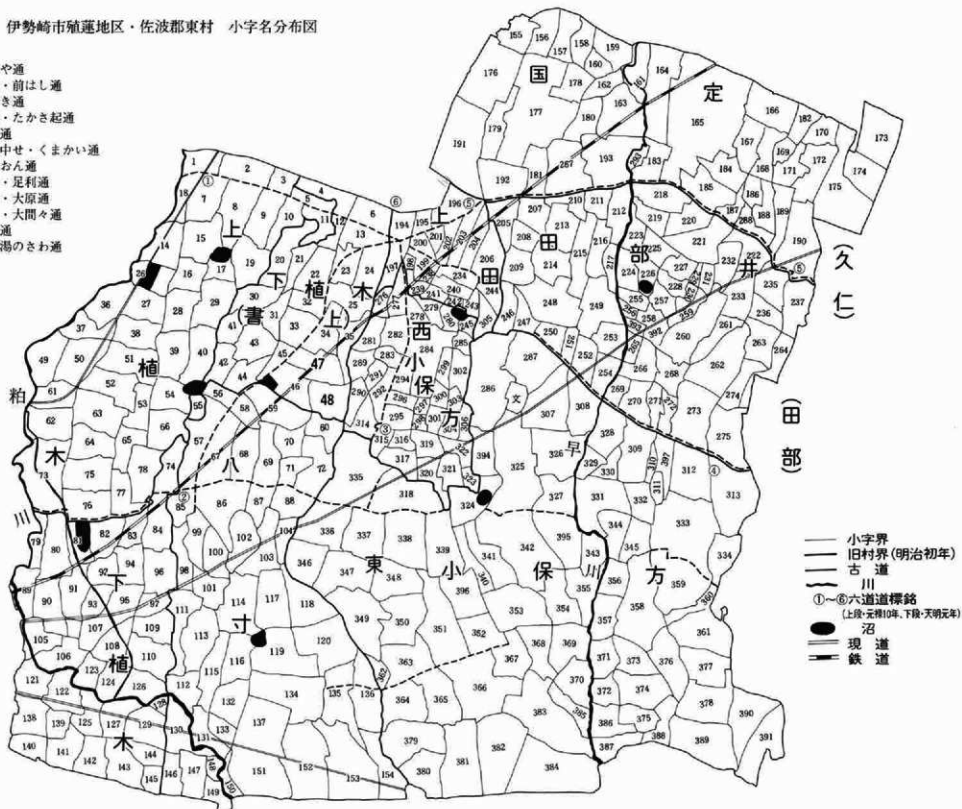
注35 備前国邑久郡土師郷(反之 fashi)、遠江国鹽土郡瀬多郷(反多 fatsu)、駿河国安倍郡埴生郷(反布 fahu)。最後の例は fanifu の脱落の可能性も考えられる。もしそうであれば、aifu を語尾に持つもう一つの例となり、岸原郷の音の変化が増える。

注36 前掲『群馬県の地名』による。

注37 山崎 一、『群馬県古城遗址の研究 補遺編上』、群馬県文化事業振興会、1979 及び 群馬県企業局、『伊勢崎・東武湯田地道路』、1982による。

第299図 伊勢崎市植蓮地区・佐波郡東村 小字名分布図

- ① ニノみや通
二ノ宮・前はし通
- ② いせきき通
伊勢崎・たかき起通
- ③ 平つか通
秩父・中せ・くまかい通
- ④ くわんおん通
丹つ多・足利通
- ⑤ あすま・大原通
き里う・大間々通
- ⑥ 山かみ通
赤城・湯のさお通



- 小字界
- 旧村界(明治初年)
- 古道
- 川
- ①~⑥六道標銘
(上段・元和0年, 下段・天明年)
- 沼
- 現道
- 鉄道

2 旧佐位郡北東部の地名分布の様相

No	小 字 名	No	小 字 名
1	アヅマ	57	サウミチーニシ (ボンチ) (ニシッバラ)
2	サカモリ (アヅマミチーウエ)	58	ヤサカヌマーシタ
3	イチリヅカ	59	コシンボリーシタ
4	ヨキレハタ	60	リウダン
5	ヨキレハタ	61	シモーニシネ (ジウニノキ) (ニシネーシンゲン)
6	アヅマミチーウエ	62	ミナミクボ
7	コウセンボウ	63	マイーダナカ (マナダ) (ホソダ) (ハツタンダ) (ヤクシダ)
8	ヒケイシ (カクヤシメズ) (アズマミチーシタ)	64	タカダ (シタ) (ユワサキ) (マツノキ) (チゾウメン)
9	アタイ (カクヤ)		(ムメノキ)
10	ニシーワウイド	65	エゲーニシ
11	サウイド	66	エゲ
12	アヅマミチシタ	67	サウミチーヒガシ (ニシッバラ)
13	カミーカキアゲ	68	キタクミ (キタッバラ)
14	セキーヤマ (イチノセキ)	69	ヤサカ (ナカ一ヤシキ)
15	ツツミーハラ (ダニチヤマ)	70	ペンサイ
16	ツツミーシモ	71	ワタリ
17	ツツミーナカ (コイヌマ)	72	カヤ
18	カミノハラ (フタゴヤマ)	73	シャカドウ (フジノキ)
19	イッチョウダ	74	エゲ
20	ライドーシタ	75	ナカタンボリナカタメン (ジウゴハリ) (バラモト)
21	ライド		(カンジキメン) (シモータカダ)
22	シンヤマ	76	ムカイバ (シモーゴタンダ) (トメセキ) (シモダ)
23	カキアゲークミ	77	サンダンヤーニシ (イシダ) (ダイモンダ)
24	アマガツツミ (メイド)	78	サンダンヤ
25	シモーカキアゲ	79	ムネタカ (シモカワラ) (サイトウダ)
26	ヤハタ (シンヌマドナ)	80	ヤマウラ
27	セキーカミ	81	ヌマーニシ
28	アイノタ	82	ヌマーヒガシ
29	アイグミーカミ (コイヌマーシタ)	83	ムジナヅカ
30	ムカイダ	84	カミーイイダマ (ヤタメ)
31	ニシーホシヤマ	85	フツミ
32	ムマドノハヤシ	86	ゴンダンニシ
33	ヒガシーホシヤマ	87	ゴンダン一キタ (モリ)
34	メエチハラ	88	ライダン一マエ (シバサキ)
35	カミ一キチジョウジ	89	ソトヤマ
36	カハハラタ	90	ナカサト
37	ニシネ (イシヤマ) (ニシクボ)	91	チラ一ヒガシ
38	セキーシモ (トウツラヤタシ) (カンノンドウ)	92	ヌマーシタ
39	セキーヒガシ (ホシゴウ) (タツミ) (ヌマダ)	93	ヌミダ
40	アイダニシモ (マルツカ)	94	アイノタ
41	ウシゴツカ	95	タマツノキ
42	タハタ	96	シモーイイダマ
43	カミームカイハラ	97	タケノハナ
44	シモームカイハラ	98	イイタマ
45	ハヤシ一ミナミ	99	ニシヤーウラ
46	シモーダンジョウ	100	ヤムカイ
47	カミーダンジョウ	101	ニシヤ
48	シモーキチジョウジ	102	ゴンダンサン
49	カミーニシネ	103	ゴンダンマエ
50	ナカヤシキ (ニシネ)	104	ゴンダンマエホリヒガシ
51	アラヤシキ (タナカダイ) (ロクダゾウ)	105	ミヤマイ (コホリタマ)
	(カシマバヤシ)	106	シクダミ
52	ウシロータナカ (サンゲン一タナカ) (ナイマダ)	107	チンジン (ヨコマチ)
	(ホリノウチ) (タナカ一マイタ)	108	トツラ
53	ホリノウチ (ライダンバヤシ)	109	チラダ
54	アカサカ (アカヌマ) (ハラ)	110	ニマイバシ
55	アカヌマーシタ	111	ニシダ (カモンダ)
56	キョウジャヤシ	112	チラニシ (ニマイバシ)

付 編

No	小 字 名	No	小 字 名
113	ニシヤマ	171	ナカクボ
114	ヲザイ (イリメジ)	172	ムカイノ
115	シモーヲザイ	173	サンビヤッコク
116	ツツミーシタ	174	イッタンプ
117	レンチ (ダシタ)	175	ゴタシブ
118	カミーイッチョウダ	176	ニシハラ
119	シユターウラ	177	ニシマチ
120	シモーイッチョウダ	178	カイホツ
121	エビーガイト	179	トリコダ
122	ナカークミ	180	ヒガシーヤカイド
123	イナリハヤシ	181	ニシーマイチ
124	ラエデン	182	キタームカイノ
125	ナカークルワ	183	テラウチデ
126	モトークボ	184	マイクボ
127	ヒガシードミ	185	スワハラ
128	トウカナ	186	ニシーエンジュクボ
129	カノイヅカ	187	ジュウドノ
130	スワノダイ (ツイキ)	188	エンジュクボ
131	カミカワ (カワクボ)	189	ニシードチクボ
132	ヲザイーヒガシ	190	ホツダ
133	マイダ	191	サクラツツカ/ラシダシ
134	カミヤ	192	シモハラ
135	アイノヤ (デジン)	193	ヒガシーマイチ
136	ナガミツ	194	ロクドウーウエ
137	シュクーミナミ	195	キターウエ (ーカミ?)
138	ニシークルワ	196	キターシモ (ーシタ?)
139	ハヤシークルワ	197	アマガイケ
140	タカタ	198	ナミキ
141	ウチダ	199	カミシュクーシタ
142	シミズダ	200	カミシュクーウエ
143	イドタ	201	ナカノハタ
144	ヤクシ	202	タクチウラーカミ
145	シモーハチス	203	タクチウラーナカ
146	カワムカイーニシ	204	タクチウラーシタ
147	カワムカイーナカ (サカノウイ)	205	カキアダ
148	シモカワ	206	ヤマノボウ
149	ホヅミーカイドウ	207	ダイコンーガイド
150	ナカジマ	208	キタノーメ
151	ヨコゾカ	209	ニシノーメ
152	アブラメン	210	マトバ
153	チャハイヅカ (チャヒラシシデン)	211	ニシノーシク
154	シモダ	212	ヒガシノーシク
155	フクイ	213	キターニシヤマ
156	カミーシュク	214	ニシヤマ
157	ニタンヤンセ	215	ウラマチ
158	キターヤカイド	216	ホンマチーウエ
159	タテノ	217	クボカイド
160	ヤカイド	218	カミースワヤマ
161	テンジンークボ	219	ナカースワヤマ
162	テンジンーニシ	220	シモースワヤマ
163	テンジンーマイ	221	ジュウドノ/ズウドノ
164	ジンヤハヤシ (キタジンヤハヤシ)	222	カミーサウクボ
165	ヒガシマチ	223	ニシーアイノハラ
166	イドノウエ	224	ヒガシヤマ
167	ミトリ	225	ヒガシーアイノハラ
168	サウクボ	226	ペンカイド
169	カナクツ	227	カミーナカイ
170	ヨセツ	228	シモーナカイ

2 旧佐位郡北東部の地名分布の様相

No	小 字 名	No	小 字 名
229	カミーイフ	287	カミーヤナギサワ (サンボンマツ) (ハチケシコウジーマエ)
230	ニシイフ	288	ミネハヤシ
231	ミネハヤシニシ	289	シモーイフ
232	ミネハヤシ	290	アイノタ
233	ナカーサウクボ	291	クボタ
234	シュク	292	シモーニシハラ
235	カイホツイリアイ	293	コヤシキ
236	カミーハラマ	294	ニシヤシキツキ
237	カイホフ	295	ニシハタ
238	ニシ	296	ハチマンニシ
239	マイニシ	297	ハチマンツキ
240	マイ	298	ハチマンマエ
241	クボ	299	カミーヤシキツキ
242	マイミナシタ	300	シモーヤシキツキ
243	マイヒガシ	301	ハチマンヒガシ
244	ヒガシ	302	カミーケイモト
245	タメイフキニシタ	303	シモーケイモト
246	ナカーヤナギサワ	304	サクラタ
247	カミーヤナギサワ	305	ツカシタ
248	ヨコマチ	306	ヒガシタ
249	ホシマチニシタ	307	ノアイ (コハイマエ) (コジョウヤマ) (ダイカンキウ) (ダチンカイドウ)
250	ヤマノカミ	308	コジョウボウ (クワンサンヤマ)
251	ニシトウニシ	309	テンジン (カワヨケ) (ミハシリ) (ウメノキタ) (ヌマシタ) (キジノサ) (テンジンマイ) (モトヤシキ)
252	トウニシ	310	ジウドノ (サノ)
253	カミーモトヤシキ	311	キタノカイト
254	シモーモトヤシキ	312	ジウニシ (サウバヤシ) (シンヤシキ)
255	アライマエ	313	コイヅミヒガシ (カミーサウクボ) (ヨコマチハラ) (ムカイヤマ) (ハヤシマイ) (カネツカ)
256	ミヤシタ	314	クボウチハヤシ
257	テンジン	315	ニシナメシタ
258	コヌマーシタ	316	ヒガシナメシタ
259	ナカーイフ	317	マイハラ
260	ムカイハラ	318	ヨツジ
261	ヨツツカ	319	モトヤシキ (モトヤシキツカ)
262	シンハヤシ	320	テラツツキ
263	ナカーハラマ	321	テラヒガシ
264	シモーカイホフ	322	マイノタ
265	マチダニナシタ	323	ムカイタ
266	マイハタ	324	ゴタンダ
267	マイチ	325	ダイ
268	カミーフカモト	326	カミーナカニシ (シャクジ) (ナカニシ) (ムカイナカニシ)
269	タケノハナ	327	シモーナカニシ (ホウゾウジ) (ホリノウチ) (タカヤマ)
270	シモダ	328	アササカ (タメガイーサカイ) (タムササカ)
271	ヒガシシモダ	329	シャクジ
272	シモーフカモト	330	イマミヤ
273	ミナミハラマ	331	サカノマイ (トロハタケ) (タカナバシ) (スミハタケ) (ソクローヒガシ)
274	ヒガシサウクボ	332	マツバラ (クボ) (マイハタケ) (ヨツツキ)
275	シモーサウクボ	333	コイヅミ (コイヅミーガワ) (マイーシンデン) (ナカザワ ツカ) (ヒガシシンデン) (ヨツツキガワ)
276	アマガイケ	334	ヒガシハラ (シモーサウクボ) (ヤゴロヤマ)
277	サウカミ	335	ヲネミチウエ (リウゲンハン)
278	キタークチツキ	336	オネミチーシタ (モトヤシキ)
279	キタヤマ	337	ハチス
280	タメイフキウエ	338	ナカハラ
281	カミーイフ		
282	カミーニシハラ		
283	ナカーニシハラ		
284	ホシゴウ		
285	キジノサ		
286	シモーヤナギサワ (カチサリ) (アタゴハラ)		

付 編

No	小 字 名	No	小 字 名
339	オクノミヤ	369	シモノーマイ (ライコウヅカ) (ヤナギハタ)
340	ツモチ	370	モリシタ (チンジンヅカ) (シミズ) (ホリノウチ)
341	ハタド (ヌマシタ)	371	シタンダ (カタダ) (スギノシタ)
342	シンマチ (ホシヤ) (ワタド)	372	スミダ
343	シマ	373	ケダイーマエ (コシマキ) (モトヤシキ)
344	シミズ (ニホンマツ) (アナダ)	374	ニライニシ (シンホリ)
345	ニホンマツ	375	マイダ
346	ニシノハタ	376	ケダイーヒガシ (サダシ) (イドク子) (アイノタ) (モトチンジン)
347	ミタラキシタ (ヤチ)	377	ヒライウラ (カネヅカ)
348	ボウズハヤシ	378	ヒライ
349	オニダシマ (タイコウチ)	379	シモハラ
350	ニシハラ	380	ウシホリ
351	ミムロ	381	アイノヤ (オウシモ) (ヤウエモンヅカ)
352	ライデンマエ (タケノシタ)	382	ミチウエ
353	シモノーニシ (タマノメン)	383	シタキ
354	シモ	384	シタマエ (ハラヤマ) (ワタゴヤマ)
355	ジンヤーマエ (イッチョウダ)	385	ツルマキ
356	ミツイーマイ (モトヤシキ)	386	ツカヤ (ツホキウエ)
357	アノタ (チウトノ)	387	シモダ
358	ケダイ (ワカダ)	388	ヤナカ (ヨセブ)
359	コイズミミナミ (ヨツヤ) (トエモンハラ) (ミナミ) (ワウツカ) (シバツキ)	389	ヒライミナミ
360	シバツキ (ヌマヒガシ) (シモノウウクボ)	390	ヒライヒガシ (ヒガシハラ)
361	アカヅカ (タボ) (ハチケンマエ)	391	アカヅカーシモ
362	マトキ	392	シモイソ
363	ミチウエ (ヌマハヤシ) (オウスギシタ)	393	マチダミチウエ
364	ナガミヅ (ワカミヤ)	394	キタノ (チンジン) (ゴタンダーウエ)
365	ミチシタ (ニシガシマ)	395	アヲキ
366	ミムローシモ (ツネキ) (タケノシタ)	396	ミムローヒガシ (モトヤシキ)
367	タカハラ (ツネキ)	397	アダチ
368	コバヤシ (ツネキ) (ビョウショハラ) (カケサリ)		

写 真 图 版



遺跡地周辺航空写真



(国土地理院発行1/2.5万地形図「大胡」・「伊勢崎」使用)



遺跡地遠景 (南側上空より)



遺跡地遠景 (南西上空より)



遺跡地近景 (南側より)



遺跡地近景 (北側より)



第10号住居跡遺物出土状況



遺物出土状況近接



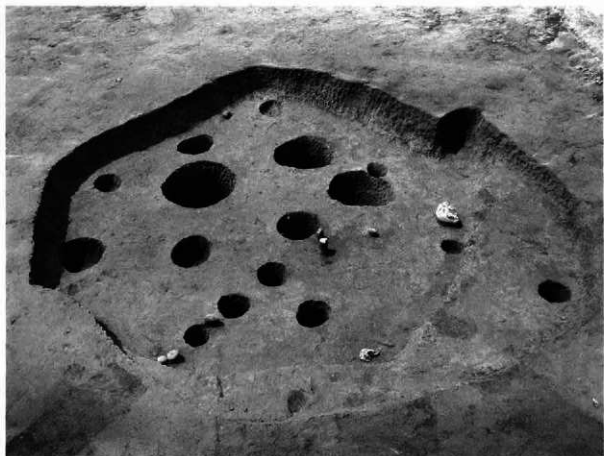
遺物出土状況近接



第10号住居跡全景



第10号住居跡セクション



第11・12号住居跡全景



第11・12号住居跡セクション



8号土坑セクション

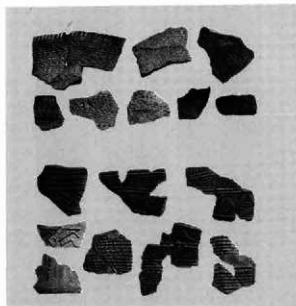
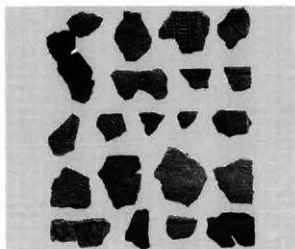
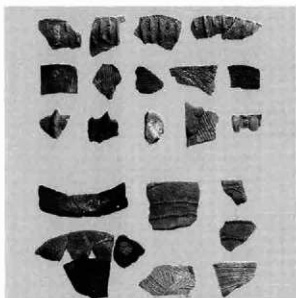
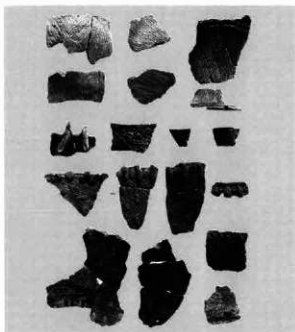
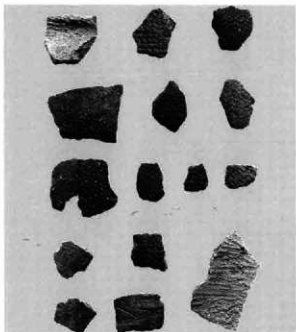


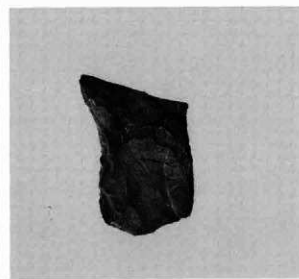
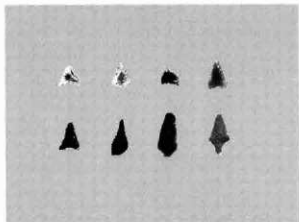
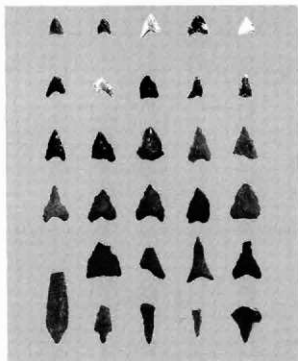
8号土坑全景

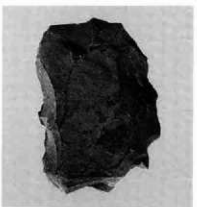


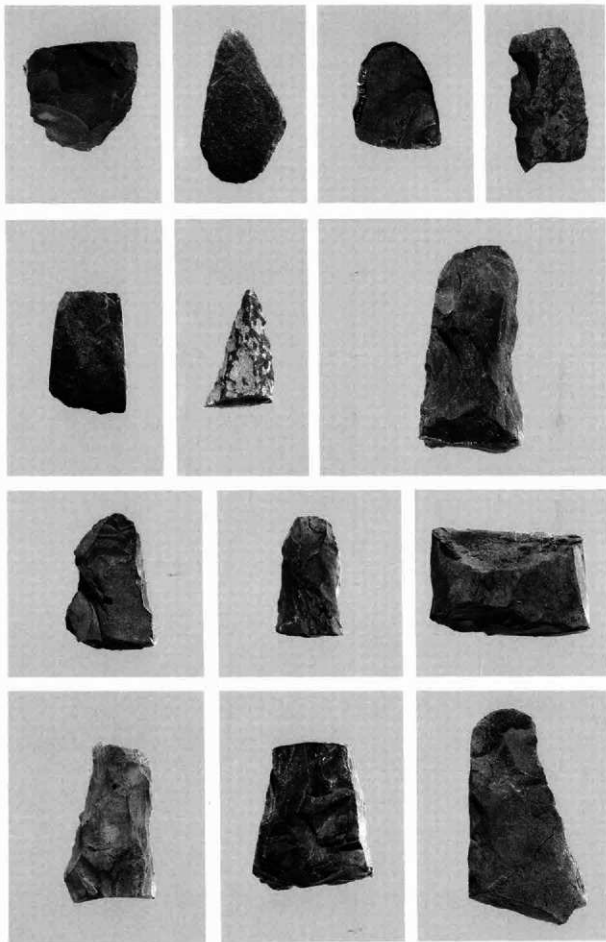
8号土坑遺物出土状況

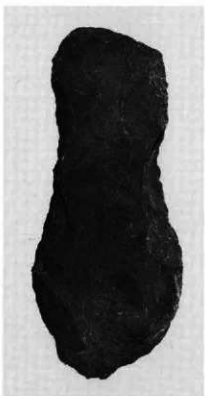
図版 6













第1号住居跡全景



第2号住居跡セクション (南側より)



第2号住居跡全景 (西側より)



第2号住居跡細部



第3号住居跡全景 (東側より)



第3号住居跡細部



第4号住居跡全景 (西側より)



第4号住居跡細部



第6号住居跡全景 (西側より)



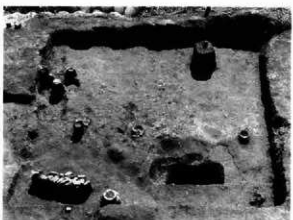
第6号住居跡竈遺物出土状況



第7号住居跡全景 (西側より)



第7号住居跡掘り方全景 (西側より)



第8号住居跡遺物出土状況 (東側より)



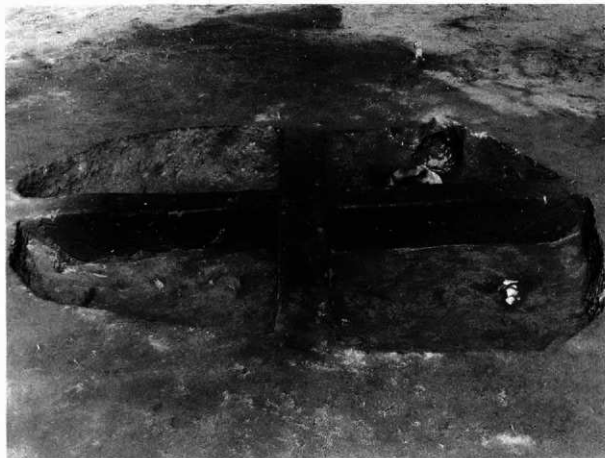
第8号住居跡遺物出土状況近接



第9号住居跡遺物出土状況 (東側より)



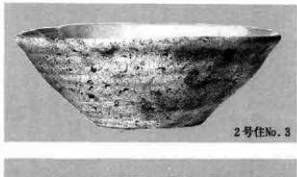
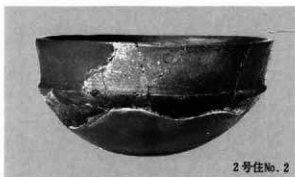
第9号住居跡竈遺物出土状況

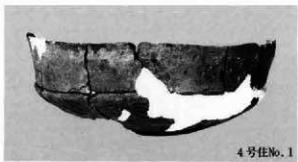
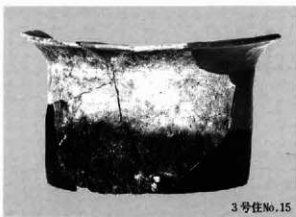
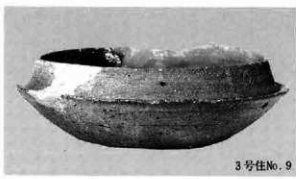


第13号住居跡セクション



第13号住居跡全景(西側より)





図版16

書上下吉祥寺遺跡



6号住No. 1



6号住No. 2



6号住No. 3



6号住No. 4



6号住No. 5



6号住No. 6



8号住No. 1



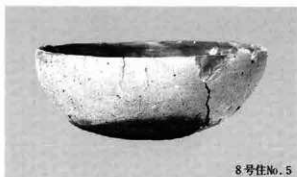
8号住No. 2



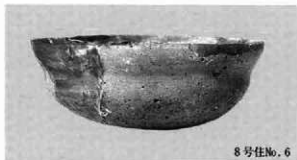
8号住No. 3



8号住No. 4



8号住No. 5



8号住No. 6



8号住No. 7



8号住No. 8



9号住No. 1



9号住No. 2



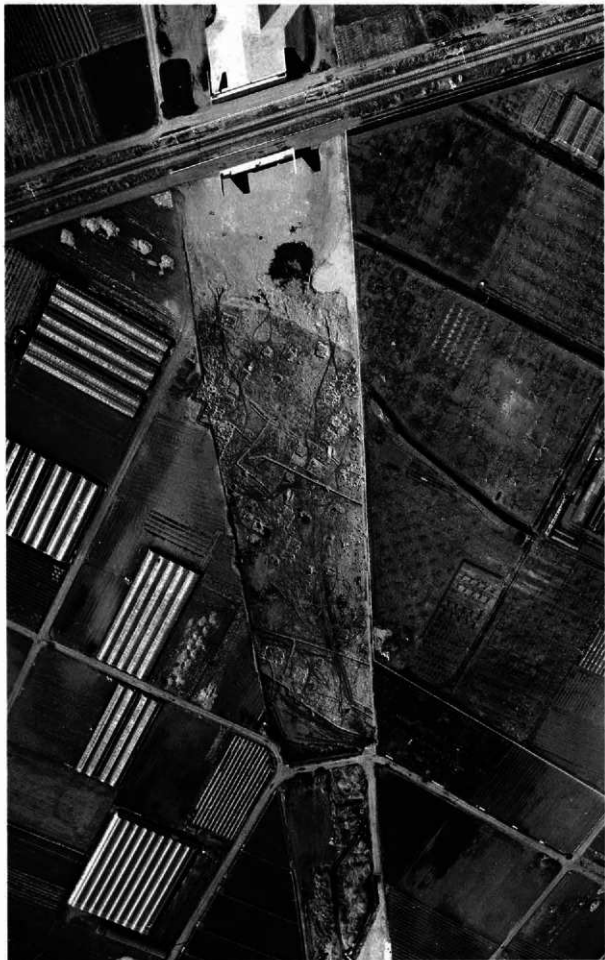
9号住No. 3



9号住No. 4



9号住No. 5







第1号住居跡全景 (西側より)



第2号住居跡全景 (西側より)



第2号住居跡遺物出土状況



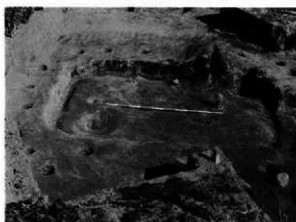
第2号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡全景 (南側より)



第3号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡全景 (西側より)



第4号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡全景（西側より）



第5号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡全景（西側より）



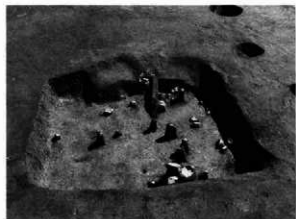
第6号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡全景（西側より）



第7号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡全景（西側より）



第8号住居跡遺物出土状況



第9号住居跡全景(西側より)



第9号住居跡掘り方全景(西側より)



第10号住居跡セクション(西側より)



第10号住居跡全景(南側より)



第11号住居跡遺物出土状況(西側より)



第11号住居跡竈遺物出土状況



第11号住居跡掘り方全景(西側より)



第11号住居跡床下土坑遺物出土状況



第12号住居跡全景(西側より)



第12号住居跡掘り方全景(西側より)



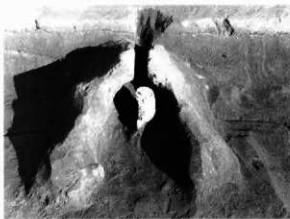
第13号住居跡遺物出土状況(西側より)



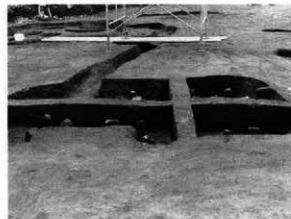
第13号住居跡遺物出土状況



第14・15号住居跡全景(西側より)



第15号住居跡遺物出土状況(西側より)



第16号住居跡セクション(東側より)



第16号住居跡遺物出土状況(西側より)



第17号住居跡遺物出土状況(西側より)



第17号住居跡掘り方全景



第18号住居跡掘り方全景(西側より)



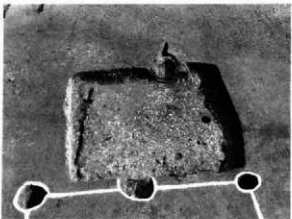
第18号住居跡遺物出土状況



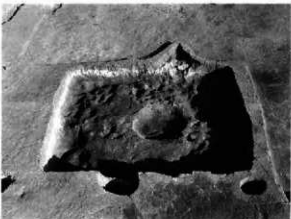
第19号住居跡遺物出土状況(西側より)



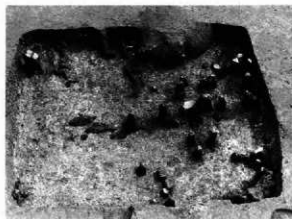
第19号住居跡掘り方全景



第20号住居跡全景(西側より)



第20号住居跡掘り方全景



第20号住居跡遺物出土状況(西側より)



第20号住居跡遺物出土状況



第21号住居跡全景(西側より)



第21号住居跡掘り方全景



第22号住居跡遺物出土状況(西側より)



第22号住居跡掘り方全景



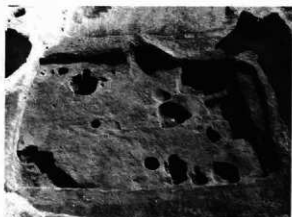
第23号住居跡全景(西側より)



第23号住居跡掘り方



第24号住居跡全景(西側より)



第24号住居跡掘り方全景



第25号住居跡掘り方全景(西側より)



第26号住居跡全景(西側より)



第26号住居跡遺物出土状況(東側より)



第26号住居跡竈遺物出土状況



第28号住居跡掘り方全景(西側より)



第28号住居跡竈・貯蔵穴



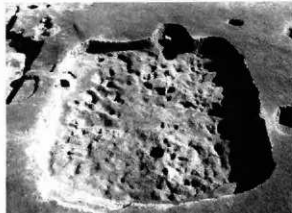
第29号住居跡全景(南側より)



第30号住居跡遺物出土状況(西側より)



第31号住居跡遺物出土状況(西側より)



第31号住居跡掘り方全景



第32号住居跡全景(西側より)



第33号住居跡全景(北側より)



第34号住居跡遺物出土状況(西側より)



第34号住居跡全景(西側より)



第34号住居跡竈遺物出土状況



第35号住居跡全景(西側より)



第36号住居跡全景(西側より)



第36号住居跡竈



第37号住居跡全景(西側より)



第37号住居跡竈



第38号住居跡全景(西側より)



第39号住居跡全景(西側より)



第40号住居跡青(西側より)



第41号住居跡遺物出土状況(西側より)



第41号住居跡全景



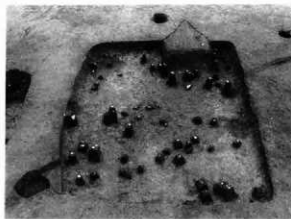
第41号住居跡竈・貯蔵穴



第42号住居跡全景(西側より)



第42号住居跡竈・貯蔵穴



第43号住居跡遺物出土状況(西側より)



第43号住居跡遺物出土状況



第44号住居跡遺物出土状況(西側より)



第44号住居跡遺物出土状況



第46号住居跡全景(西側より)



第47号住居跡セクション(南側より)



第47号住居跡遺物出土状況



第47号住居跡全景



第48号住居跡全景(西側より)



第49号住居跡全景(西側より)



第1号掘立柱建物跡全景 (南側より)



第2号掘立柱建物跡全景 (南側より)



第3号掘立柱建物跡全景（東側より）



第5号掘立柱建物跡全景（西側より）



第4・6号掘立柱建物跡全景(西側より)



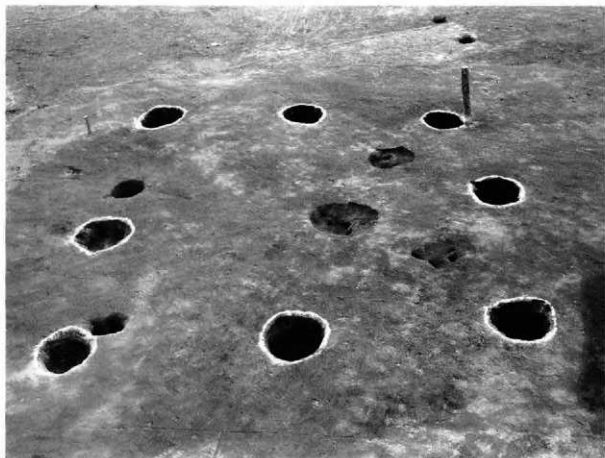
第5・7号掘立柱建物跡全景(西側より)



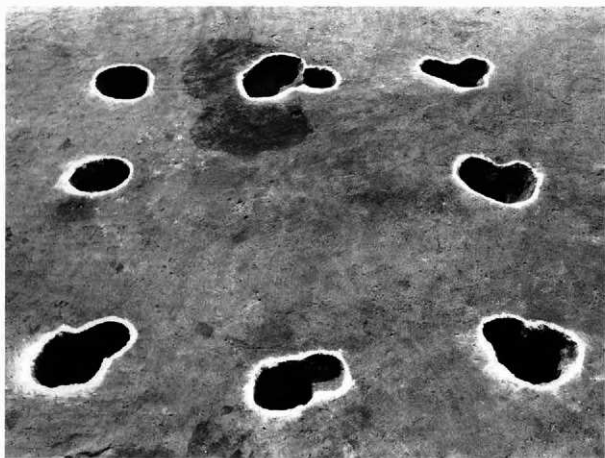
第8号掘立柱建物跡全景(南側より)



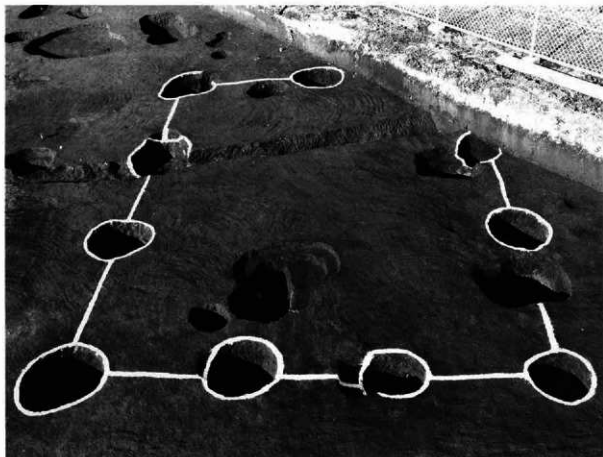
第10号掘立柱建物跡全景(西側より)



第8号掘立柱建物跡全景(西側より)



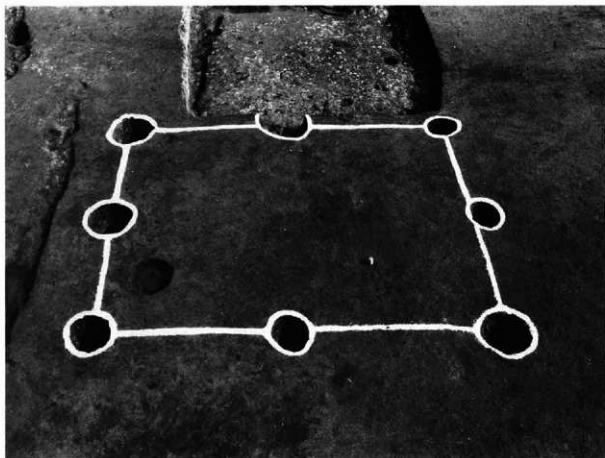
第11号掘立柱建物跡全景(東側より)



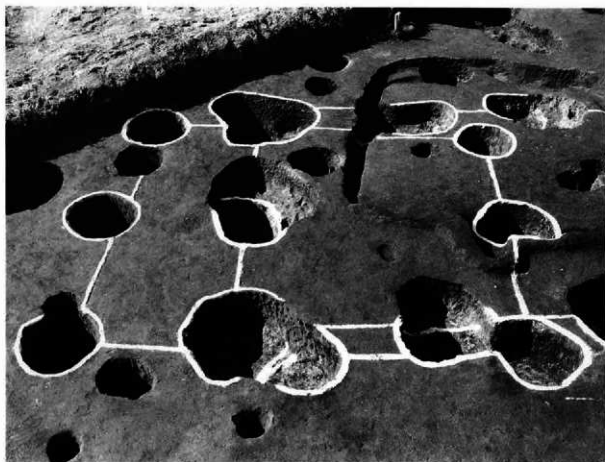
第14号掘立柱建物跡全景(南側より)



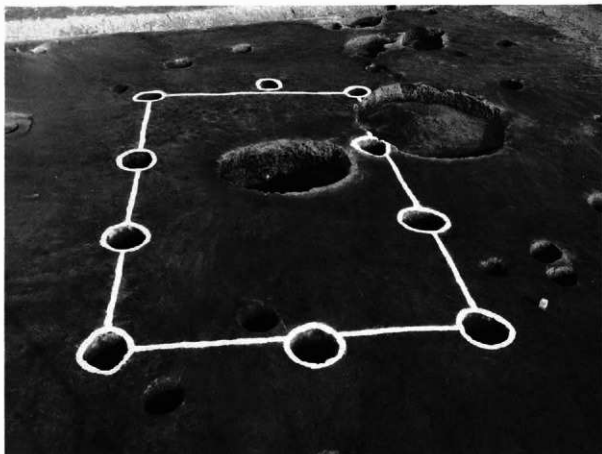
第15号掘立柱建物跡全景(南側より)



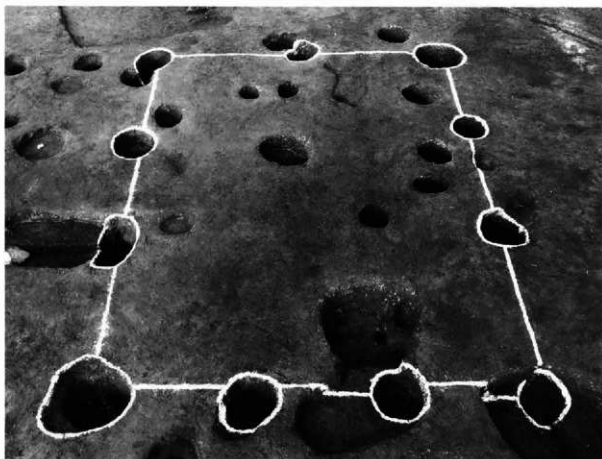
第16号掘立柱建物跡全景(西側より)



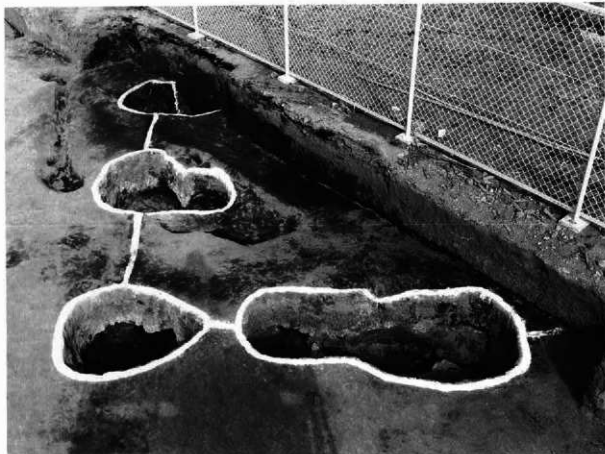
第18号掘立柱建物跡全景(南側より)



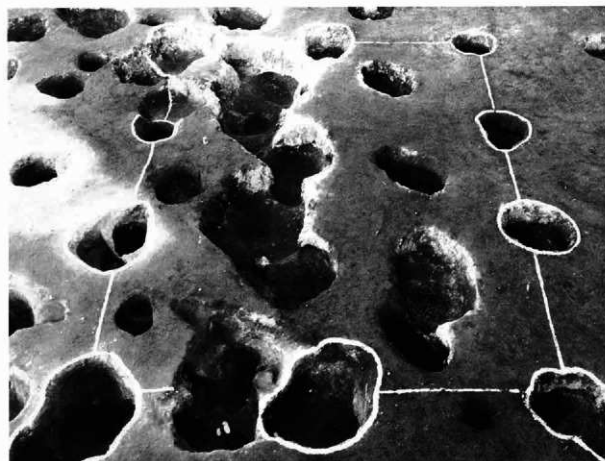
第20号掘立柱建物跡全景(南側より)



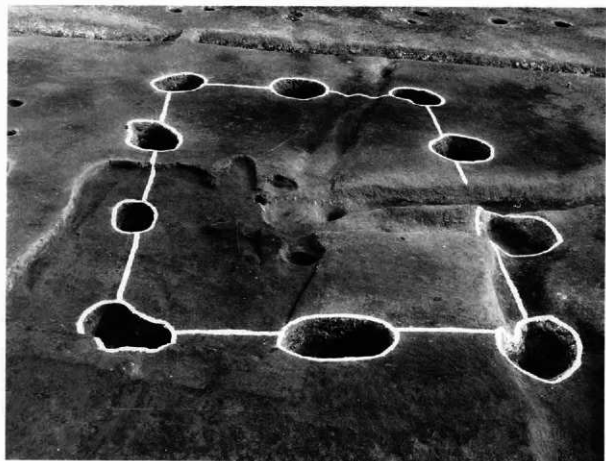
第24号掘立柱建物跡全景(南側より)



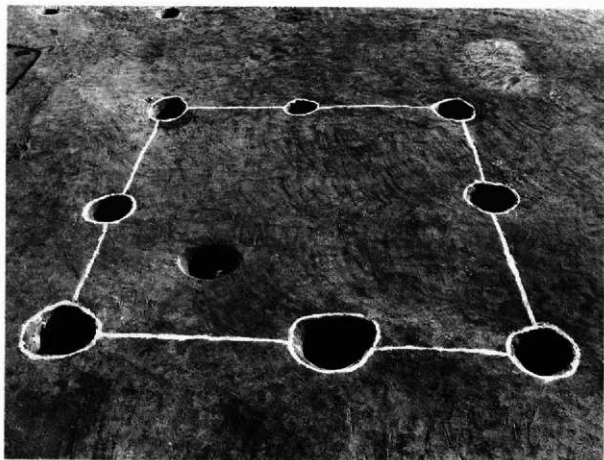
第25号掘立柱建物跡全景(南側より)



第26号掘立柱建物跡全景(南側より)



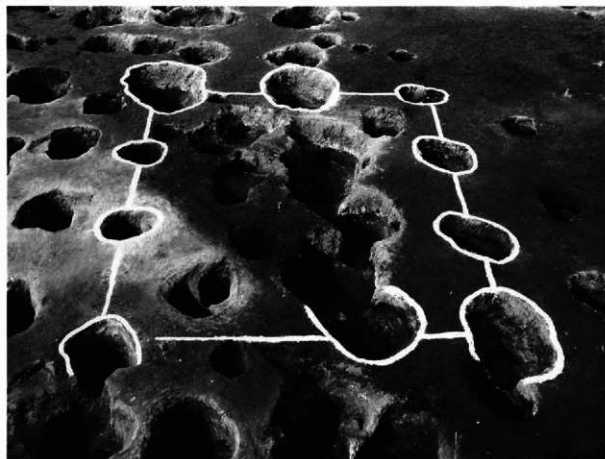
第27号掘立柱建物跡全景(西側より)



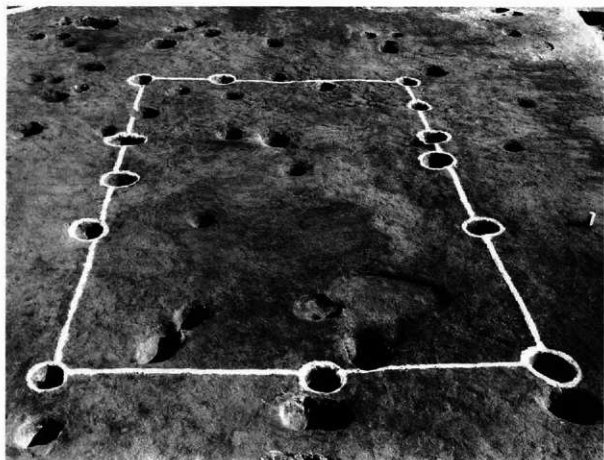
第28号掘立柱建物跡全景(北側より)



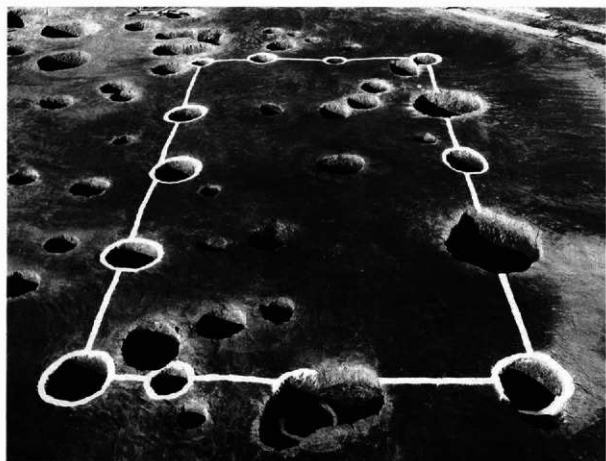
第29号掘立柱建物跡全景(南側より)



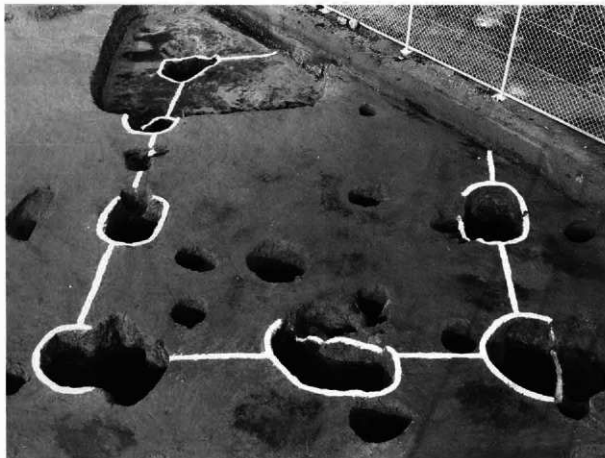
第30号掘立柱建物跡全景(南側より)



第31号掘立柱建物跡全景(西側より)



第32号掘立柱建物跡全景(南側より)



第33号掘立柱建物跡全景(南側より)



第34号掘立柱建物跡全景(南側より)



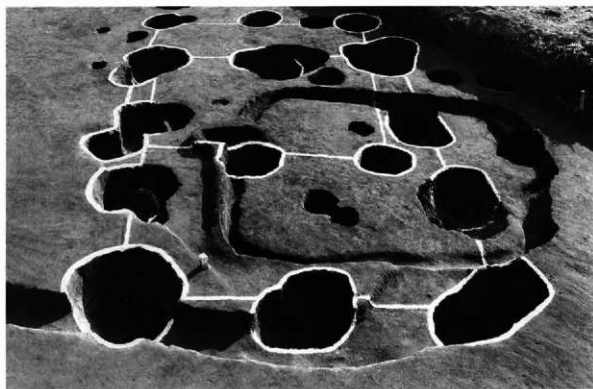
第35号掘立柱建物跡全景(南側より)



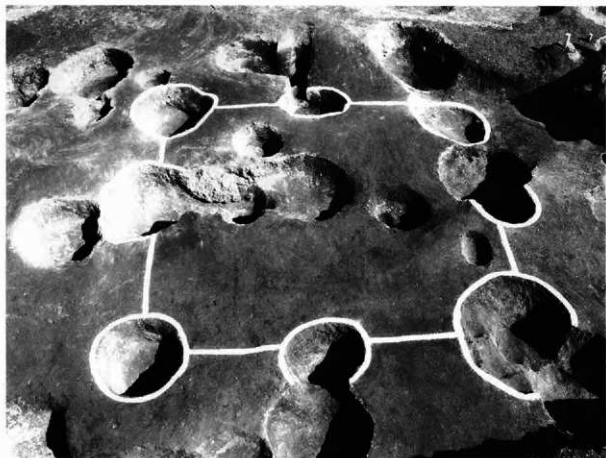
第36号掘立柱建物跡全景(南側より)



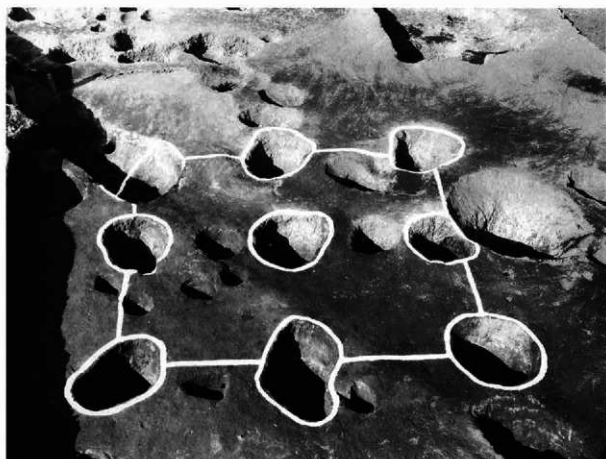
第37号掘立柱建物跡全景
(南側より)



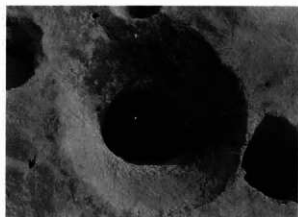
第18・19・38号掘立柱建物跡(北側より)



第40号掘立柱建物跡全景(西側より)



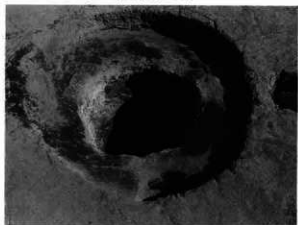
第41号掘立柱建物跡全景(南側より)



第3号井戸全景



第4号井戸全景



第5号井戸全景



第6号井戸全景



第7号井戸全景



第2号井戸全景



第2号井戸セクション



第1号井戸全景



第13・15号溝



第1号溝



第2号溝



第3号溝



第4号溝



第7号溝



第5号溝



第7・8号溝



第9号溝



第12号溝(西側)



第12号溝(東側)



第14号溝



第16号溝



第11号土坑



グリッド遺物出土状況



風倒木痕



風倒木痕



風倒木痕全景



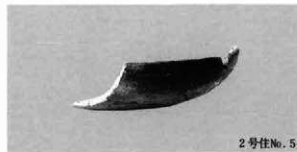
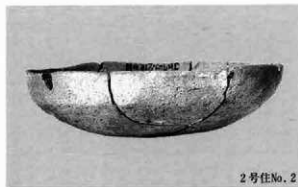
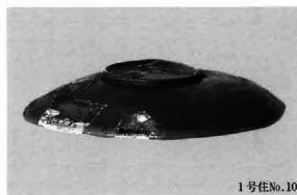
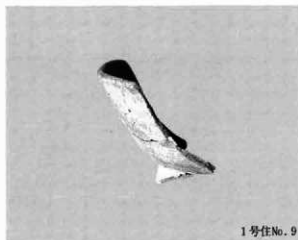
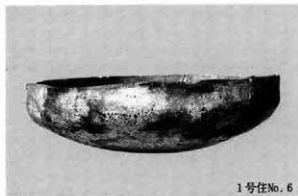
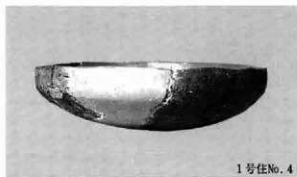
風倒木痕セクション

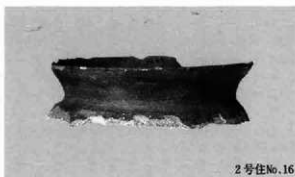
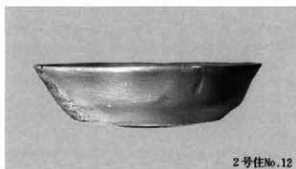


風倒木痕



風倒木痕セクション

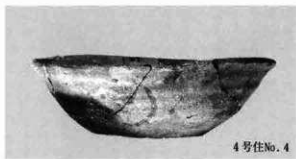


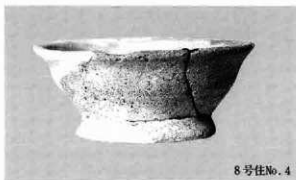




図版54

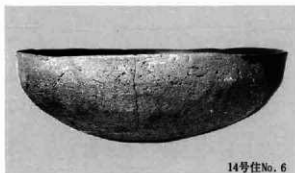
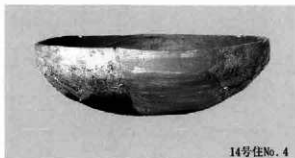
書上上原之城遺跡

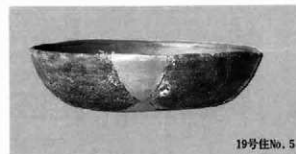
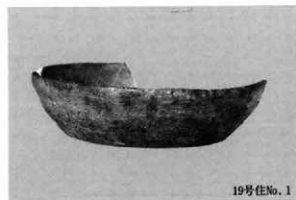
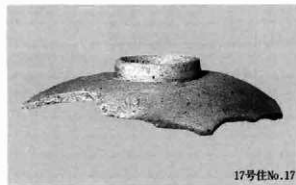
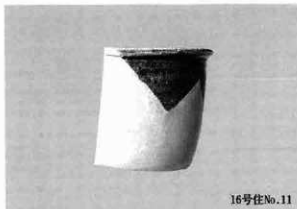
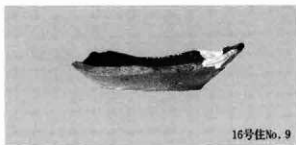


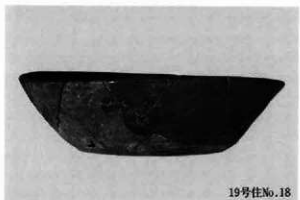
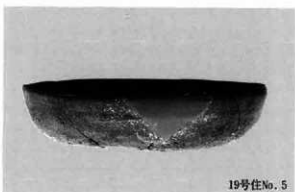
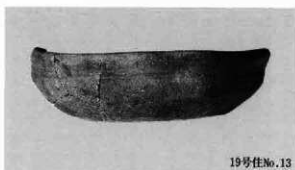


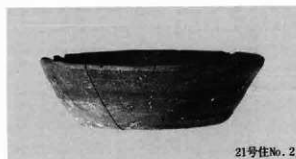


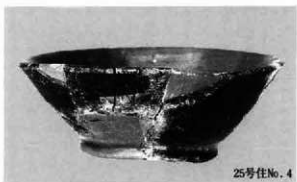
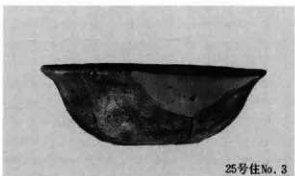
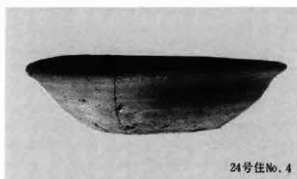
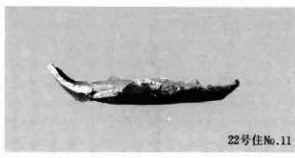














26号住No. 1



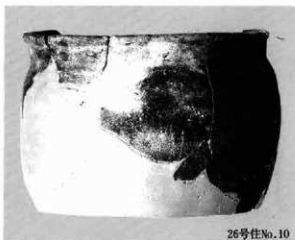
26号住No. 6



26号住No. 4



26号住No. 13



26号住No. 10



26号住No. 15



26号住No. 14



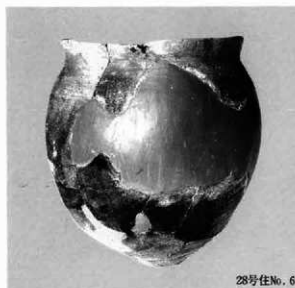
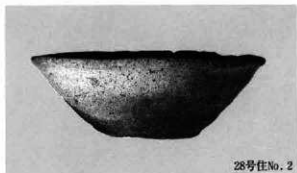
26号No. 18

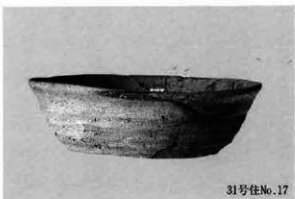
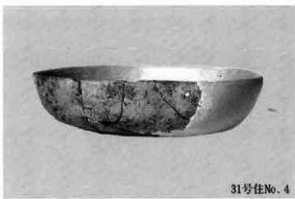
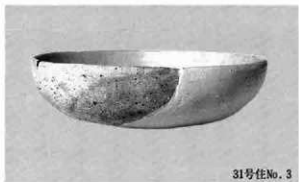


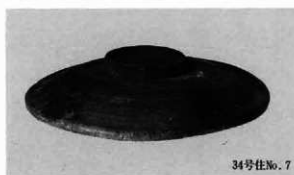
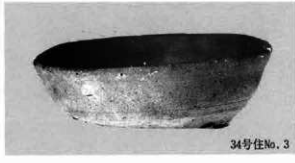
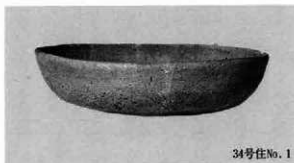
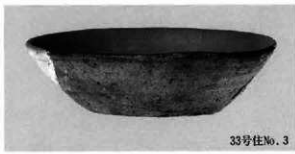
26号住No. 19

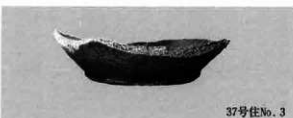
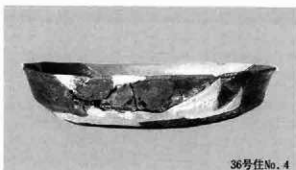
図版64

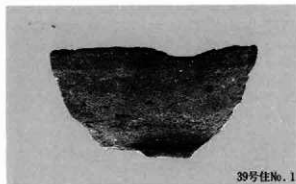
書上上原之城遺跡













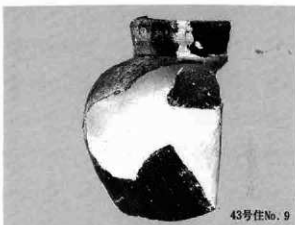
41号住No. 5



41号住No. 6



43号住No. 7



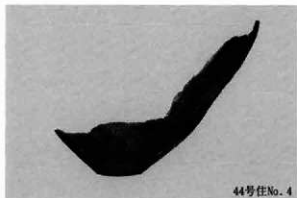
43号住No. 9



44号住No. 1



44号住No. 2



44号住No. 4



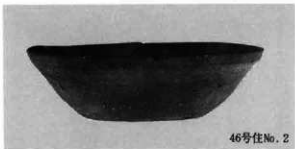
44号住No. 5

图版70

書上上原之城遺跡



46号住No. 1



46号住No. 2



46号住No. 3



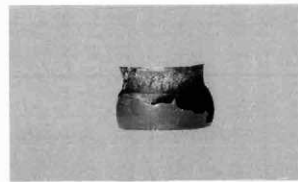
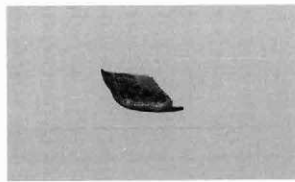
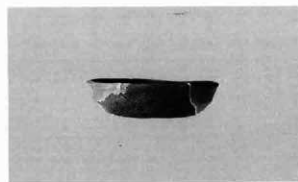
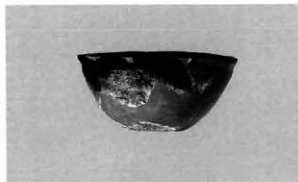
34号住No. 12

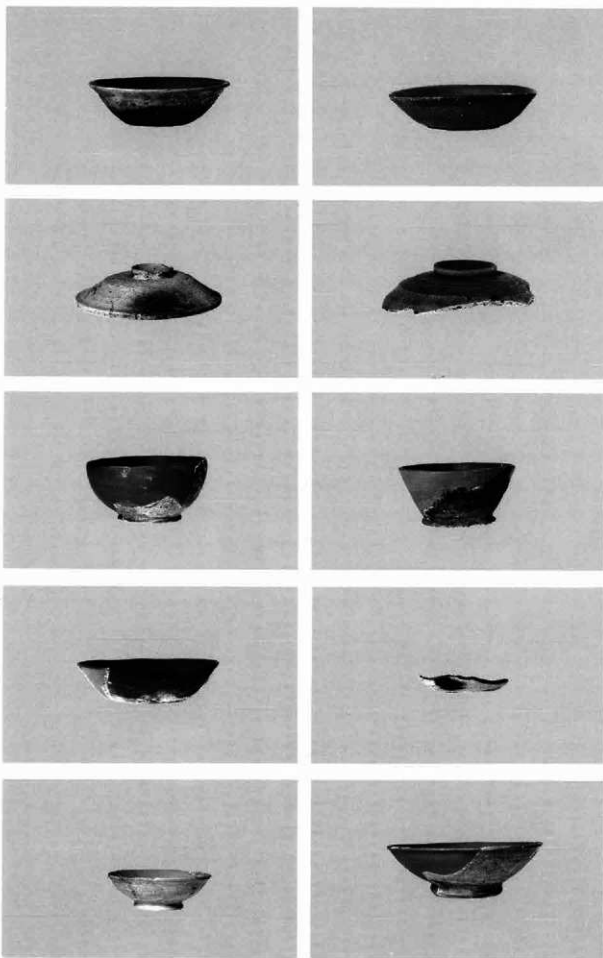


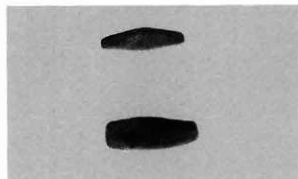
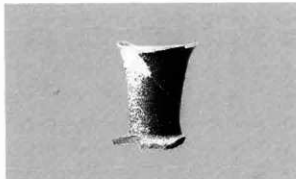
(頸部)



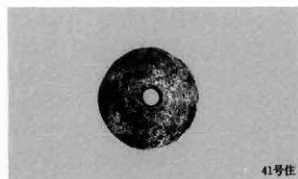
41号住No. 18







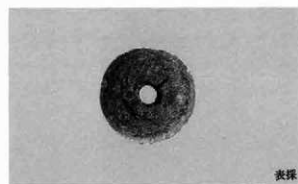
6号住



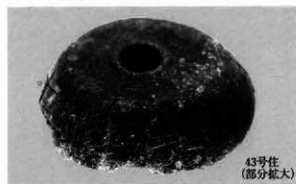
41号住



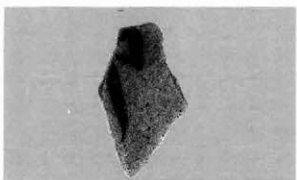
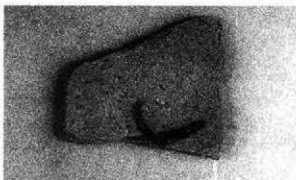
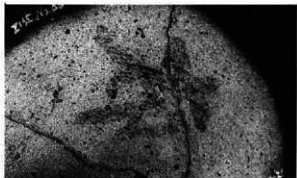
43号住

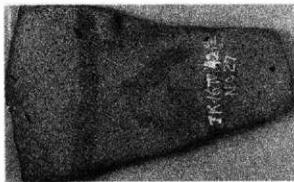
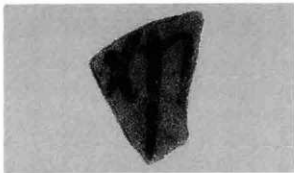


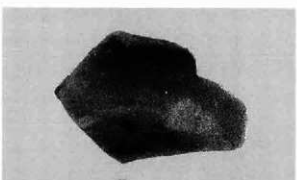
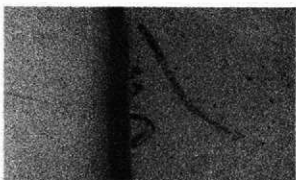
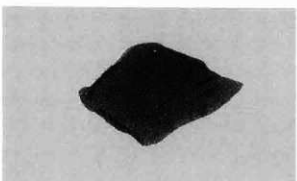
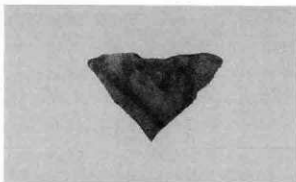
表探

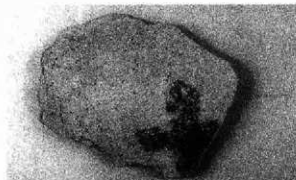
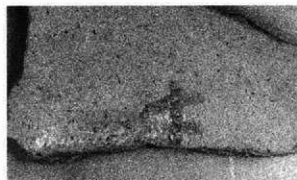
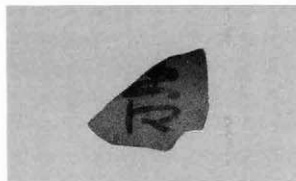
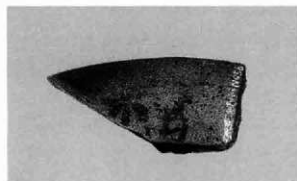


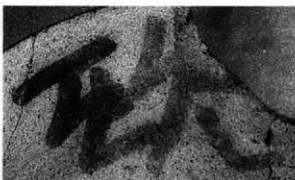
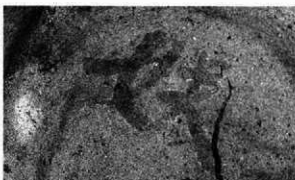
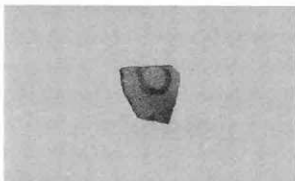
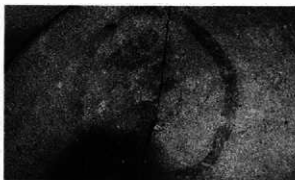
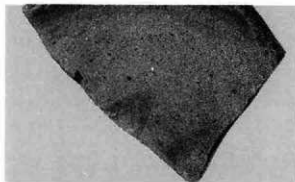
43号住
(部分拡大)

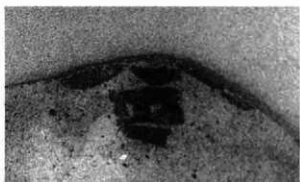
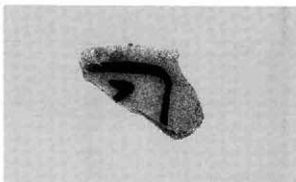
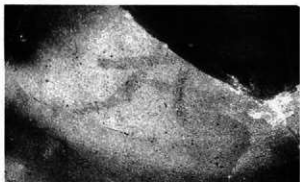
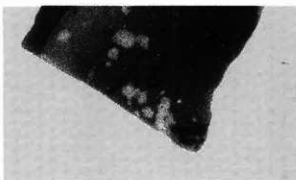
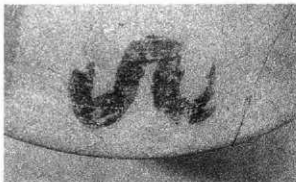
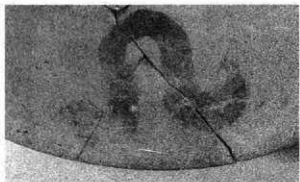


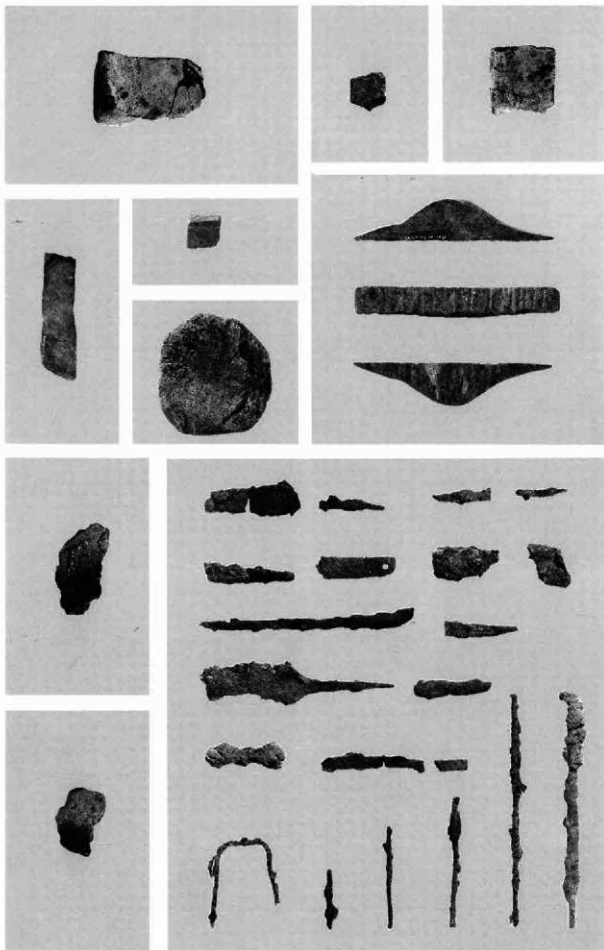


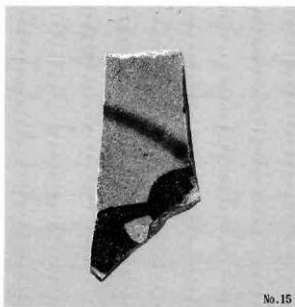
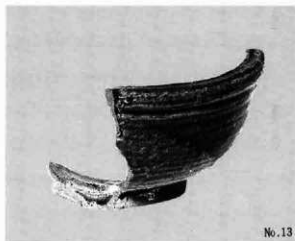
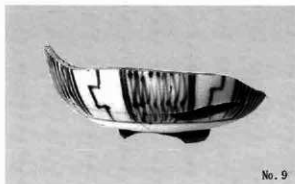










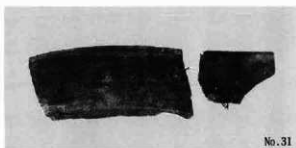




No. 29



No. 16



No. 31



No. 41



No. 35



No. 42



No. 43



No. 44

No. 45



上植木老町田遺跡Ⅱ区全景（南側より）



第1号住居跡全景（西側より）



第1号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡全景（南側より）



第2号住居跡竈（南側より）



第3号住居跡全景（西側より）



第3号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡全景（西側より）



第4号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡全景（北側より）



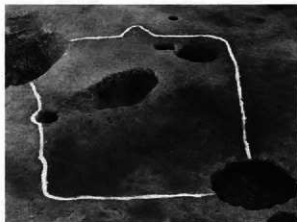
第5号住居跡竈・貯蔵穴



第6号住居跡遺物出土状況（西側より）



第6号住居跡竈・貯蔵穴



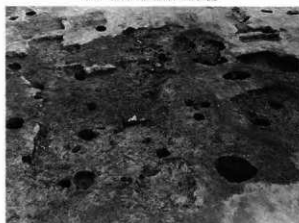
第7号住居跡全景(西側より)



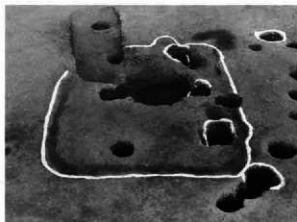
第7号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡全景(北側より)



第9号住居跡全景(北側より)



第10号住居跡全景(北側より)



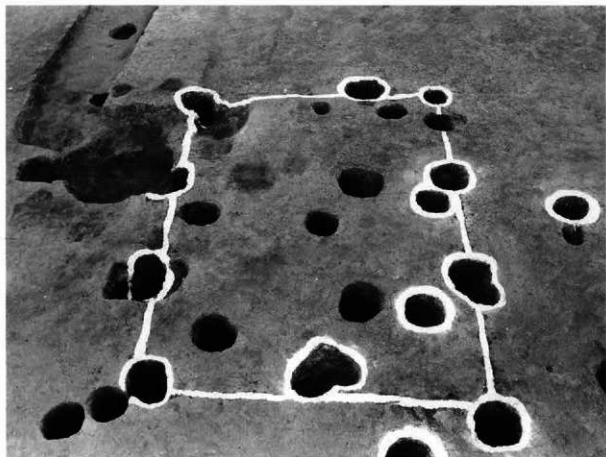
第12号住居跡セクション(南側より)



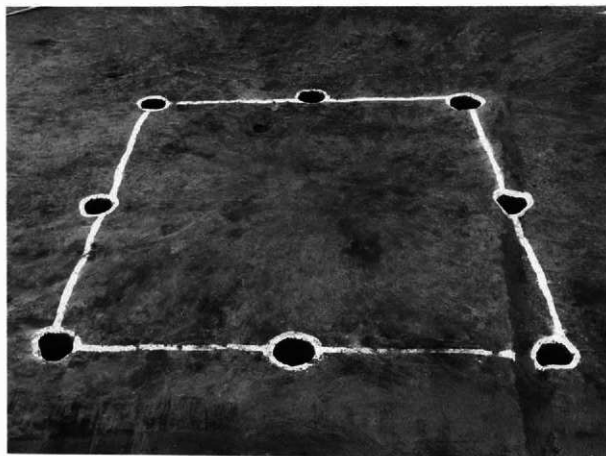
第12号住居跡全景(南側より)



第12号住居跡遺物出土状況



第1号掘立柱建物跡全景（西側より）



第2号掘立柱建物跡全景（西側より）



第3号掘立柱建物跡全景(東側より)



調査区遠景(西側より)



土塚墓群全景(北側より)



第1号土塚墓全景(北側より)



第1号土塚墓遺物出土状況



第2号土塚墓全景(西側より)



第2号土塚墓遺物出土状況



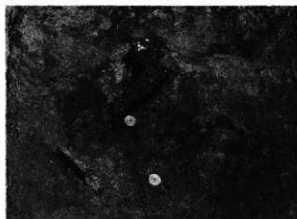
第3号土塚墓全景 (南側より)



第3号土塚墓遺物出土状況



第4号土塚墓全景 (南側より)



第4号土塚墓遺物出土状況



第5号土塚墓全景 (東側より)



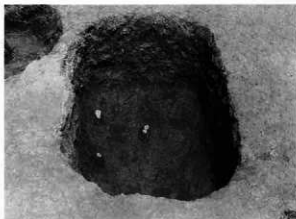
第5号土塚墓遺物出土状況



第6号土塚墓全景 (南側より)



第6号土塚墓遺物出土状況



第7号土墳墓全景(北側より)



第7号土墳墓遺物出土状況



第8号土墳墓全景(南側より)



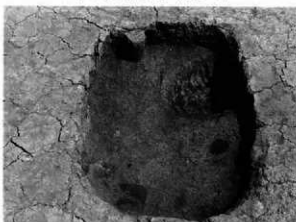
第8・9号土墳墓



第9号土墳墓全景(南側より)



第9号土墳墓遺物出土状況



第10号土墳墓全景(南側より)



第10号土墳墓遺物出土状況



第1号火葬跡炭化物出土状況



第1号火葬跡全景(南側より)



第12号土壙墓全景(南側より)



第12号土壙墓遺物出土状況



第13号土壙墓全景(南側より)



第13号土壙墓遺物出土状況



第14号土壙墓全景(南側より)



第14号土壙墓遺物出土状況



地下式土壙全景(南側より)



地下式土壙全景(西側より)



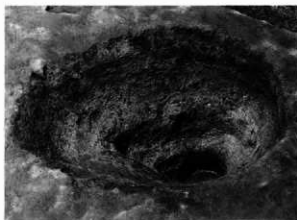
地下式土壙セクション



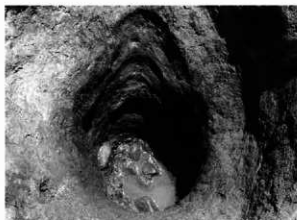
遺物出土状況(紡錘車)



遺物出土状況(緑釉靴)



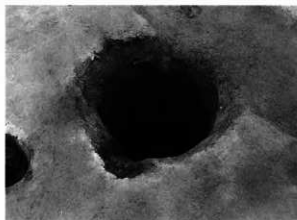
第1号井戸全景 (東側より)



第1号井戸底部



第3号井戸全景 (北側より)



第4号井戸全景 (北側より)



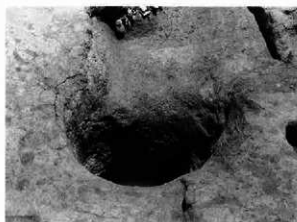
第5号井戸全景 (西側より)



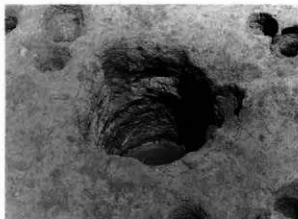
第5号井戸底部



第6号井戸全景 (南側より)



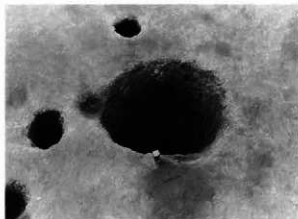
第7号井戸全景 (北側より)



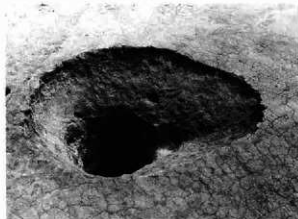
第8号井戸全景 (東側より)



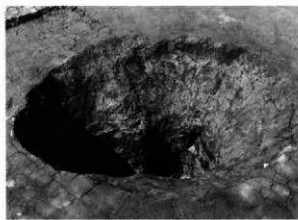
第9号井戸全景 (北側より)



第10号井戸全景 (南側より)



第11号井戸全景 (西側より)



第12号井戸全景 (南側より)



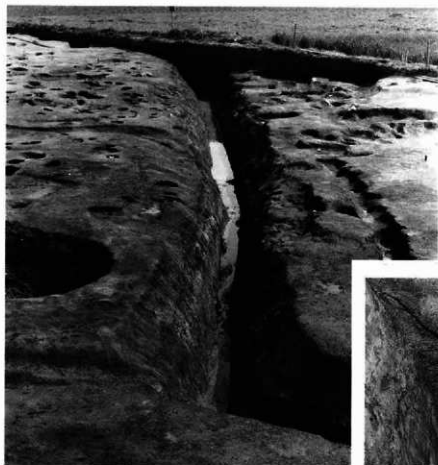
第12号井戸底部



第13号井戸全景 (南側より)



第1号風割木痕セクション



第1号溝（北側より）



馬糞出土状況



第1号溝セクション



第3号溝・枕列（西側より）



枕



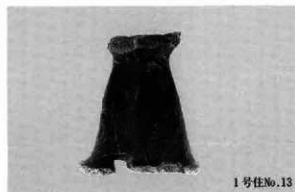
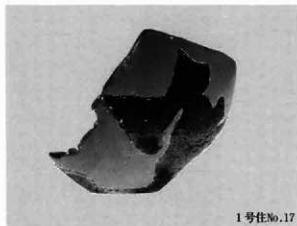
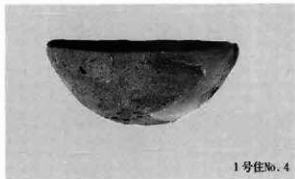
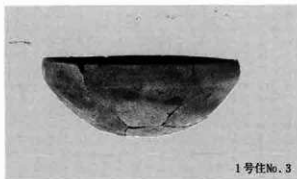
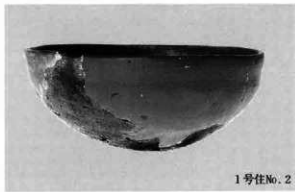
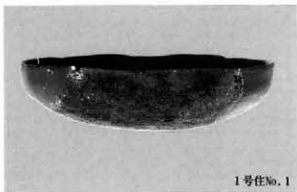
第2号溝（南側より）



第7号溝南側全景(西側より)

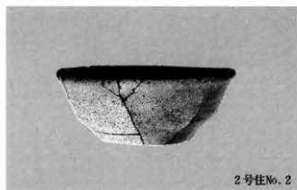


第3・4号溝南側全景(西側より)

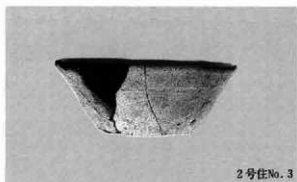




2号住No. 1



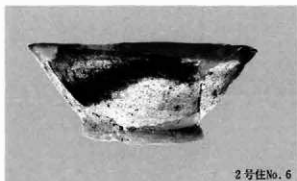
2号住No. 2



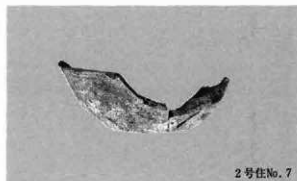
2号住No. 3



2号住No. 4



2号住No. 6



2号住No. 7



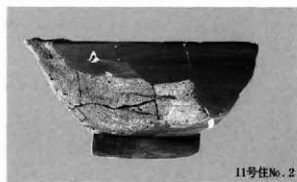
11号住No. 4



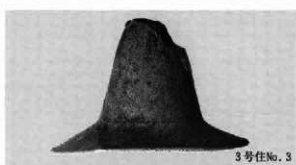
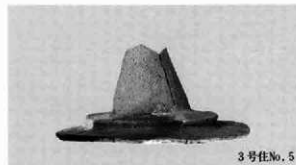
11号住No. 1

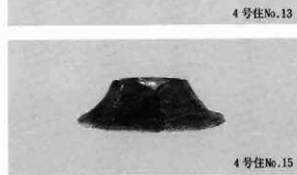
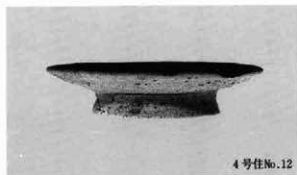
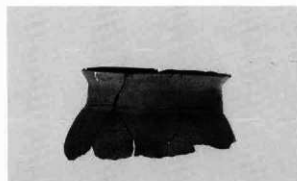
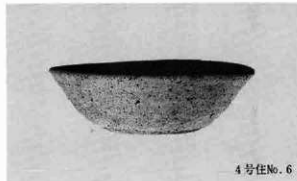
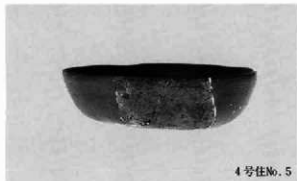
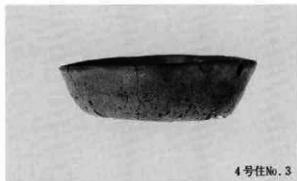
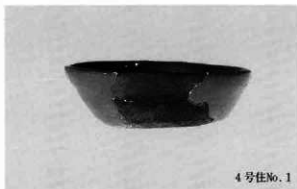


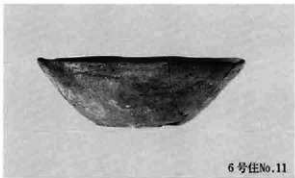
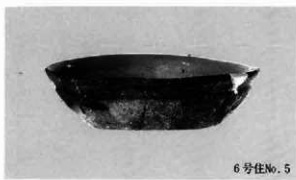
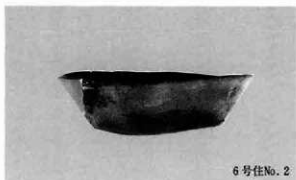
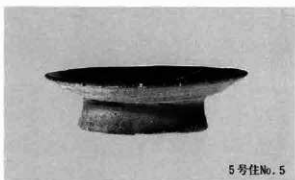
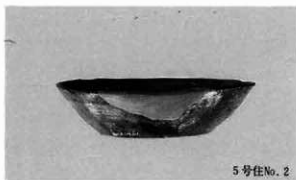
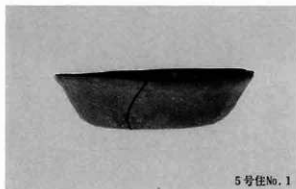
11号住No. 3

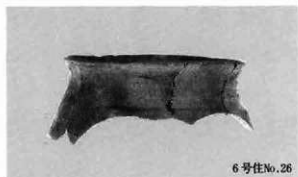
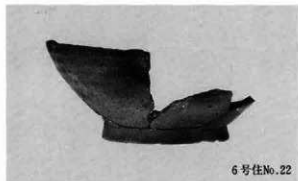
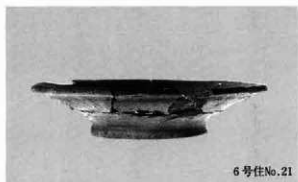
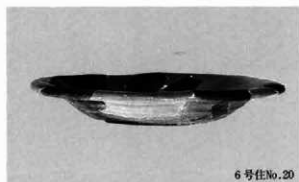
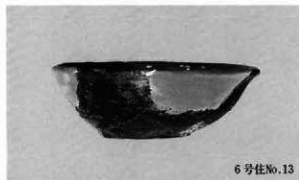
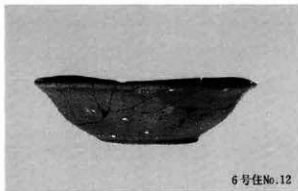


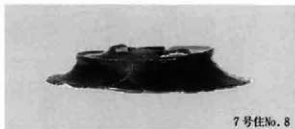
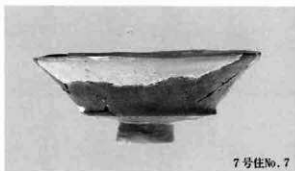
11号住No. 2

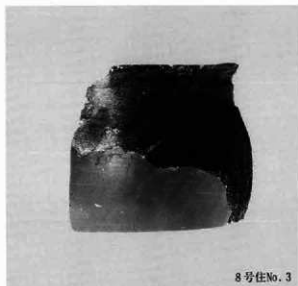








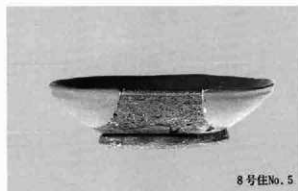




8号住No. 3



8号住No. 4



8号住No. 5



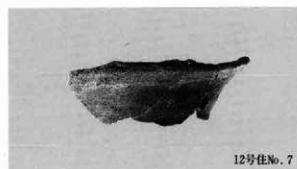
12号住No. 4



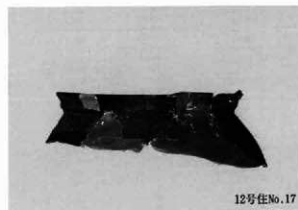
12号住No. 5



12号住No. 6



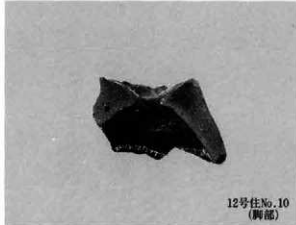
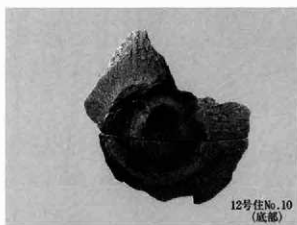
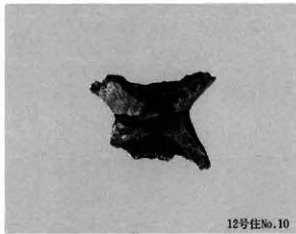
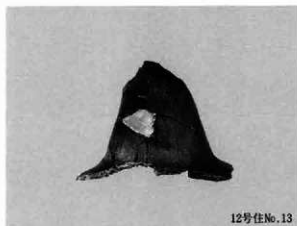
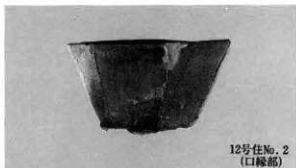
12号住No. 7

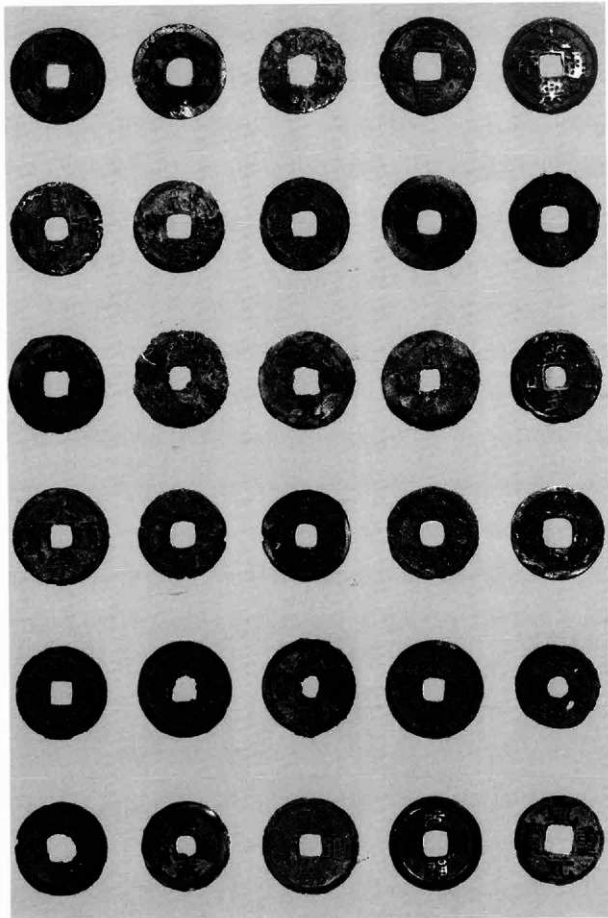


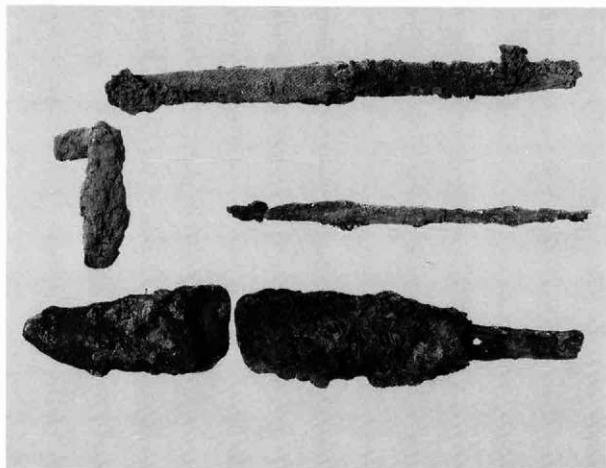
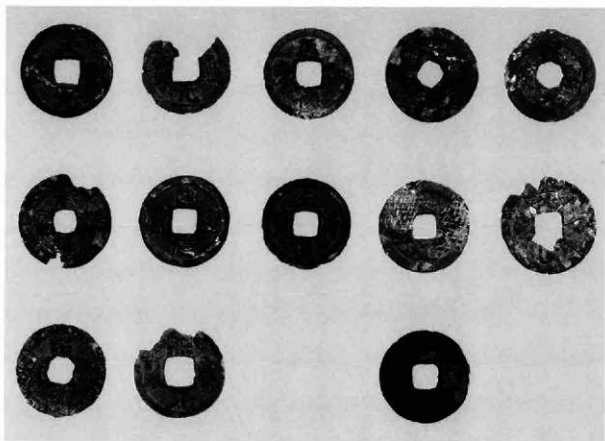
12号住No. 17

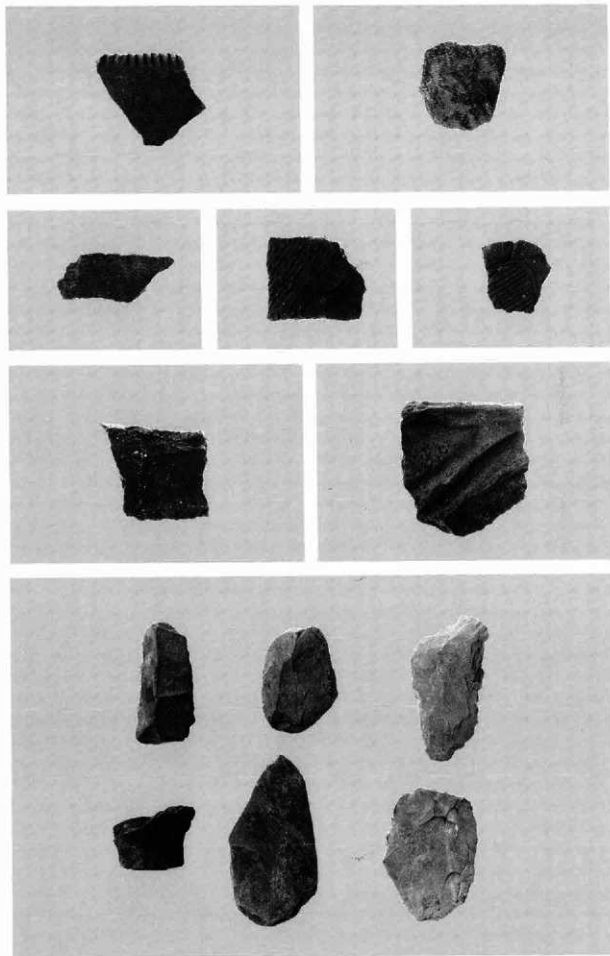


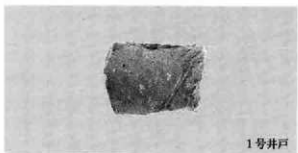
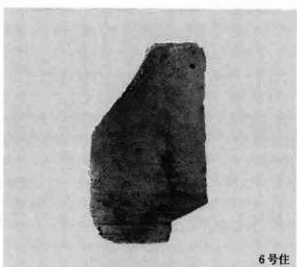
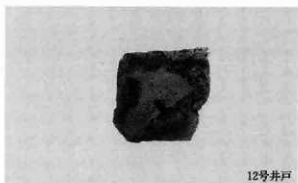
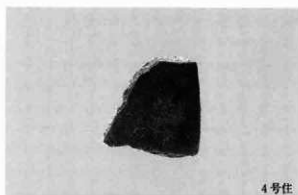
12号住No. 3

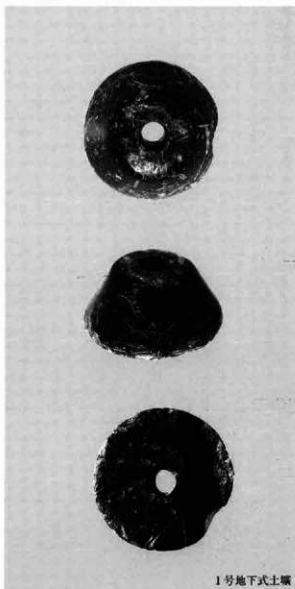
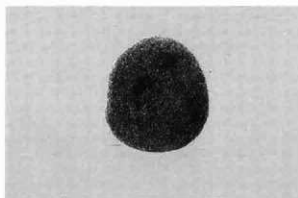
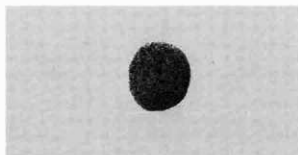
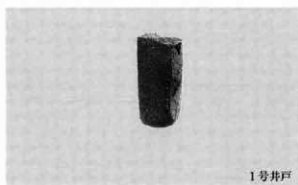
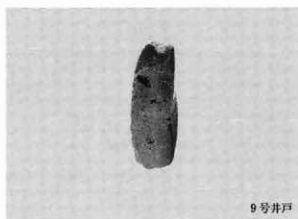
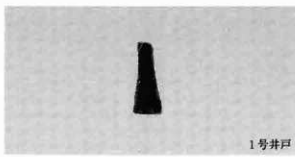


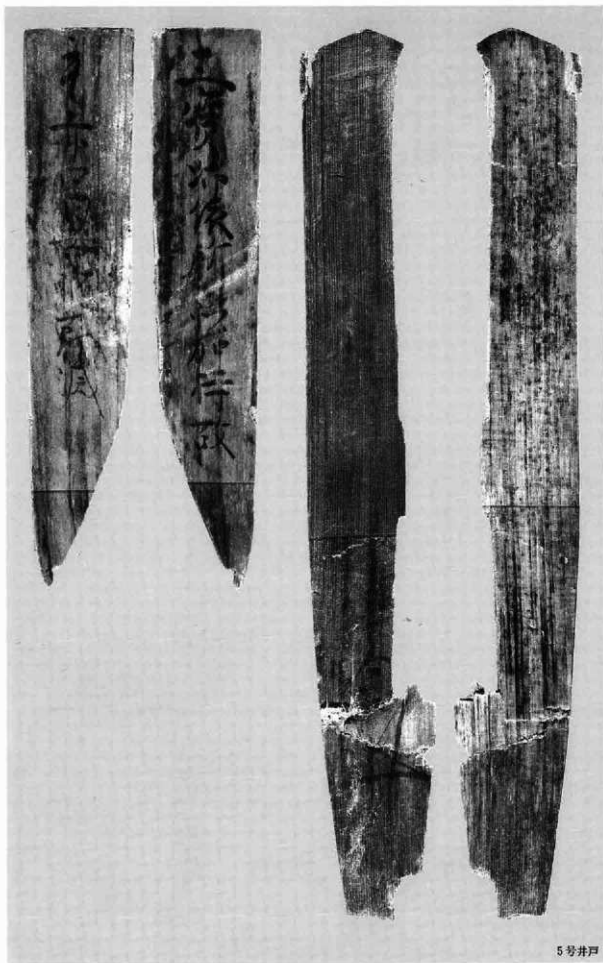


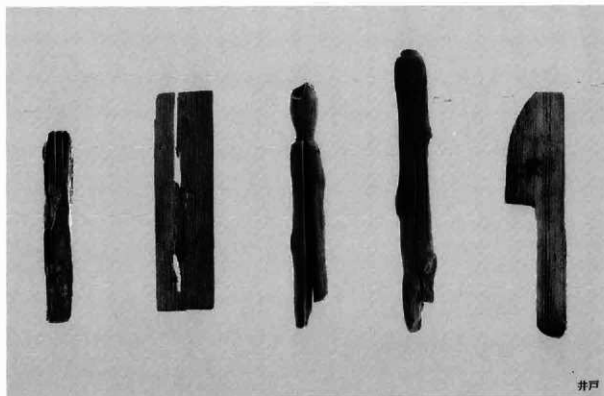
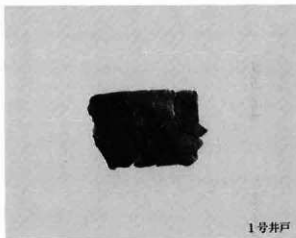
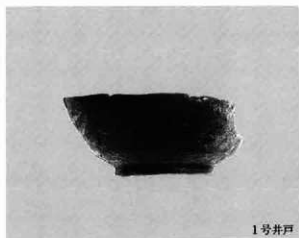
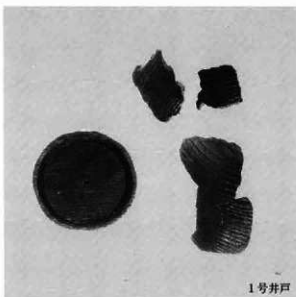
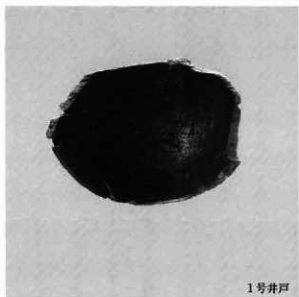


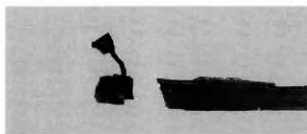
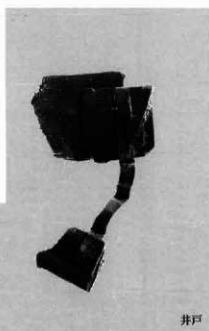
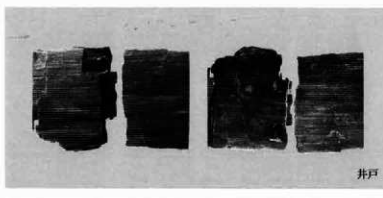
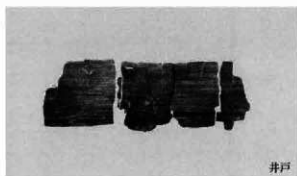
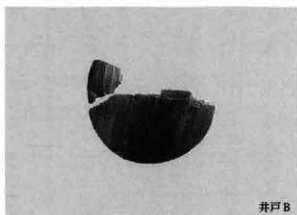
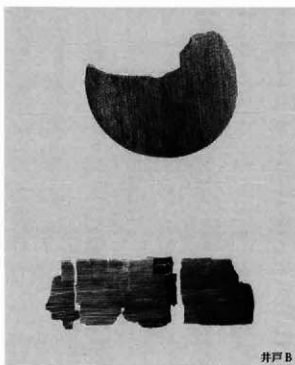
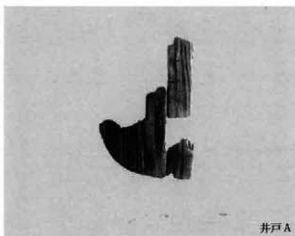


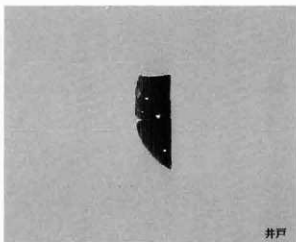
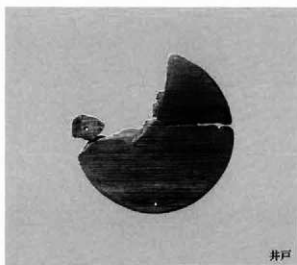
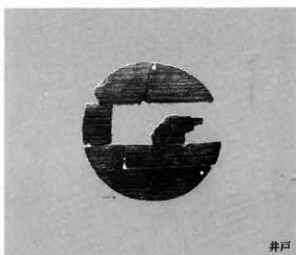
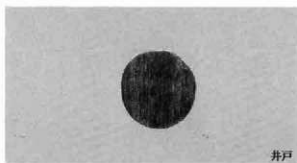
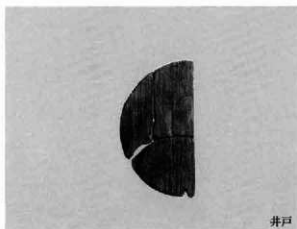
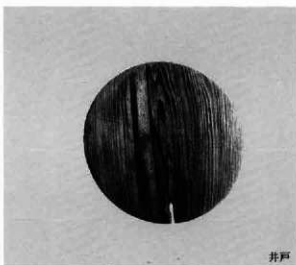
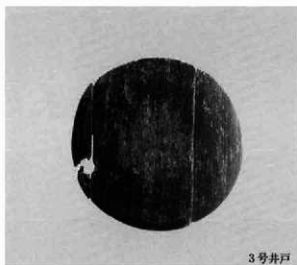


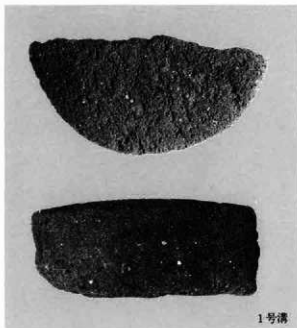




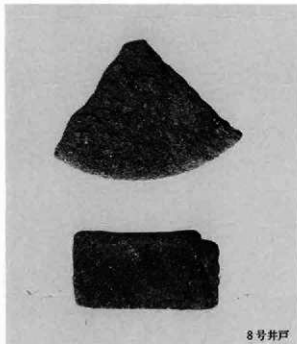




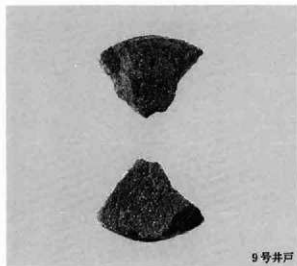




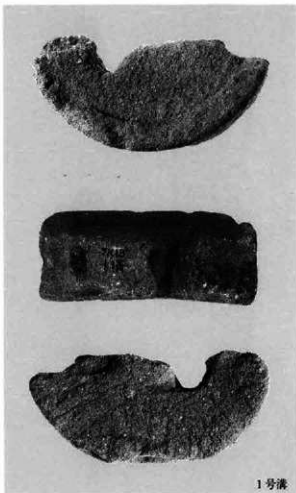
1号溝



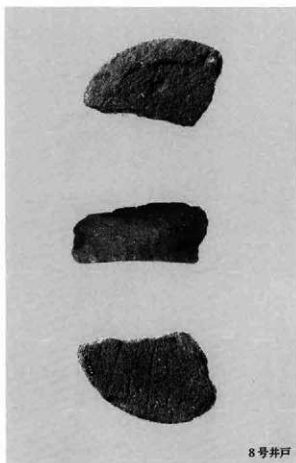
8号井戸



9号井戸



1号溝



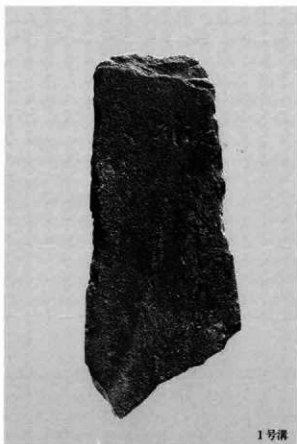
8号井戸



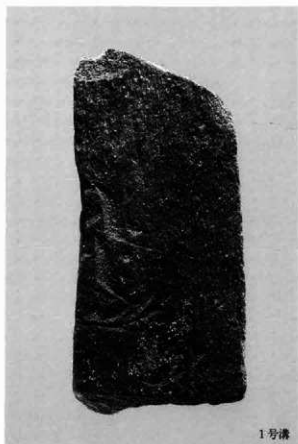
8号井戸



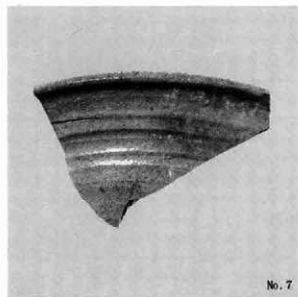
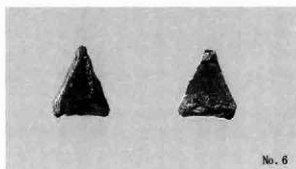
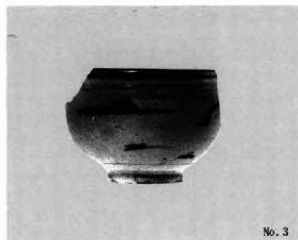
8号井戸

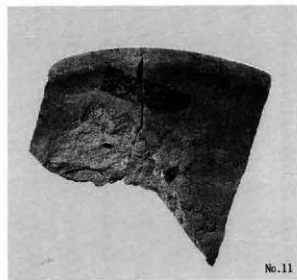
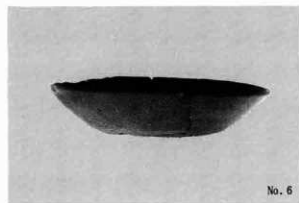
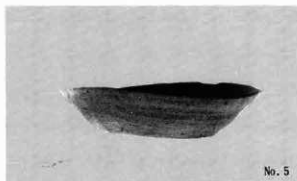


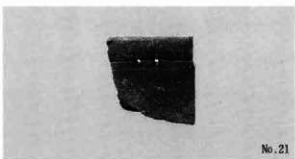
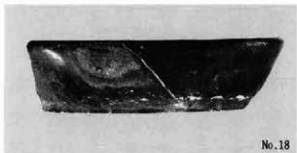
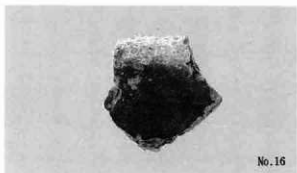
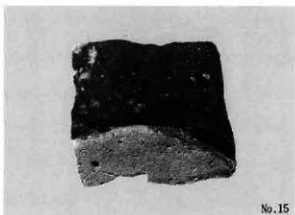
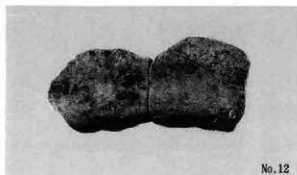
1号溝

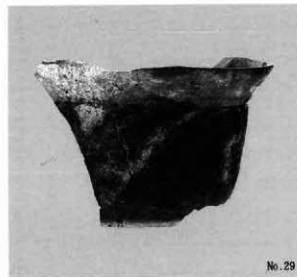
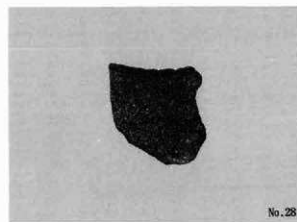
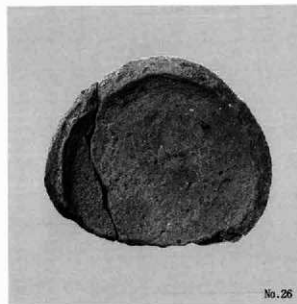
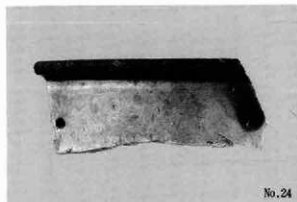
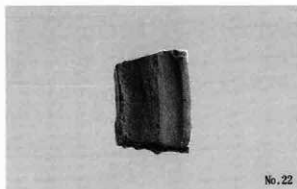


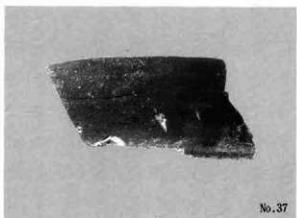
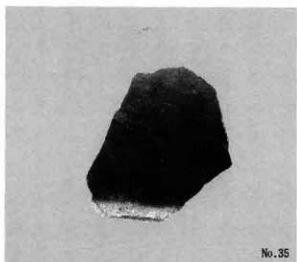
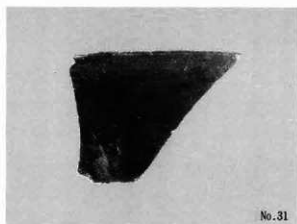
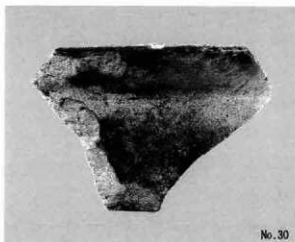
1号溝

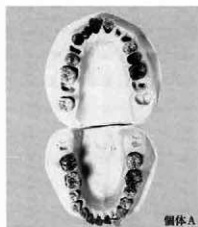




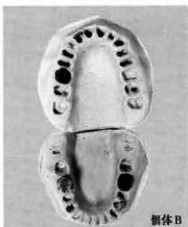




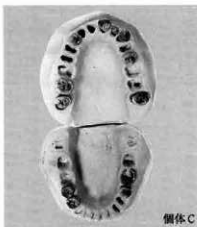




個体A



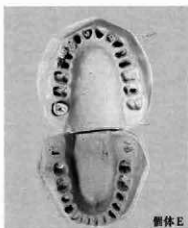
個体B



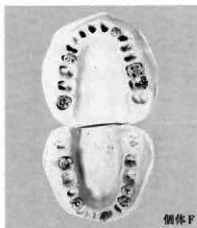
個体C



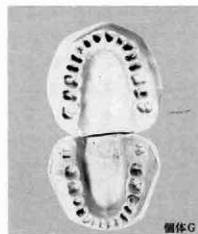
個体D



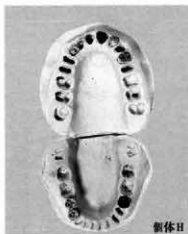
個体E



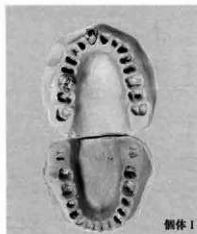
個体F



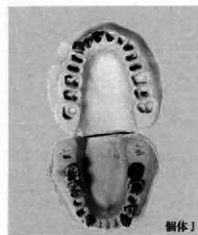
個体G



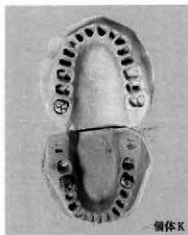
個体H



個体I



個体J



個体K

- 1号土壙墓 個体A・個体B
- 2号土壙墓 個体C
- 3号土壙墓 個体D
- 4号土壙墓 個体E
- 5号土壙墓 個体F・個体G
- 6号土壙墓 個体H・個体I
- 9号土壙墓 個体J
- 13号土壙墓 個体K





J K17遺景 (南東より)



J K17調査状況



J K17遺景 (北西より)



第1号墳検出状況



道路地より南側を望む



第1号墳全景（南側より）



周堀（西側拡張部）



周堀セクション



前庭部遺物出土状況



支室全景（東側より）



第1号墳狭道閉塞



狭道



石室全景(南側より)



玄室



石室右壁



石室左壁



石室掘り方(北側より)



石室掘り方(東側より)



第2号墳全景(南側より)



石室全景



周堀(東側拡張部)



羨道閉塞(南側より)



羨道閉塞(西側より)



第2号墳石室全景(南側より)



羨道



石室右壁



石室左壁



掘り方全景(南側より)



グリッド遺物出土状況(1)



グリッド遺物出土状況(2)



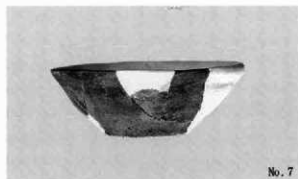
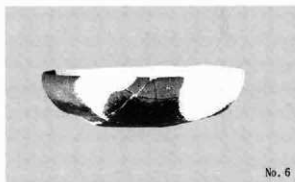
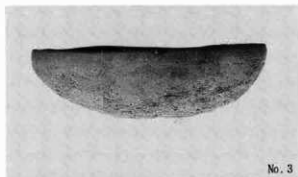
第1号溝セクション

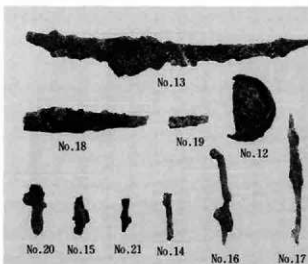
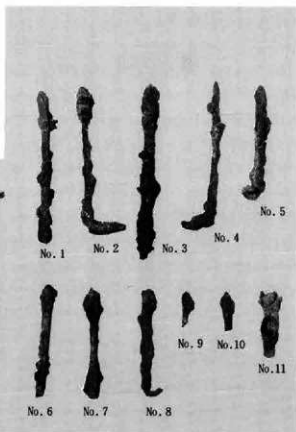
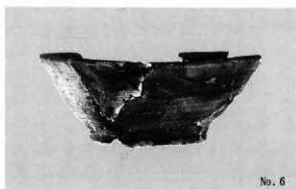
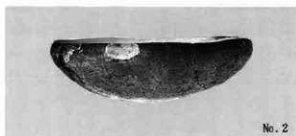
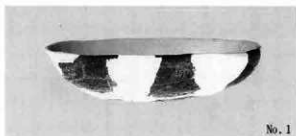


第1号溝(東側より)



第1・2号溝(北側より)





**書上下吉祥寺遺跡
書上上原之城遺跡
上植木老町田遺跡**

一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和63年 3月25日 印刷

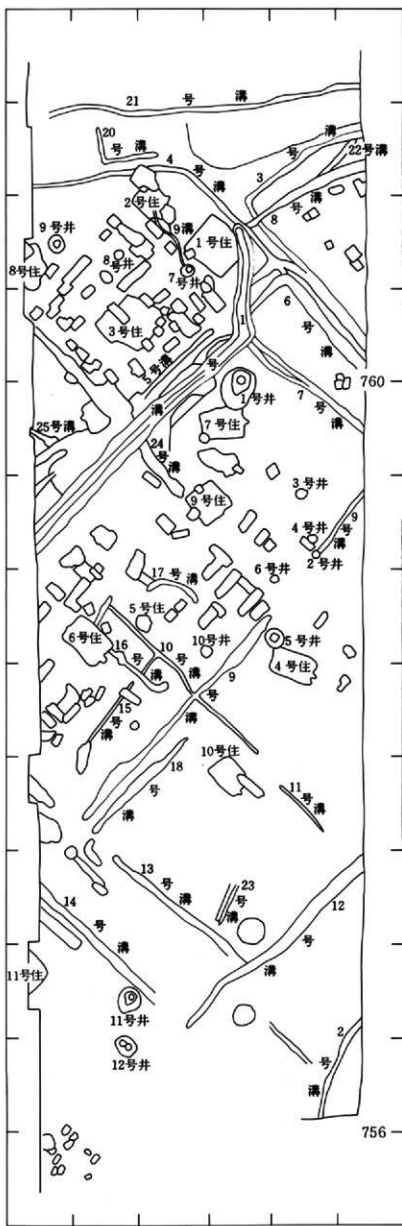
昭和63年 3月31日 発行

編集・発行／／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／株式会社前橋印刷所

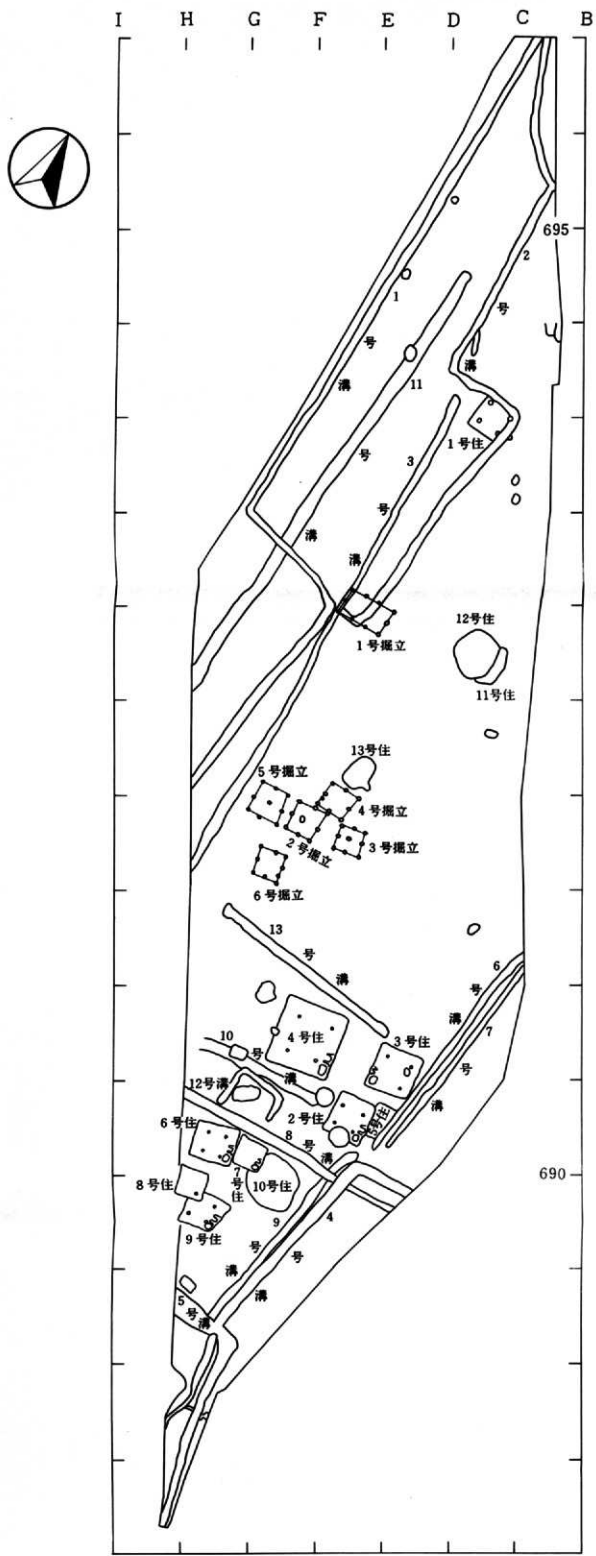
H G F E D C B



上植木老町田遺跡全体図

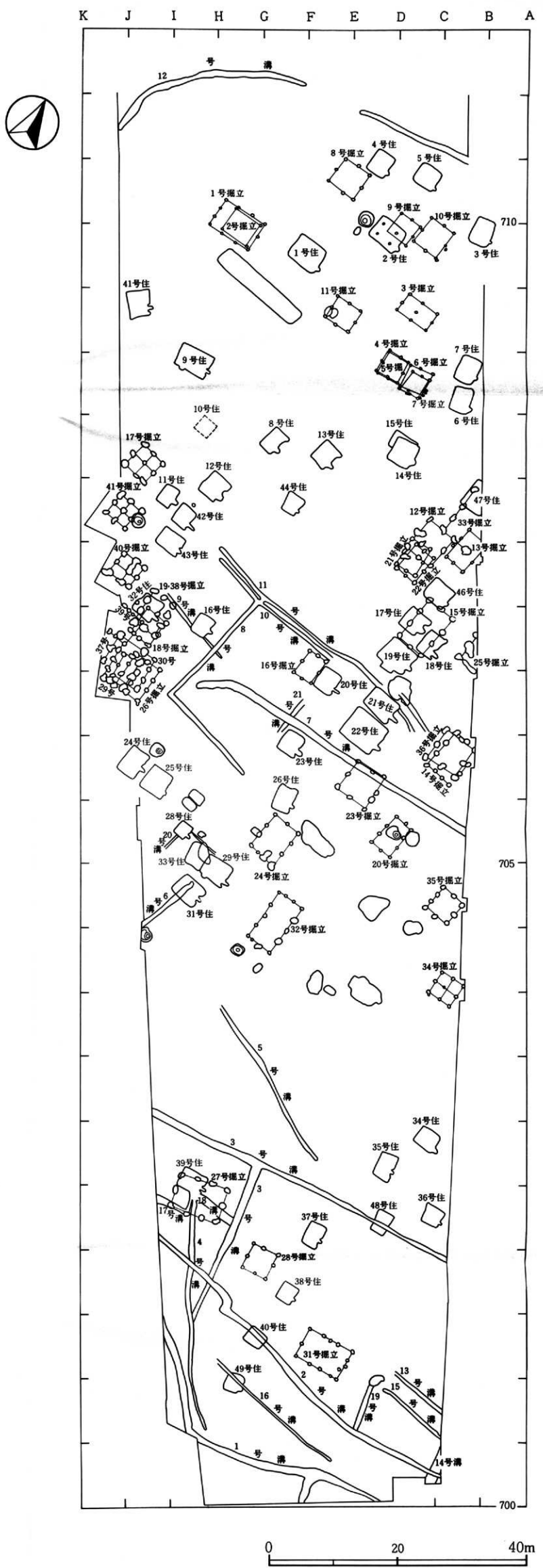
756	X=38682.199
E	Y=-54834.888

760	X=38745.402
E	Y=-54883.931



書上下吉祥寺遺跡全体図

X=37632.277
 690 Y=54034.848
 E
 X=37711.818
 695 Y=54095.456
 E



書上上原之城遺跡全体図

X=37791.358
 700 Y=54156.064
 E
 X=37950.439
 710 Y=54277.281
 E